
Chrimson EAGE

才切

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ch r i m s o n E A G E

【Nコード】

N 1 2 7 0 Q

【作者名】

才切

【あらすじ】

美貌の少女を中心にして回る、贖いと報復の中で交差する人々の物語。

月夜の桜

——さくら さくら やよいの空は
見わたす限り かすみか雲か 匂いぞ出ずる
いざや いざや 見にゆかん

夜がある。

人影は月を仰ぎ吐息を洩らした。歌を読む声は透き通り夜に霧散する。

素足を軒下に投げ、艶消しの黒髪を床に流し夜を感じる女性は、美しい面を伏せて夜風を頬に受けた。

「お姉ちゃん……」

か細い声が女性を呼んだ。

黒髪を流して振り返り、彼女は縁側の柱に隠れる影に目をやる。

淡く微笑んで、小さな影を迎え入れた。

「こっちにおいで。蓮」

「……うん」

こくりと頷いて、柱から姿を現した幼い少女は女性の横に座った。

女性は小さな来訪者の顔を覗き込んで問いかける。

「眠れないの？」

「……ん」

また小さく頷く少女。女性は苦笑して夜空を見上げた。

「明日は祭りだね」

「…うん」

「もしかして楽しみで寝れないのかな？」

女性自身も幼い頃に経験があるのだろうか。声には優しげな育みと

懐かしさが滲んでいる。

対する少女は小さな背を縮めた。

「分かんない」

「そっかあ」

膝を抱えて丸くなる童女はそのまま、横目に自らの姉をちらりと見た。

美しい横顔だ。

…血は繋がっているが、自分とはあまり似ていない。

「…お姉ちゃん…きんちよーする？」

「んー？ まあ、ちよこつとね。年に一度の大舞台だもんなあ…」

今度は少女が、姉である女性の顔を覗き込む。

「せきにんじゅうだい？ いっせいいちだい？」

「そう。それぞれ。誰から聞いたのよ。そんな言葉」

「…お姉ちゃんが言ってたんだよ？ 『せきにんじゅうだいだから

——』って…」

「ありゃ。わたししかあ」

姉は目尻を下げて笑うと、後ろに倒れて床に大の字になった。

板の目のひんやりとした感触が、首裏を冷やす。

「蓮…明日が楽しみ？」

「うん」

童女は素直に答える。

「そっかあ。それは良かった。……うん」

翳る姉の顔に憧憬が映ったのを、妹は見ただろうか。

「なら、いいや……」

女性は瞳を閉じて顎を引いた。黒髪は扇状に床に広がる。瞼を閉じたままに、形の良い唇が言葉を紡ぐ。

「蓮……」

「なに？」

無垢な返事。

心底、羨ましい無知だけがある。

戻りたいとは思わないが。

「蓮、…夢はある？」

「ゆ、め？」

無垢な疑問。

鸚鵡返しに尋ねる。

「そ。将来の…大きくなったら何に成りたいとかさ」

「…よく、分かんない」

無垢な応え。

無垢は、何も知らないこと。

そして、これから知っていく未来の暗示。

「そっかあ。…まあ、その内に分かってくると思うよ」

口端を上げて、横たわる女性は微笑んだ。

童女にはその笑みの意味の理由が分からなかったが、ふと思いついたように言い足す。

「わたしの夢は…お姉ちゃんみたいになること…かなあ…」

女性が、瞼をゆっくりと開けた。

瞳に隣の少女を映し、眉根を落とす。

「…やめときなって」

「どうして？」

「苦しいから」

「お姉ちゃんは…苦しいの？」

「苦しいよ。苦しいからさ。蓮にはこんな思いをせずに幸せになつて欲しいんだよね」

「…分かんないよ」

心底哀しそうな童女は、自らの理想を否定されたのだと感じたのだろう。

苦い笑みを孕み、美貌の女人は幼い自らの妹を宥めた。^{なだ}

「今は分からなくても良いよ。でもさ、わたしの夢も叶えて欲しいわけよ。わたしの夢は蓮の花嫁姿を見ることがだからね」

「…おばあちゃんみたいなこと言う…」

ぽつりと洩らした呟きを、彼女は齒牙にも掛けずに

「ふふ、良いじゃん。その時は蓮の着物は私が縫ってあげるわあ」

「ほんと？」

姉の言葉に跳ねらんばかりに喜ぶ童女。

「ほんとだよ。一張羅の白無垢を繕ってあげる。…だから、蓮の将

来の夢は取り敢えず花嫁にしときなさいな」

「うんっ！」

心底嬉しそうな応え。

指きりげんまんをする中睦まじい姉妹は、月夜に契った。

01 黒

硝煙の匂いは、噴煙や煙草の香りとはまた違う。

火薬の燃える匂い。摩擦で鉄が焦げる臭い^{にお}だ。

銃口が、弾丸を吐き出す。

同時に『彼女』のヘッドホン越しにも衝撃音が響いた。

銃弾を的に向けて放ったのは、黒い長髪の少女。

彼女は掌で衝撃を受け流した。背で結んだ長い黒髪が揺れる。

細腕にはそれだけで重荷になる銃器を下げ、背筋をぴんと伸ばす。

彼女は無意識のうちに自分の肩に力が入っていることに気がついた。

横合いから助言が入る。

「もっと肩、力入れずに楽にして、下げてみる。それから無理に反動を受け止めようとするな」

「……ああ」

噛締めるように返事をして、彼女はまた腕を突き出して構える。

片腕は伸ばしきる直前で前へ、もう片方は添える程度に取っ手に被せる。

先程の銃弾は的の中心から右に数センチずれていた。

——あと、少しか。

もう一度遊底を持ち上げ、手銃を構える。肩は楽にして肘と手首を固定。気を引き締めて顎を引く。軽く息を吐いた。

「——そうだ。それで標準を定めろ」

言われた通りに微調整して的を狙う。焦らずに、呼吸にあわせてタイミングを押し量る。

「……っ！」

トリガを引いて反動が来る。かき消されるリボルバーの回る駆

動音。

リボルバーが回転して、銃弾を送った先の薬室の火薬に着火。
促進・躍進。鉄の塊は一つの意志を持って進む。

———すなわち、『穿^{うが}て』

軽快な音がして、的には先程までには無かった黒点が撃たれていた。腕をゆっくりと下ろして、長く息を吐く。硝煙の臭いが、鼻孔を掠める。

彼女———レインは、指をトリガーから外し安全装置^{セーフティ}を掛けた。

「…中々難しいものだね、今度は少し左寄りだ」
銃をそっと置いて、ヘッドホンを首元にずり下ろして振り返る。

「呼吸のタイミングも…合わせてるんだけどやっぱり無意識の内に急いてしまう。これが実践だったらこの手順も全部飛ばして撃って、外して、弾代だけ無駄にする結果になるかもしれない…」
危惧に応じるのは、あくまで冷静な声だった。

「お前は自分の短所を理解できているから、改善は比較的楽だと思う」

「『自分』は簡単にリートの様にはいかないさ」

溜息交じりのレインの台詞に応え、リートと呼ばれた青年。

彼は深く蒼い瞳を持っていた。淡色の黒髪は片眼を隠すように伸ばされている。それを考慮しても、端整な顔立ちは目を引いた。

リートは表情を変えずに言う。

「…それはそうだろうな。完璧にこなそうとしても、実践で落ち着いて撃てる奴なんてそういるものじゃない」

「……へえ」

文字通り口をへの字に曲げて、彼女は相槌を打った。

——よく言うよ。

その、そういない奴が今まさしく目の前にいるのだけれど…？

レインは内心で苦笑しながらも、礼を述べる。

「リート、有り難う。悪いな、付き合ってもらって」

「…俺は構わないが。どうせ李清^{リッケイ}の差し金だしな」

「違うない」

少女はくつくつと言いながら軽く目尻を下げて、ヘッドホンを首から外した。滑らかな動作で銃の幾つかを懷に仕舞い込んでいく。帰り支度をしているのは目に見えていた。

「少し早いけど今日はここまででいいよ。この後仕事なんだ。また頼むな」

「了解、：気をつけるようにな」

「ふふっ、分かってるって。：ああ、そうだ」

防音加工のなされた重厚な扉の前で立ち止まり、黒髪を翻してレインは振り返った。

リートは疑問符を浮かべたような顔でこちらを見ている。

帰りがけに少し提案を試みたくなったのだ。差し出がましいかもしれないが。

僅かな沈黙を以って、少女は伏目がちに言った。

「良ければ最後に：お手本、撃ってみてくれないか？」

レインがこの提案を躊躇ちゅうちよしたのには理由がある。

彼は余程のことがない限り、仕事以外の人前で銃を使わないからだ。時たま、人目の無いときに銃撃の練習をするだけだ。

けれどそれは同時に、彼の腕前を見る機会が少ないということであり。

その頼みにリートは少し不思議そうな顔をしていたが、何が面白いのか微笑して、レインが今迄使いままでっていたように銃とヘッドホンを手に取った。

「構わない。弾代、李清が五月蠅いから一発のみだけど」

首肯して、外したヘッドホンをまた首に掛けた。

青年は自然な動作で銃を掴んで手を上げ、構える。

少女よりも幾分か柔軟性に乏しい手筋は、その分強靱さを内包している。

付け焼刃のような構え方ではない。自然体なのに隙が全く無い静止した構え方。彼が攻撃の予備動作をする。たったそれだけで辺り

の空気がぴんと張り詰めた気がする。

ここは既に獵場。弱者が狩られ、強者が立ち残る摂理の場。

トリガに指をかけて——引く、

瑣末な動作が、やけに長い時間に感じられた。

すっかり見入っていたレインの意識を現実に戻したのは、銃声だった。

見れば、的のど真ん中に銃痕が残っていて、名残にふっと硝煙を噴く。

あまりにも、正確な射撃。

「……すごいな……」

それは御世辞でもなんでもなく、本心からそのまま洩れた言葉だった。

抜き撃ちで彼に勝る人間など、そうそういないのだ。

「お前がじろじろ凝視するから、やりづらかったけどな」

眉を顰め、リートが呟く。

「ごめん。でもつい、見入っちゃって……すごいな」

本音だった。

「……それはどうも」

小声で言い残して、片目の青年はヘッドホンを外すと、足りなくなった銃弾を充填し始めた。

レインは、はっとして身支度を素早く整える。襟元を正しながら

「有り難う、やっぱり勉強になる」

「俺にしてみたら、お前の剣術の方が凄いけどな。自分でも銃闘術を習った方が効率が良いと思わないのか？」

青年が言った素っ気無い言葉に、遠まわしに褒められたのだと気がつく。

少女の面に、恥ずかしそうな、困ったような表情が一瞬だけ浮かんで消えた。

「そう、かな……」

レインは黒曜石のような瞳を細めてもう一度微笑んでから、踵を

返して扉を開けた。

重厚な鉄の扉。外界との隔絶。

ふわりと、靡^{なび}く黒髪の残像だけを残して、扉を押す。その背に思いがけない声がかけられた。

「……行つてらっしゃい」

「行ってきます」

少しだけぶっきら棒な言葉を最後に、少女は後ろ手に扉を閉めた。

02 街

大小差のある建造物が、ドミノ倒しのように並べられた風景。

歩道は十分に往来が可能な道幅で、人ばかりであれば賑やかで人の動きが感じられたであろう町並みは、けれど今は閑散としていた。寒空の下、平日の午前中などは街に出る人影もない。

歩道には、北風に頭を塞ぎがちにして歩む影がある。

流れる黒髪の美しい、華奢な影だ。

人影——レインは現在の仮の住まいから出て、ひたすらに路地裏の道筋を歩いていた。

この辺りにはヨーロッパ地方によく見られる、昔ながらのレンガ造りの家屋も少し残っている。コンクリート建築のビルに挟まれ、歯並びの悪い子供の口腔を彷彿とさせるそれらは、共存しているというより、犇めき合っていると言った方が適切だろう。

近隣に在るのは、住宅のアパートや小売店などが入っている貸し店舗専用の建築物が殆どだ。この区画ごくありふれた、日常の在り方。

街が治外法権だったのは過去の話だが、治安が良くなったかという一概には言い切れない。

だから。彼女は『こんなこと』も一度きりではない。むしろ頻繁な方だ。

——つけられてるな。

直感で分かった。気配も消せない程度の相手では、適当に巻けば逃げれるだろうと思っていたけれど。彼自身、見た目が見た目なだけに、狙われるのも仕方がない……と半ば諦めてはいる。

中東人差別が抜けない土地柄。『狙いやすい』恰好の見目。彼女は両方を持ち合わせていた。

しかし、そうと分かってはいても気分の良いことではない。

レインは思い切って、後ろを振り返ってみた。

目の端に動体を捕らえる。

——…今、明らかに人影が隠れたなあ。

後方の壊れかけたビルの陰から、ひよっこりと頭が覗いている。
少々滑稽だ。

——…あれって

レインは少し首を傾げた。

「クライン…？」

呟いたその言葉に驚いたかの様に、僅かにその頭がびくんと上下する。

彼女はその所作の動揺を見逃さなかった。

「…ごめんなさい…ごめんなさい…」

頭を抱えて路地裏に蹲る姿は、哀れにも見える。

捕まえた彼女は、明らかに年端もいかない少女だ。

子供を壁に詰めて見下ろしていると、危ない人と勘違いされそう
で、捕まえた側の少女にとっても今だけは人目が怖かった。

レインは細い溜息を吐いて、口元に手を当てる。

——…また、か…

そう。これが初めてではない。

普通なら、年端もいかない少女が何故、このような掃き溜めな上
に人気のない路地裏に居るのか不思議に思うところだ。

しかし、レインにとっては何でもない理由だ。

彼女とすぐ傍に小さく丸まる童女の仕事は同じ類で、所属まで同
じだからだ。

件の少女は頭にフードを深く被っていて素顔はよく分からないが、
布間から見える金髪がさりとしていて綺麗だった。

ただ、どんなに暑くともそのフードを取ることはない。

いろいろと彼女にも事情があるのだろう…とレインは思う。

顔は分からなくとも、声や身長からして、年齢はレインより確実に下だろうと推測はつく。あとは人となりと性格が掴めれば素性としては上出来だ。人相までは拘^{こだわ}らないのが人付き合いの信条だろう。

『クライン』——それが彼女の呼び名。しかしながらそれは正確には彼女の本名ではない。

この街で、仕事の仕事だけに何も驚くことはなく、現にレインも普段から本姓は明かしていない。

レインは声を整えて、諭^{さと}すように少女に話しかけた。

「クライン、人の後つけるの趣味なの？」

問うた途端に、蹲^{うずくま}っていた小さな影は、いきなり顔を上げてこちらを一生懸命に睨^{にら}んできた。

その様子は、何か形容しがたい。

「ちっちゃがっ……ただ！ レインさんと道が重なって……その、だからっ！」

「尾行ではない。——と？」

引き継ぎ言ったレインの台詞に、クラインの首が大袈裟に上下する。

——……オーバーリアクションだよな、相変わらず。

彼女の行動の裏にある、本当の思いは分からないでもない。

……あんまり、分かりたくないけど。

対する彼女はやれやれといった風に腰に手を当てる。

「……分かったよ。じゃあ一緒に行く？」

本音を言うと、物騒な道すがらに、か弱そうな女の子を連れて歩きたくなかった。けれどこのまま、背後に変な視線を送られながら歩くよりはマシだ。

すると思いつきの提案に、幼少女は大喜びで飛びついてきた。

「やっふー！ レインさんとデートだあー！」

——その表現は何か間違っていると思う。いろいろと。

周辺一帯は路地裏と言うべきか裏道と言うべきか、アパートや表通りの建物の裏口等が、ぎしぎしと音でもたてそうにして詰め合っている。車輛などは到底通り抜けられない細い道だ。

頭上を見上げれば洗濯物がロープを張って干してあり、かと思つて下を見ればプラスチックのごみ箱を子猫が突付いている。蓄積された生活臭がする中で、時には上から家族間の喧嘩声や、時には植木鉢なども落ちてくる始末である。

反面、道でごく稀にすれ違う人間は、不自然なほど生活臭のしない人間が多くを占めるている。…それは、何故か。

隣に行くクラインは、今にもスキップをしそうな程にご機嫌だった。無論、跳ねてはいないが、物の喻えとしては決して誇張ではないだろう。

何故か…とは考えたくないが。

「ところでレインさん、綺麗で綺麗で私はとっても好きなんです、どうして髪伸ばしてるんですか？」

「……あー、いろいろ突っ込みたいな」

二人で横に並んで歩いていると、幼い少女は面白いことを訊いてきた。問われた彼女は無意識のうちに、項^{くわ}辺りで括った髪を押さえる。

この国で黒髪の人物は目立つ。加えて、レインの場合は後姿でも女と見られてしまう。その為におそらく彼の身を案じてくれているのだろう。

それに、彼女は知っているはずだ、こんなもの、レインにとって一番に断ち切りたいものではないのかと。

「さあ、何でだろうね」

レインは軽く微笑んで受け流す。――無論、それが本心ではない。

クラインには話せないが理由は簡単だ。

元よりレインの性別は間違いなく女性なのだが、普段は意識し

て女の装いをしてなければ、言葉遣いも男勝りだ。寧ろ女の子らしい行為は全て忌避していると言っても過言でない。

認めたくないけれど、そう見えるということはかなり女顔なのだろう。当然ではあるのだが。

そして彼女が長髪にしているのは理由多けれど、やはり囃役に役立つこともあるからだ。職業柄、相手が舐めてかかってくるとは思っていないが、それでも都合が良いことが多い。

——いや。それとも：自分では切れないから、かもな。

レインは口先に浅い嘲笑を浮かべる。対する横に並ぶ少女は腑に落ちない顔をしていた。けれどすぐに何かを悟ったのか、押し黙る。言及しないのはこちらとしては助かる。

レインが、まるで性別を偽る姿をしている理由を知っているのは、クラインも含め、街ではごく数人だ。

二人して、だんだんと細くなっていく路地を道を選んで歩いていく。

進む程に今迄の生活感は段々と薄れていく。

ここは地下街へと行く道と、駅の裏側に出る道等が交差していて、ややこしい。その上、辺り一帯は治外法権だった時と全く姿が変わっていない。

前述の所為か、軍警察も整備や治安維持を諦めている所だと見える。

例えば、ここで一般人が物騒な事件に巻き込まれても、「そんな所をうろついている奴が悪い」と非難されるように。

表の住民もあくまで事情を熟知していて、近寄らない。よってお互いの均衡が図られているのだ。

しかし、かく言うレインも最初に地下への通路を訪れたときは迷子になりかけたくらいだ。

細い道を曲がり、童女と少女は一つの廃屋に入る。

扉がぎぎい、と不気味な音を出した。元は酒場だったらしくカウンターだけが形を残しているが、酒瓶が置いてあったろう棚等は

板が外れ、^{ひしや}拉げている。

数年：もしくは数十年前には閉店し、見放された店舗なのは一目瞭然だ。ただ、開店時に真っ当な商売をしていたかという、定かではないが。

カウンターの横の道を奥へと進み、廊下の突き当たり、下へと続く鉄製の階段を降りて行く。

地下へはかなりの距離を降りることになる。エレベーターもあるが相乗りは御免なので、こちらの長い階段を選んだ。そもそも、何時^{いつ}コードが切れるか危ういエレベーターなど、よっぽどの物好きでなければ誰か進んで乗り込むだろうか。

地下街への入り口は多いけれど、レインは主に先程の廃屋からの隠し通路を好んで利用する。

：というよりも、彼の場合、廃屋からの隠し道以外にあまり知らないのだ。

二つの足音が、反響して幾重にも鼓膜に響く。

ふと気がついた。

クラインはレインよりも地下の界限^{かいわい}についてよく知っている筈だ。なら、訊いてみる価値はあるだろう。

「：クラインは、ここの辺りの道、詳しいか？」

ふと、問いかけてみた。

「：え、あ、はい！　どれがどうかしりましたか？」

「それじゃ、店の配置とかも詳しい？」

少女は軽く首を傾げて、こちらを見上げてくる。レインは彼女より、頭二つ分以上は背が高い。

「ここの辺りで、武器の整備してくれる所ってないか？　それなりに信用できる所で」

その様なことは李清に頼めば良いような気もするのだが、あいつは銃機器が専門だ。流石に何でも出来るわけではない。そうとは露知らずに、以前、預けたものが頼んだ前よりも酷い状態で返ってきた、他に頼める所をを捜していたところだった。

彼が問うと、小さな少女は唯一露出した口元を尖らせる。

「じゃ、じゃあ：ユウ君は？」

「ユウ？　　っていつつも機関内にいる？」

「ええ。：彼、結構面倒見良いし、正確には武器整備士テクノスに仲介してくれるんですが。相手方の腕は確かみたいです」

レインの脳裏に、一瞬だけ、見慣れた小綺麗な容姿が思い浮かんだ。

「そっか。あっちにいたら：て、もうそこだね」

気が付いたらもう、地下へと降りて行く階段を降りきっていた。

降り立ったのは地下街へと続く、いわば地下道。周りはコンクリートの一本道なものの、駅の地下道と大差ない。

頭上を見上げれば、縦横無尽じゅうおうむじんにパイプや管がのたうっているものの、天井自体は高いし、さして道幅も狭くない。

天井の更に上で人が日常的に生活しているなんて、想像もつかないくらいだ。

相変わらずも辛気臭い土地柄だが、雰囲気とは反比例して、ここに来てうって変わり、少しは人通りが出てくる。：が、誰もが明らかに裏の世界の者達だ。

人とすれ違う度に、こちらを値踏みするような眼や、明らかに蔑さげすみの視線が感じられる。

この場を訪れる度に嫌悪感が生まれる。レインは目線を硬質の地面に落した。

なるべく気にしないように勇めいさて、今は以前と比べればそれもどうってことないが、隣のクラインは列記とした女の子でまだ幼い。腕っ節で地下街を渡っている女性も知らないことは無い。しかし、目の前の彼女にはそんな力も無い。見ると、隣できゅっと頭に被った布を深く被り直した。

自分と同じで、彼女だって地下すれ違うこの手の輩に絡まれたことはあるんじゃないかと思う。

——分かってる、：だから一緒に来たがったんだ。

彼女の内では信用できる人物と勘違いしている相手でも、一人で居るよりは心強かったのだろう。

レインは疼痛の様な胸の痛みを感じた。

——：それでも、尾行は止めて欲しいな。激しく。

幾つかの道を曲がり、少し開けたスペースへと出る。そこはぱっと見、路地裏の行き止まりのように見える。前方にはガラス扉、看板なんてもの無いし、人気も無い。

ここがレインとクラインの勤め先。

——『即務 第二機関』

二方は無言で電気の通ってない自動ドアを開閉し、中へ入って行った。

小さなエントランスホールの様なロビーには誰も居ない。不気味な空間だ。

明かりは着いているのに、掃除も行き届いているのに、誰も居ない。

そのままロビーを突っ切って、エレベーターの方へ向かう。：と、電子音がしてエレベーターが下りてきた。

自動扉の前で、立ち止まる。

ドアが開いて、出てきたのは少なからず二人と面識のある人物だ。赤黒い髪色の男は、レインを視認し微かに目尻を下げた。

「……………」

意味を含まない視線が交錯する。特に何も言葉を交わさず互いに通り過ぎた。

造作なくエレベーターへと乗ると、後からついて来るようにひよこつりとクラインが入ってきた。

「…今の」

言葉は、今の『あいつ』を示しているのだろう。

レインはそれについては特に何も話さなかった。替わりに。

「…何階？」

そうとだけ尋ねた。

どうやらクラインが用があったのは地下3階らしく、目的の階で降ろして別れた。

エレベーターの中は必然的にレイン一人となる。

ここに来て、どっと疲れが押し寄せて来た。同性だというのに、女の子相手はどうしてか氣を使ってしまう。

クラインはレインの事情を知っているからまだ良い方かもしれないが、普段から日常の在り方とかけ離れた行いと、性別をさえも曖昧な人となりをしている以上、余計な疲れも加算される。

あとは、単純に苦手なのだ。彼女の様な隠し事が出来ないタイプは、特に。

——悪い子じゃ、ないんだけどな……

だから余計に始末が悪いのか。敵とも見方ともつけない人種というのは。

レインは柳眉りゅうめいをふっと弛緩させる。

浮かぶ表情は苦笑か、それとも——ある種の諦念か。

——しかも…これから……

エレベーターの電子音が高く響いて、最下層についたことを知らせた。

03 帝

「…失礼します」

告げて、自分を奮い立たせるように両番の扉を両手で思いっきり押し開けた。

中の部屋は延々と広がった。1フロア丸ごと区切りなしにこの部屋にしたのだから、当然の結果ではある。鏡と見まごう程に床は磨かれていて、レインの黒い足元を映している。壁にはコンクリートのみ、灰色の視界。地下だから当然、ガラスは一枚もない。

確かにそれは一つの部屋というより、空間に近かった。

その中心に、楚々とした椅子に腰掛ける男が居た。

彼の人物は見た目の齢にして3、40代に見えるが、年齢に関してはっきりとは断定できない。灰色の髪を短髪に切り揃えていて、どこか銀狼を彷彿とさせる。黒いスーツを着ていたが、いつも通りネクタイはしていなかった。

鋭い炯眼は対象との距離が空いていてもレインを射抜き、ただ、真っ直ぐに視ているだけであるのに。

「久しぶり、かな？ アレイン・ヴィアルドレッド」

そうして、目の前の人物は彼女の本名を口にした。

レインはある事情で、姓を隠してこの街で暮らしている。だからどうということでもない。先程のクラインのように、この街ではさして特筆する事項でもないのだから。

彼はそして立ち上がり、足音も立てずにレインとは反対の方へ歩む。

言いたいことは、おのずと知れている。

「…官長、自分は……」

「このままいたいんだろう？」

こちらが決意の宗を伝えようとしたその瞬間に、先を言われて、僅かにたじろいだ。

きゅっと口角を締める。

「……はい」

その通りだ。全く持つて。目の男は読心術者じゃないかと疑ってしまう。

「やっぱりそうか。残念だよ。君ほど傭兵に向いている者は居ないと思ったんだけど」

レインは息を呑む。

『傭兵』とはここでは戦争屋と同列の扱いになる。

……意味は、『金で人を殺す者』『人の命と金を秤にかける者』

即務 第二機関では幾つもの業種がある。地下街で、この手の裏家業には事欠かない。

その証拠に、今上げた職種なんでものはほんの一部に過ぎない。

細部ではまだまだ知らないような仕事があるのだから。

実際には彼はそのどれにも当て嵌まらない、宙ぶらりんの状態。

敢えて名指しするならば、警備員・用心棒が一番近い。

そして、官長と呼ばれる男は、レインに人殺しが向いていると言って勧めてきたのだ。

「官長、お言葉ですが：自分のような人間が何故傭兵に向いていると仰るのですか？」

背を向けるように佇む人物に、レインは質問する。

対し。

「才能だよ。自分の意志とは関係なく、どんなに足掻いても特定の人間しか手に入れないもの、それを君は持っている」

落ち着いた様子でこちらを見ずに話す、それは変わらない。静寂な神託の如き言葉に反比例し、レインは自分の心の中に、苦いものが広がっていくのを感じた。

——…才能とかそういうの、大嫌いだ。

自分は、自分の意志で強くなりたいと願った。

だからどんなことにも耐えてこられた。それが、「才能があったから」なんて詰まらない一言で片付けられたら、それは侮辱に等しい嫌悪感となる。

「不服かい？」

官長と呼ばれる人物は、こちらを振り返り一瞥する。

「……理由は貴方の言う、才能……だけでですか？」

官長は一步レインへと踏み込んできた。見ればすぐに分かる。人の殺傷に関わる人間の隙の無い足取り。

「君はまだ若いから、もっと上を目指せる。向上する意志が有れば……ね」

一步、々々歩み寄ってくる

「……自分には目的があります……だから、それを果すまで……」

それは自分で紡いだ言葉なのに

先が詰まった。自分は一体どうしようというのか。分かっているんだ。この先なんて。

た——だそれは本当に言葉にしているものなのか？

……言葉にした途端に崩れ落ちてしまうのではないか。

……言葉にした途端に意味を失ってしまうのではないか。

分かっている。そんなの思い違いだ。幻想だ。

レインは顔を伏せる。さらりとした黒髪が、表情に陰を落とすた。

目的・目標と呼ぶものが、時に夢が、目指すものがないと人間は生きていけない。

——目的を果たしたら……

気がつくとも目の前に官長が立っていた。何時の間にこんなに距離を詰められていたのか。

自分より高い背、必然的に見上げる形になる。

灰色の炯眼が彼の応えを待っている。

「……まだ、分かりません」

俯いて、静かに言葉を紡いだ。それだけが今出せる精一杯の応えだった。

肩にゆったりと手が置かれる。緩慢に伏せた顔を上げた
「今はそれでもいいさ、ただ、目的を見失う前に次の目的を見つけてなさい」

「……はい」

肩に置かれた手からは全く体温が感じられなくて、冷たい枷のようにも感じた。

04 彼

失礼しましたと丁寧に告げて、レインはその場を後にした。

——暗い雰囲気になったかな……

本日二度目の疲れがどっと押し寄せる。言うまでもなく、余計な気疲れだ。

——でも、……………

いつかは向き合わなければいけないことだから、官長の言うことも勿論、間違っただけではない。

そう。間違っただけではないのだが……

「……そうだ、シフト貰わなきゃ」

ここ最下階の一階上、七階へ移動する。件の階では傭兵や暗殺を仕事とする者の管理をしている。

その者達の中で、個人業で生計を立てている者は殊更少ない。

名と、信用を積み重ね続けた者が、その著名さを生かして、初めて食いつなげる仕事があるのだ。

ここ、『即務 第二機関』は現在、様々な業種の者を雇っているが、全員合わせても50人がいいところで、実際に管理されて任務についているのはもっと少ないのが現状だ。

もともと、こんな仕事に就く人間は一匹狼な奴や、複数の人間と協力するのが得意な者が多い。それだけならまだしも、ごく一部では社会不適応者まで混ざっている始末なのだから。

エレベーターをいちいち使うのも煩わしいので、階段で移動する。降りたフロアを見渡す。

長い廊下があり、壁の側面に硝子戸が嵌^{はま}っていた。

カウンターに近い形にはなっているものの、ほとんど無人だ。適当に声を掛けて人を呼ぶ。

すると間もなくパタパタと足音が聞こえてきた。

「…アレ？ ええっと、たしかレインさん…？」

窓口から顔を出したのは、まだ幼い少年だ。おそらく、14、5歳といったところだろう。金髪の目に同色の瞳をしていて、よく見ると可愛らしい顔をしていて中性的なところがある。

「…ユウ、でいいよね？ 依頼書貰いに来た。それから少し頼みたいことがあるんだ」

「？ 僕にですか？ まあここじゃ、アレなので」

少年は少し不思議そうな顔をしたが、快く事務所じしゅりょの中に招いてくれた。

「はい。これがとりあえず一週間分です。…えと、李清さんに必要な分だけお送りすればいいんですよ？」

レインが頷くと、ユウという名の少年は笑顔で了解ですと応えた。この人物とはあまり面識がないが、確かクラインと同じ業種だった筈だ。そして、第二機関に属する者の総管理をしている唯一の人物でもある。

「えっと、クラインから紹介してもらったんだけど、武器整備士に取り次いでくれるって言うのは本当？」

「ええ。確かにそんなこともしてますけど、何か入用ですか？」

「それなりに信用できる人にナイフ研ぎをしてもらいたいんだ。」

「…僕でよければ喜んで依頼の仲介をしますが、一応見てみないことには…実物はどんなのですか？」

ユウはほんの少しの逡巡の後、そう提案した。

厚手のコートの裏ポケットに手をつ突っ込んで、縦幅20cm位のケースに収まったナイフを取り出す。

「…使い込んでますね」

手渡しでナイフを受け取り、柄の辺りを見ていたユウが呟く。

ずっとケースから引き抜かれたナイフは、どこか曇って見えた。

「…明らかに使い込まれて愛用されてたように見えますが、そこはこぼれまで刃毀れしてないし、亀裂もない」

驚いたようにナイフの方向を変えながら少年は手に余らせる。

それもそうだろう。

——武器の使い方はきちんとした人だし……

彼女がこのナイフを見つけたのはごく最近だ。私物を整理してたら昔の旅行鞆の中から出てきた。当時のままほったらかしにしていたと見えて、保管しておくべきかどうか迷ったものだ。

ただ、それでも自分自身にとってはあの人のたった一つの私物で。……もしかしたら、形見で。自分は何だか怖くてそのままにはできなかった。

「分かりました。承ります。二、三日待っていてください」
にこりとした表情で目の前の少年は顔をあげた。

「頼んだよ。それから……旧式になるんだけど、モーゼルのKar k・九十八式の部品で、ハンドガードとスプリング……サイズが特注になると思うけど、仲介して取り寄せれるかな」

「Kar k・九十八式……？ 旧国軍でも使ってたような気がしますが……旧式というよりは……古式ですね……可能性は低いですが取り合っ
って見ましよう。在庫があるかもしれないので」

「有り難う」

レインは取り敢えず一息ついて、大きな茶封筒に入った手元のシフト表へと目を移した。

一見、今回も特に変わったものはないように見えた。……が、つらつらと下りていった瞳が留まる。

「……屋敷の護衛……ミネルバの店の用心棒……運搬護衛……？」

「……あ、それ気がつきましたか。 官長が直々にレインさんにやってもらいって……」

彼女は間違いなくこの時、眉間に皺を寄せていた。レインの予感
は当たって、彼は実際に苦虫を噛み潰したような表情をしている。基本的
に個人の護衛や広大な面積の屋敷の警備が多い、警護中心のレインの
様な職種では、運搬護衛というのは珍しい。

あったとしても依頼主は何らかの組織とか、会社からが妥当だ。

――表向きも、裏向きも。

そもそも、大きな権力を持つ真っ当な者の真っ当な依頼なら、軍警察に頼めばよいのだから。

ここではそれができないワケありの依頼者からが多いのも頷ける。だというのに今回は組織や会社といえども、公機関からの依頼だった。

しかも官長直々……早くも嫌な予感が漂う。

少女は少年に悟られないように内心毒づいた。

そのまま、紙面の上に視線を滑らせていくと、これは複数人で取り組むものだということが分かった。

警護や護衛でも複数で行動や持ち場を分けることは多い。

連携プレーも時としてあるのだが、そもそもあまり他人との共闘は好きじゃない。

益々、嫌な予感倍増だ。思わず苦い顔をする。

「…了解した。でも何でわざわざこんな大人数でするような任務なんだ？」

「それが、結構キツイみたいですよ。今回の。だからこそレインさんを指名したんでしょうけど。詳しいことは書類を確認して下さい」

ユウは近くにある事務机に腰を凭^{もた}れかけながら応える。

――難易度の高い任務ということか。

金髪の少年は、事務室の一つしかない扉に向かう黒髪の背中を見送る。

「レインさん。また、ここに用がある時にナイフついで取りに来て下さいねー」

呼ばれた彼女は了解。と適当にながして、苦い顔もそのままに事務室を後にした。

05 剣

夕暮れが迫っている。

これから街並は少しずつ朱に染まっていくだろう。

レインが第二機関から家に帰ると、リビングに一人の女性がいる。

窓の近くで夕日を背に、辞典みたいにぶ厚い本を読みふけている。浮き彫りになる姿は陽光の枠を嵌められていて、とても絵になるのだけど……

「…おかえり。家賃滞納者のレインさん？」

口を開けばこれである。

彼女も官長と同じく、レインの事情を知っている数少ない人物の一人だ。

「ただいま。後一週間は、目をつむる許容の広さを見せて欲しいけど……」

肩を竦めて上目に頼み込んでみたりする。

それを聞いて皮肉っぽく笑うと、彼女は読んでいた本に葉を閉じた。

———エンリケイ———
燕李清。

名前から分かるように彼女はこの国、イザベルの出身ではない。アジアの：レインはよく分からないが、どこかの少数民族の出身だそう。

年は20代：だと自称している。本当はよく知らないが。そのことについて言及すると、レインでさえ命が危ないので伏せておこう。

少し長めの黒髪を、項の横あたりで緩く結んでいる。大人の女性らしい体形。時折見せる

些細な行動にさえ、はっとさせられる繊細さも併せ持っている。今

も丈の長いタイトなスカートがよく似合っているのだが、それが逆にスタイルの良さを誇張してしまっていた。

レインは芸術品にまで昇華された領域で、返って近寄りがたい雰囲気放っている節があるのだが、李清の雰囲気や形質は、美人で面倒見が良さそうという好感度が高い意味になる。

「仏の顔も三度までってね。よく言うものよ」

「李清様の顔は、仏より度量が広いことを祈ってるさ」

レインは言い、そして少し真面目な顔になって問いかけた。

「今、暇？」

「…何でかしら？」

「下で。ちょっと自分の稽古付き合って欲しいんだけど」

「あらあら…主婦って結構忙しいのよ？」

「何時から主婦になったんだよ」

李清は口元に手を当ててくすりと笑いながら、椅子に背を擡もたげて応える。

「いいわよ別に、丁度退屈してたの。いい暇つぶしになるわ」

「…舐められてるなあ。若干むかつく」

「じゃ、即効で準備して下に来なさいね。先に行ってるから」

「…はいはい」

レインは一度、3階にある自室に戻って荷物を降ろし、コートを脱いでから地下へと向かう。

硬質の床には足音のみが反響する。向かった場所は一面コンクリートの廊下が続いていて、少し進むと横に部屋があった。

否。そこは部屋というより、空間に近かった。天井は高く造られていて、奥行きはスポーツの試合を目的とした体育館一個分はあるんじゃないだろうかという程だ。

それ程の空間がありながら、空間には何も無く、伽藍がらんと視界も開けている。子供が居れば喜んで追い駆けっこに使うだろう。

「……遅い」

李清は、そんな空間の真ん中で、布に包まれた大きな物体を抱え持って、今辿り着いた少女：レインに手招きしてくる。

「3分以内には来たと思うけど？」

「約束には10分前には来てるものよ」

「バカ言ってるんな」

彼女に時間を遡る力はない。さかのぼ

一息で辺りを見渡して、レインを一瞥する。

「…今日もソレ？」

いぶかしむような李清の視線は、彼女の腰のベルトのホルスターへと向けられる。ベルトから縛って固定してある、黒い鞘に納まった細身の刀身。一刀だ。

正確には小太刀と呼ばれる類の武器。

「これが一番扱いやすい」

「そ。んじゃこっちも本命でいくわよ？」

「何時でもどうぞ」

李清は包みの布を解いて、短剣を抜き出す。鞘はなく、どうやら刃が剥き出しの状態で布に包まれていたらしい。

見るところ刀身に捻りがある。ひねククリのような曲刀。刀身はそこまで長くない。

刃物を片手で身体を中心に真っ直ぐ構えて、斜めの体勢でこちらを見据える。彼女独特のスタイルだ。肩の力を抜いて、ゆったりと構えられているものの、何時でも踏み込めるように右足を僅かに前へと置く。

対し、レインは左手でホルスターを押さえ、右手で柄に手を掛ける。

伸びた手はすると最も握りやすい位置に移動し、止まる。頭のスイッチが切り替わるように、戦いの思考へと沈んでいく。例外なく心地よい感覚だ。

肯定の意を込めて、対になる位置にいる女に視線を送る。

：かちんと、剣を握りなおした音が合図になった。
地面を蹴り、低空を滑るように李清との位置を縮めた。一瞬で数メートルの距離はほぼ皆無となる。

勢いを殺さずにホルスターから鞘ごと刀を抜くと、居合い斬りの容量で下から上へ斜めに切り上げる。獲物は目の前。最初から一撃で仕留めるつもりだ。

しかし李清は避けようともせず、その神速よりも早く流れるように斜めへと踏み込む。

——腹部！

切り上げようとした刀身を短縮してカーブさせ、相手の剣を弾く。

僅かな間からでも、致命的箇所が開いていればそれは相手にとって都合な隙だ。

脇を締めて、やや上段体勢になる。

李清は剣を弾かれ、攻撃を防がれた後も抜けるようにレインの背後へと廻る。

振り向きざま、また二つの剣が交錯し甲高い音と、鎬しのを削るような音が鳴る。

剣戟の悲鳴、そして共鳴だ。

二刀が交わったのはほんの一瞬。体勢を直し、再び向かい合った二人は剣戟けんげきをぶつけ合う。

弾きあい、また弧を描くように戻ってくる。

四方八方から空気を切り裂くように互いの剣は互いの攻防を崩しあい、互いに隙を作らせない。

連なる衝撃——連戟。

踏み込み、バックステップでレインは間合いを取る。

居合い斬り寄りの自分の剣術は、一刀目が最も有効であり、詰めた間合いで弾きあうものには向いていない。それを自分自身で熟知しているからだ。

左手で身体横に再び元の様に帯刀し、柄に手をかける。

今の体勢が居合い斬りの基本形であり、李清の身体を斜めに片手を突き出すような構え方もおそらくある流派では基本形なのだろう。

「…駄目ね。そんなんじゃない。甘い。そんな妥協捨てなさい」

「……っ」

奥歯を噛締め、前へ踏み込む。

無音の行動だ。地団駄を踏んでいるわけではない。闘いの最中では全ての感覚が鋭敏になる。聴覚、視界、感触、痛覚……果ては温度や風に至るまで、全てを解釈し変換して糧とするのだ。

伝わってくるものがある。そう、闘いは一人では出来ない。

他者から、他者の所作から伝わってくるものを見極めなければ。

李清はぎりぎりまで動かない。最も効率の良い力の受け流し方を見定めているのだ。

ふっと視界から李清が消えた。

「……下！」

一瞬で気がついたものの、剣は空振りし、右足に重心を置いている。

その為、必然的に体勢は前のめりとなり、足に衝撃が奔る。

李清が低体で水面蹴りを放ったのだ。

——持ってかれる！

今、脚を崩されて転んだら、倒れこんでもう負けだ。

瞬時に足を踏み、後ろへ跳んだ為、大事には至らなかったものの左足に鈍痛が走った。だが一瞬の油断も許されない、下から喉笛へと剣の刃先が突き出される。

寸でのところで軌道避けて第二戦目が来る前に斜め前、李清の有効打の届かない所へと退避する。

もう一度刀を握りしめて、上から斜めに寸断しようとした。

肩を捻り、李清はそれを無理に受け止める。

——崩れた……！

僅かではあるものの、李清の足元がぎこちなくなる。一拍の機会を逃すレインではない。

僅か数瞬で何発叩き込めるだろうか。

斜め上、切り上げそのまま×の字を書くように繰り返す。

太刀は単調な動作の繰り返しではなく、少しずつ変化を加えたもの。剣筋は予想などできない。

故に、李清が後ろへと押されていくのが分かった。

今、攻めているのは間違いなくこちらであり、戦局が反転。一方へと動いた。

先程蹴られて痛んでいる左脚を、酷使するようにぎりぎりと踏み込む。

摩擦で靴底が擦り切れるかと思う程に。

上手く剣の峰で攻撃を防いでいた李清は剣戟に対応するので精一杯となる。

李清は内心、舌を巻く。

相手の呼吸は落ち着いていて、間隔も整っている。

こんなにも打ち込みながら、涼しい顔していることが、どれ程凄いいことなのか。

剣筋を空気の流れに沿って変化させるレインの剣戟には、無駄な力が作用してないからだろうか。無駄な動きを削ぎ、美しいまでに流れを辿る。

踏み込みで後ろへ跳ぼうとしていた李清に一際大きな一撃が遅いかる。

力が、重みが、今までより数段上がった叩き込み。

——そうか、これを狙って……

でももう遅い。

ぱきり、とその一撃を受け止め切れなかった李清の剣から、単純な音が生み出された。

上半分に折られた剣の破片は床に落ち、何度か回転した後、あっけなく静止した。

レインは容赦なく刀を李清の喉元へと向ける。

「……………」

視線が一度だけ交わされて、ふっと力が抜けたように肩を落とし、レインは刀を腰のホルスターへと戻した。

「…私の負けね」

李清は折られた剣の破片を拾い上げ、先程の布に包んだ。対する少女は、漆黒の黒髪を顔に被せながら、恨めしそうに言う。

「足痛い。……っ足痛い」

「何で二回言うのよ。油断してるのが悪いんでしょ」

「大事なことなので二回言った」

蹴られた左脚を撫でながらブーツの紐を緩めていく。

弁慶の泣き所にヒットした痛みは地味に辛い。痣あざになっているだろうか、厚手のブーツを履いていて本当に良かった。

「李清、んな安物の曲刀使うなよ。…それから、せめて鞘に収めてくれ、危ないから。本当に」

「え？ ちゃんと刃は潰してあるし、峰で打つように注意したんだけどね」

「でもこれで2勝だな」

勝ち誇ったように笑ってみせる。対し、あくまで彼女は殊勝だ。

「…私は既に10勝してるんだけど？」

「これから追いついてやるさ！」

「確かに無駄な動きは減ったけど、まだまだ流れに乗せたら速く出来るわよ。精々、先進せいしんせい誠意励むことね…銃闘術なんかよりも居合いを磨いた方が、ずっと役に立つと思うんだけどねえ」

こちらを覗き込むようにしてそう言い残すと、李清は足早に去って行くこうとする。

…と。一度、立ち止まり

「あーそうそう、レイン、今日は夕飯食べる？」

「……もらっとく」

「んじゃ、ほとぼり冷めたら上がって来なさいね」

笑い、そのまま振り返らずに李清はその場を後にした。

大人の余裕と言うのだろうか、勝ったはずなのに何故かレイン

は腑に落ちない。

女性の影が見えなくなってから、レインは彼女がこの場に居たら青筋を立てるであろうことを呟いた。

「年の功……」

別段、悪い意味ではないのだが。

李清が去って行って、脚を投げ出して暫くじっとしていたら、脚の痛みがじんわりとではあるが、消えてきた。見ると、思ったより問題はなさそうだった。彼女のことだ。まさかとは思うけれど。

「手加減：したのか？」

とんだ奴だ。…心底思う。

だににしても何だか甘く見られてる気がして複雑だった。今度は本気でやって欲しい。

ブーツの紐を左足だけ緩く結んで、立ち上がる。

ホルスターに吊り下げられた剣を鞘からゆっくりと抜き取る。先程の勝負でも鞘から刀を抜かなかった刀身を。

得物を人に向けて抜くときは人生で一度きりと決めているから。

白刃が照明の光に反射して、美しい刀身が露あらわになる。居合い

斬りの為、極限まで研ぎ澄まされた薄く、細い刃。

暫く無言で見つめた後、抜いた刀を斜めへ降ろした。———

下段。

脚を軽く開き顎を引く。

前へ滑るように踏み出し、それと同時に剣を正面へと持っていく。———構え。

そして、振るう。———否。振るう、というのではない。

個々の動作はどこまでも自然で、穏やかなもの。

脚を滑らしながら、剣も舞う。それは空振りというよりは見えない川の流れを切り裂くように。無秩序に見えて、大気の意志に沿うような動きは、見惚れてしまうほどに美しい。

まるで、舞っているかの如き体裁き。けれどその攻防の動作にはまったくもって隙が無い。

少女の黒髪は儚く揺れて、残像のみ残す。

——そして、何より。

儚げに見えない何かを見つめる瞳は、人間味が恐ろしく欠けていた。

全てを赦すような、それでいて全ての罪を見透かしているような。その表情をどう感じるかはおそらく視る者によって千差万別だろう。

桜をみて、美しく感じる人がいれば、怖く感じる者が居るよう
に。

刀を一回転させての旋回。持ち手を代えて下段斬り。浅い弧を描く軌跡。

脚が止まり——動きが静止した。

「姉さん——」

眩き、剣を鞘へと戻した。

途端に、いつもの視界が戻ってくる。色が、音が、体の感覚が戻ってくる。

何度か深呼吸を繰り返して、今立っている位置を確認した。

鬼剣舞踏……か。

鬼神と戯れる巫女の剣技。
たわむ

「……馬鹿馬鹿しい」

彼女は一言だけ見えない何かを罵倒し、黒い影はその場から立ち去った。

06 目

朝。目が覚めた。

眼前にあるのは、灰色の薄気味悪い色合いの、石造りの天井。黒髪の影は機械的に身体を起こすと、洗面所へと向かった。

蛇口を捻り、冷たい水を出して顔を洗う。

ふと、顔を上げるとそこには備え付けられたガラス。ただし、中心からひびが蜘蛛の巣のように広がっていてまともに何も写さない。それでも嫌味たらしく『彼』の紅い瞳だけ歪んで映したが、すぐにそれが幻覚だと気がつく。改めて見ると、そこには黒髪の男が映っている。見慣れたはずの『実感のない』自分の顔。

ガラスは彼がここに移り住んで間もない頃、自らで銃を発砲し割ったものだ。

——鏡に映る、自分が怖かったから。

今思うと子供みたいな理由だと思う、けれど当時の彼にとってはどこまでも笑えない理由だ。

彼——リートは顔を服の袖で拭ってその場を後にすると、冷たい廊下を裸足のまま歩いてリビングへ向かう。

その場がリビングと呼べるなら、だが。

窓から明かりが入ってくる。いや、正確には窓枠だ。

鏡だけには留まらず、彼はここに移り住んだ時、自分を映す者を全て破壊した。よって今在る空間に硝子はない。加えて床はコンクリート打ちっぱなし。銃火機器は李清の住処と第二機関の武器庫に分けて置いてあるために、ここには彼の所有している半分もない。

私物を全く持っていないリートは、家具や家電という家具は箆筥とクローゼット、洗濯機位なものだ。加えて、それらはそもそもリビングには置いていない。だからこそ、目の前にはただっ広い灰色の空間が広がっていた。

床に直接置いてあるペットボトルを取り上げ、中の水を一気に飲み干した。

今居る廃墟にはシャワーもトイレもキッチンもない。いや、あるにはあるのだが、共同状態だ。

だからこそ李清リケイのアパートのシャワーを借りたり、食事を御馳走になることも少くない。つまり住居は、帰って寝る為だけの家といったところか。

居住者の彼にとっても、最初はこんな所に人が住めるのかとさえ思えたが、実際、このビルは廃墟ではなくマンションだ。ただし、中にいる人間は沢山のことが多いだろう。李清の家の誰かさんのように。

リートは寝るのに使っている部屋に戻って服を着替えた。

部屋から出た途端、冷気が肌をすり抜ける。息を吐くと白い靄もやとなつて消えた。

少しづつではあるものの外が寒くなっていると実感する。朝夕は特に。この辺りの地方は冬が長い。これからもっと寒くなって雪が降るのも近いだろう。

一昔前の英国を思わせる町並みを俯瞰する。

時計台が、10時の鐘を鳴らした。

国名イザベル。ヨーロッパの北側に位置する中規模の国だ。そして彼らが住んでいるのはイザベルに内包される軍拠点都市——ザイフォン。首都は隣都市で、ここにもその発展の余波が滞りなく行き来している。名のとおり軍の将校と総拠点がある街。そのくせコッペリアと並ぶ裏家業の市場。軍と裏の仕事が仲良く居座っている街、それが都市の実態だ。

表面上は気づく筈もないが、街には巢食うように地下が発展している。

理由としては、第一に地震が少ないこの国の特権を利用した為。

そしてもう一つの理由は、街全体が少し前まで治外法権だった為

だろう。

水面下で何が起こつていようと、自分達の生活範囲テリトリーが安全であればそれで十分。暗いものは隅のほうへ、奥のほうへと押し込まれる。ザイフォンが行政の支配下に置かれることになった時、治外法権の更に暗部、地下へと人々は『それら』を押し込めた。

即ち裏家業であつたり行政の管轄外のものたちだ。

あたかも軍警察はそれらを知っていて見過ごした。背徳的で暗い部分は、国の根幹に深く関わっているのだから。つまり軍警察の表で平然と指揮をとる幹部達は、裏でもなんらかの重要な役についている、もしくは就いていた者が多いということになる。

即務 第二機関の官長などがよい例だ。

そういう奴等は、一石二鳥の極めて合理的なやり方をしていると思う。汚職と言えばそこまでだが、裏でも表でも同様、金銭、地位が保証されているのだから。その上、自分の身に危険が及ぶこともない。

自国の真髄は裏に向いている。

きっと表に出ている首相よりも、軍警察の総統の方が発言力が大きい。その為、正規ルートで軍警察となった者はこつぴどく裏の間を嫌うようだが、どちらもお互い様だろう。詮無いことだ。

通りを歩くリートの横をはしゃぎながら子供達が駆けて行く。街の表面上だけを見るならば、以前と比べずっと治安が良くなった。

彼は『表の』街の出身ではない。

けれど三年前、改めてこの地を踏んだときは、まだ子供が駆け回れるような環境ではなかったように思う。そう思えば、軍警察の治安維持もそれなりの成果を上げていると言えるだろう。

路みちを選んで集合住宅の多い方へと入る。

周辺一帯にはあまり詳しくないリートにとって、同じアパートの建物が幾つも建っている、いわば迷路のような所だ。実際、目印となる物はプレートに書いてあるビル番号くらいである。

そして集合住宅の道を奥に入っていくと、今度は一転し、林に囲

まれた緩やかな坂があり、四方を囲む丘は墓地を兼ねている。

軍拠点都市といえども、細部まで都市化しているわけではない。

郊外では、稀に穏やかな風景も見ることができる。

今日の依頼主クライアントとはこの墓地上の礼拝場で落ち合う予定だった。

建物はどうやら葬儀屋も兼ねているらしく、四方を囲む墓地がそれを物語っている。

他国はどうか知らないが、ザイフォンではまだ火葬をしているのは首都くらいなもので、地方はまだ土葬を続けている所も多い。つまり、この場はもっぱら葬式を行うための場所。

どうりで建物の造りが教会に似ている。

そんなことよりも、何故待ち合わせの場所が礼拝場なのかということに疑問はあった。依頼主がよっぽど信心深いのか。

——…それともただの嫌がらせか。

リートは内心で、苦い笑みを零す。

左右には墓地。目の前には礼拝場。上には青空。後ろには丘と墓地。整備された一本道。

絵にかいた理想的な風景は、どこか現実味がない。

建物からは話し声も人の気配もしない。ただし代わりにオルガンの旋律が聞こえた。

待ち合わせは礼拝場、もとい教会の『中』という約束だ。中にクライアントが居るかどうかは別として、入って確かめてみることにする。もし依頼主と違う人間が居たら、適当に話を繕えばいい。

両番の大きな扉を躊躇なく前に押し開ける。

途端に、オルガンの音がよりいっそう耳に流れ込んできて、教会全体が揺れている錯覚を起こさせた。

目の前には果てしなく続く赤いカーペット。その両側には木製の滑らかそうな横長椅子が、一寸の狂いもなく整列している。ステンドグラスは朝の光を浴びて何色にも交差し、入り乱れ、混ざり合い、部屋全体に色とりどりの影を落とす。

遙か前方の、丁度リートが立っている真っ向には巨大な十字架が立ち、正面のステンドグラスのみ、荘厳な、そうごんけれど麗しい女神を象っていた。

思っていたよりずっと大きくて、綺麗。

それがリートのこの建造物に対する第一印象だった。

大聖堂と言うのであったか、世界遺産のそれにさえ匹敵する。歴史ある大聖堂に負けないくらいの壮大さと神々しさがそこにはあった。

ずっと響いていたオルガンの音が止む。

「：来てくれて有り難う。私がヘルメス・キャンペラーです」

声の主を見ると、彼の許には一人の男が立っていた。

朝の光はステンドグラスで誇張され、斜光を背後に受けるその人物はまるで後光を冠しているようだ。

「貴方が依頼主か」

リートは目を細めながら言う。

「ええ」

対象の人物が階段を一段ずつ降りてきて、やっと容姿を理解した。襟首の詰まった黒いコート、首には十字架の首飾り。金髪のクセのある短髪に眼鏡を掛けていて、その両眼はどこか慈悲のある色を讃えている。年齢は三十代位だろうか。

「聖職者……？ 驚いた」

リートのそんな言葉に対しても、相手は微笑むだけだ。

「私だって、望んでこの様なことをしているわけではないのです。聖職者であろうが人間ですよ。人間とは欠けているという意味だ。：貴方は今まで生きてきて神に助けて頂いたことがありますか？」

——小言を聞きに来たワケじゃないんだがな：

内心で舌打ちしながら、世間体から一応答える。

「一概には言えないのでは？」

「矛盾した答えですね。：私是一概に言えますよ。神の救済を受けたことはありませんとね」

優しく微笑みながら神父は神を否定し切った。

神に仕える者ならこは嘘でもあるって言うんじゃないのだろうか。矛盾しているのはどっちだと問いかけたくなる。

「変な神父だと思われてしまったようですね。少し訂正します。神は居ますよ。……私たちの心の中にね」

「……今時流行りの不神信者ですか。かなり変な神父ですよ、貴方は」

「教えに背いたことは一度も無いのですがね」

彼はくすくすと「かなり」に昇格されたことを嘆く。そもそも所作からして、どう転んでも嘆いてるようには見えないが。

「ああ、前座が過ぎてしまったようですね。お遊びはここまでにしておきます」

神父は自分は真っ赤な階段に直接座って、こちらには近くの長椅子を勧めてきた。指示通りそこに座る。

「依頼内容ですが、ある人物を殺さない程度に射撃して下さい。……仕事はそれだけです」

実にアバウトなことを言う。

「神父さん……じゃなくてヘルメスさんでしたか。こちらは言われたことをしますが、その手筈は済んでおられますか？　それから詳しいことも聞かせてもらわないと」

リートはあくまで冷静に状況を確認する。

「相手の生活サイクルは調べてあります。奴の帰宅時を狙ってください。一人暮らしの一軒家です。少し住宅街から外れた所にある家で、逃走路はもう確保してあります。殺さない程度と言いましたが理想は手足です」

私怨によるものかどうか、それだけではリートには判断し辛かった。

——理由は関係ないことか……

それから更に詳しいことを聞くが、仕事は思ったより難しいことではないように思えた。

「：了承しました。それでは分相応の報酬により引き受けます」

「ええ、勿論。実物をお見せするのでついてきてください」

神父は立ち上がり、祭壇の階段の上にのぼると横の扉から移動する。

見せるという表現は、もしかして対価だろうか。

基本的には、即務第二機関の仕事報酬は金銭であることがほとんどで、対価とは要するに借金のかたのような物だ。依頼したのにも関わらず金が払えない、止む終えない場合。そもそも個人の依頼主が極端に少ないここでは滅多にないのだが。

即務第二機関でのリートの業種は狙撃手だ。

いかなる状況でも正確な腕が問われるこの仕事に就いているのは、彼を含めても数人。そして彼らの過半数が暗殺者という区切りにも属す。つまり人を殺す目的で引き金を引く者達だ。

ただしリートの場合は例外で、暗殺以外を専門とする狙撃手を生業にしている。

依頼内容は、物品の破壊、時たま人体の軽度の損傷があるくらいだ。驚くことに仕事に就いてまだ一回も人を殺していない。

そんな自分に驚いてもいる。言うとなら物騒ではあるが、それが彼の本心だ。

人を殺すことしか出来なかった。いや、許されなかった自分が、誓いをたてて今度は人を殺すことを許さないとする。我ながら信じられない変貌振りと感心したりもした。

だから彼女に痛いくらい感謝している。

——そう、こんな自分でも人になれたのだと。

気がつくのと、大聖堂の隣の部屋に移動していた。

懺悔室ざんげのような雰囲気きの漂う部屋へやの中心には、平たい机が一つ。

机上には、吹奏楽の楽器ケースによく似た大きくて黒いケース。大きさは縦に1×1.5mはあるのではないだろうか。

「これは世界大戦時に機密兵器とされたものの、量産される前にそ

の開発国が負けて、終戦してしまったんです」

男——ヘルメスは語りだす。

「その為、平和的外交に時間と資金を費やす間、暫く見向きもされなかったらしい。そもそもその国は敗戦国で終戦後は占領されていたようですから、全て武器は取り上げられてしまったんでしょね。そして：勝者の占領軍はその機密武器も含め、武器・危険物と見なしたものは全て押収しました。けれど、肝心の使用方法・開発内容の資料は紛失していて、実践に取り入れられることはなかったようです。：今から10年近く前のことになりますかね」

そこまで一気に話すと神父は一息ついた。

「：きな臭い昔話に付きあわせて申し訳ない。これが、その——」

目の前の神父は大きく黒いケースの金具を外す。

すると、それはピアノの響板でも開けるようにゆつくりと姿を表した。

「『ヘルヴォルTh13』 陸戦型歩兵兵器の最高傑作。：君も知ってたかな？」

今まで胡乱に話を聞き流していたリートも、これには息を呑んだ。「軍勢の守り手：、全世界のバイヤーと兵器開発機関が血眼になって捜しているこれが、何故ここに？」

それは箱の中に隙間なく詰め込まれていて、明らかに折りたたんだ形であることが分かる。広げてみると大人の身長よりすこし小さい位だろうか。

神父は満足そうに頷く。

「おや、やっぱり知っていましたか。勿論、模造品レプリカじゃない真正正銘本物です。少し調べて見るといい」

彼の言い方に、虚実は見られない。

件の代物が本当に本物なら（そんなことは有り得ないが）それはもう、値段で表せない程の価値がある。

リートは机のほうへと歩み寄り、中を近くで確認した。

「防弾加工もされてるらしい。盾として使えるというのも利点の一つだね」

少し昔に李清にも聞かされた話だ。

以前にも名前だけは聞いたことがあった。伝説とも言える歩兵武装。普通、銃機器、火力のある歩兵戦力機というのは「防御を捨てなくてはならない」という弱点がある。

銃ならば両手で持つ場合が多い。それは二挺拳銃の場合でもあるし、たとえ一丁であっても片手だと標準が狂う、

片手を使うのはよほどそれに慣れた者か、そうするしかない状況に置かれた者、それ以外の多くの場合が基本両手だ。誰も片手に盾を持って、片手に銃を持つような者は居ない。

それに、銃は自らの懐に入られると極端な豆鉄砲と化す。それはあくまで銃は遠距離専門であり、飛び道具と言われる由縁はそこにもあるからだ。

———ただし。

『ヘルヴォルTh13』はそれを全く問題としない。

一見歩兵用のランチャーにも見えるのは盾の役割、鈍器の役割、ライフルの役割、ロケット砲の役割を全て兼ね備えている、それこそ化け物みたいな兵器だ。

ライフルの弱点として挙げられるものには、普通、ライフル等の狙撃銃の場合、使える弾の種類には限界があるということだろう。

例えば対人のと対戦車のライフルでは、性能も見た目も違いすぎるように弾の種類は上げはじめるとキリがない。経口サイズだって違いは大きい。

だからこそ用途にあった弾に合わせて銃口をつくる。もしくは弾種を選ぶのだが…

それなのに、ヘルヴォルという神の名を冠した銃は、その弾の限界がおそろしく広い。言うなれば、これ一つでライフルで使える銃弾を、おそらく普及している全ての銃弾といっても過言でもない程の物…その全てに適応してしまう。

詳しい仕組みは分らない。

さっき神父が言ったように開発時のデータは紛失してしまった。いや——もしかしたら誰かが故意に抹消したのか。

加えて、盾の役割というのはつまり銃体の防御性。

銃のボディには防弾加工が施されている。

つまり、無駄に大きい銃は盾の役割もする。その丈夫さがまた化物並らしく、大砲を直に受けても少しバラけただけで修理可能な範囲内。大破しなかったと言うほどだ。

それは確か世界で最も硬いか、密度が高いかとか言う素材で出来ていたはずだ。自然界に存在するものでなくて、軍が機密に開発した化学物質なのだろう。

それ程の強度を持ちながら、軽量化にも成功している。だからこの大きさと障害となるべき持ち運び易さは一級品らしい。

最後に、ロケット砲の役割がある。これがもう天災としか言いようがない。

この兵器にはロックシステムがついていて、それは標的を必ず仕留める機能だ。今迄のような狙撃の照準を合わせてどうのこうのということはなく、わずか0.1秒で認識、発射が出来る。

そしてライフルの場合と同様、銃口が複数あり細かく調節できる機能もあるが為、弾が限られることが少ない。

しかもその上で連射機能を無理やり取り付けた豪腕物。

紛れもないパンツァー・ブレイカー。……言葉通りの機甲破りそれ程の機能がありながら、折りたためば担いでも移動に支障がない。人間が持てる規模なのだ。

つまりこれを持っている時点で、銃機器の弱点——近接戦闘をまづ敵が出来ない。

ヘルヴォルTh13は要塞のようなものだ和李清は喻えていた。全くその通りだ。多機能狙撃銃ライフルといえば早い、一言で表すにはこの歩兵武装はいきすぎた。

銃機器の知識のあるリートも調べてみたが、レプリカにしてはか

なり細かく造られている。

——もしかしたら、本当に……

「人に御せ^{ぎよ}ない物を人が持つことは破滅への道突っ走っているようなもの。これはおそらくそのぎりぎりの境界線^{レッドライン}だろうね」

目の前の人物は、ふっと洩らす。その台詞にリートも頷いた。

「それにしても本気ですか？ これは明らかに分相応じゃない」

「良いんだよ。今の私はただのしがない一般神父だから。こんな物持ってたって、何の役にも立たないよ。それに君になら良いかなと思っ^{ぎよ}てね」

「：俺で何がいいのか分からないけれど、それは好意的にとらせてもらいます。にしても一体何が……と、過去のことを聞くのは無粋ですね。後で返せと仰っても無理ですよ」

「ああ、その方が好都合で嬉しい」

微笑みながら神父は大聖堂の方へと戻る。

リートも虐殺兵器から目を逸らして、後ろ髪を引かれる思いを感じながらも彼に続いた。

相変わらずの大聖堂では、ステンドガラスが煌々と影を彩っている。正面を見上げたリートは最後に一つだけ問うた。

「このガラスの女神体は、聖母マリアですか？」

来る前と同じように、オルガンの椅子に腰掛けた神父は答える。

「……いいや、その女性^{ぎよ}はね、フレイヤさ」

——偶然だろうか、似た名前だ。

「フレイヤ……北欧神話の神で、美しさと愛を守護するもの……」

「そう。そして戦い、死、性欲の象徴でもある」

何でそんな象徴を教会に持ち込むのかが分らない。

……だが、その質問をするのは止めておいた。

リートが扉を閉めて、教会を後にしたのと同時に中でオルガンの音色が響き始めた。

——偶然じゃない。……間違いない。

あいつはそれを承知でフレイヤと名乗ったんだ。

さっきまで爽やかに晴れていたのに、空には暗雲が漂い始めていた。

07 緋（上）

——人が死ぬ話が好きなんだってさ。

ヨーロッパ地方を彷彿とさせる顕著な町並みにそぐわない、黒い影がある。

そぐわない、というのは彼女の黒づくめの服装の所為もあるだろうが、服装よりも在る造形自体が、そこでは異質だった。

漆黒の絹髪と、同色の意志の強そうな凜とした瞳。

純潔の中東人でも、ここまで形質がはっきりした者はそうそういない。

腰まである長髪を括り、帽子を被って隠そうとも、目ざましい美貌は衰えることがなかった。

日差しが、眩しい。：こういう日は嫌いだ。

元々昼間はあまり好きじゃないけど、今日みたいな日はもっと。

——陽の光が嫌いだ。人工の光が嫌いだ。何かに反射した光が嫌いだ。

それはきつと、どれも自分という存在を浮き彫りにさせるものだからだろう。

即務第二機関へ赴いた日の翌日。

彼女：レインは人通りの少ない通りを歩きながら考える。

今日の仕事は現金輸送列車の護衛。公的銀行に届ける紙幣と株券・契約書などの書類を守れ、ということだった。守護する対象が人でない分はやり易いだろう。

聞くとところによると、大掛かりなものらしく『即務 第二機関』以外からも傭兵や警備員を雇っているようだ。

レインにとって団体任務は得意とする分野ではない。

そもそも銃機器の扱いは人並みかそれ以下だ。だからこそ少し

でもマシになろうと、リートに射撃を習っているのだが。その上、この容姿だから仕事仲間がやけに見下してくる。

舌打ちして待ち合わせの場所へ急いだ。

今回の場合、列車での現金輸送なので危険は少ない。

おそらく列車を降りてからは目的地へ大型の車で輸送するのだろうか、そこからは頼まれていないので無関係だ。

レインが頼まれたのは第七車両。最後尾か最前列でない為、危険も少ない。

加えて、どうやらこの依頼は表向きらしい。第二機関に依頼する仕事の中では表向きのものはごく少数派に入るだろう。

内容は知っているものの、まだ不安が自分の内にあったりもするわけだが。

——理屈じゃないんだよな……

臆病なだけとも言うが。

そつと、腰のホルスターをコートごしに触る。

——大丈夫、やれる。

駅裏まで来て指定された出入り口へ移動する。

詳しくは知らないがここは普段、駅員や乗客の避難用の出口の筈だ。

非常用の扉を幾つか開けて、細長い通路を抜けている内に少し広い空間に出た。目の前には非常階段と、駅員姿の男が一人居り、その人物に話しかける。

「すみません。ボークウィン行きへは何番線の列車ですか？」

男は公務員らしくにこやかに答えた。

「3番線です。青い列車ですよ」

「有り難う」

一連の会話が終わると、駅員の恰好をした男の目つきが変わった。

「……所属は？」

「第二機関」

「了承した。地下C-2だ」

レインの目の前の男は言って、袖口からカードキーを取り出す。無言で薄っぺらいプラスチックのカードを受け取り、地下への階段を降りていった。

暗号の言葉が交わされて、それが隠語となりセキュリティ等の役割も果たす。

古典的なやり方だが、妥当だ。隠蔽としては優れている。

さっきの駅員に扮した人はたぶん、頼まれ屋かなにかだろう。どちらにしろあの様子だとプロだ。

階段を降りて、行くと扉が見えた。

一帯を出ると雰囲気はうって変わり、明るく照らされた広々とした通路へと出る。

駅の地下通路の一角。ただし一般人には入れない場所だ。

明けた通路を歩いていく。

暫く歩いていると、すぐにホームへ着いた。

ホームはすでに現金輸送の列車が到着し、視界が開けたと思うと再び視界を塞いでしまう。

おそらく線路を幾つか渡って向かい側にある、一般の定期列車と特急列車の乗客に、自分たちの存在を知らせない為だろう。今レインが立つホームには三つ線路があって、それぞれ着く列車の役割が違ってくるのだ。

通常列車、：いわゆる定期列車、特急列車の路線二つ。それから、今まさしく目の前にある特別な路線。

ここだけ、同じ地下駅の中でも間を置いて切り離してある。

普段は貨物列車がただ通過するだけの線路であり、それを理解している駅員や乗務員は疑問にも思わない。

レインはホームに横付けされている列車の入り口を観察していく。

入り口の上にはアルファベットと数字が組みになった番号。入り口の前には駅員が一定間隔で立っていてこちらを観察していた。無

論、彼等もその手の業種だろう。

彼女は『C-2』のプレートが入り口の上にはめ込まれている車両で足を止めた。

さっき言いつけられたのはこの車両だ。

入り口の前に立っている駅員に扮した男にカードキーを渡す。

男は無言で受け取り、機械の端末にスライドさせる。

機器を慣れた動きで操作し、短く「入れ」とだけ告げる。

――二重の確認によるチェックか：セキュリティとしては今迄のも込みで軽いな。

内心そう思うと、同時に扉が開いた。

中は外よりも埃っぽく：それでも思っていたより広々としていた。ダミーのアタッシュケースとダンボールや箱が積み重ねられた一角があるが、そこを除けばまったくの蛻もぬけの殻だろう。

列車の天井にはめ込まれた照明が、チカチカときれかけているのが見えた。

先客が、3人。

車内に入った途端、こちらに一斉に視線を向けてきた。

床にそのまま腰掛けていたり、窓のない車体に凭れかかっていたり、散りじりになっているところから、同車両内の3人は初対面のような。そして同じく、レインにも知っている人物はいない。

――単一の車両に4人：？ 多いな。

違和感を感じながら隅の方へ移動する。

どこからか舌打ちの音が聞こえた気がしたが、聞こえないふりをした。

視線が痛い、毎回のことだ。

――慣れって怖いな。

車体に立ったまま凭れかかる。

どこでも同じことだろうが、女性の用心棒・傭兵というのは、ことに少ない。その上、中東人ともなると殆どいないだろう。他の職種では少人数であるにしろまだ人数はある。だが、傭兵に至って

はおそらく全体の1%も居ない。

レインも今まで傭兵を続けてきたが、同職の女性は1、2人程度しか知らない。

更に、彼女のような場合、まだ若い未成年の女の傭兵に見られる為、甘く見られても仕方のないように思える。

列車が発進するまでの間でも気は抜けない。むしろ、今が一番、狙われやすい時なのだから。

壁に凭れかかりながら、腰もとのホルスターにもう一度触れる。黒いロングコートの下に帯革をしているので、見た目ではホルスターに銃を取り付けているのも分からない。

…といってもレインに銃を抜くつもりは毛頭なかった。

自分の銃の腕が下手なことは自分が一番知っている。だからコレはお飾りだ。

それでも咄嗟に頼れるのは今のご時世、他でもない重火器であつて。…いずれかはそれなりに扱えるようになりたいと思つてはいるのだが。

——銃刀術を本気で習おうかな……

内心、溜め息。

…と、いきなり車体ががたんと車体が揺れて動き出した。体もつられて少し揺れる。

防犯の為、は出発の合図となる汽笛も鳴らない。

——ここから約二時間か。

静かにその場に腰を下ろした。

何事もなければ、それはそれで良し。

何かあったら、そのもしもが自分達の仕事となる。

あるかどうか、分からないようなものを生業としているのが傭兵だ。

ふと、あの人がいっただか言つた台詞を思い出す。

その男はレインが知る限り、最も優れた傭兵だった。最初は憧れだったのだ。他でもない傭兵であるあの人への。

けれど、人を殺せない傭兵は木偶の坊だ。

今、自分は傭兵に準ずる職業で、憧れている場所に着けそうなのに、何故だか晴れ晴れとしない気分だ。…それは、自分が人殺しをしたくないから、傭兵にもなりたくないという単純な結論。目標は志半ばで手折れ、現実は厳しい。

そんな自分の贅沢さに苛立つ。これじゃ、何を目指して生きるのか。自分が生き生きしている時といえば、それは……。

思考に沈みかけたところで、レインは外部からの受動的な変化を捉えた。

唐突に、耳に話し声が聞こえたのだ。

車両の中を見渡すが、ここで口を開いている者は居ない。

——隣の車両か……？

レインは立ち上がって少し移動し、車両を区切る扉のすぐ隣にしゃがんで耳を傾ける。

——やっぱり。

隣からだ。人の話し声だろうか。

目の前には防弾加工された扉がある。

この扉を開けても、接続部があって少し足場のスペースもあることだろう。距離感に加えて列車の走行音という雑音もある。

な——のに人の声が聞こえるって、どういうことだ？

余程大声で喋っているのか、それとも……

「おい、どうした？」

ぶっきらぼうに背後から声を掛けられる。

レインの行動が不自然に見えたのかもしれない。

誰何の声に、別段驚きもせず返答した。

「話し声が向こう側から聞こえます…いや、怒鳴り声？」

確かに今のは怒鳴っているように聞こえた。

「怒鳴り声だと？ あっちの担当は言い争いでもしてんのか？」
今度は、さっき話しかけてきた男とは違う声が聞こえた。

確かに傭兵には血の気が盛んな者も多い。今回の場合、多種多

様なところから引き抜かれているから余計に争いごとのおこる率は高いだろう。でも、何か様子がおかしい。

―――！

その時、列車の走行音に混じって、乾いた銃声が聞こえた。今度ははっきりと、二発。

「どうやらおっぱじめたようだな」

「前の方から聴こえたな……」

彼以外の他の傭兵は立ち上がり、各々で武器の確認をする。後ろの車両からか、前へ移動しようと人が集まってきた。

―――どうだかな……。

発砲は強盗を目的としたグループか。

―――いや、まだ分からないな。

今は待機しているのが懸命な判断と感じレインは、ダミーのアタッシュケースやら箱やらが積まれている傍に腰掛けた。

「お嬢さんは行かねえのか？　まさかびびったなんて言わねえよな？」

一人、前の車両へ行こうとした男が少女の方を向いて言う。

「何とでも言えればいい。ここで待機している」

見くびった様子で傭兵は前の車両へと移った。

レインが居る車両は後方の車両にいた人たちの移動通路となり、多くの者が前方の車両へ移った。

暫くして、走行音のみの静寂が訪れる。

―――どうしてこう、腰が軽いんだ？

全員、出て行ったらしい。しかしレインにとってはその方が都合が良かった。

もしもの時の脱出経路は、駅で入ってきた扉。そして車両の上下にある通路。

銃声がまた聞こえた。……その時

「もしもし、少しそっちに行ってもいいですか？」

レインはいきなりの呼びかけに身構える。

——誰だ…？

声は自分の居る位置から斜め前。丁度、ダミーのケースや箱で見えなくなっている部分からだ。

思ってもいない方向の声にすぐさま反応し、腰元に手を掛けようとした。

自分以外の傭兵は3人。全員出て行った筈だ。

「あーあ…んなに殺気立たないで、さっきからいましたけど？」
やけに馴れ馴れしい口調の声の主は、立ち上がって少しこちらに近づく。

「初めまして、かな？」

その姿をレインは確認して、さっきまで壁に凭れていた人物と理解した。

レインは勇めて落ち着いて、目の前の傭兵に訊く。

「全員、出ていったかと思っていたけれど…油断したようですね。気配を消していたんですか？」

「そ。だってついて行くの莫迦^{ばか}らしいじゃんか」

言って、肩を竦めて笑い、彼はレインの数メートル前辺りに腰掛けた。

その人物を観察する。

見た目、年上の成人男だろうが、傭兵としては年齢的にまだまだ若いことが分かる。

赤毛に薄い緑の瞳をしていた。

簡素な、私服とも言える格好の上から軍服のような厚手の上着を肩に掛けていて、前の留め具は閉めていない。武器はどこか問いたくなるような、頼りない姿だった。

「貴方…所属は？ それとも、もしかして個人業^{フリーランス}？」

レインは不安になって、思わず質問する。

「企業秘密なのでお教えできません」

ニツコリと笑って返答する彼は、どこか面白半分という感じがした。

——こんな奴と一緒に居て大丈夫なのか…？

言い知れぬ嫌な予感がしてきた。

「おれのこととはクロードって呼んで下さい、あと、そっちの所属とお名前は？」

「自分はレイン。即務第二機関に所属している」

一応、簡単に名乗る。

「そくむ…？」

小声で反復していたクロードと言う人物は、相槌を打って「ああ、あそこか」と一人で納得する。

「なるほど…んで、レインさん？　って呼びますけど…どーししましょうかねえ、この状況」

「さんはいらない」

敬称で呼ばれたことに違和感を持ちつつ、のらりくらりと質問する相手に溜め息を吐く。

はつきり言っただの上なく頼りない。

それでも車両内には二人だけだ。いざという時は頼りにできるのはこの軽薄そうな人物だけなのだから。さっきの話くらいはしておこうと考え付く。

芯のある瞳で、赤髪の青年を見る。

それからふと視線を外して語り始めた。

「自分の勝手な想像ですが、聞きますか？」

「ええ。是非とも」

「今、さっき隣の車両で人の怒鳴り声が聞こえてきました。傭兵同士のいざこざかとも思いましたが。…でも、暫くたって銃声が聞こえてきた時に『違うな』と感じて」

ふんふんと頷きながら、青年は先を促す。

「思ったことですが、単なる推測です。さっきのは傭兵のいざこざなんかじゃない。襲撃犯が行動を起こしたんじゃないかって。たぶん、敵は前の車両から順々に調べて行っているんじゃないのかって…この列車の上を通過して」

静かに言って、レインは車内の天井を指差した。

「うーん：それもあるかもしれませんが、おれはもっと最悪なこと考えてましたよ。これも聞いてくれますー？」

了承するとクロードは座りなおして話し始める。

「：今から少し前の話です。ある任務で、今回のこれとよく似た現金輸送の時の話を聞いたことがあるんですけど。その時は車両の幾つかに分けてお金を運んでいたんですねー、んで、盗難グループが大勢でヘリコプターで後ろから金品を狙って詰めていくんですね、前へ、すると攻め込まれた傭兵も前の方のだけは守ろうって思うでしょ？　：でも、半分くらい侵略されてお金も半分位とられちゃった時に、今度は一番前の操縦コンピューターハッキングして、：列車は谷底へと落ちていってしまいましたとき。お終い」

「……………」

沈黙。

——だから、どうしたっていうんだよ。

単純で、簡単で、馬鹿みたいで笑えない話だった。

加えて、それをさらさらと語る青年が、何故か不気味でもあった。

「：今回ののもそうだと？」

怪訝そうにレインは尋ねる。

「さア？　でもその犯行グループまだ捕まってないらしいよ？」

「本当に幸先悪いこと言うね」

レインの示唆に、笑って頭を掻くクロードの仕草からは悪意は見れない。

それにしても、その（実際居るかどうかは知らないが）強盗犯達にとっては現金は半分でも十分だったということか。

人間は欲を出して大事なものを失うことがある。それに比べたらずっと懸命な判断だろう。レインは彼の作り話かもしれないこの話がやけに現実的に思えてきた。

——今は：そんなことは、どうでもいいか。

「今。敵は前から詰めているようだけど」

思案した後、これからの行動について考える。

「ねーねー、レインさんー？ おれさあ、前のは揺動だと思うよ？」

にやりと猫のように笑ってまたクロードは不吉なことを言う。

「揺動、だって？」

こくりと頷いて目の前の人物はこちらを見つめる。

「今迄で聞こえた銃声は、5発。しかも少し間を置いているってことは拳銃とかだろーね。」

おれがもし犯人目線だったらマシンガンとかの乱射銃でずだだだだーってやっちゃうよ？ ただの誘き寄せじゃないの？」

レインはだんだん頭が混乱してきた。

「待てよ。どこまで信用すればいいのか……」

とにかく今の正しい状況を把握しようとする、そんなこちらの様子を楽しそうに眺めるクロード。

ふと、また彼の軽装に目がいく。

「クロードとか言ったな、そういえば持ってる武装は？ ……銃くらい持ってるんだろう？ 近接？ 遠距離か？」

彼の軽装からして、持っていないという可能性もある。

——いや、それは流石にないか……

というか、その可能性は考えたくない。

すると案の定、唸り彼は考え込んでしまった。

「どっちとも言えるし、どちらでもないなあ」

またもや曖昧な答え。

「まどろっこしい、飛び道具？ それとも刺傷、打撃系武器？」
レインは少し早口になりながら問う。

「飛び道具といえれば飛び道具だし……いや、捕縛系？」

聞いて呆れた。

——捕縛系って……まさか注連縄しめなづなとか持ってきてるんじゃないだろうな。

益々、信用できない。

「で、かく言うレインさんは？」

眠たそうに小さく欠伸をしながら、彼は聞いてきた。

——自分のことを棚に上げという……

手札を晒すような気がして、あまり乗り気ではなかったが、痛くもない腹を探られたままというのめ気が引ける。しょうがなく真っ黒いコートを半ば脱ぎ、そうして見えた腰の剣帯の位置を直した。

手元を探り、抜き出したのは黒い鞘に納まった刀だ。

「へえ……かっこいいな、刀？」

クロードは見とれるように身を乗り出した。

「……さあ。確かにコレは居合い斬りの細身の物だけれど、はっきりしたことは分からない」

成程と相槌を打って、青年は言い足した。

「それじゃあ、レインさん、とにかくここから移動しましょう。」

前が詰まっていると笑えない背水の陣になっちゃいます」

——移動……？

クロードは立ち上がると、また欠伸を噛み殺しながら背伸びした。

「……移動って、前へ？」

いささか気乗りしないまま、立ち上がる。

「まさか、逆ですよ。迎え撃ってやんなきゃ」

——は？

さも当然のように言い切る。

最初からクロードの呆れた言動を受け流していたが、流石にこれには彼女も反発する。

「本気？ 相手の勢力も状況も分からないのに？」

「状況は自分からつくるものだって聞いたことないですか？」

「……呆れた。自分は御免だよ。ここに残る」

レインは諦念さえも滲ませた顔で、車体に薄い肩を着け、もう一度座り込もうとした。

そこを、クロードにいきなり腕を掴まれた。

そのままぐいと引き寄せられ、顔を近づけさせられる。

「……っ」

護身から、咄嗟に掴まれた方でないもう片方の手が拳を作ったが、彼は放たずに押し込めた。

——…面倒だ。

とてつもなく面倒だ。

二人の距離は互いの息が感じられる程近い。

それでもレインは落ち着いて青年を見つめる。

「何をする？」

「ここで待ってても意味ないだろう？」

それは今迄のクロードの声音とは違っていて、どこか真剣さがあつた。無言のままの視線は鋭く通じる。

けれどレインも、このまま良いようにされる気は毛頭なかった。

「お前の言葉は信用できないよ」

「どうかな。おれは嘘についてないよ。反復してよく考えな」

「……っ」

——どいつも、こいつも。

薄い緑色の瞳が真っ直ぐにレインを見つめる。

「………」

言葉に詰まる。

確かに、こいつが言ったことはそのまま素通りするには重い気がしてきた。

たえ嘘だとしても、だ。

今はこいつの言うとおりにしていた方が安寧か、とも思うが、誘導尋問に引っ掛けられているようで癪かんに障る。

だから。このまま言いなりになるのは

——…面白くないな。

レインは目の前の人物をきゅっと睨む。拘束されていない方の無手で作っていた拳を、そいつの腹に思い切り捻じ込んだ。

掴まれていた手の拘束はひらりと解かれたが、それがわざとだとすぐに気がついた。

数瞬、視線が交わる。

——ふざけた奴……

それで、決めた。

「いいよ。お前について行ってやる」

クロードは少し自分の腹を撫でながら訊く。

「合格……？」

「合格ラインぎりぎりだけどね」

レインは裾のしわを整えながら、凜と微笑んだ。

08 緋（下）

走行する列車の中。

今居る車両から、進行方向とは逆の後方車両へと彼らは移って行く。

どういう訳だか彼ら二人だけという少人数で、金品強盗犯を追いかつめることとなった。

相手の勢力は不明。こちらの武装は近接武器に、自動充填のオートマチック銃が一丁。加えて隣の問題の男、クロードの武装は不明瞭。

以上の状態で、敵を相手にしろと言うのだ。

冗談抜きで、だ。

——あいつに言ったら、呆れるだろうか……

戦術にも長けている知り合いの隻眼の青年を思い出し、レインは内心苦い笑みを滲ませる。

せめて、とぼちちりを喰らわないことを祈っておこう。

レインだって、浮き雲よりも掴み所がないような男と行動を共にしたくはない。

でも、信じてもいいかもしれないと思えたのは理由があった。

つい先程、腕を掴まれたとき彼は握力が意外と強くて、態度には示していなかったが、正直それなりに痛かった。

それから腹に拳を入れたとき、ガードはなくて生身に当たった感じはあった。けれど、身体に喰い込んだかというところでもない。

——身体を、それなりに鍛えているってことになるんだろうな。

そういえば身長も高い。レインは170cmに届くかどうかという位の身長だ。立ち上がったときに気が付いたが、クロードはその彼女よりも頭一つ分近く高かった。

見た目で能力を判断するなんてことは愚の骨頂なのだが、どうも

判断材料にしてしまう。視覚から入る情報はかくも重要だ。

——どうでもいいことなのにな……

それから、やはり。

あの、真剣さを佩^おびた眼のせいか……

「一对複数になるだろうけど、最初に言つとく。こっちは銃の腕は皆無だからな」

あくまで淡々と、自分は近接戦だとレインは語る。

「だろうねー、おれは援護に回ることにするよ」

「それはいいけど……こっちだって銃撃戦に巻き込まれるのはごめんだ。切羽詰まるまではそっちが主戦力で頼んだ」

我関せず、深入りせずの方針に変わりはない。

見目は美しい少女でも、レインは他人の事情や、個人的な意志の相違については殊更^{ことさら}に殺伐としている。

彼女に好意や興味を寄せる人間は数多いというのに、本人は他人に興味がない。

——ていうか、どうでもいい……

先程居た車両から四つ後ろの車両まで移動したとき、クロードの足が止まった。

「ここが一番配置のいい場所かな。ここで待機しよう」

見てみると、アタッシュケースとダンボールの箱が幾つも積み重ねられていた。内部構造は前後の車両と変わりはない。

レインは黒髪を払って背に流す。

「姿を隠すにはいいけど。動きにくくないか？」

「動く必要はないよー、元々あっちの方が進入者なんだから戦局的には弱いしさー」

そう言いながらクロードは壁を手探りで叩いたり押したりしている。何かを探しているようだ。

「あ、あった。コレコレ」

弾んだ声音で彼が発した途端、車内が真っ暗になった。

「ちよっと……何した？」

レインは動揺しないように壁へ手を伸ばして、今居る位置を確認する。

「ふうん、やっぱりね、電気回線が車両で個々にあったんだ。これ、いわゆるブレーカーみたいなもの」

眩いて、闇の中、青年は片手を上げて何かをこちらの目の前に突き出した。

「：コードごと切ったのか？」

闇目に慣れて視界が鮮明になった途端、ぶつとりと途切れた機械端末を見せ付けられる。

何も考えていない行動に絶句した。

「レインさんー、車内の障害物の配置は覚えたよねー？」

クロードの言う障害物とは、積み重ねられている箱やケースの類だろう。

「まあ、それなりに」

対する彼女は曖昧に返事をする。

「この車両がダミーなのか当たりなのかどうかは分からないから、何とやらだけど…ま、ダミーだろうねえ。本当に傭兵くらいには、本物がどこにあるのか教えてくれればいいのにー」

青年は、レインに同意を求め

けれど当の少女は、険しい表情で腕組みをした。

今回の仕事は、現金がどの車両に分散して積まれているかは分からない。しかも、当所の貨物列車とも旅客列車とも取れない列車は車両が多く、全長もかなり長いだろう。ただ、もうほとんどの傭兵は前の車両に移動積みだ。

つまり後ろの半分に金品が積んであった場合、守る者が居ない。

――ばかばかしい。

「そこ。座って、敵さんが来るまで暫く待機かな？」

クロードが指差して指示した場所辺りに座り、向かい側、積み重ねられた箱類を盾にするように座り込む。そうしていると、前の車両の方でまた銃声が聞こえた。

対する一方でこんな所にいる自分達は、何かとんでもない勘違いをしているんじゃないかと思う。

今更、迷いが生じてきたレインに、クロードの声が聞こえた。

「…大丈夫だよ」

「その確信はどこから来るんだ？」

指摘に、赤髪の青年は笑みの色を濃くする。継いで、

「…敵が来てもレインさんはそこに居て。おれが撃たれたら構わず前の車両に逃げてもいい」

打って変わった青年の弱気な発言に、レインは少し幻滅した。

「つまり、ここで指咥えて、自分はクロードを見てればいいってこと？ …今から負ける気になってどうする？」

「それはもしもの話、おれはいつつも最悪の事態を想定してる。話し聞いてれば気が付くだろう？」

レインはさっきまでの、彼の口調が僅かに変わり始めていることに気が付く。

クロードは呼吸を整えるようにして、神経を集中させる。

「…レインさん、口と鼻それから目も全部布とかで覆って、あちら側の扉が開いても、おれが倒れるまでそこにいて」

落ち着いた様子でそういう終えると、すっと立ち上がり肩に掛けていた上着を脱いだ。

途端、けたたましい足音と共に後方にある扉が開く。

クロードはそれと同時に入ってきた複数の人達の足元に、球体の物体を投げつけた。小さく弾ける音がして、投げたそれから煙が巻き上がる。

レインは言われたとおりコートの袖で口と鼻を覆うように押し当て、ぎゅっと目と瞑る。真っ暗な上、煙が立ち込める車内で何が起きているのかは、よく分からなかった。

しかし、聴覚から分かることはある。

入ってきた男達は明らかに異常な状態から逃げようとしている。侵入者が異常に気がつき、逃走に走ろうと思った矢先。

自動で音がして侵入者の背後の扉が閉まった。電子音が何回か鳴って完全にロックする。

侵入者は扉を強く叩いて外に出ようとするが、防弾加工の施された扉はびくともしない。その上、男達は寄声を発したり咳き込んだりしながら、身体の異常を必死に訴えている。

錯乱した彼等は、敵味方構わずに銃口を向け、引き金を引く。

――身内で潰しあいか：

レインは周囲の様子を覗くことも出来ないが、音から感じれることだけでも、明らかに侵入者が混乱していることは手に取るように分かった。

――なるほど：さっきのスモークは有害ガスだろうな。

催涙：もしくはそれ以上の有毒、神経麻痺の効能か。

乾いた銃声が、何度も車両に木霊した。

今は、なるべく呼吸回数を少なくし身を小さくして、場を乗り切ることにできない。

するとレインの耳に、前方にいる男の叫び声ではなく落ち着いた機械的な声が聞こえてきた。

「…1、2…34…5…6…」

――冷淡な声。

クロードは箱の陰に隠れながら、延々と数字を呟いていた。片腕を突き出すようにして目の前の複数の人間、一人ずつに照準を合わせる。

数字は続き、一定のリズムを刻む。

数えが十に届くか否かの時、ぴたりと侵入者の苦痛の叫びが消えた。

暫くたって、平常なクロードの声が聞こえた。

「…レインさん！？ ちょっとそこの明かりつけてくれる？」

警戒しながら目を開けて、袖を顔から離し手のひらで空気をぱたぱたと仰いだ。

「…？ もう大丈夫？」

「うん、でもおれ、コケそうだから明かりつけて、そっちの近くにある筈」

——照明、スイッチって…

しかし、先ほど照明の機械端末はクロードがぶち切って、それきりだったような気がする。

レインは不平を言葉にした。

「自分で引きちぎったんだろう、どうしてくれんだ」

「…？ いや、非常用のあるでしょ。それにさっきおれが持ち出したのは出入り口のロックスイッチだよ？」

彼の言っていることがよく分からなかった。

取り敢えず言われた通り立ち上がって、壁を摩るようにしてスイッチを探す。すると、手の指先が凹凸に触れた。その凹んでいる部分に手を突っ込んで、小さいレバーのようなものを引く。

唐突に車内がぱっと明るくなり、レインは瞬きする。

反射的に振り向いて後方を見た。

——酷い有様だった。

後方の入り口の近くには5、6人の男が倒れている。倒れている者の中には、出血していて幾つかの銃傷がある者もいて、痛々しかった。

「仲間割れってヤツだね…右も左も分からなくなって、仲間同士で撃ち合っちゃって、なーんでこんなヤツが銃握ってるのがおかしく謎だよ」

クロードはそう言って後方に歩み寄り、倒れている内の一人の頭を足のつま先で蹴った。軽い言い回しとは打って変わった、激しい蹴り方だ。

彼の言い方にレインは違和感を覚える。

「…銃傷はお前が撃ったんじゃない？」

——対して、笑い飛ばすようにクロードは短く応える。

「おれは銃が嫌いなんだよね」

レインはクロードに歩み寄り、気がついた。

彼は先ほどまでしていなかったゴーグルに似た物を額に上げて、布をで顔の下半分を隠していた。おそらく、それで噴煙の害から目を防いでいたのだろう。そして何より目を引いたのは、

「んあ…コレ？　だから言っただろー、遠距離でも近距離でもないってさ」

指先し、クロードは片腕を少し上げた。

——『クロスボウ十字弓』

レインは写真の中でしかこの武器を見たことがない。

主に狩猟や競技に使われた、中距離射程を主とするの武器だ。柄を手で持ってもう片手で直接弦を引くか、ギアなどの補助具などを使って小さい矢を放つ得物。現代となっては、銃に切り替わっている古風武器。無音であることから、愛用している武力勢力もあるが、大抵は高価な銃に手が届かないが故の結果論だ。

つまり、現代社会で弓を利用するものはごく少数派。

成る程。これを隠すためにわざと上着を肩に掛けていたらしい。そういえばさっき腕を掴まれたときも、片手は上着から隠れて死角だった気がする。

相乗して、倒れている侵入者を見る。

彼らの身体には、矢にしては短すぎ、針にしては太すぎる金属の棒が刺さっていた。ただしそれらは急所に刺されているわけでもなく、深く食い込んでいるようにも見えなかった。

——致命傷を、避けた…？

「これ、あんたが…？」

「ああ、ちょっと撃ったよ。大丈夫、きんしかん筋弛緩剤…眠り薬っていった方が分かりやすいか、それを入れさせてもらった」

クロードはゴーグルを首に掛けて、顔を覆っていた布を外す。

クロスボウの矢代わりの金属の棒。薬剤か何かでも仕込んであったのかもしれない。

赤毛の青年は造作なくぐると辺りを見渡すと、車内の片隅の非常用である梯子用はしこのロープで倒れている侵入者の手首を拘束した。

レインも近くに落ちていた拳銃を全て広い集めて、倒れている全員の服を調べてみる。

暗がりでは先程はよく分からなかったが、今見ると顔を布で覆ったり、中には目出し帽を被っている者も居て、服装だけ見れば紛争地帯のテロリストだ。

ともかく、現時点でこの6人だけ捕らえた。

「だけど楽観視できない」

端から、こんなにあっさり今回の任務が終わるとは思っていない。

「やっぱりそう思うー？ まだまだこいつ等以外にもいるよね、きっと：他の奴等、二軍もここに向かっているかもしれないし」

言って、手を払って、近くに落ちていた厚手の上着をひよいと持ち上げる。

——そう。まだまだ油断はできないのだから。

レインは拾い集めた拳銃の半分を、コートの裏ポケット等に分けて二挺だけ入れるが、かさ張るので残ったものは積み重ねられた箱の山のでっぺんに積んでおいた。

——無事帰れたら、李清にでも解体させよう。

それまでに使う可能性も無きにしも非^{あら}ずだが。

振り向きざまレインは問う。

「：今、何時？」

「さあ：時計は持たない主義なんだよね」

クロードはどこへ行くつもりなのか、すたすと迷いない足取りで自分達が入って来た側の下方へと車内を逆戻りする。

「もう一時間はたったけど、あと半分……て、おい」

「じゃ。まかせたよ、今度はレインさんの番だ」

彼はさっきまで、レインに居ると指示した位置へ移動してその場に座り込んだ。

意味が分からない。

——ほっぽり投げるってか：

もしかしてもう自分の仕事は終わった、と割り切ったのか。

「……6…5……4…、3」

耳朶に小さな声音が聞こえてきた。

青年が呟く、カウントダウン。

——待てよ……

嫌な予感と共にレインは黒髪をひるがえ翻し、後方の扉を振り返ると、足音が扉の向こう側から聞こえてくる。

人数はさっきよりは少なそうだ。

咄嗟に扉のすぐ横に身体をつける。

——冗談じゃない。

口に出そうとして、止めた。

反射的に息を殺す。

——出来るか？

レインは自分の鼓動が高まるのを感じた。

——………2、1…

扉が開くのと同時に、レインは横に跳んだ。

わざと自分から敵の視界に入って行ったのだ。

すぐさま床に寝かせられている、先程の侵入者の男達の中心部に移動した。

まさに一瞬のことで、入ってきた男達はいきなりすることに驚きながらも、敵と見なした黒い少女に銃口を向け、発砲しようとした。

…が、それは出来なかった。

床には先程の男たちが手足を拘束されて、転がっている。

レインは前に倒れている内の一人を襟首を掴み持ち上げる。そして、思い切り入り口付近の男達の中心に投げつけた。

大人の男一人を勢いよく投げつけられた一番先頭の侵入者は、銃を両手で構えている為、元身内の巨体を避けることも受け止めることも出来ない。

満足な受身も取れずに、床に背中から思い切り倒れこんだ。

彼の背後の者達も数人が体勢を崩して動揺する。レインはそれを見逃さない。

狭い入り口付近をするりと抜け、集団の一番後ろへと二歩で回る。腰の剣帯から、刀を鞘ごと抜き取った。

一番後ろの体勢を持ち直そうとしている男の首に、軌道に乗せて思い切り殴る。

それだけで目の前の人物がぐらりと崩れ落ちたのを視認しないまま、今度は横に跳ぶ。

いい加減、体勢を持ち直した一人がこちらに銃口を向けるのと同時にそいつの懐に入り込み、腹のあたりを横真っ直ぐに一刀する。勢いよく腹を押さえて倒れこんだそいつの、拳銃を掴んでいる方の手を足の爪先で蹴る。

衝撃で拳銃が手から滑り、遠くへ飛んだ。

――あと、二人。

ただし件の二人は、先刻投げつけた同胞を振り払ったばかりだ。レインは中腰で立ち上がりとうとしている相手の手首に、刀の黒鞘の先を勢いよく突き刺した。拳銃を同じ容量で蹴り上げると、集団の誰の手にも届かない遠くへ飛ばす。

もう一人は銃口をこちらに向けている。

しかし、完全に座り込んでいて弾を避けるのは容易く、体勢を低くして避けながら背後に回り、背中を斜めに殴り倒した。

同じく、もう力の抜け切っていた対象の手から、レインは拳銃を奪い取って遠くへ滑らすように投げた。

拳銃を取り損ねたもう一人の回収し、そこで辺りを見渡す。

――侵入者、四人全員。

例外なく倒れこんでいて、気を失っていたり、身体をひん曲げて痛みにもがいている様子だ。

「――クロード、縛るもの」

反対の前方の扉の方へ呼びかける。

「お疲れ、さっすがだねー、おれみたいに変な小細工もナシに拳銃持ってる男4人相手にさあ」

ひょっこりと箱の陰から現れた青年は、縄をレインの方へ投げた。

受け取って一人ずつ、手首を拘束していく。

四人全員絞め終わったところで、息をついた。

半顔に掛かっている長髪を除けて、少女はクロードの方へ向き直る。

「あの時、敵足が迫っていることを知っていただろう。お前：わざと自分を試したな？」

地が出たレインの問いかけにも、彼はにっこりと笑っている。

「ふふっ、だって、それでやられても自業自得でしょ」

へらへらと言ったのけたそいつに、カチンときた。

——：自業自得？

遊びじゃないんだぞと怒鳴りたくなる。

怒りが沸点に達しそうになったが：悔しいことに、よく考えてみれば言う通りだ。

「はあ……」

溜息を一つ吐く。

「まあ、詮無いことだな」

でしょー、と言ってそいつはにやりと笑った。どこまでも変な奴だが、彼女の嫌いな人種ではない。——無論、好きでもないが。

：要するに、どうでもいいってことか。

投げやりに思考を放棄する。

——と、クロードは明後日の方向を見、腰に手を当てながら、車内の天井を見つめた。

「んー、そろそろかなあ？」

「：何のこと？」

「迎えが来るかなあってさ」

「：迎え……？」

レインは、怪訝そうな顔をする。

また彼が幸先の悪いことを言い出すんじゃないかと、かなり不安になった。

「ほら聞こえるだろ？」

「……………」

クロードは耳を澄ますように上を向いて、瞳を閉じた。

不審に思いながらも同じように耳を澄ます。

鼓膜に届く音は虫の羽音のような

——いや……

「へり……か何か？」

「お別れの時間が迫ってきたねー、いやはや楽しかったよ」

言いながらも後方の出口にクロードは向かう。

こちらは意味が分からない。

「…は？　ちょっと待て。どこ行くつもりだ？」

仕方なく後についていく。

「行くアテなんて特にないよ？　ただ報告しなきゃねー」

自動で扉が開いて道が開ける。

歩いていた矢先、ガコンと車体が揺れた。耳をつんざくブレーキ

音が響き渡る。咄嗟に壁に手を掛けて体勢を保つ。

「…着いた様だね……」

「え？　…でもまだ……」

目的地にはまだ裕に時間があるはずだ。

——もしかして緊急停止だろうか？

その間にもバラバラとプロペラの音はぐんぐん近づいてきて、す

ぐ傍まで来ていることが分かる。

一個後ろの車両に移動してみると、外とを繋ぐ出入り口が開いていた。

「……まさかもう目的駅に着いた？」

「んなワケないだろー、外見てみなって」

言われたとおり、レインは開け放たれた扉から外を覗く。

町並みが少し遠くに見える。仰げば青い空。周りはコンクリートの壁が身長くらいあって、下の様子は分らない。

「ここ。橋の上だよ。はい、出てねー」

指示通りすくと段差を降りて地面を踏み、クロードもそれに

続いた。

何気なしにコンクリートの壁の近くまで行って、背伸びして眼下のようすを確認する。

確かに、袂たもとには水面が見える。現在地は青年の行ったとおり橋の上のようだ。線路が複数連なり、ここが横幅の大きい橋であることが理解できる。

横合いを見ると、列車から距離を置いてヘリコプターが止まっていた。

真っ黒く塗装された武装ヘリから、重装備をした複数の人々が降りてくる。

「あれ…、軍警察？」

「そ、自覚ないけどおれの部下にあたるなあ」

「……、……は？」

——今、何て……？

軍警兵の者達は、こちらに向かって素早く走り寄ってきた。

無駄のない動きでレインたちの目の前に整列し、敬礼する。

少女は平静を装いながら、たじろぐ。

何事だろうか。

「特務、お疲れ様です。特務隊長グレイシヴ様の命により総本部までお送りします」

——特務…？ 特殊任務か？

黒髪影のいぶかしみも他所に、彼らは会話する。

「えー、あいつの命令かよー…本部嫌いなものになあー、黴臭いし」
クロードと軍警の警兵との会話のやり取りを聞いて、益々意味が分からなくなった。

——軍警兵にこんなにも軽口を叩いている…？

「一体…何者？」

疑わしげに問いかける。

「あ、そーそー、悪いんだけど、この物騒なお嬢さんをお送りして貰っていいかな？ 世話になったんだ。あいつの顔見知りみたい

だし」

「はっ、責任を持ってお送りいたします！」

——無視かよ……

レインは内心毒づく。

「犯行グループは？」

「中、出会った分だけ縛つといた。それから残りの傭兵は、前の車両に閉じ込められてると思うから丁重に助けてあげて」

「了承致しました！ A班前方車両を、B班この入り口から中へ、どちらも気を抜くな！」

指示されて、後ろに控えていた警兵は素早く二手に分かれ、列車を取り囲んだ。

明らかに青年より年上だろう警兵は、何故か彼に対し敬語を使っていた。しかも、当の本人は多少言葉遣いが丁寧になったものの、雰囲気的には今迄どおりの態度で接している。

もしかして、——もしかするとだが。

クロードは軍警に所属し、だいぶ上部の地位に当たるのだろうか。

「さあて、レインさん。ここでお別れだねえ」

彼は会話を終えると、レインの方へと向き直る。

相手は美麗な柳眉を僅かに逆立てた。

「：こっちは全然納得出来てないんだけど？」

「あはは、勘弁してよー、企業秘密だってー」

彼は少し真剣な顔になって告げる。

「いや：手荒なこといろいろして悪かったね。事情説明もろくにしないでさ」

僅かに申し訳のなさが混ざった、複雑な表情。

——こんな顔もできたのか。

口元を浅く曲げる。

「自覚あったんだ：へえ」

「うっ、そりゃあ、もう：ていうか、そんなにずっぱり言わないでよレインさん……」

無視して問いかける。

「……本当に。一体何者なんだ？」

答えてくれないのを承知で聞いた。

——…けれど。

赤髪の青年は僅かに口端を吊り上げて、告げた。

「軍警察特務班クロード・リヴァ・キアヴェンス…良かったら覚え」といって」

軍警察特務班という言葉は初めて聞く言葉だった。軍警察の、特殊任務班員なのだろうか。

——称号持ち…将校か。

レインは眉を更に顰めて思案する。

しかし彼女が驚いたのは、目の前の人物が今日、やっと信頼できそうなことを話したことだ。

「ふーん…分かった。信用して覚えておいてやる」

レインは悠然と笑う。

それを見た青年も、応じるように目を細めた。

「そりゃあどうも。縁が続けばまた今度会おうな。あ、そうそう、ユウによろしくな」

「…？ 何か言ったか？」

聞き間違いかと思いついたが、声は届かなかったようだ。

ひらひらと手を振って、後方の軍用ヘリの方へと青年は去っていく。

もう行ってしまった。まるで台風一過だ。

——勝手な奴。

呆れたように心中で呟いた声音は、どこか楽しげになってしまった。

——さて、帰るか

と、思いかけて、…重要なことに気がついた。

——足がない。

どうしようか。

まだ都市から出てない分には、駅まで行って、電車で李清の家の最寄り駅で降りれば良い。けれど、駅まではさして距離がないにしろ、自分に帰れるだけの有り金はない。まだ都内だが、家の最寄り駅までとなると交通費も馬鹿に出来ないのだ。

そもそも、今居るのは線路の上だ。人が歩く道とは到底言えないだろう。

——あいつ、とんでもない迷惑ごとを押し付けていきやがった…！

脳裏に、楽しそうに笑う赤髪の青年が思い浮かんだ。それがまた悔しい。

橋の上でこれからどうしようかと本気で迷う。

「あの…」

「え？」

先程からそこに待機していた警兵に声を掛けられた。

「…これをどうぞ。駅からの切符です」

男の手には、小さなカード。

言葉通り、都系列の電車の切符だ。

「え…？」

つい、鸚鵡わづむのように、繰言を言う。

どうやら近場の駅からは、定期で電車に乗れるということらしい。完全なご都合主義にも取れるが、土地勘のないこちらは心底助かった。

クロードに感謝しつつ、言葉に甘えることにした。

車窓には、中庸建築物の町並みが透けて見える。

モノレールの列車の揺れが激しい。

その所為か、酷く変な気分になりながら、今日会った青年のことを考えてみる。

変人だったけれど、頭の切れ方は秀出していた。

言うなれば、もう二度と遭いたくなくて、一回くらいは逢いた

いと思うような奴だろう。

「こっちだって仕事とかあんだよ。アスハみたいにな自由業ないんだから。少しはこっちのことも考えてから物言えよ！」

語尾を強く、けれど素早い反論。

対する反論も怒声混じりに

『ハア？ 自由業つっても仕事の質は変わんねーよ！ 舐めんなっつーの。…そもそも、ユカリにも俺にも連絡しないってどんだけ忙しいんだよっ』

——いや…何というか。

そこを突かれると痛い。

正直なところ、連絡なんてすっかり忘れていた。

レインは僅かに表情が引き攣るのを感じ

『ユカリがおねーちゃん恋しさに非行に走ったら、お前責任取れんのかよっ！？』

「知らないよ！ ていうか知るかよっ！ ねえーちゃん呼ぶなよ気持ち悪い！」

一気に喋って息が上がった。

レインは柄にもなく取り乱したことに少し後悔する。

「……」

会話が途切れた。

——と。電話越しに高い声音が聞こえてくる。

がこんと音がする。続いて、何かがぶつかるような音と、聞き覚えのありすぎる悲痛な叫びが…

打って変わり、電話口から聞こえてきたのは少女の甘ったるい声音だった。

『…おにーちゃんっ！ 代わってよ、この独占欲者！ …あ、もしもし？ おねいちゃん？ おねいちゃんだよね！？』

——今、叫び声が聞こえたような…

レインは小さく咳払いをして、受話器を持ち直す。

「ユカリ、お姉ちゃん連呼するの止めないと今すぐ帰って、お前の持ってるスタンガン全部廃棄処分しますよー。それから…さっきア

スハの断末魔が聞こえたのは気のせいかな？」

『ち：違うのおねいちゃん！ アス兄が電話占領してて、それで私ムカつときて、足刀横蹴りしたら気絶しただけなのっ！』

——へえー。なるほどね。物凄くどうでもいい。

この展開は数度目のデジャヴ。

レインは電話を持つ手を変え、ユカリと呼んだ相手に指示した。

「とりあえず脈取りなさい、脈、：なかったら旅行鞆にでも詰めておけば？」

『無理だよー、こんのヘタレおにいちゃん、私が触ったらきつとシヨックで蘇生するよー：』

「アスハ。まだ女性恐怖症治ってなかったの？　：ホントにヘタレだな」

『：カリ：イ：！』

亡者じみた声が受話器を通して聞こえてくる。

どうやらアスハが蘇生したようだ。

『：……どう？　最後に言い残すことは？』

電話回線越しのユカリがアスハに問う。

『ユカリ：お前、また足のサイズでかくな：ごふッ：！』

：黙祷。ご愁傷様。享年19歳とは、まだ若いのに気の毒なものだ。どうやら彼は、触らぬ神に祟りなしという言葉を知らなかったらしい。

『ねえ、おねいちゃん、そっちの生活はどう？　ご飯ちゃんと食べてる？　：あ、でも太っても駄目だよ？　髪はちゃんと伸ばしてね、折角綺麗なんだから。それからね、変な男に声掛けられても無視だよ！　そしてミドルキックだよ！　それからね暗い夜道は気をつけてね。おねいちゃんの貞操が奪われたら私、もう相手の男殺っちゃうもん！　犯罪者になっちゃう！！　えーつとね。それからね……』

受話器を持つ手に青筋が立ちかける。

「ユカリ、今度帰ったときにお前の部屋燃やす」

レインの氷の声にも、ユカリは笑みの声で応じる。

『大丈夫！　もしそうになったら私、おねえちゃんの部屋と共用にするからッ！』

「……………うっ」

痛いところを局地的に刺突された感触。

——それだけは勘弁して欲しいなあ：

レインは久方ぶりに信じてもない神に祈りたくなった。

無神論者を気取るつもりはないが、神だの幽霊だのを信じたことはない。一番怖いのは生きている人間…というありきたりな台詞が心根に染み着いているのだから、仕方ない。

一通り会話が進むと、急に静かになる。

先程の青年の時と同じ。沈黙とは、ほとんどの場合が気まずい。

『…ねえ、今度はいつ帰ってくるの？』

電話口の少女はいきなり物静かな口調になる。

レインは瞳を伏せ、鷹揚に告げた。

「……………分からない」

『もう三人で暮らせないの？　お父さんが居なくても私達だけで…』

…

「……………」

この「お父さん」という単語は、レインの胸に疼痛を生む。

——避けてきた概念だから、当然か。

内心の動揺を勘づかれないように息を軽く吐いて、電話機をじっと見つめる。

「ユカリ、自分はね、怖いんだよ。目的を失うことが。そんな臆病者はお前を守ってやれないだろ？　いつか必ず帰るから。……………ごめん」

電話口の彼女が息を呑んだのが伝わってきた。

けれど、応えは明るい声音で

『…いいもん。おねえちゃんが僻ひがむくらいに料理上手くなって、それにもっと強くなってやるんだから。そんな時になって、お嫁にして

なんて言っても聞かないんだから』

「まあ。料理の黒コゲからまず脱出しような？」

『っだあああああいじわる————！！』

耳に響く絶叫に、片耳を掌で塞ぎながら苦笑。

——変わらないな。：変わるはずもないか。

笑って、そのまま受話器を置いて電話を切った。

「ごめんな」

我ながらそっけないなと自覚している。

けれど中途半端くらいで切っておかないと、何かを壊してしまう気がして。

元気でいるなら、それでいい。：それでいいだなんて、無責任な言葉かも知れないけれど。

電話機に背を向けて肩を回す。

これで当分は彼らと連絡を取ることも、声を聞くこともあるまい。

「……………」

——やること：ないし、寝るか。

当然、早すぎる時刻だが、このままダラダラ過ごすのもなんとやらだ。

倦怠感溢れる計画を彼女が考えていると、不意に階段の方から足音が聞こえてきた。

「レインー、レーイーンー、ちょっとーいるー？」

無論、家主の李清の声だ。

「はいはい：今度は何ですか？　っと」

階段の踊り場から李清はレインを見上げる。満面の笑みで。

レインは何故か、暫時ものすごい寒気がした。

：野生のカンというのも偶には当たるらしい。

「李清さんー？　ちょっとなんでどうして一体、自分がここに
いるのかなー…？」

レインは明らかに不機嫌な顔をしていた。

店内は明るく煌びやか。

——ああ、なるほど。クリスマスが近いから…
そんなことはどうでもいい。

「まあ、荷物持ち係？　ほら、よくあるシチュエーションじゃ
ない」

「あははははははは…残念ながら不勉強なもので…」

——何が「じゃない」、なんだ。

同意を求めるな。

李清はレインに買い物するからついて来いと命令した。

ここまでは百歩譲って許してやろうと思う。

——けど……！

「なんで、自分が婦人服店の中まで入る必要があるんだよっ！」

「え？　だってレイン見た目綺麗な女の子だし」

客観的に見るならば李清の言い分はおかしい箇所など一つもない。

レインは少女だ。年若く、人間離れした美貌を持つ普通の少女だ。

「あのなあ、こっちは何も女の服に興味ないっ…！」

「これ持ってて、全部」

反論しようとした所で大量の服を持たされる。

李清はこうなると聞く耳持たずだ。

仕方なく、店内の開いてる棚の上に洗濯物の如くどさっと置く。

髪を後ろに流して、店内を見渡した。

場所は街の表通りの一角にある、某ブランド店。

ショーウィンドウから中をちらっと覗いたことがある以外は、全く知らないし、入ったこともなかった。至って普通の服屋であり、下着を取り扱っていない店だったのは多分、李清の最大限の配慮なのだろう。：そう思いたい。

——気持ち悪い。

何で自分がこんな所に、場違いな所に同行させられなければいけないのか。

仕様がなかったので待っている間、店内を見渡したり、飾ってあるアクセサリーを意味も無く手にとてみたりした。

まるで『冷やかしじゃないですよ』とアピールしているようだ。店員や買い物が、こちらを窺っているような気がしてならないのだが、悪意のない視線に気がつかないふりで精一杯。

たわいもないことをしている内に、李清がやっと戻ってきた。

——やっと帰れる……

と彼女が思った矢先。

李清は、片手を挙げて。

「あ、すみませーん、店員さん、この子に似合う服を繕ってもらえますかー？」

李清は真っ直ぐにレインを指差す。

「……………は？」

小走りに女の店員さんがこちらに向かってくる。

貼り付けたような営業笑顔は、こんなにも怖いものだっただろうか。

——いや。来ないで下さい、

ほんと何でもないです。何でもないですから……

どうしてこうなったのか。

レインの頭の中は驚くくらいにそれだけだった。

李清監修の元、何故か彼女は着替えさせられた。

ここは二階に大きな試着室と、特注品等オーダーメイドの服を置く為だけの部屋があり、通される。店員さんが居る手前、李清と腕っぷしで喧嘩もできない。

だから、李清が店員さんと何か恐ろしいことを相談しながら服を選んでいるとき、レインは箱の中の猫状態だった。暫く経って、その服と共に試着室に押し込められる。

酷い扱いだ。

大丈夫、絶対に似合うから。…そう言われて。

——絶対にそういう問題じゃない。

人権を主張したい。…それに。

「この服……」

——礼装のスーツ、だよな……

下はズボンとはいえ、女物だ。黒の上質なデザインは高級そうな印象を与える。

あの大家は自分を着せ替え人形か何かと、勘違いしてはいないだろうか。

それにしても、何故スーツなのだろうか。

先にいろいろと尋問したいのも、今となっては後の祭りだ。

完全な女物の服じゃないだけ、マシと考えた方がいいのか。

顔を顰めたまま、ハンガーに掛けられたそれをじっと見つめる。

李清はレインが細身だから、女物がいいと思ったのだろうか。普段は髪を伸ばしていること以外、性質は至ってなのだが。

それは、自覚している部分も有る。

あまり声も太くない。どちらかという細身。髪はストレートで長い。身長は平均より低い。

結果、導き出される答えは簡単なモノなのだが、受け取り方にもよる。

——認めたく、ないのかな……

「…あれ？ 何か切ない」

いけないと思う。自暴自棄な上、自虐的になってきた。

——嫌だなあ：

でもこれ着ないと帰れないんじゃないかなあ……

正直もう、どうでもいいと感じた。帰って安らかに寝入りたい。ここで捨てるプライドなんてとっくに喪失した。…というのが、大儀だ。

しょうがないので着ている服を脱いで、着替えた。

シャツとズボンを先に着て、それからワイシャツの上に上着を羽織る。

衣擦れの音と共に、ネクタイを擦る。

試しに着るように命じられた服の姿で、鏡の前に立った。

そのままレインは、首筋に違和感を感じながらも、鏡をじっと見つめる。

シンプルなデザインの落ち着いた黒色のスーツだ。それを着ているのは黒髪を腰あたりまで伸ばした人物。首元は髪で隠れてあまり見えない。

映っているのは紛れもなく自分……なのに。

——鏡なんて、まともに見たの、何時いつぶりだろうか。

…ああ、こうして見ると、やっぱり姉さんにそっくりだ。：

当然だけど。

姉さんが今の自分の姿を見たら、何て言うだろうか。

お姉さん譲り、親譲り、なんてありきたりな褒め言葉は、当ても今も痛いだけだ。

レインの場合は二重の意味で、笑えない。

髪を切れないのは、下らない因縁に縛られているからなんだと思う。

——いや、下らない…ことはないか。

彼女にとっては大切なことだ。

仕切りのカーテンを摘むように押しのけて、李清が顔を出す。

「おー、やっぱり似合ってるじゃないのー。私の鑑識眼は誠だっ

たわ。レインにはシンプルな服がよく似合うと思ってたの。あー、でも。いっつも黒い服ばかり着てちゃダメよ？」

——李清、…何も言わずに他人の着替え中に顔を出すのはどうかと思う。

本音の一言をぐっと堪える。代わりに

「…、思ってたよりは、まだマシだった」

「そうかそうか。それは良かったちゃんと着てくれたレインは褒めてしんぜよー」

彼女は笑ってから、付け足した。

「靴も、服に合わせて用意しておくわね」

レインの首をちらりと見て、足元に視線を落としてから、ふいに李清が言った。

周りに話し声が聞こえないところから、今は店員さんに引き下がって貰っているようだ。

「靴まで新調するのか？」

「だってそれだけちよっと味気ないし、合わせたいんだけど」

余計だったかしら？ と掌を頬に当てる李清。

「…了解。どうせ良い靴なんて持ってないんだ」

「ま、そのくらいわね。奢りましょう。その洋服代も。ちよっとしたプレゼントだと思って頂戴」

プレゼントなら、もっと役に立つものが良かった、とは口が裂けても言わない。

——さて、そろそろ本題に入ろうか。

レインは切り出した。

「なあ…李清、何で自分にスーツ着せるんだ？ ちよっとしたご乱心？」

「っんなワケないでしょー、私ねえ今度、お偉いさんの結婚式に招待されたんだけど、どうやらあちらさんにこっちの素性が疑われているみたいなのよねえ。潜入調査っていう名目だからレインは私のボディガード役で一諸に来て欲しいのよ。それから、ちよっと調

べたいこともあるしね。…あ、勿論、報酬によっては今月の家賃を軽くするわ」

家賃軽額。

即物的で甘い誘出にレインはむっ、と息が詰まる。

——こいつ、先月と今月、出費が多くて家賃支払い渋ってること分かって言ってるよ。

大家として当然だが。それを条件に出すとはとんだ女狐だ。

「結婚式で、自分は一回も出たことないぞ、そんなの。護衛とはいえ、あんまりあっぱろげのは経験ないから、要領分らないし。いろいろ…難しいことはさっぱりだしさ」

レインの言うことだって尤^{もつと}なものだ。

生まれてこの方、冠婚葬祭なんて出たことも無い。

もしくは、記憶にないほどの幼い時にあったかも知れないが、忘却しては同じことだ。

来賓としての出席でもない、誰かの護衛のついでも同じである。

「大丈夫。正式には結婚式に出席するのは私だけ。レインはその後の祝賀会、披露宴よりは社交的だけど、分りやすく言う二次会みたいなものの護衛を頼むから、雰囲気的には社交界みたいな物だと思って頂戴。大丈夫、人も多いし、他の賓客の護衛だって沢山居るもの。紛れ込めば分かんないって」

社交界という偉く優雅な響きに、少女は眉根を寄せる。

——…あ、そっかお偉いさんの結婚式なんだっけ。

だったら豪華になるのも頷ける。

けれど、そもそもレインは中東人の上に未成年だ。

「未成年の子供が行ってもいいのかよ？ それに中東人だぞ？」

「ん？ ああ、いいのよそれは。あっちではおそらくレインが最年少でしょうけど。少し目立ってもらった方がこっちとしては嬉しいのよ」

——目立ってどういう意味だ。

やっぱり黒髪黒瞳だからだろうか。

「あーもー分ったよ。行ってやるさ。でもその替わりに高くつくよ」

「了解。こうなったら私も大家さんですしー、先月、今月の家賃はチャラにしてあげるわ」

「チャラって…もしかしてタダってこと!？」

李清はただでさえ豊満な胸を張って、首を縦に振る。

まさかそこまでまけてもらえるとは思っていなかったので、本気で頑張る必要があるそうだ。

少しはこっちのことも配慮に入れてくれたようで嬉しい。

一方、少し堅苦しい首元を鬱陶しがりながら、最後の質問を試みる。

「知り合い、いないかな…」

「…、…………たぶんね」

妙な間。

「なんだよ、その間は。一気にやる気がなくなってきた」

「大丈夫よ、たとえスーツ着をいても、レインはどっからどう見ても綺麗な女の子だから」

——褒めていない。

家賃が懸かってなかったらこんなことしないのに。

少しはこっちの今の傷心を理解してくれ。

「そーいや、その披露宴でいつだ？」

「明後日」

問いかけるレインに李清は最後、とどめの釘を刺した。

——やっぱり冷酷女だ。

11 別（上）

夜。タクシーの中。

レインは首が拉げるんじゃないかというほど俯いて、断罪の時を待っていた。

しかしながら、別に罪の意識なんてものは欠片もなかったのだが。

「着いたわよー？ あなの？ もしもしーレインさん？ これ言うの十回目なんだけど」

李清リケイの困った風な声が聞こえる。

「……ああ聞こえてるよ……聞こえますとも！」

「だったらタクシーに籠もってないで出てきて頂戴。運転手さんだって仕事中的なのよ？」

「こんなに人多いなんて聞いてない。心の準備が……」

「だって、それ言ったらレイン着いて来ないでしょ？ らしくないわねー」

李清はさりとて言う。あっさりとした一言に内心、苛立つのを必死で隠す。

——駄目だ。これはきつと超えなければいけない試練なんだ。

そう思ってもやらなければ。もう、引き受けた仕事だ。

それを途中で投げ出すのは良くない。非常に。

——……でも、ほんと、すごい規模だなあ。

時刻は夜。貸切のホールは内からの灯りで煌々と照らし出されて、闇夜に浮き彫りにされたよう。辺りの庭園や、ホールの施設全体を併せれば、街の一区画はありそうという壮大さだった。

普段はオペラハウスや、劇場、催し物の会場として使われている。明らかに、富裕層向けの施設だ。つくづく、金持ちのやること

は分からない。

更にレインを躊躇^{ためら}わせているのは、広大な敷地にばらばらと入っていく者たちだろう。

高そうなドレスを身に着けた婦人や、ブランド物であろうスーツを身に着けた紳士など、ざらではない。その者たちの後ろには、ボディガードらしき遅^{たぐま}しい男の姿も見られる。

——浮いてるよな。

華奢で小柄で、しかも見目が顕著な中東人の自分が居ていいものか。ちよつかいを掛けられるかもしれない。

レインは、溜息を押し留めて、車から降りる。

あまり履いたことのない革靴が、少し煩わしい。

彼女は向き直って開口する。

「李清、あのさ、さっきから思ってたんだが、その服」

「なによ。私の民族の伝統衣装よ。文句あるの？」

——文句っていうか：目立つんだよなあ。

諦めて車から降りる。

李清は、チャイナドレスというのだろうか。近いけれどちよつと違う服を着ていた。えらく身体ラインが出る服だ。豊満な体つきを強調しているように見える。髪もいつものゆったりと結んでいるのではなく、きちんとアップにして整えてある。

ピンヒールの靴を履きこなして凜と歩く姿勢は、そりゃあ見惚れるし、腰が引けないのは日々の鍛錬の賜物なんだとは思うけど。「しょうがないでしょーに。こっちはアジア系人ってことになってるしね」

対するレインは、一言。

「——偏見」

そうとだけ言った。一言の単語に含まれる意味は、彼女も承知の上だろう。

「大丈夫だって、これでも李清さんは顔が広いのよ。中東人だからって差別する奴は返り討ちにしてあげちゃうわ」

ニヤリと笑って、こちらを一瞥してくる。

認めたくはないが、李清が言うとなればそうなのだろう。

：彼女は嘘をつかないから。

「愚痴ってもしようがないでしょ？」

「そうだな。腹を括るよ。：らしくね」

李清は彼のそんな一言に笑顔を見せる。

「そうこなくっちゃ。：急ぎましょ、挨拶もあるんだから」
言って、足早に会場へと急いだ。

外から会場を見た時も凄かったが、中は想像以上だった。
規模も、会場も、人の数も。

——眩しくて目が潰れそうだ……

確かに李清が社交界と揶揄したのも頷ける。会場はダンスホール並に広がった。

紳士・淑女という言葉を体現している来訪者たち。

自分は目立つどころか地味な部類に入るだろう。

むしろ、警護なのだから人目につかない位が丁度良いのだが。

入り口の影からこそそと覗き込む。

「あの中に入るのかよ：別世界へようこそ状態？」

「いいじゃない。レインは隅っこで私の様子見てればいいわけだし。そもそも、別に見てなくても良いんだけど。：ま、レインはドレス着せて私の娘ですって言いたかったんだけどねー。折角の美人なのに残念だわ」

きつと上目に睨む。

李清は赤面するようなことを堂々と言う。恥ずかしい。

そもそも、美人なのは李清の方だろう。——無論、黙ってればだけど。

「それより、もう一つの仕事の方が先決。よろしくね」

「所定の時間に所定の場所に。：か？」

「そ。詳しくは話せないけど。きっかり頼んだわよ」

「了解」

李清は最後に満面の笑みを浮かべ、踵を返していった。

レインはホールの壁際に移動して、李清の様子を見やる。

同じく、ホールの壁際にはボディガードを生業にするであろう男たちが張り込んでいた。

こちらを、ちらちらと見てくる視線も感じられた。

もう、今となっては何かの（何かってなんだ）訓練だと思って、腹を括ろうという覚悟は決まっていた。

幸い富裕層向けな上に場違いな所で、知り合いに会うこともないだろう。会ったとしても、別段やましいことをしているわけではない。正式な依頼だ。問題ない。

レインはベルトに手挟んだ強化プラスチックの特殊警棒スタンドロッドをそつと確認する。

流石に居合い刀を持つてくることは叶わなかったが、これだけでも十分だ。

そもそも今回の任務は危険度が低い部類に入るのだから。

視線を、前に戻す。

一步、ホールへ踏み出した李清の顔つきが変わった。

ヒールを鳴らし、迷うことない堂々とした足取りは、周りの人の視線を釘付けにする。

――ほら見ろ。黒髪のアジア人だつてのでも目立つのに。

民族服は更に目立つ、顕著に洋風なこの場の流儀に合わない。

レイン内心毒づいた。

…と、ざわざわと話し声が聞こえてきた。

「……？」

会場のざわめきは大きくなっていく。

そしてその理由がやっと分かった。

原因はやっぱり李清。

けれどそれは悪い意味や嘲笑のざわめきでなくて、明らかに気にしている。つまり興味を持たれているような。

理由は分かる。李清は美人だ。あの服だって、認めたくないが似合っている。

けれど、レインは違うな、と思った。

きつと人目を惹き付けている理由は見目だけじゃない。気品とか、在り方が違う。

同性でも溜息を洩らして見惚れてしまう。

——とんだ女傑がいたものだな。

レインは人目に触れないように俯いて苦笑した。

やがて李清は一人の男の前で立ち止る。白髪交じりの初老の男性。ダブルのスーツを着こなしている。傍目からも何やら、親しうに話していた。にこやかに丁寧な口調で喋る李清は、今までの印象とは打って変わっていた。まるで、理想の女性を象ったようなおしとやかさだ。

——詐欺だ。完璧な。

レインはふつと顔を背け、歩む。

始終見ていろうと言われたわけではない。寧ろ、もう一方が先決。言い訳のようだと自覚しながら、レインは会場の隅を歩んでいく。

李清から離れ、何処かにある筈のテラスを見渡し探す。

こんなに広いから、迷うのも致し方ないように思える。

レインはホールから離れ、豪華な細工の施された廊下を歩んでいた。

広い窓の造り、螺旋階段、手摺、扉、全てに至って芸術的に計算され尽くした空間を。

不意に、背後から知らない声がした。

「……何か探してるのか？」

ぶっきらぼうな声だった。

彼女が黒髪の尾を引き振り返ると、知らない男がいる。

人気がないとはいえ、廊下の壁に凭れて、煙草をふかしている。容姿は二十代前後に見える。何故か眉間に皺を寄せ、不機嫌そ

うな顔をしていた。

時と場合に合わない、不釣り合いな印象。けれど、この会に招待される位だから高い身分の人だろう。

レインは振り返り、折り目正しく告げる。

「あ、いえ、お心遣い感謝します…」

「今日は？」

壮年の男の端的な言葉に、一瞬言葉を詰まらす。

一目見れば、要人を警護する側の人間だと分かるだろうに。

「依頼主の護衛をしに。今は暇を貰っています」

レインは目が少し泳ぎ気味になりながらも、繕って告げる。
嫌な予感がした。

「ふうん。じゃ、今暇なんだ」

「あ…いえ、そういうわけでは…」

予感は的中し、嫌な流れになってきた。

——ああ、もう。

こんな所で絡まれるとは。

生憎、廊下に人通りはない。施設内に居る殆どの人間はホールに偏っている。

——視線が、痛い。

思わず、分かりやすい嘘が口から出る。

「えっと、…依頼主に呼ばれてるんです。それでは失礼致します」

「さっき暇を貰ったって言わなかった？」

無論。即席の場凌ぎにもならない嘘は通用しなかった。

本当に自分は嘘が苦手だと再認識させられる。

——うわ……

内心舌打ちをした。

面倒なことになった。本当に。こんな所で絡まれるのはまっぴら御免だ。

「お前、女の上、純潔の中東人だろう。何故ここに居る？」

男は言うど、すつと片手を上げ、レインの黒髪を指し示す。すくい上げた髪房はさらりと流れ、あまりに自然な動作に抵抗を忘れていた。

「それは…」

「物事の実質を知らず、危険を冒す莫迦なら、こんな仕事さつさと降りろ。…なあ、フロイライン」

「……っ！」

レインは刹那——男の手を弾く。

「お前には関係ないっ！」

思わず、怒鳴っていた。

——構うものか。

「人の事情に土足で足を突っ込む奴こそ、愚か者と言われるんだ。あんたにそんなことを言われる筋合いはない！」

レインは言い放つと、毅然として眼前の人物を睨んだ。

男はというと、僅かに感嘆の表情を浮かべた。口笛でも吹きそうな。

からかいの混ざった表情に、激情が再沸しそうになる。

だがそこに、第三者の声が聞こえた。

「——わきまえて下さい。ここが何処か」

何時からそこに居たのだろう。

レインの背後には、軍警察の制服に軍帽を目深に被った男が立っていた。

——……？

違和感を感じた。

聞き覚えのある声。

——確か……。

乱入してきた男がこちらを振り向く。つばのある帽子を被っていて表情は読めない。けれど。

「御案内致します」

彼は少し帽子を上げて目配せをする。

もしかして、と思った。

「…あ、はい…」

先程までレインをかどわかしていた男は、無言でその二つの背を見送る。追っては来ない。

レインは言われるままに、男の歩む方へ着いていく。
暫く歩いて、まだ人気のあるサブホールまで出た。

「あ、あの時の…」

レインが喋ろうとすると、彼は振り向き、口到人差し指を当てて制した。

なるべく人目につかないように、壁伝いに移動して、テラスへと出る。

きよろきよろと辺りを見渡して人目がないことを確認してから、彼は帽子を脱いだ。

「やあ、久しぶりだね。レインさん？」

「やっぱり…」

——見間違えるものか。

薄い緑の瞳に赤髪、足の長いすらりとした長身。

それは、昨日の今日、依頼で共に行動したクロードだった。

11 別(中)

いぶかしみからの沈黙から解放され、美貌の少女は呟いた。

「クロード、だったよね？」

念を押し、件の人物の名前を呼ぶ。

「そう。二日ぶりかな？　こんなに早く再開するなんて思ってなかったけどねー。必然か、運命かってどこ？」

「全く、何の縁なんだか」

しよがなさそうに言う声音は、そこまで嫌そうでない。

見知った顔に会った御陰か、少しほっとしてしまった所為だろうか。赤毛の青年はテラスの手すりに凭れかかり、軍の制服のネクタイを緩めた。

気持ちよさそうに夜風に髪を靡かせる。

「その恰好…仕事？」

彼の軍警察の称号の^{エンブレム}入った軍服を見る。

クロードはにこりと笑うだけで、質問には答えなかった。

―なるほど、詮索するのは無粋だな。

代わりにというようにクロードは話し出した。

「…いやあ、吃驚したよ？　可愛い女の子が居るなーと思ったらレインさんでさ。さっきのさ。あーゆー時ははつきり断らないと駄目だよ？　しつこいしさー、どこに連れて行かれるのか分らない。物騒だよな」

「え？　でもあの人、単にこっちが中東人だから…」

「まさっかー、端っから誘い出すか、連れ出すことを目的としてただろ。顔見れば分かるさ」

言われて見れば、確かにそう思える節もある。クロードはレインが派手に動けない手前、それでも上手く助けてくれたのだろうか。

―変な奴。

だが、助けてくれたのだから、素直になるべきだろう。

「クロード」

「ん？」

「…有り難う」

少し青年の目つきが変わり、一瞬、真剣なものへと移る。

僅かな沈黙。そしてすぐに今まで通りの笑みで

「どういたしまして」

そう言った。

他意のない返答。

——それにしても。

「ここは気持ちが悪い…」

「どうして？」

「よくは分からないけど、なんだろうね。慣れてないからかな。…
こういうの、嫌いだ」

テラスからみえる星空を眺める。夜風が快い。

少女の束ねた黒髪が舞い、横目で見透かすようにクロードは視つめた。

彼女の口調が初対面するときより柔らかくなってるのに、青年は気が付いただろうか。

「ふうん…まあ同意かな」

クロード。彼とは一度利害が一致したため行動を共にしたに過ぎない。

でも、一つ借りが出来てしまった。

これ以上、関わりあいたくない。ただ、いざ言ってみても彼が悪い人間でないことは分かる。

虚言壁があるのは、間違いなさそうだが。

…馴れ合い、そんな言葉が頭に浮かんた。

誰とも馴れ合わず、誰にも助けを求めない、そうして生きた方が楽に決まってる。

即物的に暮らした方が、悩み事だって少なくて済む。要らない算用

で気を擦り減らす生活なんて嫌だ。

だって『タダより高いものなんて存在しないんだから』

けれど、それは複雑な二律背反で、人の身から生まれる人は、やはり人と関わらないと生きていけない。

いずれは、関わらなければいけない日がくる。

…いや、意識はしなとも、知らないところでずっと関わっているのだろう。

だから、人とはすれ違う程度のもので良い。

今、レインの周りの環境と人間だって、たとえレイン一人欠けたといっても日常を循環しつづけるだろう。

その程度なのだ。

簡単に忘れられる、その程度。誰の特別にもならない、必要とされない。

——それでいい。

レインもこの環境を離れる時が来たら、何の未練もなしに行くべき所に行く。

でも、その前に。

軍拠点都市（こし）ですべきことがある。

……それとも、そう思いたいだけだろうか？

——軍、か……。

レインは横の人物を直視する。

「詮索するのは、アレだけどさ。一つだけ聞いておきたい」
「何？」

「軍警察の人間なら：何故、傭兵なんか（なん）に肩入れする？」

「軍警察が傭兵に肩入れしちゃうあいけないのかな？」

逆に質問を返されて困ってしまった。

「そんなことは…ないのかもしれないけど」

「ふふっ、変な理由だねー」

クロードは笑みながらテラスの策に頬杖をついた。

ふっと、横顔に陰がさす。

「…深い理由なんてない。自分のしたいことをするし、自分の正しいと思ったことをする」

「軍の理念は？」

「まずは自分の理念だろ。あの人はどうこうだから、とか言う理由で区別したくないし…それとたぶん一緒。おれは意気投合したから一緒に行動してただけ」

クロードはレインを真っ直ぐに見て、目を細めた。

「…そこに傭兵とか関係ないんじゃない？ 誰とだって交友関係を持てるし。善し悪しっていう詰まらない囲いの中で暮らしてたってな」

涼しい顔ですらすらと述べてみせる。

意外だった。

とても、納得できる理由だったから。

「何？ おれ変なこと言った？」

あちらの顔を凝視していた為か、クロードが怪訝そうな顔でこちらを覗き込む。

「あ…、いや、ごめん。何でもない…その通りだなと思ってさ」

「だろ？」

クロードがにやりと笑ったのにつられて、迂闊にレインも目を細めてしまう。

でも実は、まだ信じれない。

彼は本当に軍警察の人間なのか、ちょっと疑いたくなった。

レインにとっての軍警察は、あまり信用できるものではない。むしろ信用など絶対にしてはいけない部類に入る。

けれどクロードが、本当に軍警察の人間だろうが、そうでなかろうか、彼個人はさほどこまで警戒するに値しない人物だと思いたい。

——だから。個人的に聞きたくなった。

「もう一つ」

「質問は一個じゃなかったっけ？」

鋭い指摘につい、言い淀んだ。

口をつむぐレインの様子を見、クロードはふっと顔を弛緩させる。

「別に、良いよ。一個も二個も大差ない。話して」

「有り難う。…じゃあ」

さりげなく口に出来るように勇め。

「もし、傭兵とか暗殺を生業なりわいにしていた人物が行方不明になったり、事件に巻き込まれたりしたら、軍警察は搜索するの？」

僅かな思案の間。

「…どうかな。そういう職種は普通表に出ないだろうに。戸籍、住所がある奴とか搜索願出したのが、それなりの人ならまだ待遇は違うだろうな。どっちみち、おれの専門じゃないな」

「そう…」

——何、下らないこと聞いてるんだろう。

レインは僅かに顔を伏せる。

クロードは少女の様子を見、問いかける。

「…じゃあ、おれからも質問させてもらう」

いつの間にか、クロードの口調が変わっていた。より鋭利な詰問へと。

「『フレイア』この名前に聞き覚えはないか？」

レインは一瞬きよんとした。

——聞いたことあるような、ないような……

男とも女ともつかない発音に、首を傾げる。

そんなことより今のは、事情聴取のような訊き方だった。

——何だかこいつらしくない。

「知らないよ。どうしてそんなこと訊くのか、訊いていい？」

「こいつは犯罪者。まあ、フレイヤと言う名前さえ本名ではないけど。関係ない話だ、忘れろ」

軽く受け流す。

記憶のどこかに引っかかっていたが、気にしないことにした。

途端に、今までの張り詰めた雰囲気嘘のように声音を変えて、クロードは背伸びをする。

「ああー！ 慣れないことすると肩凝るなあ」

「：切り換え早いな」

「レインさん？ 何か言った？」

「別に……」

「んで、どうするの？ これからまた絡まれに行くー？」

言われれば。

またイチイチ言い寄ってくるのを『それらしく』あしらうのは、彼女にとって面倒だった。

「暫くここにいます」

「そ。じゃあ、おれの雑談に付き合ってよ」

「え？ ……内容によるかな」

やや不吉な猫の笑いを浮かべ、クロードは向き直る。

「それじゃあこの前の仕事……その後の話は？」

「聞く」

レインは即答した。

つい先日の腑に落ちない任務。彼なら自分よりも有益な情報を持っていたそうだった。

「一応、犯人グループはまだ捕まってないよ。おれたちが昏倒させた奴等は雇われた賊だったらしいねーどうやら、主犯格さんはかなり用意周到で自分の手は決して汚さない奴らしい」

顎に手を添え、耳を傾ける。

「流石、自称軍警察。情報がそれっぽい」

「レインさん……いい加減信じてよー……」

ひらひらと手を振りながら、説得力のない態度をとっている青年をじろりと見る。

何気なく視線が交錯した。

「……で？ 続きは？」

「……ハイハイっと。これで同一系統の事件はこないだのも含め3つめ。それで、犯人グループはおそらく輸送列車に乗り継ぐ為のヘリとか必要になるだろ？ そこまで大掛かりな物になると、どっかで

足がつく筈なのにそれもない。これって結構凄いことなんだよ」

彼の考えはレインにも分かる。

大っぴらな犯行をしていれば、軍警察もある程度、ターゲットになるものが絞れてくる筈だ。やはり精密で大掛かりなことをしようとするれば、必要なのはお金と人脈、もしくは人望だろうし。

テロ組織、犯罪組織、果ては狂信集団に至るまで、背後に後ろ盾がある場合は存外に多い。

だから、その『スポンサー』の所為で法的機関は時に行動を抑制される。

——いわゆる、賄賂だけど。

ここで、不可解なことに気がついた。

「一昨日の時点で二回も被害にあっていたんなら、軍警察はもっと警備に力を入れていても良かったんじゃないのか？」

二度あることは三度ある。

犯人は犯行現場に戻って来る。

誰でも知ってる初步的概念を予期の範疇に入れていないようならば、軍警察はかなり間抜けだ。

クロードは嬉しそうに指を鳴らした。

「鋭いね。その通りだよ。おれたちは今度はさせまいと、現金輸送列車を装ったものを駅から放った。それっぽく見えるように傭兵も雇って、おれたち軍属の警兵も、見せかけの隠れ傭兵も混ぜての体制で」

——犯人が存分に踊れる舞台を、わざわざ用意したってことか：

「成る程ね。とんだ茶番に付き合わされたものだ。……そこまでして駄目だった？」

「ああ：奴ら、気がついてたんだよ。これが全て軍警が仕組んだ罠ってことにね。発信機についてるダミーのアタッシュケースには、持ち出してないどころか指紋さえ着いてなかったそうだし、すごい徹底ぶりだなと感嘆する。」

「明らかに情報が漏洩してる。未だに主犯格は掴めない。そうなる

と、どういう可能性が出てくるか…レインさんにも分かるでしょ？」

「……………」

示唆されて思い当たる可能性は二つ。

不確定ではあるものの、口に出してみる。

「……主犯格は賊を完全に使い捨てしているか、それとも…中に内通者がいるか…？」

後半は口にするのに躊躇ためらいがあった。

「そう。だから最近の軍警は内部がぴりぴりしててさ…息苦しいったらありゃしない。本当、あちらさんはどーゆーつもりだか。近いうちに班員全員で出勤になりそうだよ…」

その言葉で思い出した。

クロードが所属していると言っていた、軍警察特務班。本当にそんなものあるのだろうか。

「その班って…」

「おっと、いくら口が軽いおれでも、それは言えないなあ」

問いかけてたところで制される。今のは蛇足だ。

——…確かに余計なことだったな。

ただ、もう一つ疑問が残る。別に訊いてもいいんじゃないだろうか。あの時、はっきりとは聞き取れなかったが、発音は確かにああ言っていた。

駄目で元々で口に出す。

「あのさ、ユウとは…」

レインの質問を遮るように

コツ。とヒールの踵を鳴らす音がした。

「————地位にして総督補佐と並ぶ秘密暗躍機関。表部隊と呼ばれる特別ミッション隠密部隊とは真逆の、法で裁けない者を裁く者達」

落ち着いた女性の声が聞こえてきた。それはレインとクロードの背後から。

声の聞こえた方へと振り向く。

そこには。

「…李清…?」

彼女は何時の間にここまで来たのだろう。

レインの眩きを歯牙にも掛けず、李清は語る。

「…軍警察は優秀な人材を集め、部隊を結成した。今から3年前の軍校内での試験で最高成績者を選出し、その中で班を組み、最終選考まで残ったのはわずか一班。ただし、班と謳っておきながら現在も生き残ったメンバーは5人だけ。しかも、その内2名は任務遂行不可能欠員……」

独白のような宣告は続く。

「失踪中の副班長、立場はグレイシヴの補佐。リベイン・レクザント。

任務遂行中、手足を損傷、今は療養中のミレイナⅡミーツⅡマッシュツ。

地位班長という裏の責任者、時に総督補佐よりも大きな力を持つ者。そして表での大佐地位。ウエルズ・グレイシヴ・アウストラル。…そして、表の部隊の司令官を務める遊撃手であり元秘匿部隊クロード・レヴァ・キアヴェンス……それが、レインの目の前にいるそいつよ」

11 別（下）

李清は険しい顔で一気に語った。

宣言を聞いた青年は、わざとらしく感嘆してみせる。

「困ったものだな、不法入国者にそこまで情報が駄々漏れだったとはね、軍部も警部も堕ちたなあ。それに…5人て分かったのは凄いな。あいつのデータは消去済なのにどーやって手に入れたんだか」
唸りながら、彼は腕を組んだ。

「これでも搾り出せなかった方よ。舐めてもらっちゃ困るわ」

二人の会話を聞いていると、レインは訳が分からなくなる。

——知り合い…？

「李清…どういうこと？」

「そのままの意味よ、グレイシヴを出しなさい。どうせ近くに居るんでしょ！」

李清は苛々しながら一喝する。

——…よく分からないけど…

李清はかなりご立腹らしい。

温度差が目に見えるようだ。

「あいつも大変だなあ。こんな美人に惚れられちゃってさ」

「それ以上、余計なことほざいたら抜くわよ？」

李清の腕がすらりと腰のスウェットの位置へと動く。

仕込み武器が何か知っているレインにとっては、樂觀視できない事態だ。

「ふふっ、残念でした。『今日』はおれだけだよ」

クロードは楽しそうに李清をからかっている。

「…チッ…あの畜生今度会ったら何発でも殴ってやる」

「もしもし李清さん？ 置いていかないで下さい。というか、置いていくんならせめて自分だけでも先に帰らせて下さい」

本音だった。慣れていない所為か、革靴の靴擦れが本格的に痛い。

「……………」

音無い視線。

異様な間ができた。

「レイン！……………家賃」

振り向きざまにっこりと笑い、李清は悠然と言い放つ。

反射的に背筋に寒気を感じた。思わず身震いしそうになるのを必死に抑える。

——鬼畜、こいつ鬼だ……！

「ふふ…楽しそうだなあ、二人とも知り合い？」

「遺憾ながら李清とは腐れ縁」

「レインは家賃滞納者でしょ」

「だから、今回でチャラだって話だっただろっ！」

「黙らっしゃい。無事終わるまでは保障しないわっ！」

「鬼かお前は！」

何故かいつもの談笑になってしまっていた。

——…いけない。

自分でもこの流れになったのが不思議だ。

客観的に様子を客観的に見ていた第三者の目が、ずっと鋭くなった。

「さってと…それじゃあ、呼び出した人が来た所で本題に入ろうか」

——呼び出した…？

クロードのその言葉に、レインは眉根を寄せた李清へと振り向く。

「まさか…」

「そのまさか。レインには今日、こいつと落ち合って欲しかったの。

…まあ、そっちから勝手に接触してきたから、もう、どうでもいいわ」

益々、彼女とこの赤髪の青年の関係が不可思議に思えてならない。そんなレインの心境を無視し、二人は敵意の籠った視線を向け合う。ゆるりと前に一歩踏み出し、クロードが李清を一瞥した。

「フレイアの件だ。お前なら知ってるんじゃないのか？」

「……………」

何故か、問い掛けに李清は沈黙する。

空気が張り詰めたような感覚。

「フレイアってさっきも言ってた…」

クロードはレインの方を横目でちらりと見、

「正直なところ。レインとか言うそのお嬢さん、彼女がフレイアじゃないのかってね」

——は…？ こいつ何を……。

お嬢さんという単語より、自分と『誰か』が混濁していることに驚く。

「違うわ。レインは全く関係ない。写真資料とか見てないの？ 全然似てないでしょうが。そもそもこの子がザイフォンに来たのは彼女が失踪した後だもの」

「へえ、そう？ …見る限りそっくりだけどな」

そう言っただけで彼はレインの方へと近寄る。

覗き込む、観察する眼。

今度はレインも他人事とはいかなかった。僅かに口調を強めて

「李清、クロード、…一体どういうことか説明して」

「駄目よ。言えば貴方は…いえ、この話も言えないわね」

李清は首を横に振って、複雑な顔をしてみせた。対する赤毛の男はしれっと告げる。

「別に話してもいいけど。気分の良い話ではないよ」

「ちよっと！」

李清の声も、レインの耳には届いていない。

「いい…クロード、話して」

——何でか、分からないけど知りたい。

いや、知っておかなくちゃいけない気がする。

知っておきたい。自分に少しでも関係のある話なら、知らなかったで何かを失うのは何よりも怖いことなんだから。

——痛いほど…思い知っているから。

「レイン、貴方には関係のない話よ。余計なことを背負い込むことはないわ」

「李清。……ごめん、黙ってて」

なんて冷たい、感情のない声だろう。

まるで自らを客観的に見つめているようだった。

クロードはちらりと李清の方を見てから、視線をレインに戻す。

「いいだろう。話してやるよ。フレイアについてのこと」

「……」

李清はもう止めなかった。

「フレイアっていうのは即務第二機関の傭兵だった女のことだよ。

いや、正しくはレインさんみたいな、無所属の、言い換えればおおよそ、殺し以外の仕事をする準傭兵、ってところか。黒髪に碧眼の、混血の希少種の女だったらしいね」

———希少種。

すなわち、先天性白皮症：俗に言うアルビノや、虹彩異色、オツドアイの人間。

または、遺伝的、人間的に有り得ない形質を持つ者を総称した呼び名、もしくは、蔑称。

レインの漆黒の瞳も、ある意味希少種の要素だ。

クロードは息を継ぐ

「そいつの行方が分からなくなったのは、今から一年前位のことかな。でも裏の行方不明者は裏で解決するだろうし、そもそも軍警察はそんなこと知らなかったね。：あんたなら知ってんだろ、第二機関が血眼になって捜してるの」

一旦、話を切ってクロードは李清の方へと目配せをする。

「ええ。彼女は今もこの街に潜伏してるでしょうね」

「だろうな。———で、ここで半年前からの事件を説明しようか。最初は突発的なものだったんだ。腕利きの傭兵が数人襲われた。そいつらは全員重症。何か、鋭利で肉厚な刃物で身体を一刀両断してあったそうだ」

レインの顔が曇る。

鋭利で肉厚な凶器。嫌な予感がする。

一瞬、浮かんだ情景を、すぐに頭の中で消し去った。

「それから一ヵ月後、同じく裏の暗殺者が同様の手口で襲われた。

これは軍警察がその場を訪れた時に被害者は既に死亡していたがな。最初の襲撃事件を皮切りに、主に夜中帰宅途中、または仕事の最中の傭兵・暗殺者、併せて数十人が犠牲になった。生き残りの証言によれば、成る程、その容疑者の容姿が行方不明のフレイアと一致してるじゃないかってね。

今は混乱を抑えるために圧力をかけて、それでも有力者には指名手配者として告知して、捕縛をしようと躍起になってる。傭兵間では有名な話だろうに、そっちが知らなかったことの方が驚きだ」

「……」

――腑に落ちない。

「…ね、関係ない話でしょ。容姿が少し似てるだけでレインとは無関係よ」

――腑に落ちない。

レインは真っ直ぐに李清を見据えて、一言。

「李清、隠し事下手だよな」

「……」

無言の李清を差し置いて続ける。

「思い出したよ。どっかで聞いたことあると思ったらさ、リートと始めて逢った時、自分のことをフレイアって呼んだんだよ。……あいつは自分を見てとても驚いてたな…」

束の間の逡巡。

「やっぱりな。少しは似てるらしい。そのフレイアさんと」
クロードは同調する。

「…おれも彼女の写真見てたから知ってるけど、その黒髪とか、体型とかだけは似てるよね、レインさんと犯人。…ま、それよりも即務第二機関の無所属って共通点に焦点がいったんだけど。何しろ軍

警は情報が少なくてね」

李清は黙ったまま、代わりに続けて青年が補足した。

レインは首を傾けて、東方人の女性を見やる。

「別に隠すことないのに。李清は他にも何かを隠しているらしいな。こっちにも関係なくはないんだよ、話してくれないか」

李清は一度、大きく息を吐く。

「はあ：強情はお互い様ってね。その軍警のイヌが居なきゃ、話がややこしくならずに済んだっていうのに」

「ソレ。アウストラルに言ったら殺されるよー？」

「ふん。知ったものですか。：レイン、いい？ 今回だけは黙認しましょ。けど、余計なことには首、極力突っ込まないようにしなさい。でなきゃ抜けなくなっって戻って来れなくなるわよ。フレイアのことにについて知りたければ、リートに直接聞くことね」

「どうしてリートに？」

「私だって知らないことはあるわよ。それに彼女を知ってる当事者に聞いたほうが、手っ取り早いでしょうに」

「………」

ご尤も^{もつと}。

——当事者、か。

「さて。二人ともまとまったー？」

「……何が？」

割って入ってきた青年に対し、むっとした口調で李清が問う。

「さて、レインさん。貴方がフレイアじゃないっていくら白ばっくれても、確証はまだないんだけど。そもそも、そちらさんは戸籍あるの？ もしかしてこっちの人と同じ不法入国者？」

こっちの人、とは曰く李清のことだろう。

「は？ 確証？ まだ疑ってるのか？ 人間不信だな」

レインは怪訝そうにクロードへ向き直る。

「しょうがないわよレイン、あいつ等あの軍警のイヌだもの」

「そこの不法入国者黙ってろ」

間髪入れずにつこりと反応すると、クロードは一蹴した。

「で。どうなんですかー？ 正直な所、そろそろ二人来るんですけど。したら今度会うのは取り調べ室か解剖室だけど？」

青年の台詞に、かんしゃく癪癪を顔に表すのは女性。

「はア？ アウストラルやっぱり来るんじゃないのアンタくたばりなさいよ」

「ふふっ…その言葉そっくりそのまま返すよ？」

僅かながら、クロードの声が引きつっている用を感じたのはレインだけだろうか。

溜め息交じりに進言。

「二人で白熱しないでよ…クロード、そもそも自分は、フレイアっていう奴とはたぶん年齢も違うと思うんだけど？」

「そーよ、フレイアは少なくとも二十歳越えはしてたでしょうに。一度会ったことあるけど、彼女は碧眼だったんだから」

助け舟のつもりか、李清は決定的な相違を指摘した。

確かに容疑者、もといフレイアと呼ばれる人物が碧眼ならば、レインとは大違いだ。

——それにしても……

黒髪の碧眼とは、珍しいハーフだろうか。身近に前例もいることもあり、その人物の容姿については言及しなかったが。

「…むー」

顎に手を当てて考え込むクロード。彼なりに思うところがあるのだろう。

「この前、近くで直視した時はカラーコンタクトっぽくなかったし」
ちらりとレインを一瞥し呟く。

——近くで直視で、思い当たる節が……

「もしかして昨日の、あの無駄な密着って……」

「確かめる為だねエ、コンタクト入れてないか」

列車内でいきなり腕を掴まれて、顔を引き寄せられたあの行動。

——あれが？

啞然とした。そこまでして。

「念には念をとってね。ちょっとレインさん何その顔」

「変態…変人？」

レインはぼそつと呟いた。

隣りの李清が蔑んだ眼をしている。

「うわぁ、それ二人とも酷くない？」

クロードの茶化するような台詞に対し、言葉を発しようと唇を離した、その時。

突然——ふっと、視線を感じた。

「…どうしたの？」

李清が、胡散臭いものでも見たかのように問いかける。

視線を追ってクロードを見ると、辺りを見渡していた。

見ているのは裏手の木々だろうか。けれどレインは直感的に悟った。

——いや、誰か下に居る。

「…あ。お出でなすった。逃げた方がいいんじゃないー？」

クロードは、いきなりテラスの手すりに身体を乗り出して、遠くを見つめた。

無邪気な子供のよう、妙に楽しそうに。

彼の視線の先を追う。

ここからは会場の駐車場が、辺りの木々に阻まれながら少し見える。どうやらそこに視線を送っているように見えるが……

——あれ？

完璧な座位で銃を構える、闇夜に映^はえる金髪。

「…っ！ 二人居るの！？ 分が悪いわね…レイン、こっち来なさい！」

言うが早いか、レインの腕をがっしりと掴み、李清はいきなり走り出す。

体勢を崩しそうになりながらも、無理やりに引っ張られていく。

「は？ ちょ…ま……」

「いいから走りなさい！ 身体に風穴開けられるわよっ！！」
「はぁ！？」

突拍子もない発言にたじろいだ。
走りながら振り返ると、クロードが笑顔で手を振っているのが目に付いた。

――意味が分からない。一体何なんだよ。

一寸の狂いもない、模範的な狙撃。

膝立ちと呼ばれる体勢から、ゆっくりと、けれど隙のない所作で少年の起き上がる。

スコープなどいらないと断言しているような、猫科動物に似た金の瞳。仮面など被っていないのに、その表情は微動だにしない。

人形じみた顔つき。

少年は短機関小銃：俗に言うアサルトライフルを構えていた手を下ろす。

「外した」

「：へえ、お前が？ 珍しいな」

少年の独白に、返事が付け足される。
返すのは力強さを伴った男の声音だ。

「違う。逃げられた」

「：クロードか、もしかしてわざと？」

「たぶん。追う？」

僅かな思案の後、男は腰に吊り下げられているレイピアの柄から手を離す。

「いや、いい、戻るぞ」

「クロードは？」

「後で事後処理にでも回すさ」

「了解」

男は軍帽を被り直し、踵を返した。

少年はライフルを下に構えたままそれに続いた。

「…っと…何なんだよっ！ イキナリ走り出して！」

李清に無理やり手引きされること数分。

レインは会場の外、裏手の林の中に居た。

木々がざわめいていて、木立の隙間からうっすらと空が見える。けれど暗い視界では足元もたどしくなってしまう。仕方ないことだろう。

慣れないスーツという服装での過激な運動、レインはずっと走り続けだった所為で流石に息が上がっている。

一息深く空気を吸い込み、呼吸を整えた。

——足が痛い。

腫れてるかもしれない。こんな履物では足が靴擦れになってしまう。

「李清？ 聞いてる？」

李清は腕組をして、さっきからずっと心ここに在らずといった様子だ。

彼女が先程のように取り乱すところなどを見るのは、初めてだった。——珍しい。

だからといって、こちらにも不安がないわけでもない。

すうと、もう一度息を吸った。

「李清っ！」

「…ああ！ ごめんごめん」

はっとしたように気がつく。

意外な様子に溜息を洩らした。

「一体どうしたんだよ」

「いや。ちよつと軍警察のイヌが…：まあ、いいわ。レイン、そんなことより貴方狙われてたわよ？」

「は？ 誰に」

レインは首を傾げた。心中には疑問符。

「狙撃手に。クロードが言わなかったら、私だって気づいていなかったでしょうね」

「は？　なんで？」

きょんとんでも見せた。

「正直言って、私を狙っていたか、貴方を狙っていたか、……それとも両方かはよく分からなかったけど」

「ちょっと待て。自分は狙われる理由がないんだけど……それに、何処の狙撃手に狙われるって……」

細かく言及しようとして、はっとした。……もしかして。

「軍警察の、狙撃手か……？」

少女の問いかけに、李清は複雑な表情を浮かべるだけだ。

長い間の後、痺れを切らしかけたところで、ふっと口元を動かした。

「……そう」

と言った後に付け加えて。

「ただし。ただの牽制かどうか、本気で殺すつもりだったのか、否かは……」

歯切れの悪い台詞を遮って、レインは言う。

「さっきも言ったけど。自分の身には狙われる理由がない。……李清、心当たりは？」

結論から言って、李清には軍警察に狙われる理由があるのかもしれない。

——疑ってるとかじゃなくて、……本当のことが知りたい。

「私は、不法入国者だから。……いや、細かく詮索すれば余罪は限らないんだけどね……」

——『余罪』

含みのある単語に、不審感を抱かずにはいられなかった。

ただの不法入国者ならいくらでもいる。

そういう者達は通常は普通に捕縛される筈。一介の不法入国者如きに、わざわざ狙撃手をつけるなんて聞いたこと無い。

——……言うことはそれだけか。

：と、喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。彼女が語っても良いと思ったなら、時が来れば語ることだ。それを他人が催促するのは、お門違い。

代わりに、レインが言えることは。

「言いたくないならそれでもいい：今は。いつか話してくればさ」
聞いた彼女は真っ直ぐに少女を見つめ、静かに頷いた。

――それにしても：

先程、下からこちらを捉えていた人影が狙撃手なのだろうか…？

李清が気難しい顔でこちらを見る。

「こっちも分かったことがある。全くの無駄足ではなかったようね。それで十分よ。帰りましょう」

「え？ もういいのか？」

彼女の問いかけに、李清は苦笑した。

「レインだって早く帰って食事したいとか、ゆっくりしたいとか言ってたじゃないの」

「…それはそうだけど…」

それで本当に良いのかと思う。

――すっきりしない。

自分たちを狙撃しようとした奴とか、仮にも殺そうとした、とまではないかなくとも危害を加えようとした事実揺るがないだろう。

あのまま、クロードを放っておいていいのかなとも。

揺らぐレインの心情を察してか、溜息混じりに李清は漏らす。

「あの男をあまり信用しない方がいいわ。所詮、軍警のイヌだもの」

「本日何回目だよ、それ。にしても本当、李清さんは顔が広いね：」

李清、苦苦しそうに

「腐れ縁よ。そもそもクロードと逢うのはこれで二回目だけだね。

レインこそどこでアイツと知り合ったの？ 結構親しくしてるように見えたんだけどねえ…？」

口元を歪めた不吉な笑みで、こちらに問いかける李清。

嫌な予感がしたレインは咄嗟に弁解する。

「そんなんじゃないよ。最近の仕事で一緒になっただけ：まさかこんな所で再会することになるとは思ってなかった」

：そう、本意はそんなところだ。すれ違いが多い傭兵の仕事で、一度しか会わない人物というのは少なくないのだから。本当に予想外な出来事。

李清は林の中を歩みだす。

「：軍警察特務班で、私が会ったことがあるのは二人だけよ。さっきのクロードと、ウェルズ・グレイシヴ・アウストラル：正直言って、さっきのあいとは面識があったけど、話したのは今日が初めて」

——あれだけ馴れ馴れしく話しておいて、初対面か：面の皮が厚いというか、流石李清というべきだろうか。

——軍の内部事情とか：どうでもいい。

しかし、何か引掛かると思い、そこで納得して気がついた。

李清の話では二人しか出てない。

クロードの前で話した時も、後二人の名前しか出てこなかった。

——話してた軍警察特務って、確か五人って話じゃなかったか？

「あのさ。じゃあ、もう一人は……」

「？　：ああ。あの子とは遭わなくて良かったわ。軍警察特務の時のあの子冷酷人間だもの」

「……？　知り合い？」

「：さあ？　どこまで潜ってもデータが入手出来なかった、最後の一人よ。会ったことも勿論ないわ」

「そうか……」

ふと違和感を覚えたが、レインは言及せずに李清に続いた。背後からこちらを窺う、猟犬の視線にも気がつかないで。

「——見つけた」

12 動向

——どうか生きてと、
大切な少女は言った。

それさえも、いつか同じように忘れてしまうだろうか。

人の行き来が激しい場所だった。

平日の午前中でも人の密度の濃さは変わらない。各部署を行き来する役人と、外部から何らかの目的があってくる住民たち。

役人に無駄な動きはなく、てきぱきと提示された仕事をこなしているといった印象。

一方の住人は、幸せそうな顔をしている者もいれば、不安と虚勢に満ちた痛々しい者まで様々。

人の行き来が広がるホールのカウンターで、女性役人と話をして
いる人物が居る。

遠目から見ても眼を引く、深い黒髪をしている。その眼は同様に深
みを感じさせる蒼。

端正な顔立ちはそれだけでも眼を引くのに、片目を覆い隠すような
髪型が存在感を誇張している。所見でもすぐに分かる。彼は混血者
か、この国の出身ではないかの一方だ。

彼と話す女性は事務的に受け答えをしていた。

「：お探しになっている名前に該当するのは、一名です。：あの」
少し躊躇いながら、女性が口を開こうとするのを、制する様に彼—
—リートは言う。

「その人物の個人情報漏洩するのを防ぎたいのなら、これ以上の
詮索はしません。それだけが分かっただけで十分です。感謝します」

模範的な礼節。芯の通った声音で告げる。

リートはそうして、眼を微かに細めた。

「い…いえ、仕事ですからっ」

青年の端整な顔立ちに微笑みかけられた所為か、女性は僅かに紅潮し顔を伏せた。

「御仕事の邪魔をしてすみません。有難う御座いました」

礼を言っただけはあっさりと言を返す。もう用はないとばかりに。

歩きながらに、先程知った事実を反芻して考える。

――…1名、か。

該当者は十中八九、女性だろう。

以上で、ザイフォンの全ての区役所を回った。

いや、軍管轄区は調べていないから全てとは言いがたいが、それでも十分だろう。

それぞれの区で調べた結果、全てを合わせても、都市内にその可能性のある人物は三人。

意外と少なかったことは僥倖だ。

問題は、これからどうするか。

表の管理体制はしっかりとしたものだ。

ここで無茶をして、犯罪者扱いされてまで調べ上げるのは得策ではないだろう。

――なら。

「最初から、分かっていたがな…」

やはり裏の人間の手を借りるしかないのだろう。

からんからんと、扉に付けられた鈴が鳴った。

室内は昼間だというのに暗い。

そもそも、地下の大地に陽は当てられないのだが。

飲食店の間取りを基に造られたのだろうか、窓から差し込む街灯の光が唯一の灯りとなる室内にも、洒落た細工が随所に見て取れる。
「……………いらしゃい」

長い間の後、声を掛けられる。太い男の声音だ。

しわがれた声から推測するに、年代は初老の頃だろうか。

「情報交換をしたい」

「……へえ。今時珍しいね。お兄さん、探し物でもあるの？」

薄暗がりでぼやけた部屋を、眼を凝らして見る。

リートの入ってきた入り口から相反するカウンターに、人影が見えた。

一歩踏み出そうとして、制止される。

「待った。それでも人見知りの激しい方でね。顔とか見られたくないんだ：分かるだろ？」

諭された青年は頷いて、壁に背を凭れる。

背に触れる冷たい柱の感触を感じながら、口火を切った。

「俺の欲しい情報は、特定の人物についてのことだ」

暗がりでも分かる。相手の男がリートを嘗め回すように観察していることなど。

「ふうん。それで、その人物の何が知りたいんだ？」

やや韻を孕んだ声に、簡潔に答える。

「現在地。取り敢えずザイフォンにいることは分かっている。戸籍も持っているらしい」

「十分だね。交渉といこうか。：情報交換だったか、お兄さんは何の情報してくれるんだい？」

——侮られているな：

如実に伝わってくる。見えない分は克明に。

リートは男の嘲りの浮かぶ声音に対し、悠然と言い放った。

「————ハートレス」

発した単語を聞いた男が、僅かにたじろぐ。

ただしそれは束の間のこと、すぐに二人の間の空間がきつく張り詰めた。

——地雷を踏んだか。

「お兄さん。出任せ情報で取引に応じるほど、ウチは敷居が低くないんだよ」

暗闇の男の声音には、相手に有無を言わせない迫力が秘められていた。まるで、抜き身の刃物か銃のような：

しかし青年は平然としている。

こうなることなど、予期していた。

――分かり切った反応か。

自らが発した単語には、言葉にするのも忌々しい意味が含まれているのだから。

「出任せじゃない。話を聞いてから嘘かどうかを判断しろ」

静かな意義を込めて、反論する。

密度を持った沈黙が降り立つ

「……ふん、いいじゃないか、聞かせてみる」

男は折れたように告げ、リートは話し始めた。

13 少年

人工的な蛍光灯の灯りの行き渡った、事務所のような室内。

一見ありきたりな室内に、一つの音が木霊する。

カタカタと弾む軽快な音。

パソコンのキーボードに指を奔らせて、少年は時計に目をやった。

「…そろそろかな」

背伸びをして肩を回す。五指で眉間や首元を揉み解しながらに、感じる。とても目が疲れた。

昨日も遅くまで起きていたからか、体がだるい。仮眠をとろうか。いくら睡眠時間が少なくて済むとはいえ、全く必要ないということはないのだ。

——そもそも、全く睡眠が不要なら、人間でもなければ生き物でもないか。

自嘲。

彼が中途半端に自分の人間味を実感する瞬間。

「もしもーし、ユウ君いますかー？」

その時ふと、カウンターの方から呼び声が聞こえてきた。

——もしかして。

この声はクラインだろうか。

キーボードを叩いていた少年——ユウは眉間を押さえながら、事務所内を横切って駆けて行く。

狭い窓口ではなく、事務所の扉を開けた。

視界には人物が飛び込む。

「クライン…と、レインさん？」

見慣れた少女の後ろには、長い黒髪に、黒いコートの人物が立っていた。

濡れ羽色の黒髪は腰あたりまで伸ばされ、それだけでも芸術品の

ように美麗なのに、二つの黒い瞳は、形質的に有り得ない程の真黒。瞳孔は更に、深淵の夜海より深い黒色。

冴えた顔、目つき。

見つめられただけで、自分の内面全てを見透かされているような心境に陥る。

だからだろうか、ユウはこの綺麗な人物が少し苦手だ。

その苦手な人物が、自分に何の用だろうか。

彼の心情を知ってか知らずか、クラインは嬉しそうに話す。

「途中で一緒になったの。帰り、送ってくれるって……だから、その」

しどろもどろになりながら、照れ臭そうに話す少女にこちらまで頬が緩んだ。

ユウはレインの方へと向き直る。

「悪いね、取りに来了」

クラインを横目で見ながら、目の前の人物は言う。

「あ、アレですか？ 持ってきます」

——すっかり忘れていたけど。

以前預かった彼女の武器は、信用できる人に頼んでおいた。

事務所の鍵付きの棚から引っ張り出して、程なくして包みを抱え込み戻ってくる。

「……どうでしょう？」

ユウから手渡され、レインは早速鞘からナイフを抜き取る。暫く見つけた後、刃物を摺る音をさせて刃をケースに仕舞う。

ぞっとするくらい透き通った眼が細められた。

「想像以上かな？ 見違えたね。本当に有り難う」

鋭利な美貌の持ち主でも、笑みを見せると幾らか柔らかい印象へ変わるのだから、不思議なものだな……と茫洋に感じた。

——……って、何凝視してるんだ僕は。

無意識の内に見入ってしまった自分を内心で叱咤してから、ユウはすぐに取り繕った。

「あ、それから…こちらがもう一つの…ハンドガードとスプリングですね。在庫、有りましたよ。サイズのこととか、不備がありましたら遠慮なく仰ってくださいね」

営業用の薄っぺらい笑みで業務的に告げ、アタッシェケースに似た特殊容器を渡す。

「ありがとう」

造作なく受け取る、白い腕。

「……えっと、御代だけど」

少し申し訳なさそうな彼女の言葉に、ユウは首を横に振った。

「そんな、いいですよ。クラインを助けてくれたお礼です」

この間話した内容によれば、何度か地下街で囲まれたクラインを助けてくれたことがあるらしい。

それだけで、十分な報酬だった。

「まあ、助けたっていうか……」

「でも、でもっ！ 感謝してますよ？ ユウ君、ここは私に免じてですよ」

意気込んで発言するのは、フード姿のクライン。

——…自分で言うことでもないけどなあ。

ユウは苦笑いで応じる。

華奢な両手を勢いよく振って誇張する彼女は、本当にレインに感謝しているのだろう。

「いいの？ タダで」

「ええ、勿論。…僕は構いません」
笑顔で応える。

「有り難う、正直助かったかな」
クラインも、布から唯一露出している口元で笑みをつくっている…
のも束の間。

ふっと、クラインの表情が陰った。

「…ユウ君、あれ、ロッカーに入れましたから、だから」

「いつも有り難う。大丈夫だよ」

優しく、語りかけるように少年は童女に告げる。

短い会話を、黒髪の彼女はそつなく知らない振りをしていた。

「……で、用は済んだ？ クライン」

レインは目線をこちらに向けてから、クラインへと向き直る。

「はい！ です！」

彼女の元気な返事。

「そう、じゃあ帰りますか」

しょうがないといった風にエレベーターの方へと歩みだすレインに、寄り添ってクラインが着いて行く。あの人が一緒なら、地下街の物騒な帰り道もかなり安心できることだろう。

正面のエレベーターが電子音を発し、扉が閉まる。

二人の姿は隙間に吞まれ完全に遮断された。

—————。

彼女たちの姿が見えなくなる同時に、少年の瞳から感情の色が消えていく。

「……馬鹿」

「…本当に馬鹿」

彼は二回も言った。

——何で自分のことを話したんだろうか。

ふざけた奴だけど、クロードは言うほどに馬鹿ではない。狡猾で、その倍くらい気分屋なだけだ。

何か考えが在るのだろうか。

——いや、どうせたいした理由もないのだろうか。気まぐれ屋のあいつのことだ。

あながち、あの東方人の美しい少女が気に入ったのか。

先ほど相間見えた人——レインはここ、第二機関に務めるようになったってまだ一年前後だけれど、もう官長に目をつけられているところ、腕のたつ傭兵ということは分かり切っている。

そして何より気になったのが、ひとときわ目を引く容姿。

一年前まで機関内に居た、フレイアと呼ばれる女性とよく似ていたのだ。

しかし、ユウにしてみれば、レインと話したり会ったりすることに面影を重ねることも希薄になっていった。今考えてみれば、似てるのは黒髪や背格好くらいだけだ。瞳の色や物腰、言葉使い、表情に至るまで、今なら正直言っただったくの別物と断言できる。

——『フレイア』

彼女は今も連続殺人犯として指名手配となっている。

——でも、それは……
分かってる。

「……？」

その時、味気ない電子音が響き渡った。
電話のベルだ。

発音元は事務机に備え付けられているものではなく、ユウのズボンのポケットに入っている、私用目的の小型な物。

——ああ、もうそんな時間か。

一人心地に納得する。

諦念の滲む心境は、きつと誰にも知られない。

意識し始めると、いきなり鳴り渡るベル音が陰鬱な音に聞こえてくるから不思議だ。

ともあれ、出ないわけにはいかない。

——居留守を使う権限なんて、自分は持ち合わせてないし。
手の内で持て余していた携帯機器を、開けて耳元にあてがう。

「……はい」

「ユウ、点呼までに集合場所に」
「了解」

感情のない電話越しの男の声。
変わってしまった幼馴染の声。

——分かってる。
用件はそれだけだ。用事も付随する何かも些末な程度なのだから。

程なくして一方的に電話を切られた。

——呆気ない。

当然だが。

道具に感情はない。道具に対して感情は湧かない。

「……僕だって、使い捨てなんだろう……？」

誰に問うでもなく、少年は灰色の天井を仰いだ。

14 挨拶

雲一つない空は澄んでいて、高い。

放射冷却でいっそうと冷え込む空気に、身体も狭まる。せば

緩慢な動作で、寝台の端を掴む手がある。

「……………」

掛け時計も置時計もない部屋。家具としての時計代わりに置いている腕時計を、恨めしげに見つめる。

黒い瞳、黒い髪、白いシャツ。

他者が彼女を見たのならば、…更に、不幸なことに初対面だったなら。

誰もが彼女の美貌に息を呑んだであろう。

誇張表現はない。彼女の美しさの概念は、他人の価値観を一瞬にして粉碎してしまう。

眼も髪色も黒だというのに、暗い印象は一切ない。

物憂げな雰囲気は拡散していたが、それさえも彼女の魅力の一つと思えてしまうのだから、徹底的な美少女であろう。

問題は少女自身がその事実を疎ましく思っていることだったのだが。

——自分はまだ眠いんだけどな……

彼女：レインは思う。

『自ら』のことを『自分』と呼ぶクセ。

いつ頃に身に着いたかは覚えていない。

一般的には、レインの性別で年頃なら、自分のことを『私』と呼ぶのが普通だろう。

だが、彼女は『私』は『私』ではないと思い、この呼び名を放棄した。

『自分』は『自分』だ。

……傍から見れば、分裂症の症状と診断されてもおかしくない、ネジの緩んだ、いわゆる他人には理解不能な思考回路。

分かってはいるが、真情を変える気はない。

手で覆った欠伸^{あくび}を一つ、レインは寝台から降りた。

レインにとって、今日は久しぶりの休日となる。

傭兵『もどき』の彼女には、毎日仕事があるわけではない。週休1・2日ぐらいは不定期に休日が設けられる。

ただし場所が遠方だったり、長期の依頼の場合は例の限りでもないが。

通常はきちんとした仕事の隙間があり、今日はまさしくその合間に当たる。

前回の休みが丁度一週間前なのだから、妥当なところだろうと思う。

休めるときに休んでおかなければ、というのはレインの自論だ。

土曜日は、過去の任務で警護した名家の屋敷当主に気に入られ、毎週その警護をしているが、日曜日は基本的に仕事はない。

そして今日は日曜日。

一日休みであり、この点是一般人と酷似しているかもしれない。無論、この点のみにおいて。

——丸一日寝ていられれば幸せだな……

というのが本音ではあるが。

平日の仕事は身辺警備から護衛等、多種多様な仕事。

現在住んでいる街にやって来て早2年近く。

段々と生活にも慣れてきた頃だ。

うっすらと開けた視界に写るのは、味気ないコンクリートの天井。

レインは軽く伸びをして、床を裸足で歩く。

折角の美髪を手櫛で掻き回し、殺風景な自室を眺める。

およそ6・7メートルの正方形の空間の、西側に窓が一つ

という間取り。

壁際には箆笥、横には大きめの革鞆、また少し入り口に寄った位置に、大きいグレーのキャリーケース。———それだけである。おおよそ年頃の女の子の部屋とは思えない。

基本的には服には気を使うものの、必要以上の小物は買わない。家電は李清の物を利用してゐるから、そもそも必要ない。

——簡素が一番。

つまり質素というべきか、意識しなくても自身の空間が質素なものになってしまうのだ。

部屋は人を表すとはこのことで、正しく在りようだけ見れば彼女らしい部屋だったのだが。

少女は面倒そうに、箆笥から適当に見繕った服の袖に腕を通した。

着崩れないように胸元を縛り込む。

どちらかというと、押さえつけるに近かったが。

上からは、黒いワイシャツにジーンズ、同色のブーツというスタイル。加えて、少し肌寒かったので一応上着を羽織った。

普段通りの全身黒い服。

大家と義妹が、そろって「勿体ない」と言うであろう恰好。

今日も例外にはない。

長い黒髪を適当に整えて、後ろで束ねてから扉を開けて廊下に出た。

突き当りの洗面台で顔を洗ってから、階段で階下へと降りる。

欠伸を噛み殺しながら、リビングへと向かった。

リビングの造り自体はありふれた、キッチンと兼用で吹き抜けになった広い空間だ。その気になったら喫茶店くらい営めるであろう空間。

折角の活用性ある間取りが廃屋になろうとしていたのだから、直前で掘り出し物件を買い取った李清は、眼の付け所が良いという

か、鋭いというか。

キッチンにはいつも通りの家主の立ち姿。

「おはよう、早いね」

「まあね」

軽く巻いたセミロングの黒髪を緩く結った姿と、レインよりは僅かに低いにしろ、女性にしては高い部類に入る背丈、豊満であるのに、引き締まるところは引き締まった輪郭の整った体つき。

こういう縁か、李清と彼は出身国が一緒でもある。

異国で祖国の人間に会う偶然も昨今ではごく稀だ。：特に、この国、イザベルでは。

椅子を引いて席につく。

「朝食、毎度悪いな」

「別に。私はお菓子作りと料理が趣味だから
お決まりの台詞。」

——紙に書いただけじゃあ、可愛らしい女の子が浮かんできそう
うだ。

「：って聞くのと実物では全然別物だけだな」

つい言ってしまう。

「それは旧時代の偶像崇拜でしょうに。可愛い女の子と家庭的な女の子は、必ずしも一致しないわよ」

——どうでもいいけど。

ああ、でも可愛い女の子は好きだな。特に素直なのが。

：別に同性愛者じゃないけど。

視線を窓の外に向けていると、李清が朝食を運んできてくれた。
目玉焼き、スライスした固めのパンに、野菜がたくさんのも
スー
プ、それから焼き上げた鮭。

定番の朝食だけど、レインはとっても嬉しい。結構好きな献立
だった。

李清の作る料理は無駄に甘かったり、濃い味付けをしない良さ、
加えてバランスが採れているのを見た目の良さ等、本人の心遣いが

伺えるものばかりだからだ。

「いただきます」

軽く手を合わせて頭を下げる。

李清はもう朝食を終えているらしく、円卓の隣の席に腰掛けた。

「どーぞ。今日はお休み？」

「うん。一日暇人だ」

「どこか行かないの？ 買い物とか」

「そんなの面倒臭いよ。ウィンドウショッピングは趣味じゃないしさ」

レイン、基本面倒くさがり。

——買い物するより寝ていたい。

「…まさか二度寝するの？」

「それもありだな」

李清、神妙な顔つき。

——他人をからかうのが趣味。

「…逆流するわよ」

条件反射で、レインは口に含んだ茶を噴出しそうになった。

中々嫌なことを言ってくれる。

「大真面目な顔で変なこと言うなって！」

「いや、でも逆流することあるらしいわよー、レインも気を付けないねえ」

李清はニヤニヤしながら頬杖を着く。

レインは益々苦い顔をした。

——二度寝は止めておこうか。

「李清の今日の予定は？」

「…ん？ 私？ 主婦は何時でも忙しいのよ。知らないの？」
彼女は未婚だ。

「知ってる。…で？」

面倒なので軽く受け流す。

李清は唇を尖らせながら、指折り話す。

「取り敢えず本業の在庫整理、午後からは図書館行って買い物して帰ってくる予定」

「暫定司書の仕事？ 有意義だな…羨ましい」

「しつこいようだけど主婦は忙しいのよ？」

「あー…いや、有意義ってのはそういうのじゃなくって…何て言うんだろ、目的があるっていうのがさ、いいなって思うんだよ。そういうの」

自分はと言ったら、仕事と寝ることが生活の大半を占めてしまっている人間だ。

自らの時間と思考を潰して生きる。

私生活と呼べ、自他共に認めるほどに聞こえの良いもの、李清みたいな持ち合わせてない。

趣味はなく、有意義って言葉も当て嵌らない。

——うわ、なんて虚^{むな}しい生活だ…

李清はレインのしどろもどろな言い訳を聞いて、変な顔をしながら頷いて反応した。

以後は天気のこと、不景気のことなど、大した内容の会話もなく、食事を済ませて自分で食器を片付けた。

一応、朝食の準備やら調理やらを李清に任せっきりでいたので、後片付けくらいはレインも手伝った。

いくら家賃その他諸々を支払っているとはいえ、衣食住の殆どに彼女の手助けがあったのでは、体の良いヒモ同然だ。

——存在自体が寄生虫の自分が言えたことじゃないか。

誇張はない。虚偽もない。ただの事実だ。

事実、自分は誰かに寄生して生きているのだろう。

皿洗いで泡まみれの手を濯いでいると、ふと戸口に第三者の気配がした。

「おはよう。いらっしゃい」

李清は先に気が付いて、声をかける。

「…おはよう」

レインも遅れて挨拶する。

「…ああ」

あまり感情の込もっていない、無機質な声。

眠たいのかもしれない。常時的な態度にも思えるが。

黒髪に隻眼の青年は、李清に問いかける。

「地下、借りていいか？」

「勿論。どうぞ」

彼の人物はレインを一瞥すると、踵を返して階段の方へと向かい去った。

足音が遠ざかっていく。

「昔よりは、愛想が良くなったのかもしれないわね」

「リートが？」

独り言には大き過ぎる李清の独白に、思わず反応してしまう。

「そう。初対面の頃に比べたら。…自分から壁を作ってるようなところがあったからね。心なしか」

「…確かにそうかもな」

「これもレインの影響のお陰ね」

にこりと笑って、嬉しそうに告げる女性。

微妙な顔つきで、別段無感情に告げる少女。

「自分は何もしてないけど。むしろ銃を教えてもらってるし…」

「影響は意識して与えるものと、無意識下で本人の意志とかとは関係なく響いていくものがあるの」

李清はふっと眼を伏せて、達観したことを言い紡ぐ。

人間関係の論理は苦手だったけれど、知らないところでいろんな人に関与していくことだろうか。

そうならば分かる気がする。

良いことと悪いことが切り離せないこと。

どん詰まり。

——じゃあ、どうしろって？

「そうかもしれないな。良くも悪くも」

「でも、貴方がリートに与えてるのは、良い影響だと私は思うわよ」

「だといいけどな」

苦い笑みが口元に浮かんだ。

一言のみ言い残し、手をタオルで綺麗に拭く。

——簡単に言うな。

良だけの影響なんて、あるわけないだろ。

苦い思いを噛んで、レインはそのままリビングを後にした。

15 相似

部屋でだらだらと過ごしているのは、良くないと思う。

李清の逆流の話のこともない訳ではないけれど、単純に寝る気がしなかったというのが大きい。

自分でいうのも変だが、まだ若いのだから、あんまりにもじっとしているのは精神的健康上、大変よろしくないところじ付け聞かせ、レインは街を散歩していた。

そもそも、じっとしていると余計なことを考える。なら、動いていた方が気が紛れるし時間を無為に過ごさない結果になるのではないかとも思う。

無論、行く当てなどなく、本当の意味での散歩ということになるのだが。

都市は複雑な造りをしている区画が多くて、迷子になりかけることも数多あまたではあるものの、込み入った下町を探索していると新たな発見があったりする。

——だから：

別段、こういう散策も嫌いじゃないわけで。

しかし、治安の悪い区では頻繁に暴漢に襲われそうになる。

レイン自身、自分が、そういった者達の体ていの良い標的になりえる容姿だということは自覚している。だが、レインにそちらの趣向は一切ない。

身体は誰にも売らないし、自分で守らなくてはいけないと思う。

寧ろ、無理なのだ。

気持ち悪い。吐きそうだ。信じられない。意味が分からない。そういったことがしたいなら、こちらのあずかり知らぬ所で勝手にしろ。——消えてしまえば良いのに。

愛してるだの、愛してくれだの、好きだの、欲しいだの、一緒にな

りたいだの、一つになろうだの……

情動と生理的欲求に唆されたままに行動するなんて。

——馬鹿じゃないのか？

なんで、『自分が人に愛されなくてはいけない』のか？

そもそも、過去言い寄ってきた男の大半は愛よりも肉欲を優先して
いたのだから。

中には力づくでどうにも出来ずに、通りがかりの人に助けてもらっ
たこともある。それならまだ良いにしろ、犯されそうになった時は
本気で死にたくなった。

今思えば、人生の汚点だった。回想するだけでも羞恥と憎悪が蘇
る。

——くたばれ。

：だからかもしれないが、レインは無意識の内に割と治安の良い区
を歩いていた。

緑化計画の一端地で、歩道沿いには木々が植えつけてある。車道
に車通りは少ない。

信号機は現実状況も知らずに、自動的に無人の交差点で役目をこな
す。

今居る街では、かなり平和な光景に入るのだろう。

歩道の車道の反対、内側には小店舗やアパートが並び、レンガの朱
い街並はこの街の情景だ。

時折すれ違う人々は、物珍しそうな顔で少女をちら見、または凝視
して通り過ぎていく。毎度、見世物じゃないんだぞと怒りたくなる
が、もう慣れたもので、流してしまえば街の雑踏と同じ。気になら
なくなる。

レインがザイフォンに来た時にはもう自覚していたことだが、こ
の国でアジア系の黄色人種というのは珍しいらしい。

それもその筈。古風な中東人差別は、土壌深くまだ残っている。

中東人差別について初めて知ったときは、成る程、今までの待遇
の辛辣さはその所為かと、少しだけ納得してやったものだ。

彼女は人目を避けて、路地へと入り込んでいく。

昼間ではあるものの、日光が遮断されたその場所は薄暗い。

「……………」

——人気ひとけ……………？

ふと、首を回すと視線を感じた。

瑣末なことだが、在り来りな気の所為で済ませる程レインは平和主義ではない。

——嫌な予感。

ここでの可能性は二つ。

一つ目に、クラインが尾行じゃないですをしている。

次に、よろしくない連中に目をつけられた。

前者である確立は低い。現在地は地上で街だからだ。彼女は街に出ることを嫌う、特に昼間は。

——となると。

試しに歩行の速度を上げて、目に付いた角を左折した。

————左折法の安全確認。昔から存在する身辺確認の基本。

それから数歩で確信を得た。

——後ろに、誰か居る。

更に速く歩いた。

じわじわと歩くスピードを上げていく。

人の気配の動きは、それに合わせる様に素早くなる。

——やっぱり。勘弁してくれよ。

レインは更に右折して小路地へと入り込んだ。

あちらに敵意があった場合、攻撃の機会は一度であり、無論一瞬で畳みかけたい。

上手く巻ければ最善にしろ、残念ながらそんな余裕も技術も持ち合わせていない。それに、上手く巻けたと思い込んで居住先まで着いて来られたら、それこそ本末転倒の極みだ。

——最悪の事態は避けたい。

だからこそその選択だ。

相手を舐めているわけではないが、やはり虚をつけばある程度の隙は作れるだろう。

レインは路地に入ってから、僅かに歩むスピードを落とした。背後の対象に悟られないようにあくまで自然に。

意図的な行動が功を制したのか『そいつ』はこちらの距離を縮めた。

たぶん、両者の距離は5メートルくらい。

——…もしくはそれ以内か。

それほどの間合いならば問題はない。一、二歩跳べば有効打が届く距離、今がチャンスだ。

勘付かれないように、短く息を吐いてから踵を返した。

コンマの間に体を180度回して対象の方を向き。そして————
——…えー？

レインは自分の目を疑った。

細い一本道の路地、そのあっさりとした視界。

どこにも対象がない。

それどころか人影すら見当たらない。

当然今まで感じていた視線は確証的なものだったし、自分の感覚を疑うことはしない。

——なら。

反射的に、…というより本能的に、もう一度前へ向き直る。

すると、そこに居た。

先程までは居なかったのに、細い、人がすれ違うのがやっとの路地の真ん中に。

人が一人、立っている。

けれど彼の人物は、想像していた者とはかけ離れていた。

だから、いつの間に前方に移動したなどより、その人物の容姿に気を捕られてしまった。

相手は女性。大人で、纏う服装はあまりにも異様だった。

淡い色合いのストールを肩に掛けて、ゆったりと折り返して頭を包み込むようにしている。

布が顔にまで掛かっているので、顔つきや表情までは読めない。だが、唯一露出した薄く形のいい唇や、ほっそりとした顎から、儂さや繊細さが伺える。

服装は生地の薄いブラウスにこれも薄手のカーディガン。下は軽いレースのロングスカート。何故かブーツだけは厚めのコンバットブーツだったが。

全体的に白い色合いで統一された服装は、今の時期にしては少し肌寒そうだった。

前方に立っている彼女の全身を観察してから、もう一度、彼女の顔に視線を戻す。レインはやや怪訝そうな顔をしながら身構える。

すると、ストールに見え隠れする薄い唇が微かに上下した。

「―――やあ」

まるで旧知の友と偶然会ったような、気軽さ、言い軽さに、僅かに拍子抜けした。

けれど警戒の姿勢は崩さないように努力し、相手の動きを探る。

続いて紡がれた言葉は、

「こんにちは。よい日だね」

「……は、あ………?」

レインは意味が分からずに、曖昧に返答した。

当たり前だ。

職業人並みに気配を消しておいて、尾行までしていて、何なんだこの気軽さは。

まるで自分は貴方に敵意を抱いていませんよ、という顕著なアピールに見えて、それこそ釈然としない。というか、凄く胡散臭い。

少し悪戯げな笑みを浮かべる彼女は、可愛らしく小首を傾げて見せた。

「何だい? その反応」

「………、貴女……は」

「通りすがりのお姉さんの与太話に、付き合うのは嫌いかい？」

「…へ…つと…その…」

レインは応えるのに戸惑った。

通りすがりのお姉さん…にしては浮世離れし過ぎているように感じた。

「ふふっ、後を着けていてごめんね。…でも君、気がつくのが遅いよ？ 私は二区南からずっと尾行してたんだからね」

「え…っ」

——そんなに前から…？

二区南、つまり李清の家から出てすぐから、後を着けられていたというのか。

より一層高まる猜疑心。内心ぞっとした。

なるべく動揺を悟られないように落ち着いて出した声は、けれど掠れていた。

「何で……」

「何でって、そりゃあ綺麗な『自分』と『彼女』がこんな所ふらふらしてたら、無粋な奴らが集って来るだろうってね。…君、無用心すぎだよ？」

ストールの余った布端をひらひらと玩もてあそびながら、首を小鳥のように傾げる。

女性らしいしなやかな声音で少年的な口調を話すその不一致さも、何故か彼女だと一興と思えてくるから不思議だった。いや、それより。

——…関心してる場合じゃない。

確かに今、彼女はレインのことを『自分』と『彼女』と言った。

それはつまり——…

「何を…知っているんですか…？」

「私は結構鼻が利く方なんだ」

口元を上げてにこりと微笑む彼女に、得体の知れない寒気を覚えた。

故郷を出て、この国に辿り着いてから、自分を『彼女』だと見た者はいない。当然、初対面で気がつかれたのだって、目の前の人物が始めてだ。

彼女は首元のストールに指を引っ掛けて、少しだけ緩めた。

「面白いね。『自分』と『彼女』。相似にして違うもの。違っただ、今は同じもの：君みたい珍しい人とは、初めて遭うな」

「何故：？」

レインの狼狽した声。

「だって、自分のことを『自分』なんて呼ぶ、変わった人が知り合いにいないものでね」

要領を得ない返答。

——何で……

誰にも話したことはない。『自分』と『彼女』のことなど。

異国へ渡ったときから、誰一人にだって告げたことはない。『自分』だけが知ってることなのに。

——どうして目の前の女性は知っている？

「…全く、最近の若い子はこの街を甘く見すぎだよ。そりゃあ一昔前に比べて殺られた犯されたは随分と減ったけど、根本的な問題はほっぽり投げてるんだからさ。……そう、思うだろ？」

さらりと物騒なことを言い流しながら、彼女は続いて自然な動作で片耳の辺りのストールに指を掛けた。それをくいと持ち上げて、顔の上半分を露出する。

レインは息を呑んだ。

長い睫毛に縁取られた暗いグラデーシヨンの碧眼。はらりと黒い前髪が掛かり、瞳に影を落とす。

こちらを見つめているその双眸から目が離せなくなった。

——希少種か……？

ならば、自分と同じだ。

「こんな容姿で得をしたことはあまりないよ。君もだよね」
必要最低限の事柄を口に出されると、詳細を言わずとも意味が理解

できた。

黒髪に、淡色の碧眼、彼女が珍しい混血^{ハイフ}であることがおのずと分かり、その為、苦勞してきたことが同時に分かった。

——自分も、そうだったから。

誰かの庇護を受けなければ生きていけない年頃は残酷だ。大きな力には抗おうとも蹂躪される。

だから、醜態を晒したくなかった。自分を偽ってでも、あんな恥辱を味わうくらいなら一刻も早く、大人になりたかった。

——目の前の名も知らぬ彼女もそうだったのだろうか。

今まで、一切の不浄とも触れ合わずに生き過ぎてきたような美しい女性が。

「貴女は……」

「どこにでもいる元傭兵。今はただの流れ者だよ」

脳裏に引つ掛かる単語を口に出して、彼女はくると踵を返した。

「君とは相性が良さそうだ。気に入ったよ、また会おう」

すたすたと前方を歩いていく女は、ストールを顔に掛けなおして路地の先の角を曲がった。

「……と、待……」

レインは慌てて追いかけた。

ついさっき彼女の曲がった角で辺りをぐるりと見渡す。

十字路となっているその前後右左、どこにも彼女の姿はなかった。

16 詩歌

鼻歌を歌いながら、彼女は暗い地下道を歩いていた。

曲は母が子守唄代わりに歌ってくれたもの。

単調で、素朴で、なのに飽きのこない旋律が彼女のお気に入りだった。

けれど、紡ぐ音階はどこか切なくなる要素を孕んでいて、彼女の神秘さをより一層引き立たせていた。

メロディーに合わせた足音は軽やかで、流れるよう。

その彼女の背後、十数メートル後方に、数人の男達がたむろしている。

あまり上品とはいえない格好に、何故か手錠や猿わぐつを携えている者までいた。

彼等は地下ルート一帯を仕切っている悪行グループの一派で、金目の強奪より、他人を手籠めにし、殺る犯が好きという下賤な連中だった。

普段はこうして偶然通りかかった者を数人、時に十数人で陥れて、捕らえた獲物が持っているものなら全てを強奪してしまうというのが彼等のやり口だった。

ただ、周辺の地下道は治安が悪いとの触れ込みが元からあり、通行人といえは女子供を除いた浮遊者か酔っ払いかというくらいなものだ。

だからこそ、彼等は飢えていた。

反動的で本能的な衝動。

それが、思いがけない乱入者によって駆り立てられていた。

顔は布で覆っていてよく視認できないが、背格好はかなり良い女。

いや、背格好や顔立ちなど、彼等にはどうでもよかったのかも

しない。

条件などそれだけで十分に満たされていた。

後は好き勝手に犯し、持ち帰って肉玩具にでもすればよい。

彼等は一線を脱した上玉に高揚していた。

後はもう、頭の中では各々で彼女をどうやって辱めるかということだけ。

先陣を切って、リーダー各らしき男が獲物との距離を詰めて前方に躍り出た。

わざとらしく、下品な気配も消さずに彼女へと殺到する彼等には理性が伺えない。

ふと、彼女は鼻歌を止めて、立ち止まった。

既に四方は男達に囲まれており、彼女に逃げ場はない。

場に不釣り合いな、鈴の声音。

彼女――数刻前までレインと会話していた女性は、顎元に手を添えた。

「……どうしたものかな」

自らが置かれているの現状に比べ、やけにのんびりな口調は、まるで状態を軽視しているようにしか見えない。

猿わぐつを持った男が、彼女へと一歩出る。

「大人しくしてろよお……」

男の口調はどこか胡乱げで滑舌も悪い。薬物で頭が浮かれてしまったか。

「お姉さんの相手は、君たちには務まらないよ？」

拗ねた子供のような声を出して、彼女は上半分の顔を隠していたストールをはらりと解いた。

現れたのは希少面でも、美術面でも常を優越した造形。

淡いその双眸、肩甲骨あたりまでのワンリングスの黒髪。

「はっ…そんなに高等プレイをご所望ならすぐにでもしてやるよ」
げてげてと下品に笑いながら、リーダーの男が手を伸ばす。

彼女の形のよい胸元まで迫ってくる腕は、指からして嫌らしい動作をして蠢いている。

——うーん。『汚い』。

彼女の雑感。

「残念だけど、射程範囲外だな」

彼女は、首から解いたストールを横合いに投げた。

一時的に彼等の視界に彼女は写らなくなる。

覆い尽くしていた淡い視界から解き放たれ、彼等は呆然とした羽衣を纏うように優雅に、可憐に布を羽織った彼女は人間離れた存在に見えたからだ。

ただしそれは一瞬で、すぐさまに目の前の彼女が自分達の蹂躪する存在だと再認識した。

——が、それは遅かった。

少なくとも彼女にとっては遅すぎた。

彼女は上手く見えないようにしていた暗器に指を奔らせる。

二の腕に括りつけられた毒牙のナイフ。足首にも数本取り付けたある小型の得物を、容赦なく目の前の人物の眉間へと、浅く抉るように突き出した。

無論、こんなのは致死どころか相手の行動を鈍らせることにもならない。

当たり前のこと。彼女も自覚している。

——人間って、意外と頑丈にできてるんだよね……

反対に、驚くほど脆く感じる場合もあるが。

こんなかたちで反抗されることを予期していなかった彼等は、一瞬ぼかんとした。

そしてまもなく後、短い悲鳴と共に刺された男は崩れ落ちる。

彼女はまた音を紡ぎだした。それは連なり歌となって、唇から零れ落ちる。

——さくら さくら やよいの空は

見わたす限り かすみか雲か 匂いぞ出ずる いざや いざや
見にゆかん

異国、極東和国の童謡。

旋律という名の糸で繋ぎ合わされて、上手く調和していく歌声。

彼女は歌いながらもナイフを投擲していく。

その度に男が倒れる音が連鎖した。

けれど彼等も黙って見ているわけではない。同胞がたかが一人の女風情にやられたのだから。

「っ：って、めえ！」

一人が短く吼えて、彼女へと拳を振り上げた。けれどその拳は虚空を切って空振りし、あらぬ方向へと飛んでいく。

彼女が何の気なしに、拳を避けたからだ。

次に背後にいた男が身を屈め、体当たりを見舞おうとしていた。彼女はお見通しというように、くるりと上体を半回転させたただけで避けてしまう。

男たちは、目だけ手負いの獣の如くぎらつかせる。

真っ直ぐじゃない。屈折した嫌な眼の光。

——…、嫌い。

彼女は美しいものを好む傾向にあった。

けれど彼女の美しいとは見目の問題よりも、対人した時に垣間見えるその人物の本質。

どうあれど、彼女は愚直で頑ななものが好きだということ。

たとえ穢れていても、それを突き通せば昇華されて一つの概念と化す。

——だからこそ。

黒にも白にもなりきらない者等は——『好きになれない』

白黒ハッキリつけたい性格というわけではない。

ただ、一つの形に成りきれないものが在ることが…

——虫唾が奔る。

彼女は最後の一人に毒が効いて倒れこんだのを視認すると、夢げに漏らした。

「『彼女』と『私』……『自分』」

単語の羅列。

「…君のあの眼、いい眼だった。君は何処へ向かっていくのだろうね」

今日出会った……いや、正確にはもうずっと気になっていた美しい少女。

彼女の眼には迷いがなかった。

選択肢がなかった。そう、選ばざるを得なかったのだろう。

いつも極限の常態で今迄生きてきた者。彼等は直向で、とても綺麗だ。

——とても綺麗な眼をしている。

「近いうちにまた必然的に逢えるといいな」

そう楽しそうに呟くと、倒れこんでいる男達を尻目に彼女はその場を後にした。

彼と彼女

———ああ。見つけた。

やっと見つけたよ。

君を見つけた。

逢いたかった。

ずっと。

ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと。

随分と長い間、君に逢うことばかり考えていた。

だって、寒いよ。

ここは寒すぎる。

君がいなければ、意味がないんだ。

俺の存在そのものが。

君は俺の全てだよ。

君にとって俺はどう映る？

君にとって俺は何？

俺にとっての君は、俺にとっての全て。

なら、君は俺をどう思っている？

———たったひとりの兄？

———人殺し？

———殺人鬼？

———化け物？

———人になれなかった、人でなし？

そうだ。俺は人でなしだよ。

だからこそその名だ。

俺を恨んでいる？

それでもいいよ。

俺を恨んでいる間、君は俺の事を忘れないだろう？

忘れ去られることは悲しいことだ。

なら、君がこのことで身を焦がすなら、それはとても嬉しい。

嬉しいよ。

君が俺を、恨んでいるってことがね。

復讐したい？ 許せない？ 憎い？ 恐い？ 傷つけたい？

痛めつけたい？ 後悔させてやりたい？ 悔しがらせたい？ 苦し

ませたい？ 殺してやりたい？ 生きてきたことを後悔させるほど

の苦痛と恥辱を味あわせたい？ 全てを原型を留めないほどぐしゃ

ぐしゃにしてやりたい？ 存在自体をこの世界から一片残さず消し

去りたい？ 人としての尊厳を全て奪い去りたい？

そう君が思うほど、俺は歓喜する。

許されてなんかやらない。贖罪もしない。

そうすれば君は何時^{いつ}までも俺のものだ。

君は俺の事を恨み続ければいい。

———だって、そうだろう？

君を殺したのは俺なんだから。

17 弾痕

横たわる、非の打ち所のない三点姿勢。

整っている分、冴え冴えとした鋭利な顔つき。

「……………」

照準を覗く。

——修正。

頬に風を感じる。

——修正。

吐く息が白い。

胴体から這い上がってくる冷氣が、体温を容赦なく吸収していく。

「——あ……………」

吐き出す、白い靄。

乾燥した空気に刺され、喉の奥がひりひりと痛む。

片目だけで見る視界は、偏りを隠せない。常に不均等で不鮮明だ。

けれど撃ち狙うこの瞬間だけ、彼は常人以上の視界を手に入れられる。

得物を手にした瞬間に死ぬ覚悟をした。その代償。

——下らない。

彼：リートは、風に黒髪をなびかせ思う。

引き金を包み、銃身を支える両手。

——冷たい。

手袋をしてくれば良かったのにと、客観的な意見。

だが、このままの方が…

——実感が持てて丁度いい。

安全装置を引く。滑り止めの凹凸が、かじかんだ指先に痕を残す。

もう、いつまでこうしているだろうか。

廃屋と呼んで差し支えない住居。

人気はない。

リートが今いる場所は、かつてはリビングだったのだろう。平和に中流家庭の一家が生活していた頃の残滓が色濃く残る。

——屋内だっただけマシか。

外は灰色の空。

同じ日の夕刻には雪も降り出すと予報されていた。

——凍え死ぬるとは思ってないがな。

誰もいない、荒れ散らかった室内。

窓は開け放たれている。防寒設備は皆無。

ワックスの剥げた床には、中から綿が飛び出した縫いぐるみのクマが、純粋な瞳のままにこちらを見ている。意思を持って何か言いたげに見えるが、中身はただの綿埃。

それを拾い上げる影がある。

「……忘れ物かな」

長く腰まである、リートよりも随分と洗練された黒髪を揺らし、少女は足の碎け傾いだテーブルにクマを置き直した。

彼女は床に寝そべるリートへと視線を向ける。

漆黒の、形質上有り得ない瞳を。

全身を黒い服で統一している所為か、華奢な印象は深くなる。

東方出身の少女——ある意味、常人離れした：人でなしの美貌を持ったレインという人物。

リートはレインに問うた。

「今、何時？」

「丁度二時。……あと、三十分」

「……そうか」

——どうしてこんなことになったんだろうな……

本来ならば、彼女はこの依頼に付随していなかったのに。

官庁の計らいというところが、物凄く……

——胡散臭い。

レインは無表情なリートを見て、くすりと笑った。

「何で自分がついて来てるのか……ってところ？」

彼女の、自らのことを自分と呼ぶクセ。……もう慣れた。

「別に……」

「こっちも訊きたいよ。リートなら、一人でも充分に任務を果たすだろう？ ……たとえば、どこかの誰かが背後から撃とうとしても」

「……………さあ？」

曖昧な返答。

ただし、レインの示唆は正しい。

今回のように、準備兵の警護を付けなくても、造作なくリートは狙撃をこなす。

狙撃手の敵は数多あるが、そのほとんどは目に見えない。

たとえば、暴風。

たとえば、背後の敵。

あるいは、味方の流れ弾。

上げ出していけば、キリがない。

——ああ、そういえば。

自分自身も、目には見えない敵だ。

恐怖や畏怖の念、疑念などによる心中の動揺が動作の変調に繋がる場合もあるのだから。

リートは吐息交じりに告げた。

「……背後から撃たれたら、死ぬよ」

内心で補足する。……『人間ならば、大半は』

レインは青年の呟きに興味を持ったらしい。

「相手がどんなに銃が下手でも？」

「ああ」

————即答。

レインはもう一つ問いかける。

「相手が、どこにいても？」

「撃てれば……な」

撃つ、とは弾丸が銃口から出るだけの発砲ではない。

撃つ行為は、撃つ対象、撃たれたもの、撃った者がいて初めて成り立つ。生きていても死んでいても、静物でも、動いていても止まっ
ていても同じだ。

彼女は問答を止めて、納得した。

「――そう。じゃあ、自分にもリートは殺せるのかな？」

単純すぎる疑問。

さらりと物騒なことを言う。

きっと彼女はこの瞬間も、刃毀れ知らずの芸術的な美貌を持て余し、
蠱惑的な笑みを無意識に発していることだろう。

しかし過剰な見目は、始末の悪い諸刃の剣だ。

彼女の質問は混じり気がない。けれど。

――詰まらない見戯。

「無理だ」

振り返りもせずに、再度の即答。

「どうして？」

「お前はそんなことを考えないだろう。だから撃とうともしない……
無理だ」

リートは論理立てて話す。レインは浅く嘲笑した。

「信用してるの？」

「――まさか」

「侮ってるの？」

「いいや。……だってそんなこと、お前には意味がないだろう？
レイン」

「……………」

返答、なし。

自分で言っておいて、違和感を感じた。

――意味、か……

「確かにね」

レインはそっと囁く。

「理由に縛られているんだろうな……」

——理由に拘泥している：の方が近い気もするが。
リートは引き金に指を這わせた。

廃屋の庭から、向こう側の歩道を歩く影が垣間見えた。
途端、全ての音が遮断される。

「無駄話は終わりだ」

神託の如く告げ、彼は引き金を引いた。

18 物品（上）

濃密な空気が漂う空間だった。

間取りや構造自体におかしい部分があるわけではない。

ただ、その場に居合わせている人物の性質が、雰囲気となって室内を満たしているのだ。

カウンターに座る数人の女たちは楽しそうに談笑している。部屋の隅のソファに何の抵抗もなく横たわる者もいた。

一見、場末の酒場と見える、質素な広い空間。

店内にいたのはいずれも女性ばかりで、年齢幅もある程度定まっている。

カウンターの裏側には、グラスを磨く人物の姿があった。

清潔そうなシャツに黒いパンツルックスの少女。

つい立て越しでは上半身しか見えないので、彼女が腰に大型のホルスターを吊っており、上着の裏にも薄刃のペーパーナイフを忍ばせていることに気が付く者は少ない。

背中に垂れ流す髪は、絹糸のようにさらりとしていて、存在感を放つ。

磨き抜かれたグラスを見つめる目は、有り得ないほどに漆黒だった。

そして、筋が通り整った鼻梁、続く柳眉、小さな顔の輪郭、花卉みたいな唇。全てが調和され、芸術品の域まで昇華されている。

同性でも初対面ならば、はっと息を呑む美貌だった。

彼女は白い布でグラスを磨き、またグラスを取り換えて磨く作業を延々と続けている。

カウンターを挟んで彼女の向かいには、露出度の高いドレスを着た妙齢の女性が腰かけていた。

「……働き者ね。レイン」

「お褒めに預かり、光栄です」

少女はグラスを置くと、おどけて返事をする。
妙齡の女は円熟した、色香の濃い口調で話す。

「…今日は、来るかしらねえ」

「お客をとるんですか？」

少女――レインの素朴な疑問。

「分かんないな。気分によるかも」

「はあ、そうですか…」

曖昧な返事。

「レインは知らなくても良いことよ。どの道ね、こういう仕事は雰囲気か命。後は酒の勢いで…」

「…ポジティブですね」

「お褒めに預かり、光栄よ」

女は言うど、カウンターに突っ伏す。

猫なで声で囁き、レインを上目に見た。彼女の十八番だ。

「お酒え、もう一杯」

「駄目です」

レインの即答。対する不満。

「けち…」

「肝臓ぶっ壊しますよ」

「いーの。もうぶっ壊れてるから。頭も、ここも……」
言って、女は下腹あたりを撫でる。

「いきなりネガティブにならないでくださいよ」

「浮き沈み激しいの、ごめんね」

女は半ば肩がはだけたドレスも構わずに、机上に頬を擦り付ける。
レインは内心溜め息を吐きながら、ふと入口を見やった。

入り扉の鐘が鳴り、男が数名で入ってくる。

途端、室内で気怠そうにしていた女たちが、意味のある視線を向けて入ってきた男たちを見た。

男は品定めをするように女たちを順に見ていく。

レインはさり気なく背後の食器棚の整理を始めた。わざと、男たちの視界に入らないようにしているのだ。

やがて数名の男たちは女と言葉を交わし、一人が一人づつ女を連れて建物の二階へ上がって行った。

この場所で日常的に行われている客選り。要するに、ここはそういう場所なのだ。

——ここは娼館だ。

金で男が女の体を買う所。

レインはその場所で、用心棒をしている。無論、娼婦たちの安全確保のためである。

レインは再び振り返ると何事もなかったかのように器磨きを再開する。

入口の鐘が、再び鳴り響いた。

——今日は、客が多いな……

他人事に思い、レインは胸ポケットに白布を収める。

入ってきた男たちが下卑た笑いをまき散らしながら、カウンターに近づいてきた。

三人連れのグループだった。内二人がひっきりなしに話し合っている。

——こっちは来んな。

嫌悪を隠さない本音。

男たちは女の胸や尻を触りながらこちらへ近づいてくる。

レインは彼らに背を向け、先程と同じく棚の整理を始めていた。

声は近づき、また遠ざかって行く。

ほっとして振り返ったレインの目の前に、その人物は居た。

——え？

内心の驚きを隠せない。

——人の気配は去ったのに……

話していた二人とはまた違う、三人目の人物だろうか。

男は真っ直ぐにこちらを見ていた。

背は高い、血のような赤髪。…赤髪の人物は他にも知っているが、彼のそれは禍々しい、血がこびりついたかの如き黒赤だった。この国では珍しい部類に入る形質。

厳しい目つき、どちらかというところと精悍な顔つき。お固そうな印象の男が娼館で遊ぶのだろうか。

意外性を感じ、すぐに振り払う。

——そうじゃなくなつて……

嫌な予感がした。

——どこかで見たことが……

赤髪の男は、カウンターの椅子の背もたれを掴み、そのまま腰を下ろした。

——ああ、やっぱり……

何も、自分の真正面に座らなくても……

心底の感情は表に出さないが、本音は今すぐに逃げ出したいということだった。

男はレインを真つ直ぐに見つめ、言う。

「……いくら？」

——やっぱり。

本日二度目だ。吐き気がするほどに危惧を裏切らない。

「客は取っていません」

淀みなく即答した。

「何故？」

「……」

——何故？ 何故とききましたか。

失笑したくなるのを抑えて、男の目を見ないで静かに告げた。

「自分はこの用心棒です。…ご理解いただきたいのですが？」

「用心棒…？ へえ…」

吊り上る男の口元。嘲る意味。

レインは背後のボトルを見やって言う。

「何か飲まれますか？」

「いや…酒は呑まないんだ」

——じゃあカウンターに座るな。

「殊勝な心がけですな」

「君は、今いくつ？」

——またどうでもいいことを……

建前から、一応事実を答える。

「十七です」

「へえ……」

男はレインの上半身を細部まで見やる。

——だからその目を止めろ。

「十七で用心棒？ 東方人で……？」

「そうですが。何か？」

「いいや。…君は売り子か？」

売り子…その店の看板娘、要するに客引きのことだが、娼館で売り子と言えば良い印象は欠片もない。

「違いますよ。…あの……」

「『レイン』ってのは君でいいのかい？」

「……え……？ はい……」

「そうか、噂を聞いたものでね」

「噂……？」

「そう。希少種の女の話。…君がフレイアだと思ったんだが、違うようだ」

——迷惑な勘違いだ。

「……ええ。違います」

「知っているのかい？ 彼女のこと」

問いかけに、言葉を選んで発する。

「…断片的に、ですが」

「ほう。例えば？」

——細かいな。

「……犯罪容疑を掛けられた人物であること」

「ああ」

「傭兵であったこと」

「そうだね」

「……自分と同じ、希少種だったこと……」

男は無言で目を細めた。

鈍い微笑みに、どうしてか背筋が凍る。

「……そう。そうだよ。本当に『高く売れそうな』女だった」

何かが心中でひび割れる音がした。

「……成る程……貴方は……売人ですか」

「売人という言い方はあまり好きでないな。お嬢さん。こちらは貿易商を語っているのだから」

人身売買の関係者。全く以って、虫酸が走る程嫌な記憶しかない。

——殺していいかな？

自分の中の暗い部分が蠱惑的に囁く。

「貴方も随分と珍しい容姿をしていますね……その上美しい」

「………」

——殺していいよね？

「フレイアは珍しかったが、美しさの面では貴女が断然上でしょう」

「………」

——殺そうか。

「十七歳と仰いましたね。十分だ」

「………」

——殺す

「引く手は数多でしょうし……」

衝動的な、渇きに等しい欲求の叫びを押し込める。

饒舌な言葉を遮った。

「何故、貴方はそのことを自分に言うのです？ 黙って捕まえれば良いのに」

「フレイアかどうかの確認が欲しかったのですよ」

男はカウンターに凭れ掛かり、レインの顔を覗き込んだ。

真っ直ぐに交差する視線。

レインはこの目を、以前にも、どこかで……

「ぼく以外の男に対する反応が見てみたかったんだけど……どうだろうね。素っ気ないのは変わらないか……あるいは……彼なら別なのかな……」

「……？」

彼は唐突に、饒舌に語りだした。

次に発したセリフに、凍りつく。

「……それとも、君にはこんな小細工必要なかったかな？ 『アレイン』」

男は嘲笑した口調で、やや先ほどよりも低い声音で言った。
その音質が、ある人物の声質とかぶる。

「お前、まさか……」

レインが二の口を次ごうとした途端、店内が騒音に包まれた。

扉の乱暴に開ける音。女の嬌声。硬い足音。

反射的に見た戸口には、武装した屈強な男たちがたむろしていた。
いずれも、こちらに銃口を向けている。

「取りあえず来て貰おうか。話はそれからだ」

男は余裕に満ちた表情で言い放つ。

レインに選択の余地はなかった。

18 物品(中)

車窓からは、歓楽街の喧騒と灯りが目まぐるしく映っては消えていく。

呼び込みをする娼婦と男娼。街歩く堅気ではない者の影。放蕩して夜遊びに耽る者。

目の痛くなる光景だ。

車道を黒塗りの車が走る。年代物だろうが、充分に快適な乗り心地だった。

——そう、こんな状況でなければ。

レインは両脇を屈強な男に囲まれ、身動きを取れずにいた。

先ほどまで娼館でレインに付け込んでいた赤髪の男は、前の助手席に座り込む。

一睨みにして、男に乱雑な声を放った。

「謀^{はか}ったな。カイス・フェーダクト」

カイスと呼ばれた赤黒い髪色の男は、笑みを含む。

「謀った？ 失礼だなあ。ぼくは頼まれた仕事を果たしているだけだよ？」

先刻とは打って変わった、飄々とした口調。

口元には酷薄な笑みが浮かぶ。

——迂闊だった。

彼は第二機関の傭兵だ。……どちらかというと暗殺者よりの。

彼が、髪色、瞳の色、時には性別まで偽って変装をすることを忘れていた。

——もっと早くに気づいていれば……

後の祭りだ。

「そういえば……アレイン、この前、ぼくのこと無視しただろう

？
」

先日の第二機関での出来事を思い出す。

確かに、エレベーターで鉢合わせした彼を、レインは素知らぬ振りをしてすれ違った。あの時は確か、クラインと呼ばれる少女も一緒だったか。

――だからどうした。

そもそも、あのときもお前は仮初めの姿恰好だったじゃないか。

「じゃあ何だ。自分はあるたの腹いせに拉致されてるってわけ笑わせるなよ」

「ん？ アレイン、今の状態で笑えるの？」

カイスは振り向きもせずに、含み笑いの声だけが車内に響く。

――嫌味な奴。

以前からそうだった。

調べたレインの本名でわざとらしく呼びかけてくることも、しつこく付き纏い、厄介ごとに引きずり込むことも。

初めて会った時から、体のいい標的にされてきた。

レインは力のある大男でもなければ、暗器の扱いに長けた暗殺者でもない。

一対四のこの状況から逃げ出すのは、まず無理だ。

いや、もしかしたらもっと大勢に囲まれていて、不利な状況は現在形で深刻化しているのかもしれない。

後ろの様子は分からないが、走る車の前後に護衛用の車が着いていたとしても、なんらおかしくはない。

そうすると、絶望的だ。

以後、どうなってしまうのかさえ、分からない。

――都合よく助けてくれる王子様か救世主を待って？

馬鹿馬鹿しい。

そんなものは一片の役にも立ちはない。夢想だ。

「押し黙らないでよ。もっとアレインの声が聴きたいな」

「……………」

——貴様の欲求を満たす義務はない。

口に出すと負ける気がしたので、唇を固く結ぶ。

「アレイン、今から招待したい場所があるんだ」

「……………」

——黙す。

「きつと、気に入るんじゃないかなあ。アレインも、先方も、
ね」

「…………何だって？」

思わず、反応してしまった。

——同時に、しまったと思う。

「君を『買いたい』ってお客さんがいるんだよね。ぼく、斡旋
業もしてるんだ」

——くたばれ。

くたばってしまえ下衆。

レインは怒りを嘲りに込めた。

「はっ、それでご足労？　ご苦労だなカイス。人身売買の次は
強制売春の仲介でも始めたのか？」

曝した口調に、赤毛の男の肩が揺れる。

「だってさ、アレイン、君。：別に『自分の体』がどうなろう
が、興味ないだろ？」

「知ったような口をきくな！」

怒号は、いきなり弾けた。

今までの、剣呑だが怒りを抑えてきた話し方とは違う。前面に
怒気を露わにした隠すことない殺気の奔流。

咄嗟にレインの左右の男が、少女に詰め寄る。

狭苦しい。押し潰されそうだ。

——だからどうした。

「腹が立つ。本当に、腹が立つ。お前は昔っから……」
銃のくびきが外された音が鳴り響く。

横目をやると右の男がレインの頭に、左の男がレインの腹に銃を当てていた。

ゴム弾用の銃機ではない、一息に命の火を消す凶器。

——くそつたれ……！

「アレインが怒るなんて珍しいねえ。……どうしたのかな？ 『彼女』を侮辱された気にでもなった？」

「言うな！」

身を乗り出す。

前の席に座る男の頸椎に、直接手を伸ばそうとした。が、手首を強い力で押さえつけられ、捻られる。関節が変な方向へ曲がった。

「……あ……く……」

歯ぎしりで悲鳴をひねり潰した。

「君の良い声が聴けて嬉しいよ。アレイン」

「……お前の耳、ただの節穴じゃないの……？」

手首が解放される。

もう少して、軌道修正が不可能なほどに曲げられるところだった。

鈍痛と、握られた痛みは服越しでも伝わる。

「そんなに怖い顔しないでよ。『彼女』にもらった綺麗な顔が台無しだろう？」

「お前が、姉さんを語るな！」

今にも噛み付きそうな剣呑な空気。

レインは壮絶なまでの怒りを載せ、美しい顔を染めた。

「殺す……殺す。絶対殺す……姉さんを侮辱した……殺す、殺す殺す殺す……」

——殺してやる。

絶対に……こいつも……

桜の花弁を連想させる唇から、呪詛が零れた。

しかし、殺気を投げつけられた当の本人は釈然としない様子で

「何言ってるの？ 一番『彼女』を侮辱してるのは、アレイン、君じゃないのかい？」

ほと、不思議そうに問うた。

———声が止む。

少女は男に押さえつけられたままに、頭を垂れ、黒髪で顔を覆った。

長い髪が、揺れる。

———くす。

か細い笑いが洩れた。一息で崩れ去りそうな儚い笑みが。
レインは息を吸った。

放たれるのは、言葉

「——Den so du willst das sehen an, Was S?nd' und Unrecht ist getan,
Wer kann, Herr, vor dir beieiben?」

美しい声で綴った。

詩歌を詠うように。

車内にいる誰もが、息を吞んで聴き入ってしまうほど。

異国の言葉を紡いでいる間のみ、車の機械音、車窓からの喧騒が一切遮断される。

ゆったりとした余韻を残し、声は収束する。

カイスが、口火を切った。

「『主よ深きふちの底より』か。…君は無神論者だと思っていたんだけど…」

答えたレインの声音には、それまでの怒りの色はなく

「無神論者だよ……今も昔も…」

代わりに、嵐の後の海のように凪いでいた。

小さく呟く。

「……簡単なことだ」

大したことはないと言うように。

「人には生まれた瞬間から罪があるってこと」

18 物品（下）

——ここ、どこ…？

手錠を掛けられて、車から蹴りだされる。

「着いたよ」

先ほどの横暴が彼らの気に触ったのだろう。少女に対する扱いは乱暴になっていた。

首裏に、銃口を当てられる。

少女——レインは為す術もなく指示通りに進んだ。

俯いたままに、足を引きずって歩く。

今までの荒々しさが嘘のように静まり返った彼女を、男たちはいぶかしむ。

赤髪の男——カイスが、少女の顔を覗き込んだ。

「諦めたのかい？」

「……………」

少女の口元が上下する。

何かを告げようとしているのか、小さくて聞こえない。

「なに？」

「……………」

耳を澄ました途端、少女の口元はぴたりと塞がった。

カイスは肩をすくめると、踵を返して進んで行く。

レインは男に肩を押されて、足を速める。

——ここ、地下……？

いつ、下ったのだろうか。

カビの匂いがする。腐った水道管の匂い。

暗い。

視界は狭い。暗い。…現在地は室内なのか、広いのか、狭いのか。

足元の地面は、石詰で固い。

———帰りたい……

レインは漠然と思う。

迎えてくれる人のいる家に帰りたい。暖かい食卓とベッドのある家に帰りたい……

頭が、ぼうとする。

——いけない……

これじゃ、いけない。このままじゃ…おかしくなる。

何度も、何度も頭に響く台詞。

「一番『彼女』を侮辱してるのは、アレイン、君じゃないのかい？」

——…そんなこと…

知ってる。

おかしくなるくらいに、知ってるよ……。

姉さん——ごめんなさい。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

どうしてだろうか、涙が出そうになった。

「ごめんな…さい……」

その一言が心中を埋め、塗りつぶしていく。

叫んでしまえたら、楽になれるのに。

——こんな場所じゃ、泣けない。

悔しい。

感情が堰を切らないように、押し込めて、捻り潰す。単調で、厄介な作業。

「ここだよ…」

声が聞こえた。どうでもいい声。求めていない声。

「アレイン」

「…、っ……」

名を呼ばれ、手錠を引かれて初めて我に返る。

——いけない。

ぼうとするな。我を見失うな。今居る地点を確認しろ。

すぐに頭はいつも通りの回転を取り戻す。

五感から入ってくる全ての感覚を頼りに、レインは思考した。

目の前は、ほの暗い。

街頭が立っている。

——地下じゃ、ない……

地下街だと思っていたのに、天を仰げば夜空がある。

——じゃあ、どこだ……？

地下街は迷宮の如く入り組んでいて、地形など分かったものではないが、現在地が地上なら、なおかつ、ザイフォンならば、十二区の配置くらいは頭に入っている。

どこに何があるかも、大まかにではあるが分かる。

せめて、ここが何区か分かれれば、居場所も掴み易くなるのだが…

…研ぎ澄ました聴覚に、一つの音が舞い込む。

——せせらぎ…？

水の音だ。水が流れて、高低へと順に下っていく音。

そこまで激しくはない。

——上下水道のどちらか…？

それとも

——水路…？

一つ浮かんだ候補に、ぴんとくる。

そうだ。これは水路の音だ。

下水道・上水道は衛生面の関係から 地下に取り付けてある場合が多い。水路なんてもの、ザイフォンでは滅多に見かけない…水路があるとすれば、それは……

——第六区。

間違いない。

下級市民の住居が立ち並び、あまり治安もよくない区だ。

しかし、大都市の一角だ。面積はそれなりにある。少なくとも一つの町くらいは。

六区内に住む人々は第六区内で生活を営んでいる。

他区の世話になることは滅多にない。

それは他区にとっても同じ、よってよっぽどの用事がない限り、他区の住民は第六区に近づかない。

ザイフォンの中でも閉鎖的な部分だ。

そんな場所に自分を連れ込んで、どうしようというのか。

夜目に慣れてきたお陰で、周囲が建物に囲まれた環境であると分かる。

その一点のみなら、何も不信感は抱かなかった。けれど四方を建物に囲まれている閉鎖的な状況は、説明がつかない。

四方から詰まる建物は、今にもこちらを押し潰しそうな威圧感を持続的に与え続け、気分が悪くなる。

闇夜で輪郭しか視認できないから、余計に。

「どうしたの？ アレイン」

男の声がする。

ぼやけた輪郭が、こちらを見下ろした。

「カイン、…ここは第六区だな」

相手が、賞賛のニュアンスを示す。

「驚いたな。分かったのかい？」

「軍都市で水路が通っているのは、共同水路として活用している貧困層が集まる第六区しかない」

「流石」

わざとらしい感嘆の声。

——吐き気がする。

「じゃあ、ついでに質問だ。…どうしてアレインをここに連れてきたと思う？」

——お前が訊くな。

拳を握りしめ、手錠の鎖が鳴る。

「ここじゃあ人攫いなんて珍しくもない。軍警察は第六区画のいざござには巻き込まれたくない……都市の死角だ。……これから闇市でもあるのか？」

「近いね。惜しいとも言う」

思わせぶりの台詞。

——うざったい。

「……じゃあ、マフィアへの受け渡し？」

「なんだ、ちゃんと分かってるんじゃないか」

「随分と前に、奴らに関わったことがあるからな」

軍拠点都市……一見治安が最大限に維持されているように感じられるこの街にも、裏側の組織があり、派閥がある。

半年ほど前だったか、用心棒とした雇われた。

やくざな相手との取引。依頼主は用心棒を抑止力としたかったのだろう。

見た目が少女だと油断した取引相手のマフィアは、レインの力を見くびった。

結果は、今レインの身に異常がないことが証明になるだろう。手ひどく自尊心を傷つけられたあちらが、レインに復讐心を抱いていてもおかしくはない。

もう少し、下らなくないことに力を注げないのか。

カイスは口唇に弧を浮かべつつ、話す。

「引き渡したよ。君を連れて来いって。無傷で、ね……」

「……………」

意味深な言葉。今のところ自分に害がなくても、この後どうなるかなんて分からない。

……となると、背後のカイスの取り巻きは、マフィアの舎弟ということになる。

雰囲気は堅気でないわけだ。

——今更、仕返しされてもな……
釈然としない。

溜め息を喉奥でころし、自身の頭を払う。

カイスはレインの目の前まで歩を進めると、面を覗き込んだ。

「アレイン」

「…何だよ。この変態」

「それは最大級の賞賛ととるけどね」

——気持ち悪い。

「せいぜい、足掻いてくれよ？ 無抵抗にどこの馬の骨とも知れない奴の肉玩具になるぐらいなら」

「貴様に言われる筋合いはない。元凶め」

「否定はしないけど…」

カイスはレインの髪を撫でて、指先でもてあそぶ。

最後に歪んだ笑みを載せ、囁いた。

「お休み。アレイン」

途端、レインの視界は真っ黒に染まった。

19 記憶(上)

灼熱の空気がとぐろを巻く。

息をする度に喉は焼かれ、不規則な息の音がした。
轟轟と、炎が音をたてる。

一人、涙の跡の残る顔を緋に染めながら、眩く。

「忘れ……ない」

喘息時のように掠れた声だ。

「覚えて……て……」

意識が遠のきかける。

「いつ、か……」

視界は焰の色だけを残し、歪み、撓^{たわ}み、崩れ去った。

「……………」

最後に言葉にしようとしたその意味は、燃え盛る轟音にかき消された。

「……は、……」

息を継ぐ。

「……はあ、……は、あ……」

喉の奥が、苦しい。

何かがつつかえているように。

衝動的に口に指を突っ込んで、俯く、

「う……え……、っ……」

吐こうとしたけれど、胃液混じりの唾液が落ちるだけだった。

「……はあ」

唾液まみれの指を口腔から引き抜いて、『自分』は何をしてい

るんだと、思考を復活させた。

口元を拭う。

——たしか……

「お目覚めか？」

はっとして振り向く。

そして、先ほどまでは自分の腕に嵌められていた手錠がないことを理解した。

室内の内装を見止める。

何の変哲もない、客間だった。

自分が寝そべっていた場所がソファだったと気が付く。

ぬめる指先をためらいなくソファの布地で拭き取って、レインは立ち上がった。

…途端に、視界が反転する。

足がもつれて、歩けない。

「スタンガン。規格外の代物を使ったんだ。今は安静にしている」

「……あんた、誰だよ……」

一心に舌を動かす。

「会うのは初めてか。君がお世話になったコーザ・ノストラを仕切っている者だ。名をライフット・ベラルーシ・シチリア。…部下が迷惑をかけたようだな」

コーザ・ノストラ——俗に呼ばれるマフィアやファミリー
の古式名だ。

「…は、仕切ってるって…？」

「首領だよ」

聞いた途端、背筋に悪寒がはしった。

——マフィアの長…目の前にいる男が…？

ライフットは暗がりから姿を現した。

意外なことにまだ年若い、その上物腰柔らかな金髪の優男だ。
しかし、長身で肩幅がある。眼鏡越しの炯眼がレインを射抜い

た。

「…意味が、分らない…」

「だろうな。半年前の件を覚えているか？」

男はレインと向かい合う形でソファに座った。

「…ああ」

「あれは、こちらの不手際だった。取引に行かせる人選を誤った」

胡乱な頭のままに、男の言葉を耳に入れる。

「実は礼を言いたかったのだが、早とちりな部下が迷惑をかけたようだな。…すまない」

「……は…？」

こいつは今、何と言った…？

目を剥いて、レインはライフットへ視線を移す。

金髪の頭を下げ、彼は謝っていた。

「……おい、待ってくれ」

思わず、口走る。

「あんたは、自分を憎んでいる。…違うのか…？」

「アレイン・ヴィアルドレッド。…君にはむしろ感謝している」
見開いた目が、顰める眉で相殺される。

「……なぜ、本名を知っている？」

「ある男から聞いてね。良い名前だと思うが」

「………」

——カイスか。

徐々に鮮明になってきた頭で、レインは考える。

「まあ、連れてきて欲しいと依頼したのは事実だがね。…早とちりな部下が君を手籠めにしようとしたらしい」

「…下っ端の賤くらいしっかりして欲しい」

「全くだな」

ライフットは意外なことに、口端をわずかに上げた。
笑ったのだ。

レインはやっと、目の前の人物が敵ではないと認識できた。

「そこで。君には話したいことが…」

「水」

男の言葉を、少女は遮る。

聞き返すでもなく、ただ彼は彼女をじっと見た。無言の催促。

「水だよ、水をくれ。気持ち悪いんだ」

「…気がきかなかったな。済まない」

ライフットは踵を返して、部屋の扉の向こう側にいる誰かへと同じことを命じた。

程なくして、スーツ姿の男がコップ一杯の水を持ってくる。

白い喉を上下させ、何の造作もなくレインは水を飲みきる。

ライフットはその様子を無表情に眺めていた。

「……何？」

嫌気がさして問いかける。

「いいや。毒が入っているなどとは考えなかったのか？」

「知らないよ。そんなこと。喉が死ぬほど乾いていたんだ。選

ぶ余裕なんてないな」

レインの端的な答えに、男はまたくすりと笑った。

「…何なんだよ……」

大した意図もない。苦い胃液の残留を流したかったただけだ。

「…それで、話っているのは…？」

「ああ。それなんだが」

レインは、この時あらゆる可能性を想定し、危惧していた。

しかし男が放った内容は、思考の範疇にないものだった。

「――うちの傘下に入ってくれないか。アレイン・ヴィアルド
レッド」

「……………」

「……………傘下…？」

つまり、部下…下っ端…………仲間…………？

マフィアの？

口調を正した先で告げる。

「御冗談を」

「本気だ」

即座に言い封じられた。

「……どうして？」

「直接的に言おう。アレイン・ヴィアルドレッド、君が欲しいんだ」

「……」

——はあ。

「君は腕利きの傭兵だと聞いた」

「……百聞は一見にしかずと言いますよ。……噂などその程度のものでは？」

「そうかもしれないな」

ライフットは目を伏せ、しかし、と続けた。

「利用価値の噂の真偽はついでだ。……アレイン、君と実際に会って分かったことがある」

——……はあ。

「君は噂以上に美しい。今まであったどんな女よりも」

もう、なんかもう、考えるのが面倒になってきた。

「……褒めて、くれてるんですよね」

「勿論。……あわよくば、君が欲しい」

——どこかで似たようなこと言った奴がいたな……

他人事みたいに思い出す。

本日、何十回目かも分からない溜め息をかみ殺す。

「……首領さん。それは間違いです」

「なぜ？」

「自分は美しくありません。貴方なら、知っているでしょう？
自分よりも顔も体も満足がいく相手が、世の中には数えきれないほどいるって」

「謙遜だ。君は今まで会ってきた中で一番美しい」

ライフットの告げる言葉に誇示や偽りはない。

レインはある意味人間離れした美貌と、珍しい形質の色を持っている。

——そうかもしれない。

自分でも思うが、特に嬉しいとは感じない。

傲慢だと、他人には感じられるかもしれない。

人が羨み、ため息が出る美貌を持っている…なのにこうして謙遜するというのは。…けれど。

「首領さん。…自分は、これは……」

レインは吐息ほどの小さな声で、告げ、自らの整った顔の縁を撫でた。

「自分のものではないんです」

哀しげに、一言だけ告げた。

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味です。…自分、…私は、こんな顔ではなかったんです」

すんなりと話している自分を不思議に思う。

「整形手術でもしたのか？」

「…似てるけど、違います。正確には…移植手術です」

首裏をそつと押さえる。

髪に隠れて見えないが、ここにも手術痕が残っている。

「誰から…とかは聞かないでください。自分に話せるのは、これだけです…」

「君は…アレイン、君は自分の顔を自分のものと認めていないのか」

「……認められずにいるんです」

長い間。

「自分は、自分です。『彼女』じゃない。『私』だった頃にも戻れない」

「…じゃあ、君は誰だ？」

少女は、笑った。

この世に、これ以上美しく淑やかで…切ない笑みがあるだろうかと言う微笑で。

「アレイン・ヴィアルドレッドといいます。…できれば、レインと呼んで欲しい」

「レイン…雨。そうか…『一つの雨』」

「素敵な名前でしょう？」

「ああ」

ライフットはレインを見つめ、微笑む。

「…君は、何故初対面の私にそんな話をするんだ？」

レインは問いかけに、苦笑で応じた。

「…時々、誰かに話して、言葉にしないと…分からなくなってしまうから。それと、私がこのことを隠しているわけじゃないから」

「それだけか？」

「…それと、命を助けてもらいましたし」

レインが眠っている間、断続的に聞こえてきた争いの声。自分を必死に擁護して、相手を説き伏せる彼の声。見ていなくても胸に染み着いている。

「恩か？」

「命の恩人に隠し事はできません」

「…レイン、君は私を恨んでいると思ったのだが」

「確かに。自分はマフィアなんて嫌いです。暴力と蹂躪の塊だから。…それに、薬物や人身売買もするから…それが特に」

淡々と告げる。

憎しみも怒りもなく。

「君は不思議な人間だな」

「…だけど、人間であることには違いありません」

「ああ」

頷いて、ライフットは頬杖をつく。

「君を…レイン。君自身を好いているのならば、私の願いも聞

き入れられるのか？」

「……えーっと……それは……」

一度、目線を天井に上げる。

「分かりませんね。貴方のことが、自分にはまだ見えない」

「そうか。残念だ」

「……けど、……そうですね……」

レインは顎先に指を添え、思案する。

「……マフィアも貴方の肩書きも関係なく、自分に依頼があるときは、是非使ってください。……自分は準傭兵ですから」

「仕事熱心だな」

「それは、自分にとっての褒め言葉です」

はにかんだ笑みを浮かべ、レインは席を立つ。

「もう行くのかい」

「自分は忙しいんです……結局、依頼の途中で拉致されてしまいましたし。……あちら様が怒っているかもしれませんね。……無理にでも、引き留めますか？」

試すような眼。

「いいや。そんな無粋なことはしない」

「感謝します」

頭を下げて、レインは扉へと踵を返した。

後ろから、声が追う。

「リート。彼女を送ってくれ」

「了承しました」

静かな返答に、扉が開かれる。

目の前には、先ほど水を運んできた隻眼に黒髪の青年が立っていた。

レインはじつと彼の顔を見て、やっぱりと確信を持つ。

「仕事だったのか……」

呟きに、青年が片目で扉の向こう側を示唆する。

「生憎な。お前の受け渡しの抑止力に使われた」

「いいじゃないか。仕事があるうちは」
軽口を叩き、二人は部屋から出て行った。

19 記憶（下）

夜道を歩く二つの人物は、街頭に自らの影を回す。

断続的に響いてくる工場の音、水路の水の音。全て闇に吞まれて、得体のしれない物音に聴こえた。

道行く二人の内、男の方が声を放つ。

「災難だったな」

「…まあね」

応じるのは、透き通る女の声。

小さく頷いて、女性のやや前を歩むリートは、ある名を告げる。

「カイス・フェーダクト…か」

「うん」

「あいつは…手段を選ばない」

「ああ…」

一番、自分が身に染みて分かっている。

初対面から予感はしていた。彼の人物は『加害者』だ。『捕食者』でもある。

紛れもない、衝動的な感情への狂信者。奴の顔面を思い出すだけで嫌悪が奔る。

レインは僅かに首を振って妄執を払い、無理に話題を転換させた。

「護衛の仕事もしてるんだ…」

「場合によっては。少ないがな。生活の糧は多いほど良い」

「…そうだな」

彼女は納得し、街路の帰路につく。

逡巡を感じた後に、口に出した。

「自分とあの首領…ライティとの話を聞いていたか」

「…ああ」

リートは伏せた目をおもむろに上げ、レインを直視した。

「仕事だからな」

「…うん」

しょうがない。彼はあちら側に着いていた。

別段、恨んだりする必要はない。話したことをも後悔はしていないのだから。

リートのことだ。放っておけば特に言及もしないだろう。

—つまり、信用しているのか…

自分の中にある意識だろうて、全てが手中にあるわけではない。

だからこそ、人間という生き物は、曖昧で、中途半端で、中庸な態度をとってしまう。

「時々、言葉に出してるだけ。自覚するために」

「………」

自覚—すなわち。

「…お前は、許されてないんだって、自覚するために」

—罪咎。

消えることない。罪惡の意識。

喪失は文字通り、体の一部を失うと同等の欠落を味わう。ならば、咎は何を与えるのか。

—重荷だ。十字架を背負う。どんな道程でも、どんな状況でも。

背負ったままでは上手く歩けない、笑えない、人を愛することを出来ない。

両手が塞がったままでは、愛する者を抱きしめられない。

それが、罪の罰。

「…必要、あるのか？」

「え？」

「レイン、言葉は必要なのか？ 言語として表すこと、文章化してしまうこと…本当に必要なのか？」

「………」

—分らない。

レインの沈黙をどう受け取ったのか、一人心地でリートは呟く。

「俺は…口にしたら全てが清算されてしまう気がする。…怖いんだ。言葉が」

「怖い……？」

肯定して、リートは身を翻した。

蒼く薄暗い瞳が、茫洋とレインを捕らえた。

「レイン、お前は誤りで人を斬るくらいなら、自らが斬られることを選ぶだろう」

「……それは…」

「別にお前の考えに口出しをするつもりはない。…寧ろ、お前らしいと思う」

「そんなことは、ないよ…自分は、人だって斬れる」

——事実、斬りたいと思ったこともあるのだから。

「人だって？」

「そうだよ。…斬る必要があると感じれば。リート、お前だってきつと」

見上げた互いの瞳は、何も映さない。

夜闇の向こうの相手が、どんな顔をしているのかさえ。

「斬ってもいいと判断した人間はいるのか？」

「いるよ」

「お前は、そいつを斬るつもりなのか？」

逡巡はない。決まったことだから。

「…うん。自分には、それだけだから」

「それだけ？」

「…うん」

彼の言葉はいつだって真っ直ぐだ。

歪みない、率直な言葉。だからその分、突き刺さると痛い。

「——嘘だろう？」

「…え？」

「復讐か、自分の定義で人を殺めるのか…俺には知らないことだな。レイン」

一度、息を吸う。

「――人を殺す為に生きている？ お前はそんな下らない人間じゃない」

「……どうして？」

「人を殺めるのは下らない人間の所業だ。それこそ……俺みたいなの今度は見えた。」

彼の、普段は滅多に見せない苛立った視線。

レインは漠然と思う。

「……こいつでも、感情を表すんだ……」

「レイン……お前は俺と同じ下らない人間か？」

「……何が言いたいのか、分からないよ」

「人殺しで愉しむ人間かと訊いている」

「……………」

冗談でないと、彼の瞳が告げていた。

でも、おかしい。

彼は人殺しを愉しんでいるのか？

「……愉しいわけ……ないだろ……」

「だろうな。だからなレイン。お前と俺は違う人間なんだよ」

――今、彼はとても重要な思いを告げた。

なのに、胸に落ちてこない。

底なし沼。何時まで経っても、輪郭さえ掴めない。張合いがない。まるで空気みたいな言葉。

「……リート」

「ああ」

掠れる声で、レインはやっと口にした。

「人を殺すのは……愉しいか……？」

否定して欲しかったのかもしれない。否定して、笑い飛ばしてくれれば幸いだった。

「――愉しかった」

浅はかな望みだったと知った。

「ああ。愉しかった。…愉しいと思い込まないとやってられないくらいにな」

「……何が言いたい？」
再度問う。

「人間は便利な生き物だ。自分に都合の悪いことはな、全部、そうでなかったことにしてしまうんだ」

リートは腰のホルスターから銃身を抜き取る。

この形は、彼が愛用しているオートマチックだ。

指を引き金に掛けないまま、リートはおもむろに銃を差し出した。

——レインの、首元に。

全く、反応出来なかった。

急所を造作なく取られ、レインは為す術もなく立ち尽くす。

目の前に、銃を構える彼の手が見えた。

彼はどんなに寒かろうが、銃を持つ時は手袋をしない。凍える寒さの中で金属を持つことは、凍傷の原因にもなるのに。

銃身でレインの首脇の髪を掬い、流す。

トリガーに人差し指は入れられず、安全装置も外されていない。…なのに、殺されるかもしれないと思った。

銃はゆったりと耳元を掠め、レインの頬に当てられた。

リートが無表情に問う。

「……今、何を感じる？」

レインは囁きで応じた。

「…冷たい」

頬に触れる銃は、確かに冷たかった。

硬質な無機質で金属質な感触。冷たい、冬の冷氣に同調し、増幅する冷感。

「…何が見える？」

「……リートの手」

微動だにしない、欠点の打ち所がない構え方。

「…何が聞こえる」

「……声：風の音と、心臓の音」
大して緊張しているわけでもないのに、さっきからずっと鼓動が煩い。

小刻みに打ち鳴らされて、いい迷惑だ。

銃が、下げられた。

名を呼ばれる。

「レイン」

「……うん」

拙い返事。

「お前のありのままに感じたことが、それだ」

「……うん」

「俺は、それをずっと捻じ曲げてきた。……だから、愉しくないことも、愉しいと感じれる欠陥品になったんだ」

「……それって、つまり……」

「本当の感情が分からない。……こうなるのが嫌だったら、自分に嘘は吐かないのが一番だろうな」

「嘘……」

「簡単だ。同時に難しいこともある。在りのままに居れば良い」
「……」

レインは言いあぐねた。返す言葉が見つからなかったのだ。

在りのまま……どうだろうか、自分は、ありのままの自分で在るのだろうか。

——分からない。……けれど。

「……大事なこと、有難う……」

レインの独白に、リートが少しだけ目を見開いた。
反芻してか細く告げる。

「……大事なこと、教えてくれて有難う……」

「……ああ」

驚いているのか、彼の反応はやや間が空いた。

「……どういたしました」

雲の切れ間から、星が覗いた。

皮肉なことに、あの時見た夜空に似ている。

レインは肌寒さを直に感じながら、茫洋と知った。

——ああ、そうか。

空は何処へも繋がっていて、同じなのか。

冬らしい饅飩^{うどん}な空に、厚い雲が漂う。

息を吐くと白い靄が生まれて消失する。その繰り返し。

道行くレインはそつと黒瞳を伏せた。

——思えば、少し憂鬱だったのだ。

何故と聞かれると上手く応えられないが、ただ、うつすらと霞がかかった曖昧な感情が、心底に掃き溜めのように積もっている。

——嫌な予感。予兆：昔からよく当たった。

全然嬉しくない。

洋風な赤壁の街中を抜けて、街唯一の高級住宅街区域に足を踏み込む。

現在地は第5区。よって李清の家からはおよそ北側に位置している。徒歩でも距離は差ほどない所だ。それでも、空気が明らかに違う。

閑静な住宅街は洗練された雰囲気で、住む者の心情でも表しているかのよう。

自分みたいな逸れ者は、一生縁のない場所であることは明白で、丁寧に舗装された道に人影はない。両脇に軒を並べる屋敷は、それぞれに個性を主張しあって似たような建築さえ珍しい。

稀に庭師でも雇ってるのかという程の、芸術性の高い庭園を持て余している屋敷もあれば、侵入者を頑固拒否するような高い柵を尖らせている屋敷。挙句の果てには、玄関先に変なオブジェが飾つてある屋敷まである始末である。

世間的に言う贅を尽くす：とはこういうことなのだろうか。

歩道を歩いて、外見を見ているだけでも豪華なのだから、館の中はもっと凄いのだろう。

…いや、案外見せしめで中はそこまでじゃないのかも知れないが。

フードを深く被って襟を詰める。

普段はあまり着る機会のない、丈が足元まであるロングコート。やっぱり色は暗めでブラックに近いグレー色。その為レインの細く長いシルエットが浮き彫りになる。

――…軽装だったかな。

ふと思う。

今更何とやらなのだが、任務に向かう姿勢として少し甘かったかもしれない。コートで隠しているものの、腰のベルトの接革のホルスターには居合い用の薄刃の刀、それに雌雄一对の短刀。あとは連射式拳銃が挟んであるくらいだ。

しかしながら軽装の方が、返って気が引き締まるかもしれない。そもそもこちらの方がよく身体に馴染む。

なるべくポジティブに考えたい。

レインの目の前のＴ字路の突き当たりに、これまでの屋敷とも引けを取らない豪勢な建築物が現れた。

――…あそこか。

この辺りは仕事の関係で何度か訪れたことがある。御陰ですぐに見つけた。

件の屋敷も例外になく高い塀が張り巡らされ、入り口部分だけ高い柵になっており、その柵というのが棘を象った禍々しいものだった。

触ったり上登ろうとしようものなら、比喻でもなく怪我をする。

塀の脇には、見慣れた人物が立っていた。

端正な顔立ちに蒼い瞳、黒色系の髪は長くもなく短くもない丁度良い長さ。片目は前髪で覆われている。

コンクリートの壁に背を預けるようにしたそいつは今日も無表情で、仏頂面のままに一度、空を仰いだ。

よく見ると楽器のケースのような物を片肩に掛けている。

気持ちほど足早になって、『自分』は彼の視界に入る位置まで近付いた。

「…ごめん。待たせた」

「今来たところだ」

——最近、頻繁に会ってる気がするな…

もう見慣れた顔。冴えた瞳。

リートは興味なさそうにレインを一見すると、ふと顔を背けた。独り言のようにぼつりと洩らす。

「…問題はもう一人なんだけどな」

「え？」

「知らされてなかったか？ 今回追加要員で一人増えたんだよ。だから三人か」

「自分は聞いてないけど……」

そういうことは早めに認識しておきたい。

——増員か……

第二機関がこういう手違いやミスするのは今回が初めてで、何だか意外だった。

ふとユウの顔が浮かぶ。

彼だって全ての業種を一人で管理しているのだから、失敗があっても許せるのだが。

ともあれ二人だけよりは断然良かった。

正直ほっとしている自分に気が付く。

——問題はそれが誰か、ってのなんだけどな。

道が交差する路地。それを見通せる位置で辺りを見渡してみる。

路上を風が吹き抜けていくだけ。

気まずい空気になる前に先手を打った。

「なあ、そのもう一人って……」

途端、視界の隅に何かが降り立った。

たん、という軽快な音。

「…っあ、悪い。待たせたっぼいな」

慌てて目をそちらに向ける。

レインのすぐ傍で、片膝について通路にしゃがんでいる男。彼は服の埃を叩きながらこちらへ振り向いた。

短い短髪は土濁色で、項辺から刈上げている。茶褐色の瞳に両耳にはカフスピアス、服装は黒いジャケットにジーンズというものだった。年はおそらく40に届くか否か、：一見するとどこにでも居そうな一般人。

でも豪く臥体がたいがいい。身長もリートより高そうだから180後半か、90位だろうか。

彼はこちらに駆け寄ってくる。

さして身長も低くないレインでも、必然的に見上げる形となった。

——この人か。

レインが開口する前に、男の方から示唆した。

「即務第二機関……ですよね、二人とも」

二人は静かに頷く。

「俺は傭兵のノイシュ・アルカード」

彼は言いながら、ズボンのポケットからキーチェーンを取り出す。

それは、隠品で即務第二機関に属するものにしか与えられない代物だ。

レインも首元から掛けてあるチェーンを取り出して、傾けて通されたプレートしかを傾ける。リートも然り。

暗黙の了承。

確認は終了。

「自分はレインです。準備兵をしています」

「狙撃手の、リート・セディシアと言います」

必要最低限の自己紹介を済ませて、正門へと向き直った。

彼：ノイシュ・アルカードは頭を掻きながらレインに尋ねる。

「えーっと：何故に正門から突入ってんのが、俺的に摩訶不思議なんだが……？」

「見せしめでは？」

――そう。今回の仕事は屋敷の身辺警備。

……というよりはボディガードに近いかもしれないが。

不意に高い電子音が鳴り響き、今まで微動だになかった柵がぐらりと動いた。

見ると、柵の向こう側、透かし見てみると誰か居る。

「――この度は我が主人の依頼にて訪れ頂き、有り難く思います」

落ち着いていて、洗練された女性の声がした。

柵が完全に開いて、向こう側に立っていた人物の容姿がはっきりと確認する。

目線の先に立つのは、大人の女性だった。きちんと後頭部で結い、三つ編みにしてぐるとまとめた髪は、プラチナブロンドで眩しい程だ。小柄な体つきで琥珀の目つきは無機質なものの、口元はきゅっと結ばれていて、彼女の人柄を表しているよう。

よわい
年齢は20代前後だろうか。

純白のブラウスに、胸元では真紅のリボン。丈の長いジャンパースカートの上にカフェエプロンのようなものを纏い、過度の装飾もなく、丁度良いアクセントをつけたような服。

全身的に清潔感を感じさせる服装と物腰。

「この屋敷でバゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワ様の使用人を勤めております。セレナータ・カングルツペと申します」

深々と頭を下げてから、彼女は彼等を一瞥した。順に彼らを視界に収め、端のレインを視認した時に少し目を丸めた。

反応は認知できないほどに、微かなものだったのだけれど。こういうことに慣れっこのレインは、特に注意せずに流した。

「侍女さんですか？ この後の手筈を……」

一歩前に出たノイシュが、セレナータ・カングルツペと名乗った彼女に問いかける

「私のことはどうぞ呼び捨てで構いません。こちらへ……ご案内し

ます。」

踵を返して前方に行く彼女。
ちらりと左右に視線を送ってから一行はその後に続いた。

門からは真っ直ぐに石畳の道が続いていて、左右は庭園に取り
囲まれている。

今は時期じゃないから花の類は少なかったが、鼻孔を擦る香草の
香りがどこからか漂ってくる。

芝生は綺麗に刈りだされて、均等にならしてあった。

不思議なのは庭園の部分々々が、まるで完成したパズルのよう
に欠けることも、何処か不一致なこともなく、全てが調和しあつ、完
璧に等しい空間を作り上げていたこと。

豪邸によくある嫌みたらしさや、見せしめ感はなく、同じ場所に
居るだけで心地良い空間と言える。

無学なレインでも分かる。質素な中にもかなり手を掛けている庭
園だ。

眼を奪われるとまではいかないが、感心する。

「……………」

——あれ……、…？

コツコツと石畳の上を歩いて、ふと前に行く侍女の足元に違和感
を感じ……

しかし違和感は、一瞬で消失した。

玄関の前の数段設けられている石段を上って、彼女はそっと両番
扉を開けた。

開き扉の両方に長い取っ手がついたものだ。

前に出て押さえて、レイン達に先に中に入るように促した。

さり気ない動作でも目を奪われるほど静かで綺麗。

小さな仕草でもそうなのだから、きっと一市民…いや、傭兵崩れ

とはやはり教養が違うのだろう。

中へと誘われて入ると、ロビーは広々としていて、閑散とした空気が流れていた。

床は大理石で、縦横十数メートルの正方形の空間。

部屋の相対する角には緩やかなカーブを画く階段。

壁や階段の各所に視線を循環させるが、過度な装飾は見当たらない。

天井から橙色の照明器具が下がっているが、部屋の内装同様に一見にして簡素な物だった。

——貴族の館、だよな。

レインは想像よりもシンプルな内装に、違和感を感じた。

もしかしたら家主は隠居住まいなのだろうか。勝手な想像ではだが。

カングルッペが先頭を切って歩み出る。

階段を昇って、二階の廊下へと出た。

壁の片面が窓になっている廊下は日光を取り込みやすくなっていて、外は曇天だというのに白い光が光の筋を創っていた。B級のホラー映画でよくあるような構造に、デジャヴを覚えながらも進む。一行は無言だ。

案内していた侍女の足が、ある部屋の前で止まった。

軽く背後に目配せをしてから扉を開く。

木の軋む、気味の悪いくらい重苦しい音が響いて、部屋の内部が露見した。

21 退廃

彼らが通されたのは、薄暗い、照明の見当たらない部屋。

その分窓が大幅に設えてあるが、夜は漆黒の闇と同化するであろう空間だ。

「お連れ致しました。御主人様」

彼女はそう言い残すと、流れるような足取りで唯一人の横へと並ぶ。

彼は車椅子に腰を掛けていた。

まるでレインたちが来ることを予期していたのかのように、こちらを向いた状態で。

高齢の男だ。頭は剃髪で、眉間に刻まれた皺のせいかやけに眼光が厳しく見える。

——ああ。この人が。

初見で理解した。

男は皺枯れた声でごくゆっくりと挨拶した。

「：我はバゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワ：この屋敷の当主だ。
足労をすまない」

まず口を突いて出たのは労いの声。

「官長とは旧知の仲だね。今回の依頼を受けてくれたこと、厚く感謝している」

——官長の旧知？

レインはひっそりと訝しげな顔をした。

地下の部屋から一步も出ない機関の長に、気心の知れた相手があったこと自体驚きだ。

「貴方方呼んだわけをお話ししましょう」

屋敷の主は声音は見た目ほど厳しくはなかったが、人間離れした厳肅さが滲み出ていた。

は部屋中に染み渡る。そして、一定の距離を保って聞いている彼等にも、波紋の如く伝わってくる声。

彼は片手を挙げて、侍女に合図を送る。

「セレナータ。…手筈は頼んだ」

「了承いたしました」

女は静かに発韻した。

侍女：セレナータ・カングルッペは一度息を浅く吸い、告げる。

「――今回、お頼みしたいのはこの屋敷の警備、並びにこの屋敷主であるバゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワ様の身辺護衛、安全確保です」

機械的な口調。

「簡潔に申しますとボディーガードです。当件の依頼主であるこちらから要求する条件といたしまして：一つに警護は一名交代で構いませんが、その際に空白の時間を作らないこと、欠員等もつての他です。マスターは貴方方の任務中、屋敷内で過ごされます。殆どの場合をこの部屋の警護と考えて頂いて結構です。

期間は3日間とさせて頂いておりますが、有事の場合は延長させて頂いただきますのであしからず。

また、寝食はこちらで供給いたしますので、利用していただけると幸いです。

…こちらからは以上です。この後、各自にあてがった客間へと案内させて頂きたくします。入用の際は私に声を掛けていただければ十分です」

何の気なしに、すらすらと説明した侍女。

彼女の表情は微動だにしない。

精密に作られた人形と例えるにはあまりにも生々しいが。

聞いているこちらが感心してしまった。

接客技術とは言い難いが、成程、彼女は見た目以上にプロだ。

「失礼、ちょっと」

遠慮がちに挙手したのは黒ジャケットの男：ノイシュ・アルカー

ド。

レインも目配せする。

「どうぞ」

「あんた、言ったよな。警護は一名交代で構いませんって、それは一人警護で十分ってことか？」

「それは：あくまでも最低でも一人は護衛にあたっていて欲しいということです。睡眠時間や食事時間は別に致しましても、常時二人以上居てもらいますと、こちらとしても助かります」

彼女は、彼らを見渡した。

軽く首肯する。

他に異論・意見がないことを確認すると、自らの主人に深く一礼してレインたちへと歩み寄る。

彼女は振り向いて、説明を始めた。

「勝手ながら、こちらで用意しました宿部屋へ案内致します」

するりと脇を通り抜けて、後手に扉を開いた。

「いらっしゃってください」

重苦しい空気の部屋の、出口が開かれる。

示唆され、連れの二人は造作なく部屋を後にする。

レインは横目に、部屋に残された老人を振り返った。

男は車椅子の向きを変えて、今は戸口に背を向け窓の外に視線を送っているようだ。

「……………」

孤独な老人：そんな言葉が思い浮かんだ。

——浅はかだな。

誰しも最終的にはそうなるというのに、憐憫の視線を送っている自分は愚かなものだ。

——扉を閉める音が響く。

22 相違

依頼主との面会を終えたレインたちは、一階に降りた。

物静かな館の内、侍女のカングルツペに部屋に案内される。

今回の依頼は、泊りがけだと聞いていた。

寝食の為だけが必要最低限の目的の部屋ならば、3人同室でも別に驚かない。

——…いや、そうなるだろうなと思っていた。

あまり気分の良いものではないが。

一行は一階の応接間スペースを抜けて横手の奥に向かう。二階と同様に一定間隔で、部屋と窓が設けられている廊下に差し掛かった。

「部屋の関係も有りますし、人分けさせていただきます。この部屋に、その二方。貴女は…」

侍女は手振りを加えながら指し示していく。

「二人、一人、で、あの突き当りの部屋に……」

半分を聞き流していたが、ふと違和感を覚えた。

レインは話の腰を折るように声を挟む。

「…？、あ、自分だけ別室ですか…？」

「……？」

レインの質問に、彼女は数瞬きよんとして首を傾げた。

おそらく、初対面の時から今までで初めて見せる、最も人間味のある動作。思いがけない仕草に、迂闊にも少し可愛いと思ってしまった。

彼女は身長こそ低いものの自分より年上だというのに。

「いや、なんですかその顔。自分だけ特別扱いされるのは居心地悪いんですが……」

今度は上の空で対話を流していたノイシュ・アルカードまでも

が、変な顔でこちらを振り返った。

——なんかまずいこと言ったかな……

ふと、レインが横を見やると、リートは軽く目配せをする。

『……………』

彼の隻眼は、少し呆れているようにも見て取れた。

益々不満が募ったが、顔には出さない。

「…そこまで信頼を置いていらっしやるのなら、それでもいいですが？」

——いや、何？ その？は。

レインは不審がりながら、両者の男女を見やる。

…その時、気がついてしまった。

「あつ、やっぱいいです。別室で」

ここに居るノイシュとカングルッペはレインの事情を知らない。

「では。配備はこれでいいですね？」

彼女は念を押すように目を配り（ほとんどレインに対してだったが）再確認する。

「…はい」

「それでは各々方の準備が整い次第、お手数ですが玄関までいらして下さい」

彼女は華麗に一礼して、黒いロングスカートを翻して去っていった。

自分に割り当てられた部屋…何故か他二名とは距離が離れている位置に入り、レインは一息吐いた。

「……………」

——失念していた。

時折、自分が女だということを忘れてしまう

——もう慣れたけど。

姉さん、ユカリ、どうやら自分もそろそろ年貢の納め時…じゃあないけど…何か……

先程の出来事を反芻しながら、また溜息をついた。

倦怠な動作と平行して部屋を見渡す。

部屋の間取りは簡素なもので、奥行きは十メートルにも満たない。一つの出入り口の正面に窓が、照明具は古ぼけた机上に、スタンドライトのようなものが一つ。

それから侍女の計らいだろうか、^{ビン}壺に入った飲料水とコップが一组。

床や壁の隅を見る限りきちんと掃除されているが、それでも部屋の年季は隠しきれない……といった所だろうか。

ただ、救いは空調が整っていたということ。素直に有り難い。この地方で冬場の時期に、暖房器具なしでは想像以上に辛い。レインだって身に沁みて感じている。

「中の上……上の、下……ってとこかな」

誰にでもなくぼつりと洩らす。

部屋は寝食環境としては十分だ。

壁際に寄せられた寝台にロングコートを脱ぎ置き、白いシャツにベスト、伸縮性のある下生地のスボン、ベルトが幾つか交差するデザインの対摩擦ブーツ。

ベルトのホルスターに吊り下げられた刀と短剣を確認する。腰が重たくない程度の装備。カートリッジ式の連射拳銃。

「……これでいいか」

道ながら、屋敷内の警護のみだと聞いていたので防寒具は必要ない。

——きつと、軽装で十分だろう。

レインは手を回し、長髪をきつく結い直す。

ある種の覚悟の顕れ。気を引き締める意味も込めて。甘んじない。舐めない。弛緩しない。

——やれることをやる。やれる範囲で。

自分に出来ることは、それだけなのだから。

用意を終えて再び廊下に出ると、他の二名も同時に出てきた。

リートは上着に隠れて見えないが、微かに衣服に乱れがある。

おそらくベルトのホルスターに二丁、左肩脇に括りつけるようにして一丁銃を隠し持っている。

彼自身は精密狙撃の方が得意としていて、狙撃銃ライフルを得物をしていた筈だ。しかし、決して拳銃の腕も劣ってるワケではない。…というより、重火器全般に常を外した技術を持ち合わせているのだ。

もう一方、アルカードは一見手持ち部沙汰のように見えるが、腰辺りに梢子棍にしては長すぎる得物を差し込んでいた。特殊警棒の類だろう。

見た目では、鎖なんかの接続部品もないその打撃武器は、レインには打楽器の撥にしか見えなかったが。

二人の許もとへ駆け足で追いつく。

心なしか、視線が痛かった。勘付かれる前になるべく死角に回りたかったが…

「行きましようか」

なるべく無表情を装っていたレインに、横に相変わらず黒ジャケツットのノイシュが立った。

リートは横目でこちらを窺っている。

——こっちを見ないで欲しい。

ちら、とリートと目が合った。じっと睨み返すと、興味を無くした様にふいと顔を返して歩み去っていく。

それに習うように、腑に落ちない顔をしたノイシュとレインも続く。

今、気がついたが、洋館は増築改築を何度か行っているようだった。

天井や壁を見つめていると、継ぎ目のようなものがあることが分かるし、さっきまでいた部屋でもやけに廊下側と違い古ぼけていた。本当は築100年は下らない建築物なのかもしれない。

そうなる、こんな所に住んでいる屋敷の主の出生、生い立ちにも思案が巡るが、管轄外だと頭から追い出す。

玄関には人影が一つ、楚々として立っていた。

「お待ちしております。配置の説明をさせていただきます」

侍女によると、玄関には一人を警備に置くらしい。

けれどそれよりも、館の主の身辺護衛を強めたいということだった。

要するに、入り口に一人、依頼主バゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワの自室の前に一人以上着いて欲しい、ということだった。「夜間は交代で睡眠を取られて下さい。打ち合わせはされていますか？」

否定を示すように首を横に振る。

その中で最初に口火を切ったのは、ノイシュ・アルカードだった。

「俺は夜間任務は抜きたいんだがなア、どうだ？」

リートは冷静な視線を彼に送った。

「なら俺が夜間任務を務めよう。午前中、先に寝ておきたいかい？」

「ああ」

「ノイシュ：あんたは深夜から朝方までが休息时间」

要領よく物事を進めていくリートの姿を見、レインは

「じゃあ、自分の休息時間は昼間か？」

「ああ、レインには午後数時間、休息时间ということになる。それで良ければ」

リートの提案にこくりと頷いて

「了解。異存なし？」

ノイシュへと視線を移してから、是を眼光に視て、レインはカングルッペに向き直る。

「お決まりになりましたか？」

「ああ」

侍女は視線を上げ、言い述べた。

「では、以上をまとめさせていただきますと…休息时间分けて、午

前5…00～2…00、午後2…00～9…00、午後9…00～5…00…こちらの関係によりまばらになりまして、申し訳ありません。……これでよろしいですか？」

侍女は懷から取り出した懷中時計と照らし合わせて、口早に計画を練った。

さらりと語る様子に感嘆する。先程もそうだったが、ここまでペラペラと喋られると、余程頭の回転が速いのか。

「なお、食事等の時間は警備独りになっていただいても結構です。その場合、私が代用致しますので。…それから、警護中は、絶対に^{マスター}依頼主の部屋に立ち入らないように、お願いいたします」

レインは口元を曲げる。中の依頼主の様子が分からなければ、警護の意味は薄れるのではないか。

——それに、傭兵の代わりに侍女が立つのは、変な話だ。

レインは口には出さずにおいたが。

…すると、彼女は傭兵達の心中を悟ったのか

「ご安心なさって下さい。私も、マスターの身を守る位の實力は持ち合わせていると、自負しています」

彼女の言葉が何を意味するのかは、深く考えないでおく。

弱腰の侍女でも、それなりの武装をすれば恐怖になりうる。最近の武器は、それを使用する人間を選ばないように。なにも諸刃の剣ではないのだから。

「…了解した。もういいか？」

打ち合わせは終い、とでも言いたそうにリートは示唆する。

彼はその後一人で、振り当てられた部屋に帰って行ってしまった。どうやら本人も早く寝たかったらしい。

後姿を見送って、長身の男は口を開いた。

「俺…玄関の所やりたいが、いいか？」

対するレインは軽く頷く。

「ああ。じゃあ自分は依頼主の護衛を」

「私も二階に入用ですので失礼致します。…レイン様とお呼びし

てよろしいですか？」

「様：はちよつと」

——ないない。

レインはあまりの上品さにたじろいだ。

さん付けをされることでさえ珍しいというのに。

「失礼致しました。訂正します。：レインさん。差し支えなければ参りましょう」

「：あ、ええ」

レインは頷いて、先導に続く。

またもや背後から変な視線を感じたが、気の所為だと思ってやり過ぎた。

23 偶発

レインは先程上がった二階の、まさしく依頼主の部屋の前に立つ。
――護衛に着く。

至って内容はシンプルなもの。

その上、危険性も難易度も低いと思われる。依頼主は一步も自室から出ない主義だったからだ。

謁見の際に一度入った館主の部屋は寝室であり、排泄も設備が整っているので心配要らない。

有事の際しか部屋の外には出ないという、徹底した隠居っぷり。無論、食事は侍女のカングルツペが運んでくるので、動く必要まったくなしといった具合に。

雇い主は見た目からしてもに足が不自由そうだったこともあり、もしかしたら体調も良くはないのかもしれない。そういった次第。

部屋に一つの出入り口の前で、警護している形になる。

時折目に付くのは、自らの主人に食事を運んでくるたった一人の従順な侍女くらいなものだ。

昼頃になって、廊下の奥からカートを押してくる彼女の姿が目に入った。

先程、彼女はこの部屋に昼食を運んで、食後の食器を回収していたばかりの筈だが。

「：申し訳ありません。遅くなりましたが昼食です」

その頃には、レインはもう扉を背にして座っている状態だった。

無論、有事の際には何時でも動けるように、常に気を張り詰めていたが。

腕時計を見ると、時針は二時に指し掛かろうとしていた。

「昼食も兼ねた軽食です。御口に合いますかどうか」

カートに並ぶ皿上へと、視線を運ぶ。

綺麗に陳列されたそれらは、野菜と少量の肉類を挟んだサイドイ
ツチ、それから飲料水。

彼女は、レインと若干の距離を置いた場所にカートを止めて、
床に膝を着いた。

何故か遠慮がちにこちらをちらりと窺う。

——……

渡し舟を出すつもりはなかったが、彼女の小動物のようなその様
子に、少し微笑んでしまった。

「……有り難う御座います。頂いてもいいんですか？」

何故かカングルッペは頬を高潮させて、銀のトレイで顔を隠し
た。

「勿論です。……どうぞ」

自分の主人の前での冷静沈着さとはうって変わり、顔に幼さが
見えた。

思ったより、彼女は年上でないのかもしれない。それでも成人
はしてると思うけど。

取り分けて貰ったサンドイッチを咀嚼してみる。

こういう時、用心深く吟味してしまうのは毒が入っていないか確
かめる為なのだが、彼女の顔を視ているとその自分の卑屈さに嫌気
がさした。

——まあ、いいか。

先に喉を嚥下させてから、さっき注いでくれたコップの水を乾
いた口に水を流した。

「……これ。手作り、ですよね？」

「は、い……どうでしょうか？」

おそるおそる尋ねてくる彼女に、視線を流す。

何の遠慮もお世辞もなしに、料理は美味だった。

「美味しいです。とても」

花が開いたように、彼女は笑った。

顔の造形の問題はなしに、人は絶対笑っていた方が綺麗なのだ。

レインはそれを実感させられる。

——…可愛いな。

謙遜も区別も恋愛感情も含まない、純粹で素直な感想。…けれど。レインは同時に、心のどこかが急速に冷めていくのを感じた。一生、無縁なものだ。この『出来損ない』。

普通じゃないお前には、無理だ。

——『人の尊厳を食い潰しておいて』

もう一人の客観的で冷酷な眼を持つ自分が、言い放つ。

——五月蠅い。黙れ。

押し込める。分かっている。そのくらい。

自分は誰かを殴ったり斬ったりした手で、食事も摂れば、ペンも握る。髪を梳けば、握手もする。

…潔癖症の人間ならば、自分に嫌悪を抱くだろうか。

でも、手の使用用途の優劣など、つけるつもりは毛頭ない。

必要に応じた働きを『私』がしているだけ。

必要に応じた感情を『彼女』が表しているだけ。

そこに『自分』はない。

私と彼女と自分の関係は…きっと呆気ないくらい偶発的なもの。これらはイコールで結べない。せいぜい相似形が良いところ。

「あ、もう一つ貰っていいですか？」

「はい。勿論です」

結局、皿に置いてあったパン切れを全て平らげて、皿を返す。

思えば依頼主の部屋の前で、しかも地べたに直接座り込んで昼食というのは、かなり不謹慎な気もする。

「ご馳走様でした。食べ終わってからこんなこと言い出すのも、どうかと思うけど…貴女の御主人に悪くないですか？　これ」

彼女は、逡巡するように顎元に手を添えた後

「大丈夫です。この扉、嚴重に防音加工を施してありますし。食事の手筈はあらかじめマスターには伝えておきましたから」

ふうん、と頷きながら腕を巻くって、手首の腕時計へと目を移

す。

「…そろそろいい時間、引き際のようなのでもう一人と交代して来ますね」

今の内から少しは寝ておこうと考える。

いくら夜が強いレインでも、夜の警護で居眠りをしてしまうような失態は犯せない。

「心得ました。では暫くの間。私は交代人をこちらでお待ちしております」

「お願いします」

軽く頭を下げて、レインは部屋に帰った。

24 過程

依頼されてから、二日間が経とうとしていた。

レインは一昨日から警護を続け、想像以上に安穏とした様子に、正直ほっとしていた。この任務は思ったより問題なく済みそうだ。

――ただし。

依頼の元来の達成条件と出題は

『依頼期間中、不穏な動きが予想できる為、屋敷身辺の警護』

『もし侵入者と接触した場合の、速やかな排除』

『危機的状況に至った場合は、依頼主の身の安全を最優先』

傭兵や警護員への説明材料としては上々の内容だ。しかし、最も重要な最後の項目に関しては、何とも言えない。緊急事態に、初対面の依頼主の為に身体を張るのは、本来の傭兵の仕事ではないからだ。

ボディガード

身辺警護という職種も存在するが、彼等は個人の護衛のみを受け付ける為に、表の政治家や国の重鎮の護衛任務が主になってしまう。要するに、傭兵とボディガードは別物だ。傭兵が護衛の真似事をすることはあれど、逆は有り得ない。

何より、個人の仕事であるが為に、信用と実績がものを言う世界だ。安定した土台がなければ、仕事量も収入も安定しない。それがボディガードを生業とする者が少数派と言われる由縁でもあるのだ。

そもそも、誰だって自分の命が一番大事だ。命あつての物種と
いしわざ
いう諺も物語っている。

半行程終了、でもまだ気は抜けない。

廊下に立膝をするように座り込んだレインは、腕時計を確認す

る。時刻は一時半、長針は丁度盤上の真下を示す。

ずっと座りっぱなしというのは案外辛い物で、時々立って窓の外に気を配ったりしていた。居眠りは無論しなかったが、俗世と病的なまでに隔離された、時間の止まったような静けさの中、時々時の流れ感覚を失いかけることがある。

何故、自分はここにいるのかを再認識しなければ、気を引き締めることもできない。

今は仕事中だということを忘れそうになる。由々しき事態だ。その度にいけないと、事実を反芻させて、繰り返す続ける。

三日間で良かったと、他人事よろしく思う。

だってこんなのが長期間に及んだら、神経が弛ゆるんで平和呆けになってしまう。警備員としては一番致命的だ。

後一日と半日で今回の任務も終わる。それまでの辛抱だ。

そういえば帰って早くシャワーが浴びたかった。食事排泄睡眠はここでもそなりのものを提供してくれたが、衛生面：というより生理的な欲求が、身体を清潔に保って欲しいと訴えかけていた。

別に臭いがあるわけではないが、そういう問題とは違う。特別に綺麗好きってわけでもない。けれど、単純な習慣の様なものだろう。

欠伸を噛み殺しながら、視線を外へと見やる。

風が、強い。今夜は冷え込むかもしれない。

日数感が胡乱になりつつあるレインにはどうでもいいことだが、そろそろ年末だ。

地方の冬は厳しく、長い。出身地の中東や、元々住んでいた西部アジアにあたるコッペリアはもっと暖かく乾燥していて、冬より夏の方が苦しかった。

身体に染み込んでいる感覚は、時が経とうとも薄れることは無い。

雑念だと自覚しながら、思想に廻らす。

アジアを出たのが今から五年前、コッペリアを出たのが二年前。十二歳で故郷を出、十五歳で第二の故郷を後にした。そして今、

ここに居る。

それがどんな意味を持つのかは解らない。

知るのが、怖いのか。

——偶然、あの時、……もしくは必然、か。

足元には墨になった家屋。

烈火の焰に浮かぶ後姿。そいつのすぐ傍らには——……。

おそらくそれが『レイン』という人間の原風景。

今、何処に居るのかも知れない仇。再び逢えるならば、問うのは唯一つ

何故、自分を生かしたのかと。

卑屈なことに、あの時、あぁなっていなければ、自分はいろんな人達に出逢えずにいた。

負の要素を取り払ってしまったら、その付加として備わってきた幸せも全て取り除かれる。複雑に絡み合って、解くことなどできない因果。

苦しかった。その事実が。

これほどまでに愛しい存在、環境。全て仇によって造り上げられた偶像なのか。

きつと耐えられない。味わった苦渋も、痛覚も、憎い相手に与えられたのだから。

いっそ、全て壊してしまいたい。

——……結局、壊せなかったけど。

それ程までに、暖かい存在が自らの奥底で優位に立ちすぎて、何にも挿げ替えることのできない、『大切』になってしまった。

——痛い。痛い。痛い。

胸を掻き毟りたくなるような日々、だけど自分という人間を支えたのも、皮肉なことに、あいつに与えられたものたちで。

家族。……自分の家族だ。もしくはそれ以上かもしれない。

ユカリ、アスハ、……『父さん』

——父さん、……か。

内心で苦笑した。一線を越えたかもしれない。

歪んでるし、矛盾してる。矛盾の中心にいる自分だって、間違
いなく。

分からないことは多いし、納得できないこと、俟たないこと
も、本当にたくさんある。全てを今すぐにどうこうすることは不可
能だ。要領よくいく事柄はごく僅かで、焦れったくて、嫌になるこ
とも本当に多い。

自分は何時だって中庸で、中途半端で、実はどが付く程の意気地
なしで。

嫌悪感がどんな時も胸にあって。

それでも生きていかなくちゃって、暮らしていかないと、張り
詰めた想いだけがある、ただの木偶での坊だ。

どんなに今を見繕ったって、根本的なそれは事実として存在する
んだから。

迷いを、少しでも開放したいなら。きっと早急に答えを導くより
も、単純な方法がある。

無事帰れたら義妹と愚兄に電話でも掛けてやろう。

声を聞いて……結局は逃げかもしれないけれど、今は少しでも支
えてもらいたい。

不思議なことに、思いを決めると心が軽くなった。

25 接触

先程より、外は暗くなっている。どこから流れてきたのか、空には暗雲が漂っていた。

——天気予報、見ておけばよかったかもな……

レインは階段を降り、玄関の出入り口で胡坐あぐらをかいて座っている、体格のいい男に呼びかけた。

「時間だから、先に降りさせてもらう」

「ああ……ん？ あ、了解」

ノイシュ・アルカードは眼を擦りながら、返事をする。

微妙に舌足らずな返答に、レインは顔を顰めた。

もしかして、居眠りしてたというのか。

——まさかな。

いい年した傭兵が……なんて思ったが、横目で通り過ぎて古ぼけた旧館への渡り廊下へと進む。

手前の数個め。……ここだ。

同じような扉が並ぶ、一直線上の行き止まりの廊下。その二つ目だった筈。

軽く扉の板面をノックしてみる。

しかし、軽く拳を作って、強く叩いても反応はなし。中にはあいつが居る筈なのだが、何か様子がおかしい。

「交代時間なんだけど、居る？」

——やはり、反応はない。

「………入るよ？」

何故か後ろめたさを感じながら、レインはドアノブを捻った。

床に扉が擦れて軋む。

部屋をぐるりと一見する。

レインに充てがわれた部屋と、大差ない間取りの部屋。

一つの相違点は古ぼけた木製の机の上に、トレイ、その上に食事らしきものが用意してあったこと。その気遣いはおそらくカングルッペだろう。

「もしかして、まだ寝てる…？」

嫌だなあ、と思いながら歩みを進める。

無論、人の寝顔を覗く趣味はない。正直、留守だったら良かったのと思った。

そんなレインの願いも虚しく二段ベッド、その下にそいつは居た。こちらに背を向けていて、寝返りを打った後のような体勢。

背後を晒しているのに、何故か無防備な感じがしないのは、相手がこいつだからか。

「寝てる…よな。リート…」

試しに名前を呼んでみる。

当然の如く返事はない。

——熟睡してんのかな…

死んだように寝るといふか、起こすなど体现しているような…揺すって起こそうかと、思索している時だった。

—————！

寝台から突然、腕が伸びてきた。片手首をがちりと締められる。レインは動揺した。

「！…っあ…」

力を入れて引き抜こうとしたが、上手く反動を流されてくるりと体を反転させられる。

寝台に、音もなく長い黒髪が広がった。

覆いかぶさるように見えるのは、見慣れたリートの端整な顔。自分が何をしているのか、自覚しているのだろうか。彼の顔はいつもどおりの端整な無表情だった。

「何す…」

るんだよ、と言いかけた所で制される。

『しゃべるな』

口先だけの動きでそう伝えると、リートはその体勢のまま窓の外を窺った。

倒されたレインからは死角になっていて、外の様子は知れなかったが、些細な動作に、いつでも放てるよう構えていた脚を下ろす。

——…何が、

束の間の沈黙に、彼の舌打ちの音が響いた。

「逃げたか」

リートはこちらへと向き直って、手首の拘束を解いた。

緩慢に、覆いか被さっていた少年の身体の上から降りる。レインはというと、自由に動けるようになって、慌てて寝台から降りた。

「もういい。…悪かったな」

レインは訳が分からない。

「…逃げたって…、何のつもり……」

「気がつかなかったのか？ 窓の外に居た数人」

「はあっ!？」

言うまでも無い。

端的な言葉から示唆される事実。

——侵入者？ それって結構問題じゃないのか……

「何で早く言わなかったんだよ!」

憤慨する彼に対し、リートは呆れ顔で

「どうでもいいけど…相手に顔が知れないように死角に匿ったんだ。しょうがない」

「あ…、う…ご、めん」

素直に謝罪する。

不本意だが、リートはレインを寝台の窓側から死角になる場所にわざと倒したのだ。

「でも俺は、顔を見られたかも知れない」

若干の真剣身に欠ける口調、不思議なことにその口調はあまりレインを責めてる気がしない。起こったことを淡々と述べているだけ

だ。

改めて礼を言おうとして、レインは真っ直ぐに青年の顔を見つめる。

——……………？

軽く、違和感を覚えた。

リートは先程まで休んでいたらしく、服も上着をきていない軽装。なにより……

「……え」

——声に出してしまった。

リートがこちらを振り向く。

意識しているのか、何時も前髪で覆い隠している片目が露あらわになっている。単純に髪的位置がずれただけなのだろうが。けれど、それは始めて見る彼の素顔という事にもなる。

そして、透間から窺える片目の色は……

「気にするな」

彼がくるとそっぽを向いた所為で、臃げに印象が霞んでしまった。

——けれど。…あれ、は。

「その、眼……」

止よせばいいのに、と自分で思いつつも、レインはその事実から離れられない。

「…ただの戒めだ」

リートは感慨もなく、つまらなそうに短く発した。

彼はそのまま、壁に掛けられていた、楽器用のケースのような黒塗りの物体へと手を伸ばす。

それはここに来た朝も彼が持ち歩いていた物。

かちやりと金具の鍵を外して、ベッドの淵に腰掛けると中身を取り出していく。小さい金具や鉄の栓、針を少し大きめにしたような金属棒は、それらだけでは用途が不明瞭だ。けれど、幾度かその組

み立て工程を眼にしてきたレインには、即座に理解できた。

ライフル銃。――俗に言う歩兵用の小型銃機。狙撃用ではない、スコープもついていない軽型のものだ。先程の不審人物を狙うつもりだろうか。

にしては手指の動作は緩慢で、落ち着き払っている。

「――で。何時までそこにいるつもりだ？」

一瞥もくれずに、青年は目の前に突っ立っているレインに告げた。
思わずはっとする。

――すっかり忘れていた。

「…あ、えーと、さっきの奴等のこと女中に伝えて来る！ リー
トは早く交代しろよ！」

「はいはい。了解……」

気だるそうな声を背に受け、レインはそそくさと部屋を後にした。

26 曖昧

——どうしたものでしょうか。

相手が、屋敷の襲撃を計画していたのは知っている……けど。

自分の寝起きざまを監視していたあいつ等。見覚えがれある。

——確か、あの二人は……

「嫌なのを相手にしたな」

誰にでもなくリートは発言し、宙を仰ぐ。

組み立てた銃を立てて、最終確認をする。

照準器は光像式照準器のM4カービン。従来のものと比べ、小型化が進んでいる。構造は複雑だが、素早いの確捕捉：サイティングが可能で、動く対象物には有効だ。

彼が最も使い慣れている内の一つである。

李清に改良してもらい、正解だったと改めて実感した。

相手が相手だからだ。

単一の人間相手ならば、手銃で充分だったが……果たして相手の連れは人間だろうか。

一掃力のある、小型の扱い易い銃器は信頼が持てる。

シオルダーホルスターに一丁、レッグホルスターには二丁。隠して収める。

物々しい武装だが、さっきの侵入者の顔ぶれでそんなこと気にしている余裕もなくなった。

分相応としては丁度いいか、もしくは戦力不足か。充填用の弾丸は足元・手首に仕込んである。元から充填する気もないが。

こうしてる間にも、依頼主に危険が迫っている可能性は十分ありうる。今、レインが二階に走っていったから大丈夫だろうが。油断はならない。

リートは足のつま先を軽く打ち付け、床を鳴らした。

――…それにあの女中……

いや。これは蛇足だった。

準備を整えてから二階へと足早に急ぐ。

途中でノイシュ・アルカードに一声掛けて、一緒に来るようにと言った。

現状が急変した以上、玄関フロアの警備はもはや必要ない。

二階の廊下へと出る。そこには二つの人影。

一人は黒い長髪の、少女と女性の間地点の容姿の人物。もう一人が白金髪の制服姿の女中。

傍目にも分かる。何やら話し込んでいるようだった。

「…ですが、それはあまりに遠回しではありませんか？」

「いいえ。依頼主はわざと分かり易いように、午前中に自分達を呼び寄せたんでしょう？　云わば抑止力。見せしめの為の。なら、あちらも勘付いていると思うのが自然ですよ」

レインは戸惑い気味の侍女に、あくまでも落ち着いた口調で自分の意見を述べていた。

「問題はもう、領地内に侵入してきているということですね」

「そうなるのかな…その前に、ここではっきりさせておきたい事があります」

きゅっと口元を結んでから、レインは一度こちらを振り向いた。

リートと眼が合う。その背後に居るノイシュにも、視線で意志を疎通させた。

「――侵入者が狙っているのは何ですか？」

「それは…マスターの命、です」

「本当に？」

レインは目つきを細める。

「尋ねないという条件でしたが、聞かなければ護る対象も不明瞭

なままです。ここは貴女の心当たりに従って、警備を集中的にすべきでは？」

彼女は僅かに眼を逸らした。それを見逃さない。

「ですけど…マスターしか…」

「進入者が貴女の主の命を狙っているその目的は？　そもそも、本当に依頼主の命を狙っているかということです。自分は侵入者が狙っているモノ、ではなく、狙っているコトを訊いています。…本当に心当たりがないんですか？」

「……………」

大したものだなと思う。

レインの口調は穏やかで、静かでさえあった。凄みのある口調でもなく、一方的な剣幕もなしに淡々と見透かして事実を述べる。

それだけで相手をたじろがせるというのは話術、いや、その人物の人柄によるものだろう。

レインはそれに特化しているようだ。

——そう、暗殺なするからには、目的がある。事情がある。

殺したことにより、『変わる場合』・『変わらなくて済む場合』があるのだ。

——そもそも、依頼主の命を守りたいのなら、何故、侍女は『警備員を依頼主の部屋に入れない』？

栓の無いことだ。まるで中の様子も、依頼主の安否さえ分からない状況を自ら作り出している。

侍女が、虫の息のような溜息を吐く。

胸の裡を明かすように、彼女は語りだした。

「……私の本当の主は、十年前に亡くなっています」

彼女はぽつりと洩らし始めた。浮かぶ表情は先程より弛緩している。

亡くなっている——よりも十年前にという言葉にリートは違和感を覚えた。

彼女は見目、まだ20代前後だ。

十年前はまだ、年端のいかない少女だっただろうに。

「貴方がたが昨日謁見なさったのは、私のマスターの身代わりの傀儡です」

リートはその言葉に少なからず反応した。

今の社会で『傀儡』という単語は特殊な意味合いを持つ。

『傀儡』――生身の人間でありながら命令されたことしかできない存在。

生後間もない人間に稀に発病する一種の病のようなもので、精神疾患の一種だとされている。

発症率は稀だが、遺伝子の変異なので治癒は難しい。

――それが、世間一般の見解。

反吐が出る。何て体の良い見繕いだ。

事実和解離性の病だ。精神病の一種だともとれる。

感情を失い、自我を失った子供は、文字通り一生を人形として生きることでなくなる。

発生率に規則性はなく、不治の病だけに子供を見捨て、売ってしまう親も少なくないそうだ。

皮肉なことに、この裏市場は人売りの業界で最も需要が高い。云わば、傀儡の子供は高く売れるのだ。

昨日の午前中に会った依頼主。

正確には依頼主と信じていた人物が『傀儡』ならば、仕事の本来の依頼主は誰なのか、という疑問に突き当たる。

彼等は自らの意志で行動することが出来ない。文字通り第二者に頼るしかない操り人形なのだ。

…が、しかし、些細な疑問はすぐに解決した。

先程の、身代わり…という言葉に怪訝そうな顔をしたのはレインだ。

彼女はその手の事情にさして詳しくなさそうだった。

「…影武者、か」

リートも同調して単語を呟く。

「そう、呼ぶ場合もありますね。館を護っていく手段がそれしかなかったのでは」

寂寥^{せきりょう}の想いを押し込めるように、彼女はそっと自身の胸元に手を置いた。

「あれは元当主の代わりですが、実際この屋敷から出れないし、いわば仮の箱の中身、ですね…」

「そこまでして…」

何を、とレインは嘆いた。

「…いずれ、あのことがばれたら屋敷は取り壊されてしまいます。私はここで待っていないといけない人がいるので、あの人の帰る家を失うわけには行かないんです。…どんな手段を使っても、ね」

侍女の顔に翳^{かげ}がさした。

それは彼女が、彼等の前で一度も見せなかった容^{かお}。

「で、俺たちはどうすればいいんだ」

リートは感慨も無く、結論を導き出す手縄を出す。

我ながら無骨だとは感じたが、事態は一刻を争う。

どうすれば…など、分かりきったことを聞いているなと自分でも実感した。

「一掃していただけますか、あの賊を」

「それが今回の任務の最終目的か」

「…止む終えませんから。今から私が依頼主です」

元から…の間違いだろ、とリートは内心で訂正を求めた。

目の前で力なく笑って、侍女は黙っているレインへと踵を返した。一度、ノイシュにも了承を求める視線を送ってから、彼女へと向き直り

「受けて、いただけますか」

短く問う。

両肩をかるく竦ませて顔を上げたレインは、想像したより割り切った顔をしていた。

桜の口唇は小さく開かれ

「……それが依頼なら、かな」

確かな応えに、楚々として女中は微笑んだ。

27 視点

地上の人間の気分さえも陰鬱に塗り替える、曇天の下。

屋敷の裏、縁石の淵に3人の人影が在った。

「なァー、ラグナー、何時までこーしてんだよぉー」

くすんだ色合いの芝生に足をぶらぶらさせながら、退屈でしようがないというように少年は声を上げる。

わざと脱色したような、橙色に限りなく近い髪色。悪戯げに光る瞳は青緑。着ている服は一見どこかの学生制服のように見えるが、その上に私服としか思えないグレーのブルゾンを羽織っている。年齢にして、おそらく十五、六歳。体型は平均より大きかったが、表情や仕草に悪戯鬼っぽさが残っていいおりちぐはぐだった。

彼にラグナ、と呼ばれて反応したのは、隣で壁に凭れる女性。

黒と茶色の入り乱れるくせ毛の髪を、肩に落とす余るくらいに伸ばしている。ライダーズジャケットに、太腿を露出した黒いミニスカート履いている。けれどそれらは、彼女によく似合っていた。そして何よりも眼を引くのが、彼女の横に大人しく控えている二匹。

彼等は狼だった。片方は白銀の毛並みを流暢に波立たせる銀狼。もう一方は、夜の黒波を彷彿とさせる漆黒の毛並みを持つ黒狼。

「うっさいツヴァイ、バレたらアンタ責任取れんの？」

彼女はツヴァイと呼んだ橙髪の少年に一喝する。

「んなこと言ってたてよォ、ひまひまひまひまあああああああ
ああァ」

「あーうっさいうっさい！ リク、カイ！」

言いながらラグナは指を鳴らす。

すると横に控えていた銀狼と黒狼二匹が、ツヴァイに向けて喉を

鳴らす。

明らかに敵意むき出しの威嚇音に、少年は即座に彼女の後ろに隠れた。

「何すんのっ！ 制裁を受けなさい！」

「いーやーだー！ この前噛まれたトコ、まだ痕残ってんだぜ勘弁しろよなァー」

「…………緊張感、皆無」

ぽつりと呟いたのは存在感が限りなく薄い人物だった。

今までの存在の有無さえ曖昧になる程の気配の希薄さで、確かに彼はツヴァイの横にいた。

黒緑の黒コートを着た男。フードは被っていない。髪は一部が白髪混じりで、クセなのか、前髪を掻き揚げたような髪型になっている。細い眼から僅かに確認できる瞳の色は薄い青。

眉間に深く刻まれた皺の所為か、年齢ははっきりと断定できないが、おそらく三、四十代だろう。

「ぶー…だったらさっさと片付けよーぜ、オレ早く帰りたいしィ」

「アンタの事情なんて知ったこっちゃない。どの道慎重に行かないと『ハートレス』が居るとは予想外もいいところなの。…こっちとしてはね」

怪訝そうな顔をして語るラグナに対し

「『ハートレス』…？ あー、あんの男かァ？ あいつそんなにつえーのかよ？」

軽薄なその台詞に彼女は一瞬、真顔になった。

「…強いとか、弱いとか、そういう問題じゃない」

「あ？ …ンだよ、ソレ」

意味不明ーとぼやいてから、彼は黒コートの男に向き直る。

「アンヴァーはどーなんだよ？」

「…………決断、任せた」

「そんだけえー？」

「…………助言するなら、ハートレス以外は無問題と判断」

分かったような分からないような、複雑な顔でツヴァイは頷いた。考え込む顔が、すぐに好奇の色を見せる。

「へえ、そこまで言う『ハートレス』：なんか面白そうだなア」

「生半端な心構えで向かっていく相手じゃないよ」

軽く叱責してから、彼女：ラグナは顎に手を当てて思索した。

「こっちのことはもう気がつかれているし、今更隠密行動なんてみみっちいか。：ったく、誰のせいでこんな穴だらけになったのか
：はあ」

ラグナは溜息を吐きながら、視線を少年の方へと泳がした。知らぬとばかりにツヴァイは空を仰ぐ。

「雪が降るかもしれないな」

さり気なしの言葉を皮切りに、沈黙が三人の間に降り立つ。

「決めた」

静寂を破ったのは凜とした女性の声。

ラグナは指を弾き、ツヴァイに向けた。

「行きましょう。正面突破。：ツヴァイ、今日はあれを特別に許可してあげる」

「おっしやあああああ！ 暴れるぜー！」

「アンヴァーはここで待機。5分後に追尾開始。オーケー？」

「……………了解」

無感情な声を聞き届け、ラグナとツヴァイは踵を返した。

銀狼と黒狼も、緩慢な足取りで後をついて行く。

一人残った黒コートの男は短く息を吐いた。

28 獵犬（上）

——館の中、こちらはまだ動けずにいた。

「…貴女のマスター、じゃなくて…傀儡の部屋の窓から入ってくる可能性は？」

「それは皆無です。ここは二階ですし、防弾硝子で開閉はそもそも出来ないようにしてありますから。何かあったら音が聞こえるでしょうし」

レインは扉が防音という話が事実ではないということを再認識して、彼女は他にも嘘をついているかもしれないと思った。

頭を垂れて話を聞いていたリートが、ふと顔を上げる。

「あいつ等のことだから、一気に畳み掛けてくる可能性も十分だかな」

「まさか。ここは慎重に周囲を窺っているんじゃないかな」

半信半疑のレインは、首を横に振る。

——可能性は…だろうか…面倒だ。

次に、今まで黙りとおしていたノイシュが、開口する。

「籠城戦つてのはあっちにとっちゃ厄介だからな…無きにしも非^{あら}ずだろうよ」

む。と声を詰まらす。

確かに反芻して考えなくても、一理あることは明白であるし、長期戦になると我慢強さが物を言いそうだ。

加えて、このままでは三日で帰れないかもしれないのだ。

どうしてだろうか、レインには、古ぼけた李清の隠れ家がやけに恋しい。

はあ、と内心、吐息を吐き出す。

——戦場で恋人や故郷の話をした人間は最初に死ぬ……か。
……不吉な古事を思い出して、すぐに思いを振り切った。

——その時だった。

けたたましい音が廊下に響いた。

それは反響するように迫り、こちらの神経を逆撫でしていく。
かん高い音。連なって重なり合う鋭利な音は硝子の割れる音だ。

「窓を破って……!？」

音は玄関ホールの方から。

駆け出そうとしたレインの足を、叱責が止めた。

「いけません! 皆さん全員で動かないで!」

カングルッペは叫ぶと

「レインさん! それと私で見えます! 貴方がらはここで……!」

言い終わる前に、彼女はレインの手を掴んで走り出す。

スカートが翻るのもお構いなしに、彼女は疾走した。

彼女の瞬時の判断は、的確で正しかった。その状況判断力に嘆息してしまう。

——と、同時にレインは違和感を感じた。

廊下を突っ切って、ロビーを俯瞰できる階段まで躍り出る。

玄関の両番の扉は大っぴらに開け放たれている。

——そこに、人影が二つ。

階段を身を低く低速し、一階フロアに降り立つ。

そこで駆けつけた二方も、歩みを止めた。

息を深く吸ってから、カングルッペが一步前へと歩み出る。

「——侵入者。速やかにこの敷地から立ち去りなさい」

よく通る、威厳を備えた声音。

逆光になってよく表情が分からないが、人影の一方、男だと思われる方が首を傾げた。

「はっ……! 立ち去れ——って言われて立ち去る奴あ居ねえだろ——」

よ」

鼻で笑うような声は存外、若かった。

「ならば、排除するまで！」

言うが速いか、侍女はジャンパースカートのポケットから何かを取り出して、入り口付近に投げつけた。

閃光が弾けて、乾いた音が響き渡る。

腕で顔を庇いながら、レインは前方を確認した。

カングルツペが投擲した^{とうてき}のは、手榴弾型の手投催涙弾：それも煙を撒き散らすスモークグレネードだと即座に理解する。

一般人が持っていて良い物ではない。

着弾部から霞が広がる。口元と鼻を片手で覆い隠しながら、バックステップを踏むように距離を取った。

カングルツペは、足元にベルトで括りつけられた手に余るほどの小型小銃を抜き取って、安全装置を外す。

客観的にその動作を見ていたレインは叫ぶ。

「カングルツペ！」

いつの間にかに、彼女の背後に回り込んだ人影を視認する。

侵入者の内一人は着弾を免れて、侍女の後方に移動していたのだ。0コンマ内にそれに気がついた彼女は、振り返り。

：しかし、もう遅かった。

刹那――

金属のぶつかり合う音が反響し、侍女の手元にあった筈の小銃が床を転がる。

慣性を殺さずに周り続ける小銃の上に、がつつと足が載った。

それは、侵入者のもの。

「：はッ、女に何持たせてんだよ、ココは」

先程聞こえた声音と一致する、少年の声。

姿を確認することなく、レインは踏み込んだ。

滑るようにして一瞬で侵入者との距離を埋める。

東部地方の武芸術で発展した、擦り足と呼ばれる技法だ。

足の伸縮を生かして、最大限まで脚をバネにする。その動きを流し、地面と低水平を流れる。右手で押さえる鞘を、右手で柄を握る。右手の辰口から抜き取るように刀身を抜き、薙ぐ。

居合いの要領を加えたレインの戦闘方の得手は、やはり第一手であり、ここからは抜き取った際の慣性を最大限に生かし続け、機を計らってまた鞘に収める。その繰り返しとなる。

一の太刀、二の斬、三の閃。

ただし、この方法には幾つかの問題点がある。

不利の最もたるは彼が刀を『抜かない』ことにあった。

無論、たった今も黒鞘ごと抜き払って刀身が露になることは決してない。

純系の居合い斬りは刀の鞘を滑走路として生かし、加速させる第一手が最大の武器であり、最後の武器でもある。その道を窮めた師範ともなると、速さは迅速にも達するという。

「はっ：！」

短く発音し、気合と共に対象へと得物を薙ぐ。

肩口から袈裟斬りに軌跡を描く一刀は、けれどもひらりとかわされた。しかし、この程度で怯む暇はない。

切り替えして今度は放物線をなぞるように上斜め斬りに、避ける暇さえも与えない。

容赦のない攻撃は、けれど相手に届かなかった。

そして、閃光が弾けた。

がつん、という硬質の物質がぶつかり合う音。流れを遮る手ごたえを感じた。

それは反撃。

瞬時に足捌きにて一步で後に退避する。

向こう側もそれに習うように跳躍し、距離をとる。

ちらりと目配せをすると、カングルッペは彼のリーチから遠ざかっていて、レインの後ろまで周った。

彼女を庇うような形で、敵と対峙する。

相手はおそらく、自分よりも年下の少年だ。

制服のような服の上に、グレーのコートを羽織っている。眼を引くのは鮮やかな橙髪。両手には長棒を携えていて鎖で双方を繋いでいる、ヌンチャクにも見えるそれはけれど梢子棍にしては長過ぎで、1.5mはあるだろうかというものだ。

おそらく先程の攻撃を防いだのも、その武器だろう。

「……………」

「……あ……」

レインは違和感を覚えた。初めて相対した彼はこちらを見るなり、ぽかんと開口して戦闘体勢を解いた。この状況で明らかな緊張感の弛緩である。

自らの目を疑う。

「……………どういうつもりだ？」

フェイントではなさそうだが、今、突っ込んでいく気にはならなかった。

代わりに足を摺って気持ち前に出た。分かり易いように、乱暴に呼びかける

「——おい」

気がつくのが3秒くらい遅れたが、相手は反応した。

「…へ…あ、ああ！」

頷いてから、あたふたと視線を逸らす。

明らかに挙動不審。

レインは半ば呆れ気味に、どうしようもない彼を促した。

「何だよ、お前」

「何って、…えーっと……って関係ねえだろ！」

何故か逆上してきた。

レインは冷静な口調で、更に詰め寄る。

「関係あるね。侵入者はそっちだろうに」

美麗な目をずっと細めて、真っ直ぐに見つめる。冴えた目つき。

「…っは？　ちよっと待つ…もしかしてアンタが傭兵？　嘘だろ

っ!?! ソレ!」

素っ頓狂な声でこちらを指差してくる彼は、もう少し理性取り戻した方が良いでしょうに思う。

むしろ憐みが湧いてきそうだった。

「…大丈夫か、お前」

「…っああ、クソっ! ンだよ、もう!」

短く叫んで、唐突に彼は疾走した。

――来る。

機を見計らっていたレインも、同時に踏み込んだ。

一瞬後には金属音が弾けて、二つの影が接触する。

彼はまだ戸惑い気味だったが、明確な敵意を持って向かってきた。あちらの得物を尽く弾き返すが、反動でもう一対がすぐに追ってくる。

受けるだけで精一杯だ。

その上、彼の鎖つきの長棍は有効範囲長く、広い、有効打をあらゆる部位で狙ってくる。

対し、こちらは1m程しかない居合い用の薄い刀。しかも鞘に納まっている為、牽制の意味も持たない。だからだろう。彼は恐れもなしにただひたすら攻めてくる。

彼の棍は、変幻自在にあらゆる方向からレインを狙う。

型にはまらない戦術。肘、膝、踵、手刀、身体全身を武器と化し、彼はただ連打してくる。

「っ…!」

内心舌打ちした。

距離が、間合いが掴めない。

長棍に惑わされるこの戦法では、いつかこちらが疲れきって先に押負けしてしまう。

鳩尾を狙ってきた棍の先を弾き飛ばして、もう一方の棍も勢いに任せて斜め上に放る。

目の前にチェーンが躍り出る、頭を後に傾けてぎりぎり避ける。

体勢を戻そうとした――その時。

彼は膝を曲げて思い切り足を上に上げて、こちらに爪先を揃えて空中旋回する。

――空中旋回蹴り（サマーソルト）。

なんでこんな曲芸技が出てくるのかという疑問の前に、本能から膝をかくんと落として何とか避ける。

寸でのところで、顎を爪先で蹴り上げられるところだった。

すぐさまに中腰になって、バックステップで距離を持つ。

相手はこちらが引くのを見ると攻めては来なかった。

――：なんなんだ。

レインは驚愕した。

そして同時に、内心では感嘆しているのを感じる。

――自分の知る、どの格闘技にも当てはまらない……？

暗殺術程の精密さはなく、格闘技ほどの激しさはない。そして、体術と武器技術を持ち合わせた、融合体形。それらは一つの流派に収まりきらない程。

――我流……なのか？

だとしたら、彼は眼を見張る戦闘センスを持っていることとなる。

ただ甲斐性もなく、ちらちらとレインを窺いみる様子は、見た目少年以下だ。

「……っああ、まったく何なんだよほんと勘弁してくれよこの状況で……？　ありえないありえない……」

しかも念仏のように理解不能なことをぶつぶつと言いつつ募っている。足を退いて、レインは侍女の元へと近寄った。

相手から注意は離さない。

「……大丈夫？」

囁きかけると、思ったより彼女は平気そうだった。口元は気丈に固く結ばれていて、しっかりとした目つきでこちらを見上げてくる。敵には気を置きつつ、思考を巡らした。

——援助が早く来てくれないとこのままじゃ…

レインでも厳しい。いや、苦しい。

相手の力量はまだ未曾有だ。その上戦法も掴めない。

いろんな面で暗礁に乗り上げている

もしかしたら、ここから進入したこいつともう一人以外にも何者

かが、何処かから屋敷内に入り込んでいるかもしれない。

——…さて、

背中に、冷たいものが這い上がってくるような感触。

——『もう一人』…って。

そうだ。最初、玄関の戸口に立っていた影は二つだった。

カングルッペの投げた催涙弾で倒れたなんてことはないだろう。

それにもう一人の少年はぴんぴんして応戦しているし。

もし催涙弾の有効範囲に居て、それが効いていたならダメージを

受けたその姿が転がっていてもおかしくはないのに。

——迂闊だった。

瞬間、白い影が視界を覆った。

28 獵犬(中)

——瞬間、白い影が視界を覆った。

「…ッ！」

覆いかぶさるように突進してきたそれを、レインは何とか避けた。その拍子に体勢を崩して後へと倒れこむ。

「こらこらあー。先走らないの、後で遊んであげるから。リク」よく通る大人の女の声。

倦怠感が混じったような口調。声元は入り口付近から。

白い影は、尻尾を振りながら声の主へと駆け寄っていく。

「よしよし。良い？ 知らない人に飛び込んでっちゃ駄目。今度したらご飯抜きだかんね」

立ち上がって、逆行になってよく見えない影を凝視する。

シルエットからして女だろう。肩口で外側にはねた髪が特徴的だ。ライダースジャケットにハード生地ミニスカートを履いていて、女性らしい太腿が露になっている。ヒールの少し入った黒いブーツの所為か、長身に見えた。この状況に似つかわしくない程の軽装。

ヒールを打ち鳴らし、彼女はレインに一步、歩み寄った。

「ごめんなさいな。この子達、貴方に遊んで欲しかったみたい」

「…新手、か」

ぼそりと呟いて、レインは二人の侵入者を交互に見つめた。

美脚の彼女は呆れた口調で、少年へと向き直る。

「ツヴァイ、やる気ある？ 取り敢えず顔洗って出直してきやがれって程度の話だね。暴れるんじゃないかったっけ？」

「…ッしよーがねェだろ！ こっちは急に…、…ッ」

先程まで交戦していた少年を彼女はツヴァイと呼んだ。

彼はちらり、とこちらを一瞥してから不自然に俯く。

その様子を見ていた彼女は、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「はっはーん。：成る程」

にへら、と口元を緩めてから彼女は腕組みをした。続けて。

「あんたは一生朴念仁だと思ってたんだけど」

「うっさい！」

少年は一喝すると、彼女の方へと腕を突き出し、親指を突き立てて逆さにする。

「てめーだって、とーへんぼくには変わりねえだろ！」

「あははっは、一言語としておかしいって」

——何だよ：こいつら：

怪訝そうな顔を崩さないまま、レインは二人のやり取りに割り込んだ。

「……どうでもいいんだけど。侵入者さん達」

「はあい？」

返事をしたのは、狼を連れた女性のみだ。

「やる気あるの？」

「……うーん。出来れば穏便に済ませたいことこの上ないんだけど。インターホン押せばよかった？ あははは」

彼女は口元に手を当てて、わざとらしくにやけてみせる。

「どの道追いついてたさ。：単刀直入に聞いてやる。お前等の目的は何だ」

「んー？ほんとに単刀直入だ。まあいいけど、特別に教えてあげる。……要するに現状確認ってカンジかな」

ふっと彼女の視線がずれる。

「ね、女中サン」

レインはその所作に後ろへと気を配る。

カングルッペは気丈に口元を結んで、問いかけに応えた。

「やはり。『調査』ですか」

「……調査？」

彼女の口から出た単語に違和感を覚える。

美脚の彼女は一步踏み出して、こちらを一瞥する。

「調査、調査ね。いい表現してくれる。…ご名答。正しくその通り」

「おい、ラグナ…チョーサって何だよ。俺聞いてねえぞ」

今まで黙っていた少年の口が開いた。

「ツヴァイは人の言うこと聞き逃しすぎ。注意力散漫ね。ばってん追加」

「ケッ！ こーゆー時ばかり大人面しやがってむかつくなア」
少年は舌打ちをして、こちらへ歩み寄ってくる。

「にしても大丈夫？ 脱朴念仁しちゃったツヴァイ君は」

「うっさい！ ……もう決意したぞ。うん。ケッテイ！」

言い切って、自然な足取りで戸惑うレインへと歩みを進める。

「…何…、勘弁してよ」

またやる気だろうか。

内心、彼の戦い方は見切れないし、急に思ってもみない攻め方をするので、やりにくいことこの上ない。出来ればご遠慮願いたい。

…でも、現状はそう悠長なことも言ってられない。

後ろには持ち直したカングルツペがいるが、銃の扱い方さえたどたどしい彼女に活躍を望むのも無理があるだろう。

ここは、やるしかない。

刀の柄に手をかけて体勢を低くする。

臨戦状態で辺りの座標配置を確認。

ラグナと言っていたか、狼を連れた彼女は入り口付近に位置している。遠いが、横側に控えている狼ならば、一瞬の内にこちらまで疾走できることだろう。そして、こう思考している間にも、こちらに歩み寄ってくるツヴァイという少年。

彼にに注意力を割く必要が高い。

呼吸を整えて、歩法の基本配置に足を滑らす。

呼吸音の一つ二つとする度に、研ぎ澄まされていく神経で対象の動きを探る。

間合いに入る寸前に、跳躍した。

踏み込んだ、と視認した次の瞬間にはもう、ツヴァイの目の前へと移動している。

数メートルの距離など歩法を用いれば、瞬きの瞬間に無に帰すことなど容易い。

狙うは首筋。下からの横薙ぎ。

鞘に納まったままの刀身は、けれど研ぎ澄まされた細身の残像を残す。

衝撃音が鳴り響く。

予想はしていたものの、やはり弾き返されたようだ。

彼の得物は変幻自在で防御すらなんなくこなす。

刹那、二つの影は交差した。

レインが、彼の横脇から背後に回ったのだ。

背後から敵を討つことは卑怯と揶揄されることが多いが、そんなことは綺麗事だ。

——自分は綺麗じゃないから、そんなの関係ない。

足裏に摩擦熱が迸る。

反射的に危機感を察知したツヴァイは、対の長棍棒を後ろでに回す。

眼前に迫ったそれを、レインはなんなく回避した。

横脇を一步で抜ける。彼が振り向く瞬間、弾指の世界。

反撃の暇は与えない。

無慈悲な一刀横薙ぎを放った。

「ッ……！」

次の瞬間、驚愕した。

彼は振り向いての防御が間に合わないことを刹那判断すると、突発的に前に回避したのだ。

効率の良い避け方だが、問題はそれではない。普通、そんな考えは浮かばない。

しかも一秒を何割にもしたような間に、それだけの判断を成してしまう彼は一体何者なのか。

常識に捕らわれない、無軌道な戦い方。

「つぶねー…すげえなア」

呟いて、常識外の行動を取った彼は眼を丸くする。

それはこちらの台詞だ。

内心の感嘆と驚きを外視に出さないように、あえて冷ややかな口調で言う。

「そっちこそ、背中に眼でもついてるんじゃないの？」

「ははッ　…背中に眼エねエ。面白い喻えしてくれんじゃないの」
彼は犬歯を剥き出しにして、寧猛に笑う。

一度開いた距離は、何時でも埋めれる。

だから臨戦体勢は解かずに、レインは続けた。

「…教えてくれてもいいんじゃないのか。『調査』についてさ」

「それはア、そっちのメイドさんに聞いたほうが手っ取り早いんじゃないアねえのー？」

首の辺りをぼりぼりと搔いて、だるそうに足首を回す動作一つ々に隙がない。

本当にふざけた奴だ。

「こんな時じゃなかったら、正式に手合わせ願いたいのに残念だな」

レインは思わず口走ってしまったが、それが本心なので後悔しない。

…多少、不謹慎だったかもしれないが。

少女の言葉に、少年は何度か瞬きをしてこちらへと眼を見張った。

「…反則だなア、それ。でも嬉しいから一応その気持ちだけ頂戴しとくぜ」

何が反則なのかよく思い当たらなかったが、気にせずに脚幅を開く。

「――」

息を継ぐ。

数瞬、レインの目つきが変わった。

それだけで人相まで変わる。今の姿では一見だけでも彼女をただの少女に視る者は居ないだろう。

迷いの微塵も無い炯眼。

静かに全てを視通す本来の眼。

レインは告げる。

「さて。埒が開かない。こっちも仕事だ。…次で決める」

「…いいねエ、お前、気に入ったよ」

「年下に気に入られてもいいことはないな」

たん、と床を蹴る音。

ツヴァイが勢いをつけて疾走した音。

おそらくこちらまで一秒弱で来て、一瞬で勝負をつけられる度量は持ち合わせていることだろう。

時間は間延びして、ゆったりと手に取るように感じれる。

レインは居合いを放たない。

一步、彼が踏み込んで、あと半分。

——まだだ。

見切れ。見切れ。見通せ。

ツヴァイの得物の対の長棍が、振り上げられる。

——『今』、だ

それは刹那。

確信とともに刀を抜き払う。

鞘ごと抜いたそれは、真っ直ぐな軌跡を描いてまず対称の得物の一方を打ち落とす。

返って来たもう一方の棍も、容易く打ち落とす。

衝突音は同時に聞こえるほどの速度。迅速の技。

斬り返して、一手はカーブして真っ直ぐに急所へと向かう。

彼は瞬時に気がついて、両手でガードしようとしたようだが…

遅い。

得物を失い、開いた胴を黒鞘が薙いだ。

28 獵犬（下）

苦渋の声が聞こえる。

「ッ！　ゴホッ：アグ：ッ……」

その場に倒れこんだ彼は、苦しそうに鳩尾みぞおちを押さえている。

激しく咳き込んで、血の混じった唾液を吐き出した。

彼を見下ろすレインは悠然と立つ。

「悪いとは思わない。その所為で何時か返りを受けるならその覚悟はしてる」

それも誓いの一つ。

——自分は弱い。どうしようもない。

弱いから、回りの人間を犠牲にするしかないじゃないか。

痛みだって、苦しみだって、与え続けてでも愚図たらしく生きる。

他人の痛みが自分の血肉だ。

考えただけでも他者犠牲の塊。どうしようもない負の象徴。

——それはきつと。

こんな仕事をしたかったから、なったんじゃない。

自分は誰かを犠牲にしたいから、なったんだ。

何時かその報いを受ける。絶対に。それまでは、こんな生き方しかできない。

——だって自分は…彼女だって、いや、私だから……
こんな『偽者』で。

人としての尊厳を奪い去った者は同様に、人としての尊厳なんて求めてはいけないんだ。

一人の人物の顔が浮かんだ。

綺麗な造形の顔。胸元から余るくらいの長さの直毛の濡れ烏の黒

髪。眼まで真黒で、その瞳孔は深淵を象る。

『彼女』。

——それは、自らだ。

きつと自分は彼女の皮を被る、中身は卑劣でどうしようもない奴だ。

彼女の外見で、汚いことも残酷なこともしてきた。あまつさえ、彼女の見てくれを利用したことだってあった。

だから。言えない。

今更「ごめんなさい」なんて言えない。

——姉さん。

きつと、これからも姉さんの外見を狡賢く利用していく。

咎。何で、彼女は自分で、私が彼女であつたんだろう。

曖昧になった境界は、もう、線を引くことさえ出来ない。

「……………は」

小さく息を吐き出す。

時間なんて経っていない。頭の中で一瞬の内に巡った懺悔だ。それだけだから。

「ったくもう。口ほどにもないって。ツヴァイ幻滅、ばってん追加ー」

ブーツのヒールを床に打ちつけながら、溜息混じりにラグナは言う。

「ツセエ…よ。イヌッコロ任せが言えねェだろ……」

対するツヴァイは、もう回復しつつあるようだ。

負傷の後の回復力は、実際大したことであるし、彼の負けん気根性の顕われでもある。

「あらあら。カイとリクは純潔じゃないけど、狼の血を引いてる稀有な種だよ。それと、大口叩いたのは自分なんだし、埋め合わせはきっちりすること。自分でハードル上げるようなことしないから、

私」

彼女の言っていることは、一理ある。

少年も、それを認めたくないながらに分かっているようで、言い返しはない。討論は途切れた。

「引く気はない…みたいだな」

レインは呟いて、状況を整理してみる。

あちらの戦力は二人。もとい二人と二匹だが、目の前の状態だけでは判断しかねない。

二人なんて少人数で向かってくるのは無謀だ。きっと他にも仲間がいることだろう。

何時、新手が出てくるかも分からない。

そしてこちらは、援軍を待つほか無いようだ。

たった今一人を捻じ伏せた。

そしてその彼は今、自分の足元に居る。彼を逃がそうとは思っていない。いい人質だ。

もっとも、あちらに仲間を想う余裕と道徳があればの話だが。

ここで侵入者側の新手が出てくれば、全てが無に帰す可能性も否定できない。

——要するに、^{（いっしょ）}膠着状態。居心地が悪い。

しかも依頼者側であるカングルッペにも、まだ隠し事があるようだ。

確かに、包み隠さず全てを教えろ、というのは無理な話かもしれないが、隠し事の事と次第によってはリスクが高まり、やり難くなることもあるだろう。

——…頭を使うことには、慣れてないなあ。

元々、辺境育ちで鉛と硝煙の臭いと、と砂っぽい地で肉体的な生き方しか学ばなかった所為もあるのだろうか。

——と、余計だったな。

現実を見なくちゃいけない。

そろそろ、足元に転がってる少年が起き上がってきてもおかし

くない頃合だ。

「……ッはは、……すげエや」

案の定、彼は視線をレインに向けて言葉を洩らした。

今、武器はここから数メートル遠くへ飛ばされて、（彼が隠し武器をもっていれば別だが）反撃の仕様がないうというのが現状だろう。なのに、彼は笑っていた。

さも嬉しそうに。

「女のクセして強エや……くやしいなあ……！」

流して足元を見やる。

口元を吊り上げて笑う彼は、まだ先程の後遺症があるのだろう。

眉間に皺をよせていたが、昏倒してもおかしくは無い程の衝撃に耐えて、今、回復しつつある。

末恐ろしいな。と思う。

好戦的な者を甘く見ると、後で痛い目を見ることになる。

「……面白い戦い方をしていたな」

注意を散漫させずに、ふと口走る。

ツヴァイはふいの問いかけに、疑問符を浮かべた後、

「ああ……？ アレか、我流だけだな」

レインは聞いて呆れた。

あれが我流、ね。

我流を否定するわけではないが、あの手のものは偏りやすい傾向にあるのが難点だ。自分の得意な方へ、自分の楽な方へ。しかも、たとえ総合格闘技や武器技に優れて、武闘を編成することに優れていたとしても、自分の明確な師を見つけることは難しい。

居ても、多岐に渡る分野からその道での師を複数だろう。

だが、今見た彼の流派というに足りる、あの戦い方は何度も何度も、体に染み込ませるように鍛錬を重ねて、技や足運び、呼吸法に至るまで息をするのと同じくらい体に馴染んでいる。

並大抵のことではない。

レインは格闘術を叩き込まれて、反射神経を研ぎ澄ます術を会

得した者だから分かる。

彼は、ものの、十数歳でそれをマスターしていると言っても過言でない。

本当の意味での、これからが強い人物だ。

「ラグナー。いつまで突っ立ってんだよばか」

ツヴァイが怒鳴る。

「…さて。そのクソ馬鹿も治ってきた頃だろうし、始めましようか」

今まで、不気味なほどの沈黙を保っていた、ラグナと名乗る女性が口火を切った。

——反射的に身構えた。

「カイ、リク」

短い発韻。

「……！」

途端、白と、黒い影が渦卷いた。

疾風の速さで、こっちへと向かって来る。

先程の二頭の狼の様な生き物だ、と判別したのと同時に、目の前に鋭い眼光が光る。

——速い。速い。

咄嗟に頤を抱え込むようにして、しゃがみこむ。

頭上を通り過ぎていく二陣の風。

こちらの居る位置の背後に音も立てずに着地する。

そして、その位置からぐるんと向き直って、自らの鋭い爪を——

刹那、弾けるのは軽快な音。

それは銃声。

顔を上げて、二頭の獣の方を見る。

さつきより慎重に、確実に彼らはレインから後ずさりをした。

——どうして……

問いの応えは明白だった。

先程まで二頭のいた位置に、二つ、穿つ様な銃痕が残っている。
そして、弾を撃ったのは

「リート……」

レインが呟いた声は掠れていて、一度、喉をぐくりと嚥下させる。
階段の上、踊り場の位置から狙撃銃^{ライフル}を油断無く構えた姿。

鋭利さを兼ね備えたそれは、一つの影形としても端整さが窺える。

二頭の白黒の狼は、彼の凶弾からは逃れたが、その顔は齒を剥き出して歪んでいる。リートを新たな標的と見なしたようだ。じりじりと足を進め、今か今かと、踊り場までひた奔り、彼へと飛び掛るタイミングを計っている。

：が、女の叱責によって行動は打ちとめられた。

「リク！ カイ！」

びくん、と銀狼と黒狼の巨体が反応し、踵を返してラグナの元へと走り去った。

白狼は彼女の足元に大人しくお座りして、黒狼は彼女を庇うように前に躍り出てこちらに牙を剥く。二頭はもう入り口付近に居て、ここからは距離を取っている。

ラグナ：二頭の狼を自由に操れる彼女に戦う意志はないのだろうか。

必ずしもそうではないだろう。ついさっき、彼女は確かに二頭にレインの始末を命令した筈だ。

——だから、いきなり方針を変えたのは……

ラグナの瞳が揺らぐ。

「ハートレス……」

あからさまに、憎悪を込めた口調で、彼女はリートを睨みつけながら言い放った。

言葉はレインの耳にも届く。

——……ハートレス？

聞きなれない単語だ。

でも確かに彼女は階段の踊り場で、今も銃を構えている彼に向け

て言った。

当のリートは眼を伏せがちに応えた。

「…その名で呼ぶな。仲介屋」

さも静かに口にした彼は、けれど不愉快そうな顔色が見て取れる。

——仲介屋…？

一度だけ聞いたことがある。

傭兵と職種は似ているが、実質、平和的解決をモットーに掲げる裏家業だ。確か揉め事処理や、探偵紛いの調査もしてのけるという。要するに何でも屋に似た類のものだ。

この街ではそれぞれが、水面下でそれぞれの矜持と規則を持って暮らしている。

職業も多種多様、見聞きはしても、実際に遭遇することは滅多にない仕事人はこれもまた多い。

だから彼女と、この青年がそうだったとしても疑う術はない。

でも何故、仲介屋が。

彼女らはただの侵入者ではないのか。

「もう二度と遭いたくなかった。…けど、しょうがないから腹を括らないとね」

ラグナの表情は硬直し、険しくなっていく。

「今は私の手足となって、働いてくれる子達がいる」

彼女の視線が、二頭の狼へと向かう。

「同等じゃないな。お前以上だろう」

「ムカつくけど、ご尤も」

リートの辛辣な台詞にも、ラグナは苦笑して応えた。

しかし、彼を見やる眼差しには刺々しさが垣間見える。

彼女の瞳の奥に、僅かな畏怖が混ざっているように感じたのは、レインの気のせいであろうか。

「…俺はそっちと戦う理由がない。お前等の目的が分かれば譲歩もできるかも知れないにな」

かちやり、と銃を腰元に下げて、リートは片脇のショルダーホ

ルスターからベレッタS19を抜き取る。

「譲歩？ …その使用人にその気はないかもしれないでしょ？」

「…お見通しか」

リートは安全装置を緩慢な動作で外しながら、さも退屈そうにドットサイトの照準を確認していく。

「その…セレナータ・カングルッペって名乗ったか、女中さん？」

ふいのリートの呼びかけに、階段下の侍女が反応する。

「……はい」

「さて、今度こそ本当のことを話して貰おうか、いくら雇われた身だって、いつまでも騙され続けるのは気分のいいものじゃないな」
言った彼の口調は穏やかだったが、有無を言わせない頑固たる意志が伝わってくる。

リートはそのまま、銃口を見方である女中へと向けた。

かちやりと、銃鉄が鳴る。

レインは思わず声を上げそうになった。

「気がついて…」

「当たり前だろう。人を欺くならまず自分からって喻え覚えておけ」

「…、…あの…」

会話に割り込む形になったレインは、少し気まずそうに挙手した。

「話の意味が見えないんですが…」

リートはこちらを一瞥してから、俯いて苦笑した。

「だろうな、詳しい話はこっちも聞きたいくらいだ」

ラグナもきよんととして、開口する。

「…ちよつとーナニ？ 仲間割れだと非常に嬉しいんだけど」

「ラグナー、腹ヘツタあ…」

「お黙り」

ツヴァイの空気を読もうともしない発言をぴしゃりと制して、彼女はブーツの底を鳴らす。

女中は申し訳なさそうに肩を竦めて、独り言のように呟いた。

「…ご兩人、一時休戦してはいただけないでしょうか…」

「「はア？」」

ほぼ同時に、レインとラグナは疑問符を発した。

彼女：カングルッペは、更に心許なさそうに一回り小さくなる。

「えっと、でも、仲介屋でも侵入者には変わりないんじゃないか…」

「ていうか、そっちはやっぱりまだなんか隠してるんだ」

反論もほぼ同時だったので、足元の少年がくすりと笑った。

「ナニナニィー？ 面白そうだなあ、おい」

「あんた何？ まだ床に転がってたの？ そんなにそこ寝心地良
いとは思えないんだけど」

皮肉を込めた口調で言い放ち、彼女は腕組みした。

対し、少年は物凄い形相で彼女を睨む。

「こっちとしては穏便に話を進めれば、それが最良なんだけど」

「けッ、暴れるって言ってた奴がほざくなあ！」

「それはあんたでしょ」

侵入者二人のやり取りは息があっていて、長い付き合いであるだ
ろうことが窺える。

ラグナは軽く咳払いをして、腰に手を当てた。

「ともかく、この際だから言うけど…、私達はこの屋敷の主の生
死を確認しに来た」

「……生死？」

レインは美麗な眉根を顰めた。

「そ。その使用人さんが異常に警戒してたのは、この館の主が
死んでるのを知りられなくなかったからじゃないの？」

「……、…それは」

カングルッペは俯いて言葉を濁らせる。

彼女の様子からして、仲介人の話は十分信じるに値する内容。
対して裏付けるように、ラグナは肩を竦めて言った。

「成る程、凶星ね。となると隠してた理由はどうでもいいとして、

こっちは証拠掴んで報告に行かなきゃなんだけど」

「待って下さい！　…誰も、マスターが亡くなっているとは……」
カングルッペが悲痛な反論の声をあげた。

「ふうん、じゃあ、生きている証拠見せてもらわないとね。…会わせてもらえる？　この館の主人、本物のバゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワに、ね」

「……」

本物、という言葉に侍女は反応した。

どこか引つ掛かる。口調からして、彼女達はもう傀儡の存在を知っている可能性もあるということか。

「…カングルッペさん…もういいからさ、全部話してくれないか？」

息を洩らして、レインは告げた。

彼女はたじろいだ。

薄い唇が震えている。

レインは相手を眼を離さずに直視する。

けれど決して威圧的ではないように、ただひたすら真っ直ぐに。

束の間、眉尻をさげて言葉を紡ぎだす。

「話すに足らないような奴で、ごめんね」

「…ッそんなことは……！」

侍女は激しく反論して、体も心持前に出た。

演技らしくないその仕草に、レインも少なからずほっとした。

「――で。どうするんだ、この状況で」

リートは首を擡^{もた}げて指で手元の銃を弾いた。続けて言う。

「敵対しているままでもいいなら、すぐにでも『排除』に取り掛かる必要があるそうだが？」

一瞬、両者の空気がぴんと張り詰めたような気がした。

「待って下さい！　全て…話し、ますから……」

慌てて割り込んできた侍女の語尾は、ほとんど消え入りそうだった。

彼女は胸に手を当てて、深呼吸をする。

「まず謝罪します。傭兵方に虚偽の依頼をしたことを」
続けて。

「侵入者：いいえ、『仲介屋』の方：貴方方が御出でになった理由は、検討がつきます。どうぞ、中へ。本当のことを遅らせながらお伝えします」

29 道程

辺りに、先程とは気質の違う沈黙が降りる。

ラグナは顎に手を添えて思案しているようだ。

あちらの考えていることは分かる。

罨ではないかと疑っているのだ。あちらは、もうこちらの敷居を跨いでいる。それだけでも大分に分が悪いのに、これ以上深部まで足を踏み込むことなら後は煮ようが焼こうが、こちらの手の内と言っても大袈裟ではない。

しかしレインの予想に反して、返事は簡素なものだった。

「いいでしょ。着いていつてやることにする」

正気か、と自らの耳を疑った。

ただし、とラグナは続け

「こちらの武装はこのままに。カイとリクも連れて行っているなら……ね」

「勿論です」

カングルツペの即答で、レインは余計に困惑させられた。

——いや、そりゃあ……確かに武装なしで敵地に赴くってのは……じゃなくてそれ以前に……

もんもんと考察しているこちらに構わず、侍女は踵を返して階段下へと歩み寄る。気がつかなかったが、そこには小さな、大人がやっと通れるかというくらいの扉があった。

「ついて来てください」

振り返ったカングルツペの顔に、陰が射す。

心なしが今までとは違う、人間味の無い暗い顔。

「ほーら、いつまでも床に寝てんじゃないの。我が家のリビングかつーの」

呆れ顔で、床に倒れているツヴァイを促したラグナは、二頭の狼を引き連れてこちらへと向かう。

レインは身構えた。

狼を牽きえた彼女は歩みを止めずに、軽く口走る。

「大丈夫だって、『もう』危害は加えないから…ね」

くすりと笑って靴音を立てながらすれ違う、その瞬間――

「…ディセクター・ヴィアルドレッドは元気？」

「――！」

レインは眼を見開いた。

――今、確かに囁く程の小声だったけれど…

あいつは『ディセクター・ヴィアルドレッド』と言った。

それはおそらく、自分にしか聞こえないような気がつかないよう故意に言ったもの。

「…っ何を…！」

知っている、と聞こうとしたが、それは黒狼の吼えに遮られた。

「こらー、意味もなく吼えないよーにっいつも教えてるのに…」

頬を膨らませて、彼女は黒狼の頭を指で弾いた。

暫時。こちらを振り返って眼だけを細めてみせる。

――…この、女…

今すぐにでも問い正したいのを、必死に押しとどめる。

そんなことしたら、自分は冷静さを失ってしまうだろう。件の問題は、私情を挟んだものなのだから。

…でも、何故知っているのだろうか。

レインはこの国では、戸籍どころか住所登録さえも存在しない。

いわば浮浪者や渡り人と大差ない待遇だ。

よって名前と出処を偽って、自分を知らない者達の街で暮らしていれば、特定の人物の個人情報を知る術はない。例によって、李清と家族以外に『そのこと』を話していない。

胸底に溜まるような、嫌な疑問が循環し続ける。

――気持ちが悪い。

まさか自分でも気がつかない内に、身内事の漏洩をしていたのか。
――誰が？

胸底に嫌疑の雲が懸かる。

レインの経歴や身内を知っているのはザイフォンでは李清くらいなものだ。

――いや、それはない。

：やはり、カイス・フェーダクトが：

しかし彼は、自分の個人情報には疎かったはずだ。

疑うことばかりが頭を廻り、嫌悪感を振り払いたくなる。

小さく、深呼吸をした。

誰にも悟られないように。そっと。心情の波を、勘探することが出来ないように、外見では平静を装う。

酷く滑稽だ。

自分を誤魔化しているみたいで、だけど違うと否定した。

ラグナの背を追うように、小走りに階段下へと歩を進める。

踊り場から降りて来て、追いついたリートがカングルツペに何かを話している。

「：は二階に置いたままでいいだろう」

「それでは引き続き、貴方は：」

呟くような声で聞き取り難い。

一通り言い終わったかと思うと、リートは扉から数歩下がる。彼の仕草に違和感を覚えた。

「……行かないのか？」

レインが疑問を発する。

「俺はここに居る。新手の可能性も否定できないだろう。レインがその女中の警護をすればいい」

答えだけ淡々と述べて、リートは壁に背を凭れた。

「：そう、だね」

リートが居ないと何故か心許なくなる。

無論、他意はなく彼の實力を評価してのことだけだ。

起きてきたらしいツヴァイは、腑に落ちないという顔をして何やら感慨に耽っている。

「うえ、吐きそう……」

——前言撤回。単に気持ち悪いだけらしい。

先程の攻防からさして時間も経っていないというのに、やはり眼を見張る回復力。

彼はこちらをちらりと見、眼が合うとすぐに顔を俯かせる。挙動不審だ。

：今に始まったことではないが。

カングルツペが、こちらを一瞥してから、ドアノブに手を掛けた。軋むような、擦り切れるような不気味な物音と共に扉が開く。彼女は自ら率先して、中へと入り込んだ。

「レインさん、いいですか？」

頷いてから、前の侵入者：もとい仲介人の二人へと視線を流す。三人に引き続いて、レインも中へと潜るようにして入り込んだ。

その際に軽くリートに目配せをして、大丈夫だと告げる。

「……」

リートは端整な顔を少しだけ弛緩させてみせた。

見惚れるくらいに穏やかな笑み。

——ああ。そういえば……

彼のあんな微笑みを見るのは、初めてだった。

そして後ろ手に扉を閉める音が木霊する。

中は、思ったより広々としていた。

扉は小さく、大人が通るには向かない。平行に伸びる通路は足元の質感から、木材が使われているようだ。扉を閉め切って、外から

の光は一切届かない筈なのに、そこは薄明るかった。

けれど視界は悪いまま。

横へ手を伸ばして、壁を伝う。

壁の手触りからして、素材はコンクリートだろうか、やけに冷たくてひんやりしていた。

二、三歩歩みを進めたのとほぼ同時に、ぱちんと音がして視界が開る。

照明か何かのスイッチを入れたのか、一瞬眼が眩んだがすぐに目の前が鮮明になっていく。

何メートルか先に、ツヴァイの背中が見える。

それより少し前にはラグナと二頭、それからカングルツペの姿も捉えられた。

少年は結滞に洩らす。

「薄気味悪りいな……」

「地下通路…の裏道ね」

ラグナも頷いて、それっきり黙り込んだ。

おそらく、狭い空間に反響する自らの声を煩わしく感じたのだらう。

通路は道幅が2メートルくらいで、天井がやけに高い細長い造りだ。

前に数人いるので、前方の様子は見れないが、閉鎖的な通路。

——戦時中の、地下脱走路が：こんな感じだったのかな：

地下道に似ているが、大きさの規模としても差があるだろう。

何よりも違うのは、場の雰囲気だ。

薄気味が悪い。理由は分からないが、吐き気がしそうになる。気が滅入る。

壁が、床が、天井が、今にも迫って来るのではないかと言う擬似感覚に襲われる。

無言で一列になった、些ちとか不自然な組み合わせは前へと進む。

足音が何重にも響合い、木霊する。

それさえも、自分達のものでないような気がして気持ち悪い。
何処へ向かっているんだろうか。

病的なまでの閉鎖空間での時間は間延びして、あるべき感覚を麻痺させてしまう。

どのくらい経ったのか。

数分にも、何時間にも感じれる…そんな矛盾した意識の中。
胡乱げな頭は、その一声で醒めた。

「…ここです」

一行の足が、止まった。

行き止まりのようでもあった。だが、木製の古ぼけた扉が、そうではないと言い切っている。

ああ…着いてしまった。

思わず嘆息したくなった。

もう、やっと、ついに、ようやく…どの表現にもそぐわない。道程が臙氣過おぼろけぎるためか、それとも…

侍女は思考の暇も与えずに、扉を開けた。

室内に入ってみると冷たい風が吹いた。

思わず胸をかき抱くようにして腕を擦る。

——暗い。

誰かの靴音。床は固い材質のようだ。

「奥へ。進んで下さい」

侍女の声が聞こえた筈なのに、暗くて声元が辿れない。

ぞわりと、肌が粟立つような感覚を味わった。

これとよく似た状況を、確かに体験したことがある。

——視えない、見えない、分からない、……、…

我慢出来なくなって、四方を転換を繰り返しながら向き、何かを探すように何度も手元を探る。

何も無い。扉のあった場所に手を伸ばしても、指は空を切る。

「カングルッペ……?」

虚空に消える声。

——駄目だ…落ち着け……

何度も鸚鵡返しおうつむにして、言い聞かす。

でも、絶対何かおかしい。だって、もう何も聞こえない。声も、音も——何も無い。

思わず床を蹴り上げる。幸い音はした。けれどそれがどうしたというのか。

「…誰か」

呼びかけてみるが、反応はなし。

——寒い…ここは……、

冷蔵庫の中のようなだった。視認はできないが、息が白く曇っていてもなんらおかしくはない。

——不安。躊躇。竦み。恐れ。

駄目だ。現状を視ろ。

でも、いくら暗中模索したって、指先は何にも触れない。

おずおずと後退し始める。何も背に当たらない。

何故か、この状況で叫びだしたい衝動に駆られた。

一人の無力さを実感させられる。このままでは凍死してしまう。

吹き上げる冷氣。

響く空洞の音。

暗い空間。

——姉さんの 置かれていた 部屋。

「……！」

——何で。どうしてこのタイミングで思い出す？

駄目だ。それは考えちゃいけない。

と——、音が聞こえた。

何かがぶつかる音、殴ったような荒々しい音。

暗中で、無音の中、本能的な五感が研ぎ澄まされていた所為もあるのだろうか。

レインにはその物音の正体が、理解できてしまった。

——それは、間違いなく人の頭を……

そう思考した瞬間に視界が一度弾けて、本当の意味で意識はブラックアウトした。

…空調機だろうか、轟々と人ならぬものが呻き声を上げている。

瞼が重い、視界が霞んでいる。

それでも倦怠感に打ち勝って何とか眼を開けた。それだけでも疲れる。閉店後の重たいシャッターを無理に掴み上げようとするのに似ていた。

——何が、あったのか…、思い出せない。

正確には思い出そうとすると、疎外感と倦怠感が邪魔をする。

どうでもいい、と感じた。

面倒なのだ。要するに、頭が考えることを拒否している。

本能的なもので抗い難い誘惑。

下らないことを考えずに、もう一度睡魔に身を任せてしまいたい。

理由とか、訳を考えることに意味を見出すこともできない。

いっそのこと、また浅はかな眠りに時化^{しけ}込んだ方が利口^{しんぱう}に思えてくる。

レインは軽く伸びをしようとした。

自然な動作で深い意味は無く、朝起きて自発的にするのとなんら

変わりはないもの…だが。

——かしゅん。

物音がした。手元からだ。金属が擦れ合うような独特の音質。

——耳障りだ。

ただ、冷たい空気よりなお冷たい物質が手首に触れたとき、意識が覚醒した。

——…何で、鎖なんかで繋がれてるんだ…？

そう、鎖だ。それ以外に該当するものはない。

手元から手首までぐるりと巻かれていて、少々きつい。…が、問題はそんなことではなく、何故『自分が手首を拘束されているのか』ということ。

…拘束。つまりは自由を奪われている。

事実をじっくりと咀嚼して、眼を見張った。

倦怠感は続いていたが、今は頭の隅に置き忘れ。

——そして。

気がつく。自分は何故か『立った状態で寝ていた』

否、させられた、の方がしつくりくるか。

足が棒立ち状態で寝る、等という特技なんて持ち合わせていない。

そして、同時に気がついたが、手は頭よりも上の位置に『吊り下げられている』

成る程。と納得した。

つまり自分は麻痺薬か睡眠薬でも盛られて、ここに運び込まれた。

暗くて部屋の間取りは分からないが、この寒さと空調機が出元だろう音の反響の仕方からして、広い空間のようだ。

今は壁に凭れるようにして手首を繋がれている。

もつれそうな足を真っ直ぐにして立ち、眼をしばたかせる。

黒くて胡乱な空気以外、何も見えはしない。

意味が、分からなかった。

何故自分が、そもそも自分はここでこうしている前は何をしていたのか。

思い出そうとすると、鈍い偏頭痛がしたが、無理に記憶を手繰る。

——……思い、…出した……、

そう。任務の途中だった。

確か豪邸の警備と館の主の警護併せての。

傭兵は、自分だけではなかった。他にも：

そうだ。リートとノイシュ・アルカードと言う男と、三人での仕事だった。

——依頼主は……

駄目だ。思い出せない。

その部位だけ記憶が欠落しているのではなくて、まるで霞がかかってぼやけて、実態が知れないという感じだ。

何かおかしい。

諦めて思考進路の方向を転換してみる

それで…そう、三日目だったか、敵が、侵入者が。

相手は二人。

左右一対の長棍を操る対術にも長けた少年、ツヴァイト。

彼のお目付け役にも見えた、二頭の白黒狼を連れたラグナ。

彼等は、どうなったのだろう。確かに。あの時、3人で階段下の扉を潜り抜けて……、

——え？ 何かおかしい…あの時はだって……

本当に『三人』だったわけ…？

否、居た…：…そうだ。四人だ。

自分。ツヴァイ。ラグナ…：…でも後一人は…？

「…目覚めたかい？」

ふいに前方から声がした。

眼を凝らしたり、眉間に皺を寄せたりしてみるが、上手く視えない。

「夜眼は利くほうだと思ったんだけど…、薬で眠らされた後じゃあ、仕様がないかもね」

その人物の声は、中性的な美しさを兼ね備えた密のような甘さがあった。

けれど、口調と雰囲気からして間違いなく男のものだ。

どちらにしろ、聞き覚えの無いもの。おそらく声の主とは初対面だろう。

「…お前、は誰なんだよ…」

たどたどしく、尋ねる。舌が上手く回らなかった。

「ボク> ボクは『捌き人』なんだ」

「捌き、人……？」

物騒な名だった。名は本質を表す。

もしかしてと、その嫌な予感は的中する。

「他にも処理人とか、バラし人とか呼ばれてるけど……」

――人身売買か、臓器売買の関係者か……

「本当はね。とても嬉しいんだ。……今日はとても良い日だよ」

レインの問い返しには応えずに、感嘆の溜息混じりに彼は話す。
熱に侵されているように恍惚とした声音で。

「君のような人間には、中々お目にかかれなからさ」

ふっと、冷たいモノが腕に触れた。

服を挟んでいても分かる。ぞっとする、蛇みたいな手つきで腕先をなぞっていく。至近距離に、指の持ち主で声元の対象が居る筈なのに、全く気配が感じれない。

それがまた不気味だ。

「――何を……」

かちやり、と音がして左手が自然と下がった。

続いて、右手も、両手は手錠らしきもので拘束されているが、壁に吊り下げられてはいない。

つまり。

――開放……したんだよな。

今の状況では彼が、敵が見方か、あるいは無害な者か危害を加える者かさえも分からない。

だから安易に得物を抜くことは出来ない状況だ。

そこでふと気がつく。

――……得物……？

腰の辺りに手を動かす。……が、ない。

反対のベルトの辺りを探ってみるが、やはりない。

「ごめんね。反撃されたら困るから君の武器は預らせてもらっ

てるよ」

美声で応える彼の声には悦びが混ざっている。

それがレインに確信を与えた。

こいつは、やはり自分に害する者のようだ。

「：何が、したい。自分を捕らえたところで、何にもならない：」

「そんなことないよ。君には利用価値がある。売り物としても、玩具としても、ね」

レインの中で、隙の無い鋭利な刃物の殺意が光った。

だが、今は反撃するタイミングではない。

待って、機が熟すのを待たなければしくじる。

相手の気配の消し方を見ていて、侮れない相手と直感で理解した。今、敵にするのは賢くない。

そもそも、ここが何処かも分からない。

今まさに自分自身が暗礁に乗り上げている、この状況下で。

「着いておいで。：それとも足元が覚束おぼつかないかい？」

「余計なお世話だ」

足元を確認しながら歩く。

暗い所為か足取りが心許ない。

前に行く男の足音を頼りにして歩く。

これが正しい判断かどうかは分からない。が、暫くの間はこうしていたほうが無難だろう。

相手が隙を見せるのをじっと探り待ちながら、小足気味で進む。

硬質な足音が響きあう。

ふと、自分のものではない、誰かの足音が止んだかと思うと、眩くらしい光に眼が眩くらんだ。

それが扉を開けて入ってきた照明の光と理解するには、少し時間がかかった。

押し扉だ。逆行でよく見えないが、男がこちらに手招きをしている。

空間にそれ以外の扉はなく、地理さえ分からないのだから、選

択肢は元より一つだった。

気を引き締めて部屋へと入り込んだ。

——中は白かった。

染み込むような白い蛍光灯の光りに眼の裏が痛くなる。

そこに——居た。

暗い部屋で話していた声の元。彼は部屋の中央へと数歩進んで、こちらを振り返った。

薄い色素の髪を、肩上まで伸ばしている。男としては長髪の種類に入るだろう。彼の白髪は蛍光灯の下で反射している。長めの前髪で人相は窺えない。顔が蠟人形のように血の気がない所為か、年齢は不詳だ。自分よりは確実に年上だろうが。

彼は白衣、医療白衣や研究者の着るものと酷似した衣服を身に纏っている。

「ああ：なんて綺麗なんだろうね：もつとよく顔を見せてくれな
いか：」

陶醉し、話す男の眼はこちらを見ているのに、どこか掴めない。

レインは、視界がはつきりしてくると部屋を見渡した。

天井、左右の壁、床にいたるまで白い。

一面に清潔感漂う、その反面潔癖すぎて気持ち悪くなりそうな空間。内装だけならば病院の手術室に似ていた。

いや、似ている。ではない。

そのままだ。そのものなのだ。

ここは手術室の模範だ。

部屋の中央に寝台がある。

上下駆動のできる機会端末の布部分だけが、暗い緑色だった。

——そして。

寝台の上には、一見しただけでもおぞましいギロチンがあった。

——断頭鎌
ギロチン

それ以外に的確な表現が見つからない。

鈍く照り返すあの刃は、罪人の糾弾の声さえも断ち切る凶器だ。

見せしめとしての拷問具だ。

そして、部屋には他に何も在りはしなかった。ただ広い部屋なのに、手術台とギロチン、目の前の白い男以外何も無い。

つまり、ここは処刑を行う為だけの部屋だということだ。

そこに運び込まれたレインは言うまでもなく……

「……自分を殺すのか」

相手が最後の勧告を言い渡す前に口にした。

自然と恐怖はない。

「君はボクに殺されたいのかい？　大丈夫、ボクは死体でもイけるから」

「屍体愛好者か……残念だったな。自分の体は男を喜ばせるようには出来てないんだ」

「どういう意味だい？」

「……そのままの意味だ」

吐き捨てるように発して、相手を睨みつける。

「はあ……ぞくぞくする。いい目だね。……ただの冗談だよ」

「……とつとと離せよ。この手錠」

レインの語句には飽和しそうな怒気が含まれている。

けれど言ってみたところで、そんなのは虚勢にかならない。

両手には手枷が嵌められて、レインの得物はここには無い。

男は存外に不思議そうに問うた。

「君……命乞いはしないの？」

「どうしてお前に命乞いなんてしなきゃいけないんだよ」

レインは冷淡にあしらった。

「へえ！　これは面白い。君みたいなのは初めてだなあ！」

とち狂った声で叫び、男は哄笑した。

レインにとっても、ここまで頭のネジが飛んだ相手と会うのはついで久しぶりだ。

一通り笑い、男は振り向いた。

「――大丈夫。取って食べたりはしないよ。死肉嫌いなんだ。ま

あ、コレは……ちよつと痛いかもしれないけど」

痛い——という表現にぞっとした。

ギロチンを受けた者は『痛い』の意思表示ができるのか。

そんなワケない。

一瞬で終わりだ。

あくまで男と距離を取りつつ、レインは話した。

「言葉が通じてるなら訊く。……どうして自分がこんな目に遭わなきゃならない？」

「命乞いはしないんじゃないのかい？」

「……命乞い？ 違うな」

無論、死ぬのは嫌だ。

冗談じゃない。

「腹が立ってるんだよ。どうして発狂野郎に殺される道理があるんだってな」

「……？ そんなことボクにはどうだっていいんだけどなあ！ こっちだって『捌き人』として仕事でやってるワケだし」

続けて。彼は紅の舌で口唇を舐め、

「ボクは……肢体を刻めればそれでいいんだけど」

声音に変化は無い。相変わらぬ放蕩とした声だ。

——ああ。こいつ。

本格的にズレてる。

ただ、肢体を刻むという猟奇的な言葉には『お前の肢体を刻む』という意味合いがしつかりと含まれている。

運の悪いことに、自分はどうしてもない異常者の標的になってしまったようだ。

楽観視できない状況。

抵抗はできるだろうか、周りに武器はない。

普段の生活では無駄な物が多いから、食卓に並ぶ食器だって、道端に落ちてるパイプ管だって武器になる。灰皿での殺傷なんてざらでもない。凶器はどこにでもある。問題はそれを扱う人間だろう。

だが、異常なまでに実用性しか求めていない空間には、そんな物は存在しない。

勝算は低い。――が『やらなければ、やられる』
これは正当防衛だ。必要なことだ。

「勘弁して欲しいな」

生命的危機が迫っていると伝えるように、鼓動が早くなる。

目の前の人物はゆらりと、こちらに歩を進めてくる。

手に何時の間にか握られていた、黒色の電圧制圧機スタンガンのスイッチを入れる。

後退りしたレインは後ろに壁があることに気がついた。

先程入ってきた扉に縫り付くように食いつく。

自動扉と思われるそれに取手はなく、両手を繋がれた拳を力の限りぶつけ、脚で蹴り飛ばしたものの、コンクリートに似た材質の白い扉はびくともしない。

獲物が逃げ出さないように頑丈に出来ているのだ。詮無いことでもあるが。

獲物を追い詰め、魔手が迫ってくる。

――恐れるな。

怖がったら負けだ。

ばちばちと、火花が散るような音がした。

――嫌だ。死にたくなんかないし、四肢を切り刻まれる拷問もお断りだ。

レインは一瞬で、決意を固めた。

振り向いて、こちらにスタンガンを向けている人物を睨む。

――認めてやるものか。

ふっと、一呼吸で膝を落として、男の足元へと足払いを掛ける。
あちらは反撃を予想していなかったのか、反応が遅れて、それが致命的となる。

足が縫れるようにして、何とか踏みとどまったというところか、
レインは止まらない。

男の背に回りこんで手刀を構える。

…が、それとほぼ同時に奴は後ろ手にスタンガンを回し込んだ来た。

それを首を傾げるような動きでかわして、スタンガンを持った手をしっかりと掴む。

腕力は人並み以下のレインだが、しっかりと筋を抑えて、面を押さえれば相手の抵抗は困難になる。

今、繋がれている両手ではリーチも低く、動かしにくいだが、それでもできることはある。

現に今、彼女は優勢に立っていた。

縫い合う一瞬手前、というところで無理矢理にスタンガンを引き剥がして、それを躊躇なく相手の首筋に叩き込んだ。

「……」

声にならないのか、一度その電極部分を肌に交えただけで男は崩れ落ちた。

重たげな音が床に広がる。

「……はあ……」

息が洩れる。

——：一瞬、やばいかな、とも思った。

けれど、人をギロチンにかけるか、肢体刻みにしようとした奴の末路としては、甘い体裁だろう。

スタンガンのスイッチを切って、それを片手に一度、辺りを見渡した。

相変わらず、白い。

けれど部屋の中に、先程まで気がつかなかった構造が見えていた。
——先程入ってきた扉だ。

今、後ろでにある扉と対になる形で配置されている。見ると、出口横には稼動スイッチがあった。

迷いなく、そこまで小走りに進んで、立ち止まる。

レインが恐る恐るスイッチを押すと、扉はすんなりと開いた。

——…ここまで来て、迷うのも変か。
レインは扉を通り抜けて、外へと出た。

31 信心

レイン達が入っていった、もうすぐ十分が経つ。

数字単位でさして時間が経っているわけではないのに、何故かリートは焦っていた。

――腑に落ちない。

というよりは、厭な予感がすると言った直接的か。

第六感じみた曖昧なものを信用する程に、精神的に切羽詰まっではないが、事実彼はこんなにも焦燥している。原因にはおそらく、この依頼の不可思議さと不自然さもあるのだろう。

最初のうちは、資料を見て、依頼書を見ても何も思わなかった。

この手の護衛は狙撃手に依頼されることは少なかったが、皆無と
言うほどでもない。

加えて、傭兵の二人も居るとなると、遠近戦闘バランスはそれなりにとれている。

納得して、受けた現在の依頼。

傭兵に対する扱いは、待遇でいったら上々。それは良い。：が
依頼主との接触のあまりの少なさ。

閉塞的な空間。

依頼主が途中で変わるといふ奇異な出来事。

否、正確には彼女が言うように、元から依頼主は自分であったと
いう。しかし本当にそうだろうか。口先だけでは幾らでも偽れるこ
とだろう。

逆説逆理と名が付く概念がある。
パラドックス

今回の件は、それに当て嵌めることは出来ないだろうか？

仮に、彼女が言ったことが本場で、実際に彼女が依頼したのだけ
れど、立て前では自分の主人、形だけの館の主が依頼をしたことに

して偽ったする。だが、その行動に何の意味が在る？ 依頼主が彼女では何か不都合があったのか？

別段、使用人が依頼主だとしても、主人との意志の疎通と了承を得ていれば、何も咎められることはない。自らが仕える主人の身を案じた上でのことなら殊更だ。

傭兵だって、その辺りは汲み取るだろうし、そもそも『関与せず』の方針を貫く者が多い時世に、気にする余地などない。

——だからこそ、とリートは思う。

不自然なのだ。

セレナータ・カングルツペという使用人自体、そして：

館の主バゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワを名乗っていた存在が、本当に『傀儡』なのかさえも疑問に感じる。

確かに傀儡は自分の生命活動を維持する為に、誰かにかしづいて文字通り『操り人形』として生活することが多い。リートは『奴等』については並みの人間よりも熟知している。

しかしながら、一度会ったあの人物が傀儡だという確証は何処にもないのだ。

即物的な話になるが、傀儡は需要が高い。

競りに出されたなら、高額での売買になる場合が非常に多い。

そして、何よりも、希少価値高く、何処にでも居る存在ではないのだ。

一種の精神病と喩えられることもある傀儡は、何百万分の一の発症率とされている。

それに一番不可解なのが、何故、傀儡を置く必要があったのかということ。

主の代わりなど、お誂え向きの『頼まれ屋』の役者にでも依頼すればいい。

矛盾しているのだ。

彼女は侵入者を排除したい。侵入者の目的は『バゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワ』

しかし彼は傀儡であり、偽物だ。侵入者はそれを知っていればどのような行動に出るのか。

…考えすぎて、はっとした。

思考が飛んでしまったらしい。

ともかく、レインと些か信用できない使用人、侵入者もとい『仲間』の二人は隠し扉の中へ入って行ってしまった。

女中と名乗る彼女が、その中で何を証明するのかは謎だ。

本物の『バゼット・ワイシュ・ゴンゼルトワ』を匿っている場所に連れて行くだけならばまだしも、もし彼女に不穏な意図があるならば平和的に物事は運ばないかもしれない。今更、レインを行かせたことを後悔した。

自分が止めた所で、大した効果も無かったかもしれないが。

せめて後味の悪くないように、無事でいて欲しいと思う。それは単純な感情で。当たり前の反射的な想いで、他意はない。

……っていうのは嘘になるかもな。

リートは内心で訂正する。

……もう十分、俺はあいつに干渉してるわけだ。

ことの初めは、レインを彼女と見間違えて追いかけて、何故か闘争になって…何故か李清が割り込んできて…

結局、あの時のレインは街に来たばかりで、右も左も分からないという有様だった。

そのこともあり、彼の知り合いの知己である李清が預かることになったのだった。

回想してみると何故、という疑問形が多い。

……そうだ。自分はそもそも、あいつがこの街を訪れた目的すら知らない。知らないから、知れないから、そのまま疑問に置き換えているだけだ。

……それでいいけれど。

同じようにあいつはこちらのことを知らないし、お互い差し引き

はないだろう。知らないほうが、無知の方が救われることだってある。

リートは頭を起こして辺りを見やった。

依然変化はない。そろそろ二十分位経つだろうか。

——もし、一時間経って音沙汰無かったら：行こう。

そう思った矢先に、上から声が飛んできた。

「おいっ！　ちよっといういか？」

誰かと思って身構えたら、二階の警護を続行するように言い渡していたノイシュ・アルカードだった。

大柄の彼は小走りに階段を降りてくる。

「どうかしたのか」

「それが、一度、出来心：っじゃない、不本意だが仕事として館主の部屋を覗いてみたんだが、誰も居ねえんだよ。：クグツ、とか言ったか？　アイツは外に出ない筈だよな？」

少々、たどたどしくて彼の説明は分かり難かったが、要するに。

「傀儡が：一人歩きしている？」

——いや。そんな筈はない。

あくまで人形的心理状況の傀儡は、所有者である者以外の命令を受け付けないものだ。

所有者は、おそらく侍女：セレナータ・カングルッペ。ということは、彼女が傀儡を部屋から移動させたことになる。しかし、部屋に一つしかない扉はリート達が引つ切り無しに警備に当たっていた。

待て、とリートは思い当たった。

交代の間は、カングルッペが代わりに立っていた。その間なら彼女の自由出来る時間だ。

——でも、：そんなに短い時間で移動を……？

「不自然だな。身代わりさえも居ない蛻もぬけの殻を警護させて。：いや、それすらも偽物……」

「だよな。ワケ分かんねえよ」

アルカードの言う通りだ。リートだって意味が分からない。何を考えているのだろうか、あの女中は。

――突き詰めるならば、使用人という立場さえも……

当初、彼女を見た時に感じた不穏な陰がちらつく。

彼女と自分は、本当に先日が初対面だっただろうか。

「あいつ…もしかして…」

リートは呟いて、ワケもなく寒気がした。

32 懸念

言葉にするのも嫌ではあるが。

——心が折れそうだ……

どこまでも続く鬱蒼としていて、白いのに暗い通路。

陰鬱と攻めてくる精神攻撃というものをあまり喰らったことなかったからだろうか、甘く見ていた。

——まだ死にたくないな……

弱気だ。泣き言だ。こんな台詞、誰にも聞かれたくない。

けれど弱音でも吐かなければやっていけないんだから、しょうがない。

そろそろいい距離を歩いた。

足が棒になりそうだ。

床は相変わらず硬質なコンクリートで、反動は踵と足裏全体で返しているのだが、それでも蓄積されていく衝撃は足の酷使を加速させていく。

細身ながらレインは日々脚力を鍛えている。

特にダメージやクラッシュの受け止めは、実践では必須だ。剣技など、その尤もたるもので、意識して身に着けている。

若いうちは脚はバネとしての俊敏性、瞬発力や衝撃吸収が主になるのだ。

必然的に細身で人並みの力量が無いレインは、そこに重点を置いていく。

脚のみは人並み以上の性能を誇っている彼女でさえ、気を使って歩いていても筋肉的疲労があるのだ。自ら不甲斐なさを論点に置くよりは、床の材質は何なのか、そこを疑問に思うべきだ。

加えて、皆目現在地はは何処かなんて分からないし、判断材料も皆無だった。

せめて窓や扉など、外と繋がる出入り口があれば幸いなのだが、それらの類は一切無かった。

お陰で、今立っている場所の所在や現在の時刻が昼夜どちらかさえも分からない。

レインの目の前には白い通路。薄くて大きいタイルのような床で、遠目からだと床に線が交差して四角形が綻びもなく並んでいる。

進んでいくと、時折、壁には通気構のような物が、床には溝蓋のような金網状の物が嵌められていたりもする。

絶え間なく空気の流れる、人の呼吸に似た音が漏れ出しており、酷く薄気味が悪い。

そして、やはりとも思う。

——ここは地下だ。

地上の道は必ずと言って良い程、何処かに続いている。

行き止まりなんて最近では珍しい。けれど、地下道の類はそうでもないのだ。主要道を元に、蟻の巣さながらの複雑さで絡み合う。

闇市や違法売買の行われている通路間や、公の駅の地下道以外は、開発途中で工事打ち切りという場所も珍しくなく、行き止まりなんてざらでもない。

よって、レインは悩んでいた。

引き返すべきか、否か。

このまま進んでも、地中迷路の突破口が見つかる確信はごく低い。確立は中庸。

きっと引き返しても、先程の手術室（というより処刑室）に戻ってあの野郎と鉢合わせしなくてはいけない。

この際、通気構から別ルートに行ってみようかとも考えたが、もしものことを鑑みると想像しただけでも身震いする行いだった。

——それにしても……

何故、通路は一本道なのだろうか。

先程、部屋らしい部屋を出てからずっと一本道。

何か地形的な理由があるのか知らないが、あまりにも単調な風景は、絵空事と区別がつかなくなりそう。先に精神の方が参ってしまう。

——わざと、か？

袋の鼠になった気分。

比喩でもなく実際そうなのかもしれない。

まるで誘導されているようだ。

体力面でも、精神面でも、辛くなってくる頃だ。

早く打開策を練らなければ、この場で力尽きるという選択も無きにしも有らずなのだから。

「……どこまで続くのか、だよな」

呟いた声は反響して、自らの耳に残る。

発した声が想像以上に衰退していて、危機感を覚えた。

——なんでこんな目に……

何で自分が拉致されたり薬を盛られたり、殺されかけたりしてるんだ。その時点でおかしい。

後先のことは考えても仕方ない、一度始まりに戻らなければ。

——そもそも。だ

確かに任務の最中だった。状況からすると、可能性として浮かぶのは、侵入者が自分をこんな目に遭わせているか。それとも……
——……ああ、駄目だ。

『それ』についてのみ、記憶が欠落している。

誰かが故意にレインの記憶から『そのこと』を消したのか。

靄々する。ごく近くまで来ても思い出せないなんて。

もう睡眠薬の効力は治まった筈なのに。しかも五感も最良の状態ではない。時折立ちくらみをしそうになる。或いは、自らの身体を今も占める体調不良にさえ、誰かの意図が働いているのか。

でも事実、『それ』は『居た』

問題はそれが何だったのか、対象があまりに抽象的すぎる。

以前として埒が開かない。

——でも。

前に進もうと決めたから。

戻ってもどうにもならない。

今は自分の座右の銘に従う事にする。

たとえば、どんなに辛くても、向かい風の中でも、進み続ける。1
ミリずつだっていい。絶対に立ち止まらないって、いつだって自分
に出来ることをするって。

「決めたんだ……あの時に」

そう、こんな所で立ち止まってなんかいられない。

足音は反響していく音。

ブーツは靴底に鉄の板を退いてなめ鞣してあるので、硬質と硬質な物
同士独特の音質を弾き出す。

それに自分の耳障りにならない程度の息遣い。小さな音でも響く、
永い廊下。些細なことでも聞き落とさない程の静寂。
だからこそ、気がついてしまったのか。

——ぽた、

何かを落としたような、水滴のような、僅か一滴の、

————ぽたぽた、

今度はそれ以上、何滴か、滴り落ちるような。

生臭い匂いが鼻孔を刺す。

レインは反射的に振り返った。振り返ってしまった。

白い通路の一点の鮮烈。

通路に咲いた華は赤色。

それは今も、薄気味悪く、淫靡に、しかし喻えような無い美しさを
備えて——そこに存在していた。

噴水のような、と絵空事のような客観的視で思った。

赤を噴出し続けるそれは確かに機械的だ。

だって、目的が感じれない、意志も感じれない。

『血を噴き続ける』行為の。

「……」

見ては駄目だと、理性的な安全装置が働きかけて、何とかレインは目を逸らした。

——人。…そう、人だった。

人『だった』モノだ。今は死体。

アレで生きている筈はない。

あまりに凄惨な光景だった所為か、あれを人間として悼む感情も浮かんでこない。

けれど、自分は『アレによく似たモノ』を以前にも見たことがある気がする。

しかし、今の心中にある感覚は唯一つ。

——ただ…気持ちが悪い……

「——気分はどうですか？」

凜とした、よく通る声。

質問内容は漠然としているが、アレを見た後の気分を問うているのだろう。

その質問にさえ、問いかけ側の異常な性質が窺えるようで、レインはぎゅっと前を睨んだ。

今もなお、目的もなく血を振り撒くその奥の、人物を。

「……知ってますか」

霞む廊下の更に奥を見透かした。

「ここは昔、軍警察が管轄していた地下施設です」
足音が聞こえる。

「地中地獄：そのままの名前をつけられたこの場所は」
話す声が近づく。

「…哀れな失敗作の処理場でした」
人物の、外縁が見えてくる。ゆったりとした足元から、段々と陰が消えていく。

「貴方もここで死ぬんですよ」
レインは、一言。

「……セレナータ・カングルッペ」
その人物の名を呼んだ。

33 冷血

返り血ひとつ浴びずに、彼女はそこに立っていた。

「――深層のここまで辿り着いたのは貴方が初めてです」

女中を名乗っていた時と変わりない、滞りのない口調で言っただけ
「それは尊敬に値しますし、立ち止まらなかったり、後に引き返さなかったのも殊勝な心がけです」

すらすらと、口から台本通りというような言葉が紡ぎだされる。
「でも、こちらとしてはじっとして居てもらった方が助かったのですが」

レインは口元を浅く開いて、動かす。

「残念ながら遺言は届けられません。私はここから出れないので。

……貴方もここでお終いです」

小さく開口して深呼吸した。

――大丈夫、……大丈夫だろ。『この程度』

胸に手を当てて、その掌から振動が伝わってくる。

……大丈夫だ。

レインは話し出した。

「不思議だったのは……」

唐突に開口したのに対し、カングルッペは怪訝そうな表情を露見した。

「……まどろっこしいし、何でそんなに面倒なことをするのかなくて……それに嘘をついていたことに関しても。虚偽の一つを最初から仕組んでおいて、それらを中盤で晒す、これで脚本的に相手にもう嘘はありませんよ、という戦略だったのかどうか知らないけど。嘘に真実を混ぜると真実味が増すように……それだって、もっと大きな嘘の中じゃあ小さすぎて気にならないよ」

饒舌に話し、場違いに苦笑して元侍女を見やった。

「気がついていらっしかったですか」

「いいや……自分も騙された一人だ。他の二人は頭が切れるし自分なんかよりも経験豊富だから、案外見破っていたかもしれないけど」

そこで一端会話を切って、視線を逸らさずに流す。

「…その…人、は貴女が殺したの？」

人——と言う単語に違和感を覚えながらも問う。

「はい」

「あの侵入者の二人？」

「いいえ。あの人達は今も眠っているでしょうし。…ついこの間仕入れてきた生身の人間です」

——ああ、やっぱりアレ、生身の人間なのか。

分かっていた筈なのに、改めて認識して複雑な心境になる。

「貴女は、それをどうするつもり？ それともそういう趣味？」

「きちんとした目的はありますよ。趣味ではないです」

「それは、そこまで…する必要はある？」

「あります」

「それは人の命を奪う価値がある？」

「——あります」

——嘘だ。

人の命と何かを秤にかけて、それで人命に勝るものなんてありはしない。

「そして自分も殺すの？」

「はい」

即答だった。寒気がするくらい。

彼女は本気だ。目の前の死体同様にレインを殺す気だ。

「…驚かれないんですね」

「それは、ね。命のやり取りっていうのか？ 今までに何度か経験してるし。死にかけたことだってあるし…」

レインはまた苦笑する。

だって、もうこんなの慣れてる。

人間なんて、いいようでわるい人間と、ほんとうのわるい人間が在るだけだ。

「目的がどうこうじゃない。そんなのは後からついてくる。問題は目の前の手段と現実だろう。…そう思わない？」

「奇遇ですね。同意見です」

「そして、君は自分の手を汚した。…それも覚悟の上ならしうがないだろう、干渉するまでもない。自分のことは自分で面倒をみなきゃな」

「同じく。…それも同意します」

「…ただ、」

彼女は一度、言葉を切った。

「…ただ？」

反芻するカングルッペの表情に変化は無い。

「それは他人事だから言えることだよ。…俺を殺す？ ふざけるのも大概にして欲しい」

レインはやっと感情を表情に露見した。嘲るような挑発的な笑いを。

もう先程までの静かな表情は浮かばない。

元侍女の、平坦だった眉根が微動する。

「人の人生勝手に終わらせないでくれよ。…こっちにだって抵抗する権利くらいあるよな」

言うと同時に腰のベルトを軽く弾いた。

ホルスターの付け根から突き出た得物を引き抜く。

「残念。…まだあったんだよ」

手には、ついさっきまでは握られていなかった短刀。それは刃渡りは十数センチのファイティングナイフ、実用性を重視した為かシンプルで無駄のないデザインだ。

先程の不覚で居合刀は没収されていたし、何とかして奪取しよう

とは頭を捻っていたものだが、思えば隠し武器は残っていたのだ。
元々、こちらの方が慣れている。扱い方なら人並み以上は望める
だろう。

「命乞いするとは予想していませんでしたが、まさか抵抗すると
は予見範疇外です」

一方、大した驚きも感嘆もなく、表情のない素振りで彼女は首
を横に振る。

レインは胸前に片手を持ってきて、ナイフを構えた。

「……残念です」

瞳を伏せて、彼女は後ろ手に得物をとった。彼女の背になって隠
れていたモノ

それは剪定鋏せんていばさみにも見える大きな鎌。…いや、その表現は少し相
違がある。

それはピッケル。

鉋山を掘り進める為の道具であり、鉋物を取り出すにも適した、
硬い鎌のような曲刃を持つ道具。

けれど、今の鎌は道具ではない、れっきとした武器だ。

何故なら、ピッケルの先には黒々とした血がこびり付いている。
おそらく、元は目の前の運の悪い死体のものだろう。

リーチは圧倒的にあちらの方が長い。傍目ならば棍棒並の円周
を持つピッケルと、手の内に収まってしまうファイティングナイフ
とでは差が激しすぎる。

けれど、それがどうした。

——結局は解体用の物騒なだけの金槌じゃないか。

————唐突だった。

ゆらりと、武器を下げていたカングルツペの姿が揺らいだ。

咄嗟にステップを踏む。

肩の脇を通り過ぎたのは重量のある金属、目の前には無機質な
女の顔。

突き出すように女の腹部にナイフを突き出す。

彼女は身軽に跳躍してそれを避けた。

一息目には華麗に着地する。

「……っ！」

横薙ぎに振るったこちらのナイフは空を切る。

けれど連載は止まらずに角度を変えて彼女を狙う。

それさえも、ピッケルと素早い体さばきで避けられてしまう。

——防戦一方。

しかし止めて反撃の隙を作ってしまったえば、部が悪くなる。

ひたすらに切る。

慣性を無理に受け止めながら連続攻撃へ繋げ続ける。

「————っ」

出来た脇腹の隙に、片手でナイフを突き入れる。

これには相手も対応が遅れた。いつまでも同じモーシあだョンと侮ったのが仇になったのだらう。

かろうじて受身を取るも、脇腹を刃物が掠める。

服を切り裂き、肌に一筋の切傷を描いた軌跡は続く。

今が機会だ。

斬、薙、突、…柄の部分で怯んで、体勢が崩れた敵の首元に叩き込もうとした。

その時——右肩に突発的な衝撃を受けた。

肉を抉る痛覚は摩擦と化して、熱球のように貫く。

最初に浮かんだのは疑問。

彼女がああ体勢でどうして攻撃ができるのかという、素朴な嫌疑。見ると、壁に手について体勢を押し戻した彼女は片手に手銃を持っていた。

一瞬前までは持っていなかったものの、引き抜くと同時に撃ったのか、

——迂闊だった。

相手の武器は一つだと、誰が決めたのか。

勝つ為ならば、殺す為ならば、どんな卑怯な手でも使う者がいる
と言うのに。

こんなのざらじゃないよ——と。

「……っっ……！」

肩を穿つ銃弾の痛みに鎖骨の辺りが軋みを上げた。

弾という名の異物は肩を抜けたのか、知る術もない。

——変だ。撃たれたのは肩なのに、何故か脚に力が入らない。

レインはみつともなく壁に縫^{すが}り付く。

血の跡が壁に擦れつき、レインはずるずるとその場に座り込んだ。

「……あ……かはっ……、……」

声にもならない。

——ああ、痛い痛い痛い。熱い。肩が、顔が、頭の中が、全身が、
焼かれるよう。

情けないことに、焼くような痛みに耐えて立ち上がることさえ出
来なかった。

自らの喘ぐ息だけが耳に残る。厭な汗がじつとりと掌に浮かぶ。

「……銃は使いたくなかったのですが」

ぼつりと呟いて、硝子の瞳がレインを見下す。

死神はレインを見下しながら、鎌を頭上に掲げた。

ギロチンが巻き上げられていくような、戦慄。

————動け、動け、動け……！！

反射的に避けようと思ったが、もう遅すぎた。

34 暗転

——死んだか、と思った。

…そうじゃない、死ぬかと思った、だ。

レインが聞いたのは自分の頭蓋骨を砕く音ではなくて、銃声だった。

また彼女の手銃かと思ったが、そうではなかった。

目を開ける。

それと同時にぱたぱたと遠ざかっていく足音。

赤黒い視界が、焦点を合わせていく。

滲んだ目の前に、黒髪の青年が立ち塞がる。

——ああ、またお前、か…

…助けられてばかりだな。いつかこの借りを返さなくっちゃな……

リートは小走りで駆け寄って来ると、銃をホルスターにしまってレインの元へと膝を着いた。

蒼白い顔をした美麗な顔を見るなり

「撃たれたのは一発、か…銃弾は貫通したな」

言うが早いのか、自分の上着を脱いで淀みの無い手早さで裂いていく。

そしてそれを血の滲むレインの肩元に当てがった。

あまりの躊躇い無さに関心してしまう。

レインは壁に半身を預け、胡乱に問うた。

「服…、いいのか…？」

「気にするな。それより自分のことだけを心配してろ」
ぶっきらぼうに言い放つ。

その声音といい表情といい、普段と変わった様子はないように見えた。

手早く銃痕を囲んで、ぎゅっと締め上げていく。

「血流は問題ないか？」

「…っ…あ、うん…」

逡巡してしまった。

実を言うと結構きつい。

傷口に心臓が移ったみたいだ。どくどくと脈打つ熱と痛み。

——でも、このくらい…どうってことない。

自分はおっと痛烈な痛みを知っているから。

それにしても至近距離で見ると、やはり端正な顔立ちをしているなど見惚れてしまう。

…そんな場合じゃないのに。変だ。

すぐ横の肩元に彼の顔があつて、髪が触れるくらいの距離で。致し方がないことなのだが息が詰まる。布を巻き終わると、リートは一度通路の奥へと視線を流した。

「…逃げられた、な」

ぽつりと呟くリート。レインはカングルツペが逃走したのだと理解する。

そこで、改めて実感した。

自分はもう少しで死ぬところだった。

今でも冷や汗が出る。

一生の不覚。もう二度と経験したくはない。

そして同時に、目の前の人物に命を助けられたということも。

…簡単な方程式から導きだされるのは、簡単な一言なのだが、何故かレインはその一言がどうしても口から出ない。喉の奥がつつかえているみたいに。

唇を軽く舐め、発音する。

「あ……」

「——すまない、遅れて」

一つの言葉を言おうとした瞬間に、何故か先に謝られてしまった。無論、何故と思う。

「なんで：謝るんだよ、：来てくれなかったら……」

「俺がもう少し早く来ていれば、こんなことにはならなかっただろう」

咄嗟に口をつむいってしまった。

——ああ、そうか。

こいつは責任を感じているんだ。

そんなの自分なんかを感じる必要ないのに。
むしろ感謝したいくらいなのに。

「……いいよ。そんなの、いらないよ……」

息切れが激しい。痛みは先程よりはマシだが、それでもじわじわと上がってくる。

「：感謝してる、から……有り難う。本当に」

——言えた。

若干背中を押してもらったような気もするけれど、言えた。

言い終えると同時に、リートは振り返ってこちらを凝視する。

——見たことない顔だった。

一瞬、驚いたみたいなお顔をしてから、寂寥の滲み出るような、もう戻らないものを惜しむような辛そうな、寂しそうな顔をした。

人間味のある顔。

一時期、彼を人より無感情な人だと思ったことがあるが、あれは訂正しなければならないようだ。

今の彼は崩れ落ちそうな脆さを抱えた、ただの人間だ。

「……、……そうか」

吐き出すように、小さく言って彼は壁に背を凭れた。

彼の声音も普段は聞かない類のもので、レインは少なからずリートという人物への価値観が変わった気がする。

「……………」

不思議なことに痛みは和らいできた。

彼の人間らしい一面を垣間見たことで、気が紛れたこともあるのかも知らないが。

痛覚は麻痺したが、肩ではじわじわと血が滲んでいる。おそらく先程よりも着実に。失血死はしなくとも、このままでは意識が朦朧もうろうとしてしまうことだろう。

ことを急いで、レインは今の内に状況を把握する。

「…追いかけるの？」

勿論、通路の奥へと逃げたセレナータ・カングルツペを、だ。

「いや。ここは迷路みたいな所だろ。一応仲介屋は無事みたいだしな。一度引き返そう。…それに、お前の肩も診てもらわないとな」場所の確定よりも、自分の怪我を気遣っているようなリートの対応に胸が痛む。

戦場で、負傷者は足手纏いなだけだ。

無言でこくりと頷く。

リートはレインを窺い見ると、しゃがみ込んで手を差し出してくる。

「立てるか？」

「…なんとか、……」

——本当はかなり辛い。

もう撃たれた方の肩の感覚が飛んでいる。

血の回らなくなつて使い物にならなくなった腕は、重石と同じだ。撃たれていない方の肩腕を差し出す。

リートは手を取って自分の肩に回し、なんとか脚を立たせてレインは立ち上がった。

ほとんど体重を任せる形になったが、無様でもしょうがない。こちらは手負いなのだ。

「後ろ、から、狙われると、…危なくない？」

ふと浮かんだ危惧を口にする。

カングルツペは銃を持っていた。

追いかけてきて背中を撃たれたら防ぐ術はない。

「問題ないだろう。近づいてきたら分かるし、あいつにも一発くらわせたから、追いかけてはこないだろうしな」

あの状況で引き金を引いて、更に標的に当てたのかと感嘆する。以前に李清の前で、抜き撃ちは不得意だとか話してなかっただろうか。

彼の中では不得意だというものが、レインの中では最高の出来にも満たないのだ。一つ言えるのは狙撃手としての彼の腕は確かだということ。無論、狙撃以外でも。

緩慢に歩みだす。

半ば凭れかかるような姿勢で辛い、一人手放して歩くのはもっと困難だろう。

歩き出すと案の定息が上がる。血が少なくなっているのだ。

元々細身なのだ。肉付きのよい体型や体を鍛えている人に比べたら、血の気は少ない部類に入るだろう。

撃たれた箇所は今も穿つような感触と鈍い貫通感のみが残っている。

痛覚は完全に麻痺したみたいで、痛みが薄れたのが逆に心許ない。

「…あの、さ……」

会話の無いのが返って気まずくて、下手に繕ってみる。

「何」

淡泊な返事。

「…この通路、大分長い間歩いてた気がしたんだけど。リートは…すぐに追いかけて来たのか？」

「いいや…お前達が中へ入ってから十数分経ってからだ。俺も結構歩いたが、速さの問題だろう」

本当に必要最低限のことしか語らない男だ。

つまり、ここに来て、早歩きか走るかしてレインを追ったということか。やっぱり申し訳ないような、恥ずかしいような感傷が湧いてくる。

それは置いておくにしても、こちらは得体の知れない菓を吞ま

れたし、記憶にも確証が得れない。

何せ、時間が間延びしたような変な感覚は今でも残留している。撃たれたのが痛くないのもきつと、感覚が麻痺しているからなのだろうと、レインは憶測をつけてみたりする。

それはそれで心配すべきことなのだが。

今の所挙動不審な行動も、身体的異変もないのでよしとしよう。

暗い廊下は今でも白く続いていて。

けれど、今度は独りじゃないからきつと、悪夢も見なくて済む。

35 有限

呆気なく通路は途切れてしまった。

その所為で、黒髪の少女は釈然としない思いを巡らす。

行きは何かに憑かれていたとしか思えない。半日は歩いていたと思っただのに、帰ってくるのには数十分で済んだ。

もしくは実感なく同じ所をぐるぐる周っていたのか：想像したくないことだ。

どちらにせよ、都合はよかった。

リートに肩を貸してもらう状態で、処刑室のような手術室を横切るだけで通り過ぎ、暗い空間へ入る。手術室にあの時の狂った男の姿はもうなかった。正直胸を撫で下ろす。

でもそれは、同時にあいつが何処かへ逃亡したということだった。

逃げ場なんてこの袋小路じゃ限られているのに。

レインが聞くところによると、肩を貸してもらっているリートもあいつに会ったそうだった。

脅しただけで殺さずに生かしておいた。というのが彼らしい：でも無駄な殺生は避けるというのは望ましい心がけであるし、レインも似たような決意を固めているのでおあいこだ。

逃げたのが気がかりだったが、二人で居るので大丈夫だろうと高を括る。

暗い空間に公然と浮かぶ光の機会端末を操作して、再び、白い通路へと出る。

そこをいきなり出向かえたのは、犬の鳴き声だった。

——訂正、犬なんて可愛いものではない。

鳴き声ではなく咆哮だ。

「…えっと、リク…だっけ」

レインは霞む視界で確かに見た。

目の前の狼を、確か彼女はそう呼んでいた。

白い狼は、何故かふさふさとした尻尾を振ってレインの脚に絡んでくる。

何をしているのかと思ったら、レインのブーツの靴紐を引っ張っているのだ。

「ちょ、待って…解けるって…分かったから」

——こっちは手負いなんだぞ、と内心で呟く。

どうやら彼（彼女？）はレインたちを連れて行きたい場所があるらしい。

リートの方をちらりと見やる。

「…行くぞ」

こちらを見ないでそれだけ言うのと、彼はレインの手を掴み直す。

白狼は少し離れてからぺたぺたと歩き出した。

歩き方は大人しそうで可愛らしいとも感じてしまうのに、大きすぎる肉球や、並んだ牙が凶暴すぎる。現に、先刻はレインも飛び掛られそうになった。

しかもそれは、単にじゃれる為に絡んできたわけではなかった。

「そういえば、あのラグナとか言う…」

「あいつはもう大丈夫だろう。問題はもう一人がどうしているかなだ」

もう一人、ツヴァイという橙髪の少年のことか。

苦々しくレインは言う。

「自分と同じ目に遭ってるなら、急いだ方がいいな」

「同じ目？」

「そう。危うく首を落とされて解剖されかけた」

彼女の言い方に誇張はない。

実際、されてもおかしくなかった。流石に屍姦されそうになったことまでは口に出さないが。

対し、彼はその台詞に顔を顰めた。

——何だろうか、この反応は。

彼の横顔が、何やら物凄く怒っているようにレインには見えた。

「あそこだ」

横顔を見つめる少女をいぶかしんでか、リートはふっと注意を逸らした。

視線を回すと、曲がり角を曲がった先に頑丈な扉が見えた。

白狼もそちらへ歩み世よる。

何とか、レインは身を引きずって扉まで辿り着き、青年は扉を押した。

視界が開けた。

暗闇へと。広さも分らないほどにその空間は真っ暗だ。

「誰か居ないか、：ツヴァイ：、ツヴァイ……」

試しにレインが声をかけるが、暗闇に自身の声が木霊するのみだった。

「居ないのか……？」

——と、白狼が先陣を切って走り出した。

確かに、視覚・聴覚ともにすぐれた狼ならば、中に人がいるか探し出して、あわよくばあの少年を連れ出せるかもしれない。

——任せた。

内心そう呼びかけてレインは一息吐く。

想像以上に体力の消耗が早い。

「ご、めん：ちょっと下ろして」

絶え絶えな言葉にリートは黙って頷いて、ゆっくり手を離れた。後ろでの扉に背を預けて、その場に座り込む。

「：は、：きついものだな、本当に、……持たないか」

自嘲気味な笑みが零れる。

「お前は我慢しただろ。ここまで来ただけでも」
リートの声音は依然として冷静だ。

「それに、お前に無理されると俺が李清に叱られる」

「はっ…は、そうかも」

確かに。分かりやすく怒る李清の姿が閉じた瞼の裏に浮かんでくる。

隣で立っている彼が、ふっと膝を折った。

「もし、もう歩けない程なら、すぐにでも上に登った方が言い」
彼の言うことは正しい。

「…、…：そう、だね。でも大丈夫、致命傷じゃない。足手まといになっても、せめてあの人達の安否だけでも確認させて」

銃弾自体は靱帯にまで達していない。

然るべき治療を取れば、今後の仕事にも支障はないだろう。

それに、足の痛みよりも、薬物投与の所為でぼやけた頭の方が心配だ。

…：視界がぼやける。何だか、ぼうとする。

リートは、対して一言のみ言い残した。

「分かった…けれど。もしもう無理だと俺が判断したら無理矢理にでも連れて帰るからな」

「うん…、ありがと——」

リートは目を剥いた。

レインの唇が震えながら上下して、衣擦れの音がした。

振り向くと、レインが横たわっている。

息が荒い。

頬に手を当てると、尋常ではない熱を帯びている。

「おい、レイン…、しっかりしろ」

反応はない。

本人も無意識の内に無理をしていたのだろう。

「…：しょうがない奴…」

肩を掴み、彼女を胸元に引き寄せる。

血の気のない白晳の顔。それを強調する対照的な漆黒の髪。ぐつたりとしていて、力が無い。

人一人担いで帰れる道のりだろうか。しかし、こんな場所に救助が来るはずもない。

「くそ、嫌なこと思い出させんなよ…」

苦渋の聲が、フラッシュバックしかけるのを押し込める。

障害があろうともレインは死なせないし、助ける。それだけだ。

彼の肩を掴む手に、力を込めた。

華奢な少女を抱きかかえて立ち上がるのと同時に、遠くで咆哮が聞こえた。

「…ったーそんなって！ もう、分かったっつーの！」

聞き覚えのある声が、木霊する鳴き声に続いて聞こえた。

——ツヴァイか…

最悪の場合、彼にも助けを求めなければならない。

足音が近づいて、姿が視認できた。

「…：だからー速いっつーの！ 見失…：…つてめ！」

ツヴァイはこちらを見、身構えてからすぐさまに驚きの表情を浮かべた。

「つと、どうしたんだよ！ その女！」

リートが抱えているレインを視認するや否や、態度が一変する。

「敵に菓を盛られたらしいな。それから怪我をしていて意識が無い」

彼はツヴァイとは真逆の落ち着いた様子で語る。

ごくりと、唾を飲み込む音が聞こえた。

「大丈夫、なのか…：？」

「分からない。ただ、レインが危険な状況なのは分かるよな？」

「…っあ、ああ」

「了解するかどうかはお前たちに任せるが、一つ頼みコトがある」

「…：なんだよ」

「人を呼んできて欲しい。燕李清という2区に住む女だ。事情を話して連れて来てくれないか」

「そうしたら、そいつは助かるのか…」

「何もしないよりはいい。…俺も善処する。頼む」

ツヴァイは、暫く寡黙に口を閉ざした。

白狼が不安そうに喉を鳴らす。

無理な頼みとは承知していた。けれどとやかく言う暇も惜しい。やはり、駄目か、とリートが諦めかけたとき。

「――分かった。やってやるよ」

きゅっと、覚悟を決めた目つきでこちらを見据える少年が居た。

――…そうでなくっちゃあな。

「李清の家はラグナが知ってる。その狼に彼女の所まで連れて行ってもらって、それから住所を聞いてくれ。…俺は、なるべく上を目指すが、レインを抱えてるんじゃないや何時までかかるか分からない。無理を承知で頼む。…急いでくれ」

今度は返事をせず、少年はこくりと頷いた。

すぐに踵を返して、白狼と部屋をあとにする。

後姿はすぐに暗闇に埋もれた。

「…う……、つつ……」

レインが唸るようにうわ言を洩らす

――苦しいのだろうか…。

「――い…さい…、ごめ、ん…い…ごめんな、さい……」

レインは無意識の中で、ひたすら何かに謝り続けた。

謝罪が誰に対してなのか、リートには知る術もない。

そして、それを聞いた青年の口元に歪な笑みが浮かんだのを、レインは気づく術もなかった。

落花散りゆき

——そうして落花は散りゆきた。

人間、不思議なもので、寝ようと思うほど寝付けない夜というものがあり、誰しも一度は経験したことがあると思う。

悩み事とか、逆に明日に控えている心躍る行事とかの所為で眠れない……という状況ならまだ良いけど、何となく物憂げで理由も無いのに眠りに付けない、というのはどうにも目覚めが悪い。

その時はまさしく後者。

今日だって、家の手伝いで疲れていて、来るべき今日の繰り返しの明日へ向けて滋養を高める睡眠を、理不尽なことで妨げられる嫌な気分にもなる。

そもそも人という奴は時に天邪鬼なのだ。

震えるな、と思っただけでも、赤面するなと念じてみても、身体は言う事をきいてくれない。

——矛盾している。

矛盾を説いてみても、どの道私が寝付けないことに変わりない。ならばいっそのこと、という方向転換で寝台から降りた。

親と寝る年頃は過ぎても、私はまだまだ子供で、親の保護下にいることに間違いない。

普段、寝ていたの場所は両親の部屋の隣。

一応薄っぺらい壁に隔てられてはいるものの、大きな物音を立て

れば気がつくことだろう。

窓枠に掛かっている竹の御簾を手で除けて、なるべくそっと床を蹴って外へと躍り出る。

夜風が頬を撫でたのが、くすぐったかった。

家の裏手、木々が生い茂るその場を見渡す。人影は無い。

素足のままでひんやりとした土の感触を確かめながら歩き出す。

ふと、空を見上げると、蒼黒の夜空に丸くてちっちゃい月がいてこ。

何故か切ない気持ちになった。

裏庭を跨いで、畑へと出て行く。

規則的に植えつけられた水田の苗。まだまだ背丈は低い。

水を張った水面が、月の光を反射して、大きな水鏡のように広がる、広がる

田んぼのあぜ道を注意深く歩いていった。

夜の水鏡を両手に、空にはちっぽけな月を、頬には優しい風を。でも、自らが捜し求めているのはそんなものじゃない。

真っ直ぐに歩くと、田んぼはふと途切れてしまう。

林があるから。

根を張った大樹を掘り起こし、開墾することは想像以上に骨の折れることだから、村の人が手付かずになっている林。

それは村の中腹にあるので然程広くはないけど、けれど入ってみると森のように木々が生い茂り、夏場の涼みには最適な場所だって私は知っている。

そこに踏み込んでいく。

足裏から伝わる感触が、湿った土のものへと変化していく。

——風が、止んだ。

木々に風を遮られたから、というのもあるけど。

私は前を見据えて、その光景を捉えた。

一人の、少女とも女性ともれないひとが舞っている。
木々から差し込む月光は、彼女の輪郭だけを透かしていく。
足取りは軽く、跳躍は身軽に、手捌きは華麗に、その表情は…何
故か慈愛に満ちていた。

子をあやす母親がするような母性に溢れた貌。かお
どこか現実離れた出で立ちに、息をするのも忘れて見入る。

舞う彼女の手には一振りの刀。

ゆうに彼女の半身以上はある、細身の研ぎ澄まされた得物。

彼女はそれを振りかざしながら舞っている。

一片の無駄もありはしない、武道を芸術まで昇華させたひとつの
作品。

そんなこと、普通の人間にはできはしない。

彼女は特別なのだ。

選ばれた人間。本当の意味での天才。

——それが、私の姉さんだった。

36 褥(上)

――何処まで落ちるの？

「……………姉さん……………」

「え……………」

ゆったりと瞼を開けると、目の前に李清がいた。彼女の顔には疑問符が浮かぶ。

どうやら自分はうわ言で、つかぬことを洩らしていたらしい。

昔の夢でも視ていたのだろうか…今となっては忘れてしまったが。

「あ…李清……、おはよ」

「あ、うん。おはよう…もう起きていいの？」

「ん…？ ああ。たぶん」

余裕ができたからか、彼女の前で微笑んでも見せれた。

レインはベッドに横になっている。

目下の身体には肩から袈裟掛けに包帯が掛けられていて、シャツを羽織っているものの、上半身はほとんど裸に近い。胸元を隠すように、襟元を手繰る。

肩口を指でなぞりながら、苦渋の思いが広がった。

ふと辺りを見渡すと、木目の床、塗り固められた壁。見覚えのある窓からの俯瞰風景。

「ここは……家？」

「うん。運んでくるのが大変だったわ。車借りたり……まあ、それはいいか。ともあれおかえりレイン」

言って、李清はあっ気からんと笑った。

少しだけ元気を貰う。

「うん。ただいま。…いろいろ、面倒かけたみたいで…」

「いいのよ。レインに何かあって、本当に悲しむのはリートでし

ようし」

「……？」

レインは疑問符を浮かべる。

すぐに消失した疑念は、すぐに別の事柄へと向った。

——自分は、怪我していて……ということは。

「……任務でしくじったんだな」

「いいえ、あれは第二機関側のミスよ。レインは被害者なの」

「被害者って……どういうこと？」

「よく聞いて。第二機関に『ノイシュ・アルカード』なんて傭兵、いないのよ」

「え……」

共に任務に就いていた男の顔が浮かぶ。

嫌な予感は収束し。

「もしかして……密告者スパイか何か……？」

「その可能性が高いわね」

何の為に……ということはいつそ置いておく。重要なのは……

——自分とリートは顔が割れてしまったということか。

どの道過ぎてしまったことだ。用心するに越したことはない。

「あの後……どうなった？」

無論、あの任務の後、レインが意識を失ってからという意味である。

李清は頬を指で挟み、少し唸って見せた。

「さっぱりよ。リートから聞いたけど。あの屋敷に地下があったことには間違いないみたいね。だから調べて見たいのは山々だったんだけど……閉鎖されちゃったのよ。あそこ」

「閉鎖……？」

「——そ。軍警察の管轄下に入ったの。事件が起こったとか言つて。たぶん口実でしょうけど。暫くは近づくことも難しいわよ」

「知られたくないことでもあるのか？」

李清は肩を竦めて首を傾げる。

「あくまで憶測の域を出ないけどね。軍警察というかは…旧軍が関わっていきそうなの」

「旧軍……」

「関わりを持たないのが利口よ。…軍警察じゃないのよ、奴らは…旧軍は何でもする」

「……」

——分からないことだらけだ…

全ての事象の鍵を握っているのは。

「セレナータ・カングルツペか……」

レインはぼつりと呟いた。

李清が不思議そうな顔をしている。

「いや、何でもないよ」

——本当は何でもなくなてないんだけどな。

ここのところ軍警察に縁があるようだ。悪いことの予兆でなければいいと願う。

「ともかく怪我の方は軽症で何より。このまま安静にしていれば一週間以内には仕事復帰できるって」

「？ そんなに早く？」

——もっと肩の怪我が酷いように思えたんだけど……。

「大丈夫、そんなの擦り傷よ。銃弾は貫通している。骨や腱への損傷も綺麗なもんよ」

擦り傷は軽く見積もり過ぎだ。

だが、早く病床から解放されるのは僥倖だ。

レインの幸を他所に、李清は静かに告げた。

「——ただし。暫くはここから出るなって。上からのお達しよ」

「…え？ 何だよその軟禁状態。自宅療養なら分かるけど…」

「そう悠長なことも言ってるんじゃないの。今、第二機関の周りで不穏な動きが多すぎる。その渦中にいる貴方なんかは安全地帯に留めておきたいんでしょ」

「安全地帯ねえ……」

戦場で働く者の安全地帯とは、どういう皮肉だろうか。

「でもこの家の中なら動き回ってもいいって。当たり前過ぎただけどね。…まあ、気晴らし程度にはなるんじゃない？」

「この部屋の中だけよりはマシだよ」

首を肩に支障がない程度回し、凝りを解す。

確かにあれほど酷使していた足は、もう動かしても支障はない位には感じていたところだった。

軽い散歩と、身体が鈍らないようにするには地下の空間などはお誂え向きだ。

休みの内でも大人しくベッドの中で過ごすつもりは毛頭ない。

——あとは……

やや戸惑いを含みながら、レインは口にした。

「李清…頼みごとがあるんだけど」

「んー？」

「自分さ。今この通り動けないからさ。呼んで来て欲しい奴がいるんだよね」

「私に出来る人なら問題はないけど？」

「そうか。…じゃ」

レインが告げた名前に、李清は分かり易く苦い顔をして頷いた。

37 褥（下）

空には雲が立ち込めていた。

金網のフェンスに凭れ、上着を羽織り直す。闇夜でも浮かび上がる黒髪が、風に浮かされ流れる。

漆黒の瞳は、淀んだ空を見ていた。

整い過ぎた鼻梁に、やはり計算され尽くしたかのように美しい輪郭線。長身なのに、華奢な体つき。

屋上で白い息を吐き出して、レインは入口へと振り返った。

「君はぼくのことを嫌っていると思っていたんだけれど……」

「――ああ。嫌いだ」

屋上の入り口付近の影が首を傾げる。

この距離では人相までは分からないが、レインには声だけで人影が誰だか分かっていった。

「じゃあ、その嫌いな人間を何でわざわざ呼んだの？」

「知ってるくせに訊くのか。カイス・フェーダクト」

「どうだろうね……ぼくの予想が当たるかどうか……君次第だろう？」

揶揄する口調が、笑みを含む。

「君から呼んでくれるなんて嬉しいね……アレインから話して欲しいな」

「簡単なこと。交渉だ」

夜天を望む屋上でも街の明かりのお陰で、僅かに二方の形と気配のみは分かる。

「情報を与える。……見返りはこれも情報。軍についての」

レインはフェンスに纖手を掛けて、前方の人物を見つめる。

壁に背を預けて男は軽薄に笑った。

「いいのかい？ 軍のことならアレインの大家さんの方が詳しいだろうに……それに、知らぬが仏とも言うけど？」

「李清は自分に安全な情報しか渡さない。今更隠したって無駄だろう。むしろ知らない方が怖いとは思わないか？」

「いいや。あるものを見ない振りするよりかは、ずっといい。好ましいよアレイン」

「：無駄口はそこまでだ。本題に入る」

屋上には月明かりさええない。空虚な天蓋は星さええない。夜風が髪を撫でていく。

レインは昨日起こった出来事の要点のみをカイスに話した。

「全ての事象に軍警察が関わっている、これは不自然だ」

「：ふーん。君の言うことがどうであれ、確かに最近奴等の動きが不穏だったのはよく耳にするな」

「この間の負傷の原因となった身辺警護の依頼でだって、あの地下のことを、セレナータ・カングルッペと名乗った侍女は『軍警察が昔管轄していた地下施設』と言ったんだ。：嘘だとしても、何故軍警察を持ち出す必要がある？」

レインは怪訝な顔つきで、虚空に問うた。

姿の見えない来訪者は戸口に身を預け

「君の推測はたぶん正しいよ。そしてその女が言っていたことも、ね」

「本当にあそこは軍警察の地下施設だったってことか？」

「だろうね。正しくは警部と併合される前の旧国軍だね。あの周辺の地域はね、軍警察の上層部が多く屋敷を構えてる。そして、軍警察が地下に根を張っていることは誰だって周知の事実だろう？ 公にしている地下施設の他に、人には言えないような研究や実験をしている施設があってもおかしくないだろうに」

「：あまり、信じたくない話だな」

レインは顎に手を添えて思索する。

対する男は平坦な口調で事実だけを紡ぐ。

「でも事実だよ。そのことについて知っているけど、軍警察の猟犬が怖くて黙秘している奴らだってこの街には数多居るんだ。勿論、

普通に生活してる分には分からないことだけどね」

「詳しいじゃないか？」

レインは言って示唆した。

男は苦笑する。

「情報屋としてはまだ安いネタだよ。：さて、お喋りが過ぎたようだね。君の綺麗な顔が険しくなる前に話を戻そうか」

レインはカイスの言い草に眉を顰めた。

少女の様子を彼は楽しげに窺っている。からかっているだけなのかもしれない。

「フレリアについてだろう？　ぼくの知ってる範囲でしか話せないけど」

「：どうしてそこで連続殺人犯の名前が出てくるんだ？」

訝しみの色は濃くなる。

——何かの意図を感じた。

「どうしてって？　それが訊きたいんじゃないの？　君の大家に聞いたんだけどな」

「……」

——李清の差し金か。

彼はこちらの反応を窺いながら話し始めた。

「興味深い話だから、聞くだけ聞いておきなよ。：彼女が第二機関に居たことは知ってるね？　あれは、正式には彼女が自らの意志でここから出た、というよりは追い出された、の形に近いんだよ」

「規則違反でも犯したのか？」

一見無秩序に見えるこの第二機関にも、秩序というものが存在し、ペナルティもある。

内容の筆頭としては、他の傭兵集団・暗殺集団との争いは避ける、機関内での派閥の存在や闘争もご法度である……というようなものだ。

「いいや。彼女は嫌疑こそかけられたものの、決定的な証拠がなかったらしいよ。それに彼女は違反行為について否定し続けたそうだ

しね」

「違反行為…って？」

「組織内での殺人だよ」

告げられた内容に、レインは僅かに眉根を寄せる。

——つまり、自分と同じ第二機関の人間を殺したってことか。

もしそれが本当ならば、彼女はすぐ様に処分対象となる。

「でもまあ、疑いが晴れないも者をずっと組織に置いておくのは、新たな内部闘争となりかねないわけだし。膿は残しておきたくないから、切り捨てたってところだろうね。結局、彼女は第二機関を後にしたよ」

そこまでは納得できた。頷いて先を促す。

「そして、彼女はここを去った後はフリーの傭兵として働いていたらしい。…けど、それもここ二ヶ月の間に消息がぱったり無くなった、と」

レインは予測できる続きを繋いだ。

「……そして、新たな嫌疑が浮上した」

「そう。彼女が連続殺人犯じゃあないかってね」

「けど、彼女が犯人かどうかは実際のところ分からないんだろう？」

「そうそう。でも軍警察や第二機関は決め付けてるよ。フレイアの所為に違いない…ってね」

カイスは心底嬉しそうな声音で告げた。

こちらにも、少しずつ分かってきた気がする。

「なあ、訊きたいんだが……」

「何だい？ 君の質問にならタダで答えてあげるよ」

「こっちの体を担保にしろってよく言う。…この間も拉致させられた…ああ、くそ。絶対に近いうちに担保から外してやる」

「ええー…酷いなあ。観賞用に欲しいだけなのに」

——変態。

どうして自分の周りにはろくなのが寄ってこないんだ…と内心で毒を吐く。

「前から思っていたんだよ、お前は絶対に頭がおかしい」

「何だい？　ぼくは至って平常だよ」

胡散臭い、と言うのを押し留めて問うた。こんな下らない会話をしたくて、わざわざ厭な人物と話している訳ではない。

「自分と、そのフレイアが似てるって本当か？」

男は暫くの無言の後、

「冗談だろ、似てるのは形だけさ。黒髪くらいなものじゃないの？　そりゃあ、後姿は少しは似てるけどさ。…それにぼくはアレインの方が生理的に好きだなあ」

——気持ち悪…

「…：成る程。そこまで似てないと」

ふと、脳裏に軍の青年…クロードの顔が浮かんだ。

彼も断片的な情報しか持っていなかったということか。

「十分だ。感謝はしておく」

「そう。じゃあ今度は御代は身体で支払…っあーそんな怖い眼しないでよ」

レインは炯眼を崩さないまま、

「…無駄口は頼んでいない。勘違いするな。自分はお前を許したわけじゃない」

「分かったって。冗談じゃないか。また、力に成れそうな時は呼んでくれると嬉しいよ。ぼくは何時だって君の見方だって、覚えておいてね？」

——人を売り込もうとした人間が、同じ口でほざくなよ。

喉元まで出掛かった言葉を無理やり飲み込む。

「——良い夢を。アレイン」

レインの怒気もお構いなしに男は後退し、屋上を後にした。扉を閉める音がして、人一人分の気配が消えていく。

再び独りになるのは、少女の姿。

「……—」

吐息を吐いて、柵に凭れ掛かる。

――沈黙。――逡巡。

彼女は暫く瞳を閉じていたかと思うと、急に動き出した。その足で部屋に戻り、支度を始める。

肩に掛けたシャツのボタンをきちんと掛けて、ブーツの紐もきつく結ぶ。念の為にフードのあるコートを選んで、内に長い黒髪を押し込み、人相も陰に隠す。

――外に出たことが知られたら、まずいだろうか。

しかし第二機関の誰かが随時見張っているわけでもない。過度な心配は無用だ。無論、李清に知られたら私刑ものだが。

――…行き当たりばったりだな、ほんとに…

レインは自らの行動に内心呆れつつ、扉を開けて外に出た。

38 華（上）

深夜という頃合の所為か廊下は閑散としていて、蛍光灯は所々点滅していた。

まさかこんなに簡単に出来るなんて思いながら、レインは地下への扉を開いた。

外に出ると、若干は人通りが出てくる。

護身用としてナイフと手銃を忍ばせてきたが、夜の地下街は普段にまして危険が増している。

人目を掻い潜りながら、裏路地へと入っていく。

一応、アテはあったのだ。

でもそこに彼女がいるとは限らない。

分かっているが何もしないよりはマシだ。

朝になれば人目も増える。…いや、朝までには退散するつもりだったが。

自分の足音のみが路地裏に反響して、沈黙を良しとしない。意識しまいとしていた後ろめたさが、じりじりと湧いてくる。

——今さら後悔してもな……

勢い任せの行動だったかもしれない。けれど、確かめることがある。

カイスの言葉だ。

——フレイア……か。

ぎゅっと襟首を詰め、フードを目深に被る。

曲がり角を曲がった所で、レインの視界が半分暗闇に閉ざされた。

「……っ」

それが目の前に人が立っているからだと認識するのに、時間がかかった。

目線が合う。

脂っぽい顔つき。濁った瞳。

——あ。やばい。

襟元を強引に引かれ、ぐいと身体を寄せられる。

レインはバランスが崩れそうになるのを押し留め、見上げた。

ぶつかった黒人の巨漢は、こちらを威圧するような目で見下ろす。

…もしや自分はしくじったのか。

普段ならこんなことにはならないのに、

——不覚だよな。

他人事にそんなことを思う。

「————、——、————」

巨漢が口を開いて、何かを話す。明らかにこの国の言葉ではない。

喋るのと同時に襟首を更にきつく締め上げられる。

レインは男の掴む手に自分の手を重ねて引き剥がそうとするが、男が嘲笑う程に微弱な抵抗だった。

息が苦しくなって頭がぼうとしてきたところで男は襟首を離し、掌でこちらの肩をどんと突く。

「……っ！」

勢いを殺しきれずに後方に尻餅を着く。

レインの美貌に浮かぶのは苦悶の表情。

——傷口………が…

開いただろうか、と思考しようとして痛覚の二波に遮られる。

奇しくも男が突いた場所は先日レインが撃たれた箇所だ。

傷口が疼いて暴れる気持ちの悪い痛覚に顔が歪む。

見上げると。巨漢の男の後ろにも数人、あまり身なりが整っていない男が数名居る。

「……は、あ」

——ついてない。

レインは短く息を吐いて、腰元を探った。

先程の転倒で手銃は地面に落ちて、そこをすかさず男達に取り上げられていた。

残ったナイフを手元に手繰り寄せようとした時に、肩元に鋭い痛みが奔った。

歯軋りをきつく。唇を噛む。

——…くそっ、

震えそうな手でナイフを掴む。

やらなくてはやられる…地下街の掟だ。

相手を見上げようとした拍子に、深く被っていたフードが音もなくめくれた。

レインの長い黒髪がさらりと流れ落ちる。

色白い肌に黒髪はよく映え、黒線を引いていく。黒い瞳が驚愕に見開かれた。

——…しまった…

男達の顔が、歓喜する。

強盗か、暴力が目的だったであろう男達は、行動の方向性を変えつつあった。

異人であれど、それさえも関係ない程の上玉が目の前にはないか。

——嫌だ。

レインは身ぐるみを剥がそうと伸びてくる男の手に、ナイフを突き出した。

鈍い感触。肉へ埋没する刃。

濁った温い返り血が、頬に飛んできた。

——気持ち悪い。

「——、——、——!!」

獣の咆哮にも似た叫び声を上げて、男が掌を押さえつける。

掌からは血が滴り、地面を汚す。

思わぬ反撃に男達は逆上した。

レインが殴りかかろうとする拳を避けようとした時に、また肩に

痛みが奔った。

痛感が無理に押し込めて、彼は横に退避する。

そこで、待ち構えていた男に肩を打ちつけられて押し倒された。

「……くっ…」

肺から息が全て吐き出されたような感覚。肩は未だに熱を帯びている。

地を舐め、レインは恥辱と痛みに耐えた。

「――、――、――」

狂気を帯びた笑い声を張り上げて、今度こそ男の手が襟元へと伸びてくる。

「…っ、…離せ!」

レインの声は届いていないようだ。

――今度こそ、汚される。

痛みに遠のきそうな意識の中で、レインはひたすら謝っていた。

――姉さん、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……

壊れた再生機のような懺悔の音が、ぴたりと止んだ。

「――………?」

レインは顔を上げる。

視界に新たな人物が介入して来た。

「手を出していい人間と、悪い人間がいるのを知らないのかい…?」

落ち着いていて、囁きかけるようで美しい声。

心地よくも感じるのに、冷水を浴びせかけられたかのようにぞつとする…そんな声。

冷酷さや、残酷さ、激情が押し込められて、飽和してしまったような声。

一言が言い終わると同時に、今まで自分の上に押し掛かって

いた男がずるりと崩れ落ちた。

「……っ！」

こちらへと倒れこんできた男を除けながら、辺りの様子を見る。すると今まで自分を囲んでいた男達が、周囲に倒れこんでいた。

これだけの人数を一瞬にして撃沈させた人物は、男達の輪の中心に居た。

あたかも、屍の上に君臨する凜花が如く。

「……あ…」

「また逢ったね」

それは華のように可憐に笑う、フレイアだった。

38 華（下）

「もー、駄目だろう！ この前物騒だって忠告したばかりだろうに！」

「……、はい……」

眉を立てて、頬を膨らませて怒る女性は、先程の冷たい声の主とは思えない。

レインが今居るのは、男達に絡まれた場所から区画一つ分は離れた、地上の公衆の広場だ。

フレイアもとい、先日希少種の女性と一緒に、だ。

路地裏での初対面から間違いないと思っていた。

連続殺人犯であり、第二機関の裏切り者。

彼女が何故自分に興味を持ったのかは、依然として謎だったが。

——本人に訊いてみる方が……早いのかな……

周辺にも全く人目がないわけではなく、こちらへの興味の視線や訝しむような視線を頻繁に感じる。

しかしそれは異人からという理由ではなく、フードをきっちり被ったレインと薄く柔らかな布で顔と長髪を隠しているフレイアに対する奇異の目だったのだろう。

人目が痛い、今のレインにとっては彼女の激昂の方が恐ろしかった。

「分かった!？」

「は……はい……」

人目を気にすることない彼女の、妙なテンションに為す術もなく首を落としつきりだ。

周囲も彼女の変な様子に遠巻きにしている。

……返ってそれが良いのかもしれないが。

「なら良し！ 今日のところは特別に許してあげるよ今回だけだよ喜びなさいだよっ！」

「は、い…」

彼女は一息に言ってから眼を弓にした。

「無事で良かった」

言って、こちらの頭に手を乗せてくる。

「…！」

何のことはない、ごく自然な所作。

咄嗟に恥ずかしさからか、載せられた手を拒否しようと頭へ手を上げた。

——だが途端にレインの肩口に鈍痛が奔り、思わず顔を強張らせる。

「……っ」

「…怪我してるのかい？」

「あ…：はい」

「だろうね。怪我してなかったらあんな奴等、君なら瞬殺できていただろうしね」

納得したように呟き、女は少女の隣に腰を下ろした。

建物の下の階段だ。

建物自体は寂れていて、見る限りもう廃屋になっているらしい。

——やっぱり…直接訊いた方が早い。

レインは意を決して言葉にした。

「あの…えっと、フレイア、…さん？」

「あれ？ 何で君は私の偽名を知ってるんだい？」

「噂を、聞いたから」

反応を窺いながら、地雷を踏むまいとするレインの様子に彼女はまた笑った。

「成る程。…でもね。私の本名はフレイアじゃない…って分かるか。どう考えても偽名だし」

顔を上げたレインを真っ直ぐに見つめ、彼女は言った。

「美都・キサラギ・シュタットフェルト…それが私の名前。どちらでも、好きに呼んで頂戴。ところで君は…？」

「……自分、は…」

逡巡した後、相對する少女は真っ直ぐに見つめ返して

「…アレイン…です。アレイン・ヴィアルドレッド……」

「…そう。良い名前だね」

瑣末な自己紹介。

けれどレインにとっては、何故自分が本名を名乗ったのか不思議だった。

一方の猜疑心は知る由も無く、面を包み隠した女性は花咲く程に可憐に笑った。

柔らかい、慈愛に満ちた笑み。

滲み出る雰囲気は常人離れしている。

——…なんだろう。

レインは彼女の微笑を見、思う。

——…懐かしいな…。

この感覚を、自分は何処かで感じたことがある。

思い出そうと記憶を掻き回していた時、フレイアはそつなく問うてきた。

「…君はもしかして、ディセンダー・ヴィアルドレッドの子供かい？」

——…！

眼を丸め、レインは目の前の女性に食って掛かった。

「養父を…ご存知なんですか？」

「うん。何度か仕事と一緒にになった。義手の傭兵として有名だったしね」

「じゃあ……！」

レインは身を乗り出して、正面から彼女の碧眼を見つめ

「ごめんね…彼が何処にいるかは知らないんだ」

「そう…ですか」

彼女は心を見透かしたかのように申し訳なさそうに言った。

「もう二年も前になるのかな。彼がこの街で消息を絶って顔を伏せがちに頷く。」

「ええ。…養父は…以前は俺達と一緒にコッペリアで住んでいました。気を遣ってか、どうなのか、自分たちを引き取ってからは遠出や長期の任務を受けることは少なくなりましたが、あの時は珍しくこの軍拠点都市まで足を伸ばしていて…」

任務の詳しい内容については何も聞かされていないんです。何しろ急なことだったので。…それで、帰ってこなくて……」

「追ってきたんだね」

フレイアはまるで読心術でも扱えるみたいだ。

レインは自覚しつつも饒舌になる。

——目の前の人物には隠し事は通じないと、心底分かった所為だろうか。

「君は養父のディセンダーを探しにザイフォンに来たの？」

「そう、思っていました……けど」

実際のところどうなのだろうか、養父が居なくなって実のところ自分は喜んでいるのではないだろうか。そして、養父はただの口実に成り下がっているのではないか。

かつて追いかけた彼の、広い背中がふっとぼやける。

暫くの間、二人は押し黙っていた。

街の陰は、夜間はことさら深く重たく。

けれど不思議なことに沈黙は決して心地悪い気まずいものではなく、とても落ち着いたものだった。

——不思議だ。

心地よい沈黙なんて、作り出せる人は滅多にいないのに。

「……………」

ふと、空いたその間に、音色が聴こえてきた。

隣のフレイアの横顔を窺い見ると、口元が僅かに上下している。

——これは……歌だ。

流れ出る、美しい歌。

流動していく旋律。柔らかな風。

その調べを、レインは知っている気がした。

一つの節が歌い終わり、彼女はもう一度口を閉ざす。

先に口火を切ったのは、歌い手の女の方だった。

「私もね…探してたんだよ。両親なんだけどね。私が自分のこと自分で出来るくらいの年頃になったら、ふっと消えちゃってね」

「……え」

「最初はすぐに戻ってくるって思って、時間が経つと両親に何かあったのかって思って、それから遂には自分は捨てられたのか…ってどんどん思考が沈んでいって。分からないものは怖い、もし理由を分かってても、それが自分に理解できないことや酷なことだったら余計に怖い」

「……そう、ですね」

レインも同調する。

「とまあ、びくびくしながら怯えてたわけだ。自分が、自分の親も信じれなくなるんじゃないかって」

「……」

「人を疑う心は醜いものだね」

レインは共感すると共に傷心を感じた。

自分も十分に饒舌だったが、彼女もそうだったらしい。

——…けど、自分の生い立ちをこんな風に話せる人なんているんだな。

「信じることより、疑うことのほうが楽だから、猜疑心は消えない」

ぽつりと呟く彼女を尻目に見やる。

「でも、やっぱり信じていたいよね…大切なものなら、尚更に」
音も立てずに彼女は立ち上がった。

その体勢のままで腰元に手を当てる。

さっぱり気ない仕草が、ある予備動作だと気がつくのに数瞬遅れた。

「レイン、――踊ろうか」

疑問詞を投げかける前に、視界の半分に黒い影が被さった。レインは咄嗟にそれを避ける。

長年で身に付いた反射的な動作でも、避けれたのは一寸の差だった。

自らの座っていた位置を穿ったそれは 黒く鈍く光を反射する太刀。
刀。

美しくも禍々しい二重螺旋をその刀身に写す、黒い鏡の面。おもて

芸術性でも鑑賞用として文句無しの逸品。

見覚えのある造形に、レインは刮目した。

――これ、は………

「次は斬るよ？」

フレイアは太刀を一旦低く構えて、右足を踏み込む。

「…っ！」

――来る、と感じ取った時にはすでに動いていた。

ベルトに挟んでいたコンバットナイフを引き抜いて、返し打つ

彼女の得物に当てる。

金属音と共に、嫌な音がした。

ナイフの刃が柄のぎりぎりのところまで碎けている。

舌打ちをして、咄嗟に後退。

先程の二回の斬戟で気がついた。

フレイアも自分と同じ、間合いを殺陣とするタイプだ。

彼女は自らの身長の上半分以上はある太刀を、そっと眼前に掲げる。

片眉を上げただけで、造作なく告げた。

「反応が遅いな……」

冷や汗を拭いきれずに、レインは一度、唾を飲み込んだ。

今のフレイアに理由なんて聞いても、きっと無意味だ。

現にそんな人間を幾らでも見てきたのだから。

理由も無く人の命を奪う人間に、矜持や意義なんて無自覚。

奴等は、明くる日に雨が降っていたか否か、手近に人間が居たか否かで人を殺める。云わば被害に遭った者は、運悪く災害に遭ったも同然なのだ。

だからこそ少女は、結論の意志の有無を問うた。

「貴女は…、自分を殺したいのか」

「ん？ この位避けられない木偶の坊なら死んでもいいんじゃないかな？」

告げる言葉の意は一刀両断。切り口さえも鮮やかな返し台詞。

死んでも良いか。死ぬ人間か。『死ぬ程度の人間なのか』——
彼女はそう問いかけている。

レインだって内心では分かってる。

彼女の言っていることは正論だ。実際、あの程度の奇襲に備えられなくて、何が傭兵か。

けれど、これではあまりに分が悪い。

こちらの武器はナイフと手銃、そしてナイフの方はもう碎けて使い物にならない。

ならば銃の引き金を引くしかない。懷に手を伸ばす

——けど、それじゃあ……

ああ。綺麗事だって分かってるんだ。

でも……

「私が撃てる？」

やはり彼女はレインの心情を見透かしていた。

ゆらりと彼女の半身が揺れ、咄嗟に身構えた。

けれど、彼女が太刀を放ってくることはなかった。

代わりに、刃鳴りの音を立てて、太刀を鞘に収めて、腰元に当てたホルスターに収めた。

長いストールを掛けなおしてしまえば、もう鞘に納まった刀身は見えない。

装備しているのも傍目には気づけない。

てつきり、とどめを刺そうとしたのでは…と身構えていたレ

インは目を疑った。

「…なん、で…」

呟いた声は掠れていた。

酷く喉が渴いている。

「意味が無いから」

答えになっていないと、言いたかった。

フレイアは、すぐ目の前まで自然な動作で歩み寄ってきた。

そのままレインの、銃に伸ばしかけた手をそっと掴む。

「君を苦しめているのはその弱さ。残酷さ」

静かに囁き。

「君の理念は正しいよ。それに強^{したた}かだ。…でも道が違えている。

それは何時か他の誰でもない君を苦しめて、酷な状況へと追い詰めていく」

彼女は一つ息を吸った。

大切な言の葉を告げるように。

「――他の誰でもない、私がそうだったようにね」

39 盾

部屋の静謐は深い。

黙している者は何れも何を考えているのか検討も付かなく、両者は互いに腹の探りあいとしての会話を日常的に行う。

今日び、何度目かの応答。

金髪の少年は、同じ空間にいるもう一名に声をかけた。

「ことが上手く運びすぎている」

「…罨だと言いたいのか？」

少年に問いかけたのは、威厳を含む声。

やや幼い声は先程の捕捉のように言い足す。

「いや。ただ相手はフレイアだから。何考えてるか分からない」

「…ほう。珍しく弱気じゃないか」

「僕は何時も弱気だ」

その返答を聞いた、長身の青年は軍服に包まれた腕を組む。

見た目よりもしなやかで強靱な体をしていることは、彼の隙のない所作で誰もが分かるだろう。

「俺は…フレイヤなんかより、あの男の考えてることの方が分からない」

「…官長？」

少年の視線がついと上がる。

青年は肯定の代わりに、言の葉を紡ぎ続ける。

「何がしたいんだ。俺たちまで利用して」

胡乱な問いかけに応えたのは、第三者の声だった。

「ははっ、裏を探るのか？ それはお門違いだぞ、アウストラル」

「……クロード」

アウストラルと呼ばれた青年が、声のする方に向き直る。

三人がいる部屋の、出入り口付近の壁に凭れかかっているのは鮮やかな赤髪の青年だ。悪戯っぽい笑みを浮かべ、愉しそうに眼を細めている。

彼は部屋の空気の重さと反対の軽い声音で話した。

「何も考えないでやってればいいのになー。考えるのは疲れるし。面倒ごとを増やすだけだぞ。そうは思わないのか？ ユウ」

質問の転換に答えたのは、小さな声。

「頭で解決しようとするのは、アウストラルの長所と短所だから」口数の少なさが窺える、要点のみを凝縮した発言をする小柄な少年：ユウは椅子に腰掛けて行儀よく座っている。彼は見た目、三人の中で最も幼い容姿をしていた。

彼は膝に乗せた本を捲りながら、金の瞳で字を追った。

アウストラルはクロードに向けて眉を顰めながら言い放つ。

「もう、おいそれサボってられないぞ。お前も」

対し、クロードは欠伸を噛み殺しながら応えた。

「だろーねえ。そろそろ本腰入れないとね。気になることも出来たことですし」

「自分の興味本位で生きてるお前が、心底呆れるよ」

「そりゃどうも」

明後日の方向を見やりながら、クロードは扉から唯一の扉から一歩離れた。

まるで彼がその事象を予知していたとしてもおかしくない程のタイミングで、直後には扉が外側からノックされる。

「中将：ウエルズ・グレイシヴ・アウストラル中将は御在室でありますでしょうか？」

聞こえたのは、緊張感を含む男の声。

「――入れ」

応えたのはアウストラルの、先程までとはうって変わった声だった。

聞く者に畏怖を与える、鋭く貫禄のある権力者の声音。

「失礼致します」

両番の扉を開けて入ってきたのは、彼等と同じか、少し上の齡であらうという軍服の男だった。

彼は年下である筈のアウストラルに、敬語を使う。

一見、不自然なその構図はおそらく、彼等の軍服の胸元の称号位を見れば誰しもが納得するだろう。

「夜分遅くの所用をご容赦下さい。召集が掛かりました」

「誰から」

「トワード総帥からであります」

「分かった：もういい、下がれ」

「はっ、お時間頂きました。失礼致します」

男が室内から出て、気配も去ると、クロードの含み笑いが聞こえてきた。

「ふふっ：まるでカルト教祖かなんだな。アウストラルとグレイシヴの同時襲名、軍最高司令官の継承者はそんなにおっかないかな？」

「黙れよ」

アウストラルの口調は怒気を孕んでいるものの、先程ほどの緊張感は無かった。

ユウは物珍しそうに、丸い目でその様子を眺めている。

クロードはからかいの意を揶揄した。

「にしても総帥に呼ばれるなんて、何したんだ、お前」

「何したんだって？　：はっ、こちらが聞きたいものだ。どうせまたお前の尻拭いだろう？」

「あーあ。コイツまだおれが連射射撃練習でマニユレータシステムメルトダウンさせたこと根に持ってるよ辛気臭え……」

赤髪の青年は言って肩を竦める。

肩上の髪が揺れた。

「当たり前だろう。お前の落ち度は俺の落ち度になるんだから」

「だーかーらー、あれからは気をつけてるだろー。本気出して練

習できなかったお陰で腕が鈍るつの」

何か言おうとしたアウストラルの声を遮るように、呼んでいた本を閉じ、今まで黙り込んでいたユウが声を発した。

「今回に限っては叱責じゃない。…それにクロード、腕が鈍ったなんて嘘は駄目」

「はは、ユウに嘘は通じねえや。でも叱責じゃないって…呼ばれた理由知ってるんだ？」

「うん。…特殊任務」

その単語が答えだった。

ふっと、それを聞いたクロードとアウストラルの二人の視線が交差する。

「分かった。…行くぞ」

彼自身が発したその言葉を皮切りに、彼は中将地位の者のみが居座ることのできる、上官室の執務椅子から立ち上がった。

「――はあ」

誰にでもなく、レインは呟いた。

溜息みたいなの、一仕事終えた後の吐息のような。

「馬鹿みたいだ……」

――無論、自分が、だ。

最近、取り組んでいる物事が空回りして動いているような、充実感のない気分。

何かの意図を感じるのに、不明瞭で。

言葉には出来ない感情を抱いている気分は、表すならば喉に釣り針が引っ掛かっているような感覚。

今まで、遭ったこと、逢ったこと、全てに何かの動きを感じる。

人吊りの糸が見える。

レインは冷たいコンクリートの壁を背に目を閉じ、一本の居合
い刀を腕に抱くようにして片膝を立てる。

垂れてきた直毛が視界を覆う。

——姉さん…、お父さんお母さん、自分は選択を間違えたのかも
しれない…。

それを言うなら、もっと根本的に違えていたんだろうけど。

自嘲的な笑みを零して、腰を浮かし、立ち上がって辺りを見渡し
てみる。

広く、四角く、広い空間。

刀を左手に持って、ふらふらとその空間の中央に移動した。

——あーあ、こんなにじめじめして、悩んで悔やんで惜しんで…
女々しい。

危ないところを誰かに助けられてばかり。

これじゃあ、まるで深窓の庇護され続ける女の子。

——そんな風になりたくなくて…強くなろうとしたのに。
変わらない。

差し伸べられる手を有り難く思う。

差し伸べられる手を矜持を捨ててとることが出来る。

…それでも、自分の不甲斐なさに納得したことにはならない。

——だから。

「強く…ならないと…」

もっと。高く。

誰にも助けてもらう必要がないように。

自分は他者に救い上げて貰えるほどに上等な人間じゃない。
だから、もう必要ないと言い切れるように。

右手を腰の位置に持ち上げて、帯刀する。

「……………」

呼吸を併せる。

目は前を見据え、刀を抜き払う。

刀身は照明を反射して、鈍く輝く。

体の中央へと持っていき、左手を絞る。右手を添える。――正眼の構え。

ゆらりと腕を頭上に掲げ、迷いを断ち切るように直下へ振り下ろす。

瞬間に頭によぎったのは、フレイアの台詞。

――まだまだ遅い。…迷いがあるから。

知ってるよ。それくらい。

どうせ自分は結論を先延ばしにしていただけだから。

思い、同じ動作を一足動で繰り返し、空を斬る音だけが木霊する。

あの時――…

思考を寸断しようと無心を心がけたが、その事柄は胸の中心を揺さぶる。

あの刀――…

その事実から導き出される答えはごく単純なモノ。

あれは――…

ただ認めたくなかったんだ。

フレイアの持っていたもの。

「あの刀は、あの歌は………」

40 音

夜の街を、一人の女性が歩いていた。

いつも口になっている単調なメロディーを奏でながら、夜の緩慢に進んでいく時刻の速さに合わせるが如く、彼女の歩行もゆったりとしている。

容易く見れる普段通りの光景。彼女の夜間の徘徊だ。

けれどいつもと違うのは、彼女が彼女たらしめる外見の特徴を隠すものを纏っていないということだろう。

街灯に照らされ露になったのは、闇に溶け込みそうなワンレングスの黒髪。夜空を見上げる瞳は深みのある碧眼だった。

両親譲りの繊細な外見と、女性らしい膨らみのある体は教会のシスターが着るような上下の繋がったロングワンピースに包まれていた。

露出度の少ない服装が、彼女の魅力をあえて引き出している。

今までならば顔と髪を隠すように巻いているストールも腰に帯びている鉛も、今日この時のみはない。

夜の冷気が彼女の身体を冷やす。

立ち止まって、指先を暖めるように両手を重ね合わせた時――。

「フレイアだな」

背後の暗闇から声がした。

続いて、足音も。即座に彼女は靴音が二人分だと即座に理解した。彼女は振り返らずに一步、歩みだした。

軽快な音がして、彼女の横の歩道塗装された地面に穴が一つ穿つ。穴からは一筋のみ、硝煙が上がった。

「……………」

女性は無言のまま振り返る。

そこに居たのは長身の若い男二人。

一人は闇夜でも映える赤髪を持って、軍服を引っ掛けるように着た者。

もう一人は金髪に炯眼で、余った髪を背中に垂らし結んでいる者。――予想した通りだった。

「……遅いよ」

ぼつりと彼女は洩らして向き直り、二人を真っ向から見つめた。

「フレイア：もとい、美都・キサラギ・シュタットフェルト：連続殺人の容疑者としてお前に逮捕札状が出ている。着いて来てもらおうか」

金髪の男の方が言う。

フレイアは首を傾げる。

「住民登録もしてない、本名だっけとうの昔に捨てて、普段使ってる名前も偽名の私の逮捕札状なんてどうやって出したんだか……」

彼女は片眉を傾けて、素直に不思議そうな顔をしてみせた。

「即務第二機関からの要請だ。本名も家系も洗いざらし調べさせてもらった」

金髪の男の言葉を引き継ぎ、今度は赤髪の男が話す。

「キサラギ家……かつては軍警察の擁護派だったらしいから、こっちも君をすぐに捕縛はできなかったんだよね。でもこの間の事件で君は敵性Aになっちゃったから。流石に重い腰を上げてくれたよ、幹部も」

「どうせ没落して自然消滅した家だし、どうでもいいんだけどね。家柄の七光りがこんな所で受けられてうざったいなあほんと」

倦怠感を隠そうとせずに彼女は呟く。

首の後ろに手を回して長い黒髪を押さえる仕草さえ、本当に気怠そうだった。

「でも寂れたとはいえ、名前だけでも影響力を持つ当主が、場末で好き勝手されても困るんだよねー。できれば地下牢にでもぶち込んで二度と出てきて欲しくないな」

「ふふ……それは素敵な待遇だね。………――つまり、私に無罪を

主張する場合も権利も時間も与えられないってことか」

フレイアの語尾がずっと鋭利になる。

さして気にも留めずに赤髪軍服、クロードは言った。

「当たり前だろう？ この事件『解決した』ことにしたくて上方はうずうずしてるんだから。なんなら：抵抗してみる？」

僅かに張りつめる周辺の空気。

彼女は顎に手を当てて、思案した。

「ヤダよ重いしめんどくさいし。君たちは良いとしても、私の後ろで目を光らせてる旧国軍の猟犬さん怖いし」

「――あ、そ」

クロードが言い終わるか、否かの瞬間に乾いた銃声が響いた。

衣擦れの音を立てて彼女は崩れ落ちる。

太腿の辺りの服の生地には赤い染みが広がっていった。

真新しい血で滴り染め上げられる衣服。

「悲鳴上げないって、殊勝な心がけだねえ」

地面に爪を割れさせる程に立てて、痛みに耐える女を青年は見下ろした。

「まあ、街外れでも確かにその位の遠慮はしないとね、近隣住民に……」

告げ、横向けに倒れる女性の腹部を唐突に蹴って、伏せにさせる。息をつんのめるように吐き出して、彼女は歯軋りをした。

クロードはフレイアの両手に手錠を掛けると辺りを見渡した。

「アウストラル、どうしよう。これ」

「軍警察の車輛を呼んだから、今は転がしておけ」

「了解――」

軽々しい口調は、やはり場に不釣り合いだ。

フレイアは顔を硬い地面に横たえながら目を閉じた。

左膝を撃たれた。箇所を正確に射撃されて無事に立っていられる筈もない。

そもそも、痛みで意識を失わない上に声も上げない彼女は常を外

した気丈さだった。

——もう、歩けないかな。

熱を帯びているのは撃たれた周辺だけで、爪先にはもう感覚が通っていないかった。

神経を寸断された所為だろう。

膝は重い。鉛のように、痛みは鈍い。痛覚は鋭い。太い針でさされるように、釘で打たれるように、撥で叩かれるように、鑢で削られていくように。鋸で寸断されていくように……

——ああ、イタイなあ………

呻き声すら上げなかった。

肉体を精神が乖離していく感覚。

——高い位置から自分の体を見下ろしているみたい。
客観的だ。

簡単なこと。流れに身を任せておけばいい。

そうすれば気が付いた頃には全てが終わっているだろうから。

——造作ないな。

フレイアは苦悶の声の変わりに、口元に表情が作った。

「……ふ……はは」

彼女の心中を満たしていたのは開放感と満足感だった。

「……あ、あはははははははははははははははははははははは………」

堰を切り笑い出す彼女に、金髪の青年が眉を顰めた。

発狂でもしたかと勘繰っているのだろうか。

「……お前」

「……残念だったね、私を閉じ込めても、真犯人の犯行は続くよ？」

地面に顔を擦り付けられながらも、彼女は満足気だった。

「……どうということだ？」

アウストラルが冷静に言及する。

「私は犯人じゃないから。……疑う？ いいさ。その内、嫌でも信じる羽目になる……そして有り難う。私の傀儡になってくれて」

「傀儡……？」

それきり彼女は目を閉じて、二人が何度問おうとも何も話さなくなった。

——これでいいんだ……いや、これしかなかった……。

瞼の裏に浮かぶのは、自分と似た境遇の少女。

——さあ、私は出来ることをした。どうか君は君の為すべき事を為して。

41 水

白く半分に割れた月が浮かぶ。

視界の端に、映っては、消えていく。

頭上から見下ろすその姿は、まるで地に堕ちた人間をせせら笑っているようでもあった。

事実、憎らしかった。

あんなに高くいられたら、こんなにも苦しくなくて済んだのに。肺にいっぱいいに空気を取り込む。水が一気に入り込み、咽ぶ。

気管に入った塩水が喉を焼いた。咳き込んで、波にもまれて、また水を取り込む。

何度繰り返しただろうか。

苦しくて、水を取り込むでは、飽和量に達したそれは吐き出され。目には海水の塩分が滲んで、痛み、もう開けてもいられない。

……苦しい……苦しい……苦しい……

死にたい、という言葉が脳裏を掠めた。

だって、止め処ない拷問はいつまで続くのか。

それでも苦しくて、また水面に顔を上げる。

繰り返し、繰り返し、繰り返し。

頭が重たくなる。

冷たい水で麻痺した舌はもう上手く回らない。

足先と手先の感覚がなくなっていた。

体の心まで凍えそうだった。

このまま凍え死んで、魚に啄ばまれるのだろうか。そうして、人知れず海のそこに沈んで藻屑となり果てるのか。

死んだら、逢えるだろうか。

姉さんや、父さん、母さんに逢えるだろうか。

レインは意識が覚醒すると同時に叩き起きた。

「……は、はあ…はあ、は、…はー…あ………」

わけが分からなくなりそうで、髪をかき上げて項垂れる。

——…夢…？

薄着で寝たというのに起きると汗はぐっしりで、皮膚に張り付くシャツの感覚が気持ち悪かった。

けれど嫌悪感の対象になるべき感触も、現実味があったのが、逆に頭を冴えさせる意味で今だけの救いだった。

内心ほっとする。

——夢で、良かったと。

辺りをぐるりと見渡して状況を整理できるのは、余裕ができた証拠。

今レインが居るのは自室ではなく、一階のリビングだった。

ソファでそのまま寝たのだろうか。

昨日の夜のこと、よく思い出せない。

先日撃たれた肩の傷がある。まだ安静を言い渡されていたが為に、昨日はずっと屋内で過ごしていたはずだ。

靄がかかったように、記憶が混濁している。

——ああ、そっか……

本を読んでいたんだ。

リビングで読んでいて、そのままソファで寝てしまったのだろう。その証拠に、レインの傍らには本が落ちていた。

本のタイトルには、『Wuthering Heights』とある。

李清に勧められて読んだものだったが、小難しい物語はあまり好きじゃない。

どの道最後まで読まずに、途中で投げ出しそうだった。

——今は…後先の話はいいか…

あるのは実感だけだ。レインはやけに喉が渴いていた。

——水……。

キッチンへと重たい腰を上げてる。

「^{うな}魔されてたな」

と、聞き覚えのある声が静謐の中に落ちる。

「……あ、リート……？ おはよう」

暗がりでもよく分からないものの、部屋の戸口に凭れるようにしている気配は感じれた。

つい先程入ってきたのだろう。

「外見ろ、まだ真夜中だ」

言われ、窓の外を見ると、黒青の夜空には白い月が浮かんている。窓から月光が入り込んでいて、やけに明るいと思ったら月明かりの所為かと納得する。

「……あはは、じゃ、……こんばんわ」

「——大丈夫か？」

端的な言葉だったが、レインにも彼が何を示唆しているかは分かる。

「ああ……気にしないで。いつものことだ」

——迂闊だったと思う。真冬なのに薄着で寝たことも、悪夢を見る状況を自ら作ったことも。

掛けていた毛布は床に落ちてるし……全くこれでは風邪をひいてしまふ。

寝る前の自分を叱咤してみるが、詮無いことだ。

夢見が悪かった所為か、汗はかいてるし、息は上がっている。

しかしながら、もう熱も冷めつつあったが。

気持ちの悪い、肌に纏わりつく布を引っ張って片手で弄びながら、本気で風邪を引く可能性を危惧する。

——ああ。そういえば……

レインは唐突に思い出した。

「リート……あの時以来、だよな」

「…警護の依頼？」

「そう、それ」

レインは相槌を打って、続けた。

「ずっと、言わなきゃって……本当、有り難う。助けてくれて。一言で片付けられる様なことじゃないけど」

「……いや」

リートは心ここに在らずといった様子で呟く。

——何か、様子がおかしい。

それについては何も言えないし、問えない。

今は居心地の悪さと、悪夢の余韻の気持ち悪さから一刻も早く抜け出したかった。

お礼は何時でも言える。だから、今は鬱屈な気分を晴らすことを優先した。

「二度寝…する気分にもなれないし、ちょっとシャワー浴びてくる」

「レイン」

「何……？」

名を呼ばれて振り返る。

そこには月明かりで足元だけが見えるリートの姿があった。

「フレイアに、会ったんだな」

質問の突拍子のなさに逡巡する。

けれど、レインは前を見据えて言った。

「ああ。会ったよ」

何故その問いを放つのか、ということ逆を問いたかったが、それは出来なかった。

きっと相手にも聞いてほしくないことなのだろうから。無理に聞き出すのは無粋だ。

ただ、聞かれて答えられることならば答えようと思う。

それが自分に出来る最低限の礼儀。

——そんなことしか、してやれることなんてないから……

レインは実際、目の前の人物に何度も命を救われている。事実を否定する気は毛頭ないし、感謝してさえいる。

ただ何度礼を言おうと届いている気がしないのは、気のせいだろうか。

こんなことを言うのは利己的だろうか。けれど、元はきちんと感謝の意を伝えたいという自然な感情であり――だから。

「会ったよ。綺麗な人」

「……そうか」

頼まれてもいないけれど、余計に喋る。

「一度じゃなくて、何度か会った。場所は街から地下街からまちまちだったけど……なんか偶然じゃなくて必然的に逢った気がする。……変な言い方だけど。一回、危ないところを助けてもらったし」

饒舌に話す少女の眼前で、リートは黙っていた。

「もしかしたら勝手な思い込みかもしれないけど、彼女は自分のことを知っていたのかもしれない。そんな素振りが見えたから……えっと……」

――言葉が、詰まる。

けれど決心して、互いに胸に秘めているだろう核心を言う。

「……また、会いたいよ」

リートは、僅かにたじろいだ。

暗闇で見えはしないが、気配で所作が察せれた。

見えない分、感じれるのだ。

月光に浮かぶ足元が動き、彫像のようだった影が近づいてくる。

青年の端正な顔立ちが月明かりに浮かんだ。

あまりにも穏やかな、静止した水面の様な表情に引き込まれそうになる。

口唇が開かれ、言葉を紡ぐ。

「俺も……そう思う」

何かを慈しむような表情で、そっと、一言だけを告げた。はっとした。

——だめだ、と思った。

言うな、とも。——けれど。

「…あのっ！ …あのさ……」

レインはまた言い淀む。

「強く…なるよ。自分で。絶対、もっと、今よりも。逃げないから…逃げないで、向き合うよ」

——自分の弱さから逃げちゃいけない。

——自分の非力さを嘆くだけではいけない。

————自分の運命を呪うだけでは、進めない。

息を吸って、深呼吸をする。

「諦めないから、絶対」

気がつけば顔に熱が昇って、心臓は早鐘を打つ。

——言っただ…、

言ってしまった…、

リートはいきなり何を言いだすのかと呆れるだろうか、訝しむだろうか。

それでも…

——言葉にできて良かった。

些細なことだが、一言である種のけじめに成り得るから。

「……」

当のリートは、暫くの沈黙の後に言う。

「…レインはそれで、いいんじゃないか」

そっけない口調。

けれど彼の微笑む顔には、暖かさが感じれた。

「有り難う…人に、誰かに言っておきたかったんだ。それだけ…」

欲しかったのは、肯定してくれる人だったのかもしれない。

レインは続けて言う。

「いろんなことがあったけど、いつも自分の弱さばかり感じてた。そういう鬱憤が溜まって、でもその原因さえ分からなかった

んだ…けどさ」

自分なりに出した結論を述べる。

「きっと羨ましかったんだ。…他人の、何かを見て、何かを目指す、ひたすらな姿勢が」

恰好や体裁を気にしていたら、きっと届かない。

自分はいつも見えないふりをして、いつもそれから逃げていたから。

「自信がなかったんだよ…馬鹿みたいだろ…:~?」

リートは揺らがない瞳でこちらを見るだけだ。

「でも、いろんな人に逢えて良かったと思うよ。リートにも」

「俺にも…?」

「そう。リートはさ、だって…自分のこと変な目で見ないし、そもそも命の恩人だし…それだけじゃなくっても、きつとな」

レインは嫺やかに微笑んで、

「決めるよ、決めて——進まなきゃいけない」

少しづつでも進んでいると思っていた。

けれど現実は何も前進してはいなかった。

ずっと眼を逸らしていたから。

ふと、リートが口を開く。

「逢えてよかったと言われたのは、初めてだ」

一息、

「だから、俺からも言わせてくれないか…有り難う」

レインは目を丸くしたが、すぐに目を細めた。

「どういたしまして」

42 来訪(上)

過去が追いかけてくるよ。

――あれは過去じゃない。お前の影さ。

過去が追いかけてくるよ。

――あれは過去じゃない。闇にまぎれ込んだ猫さ。

過去が追いかけてくるよ。

――あれは過去じゃない。黒い外套を着た男さ。

過去が追いかけてくるよ。

――逃げ切ったその時にもう自分はない。

都新聞には『連続殺人犯逮捕』の見出しが大きく出ていた。

文面によると、最近の傭兵殺しの犯人は軍警察の獄中から出所した前科のある男で、後日精神鑑定が行われるという。

小さな白黒写真には、いかにもといった風貌の男の顔。

レインは半眼で見やっってから、新聞を折り畳む。

「李清、自分さ、ここ最近になってやっと気がついたことがあるよ」

「あら？ 何かしら」

「軍警察の言ってることは十中八九嘘っぱちだな」

李清はきょとんとした後に、破顔した。

「やっと気がついた？」

「……………」

レインは笑みを返せなかった。

それらしい犯人像を世間に定着させるのは、もう大丈夫だと言
い聞かせる為かも知れない。

余計な不安や風評を広めない為に、犯人は捕まったということ。
今回は類稀なるケースということ。今後このようなことが起こらな
いように善処するということ。…軍警察の主張。

——…ただの慰めだ。

もし、傭兵が犯人であったとなれば、ザイフォンには犯罪者と
同類の人間がウロウロしていることになる。しかし相手が前科のあ
る狂った犯罪者ならば、市民の不安と偏見は一応に取り除ける。素
晴らしい案だというわけだ。

思い出すのは、確かに容疑を掛けられていた、自分のことを知っ
ている女性。

彼女とはあの夜以来、会っていない。

「フレイア：どうなったんだろうな……」

——言って後悔した。知ってどうなるわけでもないのに。

けれど、李清は少女の独白を聞き逃さなかったようだ。

「彼女は逮捕されたらしいわね。じゃなきゃこんな記事も出ない
し。殺されてはいないかもしれないけど今は牢の中……か」

李清は一度言葉を切って、こちらに向かい合った。

「レイン：会ったのね。フレイアと」

「ああ…最初のうちはもしかしてって思った程度だったけど……」

「じゃあ、貴方はどう思う。彼女が逮捕されたことについて」
不躰な質問だと思った。

けれど率直に答える。

「これまでいろんな人間に会ってきたし、本心隠して人間に近づ
いて危害加える奴なんて、ごまんというだろうと思う……けど」

「――けど？」

「あの人は、違うのかなって、甘い考えだけどそう思い始めてた。……けど、自分の分かることなんてほんの一握りだ」

――そう、自分で見て感じたことは存外に少量。

だから大事なことを見落とす。

「分らないよ。今は」

「それは嘘ね」

李清はぴしゃりと言った。

「分らないってのは嘘。貴方は『信じたいと思い始めていた』それなら信じれば良いし、自分の都合のいい考え方で良いのよ。自分の世界は自分の手の届く範囲のみ。感じれるもののみ。なら他人の評価とか、他人の、真実かどうかさえも怪しい言い分なんて、耳を貸さなくて良し。そんなものはなーんの役にも立たないの。……いい？　自分が信じることは、自分の信じれる人の言ったことのみにするのよ」

「信じれる……人」

「そ。そしてね。何より自分を信じてあげなさい。したら自分は世界の中心。分かった？」

「あ……うん。はい」

たどたどしい返事をしてから、李清の言った意味が浸透してきたような気がした。

信じれるのは自分だけ。自分が信じたものだけ。

それはレインが、いつも心に置いていたはずのことだった。

――ごちゃごちゃ考えてて振り回されて忘れてたんだな……

この程度のこととかき乱されるなんて、自分で思っているより精神力が弱いかもしれない。

「すごいな。李清は」

「とーぜん。あたしは伊達に年取ってないんだから。……いえ、違うわまだ20代よ、うん」

「……………」

「ちょっと何よその目」

年齢詐欺を言わなければ良かったのに。

——なんか白けるなあ……

レインは新聞を丸めて片手に持つ。

ここは駅。

雑踏を尻目に彼女と李清はベンチに腰掛けている。

第二機関の束縛は思っていたよりも長期に及んだが、李清が見えないところで手を回してくれていたらしく、予定よりも軟禁状態から早く脱された。

つばの長いキャップに髪を押し込んで、人相を隠し、ジャケットを着たレインと、いつもどおり髪を結い込んでハーフコートを着た李清は、列車を待っている。

「……で、怪我の方はもう大丈夫なの？」

「ああ、まだあんまり動かせないけど、固定具は取れたしな」

「本当にレインは傷の治りが早いわね」

「うん。数少ない自慢の一つなんだ」

そうなのだ。当初全治二、三週間と告げられた怪我は、一週間後にはもう治っていたと言っても過言ではない状態だった。

昔から、傷の治りが早いことでいろいろと助けられてきた。

……病気はそうでもないのだが。

甲高い音をたて、駅内に列車が滑り込む。

「この次ね……」

細身の少年は荷物を元より持っていない。

あるのは護身用のナイフのみ。李清もポケットに手を入れてはいるが、おそらく無手だろう。

丁度、目の前の線路上に止まった列車の扉が開いて、人が足早に降りていく。

人々は白い息を吐き出して、軽く首を回していく。

「なあ……李清、あと何分」

「——あつ！ おねいちゃん発見っ！！」

突如響く、甲高く黄色い声。

頭と表情がフリーズし：

次の瞬間には腹部に何かが飛び込んできて、万力のように脇腹を締め付けた。

レインは未だ現状認識に溶け込まない。

「おねいちゃー！ーん！ 元氣してた！？」

「：ユ、カリ：なんでここに：…」

「もうおねいちゃんが心配だったからだよ！ 家族とのコミュニケーションも忘れたのそんな子供に育てた覚えは私はなかったりするけどもしかして反抗期なの！？ いやぁーユカリこんなに心配してるのに電話は一方的だし酷いわこれじゃあ一方通行の片思いじゃないッ！ ユカリおねいちゃんがどうしてるか心配で：もう、夢の中でおねいちゃんにGPSつけてストーキングしてたんだから毎晩毎晩だよ！ もうなんで夢のなかでストーキング距離が何百キロも超えてるかっていうとそれはおねいちゃんへの愛であって！ ：あー！ っちが、家族愛！ そうよ家族愛なのに分かったのかこのバカ姉貴ッッ！」

腹部が限界まで締め上げられて、危うく失神しそうになった。

「ユカリちゃん：レインが気絶しちゃうから離してあげて。ね？」

「あ、李清さんこんにちわー！ この愚姉がお世話になってます云々。呼んでくれて有り難うですっ！」

ユカリと呼ばれた少女は言って、やっと抱きつくのを止めて離れた。

レインは地面へと屈み込む。

「……っ死ぬかと思った…」

改めて、李清に律儀に腰を折る自分の義妹を見つめた。

小柄な体躯にポニーテールにされたハネのある黒髪は、二年前と変わってない。東方の国々によく見受けられる黄色人種の肌色。年は、13、4がいいところだろう。

ユカリ・ヴァイアルドレッド――間違はなく、レインの義妹だった。

た。

——どういふことだ？

「お前、ユカリ…何でこんな所に……」

「だあかあらあー、おねいちゃんが心配だったの！ さっきの前振り繰り返す？」

埒が開かない。

割って入ったのは李清だった。

「あたしが呼んだの。丁度言い機会だったし、大丈夫、こっちにいる間のユカリちゃんの宿はうちで十分でしょ」

「つまり…李清がわざわざ駅に寄って列車で帰ろうって言い出したのって…」

「ユカリちゃんを迎えに来るためよ。…じゃ、一緒に行きましょうね」

「はい☆ねいちゃん荷物持ってー」

少女が笑顔で指差した先を見つめると、そこにはキャリーケースとボストンバックの山があった。

——お迎えじゃなくて、荷物持ちだろこれ。

「…帰れって言ったって、帰らないんだろうなあ……」

ぽつりと呟いて、黒髪の少女は荷物を抱えあげていった。

42 来訪(中)

「おっじゃましてす。おお、あったかい……」
ユカリはやけに細かく玄関を窺い見て、小動物のように入っていく。

彼女の様子をくすりと笑いながら、李清は説明した。

「いろいろあってここに移り住んで、物件を選ぶときにね。防寒はばっちりの建物にしたのよ。あの時、防寒にこだわってた甲斐があったって毎年思うわ。ユカリちゃんの済んでたコッペリアはザイフォンよりだいぶ暖かいからねー。ちゃんと冬物の洋服持ってきた？ 同じイザベルでも西地方の冬は厳しいわよ」

「えーっと……ちょっと不安です」

「なら今度買いに行こうね。それまでは私の服貸してあげる。ちよつと大きいかもだけど……」

「うわー至り尽くせりです。重ね重ね有り難うです」

ユカリは目を輝かせて手を胸の前で組んでいた。

「……それで、どこに持っていけばいいの？」

レインはというと、両手に荷物を引っさげ困ったような不機嫌そうな顔で待機している。

いい加減、肩に重ねてかけたショルダーバックの影響からか手先が痺れてきた。

——治りかけの怪我人に何させてるんだ。

……と抗議したい。無論ここではそんな権限はないのだけど。

「んー、レインのそこは……両隣は物置になってるし……レインの自室の真上の部屋にお願い」

「はいはい……ってこの量じゃいっぺんに運べないな……。ユカリ、自分の荷物なんだから、少しは運んでくれ。手伝うからさ」

「はいはい。ありがと。おねいちゃん」

にこりと答える少女に、美貌の人物は顔を顰めた。

「ユカリ…その呼び方…ややこしいから」

「…ぶー。駄目なの？ 分かった。…んじゃお姉ちゃんと書いてお兄ちゃんと呼ぶことにする」

——それ、余計にややこしいんじゃないか…と内心突っ込む。

「んじゃあ、ショルダーバック、そっちとそれ持って。キャリアバックは持ち上げられないだろうし自分が持つ」

「りょーかい！」

義妹の元気な応答。

返事だけは一人前とはこのことだろうか…。

部屋への案内と、荷物運びという一仕事を終えて、階段を降りていく。

リビングに見えるのは、女性らしい輪郭の立ち姿。

「さて…どういふことか説明してもらおうか、李清？」

キッチンで茶を沸かしている彼女に問いかける。

「どういふことかって？ 彼女がこっちに来たいって言ったから、手引きをしたの」

「そうじゃなくて、なんでこんな街に…」

「？ 治安が悪いのはコッペリアの方でしょう。治外法権だし」
「そうだけど…」

「いいじゃないの。どうせ彼女にはディセンダーの知己だった私ぐらいしか頼れる人もいないし。ずっとコッペリアに束縛するつもりだったの？」

「そういうわけじゃ…ないけど」

「軍拠点都市の二つ名を持っていてもね。ザイフォンには教育機関も病院も充実してる…首都も隣だし。貴方が嫌がる理由が分からないわ」

戸惑うレインに、李清は「それに」と付け加える。

「何で来たか……ってのは私じゃなくって彼女本人に聞くべきね」

「……」

——ご尤も。

返す言葉もなかった。

相対する女性は、しょうがないという風な溜息一つ。

「じゃあ、心配性なおねいちゃんにお姉さんからアドバイス」

「止めろ」

李清は無視して続ける。

「いい？ あの子はあんなようであんな風に見えるけど、結構しつかりもののなのよ」

「人の義妹をあんな呼ばわりするなよ……」

呆れた表情のレインは髪に指を突っ込んで掻く。

李清は言い含んだ。

「もう。……女の子の方がしつかりしてたり強かったりするものなんだから。その辺り、レインにも自覚ある筈よ。もうあの子も14歳でしように？」

「……」

——そうか、ユカリももう14歳か……。

そういえば、ちよっと（ほんとにちよっと）身長伸びたような気がしないでもない。

「さあさ。今晚は腕を振るって夕ご飯作りましょ。一旦お茶にしたいからユカリちゃん呼んできて頂戴？ 悩み多きおねいちゃんはそこで訊けばいいでしょ？」

「……」

さり気無く場を繕われたのに気がつくのが遅れた。

李清はこれだから勝てる気がしない。

「はいはい……」

よってレインもまんざらでもなく、誘導尋問じみた会話を肯定するしかないのだ。

42 来訪（下）

陰鬱な気分は、彼女の黒い雰囲気によく映えた。

顔に掛かる黒髪を耳元まで押さえ、緩慢な目つきで足元を見る。

——どういう顔をすればいいんだろう……

気乗りしないながらも、いつもより余分に階段を上がっていった。部屋の戸口で、自らの義妹に声を掛ける。

「ユカリー、李清が一回降りて来いって……どうした？」

「お：おねいちゃんいきなり入って来ないでよ！ 乙女の荷物には秘密の品が……」

「何で手榴弾が乙女の秘密の品なんだ？」

ユカリが抱え込んで隠しているキャリアケースの端からは、物騒な突起が幾つもみられた。

「服とかが入ってるんにしては重いとは思ってたけど、やっぱりお前は……」

溜息を洩らす。

「ちっ：違うの！ こここれは……そう！ 護身用！ 護身用のっ！」

「残念ながら手榴弾を護身用に持ち歩く奇怪な人間には出会ったことがないなあ……ユカリ」

「はっはい……！」

「全部出さない」

少女は他人が見たら見惚れるだろう笑顔でにっこりと笑って、ユカリの肩を叩いた。

「……………うう……」

——数分後。

床にはびつちりとした歩兵武装が並んでいた。

——手榴弾、特殊警棒、スタンガン、シュア・ファイアー、催涙スプレー、ブラックジャック、ブッシュナイフ、ソードブレイカー、クボタン、ヌンチャク、まきびし、アイスピック、9mmパラベラム弾、グレネードSMGやM92FS Vertec……なんてどうやってキャリーケースに詰めたんだ。コイツ天才じゃなからうか。

その他にも名称や用途さえも分からない物騒な品物が、床一面に並べられている。

「おねいちゃん……ごめんね？」

「おいおい。自分が妹の上目遣いに引っ掛かるほどの甘ったれだと思ったら大間違いだぞ。……半分回収」

「いやあああ！！ 私の娘なの息子なの！ 妹なの弟なのお！！」

——また始まった：

武器に変な思い入れをするのはユカリの悪い癖だ。

昔から女の子らしく人形遊びで過ごすべき時間を、むさ苦しいオヤジと趣味が悪化して無機物に異常に傾倒してしまった男と機械整備とかに当てていた所為だろうか：

——まあ、あいつらはあいつらなりにユカリの保身を思ってたんだらうけど。

レインは口元だけで笑った。

「ユカリ…全品回収しないだけでも喜べよ？ とりあえずこれらは武器庫にぶち込みます」

「ぶち込むなんて言わないでえええええ！ 私の妹54号があ！！」

レインがひよいと持ち上げたスタンガンの一つ一つに、ユカリは変な名前をつけているようだ。

——勝手に義理でさえ成立しない姉妹を増やすなって。

本当に、二年前よりも収集癖が大変なことになっている気がする。二年の月日の流れは早い。

「まあ、お前の姉妹は後でどうにかするさ。李清がお茶にするか

ら降りてこいとさ」

「あ：うん。了解」

両手にスタンガンと特殊警棒を抱え込みながら、神妙にユカリは頷く。

——取り敢えず物騒なもん下ろせ。

「おねいちゃん、李清さんていい人だね」

「なんだよ、急に」

「いいやー。おねいちゃんには勿体無い大家さんだなーって」

「なんだそれは」

「ユカリにおねいちゃんみたいなお兄ちゃんも勿体無いけど。：ユカリに李清さんみたいなお姉さんみたいな人がいるのも勿体無いって思ったの」

「：自分を過小評価し過ぎじゃないのか？」

「んー、そかな？ でもユカリはこんな未熟人間だから。ちゃんとおねいちゃんの横に並んでも恥ずかしくない人になろうと思うよ？」

目を弓にしてこちらを見上げ、笑うポニーテールの少女。

もう一方の冴えた漆黒の少女は、顔を背ける。

「自分の横なんて、：きっと気持ち悪い、つまらない眺めだぞ」

「んんー、じゃあ、見据える所は違って隣にいるね」

「……………」

——正直、上手いことを言うに関心してしまった。

「：勝手にしろ」

ユカリの頭を指で軽く弾く。

すると本人は何故か嬉しそうに目を細めた。

「やふー、これなんか久しぶり。昔はよくこうやって小突かれてた気がする」

「：そうだな」

ふっと口元が自然に綻んでしまった。

ユカリは普段はふざけた様子でも、実は物事の本質まで見つめれ

る子だ。

妹のこんな笑顔を見るのはいつぶりだろうか。

——でも、変わらない。変わるはずもない。

家族が横で笑っていてくれることの安心感、満足感、嬉しさ、くすぐったさ、切なさ。

いつでも、いつまでもこうして笑っていてくれれば良いと思う。その為ならどんなことでも出来るとも。

——自分が、言えた義理じゃないけど。

片付けの目途がつき、兩人は一旦下に降りて一息着いていた。

テーブルにはコーヒーが二つと紅茶が一つ。

ユカリが砂糖を器からより分けて、さらさらと入れていく。

「——さて、…それじゃあそろそろ本題に入ろうか？」

「ふへ？」

レインの問いかけに、あくまで気がつかないフリをする少女。だが続ける。

「ユカリ、隠し事は通用しないよ。そつなく誤魔化したつもりだろうがね」

「…」

ユカリはあー、とかうー、とかえー、と唸ってこちらを窺う。

「だから上目遣いは通用しないっての」

「ぶー、分かった今度からやめよー」

紅茶のカップを取って一口つけると、眉を顰めてまた一さじ砂糖を加えるユカリ。

糖分の取り過ぎはよろしくないと思う。

隣に座る李清に軽く目配せをして、少女は語り始めた。

「実はこの度、姉上殿をお尋ね申ししたのは、かくかくしかじかの事情がありまして……」

「……で？」

真顔で受け答えるレイン。

行き詰まるユカリ。

「あうー実は、おねいちゃんの様子が気になったってのと、もう一つ……」

息を溜め。

「――その！ ユカリは学校に通いたいのですっつ！！」

「いいんじゃない？」

軽く受け流す美貌の少女に、ユカリは机上につつぶして見せた。

「んな…反対されるかと思ってたの……」

「別に。学校に行くこと自体は反対しないよ。ユカリだってもう14歳、普通なら中等部2階生だしな。自分では行かなかったけど…まあ、ユカリの将来のこと考えたら今からでも十分遅くないだろうし」

黒々としたコーヒーを口に含んで、顔を顰めた。

――濃ゆい。

「そう！ そうよね！」

「…ただし。何故ザイフォンである必要がある？」

口をつぐむ妹にレインは静かに指摘した。

「ここの治安の悪さと、土地に根付いた古風な東方人の差別意識は知ってるだろう。確かにコッペリアに学校はないし、あいつがこんな状態じゃあ奨学金制度あるとこが望ましいけど…でも何もザイフォンである必要はない。ここの教育機関は並だぞ」

「…私だって…お父さんのこと気になったし……」

ユカリは俯く。

口調に先程までの気丈さはない。

「確かに自分がお前に言えた義理じゃないがな…でもここは危険な所だし、お前も根っからの東方人だ。黄色人種が犯罪に巻き込まれる率は高いぞ？」

レインは自嘲気味に語り…

――逡巡。失言に気がつく。

「……、……ごめん」

レインはすぐに謝る。

この話題は避けておくべきだった。

ユカリは首を横に振る。

「……別にいいよ。そうだと思ってるんなら対処法も考えてきたし。それにコッペリアでも結構酷かったでしょ。大丈夫だよ」

ユカリは顔を上げて笑って見せた。

あの時のことを思い出すだけで泣きじゃくっていた彼女も、知らぬ間に成長した。

大きな変化に、胸が温かくなる。

「じゃあ、聞かせてくれないか。今から学ぼうとする理由を。……とるに足る理由なら、考えを改めないでもない」

イザベルに義務教育は存在するが、無法地帯であるコッペリアで育った彼女たちにとって学舎は縁遠い存在だった。

ユカリにしろレインにしろ、大人しかない環境で育ったものだから。

だからユカリが学ぶ意思を持ち合わせているからには、そう思わせた確固とした理由があるはずなのだ。

少女は言い淀みながらも、確かに言葉にした。

「うん……実は技術者になりたいくてね……」

——以外な答えだった。

「アスハも技術者だけど……、そっち方面だよな」

そっち方面というのは武器の製造・修理をする職人を指す。

暗黙の同意からか、ユカリも頷く。

「うん。アス兄ちゃんもっぱら職人肌の人間だから。コッペリアでも優秀な技術者でしょ？ でもユカリ、兄ちゃん程才能無いし、だからきちんと勉強して専門的な知識で兄ちゃんを手伝おうと思ってるね」

「アスハにそれ話した？ 聞いたら泣くぞ。感動のあまり」

「うーん……適当にはぐらかして来ちゃったから、今頃怒ってるか」

もしない」

えへへーと照れたように頭を掻く義妹。

テーブルに頬杖を着いて、顎を載せた。

——どうにも自分は妹に甘いな…。

揺るがないと思っていた考えが、彼女の言葉で簡単に瓦解してしまふのだから。

「自分は…：そういう理由なら学校に通うのは賛成だよ。後は、保身には気をつけておけよな？」

「ダイジョブ！ 常に武装しているユカリちゃんの火力にかかれば！」

——火力で…

逆に傷害罪に問われるんじゃないだろうか

…と、今までだんまりを決め込んでいた李清が、口端を上げながら言った。

「さて。姉妹のお話も終わったことですし。私は暖かく見守るとするわね」

「李清…：知ってただろ。さしずめ、ユカリが相談したってどこかユカリは、凶星だということを身体で体現するように、びくっ半身を伸ばした。

「そうね。まあ、いいじゃない。もう終わったことよ。ユカリちゃんは今これから忙しくなるわね」

「あ…：はいっ！ 頑張ります！」

「程々に頑張るんだな。煮詰め過ぎても良くないぞ」

昔からユカリは張り切りすぎて失敗したり、体調を崩したりすることが多かった。

「うん。ありがとうお兄ちゃん♪」

——何とかなるかなと思った。大丈夫だろう、とも。

少し甘い考えかもしれないけど、ユカリはユカリなりにこの街で上手くやっていけるだろう。——と。

43 徒花

「――久しいなレイン、何しに来た？」

女は豪華な金髪を凭れた長椅子に流して、相変わらず人をわざと誘惑するような露出度の高い服を着ている。

「自分で呼んでおいて恩着せがましいぞ、ミネルバ・メートヒエン」

「恩着せがましい：か、面白いこというなお前は」

大人の女性の色香の漂う紅の唇、紡ぎだされる声音に不釣り合いな男口調。

落ちる寸前の熟れた果実を彷彿とさせる。

――？ミネルバ・メートヒエン、という呼び名は、本人が言うところの通り名なのだろうだ。

メートヒエン：にしては明らかに發育し過ぎている乳房を、半ば程はだけた東方風の服に身を包んでいる。服装とは裏腹に本人は列記とした英国人で、プラチナブロンドの髪と色素の抜けたの瞳がそれを物語っている。

彼女は、レインが今居る娼館の女主人である。

ここ、第七区画は治安が悪く、軍警察が定める治安悪化傾向部の上位に入る。

ただのチンピラなら何処にでも居るが、件の区画には本格的なマフィアまで蔓延っているのだから、一般人は近づきたくない場所だろう。

そして、傭兵であるレインも考えることは同じである。

しかし、売春宿が軒を連ねる区画、彼女の娼館も無論そこにあリ、用心棒紛いの仕事をしている彼女は、依頼を受ければ自ら足を

運ばなければいけないのが現状だ。

以前、カイス・フェーダクトに拉致された場所が他にもないこの娼館であるのだが、気にしては飯の当てがなくなる。

レインは潔癖症ではないのだ。

「さて、…そろそろアタシの養女になる気になったか？」

「安心しろ。丁重にお断りしてやる」

ミネルバは煙管の紫煙を吐き出して、顔を顰める。

「よし、分かった。じゃあ義妹にしてやる。どうだ？」

「……何か期待してるのか？」

好待遇は約束する…と馬鹿げたことを言い連ねるミネルバを尻目に、レインは真剣な声を出す。

「…で、本題は？」

彼女はじとりと黒髪の少女を見、仰け反った体勢から椅子に座り直して自身の長い美脚を組んだ。

「せっかちな奴は嫌われるぞ？ …まあいい。簡単なことさ。いつも通りの仕事を請けて欲しい。ただしちょっと長い期間でな」

いつも通りの仕事とは、要するに用心棒のことだろう。

主には店の女達を暴漢から護ったり、不条理な客を追い出したりが仕事内容だ。

「どの位の期間になるんだ？」

「とりあえず一週間が妥当だな、やっかいな客が増えて困ってるんだよ。店の娘も怯えるほどにね」

娼婦というのは、仕事中、一糸纏わぬ完全に無防備な存在であり、仕事中に殺害されたり、また仕事帰りの夜道などで襲われるケースも多い。本人達もそれを熟知しており、間接的にそれを覚悟している。

彼女達は、誰にでも平等に愛することが出来る者ばかりではない。一人の人間なのだ。

ただの人間が無償の愛を、無差別無区別平等に振り撒けるのか。だから、時にそれは愛でなかったり、たとえば客であろうとも娼婦

に拒否されることだってある。

——それは仕方ないこと。

でも、それを勘違いする人間が多いのだとミネルバは語る。

彼女達が自分たちに与えるものは唯一無二の愛であり、自分たちを満たすことが彼女たちの使命である、という考え方だ。

——とんだ愚かな勘違い。

レインもそんな愚者に言い寄られたことは数多くあるが、彼等の目当てはほとんどレインの外見的な美しさだった。

内面を真に見つめた者などいない。

——：ようするに、首から上を削いでそれが手に入れば良いってことだろうな。

かつて虚無的だった自らが編み出した答え。

よって、同質には考えられない。

娼婦に向けられるものは、圧倒的な肉欲。

レインの事情とはまた少し違う。

彼女たちの多くは親から捨てられたり、身寄りが居ない者たちだ。中には生活苦から肉親に売られた為に自らの資本を持たず、この仕事を『選ばざるをえなかった』場合だという。

彼女たちが、どんなに心の内に闇を抱えているか。

一生、心に巣喰う闇を払拭できずに生きていくのか。

その上、殺されたり一方的に苦痛を強制される娼婦達はどうなるんだ：と。

「了解。請け負う」

「：そりゃあ良かった。断られたら頼む当てがないもんでね」

——そんなことはないだろうに。

レインは内心想う。

膝に頬杖をついて、ミネルバは猫のように首を傾げた。

「にしたって不思議だね。前から気になってたんだが、どうしてって無性愛者のレインがこんな仕事を請けるのか：お前にとって娼館^こは一番避けたい場所じゃないのか。この前だって客と一悶着あっ

たんだろう？」

一悶着とは：おそらくカイスのことを指しているのだろう。それにしても、自分で依頼しておいて変なことを訊くものだ。

「無性愛者云々は置いといて：私怨と仕事は区別するさ」

「……本当にそれだけか？」

緩慢な口調に、天井を仰いで答える。

「そうだな：本当は、よく分からない。生理的な嫌悪感とかは拭えないけど。そんなのは自分だけの話だろ。他の人間と自分の感覚は共有できないよ」

「：ほお。他人は他人か。区別するね」

「当たり前だ。自分と他人は違うだろ。：相手が異常なら別だけど、持論を他人に押し付けるのはお門違いだ」

ミネルバの口唇が弧を描く。

「……そうか。確かにそうだな。だけどレイン。：あまり自分と他者を切り離して、自分を自分だけのものだと思っちゃいけないよ」
含みのある言葉。

どういう意味か問い掛けようとするが、継ぎかけた台詞は彼女の言葉に遮られた。

「ネラナだって、声と片目を失った。シャルドネは性病で末期だ。リーヴァンは気狂いして今は地下牢。：ホントに、何がしたいのか、何の為なのか。私が言える義理ではないんだけどね。もう娘達が傷つくのは見たくないんだよ」

娼館の女郎は、店の女の子たちを娘と言う。

本来ならば、鼻で笑われるような戯言だ。彼女たちの身体を売り飛ばし、稼いでいる元締め of 台詞としては。

しかし、ミネルバ自身、彼女たちと同様の苦しみを過去に味わった人物であり、娼婦達に母と呼ばれる存在だ。彼女たちを見ていればその言葉に偽りがなく、滲み出ている。

レインの目の前の人物は、ただの売女を雇わない。

『なった』：ではなくしょうがなく『なってしまった』人物しか

手元に置かない。

だから、融通も利かせる。娼婦のことを第一に考える。人徳の一言では言い表せれない誠意は確かに在るのだ。

レインは問いかけを取り直し、なるべく明るく言った。

「分かった。昼間の寢床は確保してくれるよな」

「ああ。いつもの最上階の角部屋、勝手に使いな」

ミネルバは手を振って、何かをこちらに投げて寄越した。

軽快な音と共に受け取ったそれは小型のPHS。今迄と同様に、店の娘たちが危険を感じたときは、彼女達のPHSから直接連絡が入るようになってる。

「ナースコールみたいだよな：」

毎回思っていたことを口に出す。

「体^{てい}のいい呼び出し鈴さ」

悪戯な笑みを浮かべて、ミネルバは煙管に紅の唇をつける。

少女も苦笑して、館主の部屋を後にした。

44 同属

見慣れた室内の様子がいつもと違うと感じたのは、おそらく気の所為ではない。

「…？ あれ？」

あちらが発するのは疑問符。

何かの作業中だったのか、机に座ってこちらに背を向けていた人物は、後頭部でまとめたくすんだ色合いの黒髪を揺らしこちらへと振り向く。

——知らない顔だ。

その人物は少女だった。見かけで分かるようにこの国の出身ではないのだろう。

目を丸くさせて、無垢な瞳でこちらを窺っている。

——…と。

「あ…そっか！ 貴方ですよ、リートさんて！」

何故自分の名前を知っているのか…と思うより先に、リートは少女が李清かレインの知り合いなのだと悟った。

「えっと。…愚姉がお世話になってるのか、なってないのか…よく知らないんですが、一応言わせてくださいな。お世話になってます」にこりと笑って、彼女は愛想を向けてくる。

愚姉——と言う言葉に引っ掛かった。

思い浮かんだのは美麗な顔立ちの中東人。

「…レインの？」

小動物のように少女は頷いて、リビングの床を跳ねリートの方へと歩みを進めた。

「そうです。私、アレイン・ヴィアルドレッドの妹…っても血は繋がってないんですが、ユカリ・ヴィアルドレッドと申しますです。こっちに引越する時に李清さんに手引きしてもらって、今はこち

らでお世話になってます」

目の前まで来て、少女は律儀に頭を下げた。
ポニーテールにした髪がふわりと揺れる。

「以後、よろしくお願いしますね」

「…こちらこそ」

真摯な態度にどう反応すればいいのか逡巡しながらも、応じる。

すると少女はまた笑った。

——よく、笑う娘だな……

レインとは血が繋がっていないと言っていたが、彼女の秀丽さはなくとも、傍に居るだけで辺りの雰囲気が暖かくなる、…そんな資質を持ち合わせた少女だった。

「李清さんから聞いてます。地下の部屋を使いに来るからって」

彼女は、言うと、自身のスカートのポケットを探った。

掌を開き出てきたのは、古びた鍵だ。

「これを渡すように言われました。どうぞ」

「有り難う」

感謝の言葉を告げると、リートは意図せずに少女と目があった。

——何か、底に困ったような色がある瞳と。

「何か…?」

短く問うと、少女はついと視線を逸らした。

「あの……!」

無駄に力のこもった声だったが、見ると彼女の肩は竦んでいる。

「リートさんは…お姉ちゃん、仕事をよく共にすると…いうのは本当ですか?」

お姉ちゃん、という単語に内心苦笑しながら答える。

「よくって程でもないと思うけれど。仕事柄、何度かある」

「…じゃ、じゃあ…少しは、私よりは、お姉ちゃんのこと…知ってますか?」

「…? さあ、あいつも秘め事が多いみたいだから。…でも、信念は強くて、意外と頑固者で、少し自分のことを顧みないところが

あるのは知ってる」

僅かに表情を緩めて話す。

ユカリはその言葉にじっと耳を傾けると、花が咲く如く笑った。

「そう！ 人の言うこと聞かないでいっつも無理するの！」

楽しげな様子から、不平を言いながらも義姉を慕う姿が感じれる。

「良かったー。私、ずっと、心配で…理解者作ろうとしないから…お姉ちゃん」

「……………」

「…………でも変わってないし、変わるはずも、なくて…………」

紡ぐ、言葉が途切れた。

「……………」

リートは無言で見守った。

彼女はまだ、伝えたいことの一割も言っていないのだろう。

「勝手に、家出て…、お父さんも、居なくなっただのに…嫌で、お姉ちゃんまでいなくなるのが…本当に辛くって」

彼女は暫時、俯いていた。

——が、咄嗟に頭を上げる。

「あ！ ごめんなさい…詰まらない与太話につき合わせてしまい…もうこれだから私って、…いけませんね。もっとちゃんとしないと！」

今度は困ったように力なく笑って見せた。

対するリートは話しあぐねる。

「…何度か」

「え？」

「何度か、レインが義妹の話をしていた。君の話だろう。…レインも言っていた。『自分の妹はしょうがない奴で…』とな」

ユカリは不可思議そうな顔をする。

——続けて

「そして、他人に心配されても、自分のことを後回しにしてしまう癖のある…困った子だとも言っていた」

「……っ」

聞いた彼女は僅かにたじろいだ。

リートは無意識のうちに目尻が下がる。

「俺には、二人とも似た者に見える」

隻眼の青年の口調こそ、先程と変わらない素っ気ないものに感じれるが、幾分か見て取れる表情は柔和になっていた。

僅かな変化が彼女を安心させたのだろう。

「……そ、ですね…似たもの、かあ……」

ふと吐息を洩らすように呟いた横顔に、先程までの陰鬱な陰りはない。

「言いたいことは、本人に言った方が良い」

彼女の焦げ茶色の瞳を直視して、リートは話す。

——…けれどこんなこと、分かっているんだろうな。

きっと彼女は、掃け口のような言い草を自分でも善しとはしていない。ただ、本人に直接言うことも出来ないで、人知れず溜め込んでいたに違いない。

「それに、気を遣われること、あいつは嫌いだろう」

「…気を遣ってる、って言いますか…その…」

視線を泳がせユカリは口籠もる。

「怖いのか？」

「…え？」

「言葉にすることで変わってしまうことがあるから。言った台詞なんてものはどうやったって返って来ない。言った言葉で相手の…相手と自分の関係と、変えてしまうのが怖いんじゃないのか？」
少女は、はっとして青年を見つめる。

「…貴方も『言ってしまった』ことがあるんですか…？」

思っても見ない切り替えしに、リートは心底揺れていた。

「そうだな。やはり…返っては来なかった」

「………」

眉尻を申し訳なさそうに下げ、ユカリは胸に手を当てる。

戸惑い、それでも開口した。

「私、は…心配かけたり、迷惑になることがないように、気を遣ってたのかもしれませんが。けど、良かったんです。傍に居てくれるだけで…それだけで…馬鹿みたいでしょう？」

リートは静かに首を左右に振った。

それが、もしも、自分の中の大部分を占めていたなら、酔狂過ぎるのはある種の依存だろうか。

返す言葉には困らなかった。

「レインは君のことを大切に思ってる。さっき言っただろ。君の『自分のことを後回しにする困った癖』は本人も承知済みだ。あいつが困った、何て言葉遣うくらいだ。きっと君が自分のことを優先しても、受け入れてくれる」

目を逸らさずに彼女は聞き入った。

一度、俯く。

「だと…嬉しい、です…」

リートは少女の垂れた頭に掌をのせる。

彼女はゆったりと覆い被さる重みを感じ、少し身を強張らせた。

けれど束の間。身体の抵抗は抜け、頭上の重みに自らの手を重ねる。

「…、リートさんて、ちょっとお姉ちゃんに似てるかも」

「？ …まあ、黒髪だからな」

「それですけど。雰囲気とか、落ち着いてて、好きです」

他意はない彼女の独白のような言い方。

彼女の手が、そっとリートの手を取る。

「お兄ちゃんのこと、…見ててあげてください」

「…どうして、俺に？」

「もしも、これから先、お姉ちゃんから、リートさんに話すことがあれば…聞いて、想って欲しいんです」

少女の話は核心が抜け切っていた。
一体、何を話すのか。

一体、何を想うのか。

リートが問う前に、少女は静かに告げた。

「∴私の義姉は、6年前からずっと、唯一人の影を追いかけているんです」

44 同属(後書き)

45 個々

彼女は暗い部屋の中にいた。

粗末な寝台と、通路から見えないようにという立て付けがあり、最低限のプライバシーは護られている剥き出しの便器。こんな場所でも、思ったよりも手厚い拘留に、彼女は心底驚いていた。

けれど通常の間人ならば、入ることすら拒絶して然るべき風体だった。

窓のない部屋の床は病院のようなタイル。何らかの使用目的によって汚れても、流せるように排水溝まである。

壁も同様の冷たさを放ち、冬なのに暖房器具は一切ない。

その為か、彼女も部屋の隅で三角座りをして、微動だにしない。

部屋の片面は通路と接している。隔てているのは腕がやっと通れそうなほどの感覚の、鉄格子。

もしも、この光景を見た者が真っ先に思い浮かべる言葉があるとするればそれは――監獄。

下界から隔てられた、更なる下界だ。

フレイアと言う偽名の意味を失った彼女は、牢獄に居た。

臀部から這い上がってくるような床の冷たさは、同時に身体の熱も吸い取っていく。

しかし片足の太腿には熱があり、脈打つような鈍痛が常に付き纏う。

肌色は白く、表情は彫像のように伏して動かない。

「……あー……」

唇が微かに動いて、息を吐き出した。

呼吸は白い靄となり、その場で霧散する。

幾分か血の気の失せた頬、ほっそりとした顔の輪郭。ほつれた髪。

以前と比べ、相違点はあるものの、彼女が激変したという様子はない。

免罪で身柄を拘束されようとも、酷な扱いを受けようとも。

――：始めから分かった分は、覚悟してるつもり。
そう彼女は思う。

例えこれから苦しい尋問、もとい拷問を受けようが辱められようが。
――いざとなったら舌でも嚙んで死のう。

彼女にとってはその程度だった。

生への執着など。

死への恐怖など。

死んでいる筈なのに、何故か生きてしまった自分の存在などそんな偶然にしか過ぎない。

だから、死ぬときもどうでもいい死に方をするのだろうと思っていた。

自分の志を貫いて、前に倒れて死ぬ、天寿を全うして死ぬなんてことは、

――絶対にないんだろうって、分かったから……
そもそも、自分の思うように死ぬる人間なんて、ほんの一握りだ。

大概の人間は、どうでもいい理由で死んでいく。

どうでもいい人間に殺され。

どうでもいい事象に巻き込まれ。

どうでもいい病に罹り。

自分もそんな人間の一端だ。

生への執着なんて何処かに忘れてきてしまった彼女には、舌を嚙んで死ぬということより、舌を嚙んだら痛覚はどの程度なのか、ということの方が問題の念頭にある。

――……痛いの、嫌だからね。

フレイア――否、美都は畳んだ足を抱くようにして、丸くなる。
どこから、どうなって今に至るのか。

自分は即務第二機関で、用心棒紛いの仕事を請け負っていた。
人を殺す度胸も、罪の重さを受け入れる度量も、また罪を流し、否定する思想も、彼女は持ち合わせていなかったから。

でもお金はなかったから、一応、生きていく為の行為をしていて。仕方なく自分の技量にあった仕事をし、それなりに名も立った。

どうってことはない、空虚な生き方だ。

無関心を貫いた。物、人、自分、環境、全てにおいて。

それでもいいと、思っていた。

考えるのは辛かった。

何かに興味を持つと、知りたくなって、理解したくなって。

でも理解できなくて、考えて：

その作業の繰り返しはきつとこの世の責め苦だ。

分かるはずないじゃないか、他人の心なんか。

当たり前だ。

同じ人間なんて存在しないんだから、同じ気持ちや心が存在するわけがない。

例え酷似した感情が複数あろうとも個々に違って、結局発生した本人だけのものだ。

貴方の気持ちが痛いくらい分かった

自分も同じ気持ちだと。

：貴方は私じゃないのに何故そう言えるの？
単に似たような感情や感傷なだけでしょう？
違うんだよ。絶対に。

それを分かっている、何故理解しようとするのか。

分からないなら、分からないで、いいんじゃないの？

：そもそも、分からないものを理解しようとする他人の思考など、理解できないし、どうでもいいことだけだ。

——とにかく私は、考えたくなかった。

だから無機質な、機械的な日々を送って、繰り返し、繰り返し、感情を無くし、亡くし、失くし。

…そうして、胡乱な平和で異常な日々が過ぎていき。

ひとり、ふたり、

さんにん、よにん、

そして、ごにんめ。

私が指された。

…顔を見たのは、私だけ。

無実を叫びながら。

誰も信じてはくれなかった。

——…その内、面倒くさくなっただっけ。

「ねえ、これが目的だった…？」

「私が、犯人になって」

「今」

「ここに居ること……」

切れ切れになった言の葉が紡がれていく。

「分からないよ」

「分からない」

「たぶんね」

「考えても、分からないと思うよ…？」

廊下の奥から足音が近づいてくる。それは彼女の断罪のカウントダウン。

けれど彼女は、話すのを止めない。

「そうだろう？」

「だってさ……」

足音は一直線にこちらへと向う。

「貴方と私は、違う存在だから」

刻一刻と。

「ねえ。――カングルツペ」
足音が彼女の監獄の前で止んだ。

46 犠牲

――焰を溶かす、雨になりたかった。

炎に包まれて燃えていく、崩れていく、揺らめき、撓んで、炭になり、灰になり、人が居た証も形あるものに託した想いも消し去る。それでも唯一つ灰にしたくないものがあって、残された大切な何かを抱きしめて。

きつく腕に抱いていたものは、固くなり始めた自分の肉親。

「姉さん……」

煤がついた頬を指でなぞる。

閉じられた瞼はもう開けられることはない。

「姉さん…姉さん…姉さん…！」

壊れたレコーダーのように意味を繰り返し口にする。

呼んでも呼んでも、笑顔で振り返る彼女はもう返っては来ない。

「嫌だよ、姉さん…いや、死んじゃ、やだ…一人に、しないで…」

…

嗚咽混じりに言う。

その声だってきつと届いていない。

おかしい。

こんなのはおかしい。

神様。神様。

私は何か悪いことをしましたか。

これは何の罰ですか。これは誰の罰ですか。

これは私の罰なんですか。

私は罪を犯しましたか。

この罰に見合う罪を犯しましたか。

——違う。

違う：私は悪いことなんてしてない。

じゃあ誰、誰の罰。

私は誰の罰を受けているんですか。

——なにが、なんで、なぜ、どうして、

浮かぶのは疑問符ばかり。

そして、答えも一つ。

「あいつ……」

浮かぶのは、一人の影。

「……あいつが……」

目の前の炎よりもっと深くどす黒い感情が、渦のように溢れ返る。

「返せ……返せ……返せよ……」

虚ろな目で立ち上がる。

「……姉さんを返せ！」

獣の咆哮にも似た声は、炎の轟音と共鳴した。

夕刻下がりの室内。

ただし日の光の届かない空間で、長い黒髪の少女は報告していた。

「——結局、複数人でご来店いただいたよ。……何とかなったけど、無傷だったことに驚いた」

「軍警察の人間が複数、ね……」

「大丈夫。特にどうってことはなかった。もしかしたら軍警察の名を語るモグリかもしれないし。自分も怪我はないしいつも通りだ」
危惧をする李清の表情は、けれど晴れなかった。

「つまり、いつも通りにぎりぎりの所で危ない橋を渡って、命懸けたと？」

言いたい意味が分かって、苦笑いをする。

「…まあ、そういうことになるかな」

レインは思わず言葉を濁す。

李清の追及は如何なるときも緩まることがない。包み隠さず正直に答えておくべきだ。彼女に隠し事なんてできたものじゃないのだから。

「ばっかじゃないの？ レイン」

「…喧嘩売ってる？」

「ばーか、ばーか、ばーか」

「…李清、酔ってる？」

「冗談よ」

李清はふいと視線を逸らして、つまらなそうに頬杖をついた。

彼女の家…もといレインと、最近ではユカリの住むようになった元廃墟。任務終了直後に呼ばれた地下のただっ広い鍛錬場で、李清は粗末な机に腰掛けた。空間の隅にある、目的も要素も分からない木製の机にだ。

彼女は目を流して、黒く纏まったレインを見、

「…辛くなるって、分かってるのにね」

「それが自分の仕事だから、しょうがないことだ」

「本当にそうかしらねえ？」

猫のように机上に半身を寝そべって、こちらへと横目を向ける。

彼女の瞳に意味ありげな色を見た気がした。

「…何が言いたいんだ？」

「答えは人に求める物にあらず」

李清は軽く伸びをすると、首の根元を手で揉んでいく。

「まあ、軍警察の不届き者も捕縛したわけですし、仕事としては上々の働きっぷり。…それは認めるわ」

わざとらしい言い方に眉を顰めた。

言い分をつけられているようにも感じられ、彼女の本心が今ひとつ掴めない。

続けて言う。

「ただ、前からずっと思ってたのよ。貴方の戦い方ってのはね『もしも』に対する耐性が全くない」

レインにも李清の言っていることは分かる。

——もしも

つまりそれは、こうなったら、ああなったら、という『もしもの可能性』を示唆している。

もしも、敵の人数、武装、力量に見誤りがあったら…？

もしも、仕事と人の命を秤にかけるときがきたら…？

判断後の行動が結果の明暗を分けるのだろう。

…しかし、それは

「その時にならないと、分からないことじゃないか」

「そう。けれど、その時が来ても分かりはしないでしょうね。貴方には」

さりとてした毒舌に心中が乱される。

同時に、核心を握られたような心許なさがせり上がってきた。

「あのね。貴方がばかじゃないと信じているから、懇切丁寧に教えよう。

もしもの時に対応できるかは確かに時と場合もあるわ。けれど、どんな事象も結局判断するのは単一の間次第よ。主観が何を積み重ねてきたのか、何を背負ってきたのか、何を経験してきたのか。それぞれで全てが判断材料になる。レイン、貴方にはその材料がないの。…これから積み重ねればいいって思ってる？ 確かに貴方はまだ若いし経験も浅いわね。でも、やっぱり甘いわよ」

真っ直ぐにこちらを見つめてくる、李清の炯眼。真っ直ぐに見返そうと勇める。

一度、口元をきゅっと結んだ。

「…若さと、経験の浅さを言い訳に使う気はない」

——そうだ。死んだのを、負傷したのを、大切なものを失ったのを、若かったから、経験不足でといった理由で誤魔化せるほどにこは寛大な環境ではない。

言い訳はいつも、事後に憑いて回るのだから。

全ては自己責任だ。結果だけが残る。

どれだけ奮闘しようが死ねば全てが終わり。

逆に、生きてさえいれば、どんな汚い手段を選ぼうが構わない。

それでいいと思う。

そうじゃないと、意味がついてこない。

こちらを見つめる彼女は、机から腰を浮かして背を向ける。

ふっと纏う空気が弛緩した。

「先人面するのも慣れてないわね、私とか誰かさんみたいになつて欲しくなくって、ちよつと意地悪言いたくなっちゃった。別に嫌味を言おうってんじゃないのよ？　だってレイン、無茶ばかりするんだもん」

眉尻を下げた優しいな笑みで、李清が振り返る。

「…意地悪、か。でも李清の言う通りだよ。自分だって、分かって気づかない振りをしていただけだ。『私』のこともね」

一度、李清はレインを見、眼を丸めた。

「認めたの…？」

「認めようと頑張ってるどころ。見なかったものを見ようとする努力はしてるよ」

「どうしようもないことよ。だって人はすぐに強くなれない。経験だってね。気の遠くなるような長くて、けれどあつという間の時間を経て、反芻して、後で振り返って、初めて気がつくものだもの。詮無いことよ。さっきの言い分なんてね。よーするに屁理屈捏ねただけ」

諦念を宿した貌で、李清は呟く。レインは問いかけたくなった。

「李清は、経験から学んできたことを誇っているか？」

応えには間があった。

「誇っている…誇り、ね…ふふ」

何故か応えに苦笑が混ざっている。

「誇れるものが、一つでもあればいいんだけど……」

哀愁を浮かばせた顔に、少女はそれ以上言葉を掛けなくなる。けれど内心、李清は尊敬できる人だと思う。

強いし、綺麗だし：時々、歳を偽ることはあれど、人生の先人らしさが十分伝わってくる。迷ったときは親身になって話を聞いてくれる、そして自らの過去をよく知っている数少ない人物で、自分にとっては肉親のような大切な存在だ。

レインにとって、それは今も変わらない。

「：李清は、誇っていいよ。自分が補償する」

軽々しく口にしてしまっただろうかと、後から後悔した。けれど、聞いた彼女は目を細める。

「レインが補償してくれるんだったら安心ね」

悪戯っぽい声音で言う。

暖かいその言葉に、少し安心した。

——：そう。暖かいのだ。

李清は一緒にいるとこちらまで感化して、緩やかな雰囲気になる。彼女の人徳ゆえだろう。

——……じゃあ、

自分には何がある：？

投げかけた問いかけは、心中を堂々巡る。

決意の意を秘めた視線を上げた。

「自分も、このままじゃいけないって分かってるんだよ。：命かける覚悟があることに、命を賭けなきゃいけない。じゃないと、自分の納得していないことをして死ぬなんて、虚しくて下らないことだから：」

——そう。

今までしてきたことは何だ。本当にこんなことがしたかったのか。

もっと、優先すべきは自分の本意だ。

「覚悟を、決ようと思う」

なあなあじゃ済ませちゃいけない。ちゃんと、決めなきゃいけ

ない。

李清はレインの一言に表情を弛緩させた。

「なーんだ。分かってるじゃない。それでこそレインだわ」

口端を上げて、三日月のように笑う。

こちらもつられて笑ってしまった。

自分のことは自分で決める。後ろを振り返るのは3年前に止めた。
――：ならもう、するべきことなんて分かっていたんだ。

レインは一呼吸間を置いて、言った。

「――即務第二機関を、辞めるよ」

47 疑念

結局、祀り上げられていたのだ。

言うなれば、体のいい標的に。

何故早く気がつかなかったのだろうか。

イザベルに東方の血が混じった人間はごく少なく、その上自分のように純血な者はもっと少ない。

だから、丁度良かった。

彼女の代わりには丁度良かった。

：奴の傀儡には。

気がつかない内にそうなっていた。誘導されていた。

人の意図を玩んだ奴を許せそうにはない。

こんなことに気づけないで、奴の掌の上で踊らされていた自分に腹が立つ。

薄暗い廊下をつかつかと歩き、窓口の硝子を軽くノックした。程なくして、閉ざされた窓がかりと開いた。

「：どなた：あ、レインさん……？」

眠たそうな眼をしたユウだ。

レインは無表情に告げた。

「今すぐ、官長に取り次いでもらえる？」

「え、でも：急には」

「今じゃないと駄目なんだ」

静かな面持ちで：しかし凄みを含む声音でレインは言う。ユウは相手の本意を探るようにじっと、少女を見つめた。真黒の瞳の奥に何を見たのか、少年は承諾する。

「：取り計らいます」

そう一言告げ、奥へと去って行った。

——猪突猛進。

我ながら思う。

でも、我慢できないことはすぐにでも辞さなければいけない。

ユウは思ったよりもずっと早く戻ってきた。

「お会いになるそうです」

少年は簡潔に結論を述べ、軽く目礼を返す。

その姿を視界の端に捕らえながら、レインはエレベーターへと乗り込んだ。

長く、綿密な時間は、数瞬であったようにも感じれる。

駆動音と、足裏が床に押し付けられるような違和感がやんで、電子音。

扉が開いて外に出る。

心の準備は必要なかった。

——そんなものは決心を鈍らせるだけだから。

「失礼します」

返事を受けずに両番の扉を押し開ける。

やはり官長は普段どうりに、机に腰掛けていた。

「夜間の訪問をお許しく下さい」

眉を立ててレインは言う。

静かに、神託を下すように男は言う。

「用件を聞こうか」

「フレイアのことです」

間髪入れずに答えたのに対し、壮年の炯眼がずっと細められた。

この表情は、笑みだろうか。

「貴方なら、本当のことをご存知なのでは？」

「君が知っている史実が、事実だよ」

「貴方が知っている事実と、自分が知っているものに相違点があるのでしょうか？」

少女は気圧されないように、一息吐き、真正面を見据える。

「…彼女は本当に同胞殺しをしたのか」

「君の言っている意味が分からないな」

「いいえ、貴方が一番分かっているはずです」
声を荒げないように、あくまで冷静に続ける。

「貴方は軍警察に配下の情報を売ったんだ」

「どうしてそう思うんだい？」

レインは記憶を反芻しながら、答える。

「暫く前の任務で、クロードという『レヴァ』の称号を冠する者と遭遇しました。彼は話していましたよ。フレイアは元身内から告発されたと、自分たちはそれに則り行動していると」

「信憑性に欠けるな」

「どうしても言っておきたい。：事実は変わらない」

官長の目がより一層細められるが、構わない。

一息。

「理由なんて分からない。彼女を排したかったのか、彼女が他の罪を犯したのか：でも自分は間接的に見聞きしたことより、実際に彼女と会って、話して感じたことを信用します。それに値するものと思えましたから」

熱弁を奮っているわけではないが、思わず早口になる。

静けさが広いだけの室内を満たす。その静寂を破ったのは、乾いた笑い声。

「君は思ったよりも賢明だな。侮っていた私が誤っていたようだ」
——……やっぱり。

彼の雰囲気は、事態を完全に肯定している。

一縷の動揺もなく。一縷の罪悪もなく。

「お褒めに預かりたくて、わざわざ伺ったではありません。：貴方は、フレイアを貶めた」

机上に頬杖をついて、彼は頷く。

「そう。けれど彼女は規定違反を犯した。彼女は単一で相手するには厄介だ。口封じにだって応じない強かさを持ち合わせている。そんな愚直な危険因子は、早めに取り除いて起きたかったのですね。」

なのでわざわざ軍警察に追わせたんだよ」

「そのわざわざ、が理解できないのです。何故軍に……」

言った直後、質問の意味のなさに気がついた。

——地下の深部と、軍警察の上部は、密接に繋がっている……か。

あながち戯言でもなさそうだ。

内心で舌打ちをした。

官長はこちらの思考を知ってか知らずか、満足そうに開口する。

「簡単に言うと、見せしめかな。それに、君への忠告へもなっただろう？」

——忠告。

思い当たる節は幾らでも思いついた。

しかし、また問いにぶつかる。

「何故、自分なんですか。彼女と何の関係があるんです、自分は何か規定違反を犯しましたか？」

声が無意識のうちに荒ぶる。

答えは簡潔。

「君は彼女と同じ規定違反を犯した」

「……フレイアと、同じ……？」

「そう」

レインは益々わけが分からなくなる。

しかし次の一言で問い掛けは氷解した。

「組織長命令に背いただろう？」

——……組織長命令。即ち、官長の命令。

まさかと思った事案は、けれどそれ以外に該当するものはない。

「自分が……傭兵になることを、断ったから……？」

対面する彼の目が、肯定の色を佩びた。

——ふざけてる。

彼女は金で人を殺す人間になることを否定して、軍警察に捕らえられて、今も、きつと苦痛を……

レインは目の前の人物を睨みつける。

「自分も、そうして始末するつもりだったんですか？」

含み笑いは尾を引き、告げる。

「このことに気がつけない、そんな人間なら二の舞になったって、仕様がなない」

「……っ！」

あたかもどこかで聞いたことのある台詞。

——何だ、それ。

奥歯を噛締め目の前の人物を睨みつけ、言い放つ。

「今日限りで、即務第二機関を辞めさせてもらいます」

広い室内に、音声が反響する。

「いいのかい……？ 君の養父の知らせも届かなくなってしまうがね」

「貴方には関係のないことだ」

彼女は言葉と共に、踵を返した。

靴音が木霊する。

絹糸のような黒髪を靡かせる背に、続く言葉が投げかけられる。

「この街で、第二機関を敵に回すことがどういふことか分かっているのか？」

それは、子供に囁んで言い含めるような告げ口。

レインは振り返らずに言い放つ。

「——貴方の人形にいるよりは、マシだ」

最後に響いたのは、扉を乱暴に閉める音だけだった。

48 執行

消音機を締めながら、青年は息が白く染まるのを感じた。

黒髪に蒼い瞳。端整な顔立ちは半ば前髪に隠されている。立つ姿さえ蒼然としたリートだ。

春先とはいえまだ寒い。野外の高所なら尚更だろう。

金属の擦り切れる音がして、ふと金具の接続部に油を挿すのを忘れていたのを思い出す。

帰ってから整備しようと胸に留め、銃を横倒しにした。

腹を抱えるようにして座り込んで肩から銃機を倒し、何度か銃の位置を微調節して、一番しっくりとくる位置に当てがう。

——俗にいう射撃態勢の座位。

そのまま静かに呼吸を落ち着けた。

風が強い。

元から北風の強い日だったが、更にリートが今居る場所は5階建てビルの屋上で、更に風力は増していた。

狙撃主の最大の敵は、敵兵の前に強風という説もある。

狙撃という言葉は、少数人、少数物を狙い定めて撃つという意味だ。掃射とはわけが違う。

強風により銃の軌道は大幅にずれ、銃の性能が上がった現在でも欠点は変わらない。

彼は照準を合わせて、ドットサイトを覗いた。

白い十印がぼやけて見えるが、視界は片目だけでも十分に鮮明だった。

——いけるか……？

安全装置を外す。

暫くしてビルの向かい側のマンションの入り口から、一人の男が

出て来た。

大きなスーツケースを丁重に扱い、抱え込むようにしている。

——…あいつか。

リートは前髪をそよぐ風の流れに注意しながら、照準機を動く対象物に合わせていく。

男は、建物の裏手に行こうとしている様だった。

建物の壁に阻まれ、こちらから見えない裏通りに入られれば、リートの狙撃はその時点で失敗だ。

時に狙撃は、時間との勝負でもある。

しかし、風は一向に止む気配は無い。

風がある以上、下手に撃てば失敗する確率も高いというのに。けれどリートは逆境の中でも、冷静にトリガーに指を掛ける。

——…もう、時間切れだ。

風を受けたままトリガーを引き、銃弾が吐き出された。

反動が彼の背を微動させる。

即座に銃を脇に倒し、リートは身を屈めて様子を窺った。

——足か……

狙撃は、成功したようだった。

僅かに、風の向きに合わせて銃の照準をずらしたのが幸いしたらしい。

リートが涼しい顔でやってのけたこの技は、歴戦の狙撃のプロでも舌を巻くものだ。

経験、勘、身体能力…心技体が揃わなければこんなことは不可能だ。

それを造作なくやり遂げたという事実が、彼の技量の高さを誇っている。

撃たれた男の悲痛な叫びにつられ、通行人や、近隣にいた者たちが集まってくる気配がした。

男が居るのは街頭だ。軍警察が駆けつけるのも時間の問題だろう。彼は騒がしくなる目下の光景を尻目に、安全装置やサイレンサー

の処理を淀みなく済ませ、銃を楽器のケースにしか見えないような箱に仕舞い込む。

腰を浮かせて、踵を返したとき――人の気配を感じた。

案の定、その人物はリートが振り向いた先に立っていた。

――こちらに、銃口を向けて。

「動かないで下さい。撃ちます」

「……………」

リートは状況を掴む。

自分に銃を向けているのは金髪の小柄な少年。

けれど容姿で侮るのは愚かだ。

銃の構え方は悪くなく寧ろ慣れているのだろうか、様に成っていた。

少年は僅かに高い声音で告げた。

「リート・セディシア……………いいえ。No. 54…着いて来てもらいます」

「…軍の指示か？ ユウ・アインツィベオン」

少年は顔を曇らせる。

「元より、こちらが僕の本来の仕事です。……………さあ、共に来てください」

普段の第二機関の事務をしているときとは比べ物にならない炯眼が、リートを見据えた。

「俺に今更、何の利用価値がある？」

「貴方を欲しがっている人はたくさんいます。ハートレスの最後の生き残り、逆賊。どの道優秀な人材であり、処罰を受けるべき身であり、研究対象だ」

リートは表情を変えず、吐息を洩らす。

「…軍は単なる物好きの集団に成り下がったのか？ 俺はこの眼だ。身体能力も、視力以外は他のハートレスと比べて低い方だった」
「けれど、身体能力が逸脱していることは事実です」

ユウは引く素振りさえ見せない。それどころか、先程より強靱な

意志の宿る眼で、青年を真っ直ぐに見つめる。

「軍には貴方が必要です」

「俺には軍はもう要らない」

相反する言葉が皮切りとなった。

リートはベルトに括りつけてあったホルスターへと手を伸ばし、コンマの間に抜き打ちを放つ。

ユウは気配を察知し、横へと回避。小型ライフルをリートに向けた状態で静止した。

「…貴方は自分の価値を見誤っている。こんなにも卓越した能力を兼ね備えているのに」

「お前こそ、薬で身体を弄ってそこまでして尽くして、一体どうなるっていうんだ？」

「貴方は所詮、人でなしだ」

「…軍の狗が」

青年の言葉に、ユウの顔に憎悪が宿った。

隠そうともしない明らかな殺意が滲む。

「…こちらは『ハートレス』を持ち帰れと伝令されたのみです…腕や足が一、二本無くなるうが…ハートレスはハートレスに違いない。死ぬまでね」

「そうだな。生憎、俺のことを何度もハートレス呼ばわりする奴に、手加減するつもりもない」

リートが、見たものを凍りつかせる冷ややかな眼でユウを見下ろした。

——銃声は、鳴り響く。

沈黙。

静謐。

空白。

交錯する意志の視線。

響いたのは、やや高い声音。

地に落ちる、赤い斑点。水滴。

「貴方が、廃棄された理由が、それ、ですか……？」

「……ああ。あの地下にいた時に発病して、治療もなしに欠陥品扱いされてそれっきりだ」

リートは前髪を倦怠げに掻き上げる。

現れたのは黒蒼と白の瞳だった。

いつか、レインが垣間見たそれと同じ。

少年は呼吸も荒く、声を絞り出す。

「……白内障？ ……薬を、使えば進行を遅らせ、ることもできた、でしょうに」

対するリートはどこまでも平坦な声音だった。

「お前じゃないんだ。治療なんかしてまで俺に拘らなくともこっちは代えがきく。人形を繕うくらいなら、新しい人形を買いだろ。奴等はどこまでも即物的だったからな」

「………っ」

「掠っただけだろう？ 立てよ」

少年……ユウは膝を屈していた。

膝を撃たれたのか、服の生地に血液が滲んでいく。

彼の息は上がる。その様は息をしているだけで苦しそうだっただ。

膝を銃弾が掠っただけでは、こうはならない。

「成る程。それも副作用か」

リートはユウに一步、歩み寄る。同時に、無感情な言葉を紡ぐ。

「薬の禁断症状を止めるために呑んだの薬の副作用で成長も止まって、もがき苦しむことになるなんて、本末転倒だとは思わないのか」

「……いいえ……僕は選びました……」

「選んだ？ お前は選ばざるをえなかったただけだ。追い詰められた人間の選択は、時に本心を反映するが、お前の場合選択肢なんてもの端からなかったんだよ」

続けて、言い放つ。

「お前は愚かだよ。俺がそう思うほどにね」

「……知って、いますよ…そんなこと、ぐらい…」

リートは、少年の目の前に立った。

「ずっと、クロードにも、アウストラルにも、も言われ続けてきました、から……」

少年の顔には血の気が無い。

只でさえ線の細い顔つきが、更にやつれている。

隻眼の青年は無言で彼を見下ろす。

ユウは視界を覆うように両手で自身の顔を包みこみ、苦しそうな息の根が指の隙間から洩れた。

「……殺してください」

軍の少年は力なく言い

「帰れ、ない…僕は、貴方を、連れていけないと、い、けない…それが、出来ない…意味が、ないんだ……」

リートは眉間に皺を寄せた。

それはここまでできて初めて見せる、感情を有した表情だった。嫌悪の滲む口調で一言告げる。

「――御免だな」

「……どう、して」

「今のお前は殺す価値もない。死にたいなら、自滅だろうが自殺だろうが勝手にしろ」

リートは辛辣に言って、ホルスターにハンドガンを収めた。

ユウの横を通り過ぎ、歩き去る。

――その背中を、一言が呼び止めた。

「そう…、ですか」

あまりにも独白じみた、小さな声。

「……殺さないのなら、僕はどんな手を使っても貴方を連れて行きますよ？」

しかしぞっとする声だった。地の底から這い上がってきた冷気のような声。

背筋を凍らす。

「だって、僕の存在意義、…それだけなんですから」
無邪気に呟く声に、リートは振り返ってしまった。
すぐ背後にはナイフを構えたユウがいた。

無機質な目。まるで硝子玉。――感情のない、瞳。
どこかで見覚えがあった。

リートは思い出す前に咄嗟に、身を捻ろうとしたが――間に合わない。

ずぶりと、

刃が身体を咀嚼する音がした。

49 陰交

「――ユウ。一緒に死にましようか」
哀しげに言った母の顔を、僕はまだ忘れることができない。

静謐が降りる、明るい部屋がある。

広い空間なのだが、幾つかベッドが並んでいて部屋の大きさはその所為で幾分か収縮して見える。

ベッドの内の一つには、少年が横たわっていた。

少年は薄い黄金色の瞳を開け

「ここ……」

気だるげにゆっくりと首を回す。

すぐ隣には、彼を覗き込んでいる少女の姿があった。

「あ………」

少女の小ぶりの唇が僅かに揺らぐ。

「クライン……？」

「ゆ、ユウ君、もう大丈夫……ですか？」

ユウは寝台に横たわったまま首を傾げた。

そのまま何回か瞬きを繰り返し、現実には浸透していく。

――ああ、そうか……

「僕、しくじったんだね」

無理を言ってハートレスを捕まえると言いだしたのは自分自身だ。
だが、リートはユウの意趣返しにも構わず逃げおおせた。

あの怪我で逃げるなんて、およそ尋常な身体ではない。

――……いや、根性も、か。

ユウは苦い笑いを溢す。

少女は少年の様子を見、一息を吐いた。

「もう…心配したんですから…」

「うん。ごめんね…」

自然な所作で少女の横髪に指を添える。彼女は擦ったいのか身を揺らし、同じ動きで半顔を覆うフードも揺れた。

くすりとユウはまた笑う。

「もう、無理すぎなんです。…もうちょっと自分の身体を大事にしようとか…全くもう」

「クライン、もうを連呼しないでよ」

傍目からならば、二人は幼く仲睦まじい兄妹に見えるのだろう。

——そうだったら、どんなに良いか。

ユウは上体を起こそうとするが、途端に背中に奔る痛みを感じた。

「っ……、っ」

脊髄が軋む、電流を流されたような衝撃的な痛み。

頭も痛い。回路が焼き切れる鮮明な痛覚。…何度も経験した。

「ユウ君…!？」

「大丈夫、…大丈夫だから、ね…?」

椅子を蹴倒し立ち上がったクラインを宥めて、長い息を吐き出した。

確認の意味を込めて指を掌握していく。先程までは気が付かなかったが力を入れると、びりびりと痺れる痛みが肘まで蔓延している。

足は銃弾が掠ったが、もう傷は治っている筈だ。

——…なのに、動かせない。

たったそれだけの事象に、言い知れぬ情けなさを感じた。

——…駄目だなあ、ほんとに。

誰に当てるでもない申し訳なさが、胸中を績めた。

——もつと、強く、なれないのかな…

思うのは彼が物心がついた時から抱いている、唯一つの願いだった。

強く。強かに。

自分が強いと思う人物の隣に立てるように。

——ユウ、一緒に死にましようか。

——まだだ。まだなんだ。

まだ僕はそちらへは行けないんだ。

クラインが言い辛そうに切り出す。

「ユウ君……もう、止めませんか」

かぼそい言葉が発せられた途端に、周囲の空気が張り詰めた。

ユウは感情のない面で少女を見つめる。

つい先程までとは打って変わった氷の面。氷点下の視線に喩えようのないプレッシャーを覚えて、少女は即座に否定の言葉を発した。

「あ……ごめんなさいっ！……ただ……う……」

ユウは暫時、はっとなる。

「……あ、ごめん……大丈夫だから、本当に。クラインが心配性なだけだよ？」

「……そう、です、か……？」

彼女を怖がらせてしまったようだ。

ユウは彼女の頭へと手を伸ばした。

フード越しに触れてそっと撫でてやる。先程まで恐縮していたクラインは、優しい動作に少しずつ緊張を解いていった。

「……………」

ユウは少しきこちなく微笑んで見せた。

少女も、唯一見える口元だけで笑みを象る。

「私、もう行きますね」

「うん。またおいで」

彼女はベッド沿いの椅子から腰を浮かした。

離れていく。

丁寧に静かな扉の開閉の音が残されて、室内には一時的に少年一

人となった。

しかし、ほんの束の間。

靴音と、またもや扉の開閉音が聞こえた。

ユウは胡乱な瞳で戸口を見やる。

「――お疲れ様」

部屋に響いた声の主は、赤髪の青年。

ユウと同じ軍の所属であり、同じ部隊であり、同じ年齢であったクロードだった。

しかし、見目には彼らの間に共通点の一つもない。
空気に軋轢が生じた。

「…何の用？」

「別に。お見舞いっていう用だよ」

青年はベットの傍らへと歩み寄った。
顎に手を当て思案する。

「思ったより、酷くなさそうだけど…」

「掠っただけだ。もう完治してるだろうし」

緩慢に頷いて、クロードは顔を上げる。

口元を酷薄に歪め

「…じゃあ、お前は何でこんな所で寝てるんだ？」

青年の瞳が細められた。

しかし、表情とは対照的な口調には怒気が孕まれている。

「よっぽど怪我じゃなければ、止めても仕事を優先するお前が？
安静にしとけなんて聞き入れもしないお前が、どうしてここです
っとしてるんだ？」

――それをお前が訊くな。

わざとらしい。彼はわざわざユウに唯一つの回答を口にさせる為
に告げているのだ。

ユウにとってのクロードは狡猾で、嘔吐きで、腹の底が知れない
道化者だ。

舌打ちしたくなったのを吞み込む。

「……………」

「お前は何にも見えてないよな」

クロードは言って、隣の寝台に腰掛けた。シーツが皺になることなどお構いなしだ。

「……どうも、こいつも……」

少年は苦々しい顔で呟く。

——誰も彼も、何で僕の核心を突いてくるんだ。

詰まらない、今までに何重にも自覚したことを。

「土足で、ずかずか入ってくるんだもんなあ……」

ユウは軋む背中を無視して無理に上体を起こす。

目の前の男に上から目線で話されると、腹が立つのだ。

「——ああ、そうさ。お前の言う通りだよクロード。僕の身体はもう壊れてる。壊れてたのを無視して今迄きたから、もう使い物にならないんだよっ！ 寿命を縮めたのは自分の意志だ。けど、こんな早くくたばるなんて……なんてお笑い種だ……やってられるかっ……！」

クロードは無言で聞いていた。

言う事を言った後も。

——何か言えよ。何だよ……普段のお前らしくない。

軽薄に笑えばいい。笑い飛ばせば気の迷いだと言い切れる。

——なのに……

気持ち悪い沈黙だ。息苦しい。

とつとつ、いつもみたいに皮肉でも言えればいいのに。

沈黙に耐え切れずに先に口火を切ったのは、ユウの方だった。

「……これじゃ使い物にならない。なれない……僕が、ただの役立たずに戻ってしまう……もう」

「お前、少し黙れ」

——怒っているかな、と思った。

もしかしたら掴み合いの喧嘩になるだろうか、とも。

けれど、クロードの声は怒っていなかった。

悲しんでも、蔑んでも、喜んでも、楽しんでも、哀れんでもいな

い。

——じゃあ、何の感情だ。

顔を上げるとクロードと目が合った。

何を言うでもなく、こちらを見ているだけだ。

——こいつは…

何でも見透かしてる、知ってるっていう眼をする……

——むかつく。

「お前、暫く薬止めろ」

あつさりと開口したクロードは、一番に言い放った。

「え……」

「またすがったら、許さない」

クロードは言い残して、場を後にした。

靴音が遠ざかる。

——今、あいつは何て言った…？

「………許さない、だって……？」

初めて言われた。

生まれてこの方、そんなこと言う奴はいなかった。

恨みなら幾らでも買ってる筈なのに、変だ。

客観的に先程の言葉を見聞きすることならあったけれど、クロー

ドは誰でもない自分を見て言った。

ユウ・アインツィベオンという個人に向けて伝えた。

乾いた笑いが口から洩れる。

「は、………」

——許さない、なんて……

重い。

重いよ。

弱い僕には重過ぎる。

これが他人事なら、どんなに良かっただろうか。

49 陽爻

狭く暗い路地裏に、呼吸音が木霊する。

「――はあ……」

苦しげな息の主は壁に肩をつけ滑り崩れる。

苦渋の入り混じる手つきで腹部を押さえつけた。

脇腹だけ異様に体温が高く、衣類が濡れている。暗くてよく分からないが、今も染みを広げている赤い液体……間違いなく血だった。

「っ……く……」

齒軋りをする。

天を仰いで呼吸を整えながら、額に浮かぶ汗を拭った。

――まさか、ほんとにやるとは……な……

リートはある種の感嘆を含んだ感情を抱く。ユウは捨て身の行動として、自らナイフを抱え懷に突き込んできた。

一体、何が彼をそこまでさせるのか。

彼の軍への忠誠心は狂信的なところがある。第二機関で働いていた時には、微塵も見せなかった暗い部分が。

どの道あれ程に身体も心も蝕まれていれば、どちらかが先に壊れるだろうが。

ユウ自身もきつと、事実気づいているに違いない。あるいは気づきたくなくて目を逸らしているかもしれないが。

「……存在意義、か……」

そんなものに、何の価値があるのだろうか。

そんなもの、見つけている人間の方が少ないのではないか。

彼は自分の存在意義を、人形として使われ身を擦り減らすことだと思い込んでいる。

――かつての俺と、少し似てるか……

どこまでも、盲目なところが。

硝子球みたいな無機質な瞳。感情を排した表情。

彼はきつと何も視えていない。

盲目で、無感情で、無感動で、無思考でいた方が楽だから、諦めた人間は大きな流れに身を任せてしまう。

つまりは、人間でいることを放棄してしまう。

問いかけをしなくなる。

生きることは問うて抗うことだ。

問い続けなければいけない。抗い続けなければいけない。

人それぞれに与えられた命題。そして自ら作り出した問題に。

抗い苦しみのうち回る辛さを知らなければ、人間はいつまでも半人前のままだ。

そして、半ばで問いかけを放棄して抗わない人形になる者がいる。人間でいられなかった弱い者の末路だ。

きつとそうなる人間が悪い。

リートは地面から立ち上がり、壁伝いに緩慢に歩み始める。

——…：…：…だけど。人為的にそんな傀儡を作り出すふざけた研究が、まだ続いているなら……

——俺が全て壊してやる。

酷薄な笑みを口端に浮かべ、リートは支えの手を離し真っ直ぐに歩いて行った。

先程までの弱々しさは、微塵も感じられない足取りで。

50 隠者

騒がしい繁華街。

食べ物や煙の匂いが染み着いた混沌とした空間。通路は整備さえ行われていない。

やや外れには、下層の住民の家々が連なっている。

家々や商店、露店の類とは少し離れた位置には地下街へと続く道があり、その場には現在二つの影があった。

妙齡の女と、壮年の男。

女の方は満面の笑みで毒を吐いた。

「あらあ？　こんなところにゴミ屑が…どうしてかしら」

「…燕李清。君って結構辛辣だよね」

「清掃員さん？　ここにゴミが落ちてますのよー？」

「あははははこのアマ、殺すよ？」

女の表情が締まる。

氷の微少を浮かべ、彼女——李清は言った。

向かい合う男に向け

「何の用？　カイス・フェーダクト」

「名前覚えててくれたんだ。光栄の極みだね」

「——はっ、阿呆らしい」

吐き捨てる李清に、カイスは赤黒い髪を揺らした。

やや長い髪の間からはくすんだ色合いの瞳が覗く。

「…で、レインを拉致して売って手籠めにした後は熟女ですか。

そうですか死ね」

きつい彼女の言い回しに、男は笑みを滴らせ返答する。

「失礼だな。手籠めになんかしてないよ。…手籠めに『しかけた』だけじゃないか」

「――極刑決定」

李清はロングスカートのポケットから折り畳みナイフを取り出した。

淀みない一振りです刃を展開させたそれを、眼前の男に向ける。

「女を喰い物にする野郎は蛆虫にでも生まれ変われ」

「つくづくぼくに対して態度変わり過ぎだよね…君って」

「臨機応変と言いなさい」

結った髪を背に払い、李清は炯眼を向ける。

残忍さを凝縮させた瞳は、見た者の大半を威圧する。

面倒見があり明るい李清の一面しか見ていないレインは、彼女の裏の顔を見たことがあるだろうか。

彼女の紅の口唇が開かれる。

「…それにね。私はレインみたいに決めた人間以外を殺さない…なんてこともないし、リートみたいに一瞬で楽にしてあげることも出来ないの」

「えー、ぼく、死ぬときは安楽死がいいなー」

「知ったこっちゃないわね」

告げるが早いか、李清は腕を振った。

ナイフは一閃。

煌めく銀刃は残光のみを残した。

「――ち」

舌打ちが落ちる。

カイスは放たれた斬撃を一瞬の間に交わしていた。

そして今、李清のナイフの刃を咬んでいるのは、白銀の装甲が美しい自動拳銃だ。

ぎりぎりとナイフは押し戻される。

「李清…ぼくを殺したくて堪らないような君の目の前に、ぼくがわざわざ何の理由もなく現れると思うかい？」

「思わないわね。だからこそ…性質が悪いっ！」

語尾を張り上げ、短剣と銃機の鬨ぎ合いは放たれる。

反動で二人の間には空間が空いた。

改めて李清はカイスの喉元にナイフを突きつける。

「…昔からあんたはそうだった。カイス、今度は一体誰を玩具にするつもり？」

「玩具？ これはまた面白い比喻だね。でも厳密には違う。ぼくは好きなものを愛でているだけだよ」

「苦痛に歪む顔を見ることが愛でる？ あんたの嗜好なんて端から興味もないけど…レインを巻き込まないで！」

男は心底不思議そうな顔をした。

「巻き込む？ アレインが勝手にしたことだろ？ 自分の身を担保に出したのだって本人だし」

女は苦渋の思いを呑み込み話す。

「あんたみたいなクズでも列記とした情報屋だからよ。あの子はきちんと利害の一致を選んだ」

「そう。まあ、賢明な判断だよ」

大人しく引き下がり、カイスは銃を懷に仕舞った。

大仰に肩を竦めて切り返す。

「――ところで李清。知ってる？ 第二機関と軍の両方の狗だった男が負傷したようだよ」

第二機関と軍、水と油に等しい対の存在の双方に縁のある人物…唯一人しか思い当たらない。

「…：もしかして、ユウが…？」

「ああ、知ってたか。彼、パーソンレスだよ。どうやらとある人物関連の任務が原因らしいんだけど…」

李清は鋭く問うた。

「前座はいいわ。それは誰？」

「君のよく知ってる奴だよ。リート・セディシア・ワークエイド…あのハートレスだ」

「…：リートが？」

李清は違和感を禁じ得ない。

彼は進んで戦闘に身を投じる者でもなければ、任務以外での殺傷を極度に嫌う。

その彼が相手を負傷させたのであれば……

「ユウ…ハートレス絡みで…」

「おそらくね。ぼくも詳しくは知らないけど…彼、もう帰ってこないかもよ」

端的なカイスの言葉は、けれど的を射ていた。

——つまり。

「殺されるかもしれない…ってこと？」

「惜しいな。ハートレスが簡単に殺されるわけないだろう？ 特務班の二人が出てくれば別だけど。…ぼくが思うのはもう一つの可能性だよ」

カイスは嬉々として語った。

李清には不吉の予兆でしかない。

そうでなければいいと願ったが——

しかし答えは告げられた。

「ハートレスは人を殺し過ぎて、帰ってこれないかもね」

51 道化

軍警察の五区支部。

そこはかつては、都警察の五区管轄として成り立っていた場所。無骨なコンクリートに飾り気のない建物は、初春の日差しの中でもくすんでいる。

十階建ての建物の中に幾つかの管轄科が入っており、それぞれで連絡を取り合い時には協力し、日頃から区の安全確保に努めている。そんな組織の一室に、警部所で働く者にとって見慣れない顔が居る。

「久しぶりだな、クロード」

「うん。久しぶりだね。『警部さん』」

意味有り気な視線を交^かわし、二人の男は席についた。

普段は、被疑者の事情聴取などに使われる部屋だ。

窓には格子が嵌^はまっており、机は無機質な鉄製。床は固いコンクリート打ちっぱなし。暖房器具はなく、冬場はさぞかし冷えるであろうことが感じられる。

露骨な環境に意義を唱えたのは、二方の中でも若い方の男だ。

「にしたって、この待遇は酷くないですか？ おれ、まだ何にも悪いことしてないんですけど」

「まだってことは、これからやるってことだろうが。ガキが何言ってるんだ。行き成り押しかけて来^きて来^きてって待遇もねえよ」

粗暴に応じるのは警官の服装をした、白髪雑じりの中年の男だ。やや肥満気味ではあるものの、彼の出で立ちからは言い知れない貫禄が滲み出ている。

男と相對する青年は、鮮やかな赤髪を揺らして言う。

「そもそも、事前に連絡し^しいてもどの道こんな調子だし……」

「もう慣れたもんだろ。ま、気にすんなって」

青年——クロードはしようがないと言う様に眉根を下げた。

「確かに無理言ってるのはこっちですけど。取り敢えず本題に入らせてもらうよ」

クロードの台詞に、中年の警部の眼光が鋭くなる。

赤髪の青年は続けて話した。

「件くだんの富裕層の屋敷地区での事件、覚えてます？」

「覚えてるも何も、あのよく分からんやつだろ？ 捜査しようとしたら突然接触禁止令が出て……ったく、何様だっただよ。ありゃあ流石にカチンときたね」

「そうそう。それ」

クロードは、机とセットで置いてある椅子に腰掛けた。

「それが今更、何だっただよ？ お前ら軍の方がそのことについてはよく知ってるんじゃないのかよ？」

男の言及に、青年は困ったように赤髪を掻く。

「……いやあ、それが……おれもよく分からないんです。事後、すぐに上層部が差し押さえて。おれたちには、事の次第さえ伝わってないもんで。そもそも、おれたちが出張る程の事件じゃなかったって言えばそれでお終いなんですけど。そうでなくとも、おれ以外の、……軍出身の奴は知ってるのかも知れないなあ……」

抑揚を含んだ言葉に、警部の男は懷から煙草を取り出して舌打ちをする。

「ふん、仲間外れか、いいザマだなおい」

「……うーん……それについてはノーコメント」

肩を竦めてクロードは応じた。

「……ったくよお、お前も俺も、未だに軍との確執を取り払えてねえ。厄介なもんだな。考え方の違いは、どうしようもならねえよ」

「間違いないですね。おれも今は大分、軍人らしくなったとは思っただけど……」

頬杖を着きながら話し相手を見やる青年に、男は一蹴する。

「ははっ、笑わせるなよ。クロード。お前は警学に居た時から変わ

「つちやねえ。何考えてるか分からねえふざけたクソガキだよ」

「…元教官の警部さんに言われたら詮無いような…そんなにおれって何考えてるか分からないですかねー？ この前もそんなこと言われた。あれ、結構シヨックだったんですよ」

男の退屈そうな顔が、揶揄する笑みへと移ろった。

「ほう。女にか？ そいつぁいいや」

「…いや、どうでしょう」

青年は苦笑混じりに言う。続けて

「まあ…性格歪んでるのは承知の上というか。けど今更、純真な頃に戻るわけでもないし。おれは今のここがお気に入りなんで」

「自分が一番可愛いってか？ そりゃあ誰も同じだ」

火のついた煙草を口に咥えて、男は紫煙を吐き出す。煙は真っ直ぐに天井へと線を引き伸びていった。

「…さあて、話を戻そうか。あの屋敷の件がどうしたって？」

「ちょっと気になることがあって。唯の危惧に終ればいいんですけど…」

「お前の嫌な予感はずからよく当たる。精々（せいぜい）神頼みしてな」

「残念でした。おれが崇拝する神はいないですよー」

「…そうだったな」

クロードはじつと男を見やる。

薄緑の瞳には後悔とも惜別とも取れない色が浮かび、すぐに消え去った。

すぐに取り繕って、口を開く。

「ともかく。警部の方でも詳しいことは分からないんだ？」

「ああ…悪いな。力に成れなくて」

「いいや。そういうのは無しで。ともかく有り難うございました」

クロードは席を立ち、暗い部屋の出口へと歩を進めた。

その足が、ぴたりと止まる。

「…そうそう、警部さん」

「何だ？」

一瞬、両者の視線が交錯した。

「呑み過ぎちゃ駄目だよ。もういい年なんだから」

「馬鹿野郎」

「ふふ、……じゃあね」

扉の閉まる音がした。

部屋に一人残された男は、煙草をコンクリートの床に落とし、直ぐに靴裏で揉消した。

口内の煙たさを吐き出すように、言う。

「俺にまで嘘が通用すると思うなよ。クロード」

52 対象

春先にしては、暖かいといえるであろう朝。

部屋の中に存在するのは、二つの気配があった。

「っうー、ぐすっ……ひどいの…」

顔を両手で包み込み、泣いている（ふりをしている）のはポニーテールの少女だ。

「ごめんって…、今度から気をつけるから…」

「そーゆう問題じゃないのっ！ 何にも言わないで二週間も！？ バレないと思っただけだ！？」 リートさんもだけど、おねいちゃんもおねいちゃんだよっ！」

少女が憤慨しているのは、つい先日の子ネルバからの依頼の件だ。

レインとしては余計な心配を掛けたくなかったただけなのだが、無論ユカリに娼館の警護だと言えはるはずもなく、依頼で家を空けた理由をユカリには黙っていた。しかし、口止めたはずの李清は、有ること無いことユカリに吹き込んだようで、二週間経った今になって糾弾されている。

お陰で、朝起きたら腹の上に妹が乗っているという、珍妙な光景に出くわす羽目になった。

レインを押し倒しているときに見える少女は、今もなお腹上で怒る。

彼女の必死さに、僅かに申し訳ない気持ちが出た。

——しかしながら。

「…そろそろ降りて欲しいんだけど。…重たい…」

「うっわ、おねいちゃん乙女に向かって重たいって言った酷いイっ！！！」

レインは溜息を洩らし、呆れた風に言う。

「本末転倒だよ。いい加減泣きまねは止めろよな、終わったこと

はしようがないだろう」

「そーゆー問題じゃーないって……さっきからずっとずつと！」

きつく押し倒したレインを見、ユカリは拳を握る。

——だけど、どうあってもしょうがないことには変わらない。

「…そうだ。ユカリ、久しぶりに二人でどこか出かけようか？」

「へ…？ ユ、ユカリちゃんはそんな釣りに引っかからないもん！」

一瞬怯んだ少女はポニーテイルを揺らして顔を背ける。

いかにも精一杯の反抗といったところだ。

困ったような苦笑を混ぜ、レインは美しい面に笑みを表した。

「釣りなんかじゃないさ。…一日付き合うよ。お前の行きたい所へ」

「え？ 本当…？ お、おねいちゃんとかで、でデート……どうしよう、どうしよう…ユカリ、一張羅のお洋服着なくっちゃっ！」

レインは頭の片隅でデジャヴを感じたが、今は隅に追いやっておく。

「何でもいいさ。好きにしてい」

「うわっ！？ その台詞この体勢で言う？ ちょっと無用心過ぎよおねえちゃんっ！ ユカリったら背徳感モロに感じちゃう！」

「はいはい、取り敢えず降りような……」

「駄目ー、そんな投げやりじゃ！ 折角だもん。おねいちゃんもちゃんと黒じゃない服着るの。あと女の子らしい服だと更に良し」

「そんなもんは持ってない。…黒じゃない服ならあるけど…」

「ええー…もうこの際、暗黒色じゃなければなんでもいいや」唇を突き出して不平を垂れるが、ユカリはすぐに開き直った。元から無理な提題だと諦めていたのだろう。

レインも押し掛かる少女の体を押しのけて上体を起こす。

「…じゃあ早めに準備、いいな？」

「いえっさー！」

びしっと敬礼をして、ユカリは駆け足で自室へと戻っていった。
——テンション高いなあ……

自分の義妹ながらに、気分の移ろいが早いものだと感心してしま
う。

自室に残されたレインは後ろを見やる。

背後の窓に映るのは、見慣れた陰鬱な顔。

——疲れた『彼女』の顔……。

重い溜息を吐いた。

「李清は夕方まで帰ってこないか……仕度しなきゃな……」
誰にでもなく呟いて、部屋を後にした。

ユカリは明るい色合いのワンピースに、ポニーテールはいつも
通りというスタイルで現れた。

彼女が跳ねる度に服の裾がひらひらと舞う。

年相応の、少女らしい恰好だ。

「あ、黒くなーい！ 偉いおねいちゃん！」

「まあ、あれほど言われればな。繕うのに苦労したけど」

レインはというと、以前のように全身黒づくめというわけではな
い。つばの長い帽子以外、モノトーンでシンプルな格好に違いは無
いのだが、彼女ほどの美貌の持ち主が着ると、男装の麗人に見える
始末だ。

若干身長差のあるユカリが、背伸びをして帽子やらに触れようと
するのをやんわりとかわす。

「ほら、遊んでないで……何処行くか決まったか？」

「うんっ！ 取り敢えず第3区でウィンドウショッピングするの
！」

花が咲くようにユカリは笑い、レインの手を引いて玄関から飛び
出していった。

第三区は主に商業が発展した地域だ。

レインや李清：ひいてはユカリの住まう第二区は住宅地が主なのだが、第三区は衣食住を揃える商店以外にも娯楽用の施設まで備わっている。商店街まである始末だ。

レイン自身にはあまり関係もなく、そもそも人目に触れることを嫌う彼女にしてみれば滅多に歩く機会のない街並みを、今は横手に少女を引き連れて歩いていた。

「見てみてー！ あれ、おねいちゃんに似合いそうなのっ！」

ユカリがショーウィンドウを指差して、声を上げる。

指された所を見ると、そこにはシルバーのアクセサリーの類が並んでいた。

「自分はあるまり装飾品系つけないんだけど。ああいうのはな、李清にやると喜ばれるぞ」

「えー、おねいちゃん似合うよ、絶対」

少女が街道の隅でブーイングするのを聞いていた通行人は、いぶかしむようにこちらを窺う。あながち『おねいちゃん』という単語に反応したのだろう。

ユカリとレインはあまりにも似ていない。

レインは通行人の視線の理由を知ってか知らずか、ユカリの額を指で弾き

「それに、この値段は尋常じゃない」

指差して指摘する。

そこには0の桁が連なる値札があった。

ユカリは眼を丸くする。

「ぼったくり……」

「次行くぞ。冷やかしに来たんじゃないんだからな」

「あいさー」

レインは帽子を目深に被り直し街道を歩む。

彼女は一色の絵具に落とされた異色が如く、周囲の人間とは違う異彩を放っていた。

その出で立ち、顔の造形の美麗さに気がついた者は意識せずとも

振り返って、暫く呆けたように眼でレインを追う。

本人はさして気にもせずに進んでいたが。

「むふふ……」

ユカリの口元が弧を描いた。

「何だよ、気持ち悪い」

「いやねー、おねいちゃんはホントに綺麗だなーと思って。……うん」

「それは褒め言葉か？」

「当ったり前。今日はユカリがおねいちゃんを独り占め♪ 私めは幸せ者で御座いますよ」

「…喜んでもらえたならいいさ」

困ったような笑みを浮かべ、レインは前を向く。

ユカリは義姉の腕にしがみつく様にして身体を寄せた。

レインがここまで密着しても怒らないことが、彼女にとっては特別なことに思える。

咎められないということは、今日は一日このまま恋人気分でいられるということだろうか。その喜びと幸せを噛締めながら、ユカリは鼻歌混じりに歩んでいた。

暫く二人は店を行ったり来ったりしていた。

ユカリに主導権を握らせて、彼女たちは洋服屋、書店、文具店、雑貨屋、小物屋……その他、行き着く所には気分で頻繁に出入りをした。

二人とも昼食は済ませてきたので飲食の心配は無かったが、日も傾きかけてきたところでお互いに歩きつかれて休憩ということになった。

人工湖畔の公園のベンチに腰掛けて、ユカリは紙袋の中の、小物や文具を手で遊び、胸を躍らせていた。小さいものばかりで、出費は驚くほど少量だ。

その事実が彼女がレインに気を使っているのかもしれない、とい

う可能性も危惧させたが。

楽しそうに鼻歌を歌う義妹を尻目に、レインは問うた。

「ユカリ、学校はどう？」

「…ん？ どうって、楽しいよ。思ってたより全然いい環境。最初はね、苛められないかなーとか、皆の中で浮かないかなーって心配だったけど、親切にってもらってるの。勉強もね、頑張ってるよ」
彼女は想像以上に饒舌に話す。

「そうか。それは良かった」

義姉は慈愛を孕んだ顔で、少女を見た。

彼女は恥ずかしそうにして視線を逸らし、無理に話題を転換する。

「あ、あのねっ 学校でね、専攻があるんだけど、ユカリは文系を選択しようと思っててねー…」
相槌を打とうとしたレインはふと違和感を感じて、ベンチに座ったまま振り返った。

——即座に状況を判断する。

「ユカリ、いいか。絶対にここに居ろ。自分が返ってくるまでだ…」

「あっ……」

引き留めたユカリの手は空しく宙を切る。

レインはすぐに立ち上がりその場から離れた。

そして、先程の影が見えた場所へと走る。

レインはつい先程とはうって変わり、眼光は鋭く口元も締められている。

警戒している表情だった。

「…いるんだろ、隠れてないで出て来い」

木立ではつきりとした口調で問いただす。

明らかな確信を持って。

すると一本の樹の向こう側から、やはり知った顔が現れた。

「奇遇だね」

青年は眼を細めて言った。

「何が：お前の行動は不審過ぎるんだよ。なんで隠れて尾行してるんだ」

「信用無いんだなあ、おれって」

「今度は何の用？」

レインは不愉快さを面に出し、目の前の人物：クロードに言い放った。

彼は赤髪を髪に靡かせ、こちらを流して見る。

「あーあ、折角の再会なのに時候の挨拶も省くんだ。まあいいけどね。：それに、その問いかけは無意味だよ。レイン、君こそおれ達に用があつたんじゃないのか？」

青年の声色がいつしか真剣なものへと移っていった。

前回とは違う、彼は確固とした理由を従えて自分たちを尾行していた。

その事実だけを見るならば、この状況も安心できない。

「問いに問いで返すのか？　：じゃあ聞いてやる。軍警察。いや、軍。濡れ衣のフレイアを捕らえて、仮初の権威者の館を抑えた、その目的は何だ？　お前等は一体何を隠そうとしている？」

少女が言い放った後には静寂が落ちる。

応えの声は、意外ものだった。

——それは、笑声。

「あははっ：成程。そうだねレイン、期待通りだよ。あんたは確かに出会ったときから鋭い奴だった。上出来だよ」

「前座はいい。答えろ」

レインが冷たく言い放つと、場の空気が圧縮されたような重さを孕む。

彼女の黒瞳をクロードは真っ直ぐに受け止めた。

「にしても、ディセンダー・ヴィアルドレッド。あの、義腕の傭兵の養女に会うことになるとはね」

「…！」

レインを衝撃が襲った。

——ディセNDERを、知ってる…？

「お前、あいつの何を…」

「何？ 何って、君の家族だろう。…君は、6年前から彼が失踪する二年前までずっと、彼と共に暮らしていたんだってね」

深黒の瞳を見開き、レインは掠れた声で問うた。

「一体、どこまで知っているんだ…」

「うろたえるなんてらしくないよ。アレイン・ヴィアルドレッド。これは全て、ディセNDER本人から聞いたことだ。おれはずっと彼から君の話を聞いて、会えるのを楽しみにしていたんだから」

本人から、ということは彼の安否には希望が見出せるということか。

——それとも…

クロードは熱に浮かされたような眼で、レインを見つめる。

それは、愛しい人物のことを語っている様であった。

「ずっと、思ってたんだ。君のこと。どんな人間なんだろうってね。会って、話して、…互いに戦えたなら、どんなに——うれしいだろうって」

偽りのない笑み。

レインですら初めて見るクロードの仮面の内側の素顔だった。

「クロード…最初から気づいていたのか？」

「レイン…君がディセNDERの養子だって気がついたのはごく最近だよ。初めて会ったときと、披露宴の時はそんなこと知る由もなかった。…でも、考えてみればすぐに分かることだよ。容姿の特徴はそのままだったしね」

声が自然と掠れた。

黒瞳が揺らぐ。

「ディセNDERは、生きているのか？」

「うん。特に支障もなく『軍の仕事』をこなしているよ」

——何だって…？

「軍、の……？」

「そう。彼はフリーランスの傭兵から軍の傭兵になった」

——そんな話、知らない。

「じゃあ、二年前から連絡が途絶えたのは」

「彼の意味は知らないけど。今もこの街で、彼は軍専属の傭兵として生きている。本人に聞いた方が早いんじゃないかな？」

彼が言うことは尤もだった。

けれど、レインとて簡単に鵜呑みには出来ない。

「…ディセnderが、軍の配下に収まるなんて思えない。それが真実と言うならば、本人を連れてくればいい」

内心の動揺を鎮めつつ、言葉を選ぶ。

こちらの心境を知ってか知らずか、青年は柔和な顔つきで答えた。

「…それが出来ないって、分かってるのに聞くんだ？」

「——……」

そう、一筋縄ではいかないことなど予想は出来ていた。

しかし彼が次に発した言葉は、あまりにも突拍子がなかった。

「そういや、第二機関を辞めたんだって？」

「…何で知ってるんだ？」

焦点がずれている青年の発言に、レインは聞き返さずにはいられなかった。

質問には答えず、クロードは続ける。

「どうするの？ これから」

「…お前には関係ないだろ」

「関係なくないね」

レインは訝しみの視線を青年に向けた。

「…どうして」

「いいから。第二機関はいいとしてもフリーの傭兵としてやっていくには世知辛いところがあるよ？ 軍警察だって派閥はあるけど、君たちみたいな職種を快く思ってるのは少ない」

「それは警告か」

「単なる心配だよ。…信用できない？」

——はつきり言って、信用できない。
白にも黒にも割り切れない人間はある種、一番に警戒すべき人種だ。

彼の考えていることが、他人を利用しようとする深慮さか気まぐれな浅慮なのか分からない。何より、彼の腹の底が知れないことが、心底で不気味に思わずにはいられない。

「レインの言うことは分かるよ。おれって利害しか求めない人格だから」

即物的なことを自らの口で吐露する。

レインは相手の足元を見つめ、口籠もった。

すると赤髪の青年は、穏やかな口調で言い足す。

「返事は今でなくていいし、強制も脅迫もしない」
重みのある言い方だ。

どこまで信じればいいのか分からない虚言に塗れたこんな男でも、信じるに値してしまうような……そんな言い方だ。

——ずるいと思う。

一寸でも考える掛け値があると感じてしまう。

風が吹き、クロードは踵を返した。

「もう一つ」

「……？」

「リート・セディシアという男を知ってる？」

二度目の思わぬ名に、レインは身を固くした。

「……知ってるよね。あの不法入国者が君等を引き合わせたんだからさ」

——不法入国者、とは李清のことだろう。

「ただね、レイン。リート・セディシアと君がどんな関係であるうと、あいつとは関わらない方が身の為だ」

「それって、どういう……」

「あいつは『ハートレス』だよ」

言葉を遮ったのは聞きなれない単語だったが、どこかで誰かが口

にしていた気がする。

レインはすぐに思い出した。

——…そうだ、あの仲介屋の女、ラグナが傀儡の一件でリートを
見て言ったんだ。

忌々しいものを、見るような眼で。

「ハートレスはそのままの意味だ。あいつは人間じゃないよ」

クロードはそう言い残すと、ふらりと逆の方向へと歩んでいった。
引きとめようと身体が動いたのに、レインはハートレスの意味に
気がついた途端に、挙げた手が重たくなるのを感じた。

「ハート、レス……」

まさかと思ったが、完全に否定できない自分がいる。

もしかしたら、彼は…

心臓がない……ではなく、

「——心、無き者……」

53 題名

埃っぽい匂いが充満する屋内。

「もうちょっと掃除したらどうなんだ？」

不平を垂れるのは、くすんだ色合いの室内でも異質の漆黒を纏う少女。

濡れ羽色の髪は腰まで届き、混じりけのない黒曜石を髭髯とさせる瞳を有している。

気丈に結ばれた繊細な口元、冴えた目つき、精密過ぎる顔の輪郭や鼻梁。

ある種、常人離れした美貌を持つ娘は柳眉を顰める。

「あんまり詰めてると床が抜ける」

「しょーがないの。どんだけ蔵書があると思ってるのよ、ここ」
応じるのは、少女に比べれば見劣りしてしまうものの、東方人らしい美しさを兼ね備えた妙齡の女だった。

「李清は寝ても覚めても本の虫か」

「レインはもうちょっと、こういうのに興味持ってもいいのに」
妙齡の女——李清は薄汚れた本棚から一冊、本を取り出した。
誇りを払って、美貌の少女——レインへと渡す。

「何だ、これ……」

李清が渡したのは、重厚な紅の布製カバーに金糸で題名が縫い付けたある装丁の本。見るからに古そうな代物だった。

「『Paradise Lost』：失樂園。知ってるかしら？」
「名前だけなら：アダムとか、イヴとか、蛇とかだろ？」

レインは顎に手を当てて思案する。

昔話だ。神様がどうか、動物が平気でしゃべってたりする頃の話。子供の寝物語。

「そうそう。前渡した：やつ、『W u t h e r i n g H e i g h t s』：嵐が丘はあまり気に入らなかったようだから。あれよりはこっちのが読みやすいと思うわ」

「ああ。あれか。小難しい話は嫌いなんだ」

「：でも、読んだんでしょ？」

少女は不承不承といった様子で頷いた。

「――ああ。でも：あんまり共感できなかったな」

「どうしてかしら？」

「……自分なら、もっと上手く……」

紡ぎかけた言葉を塞ぐ。

首を振って、梯子を上る李清を見た。

部屋には本棚がぎっしりと詰められている。天井まで届く本棚にはこれもまた隙間なく本で埋められていて、手に取るのには高過ぎた。

高い位置の本を梯子に上って取り出し、ページを捲ってはまた元の位置に返す：この作業を李清は淡々と続けている。

時折渡される本をレインが受け取ったり、指示された低い位置の本を取る：これが今のレインの役目だ。

自宅に蔵書専用の広い部屋を設けていることも驚きだが、室内にある本全てが李清のものであるらしく、その点でも驚く。

「まあ、あんまり難しい気持ちで読むものじゃないわ。レインは哲学者でもなければ翻訳家でもない。普通に読む分にはね、内容を取り敢えず取り込むの。浸透させるのはその後の話」

「：読み込んで、考えるのは後にしろってことか：？」

「うーん。ちょっと違うわねー」

レインは首を傾げた。

李清は相変わらず梯子の上で詰め込まれた本と格闘している。

「そういうことはね、リートの方が得意なのよ」

「：何であいつの話が出てくるんだよ」

「あら、気になってたんじゃないの：？」

梯子の上で女は目を糸にする。

——誘導尋問みたいだな……

だが李清の言うとおりだ。

その一言を言うには、ある程度の覚悟が必要だった。

「：リートは、まだここに出入りしてないの？」

最近、レインはリートの姿を見ていない。

それだけではさして珍しいことではない。彼だって長期の仕事はあるだろう。

——でも、胸騒ぎがする。

心配を一笑して欲しかったのに、少女の心境とは関係なく李清は事実を述べた。

「そう。：二週間以上ね。こんなにも間が空くのは珍しいでしょ？」

李清の言葉に、レインは胸に鉛を入れ込まれたような気がした。

重たさや、気持ち悪さと形容すればいいだろうか。

彼にあったのは、あの夜が最後。

あの時、何故彼の様子がおかしいことを咎めなかったのか。

二週間も彼女の住処に来ていないというのは、いささか不自然だ。彼は射撃場を頻繁に利用しているし、武器庫の在るこの場所に足を運ぶことが多い。

加えて、幾ら仕事が長期に渡っても、連絡ひとつ寄越さない。

レインは声を振り絞って問う。

「連絡もないの？」

「ええ」

——嫌な予感がした。

「レインは何か知らない？」

言うべきかどうか、迷った。

——クロードと会ったこと、ハートレスのこと……ディセンダーのこと。

けれど、上手く言葉に出来なくて、口籠もるだけだ。

李清は、レインの隠し事など見え透いているだろう。

問い詰められるだろうかと思った。：けれど。

「まあ、無理強いはしないわよ。……でも、何か困ったことがある時は私にも相談してね。年長者は頼られてこそなんだから」

宥めるように言って、李清は梯子から降りてきた。

いつもと同じ、快活な笑顔で笑う彼女がレインの目の前にいる。

「年長者……」

「っ変な意味じゃないわよ、ええ、ただ、ちょこっと年上ってだけよ」

自称二十代は慌てて繕った

苦笑を混ぜ、レインは流した眼を伏せる。

「隠してる：わけじゃない。自分で整理してから言いたただけだ」

「勿論、分かってるわよ。貴方が見聞きしたことを人に伝えるか、それは個人の自由ってやつ。だから、私にはせめて心配だけはさせてね？」

「……うん」

レインが苦笑すると、李清も朗らかに笑った。

——できることを、しなくちゃ。

リートが何かに巻き込まれているなら、軍及び軍警察に関わっている可能性が高い。

そして、この間のクロードの話にも兆候はあった。

——ハートレス：心無き者……

詮索はしない方がいいのかも知れない。

けれど、しなかったらで後悔するのは、絶対に嫌だ。

ここでうじうじしてたら、以前となんら変わらないのだ。

——犬は吠えるだけだ。人間なら行動しろ。

：ふっと、あの男が言った言葉が脳裏を過ぎった。

自分自身が存在して、息をすることさえ拒んでいたあの時に。

「：自分なりに、リートのこと、調べてもいいかな」

「レインがそうしたいならね。：でも、無茶はしないのよ？」

李清はしょうがない、とでも告げたそうに言う。

「…うん」

レインは意を決して、話し始めた。

54 仲介

午後のゆったりとした日差しが差し込むその場は、あたかも時間が綿密に過ぎているようであった。緩慢に、じつくりと過ぎていく、休日の午後だ。

喫茶店のように見える店内には木目の美しい橙色のカウンター。向こう側では店主と思しき壮年の男性が、カップを磨いている。そんな場所に。

「私にアポなしで取り次ぐなんて…豪気だねー」

呆れとからかいの入り混じった目線を送りながら、女性は足を組みなおした。肌にぴったりと吸い付くような短い丈のスカート。おそらく、余程自分のスタイルに自信がなければ履けない代物だろう。

「情報屋の李清の仲介がなけりゃ、私だって来てないよ」

「…自分が無理を言ったんだ。まず、来てくれたことに礼を言わせてくれ」

凜とした口調で話すのは、長い黒髪を背で束ねた少女…レインだった。

彼女は頭こそ下げなかったが、代わりに十分に誠意のある視線を送る。

ふ、と女は鼻をならす。

「…可愛いこと言う。中東人は好きじゃないけど、貴方は気に入った。あの一件以来だけど、改めて自己紹介といこうか」

脚線美を組み直し、レインと相對する女は名乗った。

「知っての通り、私の名前はラグナ。ラグナ・ティターニア。そう呼んで頂戴。通り名だけど、それで十分よ。今は仲介屋とか揉め事処理…要するに何でも屋をしてる。ちなみにあの二匹は今日は連れてきてないから、安心して」

先日敵対した相手と同じ席につく…そのちぐはぐさに、内心戸惑いを隠せない。

けれどラグナを見てみると、それさえも瑣末な問題に思えた。

彼女の碎けた物言いは嫌いではない。

レインも僅かに視線を緩めて言う。

「自分はレイン。そう呼んでくれて構わない。今はフリーランスの賞金稼ぎだ」

「賞金稼ぎ？ …貴方は傭兵じゃなかった？」

「元々、自分は傭兵じゃない。少し前までは、即務第二機関で傭兵に準ずる仕事…用心棒みたいなことをしていたんだ。もう、抜けたけど」

さらりと語るレインに、ラグナは肩を竦めて見せた。

「天下の第二機関から抜けるって、刺客が付くわよ？ …まあ、

そこはノータッチでいいね」

ラグナは眉を顰めながら言う。

彼女には、第二機関ほどの高待遇の職場を離れたことが信じられないのだろう。

ただ、深入りをしないのは懸命だ。

レインは構わずに続ける。

「さて。本題に入らせてもらおうか」

ラグナの目つきが狭まる。

「…今日、貴女を呼んだのは直接に聞きたいことがあったから。まず、一つ目に何故、自分の本姓を知っていたのか。それからディセnderとどういう関係で、あいつの何を知っているのか。…そして、もう一つ…『ハートレス』について」

今まで微動だにしなかったラグナが、『ハートレス』の一言でぴくりと眼を開いた。

彼女のクセのある髪が揺れる。

——沈黙が降りてきた。

午後の時刻を告げる時計の音が、店内に重く響く。

閉じていた女性らしい唇が、離れる。

「……ディセンダーは、知り合い。過去に何度か仕事で一緒になった。それ以上の関係はないのだけど……彼と最後に会ったのは、もう二年近く前になるかな。それっきり。ただその別れ際に、自分の養女のこと、もしかしたら、その子はいずれは私と会うことになるだろうことを話していた」

床の木材が軋む音がして、店主がゆったりと二つのカップを運んできた。

席に着くレインは目礼をして受け取る。

対するラグナは、浮かぶ黒い波紋を見つめた。

「その子は真っ黒な髪と、同色の瞳を持っている希少種。『レイン』という名の子だとも言っていた」

胸の奥でじわりと、何かに心臓を掌握されているような軋みが広がった。

あくまで平静を装いながら、言う。

「……それで、自分を見て気がついたと」

「——そう。ディセンダー・ヴィアルドレッドの養子、アレイン・ヴィアルドレッド。貴方で間違いないでしょ？」

「ええ……」

沈痛な面持ちで少女は肯定した。

対するラグナも声色を低める。

「貴方の養父は行方不明だと聞いた。もしその件で私に尋ねるなら、こっちはお手上げ。私にも分からないから」

「それは、大丈夫。自力で探さないと……」

発した後半の言葉は、消え入りそうだった。

——あいつは、何の目的があって、自分のことを振れ込んでいるんだ……？

レインの心中に浮かんだ新たな焦燥を知ってか知らずか、彼女はコーヒーのカップを手にとって、口に苦味を含んだ。

口を湿し

「じゃあ、あなたのもう一つの質問に答えましょう」

相対する双方で、浅く眉を立てる。

ラグナは神託を下すが如く静かに言い放った。

「『ハートレス』それは軍の計画の俗称。及びにそれによって作り出された産物を指す」

かちやり、とカップを置く。

「今から十年以上前の、ヨーロッパ内の大戦、：知っているよね。その後の核拡散防止条約を始めとする平和的外交によって、軍部は揺らいでいた」

レインは、いきなり歴史の話が始まったことに戸惑ったが、淀みのない彼女の口調に聞きいった。

語られるのは一般的な、教養学校に通っていないくとも誰もが知っている周知の史実だ。

「核や生物兵器、大規模殺戮兵器はヨーロッパ監視塔の監視下に置かれて、製造が難しくなってしまった。：よって、軍は人海戦術、少数精鋭の時代に逆戻りするはめになる」

一度彼女は息を吸って、唇を舐めた。

「それに追い討ちをかけたのは、軍部と警部の合致という提案。

：軍と警部は反発しあうけれど、結局は国会で決められたこと。文官の決定事項には逆らえなかった。でも、無論双方に不満はあった。中でもそれが大きかったのは、軍」

レインは喉を鳴らした。

頭の奥で警鐘がなる。

——この話はあまりに根が深い。

「軍は、自分たちだけで軍部を強化させようと思った。もっと優秀な兵力を、人材を……その行く先は」

彼女の瞳が、揺らいだ。

「——人体実験。：後のハートレスの前進となる試みよ」

その言葉が、レインの胸にずっしりと入り込む。

「人体、実験……？」

「そう。あなたが思う程仰々しくて現実離れたものじゃないわ。……まだ年若い子供にね、薬物や化学物質で特殊な処理を施す。中には胎児の時に、あるいはもっと前にDNAの変換をされた子さえいた」

現実離れしていないと前置きされても、レインにとっては同じことだった。

胸が悪くなるような話だ。

「実験のほとんどは身を結ばなかった。最先端ゆえに、不確実な技術だったからね。……けれど、全てがそうして無に帰したわけではない」

ラグナの白い指先がコーヒークップの縁をなぞった。

「研究と実験について、肉体面では不安定な成果しか出せなかった。薬物を使えば副作用と禁断症状が一生付き纏う。大きなデメリットと常に背中合わせ。けれど少数精鋭が求められる中で、最も優秀な要素を軍は手に入れた……」

彼女は、憎しみを込めて言い放った。

「それが、人間としての心をなくすこと。……彼らは純粋な殺人機械を作り出した。人間としての意志と精神と良心と尊厳を殺し、人でなしの肉塊を造り上げた。どういう手段でなんて……考えたくもない」

レインは、絶句した。

人間としての心を殺す。人でなしに仕立て上げる。

それは、否、それそのものが人間の所業とは思えない。

ラグナはなおも語る。

「だから、心をなくした感情の無い人間を『ハートレス』と呼んだ。……私がこの話を聞いたときは半信半疑だった。けれど、後で嫌でも思い知るはめになったよ」

レインは目を逸らさずに、射抜くような彼女の視線を受け止めた。

「――三年前。私はリート・セディシアに会った」

予想していた筈の言葉は、言おうとしている内容を示唆している。

「…仲介屋の仕事でね。ここザイフオンの地下で武器商の会合を平和的に進める為の抑止力として雇われた。会合の内容は、軍との兵器取引の賄賂だった」

レインはそれについては驚かなかった。

違法取引など珍しいことではない。表裏一体の軍拠点都市では。

「リートはね、今のあなたと同じくらいの年だったかな。会合に現れた軍の要人の身辺警護をしていた。何があっても要人の守護をする…そういう命令だったんでしよう」

淡々と事実を述べる。

「途中まで順調にいていた話し合いは、軍側が支払い金額に応じなかったことで決裂した。一触即発の中で、些細な出来事であつけなくお互いの均衡は崩れた。私は武器商の警護が仕事だったから、専守していたのだけど、リートはそんなのお構いなしだったわね。

…その場にいた要人以外の、見方さえも全員を殺した。…私は運がよくて生き残ったけれど、撃たれた片足に障害は残った。だから今はあの二匹に働いてもらってる。仕事もそれ以来は、難易度と危険度が下がったね」

今の長い行で、レインの頭に入った内容は唯一つ。

——リートが、人を殺した…？

人の殺生に深い嫌悪感を抱く、彼が？

しかも、皆殺しだなんて。

少女の内心の動揺を更に増す言葉が掛けられる。

「私はね、この街で狂った人間なら何度も見てきたよ。でも、狂うってことは同時に、そもそも外れる軸がある人間だってことを意味する。…ハートレスにはね、その軸が無い。リートが無感動に、無表情に人を殺していく様は…狂ってるのか、そういうのとは違うんだよ。根本的に」

——軸が無いという発言で、ふいに、無軌道という言葉が思い浮かんだ。

リートは、少なくとも自分の知っているリートは、確固とした信

念を持っていた。揺らがないものを。そんな彼だから、レインは初めて会った時から何度も命を救われたのだ。

——けれど。リートは、もしかしたら俺が思っているよりずっと……

認めたくない。そんなことは。

しかし、目を背けていいのだろうか。

ただの、通り過ぎていく人達とは違う。同じように確固たる存在だ。命を助けてくれた存在だ。

ならば、彼に借りを返さなくてはならない。

借りを返す、だなんて軽率に言うのはどうかと思う。けれど、彼のいた空間は、ユカリや李清といるときのように暖かった。

直接的な繋がりも、直接的な好意がなくとも。

好きだとか、嫌いだとか、そういったものとは違う。

——：ユカリや李清、ディセンダーのように、大切な存在だったんだ。

だから。彼から背くことは、大切なものから背くこと。

——そんなこと、できない。

大切なものから背いて拒んでしまうと、遠くへいってしまう。

手の届かない場所へ。身体ではなく、心が。

それは嫌だ。認めなくては。認めてそれでも良いと思えたら、過去のことでない、今を見つめることが出来ると思うから。

——借りを返す。そして、隔たりをなくす。

決意は確かに変わらない。

レインは伏せがちにしていた面を上げる。

「…自分は、あいつのことを何も知りません」

信念の滲む声を絞り出す。

ラグナは静かに頷いた。

「あいつの過去がどんなものか、どんな罪を重ねてきたのか、貴女にどんな恐怖と支障を与えていったのか。……何も」

テーブルの端を、浅く掴んだ。

「けれど、あいつは自分に言ってくれたんです。：命も救われました。だから、出来ることをします。誰に、何と言われようとも」

聞き手の女性は、終始無言で少女の言葉に聞き入っていた。

ふっと、薄い色素の瞳に憂慮の色が浮かぶ。

微かな情緒はやがて優しい笑みになった。

ラグナは口元を緩めたままに話す。

「……再会したリートはずっと人間らしくなっていて、正直驚いた。私がリートを恨んでいるかと訊かれれば、確かに畏怖を与えられはしたけれど、決して恨んではないな。：私もザイフォンに生きる人間だから。彼を責めれば、私は私の過去を清算しなくてはいけない」

冷めたコーヒーの水面を、そっと見つめて言う。

「私は、あなたの妨害はしないし、背中を後押しもしない。けれど会えて良かった。：レイン。あいつを大切に思っているんだね」

少女の名を口に出し、彼女は寂寥の窺える顔を上げた。

彼女の声音に、嫌な雰囲気を感じて困惑する。

レインは少し苦味を含んだ顔で、付け加えた。

「あいつと自分の関係は、そんなじゃないです：ラグナさん、そもそも、自分には『そういうこと』はしようとしたって絶対に無理です。一生無縁なので」

「ふふ、知ってる。……貴方も、そうだってね」

意味を含んだ台詞に、レインは苦笑で応える。

何だか、全てを見透かしているかのような語り口調だ。

——そういえば、どうして彼女はここまで詳しいのだろう。

聞き辛くもあるが、問いかけが浮かんだ。

「あの、質問は二つという話だったけど、どうしても聞いておきたいことができたので……」

「何？」

「その軍の事情を、どこで……？」

テーブルに頬杖をついて、彼女は話す。

「…どこ、が正確ではないね。正確には、誰、かな。……私はね、とある女からそのことを聞いた。もう随分と前にね」

「ある、…女？」

「そそ。顔はよく覚えてないけどね。彼女の名前、聞いとく？」

そつと頷いた、ラグナの口元が微かにぶれる。

レインは、発された名をどこかで聞いたことがあるような気がした。

55 邂逅

——教えてください。私の隣にいるのは誰ですか。

埃の香りが充満する空間。

左右は大人の身長を有に超す本棚に狭まれている。本棚の高さは天井にまで届くかという程だ。

通路は狭く、人間の大人二人すれ違うことすら難しい。

初見の者ならば、その場が何処かと場所を問われれば、図書館か書庫と答えるだろう。個人のものにしてはいささか規模が大きいからだ。

静謐が留まる空間に立つのは、女性らしい身体つきの人影。

やや褪せた黒髪に、東方の血を色濃く残す肌色や瞳の色が特徴的な妙齡の女だった。

彼女はぶ厚い本を捲り、本棚に戻しを延々と繰り返している。

昨日もレインという名の少女と共に行っていた作業の続きである。

彼女——李清の行動は、探し物をしているようにも、調べ物をしているようにも見える。

「——よう。ガキが世話になってるな」

響くのは、旧友に久方ぶりに会ったかのような挨拶。

声の主は、気配を消し、女性の反対側の本棚に凭れ掛かった。

あたかも、彼女と本棚を挟んで背中合わせになるように。

応じたのは、淑やかな女の声。

「：久しぶりね。言っておくけど、別にあなたのご機嫌取りでやってるわけじゃないのよ。あの子たちは、あなたの養子にしとくに

は勿体無い子だから」

「酷え言い方だな、おい。あいつ等を拾って育てたのはオレだぞ？」

「そうね。あなたが言うのと誘拐したとは思えないわ」

「――はン。誘拐ならもつと元が取れそうなガキにするさ」

彼らは親しげに問答し、場に似つかわしくない雑談を始めた。

女性は本の紙面を捲り、生み出された乾いた音が木霊する。

「…冗談に聞こえないわ。それじゃあ、どうしてあの子達を？」

「別に、アレインには理由があるが、ユカリにはねえよ。ただ、そうだな……」

男は言いあぐね、女が後を引き継いだ。

「ユカリちゃんが極東人だから？」

「かもな」

「……否定しないのね」

「指摘されて、逆上でもすると思ったか？　まあ、引きずってるのは自覚済みだからな」

「そう。…じゃあレインを拾った理由は？」

「ムカつく眼をしてたから」

「は？」

女性は突拍子もない答えに、つい聞き返す。

男は答えた。

「あいつの『自分が世界で一番不幸』っていう眼がムカついたんだよ。根性、矯正してやりたくなってるなあ」

「へえ。私はてっきり、レインの見た目が目当てかと…」

「おいおい、オレがアイツと会った時にまだ、あいつは十やそこいらのガキだぞ？　そもそも、あの時はあいつ『顔の判別もつかない』くれえだったしな」

男の言葉に、女は頷いて納得する。

「……成る程。直後だったってことね」

「ああ。完全に死んだ眼してたぜ。綺麗な人形の方がまだ性質が

いい。もう、うざってえオーラがなあ……」

ここに居ない誰かの過去と現在は、二方にとっての共通の話題なのだろう。

男は懷から何かを取り出そうとしたが、途中で手を止めて呟く。

「くそ、禁煙か……」

「あなたのそういうところ、変わってないわね」

「ああ？」

「いいえ、こっちの話よ」

「まあ、アレだ。その話はいいさ。それよりも……」

男の言葉を遮るのは、向こう側の女の台詞。

「貴方、軍に肩入れしたのね」

「……まあな」

「それがどういうことか分かってるのか……なんて見え透いた説教はしないわ。……けど、覚えておいて頂戴。軍側につくということは、私とあなたは敵よ。レインとも、ユカリともね……無論、リート・セディシアとも」

男は一蹴にする。

「分かってらあ。オレは別に恨み言なんぞ怖くねえよ。『ハートレス』はおっかねえがな」

「……」

沈黙を埋めるのは、本を棚に戻す擦れた音。

二人は暫時黙っていたが、僅かな合間のことだった。

「いいんだよ。あいつ等がここに来ることは必然だったんだ。そして、あいつらもオレを言い訳にしてここに来た。……それこそがオレの役割だ」

「……あの子達は、あなたの掌で踊っているというの？」

「そこまで都合よく考えちゃいねえよ。あいつらもガキじゃねえんだ。そのくらい、その内に気がつくだろうさ」

「……あなたの子供たちですものね」

「当ったり前だろーが」

男は犬歯を見せて笑い、女性も微かに口角を上げる。

「ただな、李清、……ユカリはともかくアレインは、まだまだ乗り越えなきゃならねえ障害が多すぎるんだよ。聞いているか、あいつの……」

「一人の探し人と、二つの探し物」

「そう。それだ。おそらく、二つの探し物の内一つはもう見つかっただろうさ。……きっと、後二つもそのうちあいつの前に現れる。その時にあいつが、正気を保っていられるかな」

揶揄を含んだ男の口調。問い返さずにはられない。

「……どうということ？」

「過去と向き合うのは、辛い事だってだけさ。ただでさえ自分を欺いてるってのにな」

女性は重く頷いて本を戸棚に入れ込む。

彼女の所作と同時に、男も身じろぎをした。

「……もう行くの？」

「オレあ多忙な身なんだな。ガキ共をよろしく頼むぜ」

「ええ。……ああ、ちよつと待って」

片手を上げ腰を浮かせた男の背に、引止めの言葉が掛けられ、男は振り向く。

二人はここに来てやっと対面した。

互いの姿を視界に収め

「んだよ？　まだ用があんのか？」

「そのリート・セディシアだけだね。今、行方不明中なの。……夜道には気をつけてね、ディセンダー」

「おいおい……。こりゃあ、マジで氣い付けねえとな」

男は舌打ちすると、書庫から立ち去った。

程なくして彼がいた痕跡さえも消し去り、またその空間に静けさの帳が降りた。

56 諦念

白昼の薄暗い路地裏に、一對の影がある。

体形からして二人は男女のようだった。

一方はレディーススーツを、もう一方は紺の常装軍服を着ていた。彼らは行き止まりの壁に向かい、話している。

「あちゃあ、こりゃあ酷いなア」

「……………っ！」

「あー、大丈夫？ 吐く？ ここでは吐かないでね。片付け面倒だから」

「う……………は、吐きませんよっ！ 余計なお世話です！！」

女の方は声を荒げて、胸元を撫でる。蒼い顔にきつく眉を吊り上げたまま、向かいの男に問いかけた。

「…何なんですか、コレ」

「ん？ 見たら分かるでしょ。『軍服』だよ」

「じゃなくってっ！！」

女性はまた逆鱗し、しかしすぐに沈んだ。

辺り一体を占める、強烈な内容物の臭いを肺に取り込んだ所為だろう。

「うえ…、す、すみません、やっぱり、無理無理無理、絶対無理…

……」

女は言いながら口元を押さえ、閉ざされた場から立ち去ってしまった。

ブルーシートで囲まれた、閉鎖された路地裏から。

残された長身の男は、顎に手を当て思索する。

「会議中に急いで来てみればこれかぁ。……………ふーん。にしても派手にやってくれたよなア。こんな街中でさ」

彼は赤髪を揺らし、路地の奥へと振り向いた。

『軍服』——彼がそう揶揄したのも間違っではない。だが正確にはそれは『軍服のなれの果て』だった。

黒青の常装軍服は、今や見る影もないほど紅い。赤黒い。布端からは、絶えず水分が滴り落ち、路地の角に赤い水溜りを作った。それは背の部分を表にし、十字架の如く貼り付けてある。軍服を壁に打ちとめているのは釘の様なもの。

それだけならば『染料につけた後の軍服が、壁に貼り付けられている』という奇怪な光景だけで済んだだろう。

しかし、それでは済まないことは明白だった。

「：薬品かなあ、今はもう効力ないって聞いてたけど、臭いは残ってるし……」

赤毛の青年は呟く。

軍服には、赤黒い布地の所々に、白いどろどろとしたものが付着していた。

その軍服の下部を見ると、白と黄色と赤と黒、混ざり合って、色が濁った汚泥のようなものが溜まっている。それも、相当な量。壁にぶちまけられていた。

中には、髪の毛の様なもの、歯の様なものも欠片ほど混ざっていた。

「：現実味ないよなあ。嘔吐物臭くなかったら分かんないって」

青年は、さも自然に言っている。しかし彼が立つ場所はあまりに異質だった。

一目見たものならば、先程の女性のように吐き気を催すはずだ。

そうでなくとも視覚的な衝撃は脳裏に焼き写され、暫くは悪夢に出てくるだろう。

だからこそ異質な場に平然と立つ青年こそが、真に異質なのだ。

「：人間をここまで溶かすって、塩酸？ 濃縮塩酸かな……？ それとも硫酸？」

青年は暢気に現場検証を続ける。

袋小路で今日未明に殺された軍人は、彼——クロードが到着したときには既に今の状態だった。

これでは身元も分からないし、犯人の手懸かりとなるものもない。
軍発行の身分証明書も、何処かへと消えている。

「にしても、溶かし殺されるって、どんな気分なんだろうねー」
殺してから溶かしたのか、溶かし殺されたのか。
それすらも現場の状況からは推測もつかない。

「いやあ、後片付けが大変だなあ。どうしよう……」
クロードはしゃがみ込み、嘔吐物にしか見えない人の成れの果てに
近付いた。

すえた臭いが、鼻孔をつんとさせる。

このような死体を（死体といえるのであればだが）見るのは何も今日が初めてではない。

以前にもあった。今回で、5回目だ。

そして、過去の惨劇も合わせれば……数えるのも嫌になるくらいだ。

「……フレイアの言ってたことが、本当だったか」

殺人手段は変わり、余計に惨いものへと変わったが、傭兵・軍人を狙った連続殺人という面では共通点が多すぎる。模倣犯である可能性も否めないが、模倣による綻びもなく、手際が良すぎることから確率的には低いだろう。

よって今捕らわれの身であるフレイアには犯行は無理であり、冤罪であったわけだが、クロードにはどうしようもないことだ。

「死人に口なし。……よく言っただもんだよなあ」

一人で納得し、新たな疑問を浮かべる。

——では、犯人は誰なのか、と。

軍服を逆さ十字に磔にするなどという陳腐な見せしめは、今時、逆賊でもプロテストでもやらない。

「……軍に恨み持つてる人間なんて、考えるだけで腐るほどいるしなあ」

「お前はもう少し、わざとらしくない独り言が出来ないのか」
——と、聞こえたのは新たな声。

「だって、聞かせようとして言ってたんだから、当然だろ？ ……遅

かったね。アウストラル。ユウは？」

クロードは振り返って、背後の男を見やった。

新たに現れたのは、赤髪の青年のような常装の軍服ではなく、礼装用の背広の型をした軍服を着ている金髪の男。明らかに特権階級の軍属者だった。

おそらく総帥直属の親衛隊か、隠密部隊所属なのだろう。

「…あいつは待機させてる。どの道、外を出歩ける状態でもないかな。今はそれよりもミレイナだ。免疫がないのにこんなものを見せたら吐くぞ」

「本人が見たいって言ったんだよ。眼を輝かせてね」

「あいつの世間知らずは、お前だって熟知してるだろうが」

「いいじゃないか。社会勉強だって」

始末の悪い死体を見せる社会勉強がどこにあるのだと、アウストラルは毒づく。

炯眼で真っ直ぐに死体を見て、クロードへと向き直った。

「…完全に見せしめだな。犯人は殺すことを目的としていない」

「だからさ、きっと軍を貶めるためか、それとも……」

アウストラルは言葉を継いだ。

「――それとも？」

「…宣戦布告かもね」

三日月の笑みを浮かべ、クロードはもう一人の男を見やる。

対照的な二人は、しかし心中に抱いている思いは同一のものだ。

それは、つまり――

「どの道、犯人は暴きだして、軍なりの待遇を受けてもらう」

「素敵だね。すんごく珍しく賛成するよ」

赤髪の青年の言葉に、初めて金髪の男は笑みを浮かべた。

禍々しく、凍りつくような氷点下の笑みを。

「ともかく、後は検死に任せろ。俺たちはお門違いだ」

「そうだね。いい加減、この軍服に臭い付くと嫌だし。……？」

クロードは同意して、身を返した。

振り向いた彼を迎えたのは、そこにあるはずのない小柄な影。以前に増して白くなった顔色。

華奢な身体つきは、彼らにとって見覚えの有り過ぎる者。

「ユウ……？」

その人物の名前をクロードは呟く。

アウストラルは目つきの剣呑さを濃くした。

「どうしてここに？ お前には外出禁止令を出していたが？」

「………何故」

少年は幽鬼と見まがう存在の希薄さで、青年たちに迫る。

声は蚊の羽音じみて小さくか細い。

「ハートレスは必ず地下施設に戻ってきます……僕にはそれを見届ける義務があるのに」

「今のお前じゃあいつの相手にならない……この現場の有様を見ろ。

明日になれば、同じように溶かされて路傍に転がされた、人のなれの果てが一つ出来上がるだけだ」

青年はあえてきつい言い方を選んだ。

死にたくなかったら大人しくしている。……と、アウストラルは遠まわしに告げているのだ。

しかし応じるのは

「……僕はそんなこと怖くともなんともない。このままが一番怖い」
虚勢ともとれる弱々しげな台詞に滲み出るのは、変わることはない意志。

「どうしても行くというのか？」

「ええ。後戻りなんて出来ない。引き止められても僕は行きます」

「それがお前の覚悟なんだ？」

クロードは確固とした口調で問い詰める……がユウは動じない。

「………けじめです」

短く答えると、少年は踵を返して退いた。

残されるのは金髪と赤髪の男たち。

二人の内の金髪の男は暫く俯いていたかと思うと、上着に仕舞われ

た通信機に手を伸ばした。

コール音の後、彼は天を仰いで言う。

「あの馬鹿を、どうにかしてやってくれないか」
程なくして、電話越しに了承の意が発せられた。

57 劇場

路地裏での会話から、僅か数刻しか経っていない。

薄暗い道に浮かぶ少年の姿。――ユウは地下道を循環しながらふ
と思いを巡らす。

確かあの日も、こんな空気だった。

黴臭い、冷たい雰囲気。

時折奥から獣の唸り声に似た風音が聞こえる。

あの頃はただ、父の役に立ちたいという気持ちしかなかった。

在りのままの気持ちはきつと、とても純粋で混じりけのない感情
だっただろう。

今でも、根本は変わらないと信じたい。

けれど、綺麗さだけではどうにもならないこともある。

やっぱり自分は弱くて、望む人の望むままにすることは難しかっ
た。

最初から、当たり前のように望むものを持っている人間が、自
分の周りにはたくさんいた。それがどれだけ妬ましかっただろうか。
お前は、僕に無いモノを持っているのに、それが当然と思ってい
る。

与えられたものを、自分の天性だと誤解している。

――クロードも、アウストラルも嫌いだ……

彼らは、まさしくユウの望む形の具現だったから。

対する自らは、こんなにぐしゃぐしゃになって、やっと彼らに追
いつける。

何処かで誰かがいつも後ろ指を指し、自分を嘲け笑っているよう
な気がして。

無様だ。

――そう、奴等はきつと、僕を嘲っている。

ユウという人間の在り方を笑っている。

必死になるほど、奴等は余裕を見せ付ける。

決して埋まらない距離感、疎外感だけを募らせた。きっと実際に感じた者にしか分からない、生き地獄。無駄にプライドの高い生き物には、あまりに生き辛い。

足音は反響し、煩く響く。

地下特有の地鳴りもいつもより大きく聴こえた。

外部からの音と思っていたそれらは、実は自分の心臓が早鐘を打つ音だと気がつく。

――…怖いのか。

自分自身に問うてみた。

アウストラルに啖呵を切ってみたが、人間である以上、生き物である以上、死ぬことは怖い。

だが、そういう問題ではない。

今まで一度だって、ユウは死というものを実感したことがない。

当たり前だ。自分の生すら曖昧なのだから。

だというのに、本能的な警鐘は鳴り響く。

冷静を保ち、誤魔化しながら歩を進める。

狭い地下道を抜け、出でたのは広い空間。四角形の箱の概観に、

前方の面には一つの扉。

扉の先は閉鎖されていて、ある事故以後、関係者でも立ち入れない。

その尤もらしい理由は安全面からだが、本当はそこで行われていた事実を秘匿するためだ。

ユウは四角形の空間の中心まで歩み、扉と向かい合う。

奴が来るとしたら、ここが一番可能性が高い。

…そして、予想は奇しくも当たってしまった。

少年ではない誰かの足音が近付き、聞こえたのは声。

「あー…頭、痛い……くそ」

見えるのは、端正な立ち姿。黒髪を掻き上げて、片方の白い眼球を露にしなが、彼は苛ただしげに言う。

少年は振り返り、息を呑んだ。

「やはり貴方は……」

「お前、誰だよ」

粗暴な口調で、彼――リートは問う。

その様子に、ユウは少なからず違和感を覚えた。

――誰……？

彼とは面識がある。先日も会ったばかりだ。

それどころか、命の遣り取りまで発展した。

自分を知らないとは、惚けているのかとも思ったが、彼の性格からしてまず有り得ない。

「何だ、ここ……ああそうか、地下か」

リートは呟いて、周囲を見渡した。

ユウの感じる不自然さは増すばかりだ。

玲瓏な声で問う。

「何をしにここへ？」

言いながら、ユウはホルスターに手を伸ばす。

それは威嚇の意味を有していた。

しかしリートは少年を一瞥すると、興味を失ったように視線を外した。

挑発にしてはあからさま過ぎだ。

ユウはしびれを切らして、怒気を孕んだ声で問う。

「……質問に答えてもらいます」

「お前さ。俺に銃を向けるってことは、もう未練無いんだな」

「……どういう意味ですか」

「はっ、そのままの意味だよ」

言うが早いか、リートは銃を抜き撃ちしてきた。

ユウは屈んで弾頭を避ける。

――そこで、タイムラグが生じた。

しかし、連続で撃ってくる銃弾は止まない。

——本気だ。

ユウは初めて後悔した。

リートは人を殺さないと自分の中で甘んじていたことを。

彼は殺そうと思えば、いつでも他人を殺せたのだ。

——自分を殺す気でいる。

銃の反動など受けていないかのような高速の彼の撃ち方は、常を逸脱していた。

銃弾全てが、少年の胸部を性格に狙ってくることも。

ユウは十発も撃たないうちに、肩を穿たれた。

それでもなお弾頭から逃げおおせようとしたのは、彼の殊勝な行動だっただろう。

しかし獲物を捕捉した肉食獣のように、少年の逃走は無駄に終わった。

一発——軽快な音とともに、彼の脚部から血が噴き出す。

異物をねじ込まれ、痛覚が軋むように悲鳴を上げる。

二発——肩口に痛烈な衝撃。骨が碎ける音。

「が、…あ…」

くぐもった声が捻り出される。

這ってでも前に進もうとしたが、肩から下の腕全体がいうことをきかなかった。

額に汗が滲む。血が滂沱と流れ出る。

ユウの背に辛辣な声がかかる。

「口だけの犬か」

青年の嘲りを織り交ぜた言葉に、ユウは激昂した。

「——貴様っ！」

ぶちぶちと、嫌な音を立てる肩の筋肉を無視して、ユウは銃のトリガを引いた。

銃弾は真っ直ぐに黒髪の青年へと届いた……かのように見えた。しかし、それは彼の顔の横を掠っただけだった。

リートは微動だにせずに目の前に立ったままだ。

彼の顔には何の感情も浮かんでおらず、ただこちらを見下していた。

——…見切ったのか……？

あまりの非現実さに唾然とした。

リートは摩擦で薄く赤く滲んだ肌を指でなぞった。

「……、…軍の質も落ちたな」

それは奇遇にも、ある人物が発したものと全く同じ台詞だった。

ユウは意識せずに歯軋りをする。

彼は本性を隠してただけだったのだ。

こちらは自分の力量を過信しすぎて、他人の実力を見誤った。

間違いなく弁解もなく、自分の失点だ。

——ただ、このままで終わるわけにはいかない。道連れにしてでも……

ユウの思考は突如に寸断された。

半顔を付ける床に、何かが突き刺さった。

それは光を受けて反射し、また鏡のようにユウの顔を写した。

肉厚で鋭利な刃物。

「くだらないことを考えてたな」

「リート……」

「ああ。そうか、お前俺の知り合いなのか。『忘れてた』…」

彼は言いかけてじろりと、目線を足元の彼に向ける。

眼前の刃は怖れを含んだ自分自身の目を写す。

「止めるよ。無駄だって。どんなに足掻いても。分かってるだろう」
諭すように言う。

少年にはそれが、粘着質の声音に聞こえた。

しつこく纏わりつく。

「うる…さ、い……！」

神経が通っているのかさえ不確かな末端の指を動かして、眼前の刃物を握りしめて、リートへと投げつける。

彼はそれを、片手で受け止めた。

指で摘んで、くるりと回すと、しっかりとグリップを握る。

「根性だけはあるな。…身体が伴ってないけど」

冷笑を浮かべて青年は少年の肩に脚を下ろし、踏みつける。

あたかも踏み付けたのは、ユウが先程撃たれた箇所だった。

「っ…っあ…い……………」

喘ぎ声の様な擦れた声音が、喉奥から絞りだされる。

ぎちぎちと重みを増されていく足裏から血が染み込んで、衣服を

滲み伝って床を染めていく。

リートは靴の爪先で、銃弾の穿った痕を抉る。

ユウは激痛に耐えた。

「…もっと痛がってくれないとつまらないな」

愉しそうにリートは呟いて、口端から唾液を垂れ流すユウの口腔

に先程の刃物を落とし込んだ。

「……………っっ!!」

鉄の味。

砂を噛む味。

…血の味。

舌が半ばほど、寸断された。

言葉にならない絶叫を、口内に満ちた血液が封じ込める。

「…っかつ…はっ……………、っ……………」

激しく咳き込んで、ユウは血泡を吐き出そうとした。

舌が回らない所為で、上手く言葉も発せれない。

ナイフを落としたそうとした時、圧力により封じられた。

リートは足の爪先で、ユウの口腔に刺さったままの刃物の柄を踏

み、刃先を更にねじ込んだ。

口から飽和状態の血液を垂れ流す少年を見下しながら、彼は言う。

「死んだようにとか、生きている気がしない何て、軽い言葉だよ

な。痛がって、腹が空くうちは、生に執着している証拠だ。本当に、

生きる屍になると…そんなことも感じなくなる」

それは、あまりにも独白じみていた。

口腔に突き入れられ刃物が、舌先に塗らされていく。

少年の悲痛な喘ぎ声が、木霊する。

「っ…あ…ぐ…」

さも興味がないといった風に、彼はそれを見る。

荒い呼吸音と共に舌が蠢き、刃に当たって切れた面から鮮血が溢れ、口内を満たす。

唾液と血液に塗れた悲痛な面持ちを見ても、加害者の男は無感動だった。

ふっとナイフを持つ手に力を込める。

「っっ…、、、、、」

苦悶の声。

もはや人間の発する声だとは思えない。

口内をかき回すように、彼はナイフを手首で回す。

左右別色の瞳は相変わらず無感動だった。

「――飽きた」

一言で、ナイフを引き抜く。

「――！！っっ！！」

言葉にならない音が張り裂けた。

口元を真っ赤に濡らしユウが片手で口元を押さえようと、血は湧いて出てきた。

舌が麻痺するほど、血の味に慣らされていく。

青年は膝をつき、項垂れるユウの髪を掴み無理に上を向かせた。

「あの子は何処にいる？」

もはや話すことなど到底出来ない状態のユウに、問う。

――無論、答えられるわけがない。

「…ふうん。なら、いいや」

無感情に、玩具に飽きた子供のように言い捨てて、リートは少年の腹部を蹴り上げた。

口内に溜め込んでいた血が一斉に吐き出され、ばしゃりという小

気味のよい音と共に、床に鮮血が刷かれる。

何度か痙攣するように身体を微動させたユウも、数秒後には死んだように動かなくなった。

「……何処にいるんだ……」

熱に浮かされたように放蕩とした口調で呟く声。

来たときと同じ覚束ない足取りでリートはその場を後にした。

問いかける意味（前書き）

※残酷描写注意。

問いかける意味

「――何してるんだ？ カングルツペ」

「見ての通りです。愚図を始末しています」

木霊する男の声に応じたのは、無感情な機械を彷彿とさせる女性
性の声音。

透き通っているものの、それゆえに切っ先鋭い氷の刃の言葉だ。
表情も同等に無表情・無感情であり、整った容姿からしても、じ
っとしていればよく出来たマネキンであろう。彼女――カングルツ
ペは立ち上がり、辺りを見渡した。

背後には、もう一人の気配。

「アルカード、どうしてここが分かったんですか？」

「お前の行く先なんて、ある程度は検討がつくさ」

カングルツペにアルカードと呼ばれた男は言い、部屋の中央に
歩み寄った。

隅の空間の闇から姿を浮き彫りにさせる。

見目は長身に壮年の男。別段変わったところはない。

誰が見ても、一見医療機関の手術室であるその部屋に、二人は居
る。

――正確には、三人だったが。

先ほどまで物音一つ立てなかった最後の一人が、くぐもった呻き
声を上げる。

「――、くぐもった」

「ああ。残念です。……話してくれないことには始まりませんね」
冷たい女の声と同時に、繊維質の千切れるぶちぶちという音が鳴
る。

呻き声は更に響く。

男はカングルツペの背後まで歩み寄り、手術室の中央に設置された寝台の上を見やる。

まず視角を射すのは、照明に照らされて露になった黄色、白色、桃色――鮮烈な、赤。

切り込むのは、銀刃で照り返すメス。

皮膚に沈み込み、更に傷口を広めていく。

「――、っっ！」

「……え？　なんですか？　聞こえませんが」

哀れな実験体の男の声に、応じるのはやはり機械の様な声。

一体何時から、正視に絶えない地獄絵図が繰り広げられているのか、それはこの場に居る者でさえ定かでない。それ程に手術室は、浮世離れた時の流れなど関係ない完全なる密室だったのだ。

「カングルツペ。んなことしても無駄だと思うぞ？」

「……いいえ。きちんと吐くまで続けますよ。やっと捕まえた軍の将校ですから」

「いやー、ていうかさ、もうソイツは喋ることもできないと思うぜ」

男は手術台に磔にされた男を見、言う。

おそらく中年に差し掛かるであろう男は激痛に顔を歪め、今も口端から血泡を吐き続ける。

口角は切り削がれ、筋肉の筋が見えていた。

そして、今も尚開かれ続けている男の腹部。

ぱっかりと縦に入れられた切り込みからは、血色の良い臓器が隙間無く犇んでいる様子が見える。

手術衣に返り血を浴び、彼女は尚もメスを突き入れる。

施術ではない。傍目には男の腹中を掻き回して弄っているだけにしか感じられないことだろう。

阿鼻叫喚の光景は、傍から見ると絵空事のようなだった。

アルカードは手術台に頬杖を付いて、今も呻き続ける磔の男に囁く。

「まあ、俺が言える状態じゃないかもしれないけどさ。無理にでも吐いた方がいいんじゃないのか？ こいつ、お前が吐くまですっとこの調子だと思うぞ？ 血液凝固剤入れられたんじゃ、出血多量だって、すぐに死ねないと思うしな」

目の前の男は、そぎ落とされた皮膚の上にある目を見開いた。ずぶり、と刃が更に腹部に食い込む。

男の体が仰け反り、拘束から逃れようと暴れる、しかし手足や体の節々を押さえ込んだ鋼鉄の枷は、その程度ではびくともしない。

辱めを受けているのと同等の扱い。

カングルッペは男の腹に手袋に包まれた五指を入れ込む。

そのまま、紐を引きちぎると同様のあっけなさで、男の小腸を握りつぶした。

「……………っ！！！！」

「早く答えてくれませんか？ 私も暇じゃないんです」

僅かに苛立ちを顔に含み、彼女は相変わらぬの敬語で叫ぶ男に問いかけた。

男は血油の入り混じった顔を、僅かに緊張させる。

「…の……っう あ… …いが ………………つぐ」

彼の言うことはよく分からない。

「さっきから、聞こえませんかと言っているですけど？」

言い、拷問吏はメスで男の眼球を突き刺した。

刃は瞳孔を突き刺し、半ばまで埋まる。水晶体から漏れた、密度のある液体が頬を伝っていった。

——絶叫。

「このまま言わないのなら、生きたまま強酸の池に沈めますよ？ 墓地なんて贅沢なもの、ここにはないですから」

カングルッペは言い、眼球に突き刺さったままのメスを引き抜く。

やはり男は喘ぎ、絶叫し、やがて喉を潰しかねない蟄蛙の声を出す。

「——っ、殺、こ、殺して……く、れ……」

「…？　くれ？」

心底不思議そうに女は反芻する。

「こ、殺、してくださいっ！　お願いしま…うわあああああああああっ！！」

「…嫌だなあ。私はさっきからずっと、言ってるんですが」

女はこれまでとはうって変わった、張り付いた笑みをにっこりと浮かべながら、実験台の男の眼へと指を突き入れた。

———ぐちゃり。

「——第五研究所の場所を、教えてくれるだけでいいって」
惨劇は続く。

58 疼痛(上)

「言うまでもない。……馬鹿め」

先にユウの病室に着いたアウストラルは入室と同時に告げる。

感情の上下のない仮面じみた顔に、今だけは怒りが滲んでいた。対応したのは、背後の赤髪の青年。

「…ま、何時かこうなるって思ってたけどね」

両者は部屋の中央部の寝台を見ている。

眼前には白い顔の少年、ユウが横たえている。

綺麗というよりは繊細な顔に、瞼は淑やかに閉じられ、開くことはない。

——…コイツ、結構きれいな顔してたんだな。

クロードは思う。

こうして彼の顔をじっと見る機会などなかったのだ。

そもそも人の寝顔を覗く趣味も、起きている人間の顔を凝視する趣味もない。

もしくはこれが黒髪の美しい東方人だったならば、そうしていたかもしれないが。

今この場に、彼女の存在を思うことは少々不謹慎だ。

やや自嘲気味に二人の内の一方、金髪の男は言う。

「舌を搔っ切られて、肉片で窒息寸前。肩の銃痕はすでに化膿していた上に、本人の意識は閉ざされてるときたか」

赤毛の青年は後頭部を掻きながら、詰まらなそうに問い掛けた。

「結局さ、ユウは捨て駒だったの?」

「どうだかな…俺だって、班を組んだ当初は信じなかった。よく働いていたことには違いないが。軍としてのプライドだけは無駄に高かったからな。こいつは」

「アウストラスこそ、武人としての矜持はかなり無駄に高いけどね」

「かなり無駄に、か」

眉を顰め、彼は呟く。

一度、仕切り直しとばかりに大きく息を吐き、アウストラスは言った。

「ユウの後埋めにはミレイナが入るだろう。リベインの謹慎もそろそろ解ける。俺から総統に処罰緩和を頼んでおく。…ここからがやり直しだ。ユウが居たことで、特殊班は均等が取れていない部分があった」

淡々と述べる男に対し、青年は首を傾げ

「それ、仮にも眠ってるからって本人の前で言う？」

「死人に口はない。生きているだけの屍は死人と同じだ。ユウ・アインツイベオンは死んだ。それだけの話だ」

「――で、邪魔者が消えて改めて班結成かぁ。…あ、何かおれ、久しぶりに怒ってるかも」

クロードはにっこりと笑い、目線を流す。

アウストラスは視線を外して、忌々しげに言い放った。

「お門違いだ。お前の鬱憤の吐け口になるつもりはない」

「相変わらず冷めてるねえ副総統。…知ってた？ おれさ、お前のそういうところが昔から大嫌いだったてな」

クロードの台詞を一蹴にして、男は続ける。

「それはいい。俺もお前の態度には飽き飽きしてた」

「やだなー。こういう相互意識。吐き気がしちゃうよ」

一通り毒牙を言い募り、二人の会話はぴたりと止んだ。

売り言葉に買い言葉。彼等のいつもの流れだ。

沈黙の後、口を開いたのは赤髪青年。幾分か低い声音で問い掛ける。

「アウストラル、ユウがおれたちを嫌ってること、知ってた？」

「…そうだろうという気はしていた。こいつはそれを理性で隠し

ていたがな」

「強者への憧れ、嫉妬、諦念かあ。別に、なりたくてこんなになっただんじゃないのにね」

「お前はな。…俺は自分の力でなった、いや…そう思ったかっただけかもしれない」

「…らしくない変な言い方」

「ユウを見ているうちに考えるようになった。あいつの方が努力はしていた。血反吐吐くくらいにだ。けれど、生身では俺たちの足元にも及ばなかっただろう。それはやはり、俺たちにはあいつとは違う、与えられたものがあるということじゃないのか」

「そりゃそうだろう。人間なんて親の避妊の失敗じゃないか」

「…もっとマシな言い方が出来ないのか。ともかく、天性というものがあるのなら、その一端を俺も持っているということなのだろう」

神妙に話すアウストラルの隣で、クロードが口を挟む。

「お前の父親がそうだったように？」

「そうだな。父の存在はやはり大きい。遺伝的な意味でも、環境的な意味でもな。そのどちらが欠けても今の俺はない」

「なら、いいじゃないか」

「…何が？」

「半分は才能、半分は努力。半分の努力が無けりゃ『アウストラル帝剣所有者』である今のお前はない。要するにさ、才能は最初からだったとしても、お前の努力はお前の意志だろう。だったらそれはもう、自分自身の力じゃないか」

言われたアウストラルは、クロードの方を見て、僅かに驚きの色を見せた。

「お前は時折、尤もらしいことを言う。本当に嫌な奴だ」

「それはおれにとっての最上級の賞賛だよ」

「だろうな。道化を演じているお前には」

クロードはその言葉に笑み返すだけだ。

笑みの仮面の裏側に何があるのか、それは相対する男にも分からない。

「…どうするの？ 過去の亡霊がこんなに出張っちゃってさ」

「無論だ。ハートレスは始末する」

「どうやって？」

クロードは素朴な疑問を発する。

金髪の男の答えは至って端的だった。

「奴等だって人間だ。心臓や脳を貫かれれば死ぬ。四肢を失えば出血多量で死ぬ。首を撥ねても、締めても死ぬ。…方法なら幾らでもあるだろう」

「…ふーん。今回の一件、実は一番怒ってるのはアウストラルかもね」

「お前の想像に付き合うつもりはない」

男は言う、未だに寝台の上で動かない少年へと眼を向けた。

僅かにその瞳に後悔の念が浮かんだのを、クロードは見止めたのだろうか。

「終わらせる。過去に捕らわれた者はただの死者だ」

青年は言い、振り切るようにして踵を返した。

58 疼痛（下）

「どうして…」

呟きは部屋の静けさに染み込み、余韻は数瞬で消える。

少女は答えが無いのを承知で、更に問いかけた。

「どうして……」

彼女の問いに答えられるの者はこの空間にはいない。少女の目の前の人物は、答えを与えられる状態になかったからだ。

それでも、問わずにはいられない。

「どうして…なの……」

何かの行動を取っていないければ目の前の現実には押し潰されるようで、彼女にはそれだけしか出来なかったのだ。

現実には逃げずにそこにいる。何の意志も無く。

今は、何の意志も無く。

残酷な現実には少年の形をしていた。

少女は寝台に手をついて、そっと身を乗り出した。

寝台の上には、純白のシーツに包まれた一人の少年。彼の肌色は病室の白と同化する程に無機的だ。彼は呼吸すらごく微かで、微動だにしない。死体と見まがう程に。

広い病室に、死んだような少年と少女が一人。

「ユウ君……」

少女は少年の名を呼ぶ。

——無論、返事はない。

点滴からぽつりぽつりとチューブを伝い、彼の体に入り込む、受動的な現象。

寝かせられている、着させられている、生きられさせているという事実。

彼はこのまま、成長することも、老いることもない。ここで朽ち果てるのだろう。

それは数刻前に証言されていた。

この部屋に訪れた赤髪の青年によって。

彼は言った。

危ない状況だったと、助かったとしても目覚める確率はごく低く、そして仮に目覚めたとしても、もう普段の生活には戻れないだろうと。

つまり、目覚めたとしても死んでいるのと同じなのだ。

目の前の少年には、この部屋での美しい退廃がよく似合う。

軍の青年は、去り際に言った。こうなることはずっと前から分かっていたと。

——そう。これは分かっていたこと。

でも、誰も止めなかったこと。

彼女は、自分の所為だと思った。

止めなかった、何者でもない自分の所為。

偽りの笑顔に甘えていた自分の所為。

彼の笑顔に甘え、本質を見ようとさえしなかった自分の所為。

全て自らの慢心が招いた事態だと。

幾ら悔やんでも、少年は帰ってこないというのに。

後悔は、重く、冷たく、気だるい。

重圧に身を任せ思考を沈めながら、少女は思う。

自分にとって、ユウという少年はどんな存在だったのかを。

幼い頃から、本当の兄妹のように一緒に育ってきた。

何時までも、幼いままの兄妹として。

彼は自ら大人になることを放棄した。代わりに、強さを誰よりも欲した。

二つは等価交換となって彼に望むものを与えたけれど、失ったものもまた多い。

現に、彼はもう大人と言ってもおかしくはない年齢なのに、少年

の容姿のまま。

彼は強さを持つものに嫉妬し、理性の狭間で揺れていた。

自分には持ち得ない力を持つ者。天性の才能を持っていて当然と勘違いしている者。彼の憎悪の対象だ。

無いものへの虚無は募り、やがて法外な利息を掛けた。

少女には理解できなかった。

――何故、そこまでして強さを求めるのか。そこに何の意味があるのか。

しかし問うことは叶わなかった。

問うてはいけない気がしたのだ。

彼は時折、酷く廢れた眼をしていた。

彼には自分の命が後どれ位のものなのか、分かっていたのかもしれない。

余命など、齒牙にも掛けなかっただけだ。

――命を、どうでもいいと思っていたのだろうか。

死を、怖くないと思っていたのだろうか。

死は、誰だって怖いはずだ。ならば、少年は死と向かい合うことを避け、生を実感しないようにしてきたのか。

そんなのは、あまりにも空虚だ。

わざと、現実を、すぐ傍にあるものを見ようとしなかったのだ。分かっているけど、敢えて霞だけを直視し。

きつと、彼なりの防衛だったのだろう。

死と向かい合うこと、生と向かい合うことは、とても辛いことだから。

現実を見れば、今の少女のように心が碎けてしまうから。

ふと、少女は顔を上げた。

「……………同じ…?」

強く、優しく、慕っていた、自分にとっての兄。

彼は、幼い体のままで、何を思っていたのか。

「……………知りたいよ」

同時に心中で、もう知れないけれど、と付け足す。

——そう。永遠に分かりはしない。

少年を病室に縛り付けた張本人である自分に、それを知る権利は無いのだから。

抗いの意義（前書き）

※残酷描写あり。

抗いの意義

『――No. 54：繰り返す、No. 54、起床しろ』

重い瞼の向こうで、微かに明かりの気配がした。

目を開くと、冷たい蛍光灯の光が眼に沁みる。

簡易ベッドと、僅かな床面のスペース。在る物体は病的なまでに白で統一されており、無菌室のように生気が感じられない。壁の一面分は硝子張りになっている。

『No. 54。起床しないのならば命令違反と判断する』

「……………」

少年は音声に示唆されると同時に上体を起こし、辺りを見渡す。胡乱な頭で寝台から降り、裸足のままで歩いていく。足首の鉄製の足枷が擦れて、痒くなるのが煩わしかった。

硝子張りの壁の向こうでは、白衣に身を包んだ壮年の男がカードキーで部屋の入り口を開ける。硝子がスライドし、一人潜り抜けられる程のスペースが開く。

「14秒の遅参だ。…来い」

男は感情の無いこれもまた冷たい声で言うと、踵を返す。

男の背に黙って着いて行く。

寝起きた部屋と同様に白く、怖いくらいに清潔な染み一つ無い通路が続く。

少年と研究員と呼ばれる男は、通路を突っ切っていく。

途中で何度か硝子張りの寝台のみの部屋を見かけるが、それらは全て蛻^{もぬけ}の空だった。

少年の伸びた前髪が、視界を塞ぐ。艶やかな黒髪は、白い空間で存在感を放ち、目前に垂れ落ちるそれだけが唯一、白い世界の真黒だった。

一分もかからない内にその部屋の前へと到着する。

研究員の男は、先ほどと同じようにカードキーを機械端末に差し入れ、入り口を開けた。

扉が開く稼働音と共に、少年のみが緩慢に部屋の中へと入っていた。

部屋の中は、真っ白くてただっ広い。

そこには、彼の他にも何十人も同年代の少年少女がいた。

ある者は放心したように天井を見つめ、ある者は無機質な瞳で突っ立ったまま項垂れ、ある者はぶつぶつと独り言を言い、ある者は部屋の隅で三角座りをしている。

動いているものは殆どいない。皆、彫像の如く静止していた。

ぞっとする程の静けさ。

本来ならば、同年代の少年少女がこれほどの人数で一箇所に集まれば、行動は多様であり、お互いにコミュニケーションを取ろうとして話すものも出てくるのが、至極当然なのだろう。

けれど、そんなものはどこにも見当たらない。

皆、人形の様に動かない。

黒髪の少年はひたひたと歩く。

そのまま少年——呼称・N O . 54は、入り口から歩んで行って、部屋の壁に凭れそれからは微動だにしない。

静謐が、時を胡乱にしていく。

しかし、その時さえ永遠でなかった。

帳を破ったのは、無機質な声。

『——只今より、常時訓練二項、第十演習を開始する。N O . 1からN O . 99まで、配置に着け』

その声が白い空間に響くと、子供たちは裸足のまま各々の方向に歩いていく。静かな空間に、無数の足音のみが木霊した。

少年、N O . 54もいつも通りの配置についた。

白い壁の一角に、ぽっかりと穴が開く。

彼はそれが自動の引き戸だと知っているので、普段通りに扉へを潜る。他の少年少女達は、他の扉を潜ったり、また数名はNo. 54と同じ空間に入ってくる。

皆が集合していた空間を後にし、変わり映えのしない廊下を歩んで進んだ。真っ直ぐに進むと、また広い空間に出る。

だが、見た目は先程とはうって変わっていた。

白い床、白い天井はそのままに、壁の一面ほどが硝子張りになっている。

硝子の向こう側では、観察者の目つきでこちらを見てくる大人。女性も男性も、一様に白衣を着ている。

No. 54は彼らを歯牙にもかけずに、部屋の中央へと歩いていった。

向かい側の壁には、両番の自動扉があった。

他にも顔だけは知っている同年代の子供数名も、続いて部屋に入ってきた。

いつも、同じ部屋で訓練を受けさせられている者達だ。

『――全員点呼確認終了。もって、これより常時訓練二項、第十演習を開始する。No. 50、配置につけ』

硝子の向こうのマイクに向かい男が何かを話すと、そのまま部屋の隅のスピーカーから同じ内容が流れてきた。

No. 50と呼ばれた少女は、痩せた身体でふらりと前に出ると、扉の前まで行き歩みを止める。

『――では、演習開始』

下された言葉と共に、自動扉が左右にスライドした。

中央から開いたその扉の向こうには、一人の男がいた。ただし、尋常な見目ではない。

男の身体は十字架の様に磔にされ、立たされている。囚人服にも拘束服にも見える異様な格好をしていて、手足には鉄枷が嵌り、もがいても外れる様子はない。

中年に差し掛かるであろう男は、目を見開いて目の前の少女を凝

視する。

目の下の隈が目立つ、無精髭の生氣のない顔だ。痩せた頬の所為か、目が飛び出た印象を受ける。一度見たら、悪夢として夢に出てきそうな顔。

少女は自らを凝視する男に対し、こちらもまた生氣のない視線を送った。

地の底の沼を連想させる、混沌とした意志のない瞳を。

昼行灯とした二人に割って入るように、一つの物が落花してきた。

白い空間に、黒点のように穿たれたそれは、機械的な輪郭。

彼女はそれ――上からバネに吊るされて、眼前まで下ろされた銃に手を伸ばす。

ゆっくりと五指で持ち手を握っていくが、どう考えても少女の細腕には似つかない、手銃の中でも大型のピストルだ。

男の眼が見開かれ、唸り声に似た、奇妙な声を発した。

少女は気にも留めず、銃を眼前に構えた。

照準を合わせ、安全装置を外し、トリガーに指を掛ける。緩慢な動作でも、滞りはない、この動作に慣れている証拠だった。

『――踝』

再びスピーカーから放たれた声に、彼女は行動した。

引き金を引き、放たれた銃弾は真っ直ぐに男の踝を碎いた。

男が獣の咆哮をあげた。血飛沫が舞い、打たれた箇所は痙攣している。

彼女は構いもせず、同じようにもう片足の踝を穿ち、碎いた。

『――肘』

言葉通りに、今度は肘を狙う。

小気味のいい銃声、骨の割れる音、阿鼻叫喚。

彼女も、周りで見ている全ての者が全て微動だにせずに、その『訓練』を見ている。もはや標的となった男は体の良的に他ならない。

『――掌』
『――肩』
『――踵』
『――耳』
『――膝』
『――脇腹』
『――性器』
『――脇』
『――膝頭』
『――脇腹』
『――太腿』

小気味よく、指示にあわせて男の身体の至る箇所が撃たれていく。
途中から阿鼻叫喚の音楽は聞こえなくなって、男が目を見開き、
口から唾液を垂らして、失禁しているだけとなった。

撃たれても神経が残っている箇所は、相変わらず痙攣を繰り返す。
辺りには夥しい赤が迸っていた。
おびただ

『――鳩尾』
『――脳天』
『――下腹部』

やがて、男の身体は反動で揺れるだけとなった。
人間の血液の多さを物語る血の絨毯。

『――眼球』
顔面が破裂した。

『――心臓』
水の入った袋が破けるように、血が飛散する。

『――鎖骨』
骨の碎ける音は、銃声と相成る。

『――顔面、中央』
そして肉片へと変わった。

顔の部品が碎け、垂れ下がり、体の各所は穴の開いた挽肉と化す。

少女は最初から最後まで、表情を微動だにさせなかった。

彼女だけではなく、ここにいる誰もが。

自動扉が、微かな稼働音と共に両側から閉じて、男の崩れた顔面を最後に向こう側へと閉じ、完全に肉片になりさがった男が視界から消えた。

残るのは、生臭いすえ爛れた匂い。彼の男の身体から拡散した温い空気。

また、静けさが降りてくる。

『――以上でN o. 50の演習を終了とする。N o. 51は待機せよ』

N o. 50の少女が下がり、今度はN o. 51と呼ばれた少年が前に出た。

『――これより引き続き、N o. 51の訓練を開始する』

まもなくして、自動扉が開いた。

抗いの意志（前書き）

※残酷描写あり。

抗いの意志

完全に考えることを放棄していたんだ。

自分で考えることを放棄するということは、自分の意思を失くすということ。

自然と、自分の意志による行動も出来なくなる。

つまり、人に操られる、人形。人の形をしているだけの紛い物。それらに成り下がった。

繰り返しの日々は、永遠に思えた。

——繰り返し、繰り返し、繰り返し。……ただそれだけ。

今日も明日も明後日も明々後日も、一週間後も一ヵ月後も一年後も十年後も、きっとその先もずっと。このままだ。だって、昨日も一昨日も一ヶ月前も、一年前も同じことをしていたんだから。それ以上昔のことは、混沌としていて思い出せない。

でもきつと、自分はずっと前から人形だったのだろう。

人の言うことを、善悪の判断さえしないで、ただ聞き入れ忠実に言う便利な人の形をした肉袋。

数字は、月日は意味を失った。

意味が無いモノに、もう一度意味を与えようなどとも考えなかった。

繰り返しの日々は、怠惰だった。

繰り返し、同じことをやっていればいい。それがどんな内容でも。昨日も今日と同じ、明日も今日と同じだ。

——本当に、これ以上の怠惰が何処にあるのだろうか？

人形はただ操られていればいい。自発的に何かをする必要もない。ならば、自分と向かい合い、切磋琢磨することも、個性を建託

することも、周りと衝突することも、自我との矛盾、理性と本能の矛盾に悩むことも、人間同士の取引さえ無い。

全てを受け入れれば、こんなにも自由だ。

全てを否定すれば、全てに縛られる。そんなのは馬鹿馬鹿しい。

全てを容認しながら、どこまでも利己的でいられるなんて、なんて素晴らしいんだろうか。

それを分らないのは只の愚か者だ。

やっと辿り着いた。人形という在り方に。

でも、いつもそこでふと思う。

——ならば何故、彼女は人形に成れなかったのだろうか。

「悔しくないの？」

少女はそう問うてきた。

——悔しいって、なに？

彼女が一番、人形に近かったはずだ。

完全な冷血人形。彼等の中でも抜きん出ていた。

彼女はNo. 50と呼ばれていた。No. 54と呼ばれていた自分と同じ、五十番代。

痩せ細った、くすんだ金髪のショートカットに色白に、暗い灰色の瞳をしていた。話すまで、何の意識もしたことは無かった。

当時の少年にとっては居ようが居まいが、視界に入るか入らないかという違いと同義だった。

だから、少女もきつとそう思っていたに違いない。

——なのに。

彼女は自ら話しかけてきた。

「負けるんだよ。あいつらに……それが悔しくないの？」

——負ける？ 悔しい？

彼女は自らのことを『レン』と名乗った。No. 50ではなく、

名前を持っていたのだ。

レンという名が彼女の本名かどうか、定かではない。

ただ感情も何も無い、空虚な人形だったはずの少年は、その短い発音を『美しい』と感じてしまった。自分でも意味が分からなかった。

意味が分からなくなるという自分に、意味が分からなかった。

今まではそんなことはなかった。

彼女の所為で、彼は何かが変わってしまったのだ。

もしかしたら少女、レンは、あの日、一日だけ正氣に戻ったのかもしれない。

——人形だった自分から、本来の、在りのままの彼女に。

何が彼女をそうさせたのか分からない。ただ、人形としての役目を終えつつあった俺に、彼女は微笑みかけた。口端をあげて、目を軽く細めただけの、顔の運動みたいな動作。

けれど確かに彼女は笑っていたのだろう。

人の笑顔を見るのは、何時以来分からない。もしかしたら、生まれて初めて見る笑顔だったのかもしれない。もしそうだったなら良いと思う。

少年はもう、使い捨てられた人形だった。

——壊れたのだ。壊れた人形は直せばいいのだろう。けれど彼の場合は治せない明らかな『欠陥品』だった。無用となった彼を奴等が長く所有しているはずも無かった。

いつかはこうなることも、分かっていた。けれど、それでも良かったんだ。

そう遠くない未来に絶対に捨てられる、きっと人形の運命だ。何も考えずに、何も残さずに死ぬる、それさえ甘美なことに思えたのだ。

けれど、彼女はそれをよしとしなかった。

「何言ってるの。君は勘違いしてるだけだよ」

完璧な理想予想図は、彼女によって打ち碎かれた。

彼女は少年の手を強引に取って、追っ手から逃げた。

少年は思う。何故だろうと、何の意味もないのに。自分を助けることに、何の意義が、意味が、利益が。

けれど彼女は笑って、手を握り引っ張っていく。

彼女は言った。

綺麗な眼だね、と。白濁して見えなくなった少年の片目を指し、言ったのだ。

何故、欠陥部を指して綺麗などというのか、理解できなかった。片目が見えない所為で、自分は捨てられるのだ。

レンは、尚も笑っていた。

「良いんだよ。あいつ等の都合なんて、ちっぽけなものなんだから」

片目が見えなくても、もう片目で、たくさんものが見れると。美しいもの、楽しいもの、面白いもの、好きなもの、興味が持てるもの、夢中になれるもの。たくさん、たくさん。

それさえも、無縁のものだと思った。

彼女、レンは意味の無いことを続ける。

一緒に外に出ようと言われた。

少年は否定した。

嫌だと、子供のように、駄々をこねて。思えば、自分の中に嫌だという感情が残っていたことに驚愕した。きつと人形を辞めてしまふことが嫌だったのだろう。本来の、人間の尊厳を取り戻すのが、嫌だったんだ。尊厳を取り戻したところで、自分は空っぽなのだから。

本当の気持ちに初めて気がついた。

レンは否定の意を聞きながら、それでもやはり微笑していた。

「――それも、君の『意志』だよ」

彼女には勝てっこない、そう感じた。

出口目指して走った。自分の中で意志をぶつけ合いながら、走った。

分からないことは、嫌いだったんだ。

でも、彼女はとても直向で、彼女と一緒にいたいと、感じてしまった。

——レン、君は一体、何を欲しているのだろうか。

問いかけて言葉にして、彼女は迷い無く言った。

「外に出るの。陽の当たる場所に」

たったそれだけの単純な願いが、彼女の動力となっていた。

——眩しかった。

こんな気持ちも初めてだった。ずっと嫌悪していた感情は、けれどずっと重くて、暖かくて、ちょっと痛くて、でも、良いなと思った。

もっと、人としての感情が欲しくなるほどに。

出口が見えた。地上へと続く道だ。

彼女が恋焦がれた、陽の光。

少年も、一緒に見たいと思った。

——けれど。

銃弾が、彼女の身体を貫いた。

その程度では、彼等は死なない。

けれど。彼女は死ななくとも、歩ける状態ではなかった。

行って、と彼女は彼に懇願した。

——行けるわけがなかった。

彼女を置いて、陽の光を自分だけ浴びるなんて、考えられなかった。レンと一緒にでなければ、意味が無かったんだ。けれど、追手の足は近づいてくる。

彼女の願いを聞き届けたい。

自分はどうなってもいいから、せめて彼女を陽の当たる場所へ。

彼女には人工の光より、自然の陽がよく似合う。陽の光に抱かれたその姿を見たい。

笑う顔が見たい。

「レン……」

「だめ、だよ。逃げて」

「置いてなんか、行けない」

「駄目、お願い、君まで捕まる。わたしはそれが辛い。どうか……」

「そんなことできない」

「有り難う……」

——でもね、と、彼女は言った。

「どうか、生きて、生きていて、どんなときでも、どんなことがあっても生き抜いて、そしたら、私は、とっても嬉しいな。すごく……すごく。君に分かるかな、この気持ち」

分かる、彼女にとって、彼がそうであったように、彼も彼女に同じことを感じていた。

「レン……」

「お願いだよ……おにい、ちゃん、生きて……」

「……ばか」

少年は少女の身体を抱え上げようとした。

——なのに、銃声が再び響いた。

腕の中のレンの胸から、赤が滲み、服を濡らし、腕を伝い落ち、血溜まりを作る。彼女の体温が休息に下がっていくのを、肌で感じた。

微笑んだような、うつすらと笑みを浮かべた顔が、彫像のように動かなくなった。顔から血の気が失せていく。ひゅーひゅーと、彼女の唇から喘息のような、か細い呼吸が鳴った。

——静かな間が空いた。

戦慄さえ覚える、永遠に最も近い束の間だった。

慟哭が空間に響き渡った。

息絶えた少女の名をひたすらに呼びながら、少年は追手へと飛び掛った。銃を奪って、引き金を無尽蔵に引き、その場に居た全ての人間を血祭りに上げる。

赤い飛沫が飛んだ。

白い通路が、真紅に染まった。

足りない。

――…そんなに簡単に死ぬなよ。

レンはもつと、苦しんでるっていうのに。

何で俺たちが、こんな仕打ちを受けなければいけないんだ。

少年の中にある、痛いのも苦しいのも全てが飽和して、自分さえも他人さえも胡乱になって、

――俺たちが何をした。レンが何をした。

お前たちの都合だろ。

身勝手な都合だろ。

――ずっと、ずっとずっと暗い、寒い場所にいたんだ。お前等に閉じ込められて。こんなに陽の光を望んだ子が。何でだよ。何でそんなに脆いんだよ。

――苦しんで死ねよ。

――もがいて死ねよ。

――這いずって死ねよ。

――それだってまだ足りないのに。

何でレンはこんなに死にそうで、動かないんだよ。

――全て奪うのか。

少年は覚束ない足取りで通路を引き返した。

遭遇した動くもの、全てに銃弾の鉄槌を浴びせかけた。

人も、子供も、大人も、女も、男も、老いているものも、そうでないものも、白衣のものも、そうでないものも、逃げるものも、恐れるものも、慈悲を乞うものも、そうでないものも、全てを、全てを。

気がつけば全身は返り血に塗れ、白眼は赤く染まり、白濁した白い眼のみ、本来の色を残していた。

視界が、赤く濁った。

滲んだ視界でも、彼女の姿のみ鮮明に写る。

——レン。

思い出したんだ。やっと。

たった一人の肉親。

彼女の傍らに寄り添った。

隣に寝そべって、手を繋ぎ、このまま彼女と同じところにいた方がいいのと思った。

呼んで欲しかった、もう一度名前を。

「……………ああ」

——もう、どうでもいいや。

その内、施設の何処かで爆音が聞こえてきた。通路の奥が爆ぜた。何処かで何かの事故がおきたのか、もう制御するものが居ない、これが地下の牢獄の末路だ。

噴煙を湛えながら、火の手は迫ってきた。

少年は死にかけの彼女の隣で、火の揺らめきをぼうと眺める。レンはもう、息も微かだ。

あの火に共に飲み込まれたら、彼女と一緒に居られるか…そうしたら、永遠に共に在れるだろうか…

また、爆音が響く。今度はすぐ近くだった。

生への執着はなかった。

でも、彼女の真っ青な顔を顧みたとき、彼は思い出した。

——どうか、生きて、生きていて、どんなときでも、どんなことがあっても生き抜いて、そしたら、私は、とっても嬉しいな。すぐ…すぐ。貴方に分かるかな、この気持ち。

——お願いだよ。おにい、ちゃん…生きて…

彼女の、最後の願いだ。

彼女の願いを叶えたかった。それは今も同じ。

もう殆ど虫の息のレンを抱えて、少年は立ち上がった。

背後には焰が迫る。爆風が背に当たる。

「……………」

怒涛の如く背後から爆発が巻き起こり、細い身体は投げ出される。少女の身体は爆発の近くの上方に、少年は下方の出口の近くに。

硬質の床に叩きつけられ、何度か跳ねる。

「あっ…っぐ………」

背中に軋むような痛みを感じた、いいや、それだけじゃない、身体の各所に、鼓動の速度でずきんずきんと痛みが迫る。

頭が、くらくらした。

「だ、め…だ………」

濁った視界に見える彼女へと手を伸ばした。

彼女は血を撒き散らし、苦しそうに呻く。

這ってでも彼女へと辿り着こうとした。

また、何かに亀裂の入る音がした。

地震の様な地響きが轟く。

どこかで、爆音がした。それと同時に、天井が崩れ落ちてきた。

————ぐしゃ。

…何が、起こったのか、理解できなかった。

目の前の光景が、何なのか。

それから導き出される結果は、何か。

「あ……………」

間の抜けた声。

つー、とそれは瓦礫の隙間から出て、こちらへと音もなく忍び寄ってきた。

それは、広がる、広がる、赤い絨毯。赤い、水溜り。

その水溜りに、ぼしょんと、何かが波紋を立てて落ちた。

それは、細く、白い肘のところで寸断された

——腕………

切断面からは、どくどくと血液が流れ続けている。割れた剥がれた爪。指は微動だにしない。

——神様

カミサマ。

何

色

こんなのは

これ

は

腕

きつと

やっぱり

でも

見え

違う

違う

————違う違う違う違う違う。

目の前の瓦礫の山を見ると、隙間から、細く色素の薄い、糸の

59 覚悟

――過去の夢を見ていた。

夢はいつも後悔を纏う。残るのは暗い残滓、苦い寂寥。黒髪に隻眼の青年は囁いた。

「ごめん…思い出せないんだ…：君の名前」

――どうか。

「終わらせるから…許してくれなんて、言わないから…：」

――それでもと。

「もう…」

――たった一人の肉親だった。

「どうか、今度こそ、幸せに…」

それだけが願うこと。

自分にできることをする。自分がしなくてはならないことをする。

リートはそう決心した。

――だから。

「セレナータ・カングルツペ…」

呟くのは、ある人物の名。

彼女が何を考えていようと、自分は彼女を止めなくてはいけない。どうしても、何ででもない。理由なんてない。

ただ、彼女にもう暗い道を歩んで欲しくない。同じ数奇な運命を辿ったものとして。

返り血を浴びた服の袖で、顔を拭う。

血は固まっていて、臭いだけが皮膚にこびり付いた。きつと一生、血生臭い臓腑の幻臭は付き纏うだろう。

――それでもいい。

時間は限られている。

――…俺が、俺でいられる内に、どうか…

その為に、ここにいてくれと願う。

小さく息を吸い込み、リートは目の前の錆付いた扉を開けた。

リートは気がついていた。

時折、記憶が抜け落ちる瞬間があること。

不定期にそれはあって、けれどどうすることもできずに放っていた。

最初に気がついたのは、ある仕事の最中。

護衛の任務で、敵対する側の者達と衝突したときだった。

気がつくと、視界は真っ赤だった。

靴に掛かり、服の裾を濡らしていたのは他人の血。壁に飛散し、床を伝うのは鮮烈な赤。周囲に散らばるのは原型を留めない骨片、髪の毛、どろりとした粘膜の成れの果て。

弛緩した指先が引いた引き金は、虚しく弾倉が空であることを告げた。

臓腑の臭いと、生暖かい空気。

あれと同じものを、以前にも何処かで感じなかったか。

やっと思い出したのは、果てしなく白い記憶。保身の為に閉じ込めていた空白の時間。

現と夢と過去が混沌と混ざった世界観。それが乖離した瞬間。

——やはり、自分は人殺しだった。

閉ざされた実験場で、来る日も来る日も飽くことなく殺し続けた。自分たちを飼っていた奴等は人を殺させること、人間を断ち切ることとして、死刑囚の処刑を自分たちに行わせた。飛び散った汚物混じりの血痕を舐めさせられた。死後の後処理さえも、実験の過程に入っていたのだ。

真実を思い出したときの、鮮烈な衝撃。

何故、自分は忘れていたのかと責めた。

けれど自衛のためならば、忘却が一番の方法だったに違いない。

——忘れていた頃には、もう戻れない。

偽りの夢を見ていることが幸せなのか。辛辣な現実には打たれるのが

本望なのか。

——そんなこと、選べるわけない。

自分たちにあんなことをさせた軍警察を、潰してやろうかとも思った。人でなしの人形の烙印を押された自分ならば、上手くすれば軍警察を傾かせることも可能かもしれないと。

——でも、それはできなかった。

名前も思い出せない少女が言った、生きていて欲しいの一言。

そして、美しい黒髪の少女が言った、逢えて良かったの言葉。

そのどちらもが、この場にリートを繋ぎとめた。

託されたものと願いを無碍にはできない。大切なものは裏切れない。

ただ、自分の中に憎悪という人格が眠っていることも事実だった。実験が終わった今でも人殺しを繰り返す殺人鬼の人格があることも。

——だって、愉しいんだから。

泣きながら笑いながら人を肉片に変えることがどうしようもなく好きなんだから。

そのどちらが本当の自分かなんて、分からない。

人を殺したことは罰せられなければいけない。けれど、その断罪を受けるその前にどうしても為すべきことがある。

どうしてあの時、気がつかなかったのだろう。

屋敷での護衛の依頼。侍女、セレナータ・カングルツペ。——軍歌を意味する呼び名。

何処かで見たことがあると思ったのだ。

あの日、あの場所で、確かにリートは彼女と会っていた。

記憶を封じ込めていたのは、彼自身だ。

もし推測が当たれば、彼女は彼よりももっと軍に憎悪を抱いている。復讐を考えているかもしれない。だからこそ、あんなにもあからさまな行動を仕掛けたのではないか。

本当は、そうでなければいいと思っている。只の気苦労であればいい。しかし、そうはいかないことも承知している。

——だから、確かめに行く。そして、出来ることならば

「∴終わらせる」

リートは彼女を殺すことさえ厭わなかった。

60 糾弾(上)

――逃げて、逃げて、逃げて。

何から逃げているのか、何を恐れているのか分からなくなってしま
うくらいに。

忘れたくて、逃げて。…忘れられなくて。

追いつかれたら、過去に食い殺されてしまうから。

追いつかれたら、自分が許せなくなってしまうから。

追いつかれたら、もうそこに自分はいないから。

逃げて、過去に食い殺されないように。

逃げて、自分が許せなくならないように。

逃げ切ったそのときに、きっと自分は跡形も無くなってる。――
でも、逃げる。

追いつかれないように、逃げ切らないように。

自らを生殺しにして、ずるずる、ずるずる。

けれど、足音は迫り

『私』はいつも、顔の無い姉さんに捕まって、逃走劇に幕を降ろす。

茫洋と囁いた声音は掠れていた。

「……………ああ、また…貴女か…」

寝台に広がる黒髪は、上質な絹糸よりも美しい。憂いを佩びた人間
の形質上在り得ない深黒の瞳は、胡乱げに焦点を合わす。

吐息を含み、瞬きを繰り返した。

静止していれば、精巧な人形と見まがいそうな整った面は、横髪に
覆われる。

「…………ごめんなさい」

レインは小さく呟いて、寝台から身を起こした。
夢の名残は、未だ鮮明に脳裏に焼きつく。

「許してくれなんて、『私』は、……、ごめんなさい……違う……の
に……姉さん……いや」

——何だ、これ。

自分でも何を言っているのか理解しきれていなかった。

胸騒ぎが収まらない。

重たい空気は密度を上げて、肩に圧し掛かる。

少女は一度、空気を思い切り吸い込んだ。

終わらない独白は収束していく。

「……違う……違う……の？ 何が……」

頭の何処かで警報が鳴る。

——そこは『駄目』だと。考えるなど。

「おねいちゃん……？」

高い声音に、レインは振り返った。

見慣れた部屋の戸口に立つのは、黒髪にポニーテールの少女。

——誰だっけ……？

疑問は、すぐに氷解した。

——ああ、『自分』の義妹だ。

「おねいちゃん……？ どうしたの？」

少女は切迫した表情でレインの元まで駆け寄った。

そこでやっとレインは、はっとした。

「あー、ごめん……寝惚けてたみたいだ……」

「え……？」

「おはよう、ユカリ。こんな朝早くからどうかした？」

見ると、彼女は学生服のブレザーを着ている。

今日は平日だ。これから登校するつもりだったのだろう。

「あ、あのね。李清さんがね、ちょっと急な用があるんだって。だから急いで降りてきて欲しいって…」

「うん。分かった。…着替えるかな」

欠伸を噛み殺し、レインはベッドから足を下ろす。

「私は学校だからもう行くね。…あと」

思い出したようにユカリは振り返って、レインへと向き直った。

「何？」

「昨日は有り難う。何か私のわがままに付き合ってくれたみたいで…うん」

目線を逸らし、ユカリは爪先のローファーを弄り始める。

微笑してレインは応じた。

「良いんだよ。自分もちょっと、ユカリに悪いことしちゃったって思ってたし。あんまり無理しないようにするさ」

「うん。…じゃ、行って来るね」

「行ってらっしゃい」

朗らかに笑い、ユカリは部屋を後にした。

階段を駆け下りる音を聴きながら、レインは軽く伸びをする。

「もう、子供じゃない、か……」

レインは寝台から降りて、手早く着替えを済ませた。

「――で、用事って？」

「まあ、取り敢えず席に着いて頂戴」

指示通り、レインは席に着いた。

今日の李清は、少し様子が変だ。

何かに緊張しているのか各々の動きがぎこちなく、常に感じ取れる流れるような所作も今日は見られない。

――…凶兆じゃないといいけど…

「李清…どうしたの？」

「いや……その、何でしょうね」

言動まで変だ。

レインは久方ぶりの嫌な予感が蜂起した。
彼女は自分に何か隠している。それはきっと：

「リートのこと……？」

その名前が出た途端に肩を震わせて、黒髪を撥ねさせる李清。
どうやら凶星だったらしい。

「あいつがどうかしたの？」

「……」

沈黙の後に吐き出たのは、溜息。諦めの入り混じる倦怠の溜息だった。

次に紡ぎだされる言葉は、重々しい。

「…そう。リートがね、所在が分かったのはいいんだけど…」

出でる言葉の後にあるのは、暗雲。

「見つかったんだ？」

「ええ。…というより、知らせるのが遅すぎたというか……」
はつきりとしなない喋り方。

彼女が遠まわしな言い方をすることは滅多にない。

「——言いたくないんならいいんだよ。おれが言うから」

「——！！」

聞き覚えのある声に、レインは瞬時に振り向いた。

よもや…と感じた予感は的中する。

居間の入り口に構えるのは、赤髪の青年。

「クロード、…どうしてここに……」

もう何度目の邂逅になるだろうか、彼についてはレインも未だに善悪の判断が出来ない。

「そこの不法入国者の気まぐれだろ。お招きいただき有り難う」

皮肉っぽく笑うと、青年は黒髪の少女の座る席まで歩む。

李清は自らの腕をかき抱き、俯いた。

彼女があれほどに毛嫌いしている軍警察の人間を家に入れるとは、
一体どういう風の吹き回しなのか。

そして、レインにとってはクロードが次に発した言葉の意味も理解できないものだった。

「じゃあ、少しレインさんを借りていくね」

「は……？」

「質問は受け付けないよ。……今から君に会わせたい奴がいるんだ」

青年の言葉に、思わず横目で李清を窺う。

彼女はやっと目線を上げたが、顔は気乗りしないさまがよく表れている。

重たげに唇を開き

「……安全は保障するけど、もしも何か変なことされそうになったら殺が……半殺しにでもしておきなさい」

「……」

――今、絶対に殺害と言おうとした。……という指摘をレインは一応飲み込んでおく。

「ひっどいなあ。今のところは、レインさんに手を出す程には切羽詰ってないし」

「……ムカつく言い方をするな」

少女は目つきに嫌悪を滲ませ、座る女人は頬杖を付いて言う。

「レインも会いたい人よ。いいからそいつに先導させなさいな。その為に高い代償を払ったんだから……ね」

「何、取引だよ。……じゃ、借りていくから」

「当事者を放って勝手に話を進めるな」

レインは黒髪を流し、溜息を一つ。

眉根を顰めて二人を見やった。

「そもそも、誰に会わせるっていうんだ」

「会いたかったんじゃないの？ 君と同じ黒髪の希少種に」

レインの気だるげな雰囲気は、クロードの一言で一変した。

「まさか……」

「……いいから着いて来てよ。信用できないんなら、多少の武装の準備を待っけど」

青年の言葉は曖昧なものだったが、明らかに表情は事実を肯定している。

レインは首を横に振った。

「…必要ない。すぐ行く」

「そこなくっちゃあね」

クロードは横倒しにした三日月の笑みを浮かべ、出入り口へと身を返した。

60 糾弾(中)

赤髪の青年に先導され訪れたのは、思ってもみない場所だった。軍管轄区である第十区。

レインは軍の敷地内に入るのは当然ながら初めてで、敷地内のその施設：軍の病院に入るのも初めてだった。

院内は、思ったよりもずっと静かで、看護師の女性姿も窺えた。他にも、怪我の療養中であろう者達がいた。

クロード曰く、退役軍人が主だが、現役でも体を負傷したものは恒常的に医療施設の世話になるそうだ。

患者の殆どが軍人であろうことは、物腰や容姿を見ていれば分かった。

レインはクロードに手引きされ、廊下を歩む。

好奇の視線が幾度も彼らに向けられたが、院内の彼らはすぐに顔を伏せて見なかった振りをした。

おそらくだが、やや前を歩くクロードの軍服礼装の称号数を見た為だろう：とレインは推測する。

「ここだよ」

「……………」

やがて、廊下の突き当たりの部屋の前で立ち止まった。

ここが件の彼女――フレイアの病室だと言う。

正直、実感は湧かなかった。

クロードは引き戸をスライドさせ中へと入り、少女も彼に続いた。室内は特に変わった様子もなく、世間一般的な病室と同じように白で統一されていた。床には塵一つない。

ただ、一つ相違点を挙げるとすれば、部屋には窓がなかった。

その所為か、蛍光灯の灯りの人工的さが増しているように感じられ、白い部屋の中心に居る彼女は、浮き立って見えた。

「フレイア」

クロードが呼ぶと、彼女は来客へ振り返った。相変わらず、レインには劣るものの、別の意味での美しい造形。喩えるならば、より女性らしい物腰と顔つき。

彼女の淡色の瞳が丸くなっている。驚いているのだろうか。

「君……」

彼女の姿は少し痩せたものの以前となんら代わりはなく、大分はつとした。

少なくともこうして見る限りは拷問を受けたり、手酷い扱いを受けているようではないようだ。

彼女の視線はレインに縫い付けられ、彼女を凝視していたが、すぐに隣の軍服の男へと移った。

「……どうということ？」

フレイアの鋭い詰問。

クロードは淀みない問いを受け止めながらも、態度には何ら変わりが無い。

「それは本人に訊いた方が早いよ。おれはもう行くから、二人でゆっくり話しなよ。……それから、これを返す」

クロードはベッドまで歩み寄り、懷から錆びた鍵を取り出し差し出した。

古びた鍵だ。レバータンブラー錠用の鍵で、型も旧式のもの。

フレイアは眉を顰^{ひそ}めたようだ。

「いいの……？　この人間斬って逃げるかもしれないよ」

「それは無い」

赤毛の青年は否定を言い切り、ベッドの傍から離れた。

「じゃあ、おれはもう行く。後はごゆっくりー」

あっけからんとした台詞を残し、彼は病室から去っていった。

放任し過ぎのようにも感じたが、レインはあえて呼び止めずに寝台に向き直る。

「フレイア、身体は……」

「大丈夫、ちょっと足撃たれちゃったけれど。それ以外は元気。この環境って結構良いんだよ?」

彼女は宥める様に優しく言い、椅子を勧めてきた。

レインが腰掛けるのを待って、彼女は話し始める。

「さっきの、レヴァの称号：クロードがいろいろと手を回してくれてね」

「あいつが?」

「…うん。今は観察対象ってとこかな。自由は利かないけど、監獄にいるより時よりは比べ物にならない程いいよ。ここは」

「…そう」

レインは彼女の台詞に少しだけ安堵した。

しかし、安堵も束の間、本題に入る。

彼女と会いたかった理由の本懐は、彼女から聞きたいことがあったからだ。

「ラグナ・ティターニアに、軍の情報を流したのは…貴女ですね」

「本人が知リたがってたからね」

フレイアはつつがなく続ける。

「そもそも、あんな凄い剣幕で迫られたら、怖くって」

彼女は肩を竦めて見せた。何気ない仕草にもほっとする。

けれど、安堵していたのは心境の表面だけ。

心の奥底では、縫い留められたように、一つの事柄ばかり考えている。

フレイアはそっとこちらを鑑みた。

「君は、浮かない顔をしているね」

「…：そう、見えますか?」

「うん。とっても。世界の終わりみたいな顔してる」

世界の終わり。現実味のない揶揄だった。

「…感謝している人がいて…」

ぽつりとレインは洩らす。

「助けてもらった、危ないところを何度も、命も救ってもらった」

少女の独白は続く。

「…そのくせ後で礼を言おうとすると、するりと消えちゃう。…気を遣ってたのかもしれない。お礼を言われるのに慣れていなかったのかもしれない。あんまり、感情を面に出さない奴で…怒ったり、喜んだりしなくって。だから困ることもあったけど。…でも、それでもあいつと一緒にいる時間は苦痛じゃなかった…」

不思議なものだ。

言葉に出してみると、少しだけ胸が軽くなっていくのが分かる。

「あいつは、自分の知るあいつではないのかもしれない。けど。自分の感じたあいつを信じていたいんです…」

静観する相手に、どれ程心情が伝わったかは分からない。

むしろ、最後のあやふやな部分は、自分でも違和感が残った。

——でも、これでいい。

ふっと、手の甲に感触を得た。

座った膝の上で握られているレインの拳には、織手が重ねられている。

冷たい、さらりとした手だった。

目を細めて、フレイアは言う。

「信じることは、強い人じゃないと出来ない。…君は強いね」

「強い…かな…」

少女の目の前の女性はしっかりと頷いた。

「強いよ。前に会ったときに言ったことを覚えてる？ 疑うことは誰でも出来る。…でもね、信じることは難しい。自分を委ねることだから。…だから、とても難しい」

「…委ねる？」

レインは繰り返して訊く。

「そう。きつとね、君は探しているんだよ。自分を望むままに委ねられる人をね」

——それは。

「…無理です。自分にそんな人は現れっこない……」

「どうして？」

心底不思議そうにフレイアは問うた。

レインは小さく囁く。

「……死に損ない、だから。卑怯者だから。普通の人とは、違う」

言葉は途切れてふつつりと途絶えた。

けれど、雰囲気になじめないやうな微笑をフレイアは返した。

「仮に君が君の言う通りの人間だったとして。…死に損ないは人に必要とされないの？ 卑怯者は人から愛されないの？ 贖いきれない罪と償えない罪はあるけど…人を想い想われてはいけない人間はいないよ」

レインは、はっとして顔を上げる。

目の前には、彼女の慈愛に満ちた貌があった。

「……だからか……」

「貴女は、自分の姉さんに似てる」

「ふふっ…さぞかし気まぐれなお姉さんだったんだろうね」

くすくすと笑い、フレイアは言った。

レインは続ける。

「確かに、気まぐれで、でも陰で人一倍努力してて、自分を追い詰めて、何でも一人で背負い込んで…それで、人知れず責任を感じる」

黒髪の少女はベッドの端を見つめた。

「…貴女と、同じ」

初めてフレイアと会ったとき、雰囲気が似てると感じた。

——姉さんとは見た目も違うのに…変だと思った。

でも今なら分かる気がする。

彼女たちは、在り方が酷似していたのだろう。

一つ、胸に落ちるものがあった。

ずっと付き纏っている幻影に告げる。

――姉さん、確かめるよ。目を逸らさないで、確かめるから。
フレイアと最後に会った、あの時見たもの。

本当にそうなのであれば、何という因果だろう。

「知ってたんですね：知っててわざと、自分が『彼女』と『私』と『自分』であると言った」

「何のことかな？」

彼女は白を切るつもりらしい。

「知ってたんでしょう。自分は性別を認識出来ていなかったって」
「本人が自分はそうだと思うのなら、思ったとおりになるのが筋だよ」

諭すように言うけれど、レインは退かない。

「でも、『私』は事実を曲げ続けただけだ」

「君の保身だったんだろう？ 自らを『私』じゃないだと言い聞かせることが…」

諭す口調に、少女は頷く。

「……ええ」

「だったら、必要なことだったんだよ。でも、これからどうしていくかは君の判断次第だ」

レインはそっと胸に手を当てた。

硬い布越しに伝わってくるのは、確かな一つの事実だ。

自分が見ない振りをして隠してきた事実。

レインは息を吸って、問い掛ける。

「…貴女が持っていた、あの刀は、どうやって手に入れましたか？」

フレイアの答えは、行動だった。

先程クロードに渡された鍵を握り締め、レインに手渡す。

「これは……」

「君に渡しておくよ。この鍵が収まる場所に、答えはあるから」
鉄臭い無機質な物体から、人肌の温かみが伝わってきた。

「…あの刀は、貰ったんだ。もう数年も前になる」

彼女は壁の向こう、外の世界へと思いを馳せ、
「君の養父：ディセクター・ヴィアルドレッドにね」

60 糾弾（下）

廊下に出ると、長身の青年が壁に凭れていた。

レインは呆れながらに示唆する。

「盗み聞き？」

「嫌だなあ、おれ、そんなに聴力ないんだよ」

「…どうだか」

長い黒髪の少女は用は済んだとばかりに、フレイアの病室から遠ざかる。

——彼女はあれ以上、何も語らなかった。

ならば、答えは自分で探せということだろう。

一人で歩み進む彼女の背に、不躰な声が掛けられた。

「どう？　彼女は君に鍵を渡した？」

「…やっぱり聞いていたんじゃないか……」

「それは見逃して欲しいな。彼女をここに移動するの、結構手間取ったんだから」

言い、クロードは後に着いてくる。

「……………」

元は牢獄に居たと、彼女は言った。

レインも噂だけなら聞いたことがある。軍警察…もとい軍の施設の地下には監獄があると、そこでは人権を無視した拷問と尋問が繰り返されていると。

定かではない、怪談話だ。

だが、知り合った人物が捕らえられてみれば、史実の通りでなければいいと願う。

クロードは、フレイアに情を掛けたのだろうか。

考えてみればみる程、どこか軍人らしくない彼は、規律遵守を掲げる集団に似つかわしくない印象だ。

今更、彼が軍警察の人間であることを否定することはしないが。

——ただ、彼が軍部に順応しているかは別問題だろう。

レインは唐突に開口した。

「クロード、お前さ」

「ん？」

「…友達少ないだろ」

レインは振り返らずに問う。

暫くの間が空いたと思ったら、追いかけてきたのは青年の笑い声だった。愉快で堪らない、といった風の。

「おもしろいこと訊くね…どうしてそう思うの？」

「お前性格悪いから」

黒髪を流しレインは振り返った。

やや身長差のある青年の、目を直視する。

「…変な奴」

「それって、褒め言葉って受け取っちゃうけど？」

「勝手にしろ」

院内の白い廊下を歩きながら、美貌の陰は顔を燦らす。

憂いの原因は、今も掌に握られていた。

フレイアに渡された、鍵だ。

赤髪を揺らし、青年はレインに問いかけた。

「気になる？ その鍵」

「…自分はそんなことよりも、ディセンダーの居場所の方が知りたい。どうやったら吐いてくれるんだよ？」

「…ん、俺と付き合ってくれたら教えてあげようかな」

「ムカつく。…上から目線なのが特に。男に言われると吐き気がする」

「少し本気だったのに……」

大仰に肩を竦め、青年はやはり張り付いた笑みで笑う。

レインは無視して再び廊下を歩み始め、階段を降りたところでもまた振り返った。

「クロード、この前、自分を尾行してただろ？」

「うん」

悪気など一片もないという顔で、青年は肯定する。

「……お前が自分にとつての害悪なのかまだ判断できないけど……どの道自分を利用しようっていうんならお断りだよ」

「どうして？ 利用し利用される相互関係って素敵じゃない？」
手摺に半身を預け、クロードは問うてきた。

「即物的な関係は嫌いじゃないけど。……勘違いされるのは嫌いだ」
レインは経験してきた。

顔を見るなり自分を性欲の吐け口としか見てこない大人。偽りの
純粋な愛を囁き続け、付き纏うようになった者がいることも。

騙されてきたから、人間を簡単に信じることは根本からして無理
なのだ。

……全て、この顔の所為と言えてしまえば話は早いのだが。

レインの人生は、彼女自身のものではない。

一度、自分のものは再起不能なまでに叩き潰された。やっと形
をそれらしいものまで直したのが今の『アレイン・ヴィアルドレッ
ド』という人間だ。だからもう、誰にも壊されたくないし、誰にだ
って、土足で入り込んで欲しくない。

「……上手いかないな」

「何が？」

「お前らみたいなのが、自分の邪魔をするっていう話だ」

「邪魔してるつもりはないんだけどね。やっぱり迷惑？」

黒目を伏せ、素直に頷く。

「うわ」

レインは黒い髪の毛を引き、そのまま階段を降りてロビーへと向
かった。

彼女は立ち止まり、振り切るように告げる。

「もういい。勝手に帰るさ」

「……いいの？ 訊きたいこと、訊き出したいことあるんじゃない

の？」

クロードのの疑問に、溜息混じりに言う。

「あるに決まってる」

「じゃあ、どうして？」

「お前が教えてくれるとは、最初から期待してない。さっきのも冗談で流されたしな…」

「——いいよ」

思いがけずあっさりとした返事が落ちてきた。

一拍程、沈黙が空く。

「え……？」

レインは青年の顔を凝視する。

——本気なのか、ただの冗談か：

「いいって。知りたいんでしょ？ その鍵がなんなのか、君の養父は何処にいるのかも教えてあげるよ。…ただし、交換条件だけど」

クロードはレインを追い越し、入り口に立った。

少女の退路を塞ぐようにして、目の前に立つ。

しかし彼の顔に、今までのにこやかな笑みは含まれていない。

「——少し、手伝って欲しいことがあるんだよね」

それは、あまりにも感情の希薄な声だった。

61 送迎(上)

リートは重い扉を開き、一步前に踏み出した。

中は薄暗い。けれど足音の反響の仕方からして、大分広い空間だろう。

黴と鉄臭い匂いが入り混じる、不快な香り。火薬の香りもした。照明のスイッチは手の届く範囲にはない。軋む音がして扉が閉まる。

同時に、声が響いた。

「いらっしやいませ——」

目の前が、急に明るくなる。

眼が眩むのを手で庇い、リートは片目で前を見据えた。

まず目に飛び込むのは、積み上げられた箱。

多少知識がある者ならばすぐに分かる、銃弾の莢莖を入れる為の物だ。そして奥には砲台の一部、全時代の大型の重火器が乱雑に積みまれている。幾百ではない、何千に達するかという程の武装が、広い空間に積み重ねられている。

歴史を積み重ねた迫力に、思わず圧倒された。

「これ程の武器：全部人殺しと抑圧に使われていたんですよ」

高い声音で、当たり前前の事実を述べる人物。

彼女は空間の中央にいた。

ただし彼女一人ではない。彼女の足元には、仰向けになって彼女に銃口を向ける男がいた。鮮やかな赤髪に軍の常装軍服を着ている。見目は若い青年だ。

彼女、以前傭兵たちの前に侍女として姿を現した女傑——カンダ Luppe は以前の侍女服ではなく、男装と見紛う服に、上着の型を悪くする程の重火器を忍ばせていた。

赤毛の青年を押し倒して、同様に銃口を彼の額に突きつけている。
――傍目からでも分かる。膠着状態だ。

しかし第三者として存在するリートには、目の前の状況がどちらに有利かを判断できた。

――明らかに軍の青年の劣勢だ。

「……馬鹿みたい」

カングルッペは言い、長いプラチナブロンドの髪を揺らす。

「貴方も、私も……奴等の私腹を肥やすために育て上げられた、家畜」

リートへ振り向く彼女の目には、何の感情も浮かばない。
薄い色合いの瞳は、カメラレンズのよう。無機的で丸い。

「――ねえ、そうは思いませんか」

問うカングルッペに、リートは真っ直ぐに目線を送った。

真っ直ぐに人間味のない視線を受け止める。

――以前の自分はきっと、彼女と同じ瞳をしていただろう。

「……思い出したんだ。あの日、地下の研究所が崩壊した日。俺たちは一度だけ会っている」

「ええ」

頷きもせず、口先だけで彼女は肯定した。

「……ハートレス、なのか」

問いの答えは、暫くの沈黙の後。

カングルッペは軍の青年に銃口を向けたままに

「……正確には、私たちはパーソンレスと呼ばれていました」

――パーソンレス……言うなれば、人でなし。

ハートレスと同様、人間味の欠片もない名称だ。

リートは気がつく。

――彼もそうだったのだ。

望んで人でなしとなったユウという少年。彼もパーソンレスだった。

「毎日、毎日……人体実験と身体増強手術と射殺訓練と、薬の服用。

名前さえも剥奪されて…ずっと、繰り返していました…死にたくて死にたいのに、死ねなくて……」

機械的だった口調が、僅かに熱を帯びる。

溶岩のようにどろどろとした怨嗟の熱を。

「一体、……何を」

足元の青年を気にしながら、彼女は答えた。

「復讐：そんな安っぽい言葉で語りきれない程の殺害を、殺戮を、蹂躪を、絶望を、後悔を、不甲斐なさを、屈辱を、陵辱を、陰惨さを、自らの浅慮さを、徹底的に刻み付ける」

毒を滴らせる言葉。

——人間一人は殺せそうな猛毒に等しい呪い。

カングルッペは消化しきれない憎しみを告げ、一息。

「貴方を、探していました」

リートは気持ち前に出る。

「…何故」

「貴方なら、私の気持ちを理解してくれると思ったからです」

——それは違う、とリートは内心で告げた。

他人の気持ちなんて理解できない。分かるのは自分の中にある憎悪だけだと。

「買い被りだ」

「いいえ。初めて会ったときと変わらず、再び見えたときも、確かに貴方の中に憎悪は眠っていました。…貴方はそれを自覚したくないだけです」

零度の言葉に、今までの不確かな感覚が逆流する。

——思えば、記憶が途切れる瞬間があった。

彼女の名前を、思い出せなかった。

内なる何かの存在を感じることがあった。

——それは、つまり……

「そうでしょう？ リート・セディシア」

「……お前、俺の妹を知っているな」

「あの可哀相な女の子ですか。あれは不幸な事故でした」
女は淡々と述べる。

「不幸な、事故……」

「崩落事故。彼女はあれに巻き込まれたのでしょ

う。——そう。リートは知っている。

『彼女』は瓦礫に押し潰され、死んだ。記憶は不鮮明で思い出そうとすると雑音が混じる上に、回想はいつも、頭の中を掻き回される不快感が伴う。

「彼女の仇を、討ちたいとは思わないのですか？」

「思わない。彼女はそんなこと望んでいない」

「嘘です。彼女だって軍を憎んでいました」

カングルッペは言い切り、目下の青年へと視線を移す。
吐き捨てるように、一言。

「こいつらがいるから……」

「お前のしてることは、只の無差別殺人だ：フレイアはお前の罪を被せられたんだぞ」

軍と傭兵間に起こっていた事件全てが、カングルッペの仕業だとリートは見抜いていた。

「彼女に罪を勝手に擦り付け、勝手に納得したのは軍ですよ：警部だって、最後まで懐疑的だったというのに、彼女は体のいい生贄にされただけ」

冷たい、淡々とした声音を聞いていると、対照的に感情が昂ぶって感じられた。

リートは苛つきを含ませ、言い放つ。

「元凶はお前だろう。関係のない傭兵まで巻き込んで、武器と目撃情報を改竄したのもお前だ」

やっと、カングルッペが感情らしいものを発露した。

それは苦しみや憎しみ、怒りを全て合わせて飽和量に達したかのような、壮絶な笑み。

口元を禍々しく歪め

「残念でした。証拠はないんですよ」

彼女が、言い終わるか否か。

リートは既に銃を抜き出し、引き金に指を掛けていた。

「……もううんざりだ。復讐？ 仇？ ふざけるな。俺をそんなものに巻き込むな。これ以上ハートレスを貶めるな」

リートは眉を立て、厳しい口調で言い詰める。

しかし、カングルツペは薄い色素の瞳を細め、顎を引く。

かくんと首を傾けるさまは、糸の切れた人形を連想させた。

「…何で？ 貴方も、愉しそうに殺してたのにね」

「ハートレスを止めてから、俺は誰も手に掛けてない」

「――嘘よ」

「嘘じゃない」

「……忘れているだけ。殺しては忘れるでしょう？ 都合がいいのね？ 貴方はハートレスを止めていない。止めることが出来ないでいる。ハートレスのままの自分から目を逸らしている。そうでしょう？」

乾いた音が木霊した。

カングルツペの黄金の髪の一束が、宙に舞う。

銃弾を放ち、リートは真っ直ぐに銃口を向け直した。

「次は外さない」

「…私を殺せる？ 貴方と同じ苦しみを味わった私を」

「お前の言う通りだとしても…どの道、俺はお前を許さない」

決意の塊である言葉に、言われた彼女は狼狽した。

無表情の仮面を捨て去り、ヒステリックに叫ぶ。

「どうして…貴方は、おかしい…何でよ。何で…貴方なら、分かってくれると…どうして、何で、貴方の敵は軍でしょう！」

叫び、細い腕で軍の青年に銃口を突きつける。

対し、リートは僅かに落ち着きを取り戻した口調で論じた。

「本当は、もうどうでもいいんだ」

「え……」

カングルツペは呆けたように口を開き、青年の言葉を聞いた。

「軍も、敵も、…俺が大切にしてるのは、彼女の言葉…意志だ。大切だから、守っていたい。お前とはその意味の方向性が違っただけだ」

「分からないよ…」

もはや完全に崩れた彼女は、裏返った声で呟く。

泣く前の子供のような、か細い声。

「でも、そんなの………」

行動は、同時に起こった。

「――絶対、認めない」

カングルツペが無造作に振り上げた銃から出でた弾は、軍の青年でもリートでもなく、辺りに積み上げられた箱の一つを穿った。

葉莢や、可燃物が詰め込まれた原始的な爆発物へと。

――途端、視界は白い光に遮られた。

61 送迎(中)

鼻をつく埃の臭いと硝煙臭さ。

違和感を感じて、リートは瞼を上げた。

――体が重い。腹部から肩にかけて、体の表に重石が乗っているような。

僅かに重みが動く気配を感じたのは、目の焦点が合ってすぐだった。

見ると、黒い何かが自分の上に横たえている。それが人間だと気がつくのにも、自分の知り合いだと気がつくのにも、さして時間を要さなかった。

リートはすぐさまに起き上がる。

「…レイン？」

思わず、柄に合わない慌てた声を出した。

「…ああ」

返事の声は間違いなく知っている本人のものだった。

青年が呼んだ少女は上半身を起こし、彼の懷から体を離す。

――どうして…？

レインの表情は長い黒髪に隠れてよく読めない。けれど、震える唇が言葉を紡いだ。

「良かった…」

心の底から洩れるような安堵の声。

「お前、どうしてここに…」

辺りを見渡すと、木片が床に散らばり、壁のコンクリートは一部崩れている。

広がった筈の武器庫という空間は瓦礫によって分断され、今居る場所も瓦礫に囲まれている。孤立した箇所。

レインはリートの体から降りると、その場に座り込んだ。

枷がなくなった青年も、同時に床から身を起こす。

青年の目の前の少女は泣きそうな顔をしている。

——何故だろうか。

「お前は馬鹿だよ……リート」

開口一言目に、少女はそんなことを告げる。

「……なに、一人で突っ走ってんだよ……死ぬかもしれないのに……くそ」

苛ただしそうな口振り。

普段は見せないレインの様子に、リートは内心で驚いた。

「……レイン……？」

「馬鹿かリート！ 死んでもいいって考えてるのか！」
取り乱し、叱咤する。

「お前は勝手なんだよ。何でだ……別に、何があったのか、知りたかったわけじゃない……けど、いきなり居なくなつて、そんなの……は……」

声は瞬く間に小さくなっていった。

「どうしたら、いいのか……」

少女は顔を伏せて、爪を立てて髪を引っ掻き、美しい髪は縛れる。
青年は僅かに目を見開いて、明らかに狼狽している目の前の少女を見、

——ああ。そうか……

僅かな逡巡の後に、髪に埋もれる彼女の纖手を掴んだ。

そのまま、引き寄せる。

「ごめん……レイン……」

「……、……」

腕の中の少年が身を強張らせたがそれも数瞬のことで、すぐに緊張は解けた。

華奢なレインは脆く感じられ、少しでも腕に力を入れたら壊れてしまいそうな程だった。

軽く触れた肩先から、温かみが伝わってくる。

——生きている。

あの時の彼女の体の断片は氷の冷たさだった。死の冷度だった。けれど、今腕に抱く彼は暖かい。生きているものの温度。

感じることで、どれだけ安心したことか。

リートはぎこちない抱擁からレインの髪を梳き、そっと身を離れた。

「……落ち着いたか？」

「……少し、は……」

レインは目を逸らして、ぎこちなく答える。

暫く視線を泳がせた後に、青年の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「ごめん。……勝手なこと言ってるの、自分の方だな……」

「そんなことはない」

「でも、俺だってリートに全てを話したわけじゃない。……ただの傲慢だよ」

「だとしても、いいんだ」

軽く首を振り、青年は片目だけで微笑んだ。

「お前は来てくれたからな」

「……それ、は……偶然……」

言い訳をしようとするが、レインは二の次が言えなくなる。

——偶然、偶然……本当にそうだろうか。クロードの手引きがあったとはいえ、放っておけば自分からこの場に辿り着いたかもしれないのだ。

レインは口を何度か空振りで動かすと、諦めた風に笑った。

「……変だな。自分は。ここまでしたのは、やっぱり、リートに借りを返すためだけ……じゃないんだな」

「レインが助けてくれたのか？」

「いや、つい身体が……カングルッペが爆薬の箱撃ったときは、ぞっとしたけど」

——カングルッペ。

少女も見たらしい。彼女はこの誘爆に巻き込まれたのだろうか。

レインはリートよりも先に武器庫に辿り着いて、カングルッペと軍

の青年の動向を窺っていたという。

「…そしたら、リートがやって来て。自分はじっとしていろって言われたんだけど…」

危ないところだった青年を突き飛ばし、爆風と破傷から退けたということだった。

「思い切りが良すぎるな。お前は」

「だから、つい、だって。考えるよりも先に身体が動いてて…」

青年の指摘に、弁解する黒髪の少女。

リートはそつと瞳を閉じて、頭を垂れた。

「…本当に、有り難う」

「いって、こっちは借りを返せて良かったと思ってる」

彼にとつては、少女を助けたことで恩を感じられる必要はないと思っていた。

自分がそうしたいと告げるからそうしたまでだ。

——だから、以前にも彼女に礼を言われたのは、何か違う気がしていた。

けれど、その時だって嫌な気分じゃなかった。むしろ、彼の気遣いが感じられて心地よかったのだ。

レインは…目の前の少女は美しいと思う。

見目だけではない、人間としての在り方が凜としていて、透き通っている。

だからこそ護りたいと感じたのか、自分でもよく分からないが。

レインは辺りを仰ぎ見、呟く。

「…派手に崩れたね」

「出れそうか？」

「隙間はあるけど、流石に通れないし…むしろこんなにスペースが開いてた方が凄いつていうか…」

瓦礫の隙間が大きく出来たのは、おそらく近くに砲台があった為だろう。それが瓦礫の侵入を阻んで、大きな空洞ができた。それは幸いだった。

——ともあれ、脱出の手段はなさそうだった。

リートは脱出方法を考えていた。よもや崩落の危険性がなくなったわけではない。

レインはというと、共に来た軍の青年のことを想う。

——あいつは：無事だといいいんだけどな。

クロードからの頼みごと：養父と鍵の指す在処を教えることを対価に、ある場所に着いてきて欲しいと頼まれた。それがこの旧軍の武器庫だ。

まさか、そこに探していた人物がいるとは思わなかったが：

クロードにはリートに引き合わせてもらった恩がある。すぐ傍で死なれても、目覚めが悪いだけだ。

思案顔の少女に、リートは唐突に言った。

「——レイン、少し耳を塞げ」

「え？ ……あ、うん」

青年は少女のぎこちない了承を得て、ホルスターから取り出した実包銃を天井に向け放った。

反動を受け止め、弾頭は先を穿つ。

密閉された空間に銃音は轟き、上方からぱらぱらと砂埃とじろが落ちてくる。

耳を塞いでいた手を離し、レインはリートに食って掛かった。

「危ないって」

「……」

リートは立て続けに三発、また弾丸を撃つ。

今度はレインも彼の行動に何らかの意味があると悟ったのだろう、幾分か声のトーンを下げて問うた。

「…何してるの？」

「静かに」

指示通り、口をつむぐ。

暫時。聞こえてきたのは連続の発砲音。

間違いなく態動的な銃を撃つ音だ。

レインは、ここではない場所での銃声にある可能性を巡らした。

「クロード、か……？」

「無事みたいだな。レインを手引きしたのはあっちの奴か？」

「うん……さっきまでカングルッペに抑えられてたけど……騒動に乗じて逃げたのかもしれない……」

レインは肯定の意を込めて頷く。

リートは相変わらずも冷静に状況を解析した。

「……けど、どうだろうな。あちらがどうかしてくれないと、内側から崩すのは危険すぎる」

「そうだな……」

溜息を洩らし、少女はその場に座り込んだ。

そして、伝えたかった大切な一言を告げる。

「リート、……フレイアは生きてたよ」

「……そうか」

「元気、じゃなかったけど、……でもちゃんと笑ってくれた」

「……」

青年は沈黙を返す。

「訊いていい？」

リートは片目で振り向いて、少女の美麗な顔を見た。

「お前は、何処で彼女と出会った？……彼女との関係は？……こんなこと訊くべきじゃないって分かっているんだけど、知らないままにいるのも怖くてな……」

不器用な言い草に対し、彼は瞳を伏せて答える。

「……レイン、俺がハートレスと呼ばれていたことを知っているか？」

「……うん」

——先日、ラグナから聴取した内容だ。

「俺はずっと、地下に居た。……ハートレスを作りあげる地下施設に。ハートレスと一重に言っても、実態は軍の傭兵だ。感情のない、命令を忠実に実行する人形部隊。その養成場だった」

リートは息を継ぐ。

「俺はずっとそこにいた。記憶は曖昧だけどな。だが地震による崩落災害で、外に出る機会を得た。：結局、長い間ずっと下にいたから、上に出てきたところで俺は世間の一般常識さえも知らない。そんな無知なときに、俺は散々身体に染み付いた『殺す』という行動で問題を解決しようとした」

食い物が無いなら、奪えばいい。

金が無いなら、奪えばいい。

：でも、どうやって？　——答えは簡単だった。

「：それで：？」

「駄目だった。やる前にフレイアが現れて、俺を止めたからな」

黒髪に希少な蒼眼をした少女は、確かにリートを退けた。「何だ、そんなことも出来ないのか」——と嘲笑して。

「最初は彼女を殺そうと躍起になっていたけれど、やがて意味のないことだと教えられた」

彼女は彼、に優しく諭すように「邪魔だから、退いてくれない？」

：と告げた。

——そう。フレイアは最初から、彼など見ていなかったのだ。

こちらが勝手に敵意を燃やしていただけ。

「それっきりだな。でも、今でも実感する。彼女が止めてくれなかったら、今頃自分はどうなっていたのかってな」

言い終え、青年は向き直った。

送るのは問いかけの視線。

レインは思わず、言葉のない問いかけに答えていた。

「：：：自分にとっての彼女は、姉さん：に、よく似た他人」

少女は膝を抱えて、瞼を下ろした。

「：自分、さ。もう肉親はいないんだよ。ユカリは妹だけど、血の繋がりは無い。義兄もいるし、義父もいる。けど、まだ付き合いは浅いんだ」

リートは無言で先を促した。

「本当の家族は、皆殺しにされた」

言葉の後に降りる沈黙は重く、底に溜まり込む。

レインはなおも語った。

「…今から五年前、自分が、…いや、まだ『私』が十二歳のときだよ。…姉さんは、目の前で殺された。…肩から、腹までを、…斬られて……」

どうしてだろうか、あんなにも遠い昔の出来事なのに、再認して言葉にしているだけなのに。

「レイン……？」

身体を震わせる少女に、危惧の声が掛けられる。

「…大丈夫、今、言っとかないと…駄目なんだ」

レインは顔を上げ、黒瞳を開けた。

「……時間なんて、よく分かんなかったな…感覚がなくなってたから。でも、私は確かにあの男に……」

灼熱の空気がとぐろを巻く。

轟轟と、炎が音をたてる。

息をする度に喉は焼かれ、不規則な息の音がした。

視界は焰の色だけを残し、歪み、撓^{たわ}み、崩れ去った。

「――あの男に、殺されたんだ……」

61 送迎（下）

——音がする。

果物の皮を剥ぐ音。

べりべり、みちみち、しゃくしゃく。

どの表現も当て嵌らないけれど、一つだけ感じたのは、

——それはひどく生々しく、痛々しい音だったということ。

少女は箱の中を覗き込んだ。

見慣れた顔があると信じて。

けれど、実際にそこに存在したのは、皮を剥がれ、真っ赤に染ま
って、眼球を抜かれた面。

——バケモノ。

自らの肉親に、そんなことを思ったのだから

結局は、その程度なんだよと。——自分の中の誰かが告げた。

「……っはあ」

肺の中に溜まったものを吐き出すように、一度短く息を吐く。

レインは蒼白の顔を歪めた。

——ああ。これはやばい。

心中の危惧とは正に反対に、彼女は言の葉を紡ぐ。

「……自分はさ、偽者にせものなんだ」

リートが訝しげに少女の名を呼ぶ。

「レイン……？」

「偽者だから、幸せなんて望んじゃいけないし……不幸だって、受け止めなきゃ……」

言いながら、思う。

——何、言ってるんだろう…。

「だって、私、が……姉さんを殺したんだから……」

——違う。

違うくはない。

「……許されちゃ、いけないのに……」

——ああ、駄目だ。

本当に、駄目だ。駄目人間だ。

「………消えれば、いいのに………」

——最低だ。

こんなことで同情でも惹きたいの？ それとも可哀相な自分を慰めてくれる誰かを釣るの？ 敗者を演じて自分の罪を軽減しようとしてるの？ それで利用するの？ 飽きたら捨てるの？

顔のない『彼女』が心中でけたけたと笑う。

押し殺した『私』はただひたすら『彼女』に謝り続ける。

『私』を押し潰した『自分』もやはり…二人に懺悔していた。

———生き地獄だ。

最低すぎる。

誰よりも、今息をしている自分が最低すぎる。

…ばかみたい。

誰か、こんな自分を殴ってくれればいいのに。

完膚なきまでに、打ちのめして欲しいのに。

自分には誰かに優しくされる理由なんてないって…思い出してしまっただから。

思い切り打ちのめされれば、そうすれば立ち上がれなくなった自分はずっと、こんな戯言を言わないから。

「自分は…『私』だった頃の自分を殺したんだ……」

リートはこちらと距離を置いたまま、声に耳を傾けた。

『私』は沈痛な面持ちで、そっと問い掛ける。

「変に思わないの…？」

「……………」

無言のリートを差し置いて、レインは放蕩と話し始めた。

「私は確かに生まれた時から私だったけど…………あの時ね…『彼女』の顔を移植されて…鏡を見ても…そこに私はいないのに。『彼女』が笑ってるだけだった…私…じゃなかった…」

——見ようとしなかったもの。

見たくなかったもの。それでも見ようと、決心した。

「だからね…『私』でも『彼女』でもない、『自分』はアレイン・ヴィアルドレッドっていうあかの他人なんだって思おうとした…けど」

——見たくなければ、見えない。

人は見ようとするから、やっとそれを視認できる。

見たくなければ、事実は都合よく湾曲していく。

「駄目だったんだ…」

悲痛な声で、レインは独白する。

見ようとしなかったのは、年を重ねるごとに性差を植えつける身体か。

それとも、自覚しようとしまい、自分自身だったのか。

「どっちが先だったのかな…気づいてたはずなのに、思い込みは過去の記憶も歪めてしまったから。…自分は昔みたいにな『彼女』のことを話せない…」

——それが、酷く哀しい。

姉さん。大好きだった。…なのに。

少女は続ける。

「他人を騙せてたかは知らないけど。言い聞かせることで事実になれればいいって……………」

だから、確かに。

レインにとって、自身は確かに『私』でも『彼女』でもなかったのだ。

「……そんなこと、ないのにね」

自分の眼は欺けても他者は気がついていて、三文芝居に付き合っ
て来ただけ。

優しく残酷な他者。

怯えながら日々を過ごす自分。

対する青年は、何も言わない。ただ、一步、こちらに近付く。

レインが語った内容を、彼はどのくらい理解できただろうか。

「……………」

応じる声はなく、代わりにレインの傍に膝を着いた。

「お前はお前だよ」

彼女を直視する蒼黒の瞳。

「誰に咎められることじゃない。ありのままが表せなくても……あ
まり、自分を追い詰めるな」

「……………んなこと、言っただって……」

「見たくない」

「え……？」

「お前がそうやって自虐的になって、傷つくところを見たくない
んだ」

青年は少女の頭に手を載せ、後ろへと流す。

「レイン、お前は言ったよな。俺に会えて良かったと。俺も同じ。

……アレイン・ヴィアルドレッドと会えて良かったと言っただ。今
のお前は誰だ？」

——誰、……だって……？

おかしいことを訊く。そんなのは……

「蓮……、……じゃない、違う……………」

矛盾を払った。

「アレイン、だよ……自分は、一つの雨……」

「そうだ。レインは何があっても、レインのままだから」

リートは微笑し、こちらの肩に軽く手を載せた。

——何故だろうか。

それだけで、喉がつかえて、肺が苦しくて、目頭が熱くなって……

一度、空砲を吞み込んで、彼女は確かに頷いた。

「うん。…他の誰でもない…自分だけの名前だ……」
与えてくれた名前。

以前の私と今の彼女の姿の矛盾に悩んでいたあの頃。
新しい自分を作り出すのに、必要だった名前。

「呼んでくれて、有り難う……」
表れたのは、淡い微笑み。

——過去を背負ったままでも、自分だけはレインとして生きていけないといけない。

それが、『彼女』への弔いとなるのなら。

62 廻送

「遅くなってごめんね？」

「：ほんとにね」

レインは瓦礫にぽっかりと開いた穴を見る。

先程、外部からの衝撃により空けられた空洞だ。

そこをリートと潜って抜け、やっと広い空間に出れた。

「通路が寸断されてて、ここまで来るのにも時間かかってさ」

赤髪の青年は、申し訳なさそうに片腕で頭を掻く。

もう片方の腕は袖口から捲くられ、だらりと垂れ下がっていた。

乱暴に巻かれた布の隙間からは血痕が滲み出ている。

レインはクロードに詰め寄った。

「怪我してるの：？」

「大丈夫。ここに葉莢があって良かったよ」

青年の明るい口調を聞いて、思わずレインは気分が悪くなった。今居る場所は、旧式の弾丸がたくさんあるかつての武器庫だ。つまり葉莢を詰めて止血したということか。流石軍人と言えば聞こえはいいが、野戦病院でも今時そんなことはしない。

「大丈夫じゃないでしょ。：全然」

「いいんだよ。おれの心配は。それより、そちらさんは？」

クロードは言い、こちらを見やった。

レインはリートに目配せする。

「大丈夫。リートは？」

「見ての通りだ」

彼にも怪我はない。

「：そう、何よりだね。：状況を説明するよ。あの女を見失った。おいおい死んでる可能性は低いね。見逃す気もないし今から追うつ

もりだけど」

「追う当てはあるのか？」

黙っていたリートが開口する。

クロードは薄緑の瞳で彼を一瞥した。

「一応ね。どうせ袋小路だ。…もしかしたら、あんたの方が詳しいかもしれないよ？」

軍の青年は嘲笑を混ぜて答える。

レインは、良くない可能性を危惧していた。

——案の定、それは当たる。

「…俺が追う」

「——駄目だ」

長い黒髪の少女は、すぐに否定の意を発した。

「……また死に行く気？」

鋭い、なのに脆さを感じさせる目線が、隻眼の青年に突き刺さった。

「俺はカングルツペを止めないといけない」

「そうなのかもしれない。けど、こんな状況で向かって勝算はあるの？」

「……そういう問題じゃない」

「でも……」

手の届かない場所へ向かわせたら、もう二度と帰って来ない気がする。

レインは身を乗り出して、食って掛かる。

殊勝な行動に似合わない、泣きそうな顔で。

「今は軍警に任せればいい。…だから、頼むよ……」

「…分かった」

片目の青年は惜しみながら了承し、赤い青年へ向き直った。

レインは安堵から息を継ぎ…

——しかし

首筋に当てられた衝撃に、気を失った。

「――酷いことするね。ハートレス」

「……………」

手刀を打ち込んだ少女は、ぐらりと身体を崩す。

リートは腕に彼女を受け止め、壁に凭れかけさせ抱えた身体を離れた。

再び何事もなかったかのように立ち上がった青年は、もう一人へと問う。

「お前は俺に、言いたいことがあるんじゃないのか？ レヴァ
称号名で呼ばれたクロードは、目線を泳がす。

「んー？ ああ。ユウ・アインツィベオンのこと？ あいつなら
目を覚まさないままだよ」

存外にさらりと言い、クロードは腕を組んだ。

「別に、予想はしてたから。あいつも天寿まっとうできて嬉しい
んじゃないの？」

「……恨まないんだな」

「何であんたを恨む必要があるんだよ。あいつが突っ走った結果
だろう？ ……それに、俺よりか怒ってる熱血漢がいるから、感情の
面はそいつに預けてるんだ」

ひょうひょうとした態度にリートは言いあぐねていたが、やがて諦
めたのか話題を移した。

「…レインを連れてきたのは、お前だな」

「そう。交換条件でね。暴走したハートレスの説得。…ま、その
必要はなかったみたいだけど。実のところ、『いつ変わった』の？」

「さあな」

今度はリートが視線を逸らした。

クロードは言及せずに、諸手を組む。

「…どうでもいいんだけどね。結局は軍が払わなきゃいけない対
価だし。質が落ちたもんだよね。だから、過去の亡霊に寝首を掻か

れる羽目になる」

饒舌に語って、クロードは一度ふつりと黙った。

交錯するのは、目線だけ。

「――で、どうなの？ 後始末つけてくれるんなら、リート・セディシアに罪は問わないってことになってるんだけど。結局、お前はユウも、誰も殺していないしな」

後始末：説明されなくても分かる。暴走したハートレス・パーソンレス：カングルッペの確保。

彼女は今や立派な無差別殺人犯だ。

一方の彼は試す言葉を反芻し、しかし感情のない顔で告げた。

「罪とか、どうでもいいんだよ。：俺はあいつを止める」

「――よろしい。じゃあ、交渉成立だ」

青年は目を細めて笑い、軍靴を鳴らした。

リートも同時に一歩踏み出す。

「レインを頼む」

「……いいの？ おれがこの女に危害を加えないとも限らないよ」

言い、壁際に横になる美しい少女へと目線を向けた。――が

「その時にはお前を殺す」

氷点下の冷たさを孕む声音。

対し、もう一人は嬉しそうに赤毛を揺らし流暢に告げた。

「……そう。分かったよ。desired conclusion
n：望む結末を」

短い言葉が、別れの挨拶になった。

63 終章

意識を呼び覚ますのは白い光。

自然の暖かさを以って、分け隔てなく降り注ぐ。

黒色の散る寢台にも同様に陽光は当てられた。

「……、……」

眠たげな眼を押し上げて、上半身を起こした。

両手を伸ばして、息を洩らす。

——昨日の晩は何をしていたか、よく思い出せない。

ただ、嫌な夢を見たわけじゃないから、良いことにした。

眠気を喚起させる誘惑を振り切り、立ち上がる。

シャツ一枚の寝間着から新しい服に袖を通した。

「……いい天気だ」

満足げに眩き、黒い尾を引かせながらレインは部屋を後にした。

玄関先には靴を履いている少女が居た。

ポニーテイルを揺らしながら、ユカリはレインへと振り向く。

「おはよう。おねいちゃん」

「おはようユカリ」

続いて

「あらレイン。早いわね。朝食は？」

「いや、いや」

背後から聞こえるのは、淑やかな女性の声。

彼女——李清はリビングから廊下に顔を出し、レインを見て意味

ありげに笑った。

「あらまあ。こんなに朝早くからお出かけ？」

「別にいいだろ。…所用だよ所要」

「へえ。おねいちゃんが早起きで用事かあ…誰かと待ち合わせ？」

「そんなところ。：それよりユカリ、学校は？」

レインが示唆すると、制服の少女は

「え？　もうそんな時間？　じゃあ、：お姉ちゃん、行って来ます！」

「ああ。行ってらっしゃい」

「気をつけるのよ」

ユカリは玄関の扉を元気に押し、去って行った。

残されるのは、形質が似た二人。

安堵に似た吐息が一つ。

「：やっとなってかんじかしら？」

「何が？」

少女は問うた。

「レインが真つ当な自分の人生を歩き出した、やっとな」

「流石、先人。重みが違うね」

「こーら、私を怒らせたいの？　貴女と最初に会った時には、まだ暗示も解けてなかったからね。：正直、あの頃は扱いが分からない部分もあったけど、現状の貴女の決意だものね」

眉を顰めたのも束の間、懐古の後に李清は顔を綻ばせる。

「取り敢えずは、気をつけて、行ってらっしゃいな」

「ああ。行ってくる」

発した言葉を皮切りに、レインは戸を押した。

――辿り着いた場所は駅。

通勤ラッシュにはまだまだ早く、ホームは閑散としている。

気になるのは、時折線路の向こうから風鳴りが聞こえるぐらいだ。

レインは朝早くから地下駅に呼び出された。

それも目の前の男にだということが、ちよっと腹が立つ。

「久しぶり。レインさん。元気してた？」

「……見てのとおりだけど？」

素っ気なく少女は返す。

対する青年はレインの顔をまじまじと見つめ

「うん。相変わらず元気そう。あと、不機嫌そう」

「朝早くに呼ばれればな…で、首尾は？」

「早速その話？ レインもいい加減あいつのこと諦め…、うそうそ。冗談だって」

「いいから。リートは見つかった？」

——あの日。

消息を絶っていたリートと、カングルッペ。兩人に見えた日。

リートは少女の制止を聞き入れず、地下の深部へ向かった。以来彼の消息は、再び途絶えてしまっている。

「…まだ。探させてはいるんだけどね」

告げられる事実は、ある可能性を意識させる。

クロードは危惧を言葉にしようとした。

「……あいつは…」

「帰ってくるよ」

レインは遮り、確信を口にする。

「帰ってくるに決まってる」

確固とした口調に、青年は肩を竦めた。

件のことについては、彼でさえ言及できない。

「……そうそう。呼び出した本当の理由だけどね」

「そんなのあったんだ」

「そりゃあね。…忘れてるみたいだから教えてあげる。…交換条件、覚えてる？」

「…え…？」

「ほら、やっぱり忘れてる」

青年は代わりない笑みのまま、

「教えてあげるよ。フレイアが君に渡した鍵が示す場所をね」

クロードに先導させた場所は、やはり地下だった。
どうやら自分は、下に縁があるらしい。

地下街を跨いで、辿り着いたのは配管に覆われた通路に出る。幅はあるが、迫ってくるかのような壁は空間を圧迫し続けていた。
時折天井の電球がちかちかと点滅し、数メートル先の通路までを照らす。

断続的に続く、名もない路だ。

前に行く青年の足が、止まる。

少女が横手を見ると、錆びついた巨大な扉があった。

「この先からはおれも入ったことがないよ。：後は自分で確かめて」

「そうして、入ったところを閉じ込めたりしないよね」

「まさかー」

冗談交じりの危惧に、青年は朗らかに笑うだけ。

レインは扉の前に立った。

――圧倒される。

けれど、掌ほどの大きさのドアノブは確かにあって、レインは無意識に鍵穴にフレイアから渡された鍵を吸い込ませていた。

――伝わる手ごたえ。

レインは息を呑んだ。

悪いことをしているわけでもないのに、何故か背徳感を感じてしまった。

鍵を挿し抜いて、レインは息を吸い込み扉を開けた。

「――では、気を付けて」

後ろ背にかけられる、クロードの言葉を聞きながら。

重たい扉を開き、身体を滑り込ませた先は薄暗かった。
何処にあるかも分からない障害物に、細心の注意を払う。
夜目が効くと自負していてもこれだ。

摺り足で、ゆっくりと前へ進んだ。

天井は高い。元は大きな部屋なのだろうが、今は障害物で分断されている。その障害物を眼を凝らして見ると、古い書物や雑多な、用途さえ分からない機械だった。

古錆びた臭いが充満する。

壁を伝い奥へと進むと、僅かな光が見えた。

壁には、波紋の如き光の揺らめきが移る。

行く手の先に光源があるのだろう。無駄に大きな本棚を迂回し、レインは光源のある場所へと辿り着いた。

——薄い水色の光が、彼女の顔を照らす。

そこは、思ったよりもずっと広かった。

床にはコードがのたうち、天井にも配管が犇く。

配管の幾つかは錆びきっていつて、鍾乳石に似た氷柱を下げ、今もなお水滴を落とす。

そして何より存在感を放つのは、空間の壁一面を埋める、巨大な水槽だった。水が張られ、硝子で隔離された存在は、異様で、水槽以外の表現はない。

水槽の中には魚が泳いでいるわけでもなく、深さも幅もさしてなかった。

だがやはり、異様な空間には、異形のものがあるのだろう。

水槽の中に魚は居なかったが、代わりに入っている。

在ってはならないものが。

——ここに、在ってはならないものが。

それは、女性の裸身だった。

バランスの良い肢体。白蠟の滑らかな肌。形の良い乳房や細い纖手に至るまで、全てが掛け合わされ、芸術品と見紛う程だ。

——ただ、一つ。

女性の身体には四肢はあれど、人間として重要な部分——頭が無

かった。

首なしの、女の身体。

発狂した彫刻家の作品じみて、悪趣味で魔的だ。

一糸纏わぬ白い肌。

マネキンと見紛いそうな程に精巧であるが、一つの要因が否定の意味を押し出す。

肩から下腹まである、傷跡。

ぱっさりと、刃物で付けられたことが予想される傷跡は、綺麗に裁縫され閉じているものの、治療した針の後、傷口の赤らんだ皮膚は明らかに作りものではない。

女性の身体は水漬けにされても、生来の美しさを損なわない。

レインは暫く、放心したようにその死体を見ていた。

——けれど、彼女の頬を、一筋の水滴が伝った。

長い間使わないで、本人さえも枯渴したのだと思い込んでいた、涙。

——『彼女』。

震える唇で、言葉を紡ぐ。

「やっと、…見つけた」

レインは死蟻に向け、確かに告げた。

「——姉さん」

63 終章（後書き）

ここまでで、今までの訂正は終了です。連投失礼しました。

これを物語の取り敢えずの区切りとして、これからは新しく続きを第三章という形で書いて行こうと思います。

読んで下さった方々に感謝を。

8／23

忘却と邂逅

息を切らして、途切れそうな意識を繋いでた。

煩く落ちてくるのは自らの息の根。――残響。

黒ずんだ視界には、同じ形が同じ間隔で揺れる。

古時計の振り子が慣性に任せて、行ったり来たりを繰り返すみたいに。

――行つて、来て。寄せて、返して。近付いて、離れ。

飽きもせずに、ずっと眺めていた。

少年は走る。

「――はあ、…はっ」

何故という疑問符は、けれど行き場もなかった。

少なくとも自分自身に事の次第を尋ねたところで、答えはなかった。

――どうしてこんなことになったのか……

けたたましい足音と、騒がしい喧騒。絶え間なく追ってくる人の気配。

少年は追われ、逃げていた。

「ああ、もうっ！」

苛々しながら悪態をついたところで、事態は好転しない。それどころか追ってくる足音は数を増す。

息を切らして、なおも地面を蹴る。

地下のどんよりとした空気に突っ込み、靴底が擦り切れるのも構わずに細い路地を巧みに曲がる。

肺の底が重たくなり、横腹が痛い。

一步踏み出す毎に脚は鈍く、重たくなる。足を止めたいのは山々だが、決して止まることはできない。立ち止まれば即刻捕らえられる。

重油の臭いが充満する基幹奥の細い通路を抜け、少年は曲がった。――が

「え……」

続く道はなく、前方には立ち塞がる壁のみが存在していた。

――行き止まりだ。

彼が啞然としていたのは一瞬にも満たなかったが、足音は背後に迫る。

背中に冷や汗がじつとりと浮かんだ。

「手こずらせやがって！ クソガキが……！」

男の野太い、罵声の声。

振り返ると、僅か数メートル先に体格の逞たくましい追手の姿があった。

――…ああ、もうだめだ……

じりじりと後退するが、背後は壁。

袋の鼠という言葉をも、身を挺して実感するなど避けたい経験だっただろう。

男は眼光ばかりぎらつかせて、こちらに銃口を向ける。

――本物……！？

少年も軍拠点都市に生まれ育った以上、銃機なんて珍しくもないが、いざセーフティの掛けられていない銃を向けられたことは初めてだった。

後ろ手が壁に付き、少年にはもう退避という選択肢さえない。

生かすも殺すも、目の前の名も知らない男次第だ。

弾倉を回す駆動音が響く。引き金に指が掛かる。

男はこちらの額に、銃口を突きつけた。

ぎゅっと眼を瞑り、少年は身を強張らせ――

「……………」

——しかし、断罪の音は未だに聞こえない。

少年はおそろおそろ目を開ける。

依然として銃を構える目の男は変わりなく……けれど、男の首元からは長い黒筒が覗いていた。

筒は銃口だった。

携帯用にはあまりに長い、剣身の鞘を彷彿とさせる黒いフレーム。旧式の銃器にも似ていたが、さして古めかしくなく、充分に実用性はあるそうだった。

飾り気のない黒艶の装甲が美しい。蠱惑的で、触れなくなる芸術性を内包している。

「——そこをどいてくれないか」

次に、芯のおった凜とした声音が聞こえた。

今まさに、少年に危害を加えようとしている男のものではない。

男の背後から聞こえてくるのだ。

つまり声の主は長い銃身の武器を持つ、背後にいる人物。

少年にとっての姿が見えない男は窮地を助ける助力者か。それとも、より大きな力で彼を食い殺す強者か。

「はあっ……？」

男は何かを発つそうとするが、鈍い音に遮られた。

銃身が、男の首を風ぐ。

強靱な銃の装甲は、それだけで威力を持つ。その上、目の前の銃は昨今では難しく金属で出来ていた。殴れば、下手な鈍器と同じかそれ以上の威力があるだろう。

銃身の安定感と火薬促進の威力、美術性から金属の銃を好む者は多いが、汎用や軍警察の銃はほとんどがカーボン製や強化プラスチック製だというのに。

一体、背後の人物は敵か味方か。

少年は純粋な興味を抱いた。

——何者なんだろう：

「…が、…はっ」

大の男は泡を吐き、その場に横倒しになった。

少年は壁に体を擦り付けながら信じられない気持ちを表現し、眼を丸くする。

男が倒れ、現れたのは一人の青年だった。

自国では珍しい、艶消しの黒髪と蒼い瞳を持った端整な顔つきの青年は、片目が白かった。片手に長銃――狩りに使うようなライフルを携えている。上着の型を悪くしているのは、他にも武装を隠し持っている為か。

青年は窮鼠と化した少年へと踏み出した。

少年は口を開けたままに放心する。

今度は逃げる、戦う選択肢は最初から存在しない状況だった。

思考の端から除外された。判断権など自分にはない。

あとは煮るなり焼くなり、目の前の人物次第なのだ。自然の理のようにすくと胸に落ちてきた。

別色の白濁した瞳は、捕食者の如く怯えた獲物を映す。

…が、すぐに瞼は落とされ、視界は健常者のそれへと変化した。

「――お前じゃない」

零れ落ちた低い呟き。

少年は青年の声音に寂寥を感じ取った。

――もう戻らない何かを惜しむ、切ない悲哀を。

そうして少年は理解した。彼は自分の敵ではないと。

体勢を持ち、息を整えて元逃亡者は問うた。

「……あんたは……」

――何者だ。と

しかし、望んだ答えは返されず。

長銃を腰の皮鞘に収めて、青年は少年に話し掛けた。

「――道を尋ねたい」

64 約

少女の朝は早かった。

密着する瞼を無理に押し上げ、白んだ視界に瞬きを繰り返す。

「ふあ……ああ……」

まりに人目を憚らない大きな欠伸を一つ。

しかし正確にはその場に人目があり、少女を凝視している。

「あら。ユカリちゃん寝不足かしら？」

「そんなことは……ないですよ……」

やや舌足らずの返事を発するのは、ユカリと呼ばれた少女。

目端を指で擦りながら、彼女はトーストを齧った。

眠気を体現するのは、半分降りた瞼。弛緩した顔つき。

「ただ、何と言うか……睡眠の密度の問題？ ……みたいな？」

さく、という香ばしい音がする。

対する女性は、持ち前の淑やかな声音で応じた。

「そうねえ……分からないこともないわ。要するに眠りが浅いんでしょう」

「ちゃんと早寝したのに、何ですかねえ。全くもー、困っちゃうー」

少女はまた大きな欠伸をして、今度は首を回した。

「ユカリちゃんの年頃に寝不足は、何の理由があれ良くないわね。

二次成長も止まっちゃうし」

「……………」

女性が言った途端、少女は世界の終わりのような泣きそうな顔を
した。

「あー、嘘よ。睡眠が全てじゃないから、ね？」

「……本当……ですか……？」

弱気な面を上げ、ユカリは問いかける。

応じたのは、目の前の女性の声ではなくやや若い声音だった。

「…まあ、成長云々は置いておくとしても、睡眠は大事だと思うぞ？」 李清の言う通りな」

男口調の凜とした声が聞こえるなり、途端に少女の顔が華やいだ。

「おはよ。おねいちゃん、今日は早いねえ」

「ああ。ちよっと身体が鈍ってたんで、下で動かしてた」

ユカリは振り返り、声の主を視認した。

戸口に立つ相手は僅かに顔を上げ、面は窓からの朝日に照らされることで露になる。

——美しい人物だった。

漆黒の直髪は腰まで届く長さもある。冴えた瞳も髪と同色。純血の東方人でも瞳には褐色が混ざるのに、彼女にはそれがない。深淵を覗いたが如き黒。長い睫毛。鼻筋は通っていて、唇は花卉のように適度に整っていて、顔の均等が恐ろしく良い。

眉目秀麗、という言葉がぴったりと合う人物。

女性にしては長身で、服は黒を主とする色で統一されていた。

彼女が、ユカリの義姉。

「レイン、丁度良かった。ユカリちゃんと一緒に出かけたら？」

「？　なんで自分が……」

美貌の少女はきよんとする。

「いいから。どの道、そろそろ行くんでしょ？　この前学校の場合知らないってばやいてたし、丁度良いじゃないの」

女性——李清は言い、机に頬杖を着いた。

「ユカリちゃんも、そっちの方が良いでしょうしね」

「はい？　…私はおねいちゃんと一緒にいられるだけで幸せですよー？」

示唆された少女は素直に笑って、義姉を見やった。

片眉を上げ、黒髪の麗人は苦笑する。

「しょうがないな。ついでだ。一緒に行くか」

「やったっ！」

弾ける歓喜の声。手を上げて喜ぶ様。

いきなり生来の明るさを取り戻し、ユカリは元気に食後の皿を片付けていった。

黒い長髪の少女と、制服にポニーテールの少女が肩を並べて歩いている。

「んでねー、この社会の先生がねー……」

ひっきりなしに話すのは、女子学生服の少女。

もう一方の黒衣の少女は時折相槌を打って、賛同したり笑ったりする。

――軍拠点都市の、第二区。

主に住宅が軒を連ねる区画だ。都市内では比較的安穏な地域だろう。今日も例外なく普段通りの平和な朝だ。

街頭を歩くポニーテールの少女、ユカリは普段ならば最寄のバス停から学校へと向かうワンマンバスに乗る。しかし今日は徒歩で学校へと向かっていた。

理由は至極単純。隣に行くレインだ。

たとえ、片時であろうが、彼女と一緒に居られる時間はユカリにとっては千金に値するのだ。少しでも長く義姉と居たいがために、彼女はわざわざ決して短くない距離を歩いている。

ユカリはレインが好きだ。

義理であろうが、家族であり、姉だから。

本人はごく最近まであまりにも極論の隔離した認識を身に着けていた。しかしある出来事がきっかけで、少しづつ自分自身というものを受け入れるようになったように感じる。

――拒絶。そう、拒絶だ。

人は自らを守るために、時に拒絶を行う。

ユカリが壊れないように、壊されないように過剰な自己防衛を

敷いたのも

レインが壊れないように、そうであった事実を拒絶して消してしまっただけのもの

全て保身の結果。ただ少し、方法が違っただけなのだとユカリは思う。

過去、ユカリの義姉は自分の体を削ごうとしたことがある。

その頃から、彼女は自らのことを『自分』と呼ぶようになった。

――『私』『彼女』『自分』。

アレイン・ヴィアルドレッドという人間は『私』と言う名の過去と、『彼女』という名の因縁じみた呪いと、『自分』という今の状態から成っている。

ユカリはレインの過去を、全て洗いざらし知っているわけではない。

けれど、確かに自らの義姉はそうでなくては耐えられない状態にあった、自分を切り離してしまった。分裂症に似ているけれど、違う何か。

彼女は自己が曖昧になってしまった人物だ。

自分を自分だと認めれる分かり易い唯一を、彼女は過去に失ってしまった。

――……でも、それでも、

ユカリは今の義姉が好きだった。

「そういえばさ……」

「んや？」

唐突の切り返しに、少女は鼻白む。

「ユカリは……あいつ……リートと仲が良かったな……」

きっぱりとした性格の姉にしては珍しく、たどたどしい言い草。学生服の少女は小動物じみて小さく頷く。

「うん。よく銃の解体教えてくれた」

「……なんてものを教えてんだ、あのばか」

呆れた物言いでレインは呟く。ユカリは咄嗟に擁護した。

「でもでも、丁寧でちゃんと教えてくれたよ？ 勉強になったし。アス兄より分かり易かったしさー」

「そういう問題じゃない」

レインは苦い顔をして呟く。けれど、顔には僅かに笑みが浮かんでいた。

無論、少女はそれを見逃さない。

「あー！ お姉ちゃんが妬いてるー！」

「妬いてない」

「嘘だもんっ！ ユカリちゃんが羨ましいんだー？」

美貌の隣人は即座にいない、と首を振る。

「別に。自分だって銃の練習付き合ってもらったし、お互い様だろ」

変な言い回しだが、レインは気にしてないようだ。ユカリは思わず笑いを零す。

彼に武器整備の指導をしてもらったのは随分と前の話だが、今でも内容は克明に覚えている。

銃は誰でも扱える武器だが、整備も出来るという所有者はごく一部だ。けれど彼は珍しく、銃器整備士：俗にいうガンスミス並みの知識と技量を兼ね備えていた。

ユカリにとっては、武装整備を教えてもらおうと共に、彼の話を聞くことも楽しみにしていた。

彼は無口で一見無愛想な青年だったが、訪ねた事柄には懇切丁寧に答えてくれたものだ。

——銃社会は、常に異常だ。

いつだったか、淡々とした口調に、滲み出る僅かな感傷を載せて青年は語っていた。

ユカリは回想に微笑して、隣の人物に囁く。

「…早く、帰ってくるといいね」

「……ああ」

俯き、小さな肯定の声が返された。

ユカリには分かる。レインにとって、『彼』はやっと見つけた特別なだろう。

だからこそ願わずにはいられないのだ。

——彼が、一刻も早く戻って来ることを。

日は昇り始め、春の陽光が街並みを照らしていた。

——まさか学校まで着いて行く羽目になるとは思わなかった……

街頭を歩くのは、黒髪の少女。

正確には、今居る地点は学校の一步手前までである。

軽く手を振って義妹であるユカリと別れ、レインは更に歩いていく。まだ朝が早いということもあり、道を行く人は少ない。一際人目を引く彼女にとっては有り難いことだ。

そつなく街頭を外れ、路地裏への道を歩む。

春の麗らかな一日は始まったばかりだったが、これから会う相手のことを考えると足取りも重たくなった。

地下街から基幹へ向けての道を掻い潜り、辿り着いたのは暗い部屋。

非常灯のみで照らされた部屋には、至る所に大小様々な硝子壺が置かれている。

中央の作業機の横手には、精巧な女の子の人形たち。

幾つかはドレスで着飾って置いてある。机上には、本物の子供の手足と見紛う程の生身と酷似した腕、目玉、手、髪の毛、関節、胴体……の模造品が所在なさ気味に散乱している。

放置された成り損ないの数々。

あまりにも現実味が濃過ぎて、胸が悪くなる。

「アレイン、来てくれたんだね」

声の主は和気藹々とした声で少女の名を呼び、大仰な仕草で近寄ってきた。

応えるのは嫌悪の滲む声音。即座に言い放たれるのは拒絶の言葉。

「自分の半径5m以内に近寄るな、カイス・フェーダクト」

「酷いなあ。久しぶりの再会なのに…」

「そんなことはどうだっていい」

ぴしゃりと言い封じ、レインは目の前に立つ男へと炯眼を向けた。真っ白い肌に、黒い茶系の髪。顔つきは若く感じられるが、不自然に腰が曲がっており、唯一露出した首元や手の甲には皺が寄ってがさついている。見た目故の不均等さは、生来の不健康さと不気味さを駆り立てていた。

以前に会った時は髪も赤黒く、容姿も少し違ったはずだが。

「…また、変えたのか」

「データベースに人相が記録されちゃってね。人の記憶に残るのはいいけど、機械の記録に残ると厄介なんだよね」

カイスは肩を竦める。

彼自身から滲み出る作り物の雰囲気は、人型の偽物だらけの部屋に居る所為もあるのだろう。

男は椅子に再び腰を沈め、問う。

「今日は何の用だい？ この前はフレシアについてだったけど…」

「分かっているだろう、自分が反軍組織の鎮圧要員だって」

少女は眉を顰めて告げるが、男は眼鏡を掛け直してにこやかに話す。「知らないことはなかったよ。ぼくも地下で情報網の海に潜って早数十年だし。…大体憶測は付くさ。アレインが第二機関を辞めたのは、残念だったけどね」

「…やっぱり知ってるじゃないか」

「愛する人の内状は全て知りたいものさ」

「気持ち悪い」

レインは眉を詰めてから、視線を戸棚に整列する人形へと向けた。無機質な人型と目が合う。

「…やってることは下っ端の、更に下っ端の仕事も同然だけだな。

…云わば露払いってところか」

「でも、危険な仕事には変わりないだろう？」

カイスの台詞に内心で頷く。――が口に出してまでの肯定はしない。

「別にいい。危ないとか：比べても無意味だから」

男は机の上に落ちる硝子の目玉を、掌で転がす。

飴玉みたいに底光りする暗緑色の球体は、彼の掌でただ弄ばれていた。

「：で、何が知りたいの？ そんな話を前座に持って来るっていうことは、やっぱり人捜しかな？」

「そうだ。一応のコードネームしか伝えられないが、お前の実力があれば十分な情報だろ」

黒髪の少女は上着のポケットから取り出した紙切れを、近くの棚の上に置く。

男はからかい混じりに口笛を吹いた。

「相変わらず無茶言うねえ、君も。そういうところばかり、ぼくの義手持ち逃げたあいつに似て、嫌になっちゃうよ」

レインは男の言葉に、暫し押し黙った。

男は不気味に口の両端を吊り上げ、嘗め回すように少女を見る。

蛇みたいな、隠すことのない視線。

「——いいよ。：タダとはいかないけどね」

溜息を一つ。

「だろうと思ったよ。この変質狂」

レインは憂いの溜息を流し、取り出したナイフを自身の髪の一房にあて、無造作に裂いた。

解離した黒髪は手に余り、数本は床に落ちる。

「手付けだ。：勝手にしろ」

さらさらと掌から流れた黒房は、全て下へと舞い落ちた。

緩慢な光景を眺めて、男は満足そうに眼を細める。

「有り難う。これで新しい人形の足しに出来る」

「別に変態を喜ばせる趣味はない。：ただの対価だ」

彼は笑った表情を固定し、鑑識の眼を持続させたまま

「：そう。じゃあ、君のその綺麗な眼球も頂戴？　：そうしたら、

君の一番知りたいことも教えてあげるよ：？」

「――調子に乗るな」

レインは鋭く一蹴して、そのまま握っていた短剣ナイフを向け放った。投げた肉厚な凶器は、男のすぐ横の壁に突き刺さり震動する。

カイスは目を丸めただけで微動だにしない。レインも冴えた目つきで彼を見るだけだ。

「何人たりとも、姉さんを貶めることはさせない」

「ふうん：じゃあ、君を貶めることはいいのかい？」

「そんなもの幾らでもやる：ただ、忘れるなよカイス。これは自分のものじゃない」

告げ、レインは自らの目を指し示した。

形質的に有り得ない、混じりけのない漆黒の瞳孔。

「希少種である君の姉のものだろう。：でも今は君のものだ」

「違うな。入る器が変わったただけだ。今でも『彼女』：姉さんの唯一無二であることに違いはない」

「レイン：君も強情だね」

「――お互い様だ」

言い放ち、レインは黒衣を翻した。

「鑑定は数日以内に済ませろ。担保分の働きはしてもらおうぞ――人形師」

突き放つ言葉に、けれど男は昏い微笑みで応じた。

66 会

少女は誰も居ない廊下を歩いていた。

廊下の側面に設えられた窓は、全面的に朝の光を取り込む。

眩しそうに目を細め、ポニーテールにした黒髪を揺らしながら彼女――ユカリは歩む。

片面の教室の一つからは、のっそりと人影が出て来た。

亜麻色の螺旋を描く髪を存分に背中に流した少女だ。ユカリと似た制服を着ていることから年は近いのだろうが、彼女の纏う大人びた雰囲気のみならば、少女というよりは一人前の女性とも言える。

彼女はユカリに気がつく、年甲斐にない挑発顔で笑った。

「おはようユカリ」

「おはようー。リグレットちゃん今日も早いね」

呼ばれたユカリは駆けて行く。

リグレットファン・アマギ・チェストウインクル。やや長い本名を持つ少女のクラスメイトだ。

当初、転向してきたユカリに、真っ先に自発的に関わってきたのが彼女である。

後に知ったことなのだが彼女は日系の三世であるらしく、生い立ちからユカリに親近感を抱いたためかもしれない。

リグレットは巻いた髪を背中に払い、ユカリに凭れ掛かってくる。

「ユカリいー？ 今日はずんごい美人さんと一緒に御登校してたじゃないのー？ 紹介なさい」

心当たりはある。彼女が示しているのは、校門前まで送ってもらったレインのことだろう。

朝の登校風景を教室の窓から手持ちの双眼鏡で見るのが趣味、という奇人のリグレットは、誰よりも教室に来るのが早い。

「うん。お姉ちゃんと一緒に来たの」

「何だとう!？」

リグレットはずっと顔を寄せて、ユカリは思わず後退りをする。

彼女はこういった分かり易く体现する行為が多い。人好きするタイプなので、人と触れ合うことに抵抗はなく、むしろ自分から他人に触れ合いに行く始末だ。

ユカリは元来、他者と触れ合うスキンシップの類は嫌いなのだが、リグレットにされると何故か嫌でない。

きつと、彼女の人徳なのだろう。

「全然似てないでしょ? 義理のお姉さんなの」

「そーなのかー。にしても羨ましいぜコノヤロウ。今度紹介せよ」

「その気になったらね」

ユカリの苦笑混じりの返答に、亜麻色の髪の少女はブーイングをする。

自教室に入り、彼女たちは席を取っ付き合わせ話す。

「…そうなのだよー。今日は家庭科室使えるって。テッシャーせんせーにね、確認取ったから間違いないしっ」

「ん。了解ー。私は久しぶりにお菓子作りたいな」

「おうおう、ユカリっぺに賛成ー」

二人して何気ない雑談をして、朝礼までの時間を潰す。毎朝恒例の光景だ。

ユカリ自身でさえ、引っ越してきた当初はこんなに親しく出来る人物が現れることなど予想だにしていなかった。その点では、ザイフォンに越してきて良かったと素直に思える。

心配していた東方人に対する偏見も、実はコッペリア程ではなかった。

そもそも、民族至上主義を掲げていた旧国軍はもう過去の遺物に過ぎない。

教室には二人だけの談笑が響いていた。

――と。

教室の引き戸が思いっきり開かれ、轟音が響いた。かなり乱暴な音だ。

いくらクラスメイトでも、こんなに荒々しく扉の開け閉めを行う者はいない。

反射的にユカリとリグレットの視線は音源に向く。

戸口には、鮮やかな橙髪を持つ少年が仁王立ちしていた。

容姿から見るに、明らかにユカリたちよりも年上だ。もしかしたら別館にある高等部の生徒だろうか。

彼は躊躇うことなくずかずかと教室に入ってきて、ユカリの座っている席の前で歩を止めた。

大柄な身体の所為か、見下ろされる形の少女は威圧感を感じる。

――嫌な予感。

彼は明らかに遊びに来たわけではない。

「……お前……」

少年は不躰な視線を真っ直ぐに送ってくる。

ユカリは視線から逃げたくなるのを堪えて睨み返し、ややとち狂った声で牽制した。

「何、ですかっ」

「……いや……」

ユカリの必死の問い掛けに、少年は鼻白んだ。

リグレットは固唾を吞んで様子を見守るが、既に身構えている。

剣呑な空気を感じ取ったのか少年は困った顔をして、乱雑に特徴的な橙の頭を手で掻き乱した。

「……さっき、お前さ……」

「「……………」」

少女二名はじつと聞き耳を立てた。

「あいつと一緒に……登校してたよな……」

「……?」

少年はユカリだけに向けて、僅かに頬を染めながらぼそりと呟い

た。

あいつ…という単語で思い浮かぶのは、珍しく登校を共にした一人の黒髪の人物。

ユカリははっとした。

「…まさか…お姉ちゃんの知り合いですか……？」

67 陽

ツヴァイ・カノ・インフェルノにとって、それは思いがけない幸運だったのだろう。

館の一件からもうすぐ2ヶ月だ経つというのに、彼の関心は唯一つで揺るがなかった。

彼が助力している仲介屋というのは、云わば抑止力だ。見せしめることも大きな意味合いを持つ。

つまり、自分たちが呼ばれる場合は、暴力が発する可能性のある場。それでありながら、暴力を出来うることならば使用しないことが大前提の話し合いの場などだ。

依頼は様々であれど、ツヴァイ剣呑な場数は踏んできた。

身の危険を感じることはあれど、命の危険を感じる仕事はなかったが。

――そして、例の依頼も文字通りの『仲介』の依頼だった。本分は安否確認だが、必要あれば交渉、交渉さえも拒むならば武力を以ってして従わせろという次第だ。

手順はあれど、やっていることは実に原始的な結果を辿ることに過ぎない。同業者のラグナは早くも仕事として内容が不可解であることに気がついていたようだが。

――ツヴァイがあの日、古い館で出会った黒髪の東方人。

漆黒の髪と同色の瞳。整いすぎた顔立ち。凜とした声音と、意志の強そうなきつく結ばれた口元。

可憐な見た目と不釣り合いな男口調さえ、彼女の気風とよく合っていた。

考えたこともなかったのだ。たった一人に目を奪われ、あたか

もこちらを向いて欲しいと願ったことなど。

一生、そんなことはない。仮にあったとしても遠い未来の話だと高を括っていたというのに、思わない肩透かしを食らった気分だった。

例えるならば、頭を思い切り殴られるよりも大きな衝撃。

あの一件が落ち着いた後、ツヴァイは彼女のことばかり考えていた。

彼女は傭兵だ。仲介屋である幼馴染のラグナの仕事を手伝ってれば、いつか偶然に再び出会うことが出来るかもしれない。

けれど、それは一体何時の話になるというのか。

――数日後、何ヵ月後、何年後……考え出すとキリがなかった。今すぐにでも会いたい。

何より、彼女との決着を自分はまだつけていない。

――純粹に勝ちたい気持ちもあった。

けれど急かすのは心だけ。日々は緩慢に進む。

件から、小遣い稼ぎ程度にしか考えていなかったラグナの手伝いくだんにも、積極的に参加するようになった。

しかし、彼女とは一向に会えないままだ。

虚しさが募る。

あの時と同じ高揚と昇華される武闘を、心底欲していたから。

胸が締め付けられる疼痛は治まるどころか酷くなるばかり。

いつもそんな落ち着かないツヴァイの様子を、ラグナは面白がってからかうのだ。

もしかしたら、ラグナは彼女のことを自分より詳しく知っているのかもしれない。

むしろ、あたかもよく知っているかのようにほめかす場面もあり、けれど、のらりくらりとかわす彼女に真意を問うことは叶わなかった。

その日、ツヴァイはいつもより早く学校に来ていた。

夜、稽古の後で疲れていた。睡魔は襲ってくるが、深い眠りに着

くことは叶わずに朝を迎えてしまった次第。

情けない気持ちになりながら、彼は普段よりも早めに家を出た。

ツヴァイは勉強が嫌いだ。本当は、高等部だって通いたくはなかったが、取り敢えず卒業しろとの両親からの命令により、仕方なく通っている。現在は高等部の二階生だ。

彼のの父親はストリートファイトの殿堂入り王者で、その道では有名だ。母親はキックボクシングの免許皆伝だった。

特殊な家庭環境の次男として生まれてしまったが故に、彼は幼い頃から武芸の類を習わされた。

習うより慣れろ、盗め、がモットーの家で、彼は兄に足蹴にされながら育った。

：幼少の経験の為に性格は多少擦れてしまったが。
だからだろうか、様々な要素が相乗して、頭で筋道を立てて考えることが苦手だった。

天才的な格闘センスを持つ彼の、大きな短所だ。

「ったくよー：方程式とか何の役に立つんだ？ サイン、コサイン、タンジェントって何だよ……」

明らかに間違った数式を呟きながら、彼は校門を潜った。

——と、前には先客が居た。

自国ではあまり見かけることのない、黒髪の少女が二人。

途中まで並んで歩いていた内の片方の女子は、手を振って校舎へと進み、もう片方の少女は長く美しい黒髪を揺らして街頭を真っ直ぐに進んでいった。

少女の後姿には、見覚えがあった。

間違いないという確信もあった。

——だけれど、追いかけることは出来なかった。

追いかけて、引き止めて、……どうしてもすることが可能だったにも関わらず、彼は行動を一切停止していた。

足裏が地面に縫いとめられる。

喉奥から心臓が出てきそうな程にばくばく鳴る。

顔に熱が昇ってきて、鏡など見なくとも今自分が赤面していることが分かる。

追いかける？ 引き止める？

———こんな状態じゃ無理だ。

でも、やっと思つけたのに。

躊躇っている内に、彼女は角を曲がり見えなくなった。

途端に、膝の力が抜ける。

——バカじゃねえのか：オレ

内心で罵倒しながら、やっと思つて冷静さを取り戻した。

：そして、おかしな点に気がつく。

よくよく考えてみると変だ。

彼女が何故、学校の前に居たのか。

学校に用があつた？ ——まさか。

たまたま学校前の歩道を通りかかっただけ？ ——これもない。

区画の端の便利の悪い道をわざわざ通るか？ 仮にも公に出て歩い

たのなら、自分とはもっと早くに鉢合わせていた筈だ。

彼女は学生だった？ ——有り得ない。年はまだ若いが、彼女

の制服姿など……危うくいけない妄想をしてしまひそうになったので、思考を強制的にシャットアウトする。

ともかく、何か引つ掛かる。

ツヴァイは校舎の柵伝いに進んだ。

ふと昇降口を見やると、制服姿の一人の少女が居た。

先程、彼女と並んで歩いていたら人物だ。中等部の制服を着ている。間違いなく自分と同じ学校に通う学生だ。

少女と彼女は、何故一緒に歩いていたのだろうか。

——同国の出身？ 知り合い？ 友達？ 幼馴染？ 家族？ 恋人？

最後の一つはまず当て嵌まらないとしても、思い当たるのは胡乱げな関係だ。

知りたいと思つた。

もしかしたら、浅からぬ仲なのかもしれない。

あの少女から彼女のことを訊き出すことは可能な筈だ。

気がつくど、居ても立ってもいられなくなった。

普段は立ち寄ることもない中等部の校舎。人気がないのが唯一の救いだった。

背徳感なんて筋違いに感じながら、二年ぶりの廊下を歩む。

話し声が聞こえたのは、二年生教室の一画。

迷いなく、ツヴァイは戸を開けた。

68 狗

木を小突く軽快な音。

鳴らすのは赤髪に正装用の軍服を着た長身の青年。

「失礼します」

「…どうぞ」

応じるのは女性の声。続いて扉が開く音がして、部屋の内装が明けていく。

広い部屋だ。長方形の側面は十数メートルをゆうに越す。

扉から直線的な奥に位置するのは執務机を始め、他にもずっしりとした重厚さを持つ家具が所々に見て取れる。アンティークの小物は部屋の主の地位の高さを表していた。

「…お呼びにつかり参りました。クロード・レヴァ・キアヴェンス准将です。遅参をご容赦ください」

「構わないよ…面を上げなさい」

部屋の主は言い、隣に寄り添い立つスーツ姿の女性を促した。やや吊り上がった眼に、ざつくばらんに切られた肩口の髪は鋭く撥ねており、相乗して尖った印象を与えるまだ年若い女性だった。

「ミレイナ君、暫し席を外して貰えるかな」

「承知致しました」

女性は腰を折って、来訪者とすれ違い扉を開けて出て行った。

青年と交差する瞬間に、彼女が僅かに口端を上げたことに、彼―クロードは気づいただろうか。

部屋には男二人が残される。

執務椅子に座る軍服の老齢の男は丸まった腹を撫でながら、青年に声を掛けた。

「こうして会うのは久しぶりだね。クロード君」

「ええ。総帥こそ。お元氣そうで何よりです」

先程よりも砕けた口調でクロードは言い、笑う。

「それにしても：以前より太りました？ ミレイナが愚痴ってましたよ」

「ああ、君はさっそく痛いところを突いてくるね：彼女もいつも二言目には……」

腰をどっぷりと掛け直し、総帥と呼ばれた男は机に頬杖を着いた。

告げる先を揶揄するように肩を疎めて見せる。

「あいつは正論しか言いませんから」

「うーむ。部下にしておくには申し分ないんだがね。もうちょっと性格が丸くなってくれると嬉しいね。個人的に」

穏やかに笑ったまま、緩慢な口調で話す。

男の呼び名：総帥とは、軍部の頂点に君臨する者を指す称号だ。

だが、クロードの前方に座す老いた男に威厳は感じられない。好々爺とした雰囲気があるだけだ。

軍服を着ているだけでも不釣り合いだというのに、彼は品位の高い執政室の中央に腰掛けている。

「本題に入ろうか」

老人は目的を思い出し、居住まいを正した。

「ああ、そうそう。呼び出したのに立ち話ばかりで悪いね。要件を言うよ。：今日、君を呼んだのは他でもない。君の称号授与についてだ」

聞いた青年は、僅かに目を丸くする。

「：あれ、本気にしてたんですね」

「当然だろう？ わたしは今まで、ただ一度も嘘を吐いたことはないよ」

「それじゃあ、おれとは真逆ですね」

青年はおどけて相槌を打つ。

老人も片肘で頬杖を着きながら口角を上げた。

「まあ、嘔吐きが言う真実程、不確かなものはないがね」

「そういうものだと思いますよ？ 全ての事柄において、人は偽りを選択出来る権利があります。数少ない唯一無二の絶対平等です。与えられたものを行使するかどうかは人それぞれですけど…実を言うと、おれが形在るもの以外で一番信じているのが虚偽なんですよね」

「嘘吐きが嘘を信じるのかい？ 全くもって可笑しな話だ」

「ええ。おれも同感です」

青年は上辺だけで笑ったが、眼には何の表情も浮かんでいなかった。

「じゃあ、君が信じる虚偽の称号だ。有り難く受け取ったらどうだい？」

「ふふ、総帥。知ってましたか？ 虚偽は表に出ないからこそ美しいんですよ。現に美しいのは真実だけですから」

老人は肩を竦めた。

やれやれといった風に

「……君には困ったな。悪い話ではないと思うよ？ A級戦犯であるコード・ヴェンデッタを捕まえたのは記録上は君になっているわけだし。今回の昇級で君はアウストラル君と肩を並べることができる」

「いいえ、おれはあいつと同じ位置なんてまっぴら御免です。虫唾が走ることを言わないでくださいよ」

「相変わらず仲が悪いね」

「良くなる日なんて未来永劫有り得ませんしね」

毒舌を言い募りながら柔らかな物腰を保ち続ける彼に、どこか楽しそうに総帥は諭す。

「…クロード君、君は見た目よりも頭が切れるんだから、アウストラル君を貶めて、実質の軍の副大將になることだって、容易いのではないかね？ そうしてわたしが退役すれば、君は軍の総統だ。いくらでも旧軍主体の体制は変革が可能だというのに」

「自分で言いますか……考えておきますよ。でも、おれはここが

お気に入りなんです」

「強情だね」

「自覚していますよ」

クロードは愛想笑いを崩さない。完全なるポーカーフェイスだった。

「：分かった。今回は大人しく手を引こう」

男は皺に埋もれた眼を伏せ、件の話は終わりと示唆した。

感謝します、と、クロードは頭を垂れる。

最後までにこやかに応じ、社交辞令を交わして赤髪の青年は部屋を後にした。

両番の扉を閉め、青年は長い廊下に出る。

「――レヴァ」

名を称号で呼ばれ、彼は振り返った。

か細く涼しげな声で嫌味を発する人物、該当するのは一人しか知らない。

振り返ると予想通りに、先程総帥にミレイナと呼ばれたスーツの女秘書の姿があった。

クロードは張り付いた笑みを浮かべて詰問を発する。

「マシュッツ、おれのことは称号で呼ぶなって前にも言わなかった？」

「あーはいはい、そーですねー。ついでに言ってあげると私のこともマシュッツで呼ぶなよクズ。……ところでレヴァ、報告があります」

「お前は人を嫌がらせることが趣味なんだなあマシュッツ」

赤髪の青年は溜息を吐いて肩を落とし、慣性に任して壁に凭れ掛かる。

対する女性は直立したまま

「今し方アウストラルから連絡がありましたよ。コード・ヴェン

デッタ：セレナータ・カングルッペの処刑が執行されたようですね」

「ふうん。意外と早かったね」

クロードは納得し、その様にミレイナは首を傾げた。

表情は無を貫いているが、声の抑揚は隠さない。

「……驚かないんですね」

「そりゃあ、大量殺人犯は殺されなきゃねえ。豚箱に入る程度の贖いなんて割に合わなくて都合の良いものは、端から存在しないしさ」

「すんごく詰まらない台詞です」

ぴしゃりと言いつ切る言葉に対し、青年は笑みの色を濃くする。

「うん。だってコレ、ディセンダーさんの台詞だし」

無垢な子供じみた笑みで応じる青年に、ミレイナは咳払いを一つ。

「……もう一つ報告があったりしますけど」

「何？」

問い詰めたのに対し、彼女は息を浅く吸って答えた。

あくまで平然とした声音のまま。

「――美都・キサラギ・シュタットフェルトが殺されました」

青年の表情は一寸も変わらなかったが、居合わせたミレイナは青年の纏う雰囲気が剣呑になったことを肌で感じた。

69 罰

女の顎を、冷たい質感が撫でた。

押されるままに細い顔を上げ、彼女は男の顔を直視する。
酷く胡乱げな瞳で。

「遺言を聞いてやる」

「……」

彼女の小さな口唇は閉じられたまま。

男は繰り返して問うた。

「無いのか。――未練は？ 言伝は？ 恨み言は？」

冷たい床から身を起こし、女が僅かに身を振じらせる。
手元の鎖が音を鳴らした。

「……貴方は、神父の役でも買って出るつもりですか？」

「神父？ 残念だな。俺は一介の公僕だ。……だが、謎が氷解しない
のはいささか気分が悪い」

「……なんだ、私益の為ですか……」

あくまで丁寧で平坦な口調で、女性は嘆いた。

男は彼女に差し向ける得物を微動だにさせずに、また問うた。

「……聞こうか。コード・ヴェンデッタ。……セレナータ・カングルッ
ペ」

「……」

「どうしてあの屋敷で『被験体の死体を保管していた』？」

「……回答を拒否します」

「何が目的で軍警察兵と傭兵の殺害を行った？」

「……回答を拒否します」

「一体、お前は誰と共闘していた？」

口元が微かに上下する。

「……………」

「…何だと？」

女——カングルッペは顔を上げた。

「…吸血鬼」

血の気の失せた顔で、嘲笑する。

「…血を好む化け物ですよ。アウストラル」

「……………」

今度は男が押し黙った。

女は構わずに続け話す。

「…覚えていますか。私と貴方は以前に、一度だけ会っています。

私の本名は…エリーゼ・ハイト」

「……エリーゼ……ハイト……？」

記憶を反芻し、アウストラルは蒼い瞳を見張った。

深い部分の残影に残る、在りし日の少女の姿。

「ハイト家の…息女？」

青年の呟きを流して、手足を拘束されたままのカングルッペは言い放った。

まるで独白のように。

「……残念でした。とても。無念です。どうしようのないくらいに。悔しい。…悔しくて、死にたくなる。

…ああ、復讐してやりたかった。殺してやりたかった」

「——誰を？」

「……旧軍の……」

カングルッペは小さく告げた。

アウストラルは確かにその言葉を聞き、膝を着いた。唇に耳元を寄せ「——確かに、聞き届けた」

傍らに細身の剣を置いて、指で横たわる彼女の頬を撫でる。

——労いと、贖罪の意味を込めて。

触れる肌は冷たい。

カングルッペは顔半分を髪に隠し、床に頭を預けたままに首を傾げ

た。

「：貴方は、不思議な人ですね：私から情報が聞きたいのなら、拷問でも自白剤を吞ませるでもすれば良かったのに：」

「ここは旧軍ではない。軍警察だ。旧時代の劣悪な行いは廃された」
当然だと言いつける青年に彼女は苦笑した。

力なくではあるものの、初めて笑みらしきものを浮かべる。

「：貴方は、優しい人ですね。でも：いいえ。：優しい。優しくても強い人です。貴方のような人が最初の統帥に就いていれば、どんなに良かったでしょうか」

寂寥の滲む女の声。

対する、決意の染み着いた男の声。

「就いてみせる。この腐った軍部の腐敗を根こそぎ焼き捨てる」

「……そう、ですか：」

「旧軍も関係ない。俺は俺の為に動く」

「：幸いです。アウストラル。：でも、貴方は自分の善悪の秤の欠点を全て自分の責任と言っている。：どうか、独りはいけませんよ。：私のようになってしまおう」

「……旧軍に振り回される人間は、もう十分だ」

「ええ。私で終わらせてください」

カングルッペは鎖を鳴らしてその場に座り込んだ。

静かに瞳を閉じる。

もう未練はないとばかりに外界との繋がりを絶ち、言葉は詩を詠むように静かな韻を踏む。

「：私を罰するのが貴方で良かった。：お休みなさい。アウストラル」

「――お休み。エリーゼ・ハイト」

アウストラルはカングルッペに向けていたレイピアを一振りし、彼女の胸元を刺し貫いた。

部屋の内は赤かった。

元は清潔感のある白で統一されていたであろう空間は、今はただ赤い。

粘つく塗料からは、鉄臭い臭いがした。

部屋の中央から壁を伝い、果ては天井まで紅の飛沫は飛ぶ。

赤い液体は本来、人間の体の内にあるべきもの。けれど今はほとんどが外部に撒き散らされている。

部屋の開け放たれた扉付近には、一つの人影があった。

浅黒い肌に明るい色合いの髪色の短髪、据え目付きで室内を睥睨する。

彼は警官の制服に似た上着を羽織っていた。

一滴、出入り口から血の雫が落ちた。雫は肩口に落ちて制服を濡らし、男は染みになった赤い斑点に眉を顰めた。

「……………くそつたれ」

そのまま、ずかずかと赤い水溜りへと歩を歩める。

靴底にも赤が沁みて上着に撥ねていったが、彼はお構い無しに部屋の中央へと歩んでいった。

彼の目の前には、一つの寝台がある。

シーツや金具の部分まで赤く濡らされ、元からそうであったかのような赤く着色された寝台。

その上には、同様に赤い一人の女が磔にされていた。

釘を生身の腕や脚に均等に打たれた女は、生前は美しかったであろう面に血の涙を流す。

彼女の黒髪は自らの血を吸い込んで、赤黒く染まっている。

「ひっでえ 末路」

男は何の感慨もなく女の亡骸を見て、血の水溜りを足先で弾く。

躊躇いない所作で女の顔を覗き込んで、様子を観察した。

見開かれたままの眼は淡い碧眼だ。それに黒髪ということは、おそらく珍しい混血なのだろう。希少種と呼ばれる形質変異の気もある。もう死後硬直が始まっているのか、女の顔は死者のそれであり瞳孔も拡大しきっていた。

けれど死化粧をきちんとしてやれば、彼女は生来の美しいままに棺に収まる。

男は女の顔を覗き込んだままに、さも残念そうに言った。

「あーあ。こんなトコに逸材がいたなら、さっさと犯つときゃ良かったなあ……！」

「……滅多なこと言うもんじゃないよ、リベスト」

宥めるのは、男とは別の人物の声。

リベストと呼ばれた男は粘着質の声音で応じた。

「おそかったなあ？ ええ、クロード」

「どういたしました。こっちもいろいろと忙しいんだ……似たような役回りばかりで吐き気がする」

戸口に立ったクロードは造作もなく部屋に入り、死体を眺めて嫌悪を洩らす。

「……また、どうしてこう異常者をアピールするんだろうね。短期間に集中し過ぎて。何だかわざとらしい」

「どうだろうなあ、立て続けにこんなもの晒されたら、頭の弱い手前等でもいい加減に尻尾も掴めるだろうが？」

挑発的な男の口調に、赤髪の青年は唸る。

「それがそうもいかないんだよね。あちらさん、随分と用意周到みたいだし」

「はン、犯行現場が軍の敷地内でも、か？」

揶揄して言い、リベストは一方に挑発的な目線を向けた。クロードは肩を竦める。

「調べてみないことには何とも……遺体の損壊の仕方が前例に似てるし、あながち愉快犯の可能性も否めない。……にしても、おれにし

てみれば、ヴェンデッタの処刑と時刻が同じつてのが引っ掛かるな」
「：あー、はいはい。あの狂った連続殺人犯か？ 死体強酸で溶かしたとかいう？」

「うん。：知り合いの知り合いが彼女に因縁があったりして、確保するにはだいぶ手伝ってもらったんだ」

「回りでえ。要するに他人の手柄を横取りしたんだろが」

「リベストはもうちょっと遠回しに言えないかな：」

告げながら、クロードは死体――フレイアと呼ばれていた女性の全身を視察する。

凶器は刃物。釘。死因は出血多量。：顕著な髑髏殺しだ。

ふと、目の前の女性に形質が似た人物と印象が重なった。

すぐに幻影を振り払い、クロードは思う。

――とある少女に事実を伝えるべきか、否かを。

亡骸と化したフレイアと彼女は、浅からぬ仲だったはずだ。

しかし伝えれば、まず最初に咎められるべきは彼女の身柄を拘束していた軍警だろう。だが、体裁ばかり気にして隠し通せる確信もない。

腕を組み、クロードは暫し唸った後に

「まあいっか、会う口実が出来たし：」

「はア？ 何の話だ」

「いいや、何でもないよ。ともかく、事後隠蔽は専門家に任せましょうか」

クロードは何処か弾んだ口調で言い、いぶかしむ男を背に寝台を迂回していく。

見渡す壁一面には血がついており、固まったものはこびり付いていた。

鑑識ならば血痕の乾き具合を頼りに死亡推定時刻：もとい犯行時刻を求めることだろう。

「……？」

クロードは見渡す血みどろの背景に、ふと違和感を覚えた。

視界の一角、僅かながらに白い本来の壁が残っており、血痕の付いていない箇所がある。

壁には、血文字でこう書かれていた。

『please, go to your grave』

71 現

薄暗い部屋の中。

相對する二人は机を挟んで向かい合う。

一方の漆喰の瞳は見開かれて、目の前の人物を映した。

——信じられないという顔。

人間離れした造形を持つ彼女でも感情を露呈した、人間味のある表情ができるのだと、改めて感心しながら、赤髪の青年はか細い声を聴いた。

「…嘘だろ……？」

「本当だよ」

変わることはない事実を述べて、青年——クロードは言い放った。

「死んだんだ。フレイアが。…正確には殺されたっていうのかな」
「……うそ……」

やはり驚愕を面に宿し、少女は身を引いた。

俯いた美貌を長い黒髪が隠す。

——言わない方が良かったかな……

クロードは客観的に思った。存外に目の前の少女——レインの心的な衝撃は大きかったようだ。

フレイアとレインがどういった関係だったのか、信頼関係の程など知る由もない。

他人の事情には興味もない。

けれど、レインの苦渋の意味を問おうとしている自分がいた。

——おっかしいなあ……

興味を持っている？　このおれが？

——まさか。

自己完結して、机上の書類を指先で撫でる。

ふと顔を上げると、相変わらず少女は俯いているままだった。

「…レインさん？」

「……ああ」

一応、といった感じの生返事。

間を置いて、もう一度語りかけた。

「――アレイン」

「…っ」

本名を呼ばれた少女は咄嗟に顔を上げる。

「講釈垂れる気は毛頭ないんだけどね。取り敢えず、人の話を聞くときは相手の目を見ようか」

計算された自発的な笑みを浮かべ、赤髪の青年は告げた。

「…悪い」

やっとレインはクロードと対面する。

戸惑いの表情。

――もつと困らせてやりたいくらい。

内心で囁く誘惑を押し込め、彼は頬杖を着く。

「君を呼んだのは至極簡単なことでね……レイン、君さ、彼女が殺されたときに何処にいたの？」

「……！」

見開かれた眼は、次の瞬間には冷たい色を放っていた。

「…疑ってるのか？ 自分がフレイアを殺したんじゃないかって」

「疑ってるんじゃない。ただの確認作業だけど」

視線が交錯し、重圧を伴った沈黙が下りる。

桜の花弁を思わせる口唇を開き、レインは話した。

「……お前に捕縛を頼まれた軽犯罪者を追っていた。その日のうちに容疑者は第五区の軍警察支部に受け渡した。記録が残っているはずだ」

「そう。ならいいや」

素っ気なく返して、クロードは長い脚を組み直した。

「じゃあ、そうだな。…彼女を殺しそうな人物に心当たりは…」

「ない」

断頭鎌の如き即答。

「だろうね。あ、そうそう。レイン」

思い出したかのように、青年は声を高める。

少女は訝しげに耳を傾けた。

「――please, go to your grave」

流暢な綴りで異国語を発する。

おそらく自国――イザベルでは基本的に使われていない言語：英語だろう。

しかしクロードの形質からして彼の出身地が英語圏である可能性も十二分に否めなかった。彼が英語を話すことに違和感があるわけではない。

「レイン、この台詞に聞き覚えは？」

「……ないけど……どういう意味なんだ？ それ」

美貌の少女はさして興味もなさそうに問う。条件反射というものだ。

「――あなた自身の墓穴にどうぞ……要するに、死ねってことさ」
さらりと説明し、クロードは笑った。

レインはそつなく語られた内容に、反応しかねる。

「……この台詞がね、フレイアの血で現場の壁に書かれていたんだ。
中々挑発的だろ？」

「……………」

彼女は唇を噛みしめ、俯く。

――意外だな。

この程度じゃなんの反応も示さないと思ってたのに。
クロードの内心の見解を、レインは知る由もない。

「レイン」

机を人差し指で、とんとんと叩く。

指し示すのは机上の書類。

「次の仕事。おれはもう行くけど……」

青年が腰を浮かそうとしたところで、レインは口を開いた。

「…クロード」

「何？」

「殺人は続くかな。フレイアの後も……」

「そうだね。たぶん犯人の気はまだ収まってないよ。おれとかは一番に標的にされそうだ」

振り向かないままに少女に語りかける。

「レイン、殺されてもいい人間っていると思うか？」

「いるよ」

淀みない返答。

確定事項とでも言いたげに。

——へえ。

「じゃあ、殺してもいい人間は？」

「いるよ。…何だ、クロード。自分は博愛主義者でもなければ、現状を知らない温室育ちでもない。当然の答えだ」

「うん。そうだね」

満足そうに頷くと、青年は部屋を後にした。

やはり、少女と自分は相容れないと感じながら。

とある書記（前書き）

※残酷描写あり。

とある書記

施設にいたときに子供たちに行われていた、人間としての感情をなくす訓練というものがあった。

もつとも顕著なものには、生きた人間を的にして撃たせたりすることだったが、非道さでいえばもつと酷いものがあった。

適応テストに耐えられなかった子供を、同じ施設の子供たちが集団でリンチにする：要するに罅り殺すというもの。

弱いものから切り捨てられていくのだ。

自分は死にたくないから、子供たちは提示された生贄を滞りなく殺していた。

生贄を定める適応テストにもさまざまなものがあったが、自分がよく覚えているのは記憶に古い、ある映像だった。

まだ『彼ら』も幼い頃だったと思う。

施設の子供を閉鎖された一室に集め、大きなスクリーンに映像を流す。

映像は実際に撮ったのか、はたまた合成された代物だったのか判別がつかなかったが、やたらリアルでグロテスクだったことを覚えている。

ある家族の幸せそうな映像が流れた。

家族は娘と両親の三人。

彼らは今からどこかに出かけに行くのか、街中を歩いていた。

ところが、ビル工事の鉄筋が倒れ落ち、一家はその下敷きとなる。体がばらばらになって押しつぶされて挽肉になる映像。

見させられたほとんどの子供は、気絶するか、嘔吐するか、拒絶

反応を示した。耳や目を塞いで叫んで必死に出口を叩いている子供もいた。

つまり『そういう子供』が、後の生贄となったのだ。

ただし、そうでない者もいた。

ある少女は、映像内の父親の頭が重みで捻じれていく様に吹き出して、母親が悲鳴とともに下敷きになって刺さった鉄筋が子宮を引きずり出す様に声を洩らし、子供が手脚ばらばらになった時点でもう我慢の限界とばかりにけらけらと笑い転げていた。

発狂したのかと施設関係者は疑ったが、そんなことはない。

——彼女は『ただ楽しそうに笑っていただけだ』。

ある少年はやけにスローペースで分解され宙に舞う体を見ても全くの無表情で、何故か他の子供たちが惨劇スクリーンから遠ざかっていくなかで、一人だけスクリーン前の特等席へ移動し、やはり無感動にまじまじと

愛に満ちた家族が肉片に変わっていく様を見ていた。

適応テストの映像はそれだけに過ぎず、幸せそうな老夫婦がごみ集積場にぶちこまれてやはりクレーンでかき回される映像や、幼い幼児をやはりばらばらにしてトイレに流す映像など、数えきれないほどの非道な行いを流した。

でも、やはりその二人だけは反応を変えなかった。

少女は何を見ても腹を抱えて笑うし

少年はただ一番前の特等席でまじまじと映像を見るだけ。

ただ、少女はあまりにも毎回テンプレートな展開に途中で飽きたらしく「ねえ、もうバラバラは飽きたよう」などと漏らしていたけれど。

施設の職員はこの時から二人に目をつけていた。

彼らならば、この子供全員を集めたものと同等、もしくはそれ以上のスペックを詰め込めるだろうと。

それから施設の職員は彼らの『整備』には殊更に注意深く綿密に

行った。

時に、彼らの訓練、戦闘教育、旧軍への忠誠の擦り込み。

時に、彼らの健康管理、体の手入れ、性的な愛撫。

少女はどれだけ汚い思いをしようとやはりけらけらと笑うし
少年はどれだけ体を切り裂き弄り回されようと無反応だった。

一方は純白なままの天使で、もう一方は生きる屍だった。

二人に共通項はある一点を除いてほとんどなかったが、それでも
ただ一つ『母親が同じ』という点では近い存在だっただろう。

記録に残っている日付。

彼が十五歳、彼女が十三歳だったときのことだ。

施設員はいつもどおり『感情を無くし人形にするため』の少女への
愛撫を開始し、少女は男の汚いものを突き入れられながらもやはり
優しげに微笑んでいた。

実を言えば男は欲求が満たされれば良かったし。

実を言えば少女の方はもはや痛いあの辛いあの恥ずかしいあの苦
しいあの汚いあのといった感情はすでに廃されていた。

ただ、場が悪かったのだ。

男が少女を犯している現場に『彼』が通りかかってしまった。

あたかも、それが『彼』と『彼女』の集団訓練以外で初めての邂
逅となってしまった。

彼は、優しげに微笑みながら男のそれを体内に無理矢理押し入れ
られる少女を見てどう思ったのか。

彼女は、血の繋がった兄が自らの辱めの現場を凝視している様に
何を感じたのか。

…今ではもう知るすべはない。

しかし翌日、少女を犯していた研究員は施設内のごみ箱に丁寧に
畳まれて捨てられていた。

少年に問うても知らないと言うし

少女に聞いてもにこにこしているだけだった。

それからだろうか。二人が行動を共にし始めたのは。

り抜粋。

旧軍施設員の書記よ

供述』

題名；『A級戦犯の

私が研究員としてあの施設の存在を知ったのは、もう随分と前になる。

この施設は：施設と呼べるのなら、だが、軍部でも警部でも、ましてや軍警察のものでもない。

ここは旧軍の思想を掲げる残党の立ち上げた、ただの養殖場だ。子供たちに人間としての尊厳はない。

そして、彼らは金と引き換えに親に売られた者ばかりだ。

ここは循環世界の掃き溜めだ。

今こそ残存資料を掻き集めることが出来たが、しかし以前ならば施設のことを嗅ぎまわっているだけで始末されていただろう。

『旧軍』の残党の力はすさまじく大きい。

彼らが子供たちを養成する理由は依然不明だ。

何処かの組織や国と戦争でも始めるのか、もしくは表社会にまた出てくるつもりなのか……

どちらも、考えたくない。

ただ、私は口答えできる立場に居ながらにして、施設員の非道な行いを止めなかった。

傍観することしか：できなかった。

資料を集め、当時のことを知った今、私は思う。

彼らはどこに行ったのか。

ほとんどの施設員や子供たちはあの原因不明の爆破事故による誘爆、及び崩落に巻き込まれて死亡したと聞いた。

だが、：笑わないで聞いて欲しい。

私には『彼』と『彼女』の兄妹が、まだ生きているような気がするのだ。

無論、これは私の浅はかな願いに過ぎない。

しかし、あの二人がまだ生きているならば、私はこの真実を死ぬ前に彼らに引き継がなければならない。

それこそが私の天寿であり、使命だと思うのだ。

イヴァン・E・クオルテアーズ

S, 1994 4, 14 ノ

「ノイヴァンさん、やっぱりここに居たんですか」

「……ああ。君か、クロード」

私はふいの声に、ペンを止めて振り返る。

戸口には赤髪に長身の青年が立っていた。

珍しく軍服の礼装を着込んだ青年は、呆れた風に言う。

「勝手に消えないでくださいよ。：何書いてるんです?」

「これか? : 手紙だよ」

「誰への?」

青年は物怖じせずに問い詰める。

彼の唯一の愚直な部分は、探究欲だ。

私は紙面を丁寧折り畳み、発言する。

「…そうだな。私が謝るべき人物…とでも言っておこうか」

「詫び状ですか？ それとも懺悔状？」

青年の薄緑の瞳を一瞥し

「…どちらかというと、懺悔の方だ」

「へえ。なんかそのまま墓に持って行けそうですね」

口端を吊り上げ、軍警察の青年は笑う。

私も微かに笑って応じた。そのまま揶揄を含む言葉を発する。

「…ところで、クロード。君が私の書斎を訪ねてくるなんて珍しいな」

「そうですかー？ いや、実は呼んで来いって頼まれちゃって」

「総帥にか」

「…ええ、まあ」

彼にしては珍しく、語尾を濁す。

私は執務椅子から重たい腰を上げた。

「じゃあ、行こうか。あいつを待たせると厄介だ」

一度畏まって、赤髪の青年は敬礼した。

「助かります…——軍部監査長」

72 静観

広大な会議室には、僅か三人が居た。

一人のスーツ姿の女性を除き、後の二人は机上を囲んでいる。二名はどちらも長身の男だ。

女性は一息に話し終えると、残りの兩人を見据えた。

「つまり：明らかにおかしいんですね」

「何が？」

即座に、赤髪の青年が間の抜けた問いを発する。

「お前は一度で話を聞くことが出来ないのか。クロード」

赤髪の青年に対し、厳しい糾弾を発するのは金髪の男。

彼も女性と似通った礼装を着こなしている。溜息を吐き、椅子を引いた男は背もたれに体を傾けた。

重苦しく語り始める。

「血液の量だ。常を脱している。実際に見たんだろう、お前も疑問に思っていないのか」

「あー、確かに部屋中真っ赤だったもんねー。あいつがそんなに血の気が多かったとは思わなかった」

首肯する青年に、冷ややかな一瞥。

女性は吊り上った眼をさらに冴えさせ、呆れの色を見せて話す。

「レヴァ、詰まらないこと言っただけで、所見の見解はどうなんです？」

女性に示唆された赤髪の男――クロードは上方へ視線を泳がし

「別に。：ただ、まあ。血なんてもの、混ざってしまえば同じことでしょ」

微かな笑みを含んだ口元で囁いた。

相對する二名は口々に反応する。

「：成る程。お前はそう思っているということか」

「回りくどいですね。うざった」

眉根を詰めて、吐き捨てるのはスーツの女性。

態度的に、いかにもクロードを毛嫌いしているといった様子。対する青年はあっけからんとしていた。

「マッシュツはもう少し丸く言えないのかねー」

「毎度思っていました、レヴァのような言い方は、一々イライラします」

クロードが再度口を開こうとしたところに、鋭い叱責が飛んだ。

「――キリがない。お前等は少し黙っている」

鋭利な剃刀を思わせる一声。

命じられた二人は軍人という気質から、反射的に押し黙る。

「要するに：フレイア以外の、誰かの血が混ざっているということになるか」

金髪の男の声に首肯するのは、スーツの女。

「ええ。あくまで可能性の粹を出ませんが。検死官も不可解に思っていたらしいです。上手く血液分離と血液型検査が行えれば、確証が得られるでしょうね」

「：出来れば、ね」

赤い青年がぼつりと呟き、金髪の男――アウストラルは不敵な笑みを咬んだ。

「出来なくてもさせる。：当然だろう」

対するクロードはわざとらしく身震いする。

「ああ、怖い怖い」

「アウストラルが出来ると言っているんです。：結果を待ちますよ」
瞳を伏せたスーツの女性――ミレイナが言うと、赤髪の青年は話を振った。

「ところで：遺体の送還はどうしたの？」

「フレイアは孤児だ。都合が良いのか否か、奴の育ちは養護施設ではなくて都市否認下の教会。：送り届けてはおいたが、後のことは先達に任せる」

クロードは不思議そうに鸚鵡返しにする。

「教会だって？」

「知らないのか。キサラギ・シュツタットフェルト家は、極東の神道と基督教を内包する異端信教者の家だ。跡取りであるフレイヤ……
もとい美都には、宗教の心得があっても何らおかしく在るまい」

「そう……」

致し方なく頷く赤髪の青年に、高い声音が届く。ミレイナは手元のファイルを捲りながらに

「——キサラギ家、発言力が大きく顕著だったので覚えていますよ。本家で耳にしましたが……何でも、前当主夫婦が行方不明になったとか。当時は騒がれましたね」

「もう断絶したかな」

アウストラルの切って捨てるような言葉に、彼女も同調する。

「今となってはもう、胡麻を擦る必要もない旧家です。御三家の取り潰しも早く行われて欲しいですね。賄賂の原因と成りかねません」
組織や国家と癒着し過ぎている家柄は、双方の利害関係で動く。

あまりに顕著だと、公然と賄賂が行われていることに等しいだろう。アウストラルは顎に手を当て、思案した。

「ノーマンザラスは分家が地方にある。……戴冠しているブロフナーは論外としても……」

ブロフナーは現軍総帥の家名だ。彼の一族は他の軍の重鎮とは一線を画した好待遇を受けている。

口端に笑みを浮かべるのは、鋭い目つきをした女性。

「アウストラル……総帥が退役したら、あの家も取り潰すつもりでしょう？」

「どうだろうな」

不敵な笑みは、彼の心中を如実に示していた。

すぐ隣に腰を下ろすクロードは、心ここに在らずといった様子で一つ呟く。

「ああ。そうか、戦果か」

「…何がです？」

素早く反応したのは不機嫌そうな女性。

「いや、キサラギの優遇措置の根本はさ。先々代が祖国を裏切って、この国に従軍したことがきっかけのはず…確かそこで戦果をあげたんだよな…」

確認するような言葉に、アウストラルは提示する。

「WW1か」

第一次世界大戦。――World War of firstの俗称で知られる、歴史的な災禍の名前を。

クロードは天井を仰いで、肯定した。

「…たぶん」

「それは知らなかったです……」

ミレイナは率直に驚く。

異国人…それもアジア系人種が地位的に厚遇されているなど、ザイフォンではまず有り得ないことだからだ。それもWW1の後と言えば、民族至上主義を掲げていた閉鎖的な差別の時代。

彼女は胸に引っ掛かりを覚えた。

まるで、釣り針を仕込まれたような…

「ミレイナ？」

アウストラルが、思考に没頭する彼女を気にして声を掛ける。

「…いいえ。何でもないです…」

小さい返答に重ね、クロードは心ここに在らずといった様子で呟いた。

まるで過去を反芻するように

「…キサラギ家の家紋は、白桜だったな」

呟きは、他の二名には聞かれることはなかった。

73 陽炎

入口の鈴がからんからんと鳴る。

怒鳴り声に近い大声・女の嬌声が響く雑多な場末の酒場に、一つ、不釣り合いな姿があった。

長い髪を帽子に入れ、男装の麗人さながらの立ち姿で少女は店内に入ってくる。

そして彼女を見止めた瞬間から、冷や水を浴びせられたように、店内の客は押し黙るのだった。

それはあまりにも浮世離れた姿。

絵画の中の女神が抜け出してきたか、石造の乙女が生を持ったかと思う程の芸術的ですからある美。

今まで見てきた人間の美醜の基準をひっぺ返されるような衝撃。頭を思い切り殴られたような視覚的な毒。

それ程までに、彼女は美しかったのだ。

「あなたがベンジャミン・ユーフエスですか？」

花卉のような唇から発せられる、凜とした声。

彼女の漆黒の瞳は一点を射抜く。

「……あ？」

見つめられた本人は、間の抜けた返事をして少女を凝視した。

少なくとも彼の拙い人生の中では、少女程に美しい人間を目にしたことがなかったのだろう。

人間離れた美貌の人物が自分に何の用があるのか——検討もつかなかったに違いない。

刃毀れ知らずの硬質な美しさを持て余し、少女は問う。

「ベンジャミン・ユーフエス。：間違いないですね」

いつの間にか、騒がしかった店内の客のほとんどの視線がこちらに

向いている。

まさしく注がれる目線。注目的。

「…そうだが、あんたは……」

男はたじろいでいた。

客引きの娼婦にしては美し過ぎるし、以前に彼女と会った記憶はない。

次の瞬間、少女はそつと椅子に座る男へと身を屈め、見惚れる優美さで耳元に囁いた。

「――お前、麻薬売買に関っているな？」

「――！！」

傍目には愛を囁く睦言にしか見えない行為で、少女は氷点下の声を出す。

聞こえる声と見える表情に、今までの柔らかな物腰はない。

「…表に出ろ、売人^{バイヤー}」

吐き捨てると、少女は男から身を離し出口へと向かって行った。

束の間、何が起こったのか分からずに酒場は騒然となる。

それも数瞬。慌てて席を立ち、男は少女を追いかけた。

出口を開け放ち外に出たところで、首筋に冷たいものが触れる。

「――動くな」

「…っ！」

見なくても分かる。

皮膚一枚を切り裂く摩擦的な痛み。少女はナイフを男の首筋に当てている。

いつでも喉笛を搔っ切れる体勢。

後ろ手にいつ回ったのか、気配を全く消し切っていたことにも驚愕する。

男は腰元へと手を伸ばそうとし――しかし気が付くと、利き手を少女に掴まれた。

ぎりぎり、利き手を万力のように締め上げる。少女の細腕の所業とは思えない。

「…っ 離せ！」

「……武器はこれだけか？」

男の抵抗を歯牙にもかけず、少女は男の腰元の銃を取り出した。地面に銃機を落としてから、蹴り上げて手の届かない場所へと転がす。

男は喘ぎ、叫んだ。

「お前、誰だ！ マフィアの暗殺屋か！？」

「失礼な。合法だよ。…ちよっと軍警察までご同行願おうか」

言い終わるか否か、少女は手錠で男の諸手を拘束した。

金属の接続音。

遠隔操作の施錠ロック。こうなってしまうてはまず開錠は不可能だ。首に刃先を当てたまま、少女は歩けと促す。

周囲に人気はない。

第六区の掃き溜めなど、ほとんどの善良な市民は近づかないし、仮に事態に気が付いていても面倒事に首を突っ込む馬鹿はいないだろう。

暫時の後、狭い路地にエンジン音が木霊した。

無理やり入ってきた車両は一見普通自動車に見えるが、そうではない。

車内から出てきたのは警官服の男だったからだ。

「――お疲れさん」

男は煙草を咥えたままに、麻薬密売者の首先を捕らえる少女――レインへと手を上げた。

「そいつで間違いないか？」

「はい。…後は頼みます、警部さん」

男は覆面警察者に手錠を掛けられた男を蹴り押し込み、扉を閉めた。

「ご一緒しましょうか？」

「いんや。今日は後一人いるし、いい」

警官が指し示す先には、車内に同乗する若い男の姿があった。

彼も警官服などところを見ると、男の部下だろう。

「報酬は後で取りに来てくれ、パスコード受付に言えばいいから」
レインは丁寧に腰を折る。

「助かります」

男は目のやり場に困りながら、問うた。

「……お前さん、正式に公式補備軍警察員にでもなればいいだろう？」

不器用ながらも気遣いの感じ取れる台詞。

少女は静かに答える。

「……あれには、身元の確認が入りますよね……自分は身分証も、戸籍すら持っていないので……難しいんです。でも、お誘い有難うございます」

優しげに微笑んで、少女は男を見やった。

警官服の男は一度頭を乱暴に掻いて、踵を返した。

「気を付けて帰れ。連続殺人犯は昼間でも出るらしい」

粗雑な声を最後に、車に乗り込んで彼らは去って行った。

揺れる車の中。

隣にいる手錠を掛けられた麻葉密売容疑者に警戒を払ったままに、ふと青年は問うた。

今、運転席でハンドルを握る上司へと

「あの……警部補、彼女は……？」

先程、容疑者を捕らえて引き渡した人物はまだ少女といっても過言でない年齢で、おそらく東方人の血を引いていた。その上、目を見張る美しさを兼ね備えている。

初対面なら、相手を呆けさせてしまうだろう。

そして、青年には彼女の後姿に見覚えがあった。

警官服の男は顎髭を撫でながらに、ハンドルを切る。

「……ああ。あいつは非公式の補備員だ」

「非公式？」

「あの子な、事情があつて、今現在は今回みたいな事件を請け負つてもらつてゐる。…悔しいが、軍警察の警兵よかずと腕も立つ」

上司の言葉に、少なからず青年は驚かされた。

見た目で人を判断するものではないが、彼女には暴力沙汰なんて似合わないと感じたのだ。

「…何だ？ あいつに惚れたか？」

男はからかいの混じつた目線を、背後の席に送る。

青年は咄嗟に言い繕つた。

「た、確かに綺麗な娘でしたが……」

気を魅かれたことは認める。でもそれだけだ。

ただの茶化しだけかと思えた運転席の男の声音が、低いものへと移る。

「…あいつには関らない方が賢明だぞ、ストレーヤ」

本気で告げている目付きが、ミラー越しに背後を睨む。

車内の空気が二、三度下がつたような錯覚を感じる。

「どうして、ですか…？」

反射的に青年は問うていた。

男は新しい煙草を取り出し、緩慢に告げる。

「あいつは…きっと俺たちとは全く別の理由で生きてる人間だ」
露骨な事実を包み隠すような言い方。

けれど、それは大きな拒絶の一言だった。

74 約束

雨煙る夜。

効果音はやはり水音。落ちて叩いて弾けていく、水溜りの泡。夕方頃から振り出した雨は止む気配を見せない。

天気予報では、明け方まで断続的に降り続くということだった。街頭はいつもよりも明るみがない。曇り空で陽が早めに隠されてしまった所為だろう。

歩道にも人影はない。

——人々はが寝静まっている、時刻は深夜だった。一つの異音。足音が雨音と共に夜の街に反響する。

傘も持たずに道行く少女は、幽鬼のように彷徨う。

彼女は微かに背後に気配を感じた。

「雨ですよ……？」

「……………」

少女は緩慢に振り向いた。

背後に居た男は僅かに怯む。

それは至極当然のことだろう。目を見張りそうな美女に出会ったことはあったが、少女のそれは息が止まる程だった。彼女は濡れた瞳でこちらを見るだけだ。だというのに、地面に縫い付けられた足は金縛りにでも遭ったように寸分も動かない。

——黒く艶を孕む髪、瞳。

腰まで届く髪は背中 of 衣服に張り付いて雫が滴る。顎からも睫毛や耳や鎖骨まで濡らし、彼女はそこに立っていた。服は体に張り付き、少女の華奢さを誇張する。

現実かと疑うほどに幽玄な光景。

彼女は背後の男の姿を見止めると、吸い込まれた髪の水気を払った。

憂いを佩びた視線は、男から逸れて天を仰ぐ。

「…いいんだ。今日の雨は暖かいから」

囁く声音はか細いが、凜とした余韻を伴う美しい声だ。

少女に見惚れる男は、媚薬を盛られたみたいに戻らない頭で、呟いた台詞に疑問を抱く。

どういう理屈だろうか。体を冷やさない、風邪を引かないという意味か。

健全な考え方だが、それよりも――

「だとしても、この辺りは物騒ですよ」

「…そうだな」

男の危惧にも投げやりに応じただけ。身の危険について興味も関心もないらしい。

もしかすると彼女は貞操観念が緩いのか。わざとそうしているのか。

しかし、彼女はあからさまな娼婦とは一線を画している。

触れただけで壊れて、穢してしまいそうな純潔さとも言おうか。生粋の美術品の如き、足しても引いても何かが損なわれる、類希な均等の上に立っている。

「遊びなら他を当たってくれ」

無感情に言い放ち、ふらりと遠ざかっていく少女の影。

黒い背中に何を思ったのか男は走り出した。水溜りを撥ねながら彼女の腕へと掴みかかる。

僅かな体温を掌は捉えた。

「待って……」

ほとんど懇願に近い声。

少女は振り向かず腕を捻って束縛から抜け出した。

「放せ…痛い」

「待ってくれないか……」

「……………」

五指を解いても、彼女の細い腕の柔らかさは残る。少女は即座に

踵を返した。

男は焦燥に駆られ、咄嗟に叫ぶ。

「…君が…君のことが、知りたいんだ……」

「……、……？」

彼女はいぶかしみながらそれでも足を止めてくれた。

男は無理を言っていることを自覚しながらも、なおも告げる。

「何でもいいから…もう会えないかもしれないなんて嫌だから…
せめて…」

「……………」

「お願いだ。君の名前だけでも……」

「…あなたとは…一度会っている…？」

青年は頷いた。

車窓越しではあったが、警部の車に同乗していた時に確かに彼女に会っている。

「…あの時の…」

じっと少女は男を見た。無垢な汚れない清純な瞳。
相手の心底まで視通せそうな得体の知れない何か。

「……………レイン」

「え……？」

——雨？

「自分の名前はレイン。……貴方は？」

「あ、あ……僕は…ダルシェ・アカツキ・ストレーヤ…」

「…そうか」

「……あ、ごめん…馴れ馴れしいよね…いきなり、ごめん…でも
……」

「いや、構わないよ」

少女は踵を返して…何ということだろうか、こちらに近付いてきた。
た。

真っ黒な瞳が、下から覗いてくる。吸い込まれそうになる漆黒だ。
ストレーヤは間が持たなくなっ問いかけた。

「君はこの街に住んでいるのか？」

「…ああ。あなたは？」

「僕も、第三区に住んでるんだ」

レインは、もはやずぶ濡れになった男の服装を見て問いかける。

「あなたは…軍警察の…？」

「…て言うのには齟齬があるかな。…俺がしてるのは『請負』だ
けなんだけどね。軍都市警察で働いているんだ」

「じゃあ、同じだね」

少女は睫毛を伏せた。顎先から雨水が雫となって滴る。
扇情的な濡れ方に、思わず目を背けた。

頬を染めるストレーヤを見て、レインはくすりと笑った。

「…面白い人。…自制が出来る男は嫌いじゃない」

「……！」

さらりとした口調で凄いことを言う。

「警察の請負か。凄いな」

「いや……」

咄嗟に否定が突いて出る。

少女は面を伏せがちに

「自分とは真逆の人間だ」

「……？」

「明日も、この時間にここに来てくれる？」

少女がさり気無く言った台詞を、危うく聞き逃しそうになった。

単なる口約束でも、男にとっては逢瀬の約束をしたことも同然だ
った。

勿論、慌てて承諾する。

「…あ、勿論！」

「また明日」

濡れた唇で囁いて、少女は今度こそ去っていった。

雨に紛れる後姿は、夜霧に消え入る。

75 愛情

雨雫に濡れた髪の露を払い、玄関の扉を閉めた。
黒く艶めく髪束から、ぽたぽたと水滴が落ちる。

「……………」

口は開くが、言葉が出ない。
思わず、その場に座り込んだ。

呼吸がたどたどしい。

下着まで雨でぐっしょりなのに、寒いのに、服を着替えようとか、
シャワーを浴びようとか…次の行動を頭で考えられない。

今、こうして蹲っている自分が全てだった。

きつと在るべき全ての事象は、自己完結できることばかりじゃない。
だから、時に選択をし、人は何かの行動を起こさなくてはいけない。
…でも、それが分からない。

歯がかちかちと鳴る。

やけに喉が渴く。

——答えを持っていく人が居なくなるとき、人はどうやって正しい
答えの啓示を受けるのだろう。

問うたのはレイン。

答えを知っていたのはフレイア。

——だが、彼女はもういない。

体が震える。

いつもそうだ。

自分の前から消えていく。手の内をすり抜けて落ちる。

——大切なもの、愛おしいもの、守りたかったもの…護ってほしか
ったもの。

もどかしい、哀しい。

まるで誰かが、お前には無理だとせせら笑っているよう。

目頭が熱い。

——呪い。

誰の…誰からの呪いだろうか……

今の『自分』を呪うのは『彼女』だろうか。『私』だろうか。
それとも、他の『誰か』だろうか。

——皆かな…

息が詰まる。

愛しかった人全てに呪われるというのは、一体どんな孤独だろうか。
でも、やはり。

自分は呪われ憎悪される程のことを犯してしまったのだから。

——輪廻。

失う、手に入ったと思って、また失う。

——こんなのは嫌だ。

「私が…消えないで……」

——お願いだから。

「自分から、消えていかないで…」
視界が歪む。

「彼女を…消さないで…」

熱を帯びた意識は、徐々に途切れていった。

76 襲撃

「レイン…レイン！」

肩口を揺さ振られ、レインは目を覚ました。
頭がぼうとする。

「……あ……」

声が上手く出ない。

目の前が滲む。

それに――

「…あつつい……」

体感温度が異様に高い。噴き出る汗が気持ち悪い。
自分はどうしたのだろう。

「馬鹿レイン！ 起きなさい！」

慌てたような、怒ったような声。

「…ば、か……じゃない……って……」

滑舌が悪い。

ゆっくりと視界の焦点が合っていく。

目の前には、心配そうにこちらを見やる女性が居た。

「……レイン、しっかり」

「り、けい……？」

「ほんとに、馬鹿！ 凄い熱じゃないの！」

「…熱……？」

そこでレインは気が付いた。

自分はずぶ濡れの状態で帰って来て……

辺りを見渡すと、意識を失った時と相変わらずの玄関。

彼女はそこに体を丸めて倒れ込んでいた。

立ち上がろうとして、足が纏れて、李清に抱え込まれる。

「…無理しないでよ」

「悪い……」

鮮明になってきた意識の中で、息の根が鳴り響く。
喉が渴く。

胃がむかむかする。胸やけも。

「……気持ち、悪い……」

「やだ、吐かないでよ。珍しいわね、あなたがダウンしちゃうなんて……一体レイン、どうしたのよ？」

「……知らない……」

「知らないじゃないわよ。ほんとにただの熱？」

自分が熱を出して寝込むなんて、いつぶりだろうか。

レインは首をもたげ、李清の肩に凭れ掛かる。

「……あ……」

喉の奥から吐息を呑み

火照った体がやけに煩わしい。

李清に自室まで運ばれ、ベットに乱暴に投げられる。

「……病人一丁あがり。大人しくしてなさい」

「……もつと、丁寧……う……吐く……」

「吐かないの」

黒い影が部屋を後にする。

寝台の上で体を転がして、レインは仰向けになった。

——風邪か……

幼い頃にひいたことがあるだけで、特にイザベルに来てからは滅多にひかなかった。

「……あー、……」

喉を転がす。違和感がある。

ひんやりとしたシーツの感触が心地よい。

自暴自棄になって、体調管理もろくにしていなかった。

事实は重たく、現実は昏い。先は見えない。

掴めない不安が眼前に確かにあるのに、輪郭さえも捉えられない。

——確固とした形があれば、立ち向かえるのに。

見えないものとは、戦えない。
見たくないものは、見えない。

「……苦しい…な……」

——苦しい。

何で自分はこんなに苦しいのだろうか。

熱の所為だけじゃない。

ずっと、気を張りつめていたから。

自分のことは自分で片付けて置かないと……

——自分は、あいつに会う資格さえ失ってしまう。

「…リート……」

彼は今ごろ、何をしているのか。

生きているのか、死んでいるのか。元気なのか、そうでないのか。

——会いたいな…

会ってどうするでもないけれど、彼の声を聴くと安心できそうな気がするのだ。

約束を、守ってくれると信じている。

彼は帰ってくると信じている。

そうしたら、自分はこれまでの気持ちをぶちまけてしまおうと思う。
心配したこと、待っていたこと、苦しかったこと、会いたかったこと……

約束が心の支えになってくれている内は、立っていられる。

そして、彼が帰って来たら——

『彼女』と『私』と『自分』の関係にも、何かの変化があるかもしれないと。

三人の自我が闘ぎ合う状況から、抜け出せるかもしれないと。
自分本位な上に他人任せな考えかもしれない。

それでも、期待せずにはいられない。

だから、欲している。

掠れる声で呟いた。

「————さくら さくら やよいの空は 見わたす限り かすみ

か雲か 匂いぞ出ずる いざや いざや 見にゆかん」

彼女――姉さんの歌。

彼女――フレイアの歌。

大切な思い出の片鱗。

失くしたくないもの、忘れたくないもの。

――痛い。

千切れてしまいそうな痛みだけ抱きしめていたら、いつか会えるだろうか。

『彼女』と『私』にも。

「……待っててくれたら……」

もう少し、消えないでいて欲しい。

吐息を長く紡ぎ、瞼を閉じる。

「また、一緒にいられるかな……」

独白は小さく、静謐に吞まれた。

そして、意識も埋もれていく。

抵抗なく、泥に沈んでいく。

レインはそっと顔を伏せ、眠りについた。

77 仮定

レインの部屋に入った李清は、真っ先に肩を竦めた。先程運び込んだばかりなのに、ベッドの上の少女は完全に熟睡している。

うつ伏せになって、人形じみた静謐さを以てただ美しく在る。長い黒髪は寝台に広がっていた。

洗面器とペットボトルに入った水を枕元に置いて、レインの長く艶やかな髪を撫でて整えてやる。

「……ったく…」

小さく呟いて、精巧ですらあるレインの面を覗き込んだ。苦しそうな雰囲気はない。

軽く襟元を緩めてやって、李清はベッドに腰掛けた。

レインに背を向け、膝に頬杖を着く。

——どうしたものでしょうねえ。

彼女の道は彼女が決める。

けれど、彼女の選ぶ道は必ずと言って良い程に茨の道なのだ。物申したくもなる。

類稀な美貌と、あまりにも奇異な過去を持つ少女。

——まだ、十七歳なのよね…

時折、彼女の幼さを忘れそうになる。

本来ならば学生として、表の世界で様々な保護下にあるべき年代だ。しかし、周りの環境は彼女にそれを許さなかった。

そして彼女も、在るべき幸せを享受することを拒否した。

——レインには、一番に幸せになって欲しいのね……なれると信じていた。

彼女を明るい場所に引っ張ってくれる人が現れると。

そして、彼は確かにレインを支えた。

——でも、居なくなってしまった。

李清としては、許せない。

レインに希望の光を見せておいて彼女の前から立ち去ったリートも、そうさせた何かも。

無論、彼にも事情がある。

それも、レインと並ぶとも劣らない、壮絶な過去が。

李清がリートと初めて会った時、あの時の彼の眼が今でも忘れられない。

鯁鮓とした、汚泥の底のような昏い目つき。

その瞳が、全てだった。

足を引っ張る過去。

レインと同じだ。

彼らは過去が大きすぎて、その比重に足を取られる。

よりにもよって、前に進もうとしている時に。

——歯痒いわね……

李清にできることは彼らを見守ることだけだ。

けれど行く末を案じてみても、あっさりと裏切られることばかり。

目の前に横たえる少女。

本当の彼女を愛して、導いてくれる者が彼の他に現れるだろうか。

——……似た者同士、だったのよね。

結局、二人は影を重ねることで惹かれていったのか。

最後まで、その気持ちををはっきりと言い表すことはなかったけれど。

彼らは、言葉にってしまうことで失う何かに恐怖していた。

だから、言葉にしないことで逆に失うはめになった。

——馬鹿なのか……鈍感なのか……

きつと、どちらもなのだろう。

幸せになって欲しいけれど、幸せと言うのは人によって多種多様であり、一重には言い表せない。

でも、過去に引きずられることが幸せではないし、過去の偶像に縋ることはただの未練だ。

未練は、どこかで断ち切らなければ。

——お節介なことよね……

断ち切るだなんて、レインが一番難しいのだ。

肉親のかんばせを移されて、自己が曖昧になってしまった存在。

朝、鏡を見ても生来の自分の顔はない……その苦悩を李清は知らない。きっと、レイン自身にしか分からないことだ。

自らのことを私と呼べていた頃のレイン、呼べなくなってしまった、自分という認識で自らを捉えるようになってからも、たった一人の少女には変わらない。

自己否定の概念は、苦しいだけだ。

自分を認めて、納得して、育ててやるのも一つの意義があり、同時に意味のあることだ。

そして、その変化を生むきっかけは周りの人間なのだろう。

レインには周りの人間がいる。

彼女のことを、見目は関係なく心から身を案じて想ってくれる者たちが。

李清だってその内の一人だ。

——だからこそ。

レインには、自分が望まれている存在だということを忘れないで欲しい……そう、願わずにはいられない。

一人であっても、孤独ではないと。

思いは簡単には伝わらないけれど。

——それでも……

いつか、彼女にも分かる日が来ると良いと思うのだ。

78 面影

昨夜降った雨は朝には止んだ。

今夜は雲一つない夜空。

寝台から這い出たレインは、足音も静かに屋外へと出る。

体調不良を伴う熱は一日で下がった。

どうということはない。一日寝ていればこの程度の風邪は直る。元来、丈夫にできているのだらう。

健康に産んでくれた両親に感謝：したいのは山々だが、肉親は一人残らず居なくなってしまった。

天涯孤独な少女。

そう言えば聞こえは良いが、あまり好きな言い回しではない。

——当たり前か……

内心の声に耳を傾け、夜の街頭を行く。

時刻は午前を回り、日付を変えた。

胡乱な昨日の記憶。風邪で頭がぼうとしていたとはいえ、どうしてあんな約束をしたのか。

自分と『彼女』に寄ってくる男は、全部を跳ね返して、それでも駄目なら打尽にして……

なのに、どうしてあの男もそうしてあしらわなかったのか。

——…不思議だ。

街路樹を照らす灯りを道標にして進む。

静かな夜。

穏やかな夜。

夜はいい。何も考えなくて済む。

明るくなってから考えればいいと思えるから。見えないうちは、何も始まらないから。

昨日も同じ場所で夜を見上げた。

——寂しいのか。

寂しいから誰かに縋りたくなって、自分はこうして今約束した男の許に向かっているのか。

——身と心だけは堕ちないと、決めたのに……

矜持やしがらみなんていらぬ。それでも体と心は必要なのだ。

そつと頬を撫でる夜風に肌を晒し、流す吐息を織り交ぜる。黒髪が風にたわめき、首筋を透かした。

そこにあるのは、僅かに赤らんだ手術痕。

顔面皮膚の移植手術の痕は、首元に今も残っていた。

忌々しい記憶。——姉の顔の造顔をそのまま自分に移植するという手術。

おぞましい限りだ。

本人の承諾なしに行われ、既に死人と化した姉の顔を張り付けられ、起きて鏡を見たら姉の顔があった。

あの時の感情。

目の前で死んだ人間の顔が、今、目の前にある。

泣いて喚いて叫んで、必死に、顔の皮を剥がそうとした。しかし第三層まで移植された皮膚は完全に定着していた。

そもそも、剥がしたところで火傷でどろどろになった顔があるだけだったのだから、驚愕するのは同じことだったのだが。

姉の顔。

『彼女』の顔。

彼女の顔が自分のものとなると、世界は一変した。

周囲から向けられてくる視線は仮面の『彼女』しか見ていない。

誰も『私』を見なくなった。

姉の美貌は、あたかも妹である『私』を苦しめ、苛み続けた。

そうして、『私』と『彼女』の境界が捻じ曲がり、歪んで……

——死のうとした。

けれど、自殺は失敗に終わった。

『私』はもう限界だったのだ。

そうして『彼女』と『私』の狭間で揺れ動きもがく『自分』という第三者が生まれた。

『私』と『彼女』は『自分』として生きることにした。

『自分』：アレイン・ヴィアルドレッドとして。

それが最善だったのだ。

同時に、そうしないと全てが壊れていた。

保身だ。

アレインと言う人間は、今ここに居る。

『彼女』と『私』は時折出てきて『自分』を虐める以外には表に出てこなくなった。

そもそも、『彼女の顔』と『私』という自我と『自分』という認識全て、同じものののだ。

ただ、同じと思えなくなっただけで。

『彼女』と『私』と『自分』の関係は今も平行線。いつか擦り合わせて同じ線上に載せれたら、良いと思う。

――そして。

そうなってしまった元凶を消さなければ、耐えられない。

内なる者たちの声を聴きながら、レインは開けた空間に辿り着いた。街灯が照らす夜道。

昨日、ここで彼と出会った。

会う約束をしたことを何故と疑問に思うが、それでもやはり、理由はある。

リートと初めて会った時に似ていたのだ。

――あいつは……

レインの外見ではなく、中身を見ていた。

姉の外見だけではない自分を見つめてくれた。

それがどれだけ嬉しかったか……

――ダルシェ・アカツキ・ストレーヤ。

彼が本当に自分の内面を見てくれているのかはまだ分からない。けれど直感的に感じたのだ。

——彼は違う。と。

だから、少し信じてもいいと思った。

加えて、初対面であんなに愚直な告白をされたのも初めてだった。大概は回り込んでレインを口説くか、それとも強引に手箆めにしようとするかの二種類だったから。

——興味があるのか：

得心して、ふと辺りに視線を巡らした。

無人の街路に反響する足音と、夜闇に紛れて走ってくる影がある。色あせた茶髪に、翡翠を思わせる澄んだ瞳。

息を切らす青年——ダルシエはレインの目の前まで来て、荒い息を長く吐いた。

「……来て、くれたんですね……」

屈み込んで肩で息をする青年に、レインは静かに問うた。

「それはこっちの台詞でもあるな。口約束を本気にしたのか？」

「：だって、あなたが、会ってくれると言ったから……」

「嘘だとは思わなかった？」

「そんなの……これっぽちも……」

「……」

純真なのか、人を疑うことを知らないだけなのか。

レインは髪を後ろに流し、物憂げに問うた。

「……おかしな人だな。東方人と積極的に関わるなんて……何の見返りもなしに」

かまを掛ける意味も込めて、視線を心持ち上げる。

「見返りだなんて……ただ、僕は話がしたくて……」

「『自分』と？」

またもや揶揄を含んだ口調でレインは投げかける。

「ええ。あなたと……レインさん」

「……」

——レイン『さん』か……

どこかの仮面の侍女がそんな言い草をしていたな、と思い出した。

目の前の青年からは悪意は感じ取れない。むしろ、善良な空気を身に纏っている。ある意味模範的な人畜無害な人物だろう。

レインは街燈に照らされる相手の顔を見ながらに告げる。

「…どうして、知りたいと？」

脈絡のない質問。

それが、昨夜の会話の続きなのだとダルシェはすぐに気が付けたようだった。

「それは…あなたのことが気になったからです」

「どうして気になった？」

「…えっと…言葉には出来ないのですが…」

青年は言い淀む。少女は黙する。

やがて収束した意思を青年は口にした。

「あなたが、消えてしまっただったから」

少なくとも、彼の答えはレインの予想の範疇の外にあった。

——消える…？

ごく自然に疑問を抱き、理由を瞳で問い掛けた。

ダルシェはなおも語る。

「…あなたが、すごく…儚げで、触れられるのかさえ分からなかったから。それくらい、幻かっと思うくらいに…あなたが、綺麗だったから」

真摯な瞳で見つめ、告げる。

レインはその瞳を茫洋と見つめ返した。

少女の可憐な唇は淡々と事実を述べる。

「自分は…綺麗じゃない」

「…：勝手言っ、すみません。でも…そう感じたんです」

青年は軽く頭を下げて、小さく呟いた。

レインはまたもや沈黙する。

自分でもよく分からなかった。少なくとも怒っているわけでもないし、嬉しいのでもない。複雑だ。

簡単には、ありがとうと言えない。

「…綺麗なんかじゃ…ないんだ…」

レインは沈黙を破り、夜の帳と同じ昏い声を発する。
ダルシェはただ、少女を見ている。

「…綺麗で、いたかったけど、しょうがないじゃないか」
途切れ途切れに告げて、黒髪で顔を伏せる。

青年は何かを言いかけて、口を閉じ、考え込んだ。
必死に、目の前の少女に宛てた言葉を探すように。

そして、軛を切った。

「それでも、あなたは綺麗ですよ。レインさん」
知らないから、そんなことを言える。

知らないのだ。彼は。

——自分は偽物なのに…
姉の皮を被る、醜いもののなのに。

見た目だけで考えるから、そういうことが言える。

ダルシェの口を塞いで、首を掻き切る幻像が浮かんた。

それは、憎悪が生み出した幻に過ぎない。

けれど十分に鮮明で生々しい映像だった。

——所詮は、そんなものなのだ。

青年に背を向け、少女は俯いた。

独白じみた言葉が、舌から滑る。

「…あなたの言うこと、よく分からない」

今度はダルシェが黙する番だった。

否定、拒否、壁。口に出してしまえば、人はこんなにも簡単に離れていける。

楽で良い、軽薄で哀しい。

矛盾に挟まれ研磨されていく自分の感情だけ。

夜空を見あげ、レインは天蓋を瞳に映した。

星瞬く夜。

あの日、星は見えなかった。あの日も、星は見えなかった。

——ただ、半分に割れた月があった。

レインはゆつくりと歩き出す。青年と分かつ意味を込めて。
ダルシェは追って来ない。

そつと長髪を押さえて、濡れ鴉の髪が夜風に舞う。

「…でも」

彼女の耳朶に、声が聴こえた。

「美しいものを美しいと思っていけないことは…ないですよね」
少女は足を止めた。…止めてしまった。

レインの肩に手が掛かる。

反射的に振り払おうとして、けれどそれが悪意のあることではない
と知って…止めた。

「駄目なんですか…綺麗なものを好きになってはいけないんですか
…」

「……………」

肩に掛かった片手を振りほどけずに、レインは背後のダルシェに目
線だけで振り返った。

在るのは、どこか悲痛な面持ち。

様々な言葉が浮かんで、霧散した。

代わりに、肩に置かれた青年の手に自らの纖手を重ねた。

「…綺麗なものはね、いつかなくなってしまうんだ」

レインは囁き

「搾取されて、汚く染まって、侵されてしまうから」
瞼を閉じる。

「…そして、汚いものが綺麗なものを利用して、皮を被るんだ」
うつすらと目を開け

「あなたは、そんな汚いものに騙されているだけです」

「――違う」

青年の返答は、鋭い否定の意を孕んでいた。

「違う。あなたは汚くなんかない」

「…どうして？」

レインはあくまで柔らかく問う。まるで諭すように。

対するダルシェは少女の肩に置く手に力を込めた。

「汚い人に…あんな顔は出来ないし…あんなに研ぎ澄ました剣技は出来ません」

——…剣技……。

彼が軍警察の補助傭員であることは知っている。昨日、彼自身が語ったことだ。

もしかしたら、賞金稼ぎとして暗躍しているレインのことを以前から知っていたのかも知れない。

「……あなたが、あの刀で」

——刀…？

レインは違和感を感じた。

自分が刀を持ち歩くことはまずない。

持ち歩くことのある居合用の剣…一見ナイフが長くなったような代物は、見た目には刀と呼べないだろう。

世間一般の刀とは、つまり、太刀のような形状の…
そこで、はっとした。

——まさか……

「あなたは、誰の話をしているんですか…？」

レインは震える唇で呟いた。

ダルシェは首を僅かに傾げる。

「誰って、あなたの……」

「それは、一体、いつの自分ですか…？」

「え…？」

盲点だったのだろう。青年は虚を突かれた顔をする。

レインは一気に言い立てた。

「あなたはもしかして、自分ではなくフレイアのことを知っているのではないですか？」

79 逢瀬

「フレイア……？」

「そうです。それが彼女の名前です」

訊き返すダルシェに、レインは静かに頷いた。

自分とは正反対の薄い色素の瞳を見つめ返し、

「ダルシェさん」

レインは初めて彼の名を呼んだ。

「はい」

「あなたと自分が会……いえ、話したのは、昨日が初めてですか？」

「え……違う、前にも僕はあなたと話して……」

たどたどしくも、しっかりとダルシェは答えた。

その返事に、レインは得心がいく。

——やっぱり……

ならば、導き出される答えは一つ。

「自分は、あなたと話したのは昨日が初めてです」

「嘘……前にも……」

信じられないといった口調に、レインは首を左右に振った。

「あなたは、たぶん、自分とフレイアを間違えています。彼女は……黒髪の混血で、希少種でした。この街に居たのは、きつと、自分よりも長い」

「じゃあ、その人は……」

レインは言葉に詰まった。

愛する人が残忍に殺されたと告げたら、彼はどういった反応を返すだろうか。

「……………」

「レインさん……？」

口元を結び、離す。

「フレイアは…美都は…亡くなりました」

「……っ！」

殺された、でなく、死んだという事実のみを告げる。

——所詮、弱虫の逃げ道だ。

「フレイアの顕著な外見の特徴をあなたは覚えていた。だから…自分と間違えたんだと思います」

「そんな……」

ダルシェは目を開き、口元がわずかに震えていた。
当たり前だ。

信じられない、もとい信じたくないのが普通の心理だろう。

レインだってそうだったのだから。

フレイアが死んだと、クロードから聞かされた時の喪失感。

言葉では言い表せない彼女と自分の関係。

フレイアと、『彼女』と『私』と『自分』の関係。

訊きたいことがたくさんあった。教えてほしいこともたくさんあった。

けれど、今ではもう遅い。

フレイアから託されたのは、一振りの刀と、『彼女』の真実と、強かに在れ、というメッセージ。

数は少ないけれど、重たくて、大切なものたち。

自分はフレイアに何も返せていない。

——もどかしい。

彼女が死んだことは、悲しみの尺度では測れない。

それでも、喪失という事実が重たく胸に沈む。

後悔も反省もないのに、鉛みたいに沈み込む、形容しがたい感覚が苛む。

目の前の青年、ダルシェはどうだろうか。

フレイアが居なくなっていて、彼は悲しいのだろうか。寂しいのだろうか。苦しいのだろうか。

青年の顔は伏せられていて、表情を鑑みることはできない。

それでも、発せられる雰囲気は寒かった。

「……夜」

ぽつり、とダルシェは語りだした。

「夜に、会っていたんです…正確には、見ていた、かな……」
過去を回想するように

「彼女、暴漢に襲われそうになっていたんですけど…ほんとうに、あつという間に複数の男を倒してしまつて…その時の剣技と様子が、眼に染み着いていて……」

顔を上げ、泣きそうな顔でレインに告げる。

「でも、おかしいですよ。僕は薄暗がりの中では、彼女の顔さえも見えなかった」

「……」

レインはただ、無言だ。

「だから……この前、軍警察の仕事の最中にあなた…レインさんを見た時に、後姿が酷く似ていたから、彼女だって決めつけて…昨晚も、勘違いして……」

ダルシェは頭を下げる。

「…すみません…」

「謝ることは、ないよ」

レインはすぐに反論した。

「謝ることなんてない。そうだろう？ …あなたは、フレイアの見た目ではなく在り方を美しいと感じたんだ。…彼女にとって、それはとても嬉しいことなんじゃないかな」

「……」

ダルシェが顔を上げる。

レインはなおも続けた。

「…フレイアは、不思議な人だった。それに掴みどころがなくって、ただ…真っ直ぐな在り方をした人だった。彼女は見た目で人を判断する人じゃない。だから、彼女の剣技や在り方を好ましく感じたあなたを…フレイアもきつと、好ましいと感じると思う……」

一気に語り、一息を吐く。

いつの間にか、熱弁を奮っていた。

「…すみません、知ったような口を効いて…」

「いいえ。…ありがとう。レインさん」

目線を逸らすレインに、ダルシェは笑い掛けた。

力ない笑みだったが、先ほどまでの消失感はない。

「…彼女、フレイアさんと仰いましたか…彼女は本当に、亡くなったのですか……」

気を遣いながら訊く青年に、少女は小さく頷く。

「自分も…人伝えに聞いただけなので、何とも言えませんが。それでも、信憑性はあると思います」

クロードが人の生き死に関わる嘘をつくとは考えられない。ならば、信じたくないけれど信じるしかないのだろう。

「…彼女は、いつ亡くなったんですか……」

「…つい、半月程前…でしょうか」

心苦しくも、レインは告げる。

半月、あれから、たったそれだけしか時間が経っていないなんて。

「…彼女の、遺体に会うことは…?」

ダルシェの言葉に、レインは無言で首を振った。

無理な相談だろう。

彼女の遺体は、保護観察という管理下にあった軍警察が処理したに違いない。

こうして改めてみると、彼女の死について、レインは知らないことが多過ぎる。

けれど、どうしようという気にはなれない。

「ダルシェさん、…自分とフレイアは、確かに形は似ているかもしれないけど…でも、あなたが美しいと感じたのはフレイアだったこと、忘れないでください……」

レインは悲痛な面持ちで囁き、そっと彼の手をとった。

フレイアを好きでいた人が居たのに、本人は居なくなってしまうた。

そして、自分は残った。

擦れ違い、もう会うことはない。

ダルシェに彼女のことを忘れないでいてくれと、身勝手な願いは頼めない。

だから、覚えておく。

自分が覚えておくことで、彼女の存在が確かにあったことの証明になる。

レインは、静かに決意した。

例え、目の前の彼が、今までフレイアに関わった全ての人物が彼女のことを忘れ去っても。

——自分は彼女の存在を覚えておこうと。

80 姉

放課後の教室。

毅然と立ち並ぶ机や椅子、教卓。おそらく中高等部のホームクラスの一つは、黄昏に染まっていた。

橙を孕む室内には、三人の人影。

「駄目なものは、駄目ですっ！」

内の一人は机を叩き、やや怒った口調で告げた。

対する、陽光にも似た明るい髪色の男子は、唇を尖らす。

「だーかーらー！ 会わせてくれるだけでいいんだって」

「駄目！ ぜったい！」

「まーまーユカリ、落ち着きなさいって」

三人目の少女は年齢よりも成熟した体つきを椅子に凭れかけさせ、討論する二人を見やった。

言いあう二人は、少年と少女だ。

一方は橙の髪色に、どこか挑発的な幼さが残る顔立ちの少年――ツヴァイ。

もう一方はくすんだ色合いの黒髪をポニーテイルに纏めた少女――ユカリ。

二人は机を左右に挟んで睨み合う。

その机の椅子に腰かけるのは、やけに大人びた顔つきの少女らしくない少女――リグレットファンこと、リグレットだった。

「そもそも、どうして先輩はユカリの義姉おねえさんに会いたいんですか？」

リグレットは、あるいは自分と同年にも見えるツヴァイに問いかけた。

「…それは…あいつに……」

言い淀む少年はそれ以上を語らない。

ユカリはむすつとした顔で、ツヴァイを見やる。

「おねいちゃんには、おねいちゃんの事情があるんです。勝手に知らない人と引き合わせるわけにはいきませんっ」

「一度も駄目なのかよ！」

「駄目です。おねいちゃんのストーカーがこれまで一体、何十人居たと思うんですか。一人づつ制裁を加えても間に合わない位だったんですからねっ！」

ポニーテイルの少女が腕組みをして、ふんぞり返る。

小柄な彼女がすると虚勢にしか見えない行動である。

リグレットは心中で唸る。

確かに先日、ちらりと見たユカリの義姉は、絶世の美女かと思う位の美貌を持て余した人物だった。

同時に、どこか虚無的な印象も受けたが、些細なことだと感じれるほどには、彼女の美しさは現実離れしていたし、真っ黒い瞳も、濡れ羽色の髪も長くて美しかった。

ユカリのストーカー説も、あながち嘘ではないのだろう。

「先輩がおねいちゃんに会いたいのなら、理由と、会ってどうするかと教えてください。じゃないと、私は簡単には身内の情報を話しませんよ」

ユカリは本気だ。

本気で、ツヴァイのことを見定めている。

信用に値する人物か、否かを。

今度はツヴァイが眉を顰める番だった。

「：どうして妹のお前が、そこまでしてあいつのことを過保護するんだよ？」

荒っぽく問う少年に、ユカリはぼそりと告げた。

「……先輩には、分かりません」

「はっ、じゃあ訊いてみればいい。お前の姉にオレのことを。そしてたらきっと、知ってるはずだ」

「：訊いてはみますが、おねいちゃんが会っても良いと判断するま

では絶対に会わせませんよ、先輩」

二人の視線が火花を散らす。

その二人を見ながら、椅子に腰掛ける少女は溜め息を吐いた。

どうやら、二人とも強情なのは変わらないらしい。

教室での言い合い：もとい半ば口喧嘩を終え、二人の少女は帰路に着いた。

ツヴァイはというと、あの後そそくさと教室を後にしてしまった。おそらく、そのまま帰ったのだろう。

リグレットとユカリは軍拠点都市の住宅街を歩みながら、話す。

「ユカリい、どーして会わせないの。あんたのお姉さんとあの先輩、実際、知り合いなんじゃないの？」

「：だとしても、そう簡単に会わせるわけにはいかないよ。リグレットちゃん」

ユカリは学生鞆を揺らし、革靴で石畳を弾く。

「自慢したくなるくらい、おねいちゃんは、すっごく綺麗。：だから、昔から良くない輩に目を付けられたりしてたの」

ユカリは宵に移ろうと街並みを見ながらに、続けた。

「：昔、私たちがまだ、コッペリアに居た頃：。親しくなった近所のお兄さんが居て：私とよく遊んでくれたの。そのお兄さんが、ある時に、おねいちゃんに会いたいわって言い出して：……」

やや俯きながらに、並び歩くリグレットを見やった。

「：私、何も考えずにそのお兄さんをおねいちゃんに引き合わせたの……そしたら……」

肌寒い思いに駆られながらに、ユカリは一度、喉を嚥下した。

――肌けた衣服、冷ややかな視線、のたうつ男。

「：……おねいちゃんを、犯そうとした……」

リグレットは僅かに目を見開く。

ユカリは続けた。

「おねえちゃんは、昔っからしっかりしてたから…すぐに近くの廃材でそのお兄さん殴って、昏倒させたから平気だったんだけど……それから、怖くなっちゃって」

自分と仲良くなったのは、姉であるレインと近づく足掛かりにする為だった。

自分の浅慮で姉が危ない目に遭った。

：取り返しのつかないことになるどころだった。

ユカリは、それを悉く実感したのだ。

——あの時の、おねえちゃんの眼が忘れられない……

廃材で殴られてのたうつ男を見下ろす、冷め冴えとした、どこか茫洋とした目つき。

「私、おねえちゃんのこと好きだし、義理でも家族だから…お父さんもアス兄ちゃんも好きなの。それから…大家さんも親切で好きだし、おねえちゃんのこと、分かってくれたあの人も、大好き」

独り言じみて、ユカリは語る。

リグレットはそんな彼女の横顔を見つめていた。

「…ユカリは、好きな人がたくさんいるのね」

大人びた少女は、さり気なく添え告げた。

ポニーテイルの少女は、にっこりと笑う。

「うん。嬉しいの。私…世の中のものが全部嫌いだった。消えてしまえば良いって思ってた。でも、おねえちゃんとか、みんなに会ってから、本当に好きで、嬉しいの」

「そう」

リグレットも笑って、付け加えた。

「まア、あたしもユカリと話してるのは楽しいかな」

ユカリは目を丸くした後に、破顔する。

「まーた、そんな嬉しいこと言って！ 褒めても何も出ないぞっ」

「だいじょーぶ、期待してないよー。じゃあね、ユカリ、あたし、こっちだから！」

ユカリの脇をすり抜けて、リグレットは道を曲がった。

その背に、少女は手を振る。

「うん！ また明日ねー」

「明日は土曜日だぞ。お馬鹿さん」

振り返り、リグレットは笑った。

ユカリはあたふたと訂正する。

「わ、んじゃあ、また来週ー」

「うん、来週ね」

響く言葉を皮切りにして、夕暮れの街に二つの影は分かれていった。

81 伝

「おねいちゃん、ツヴァイ・カノ・インフェルノっていう人知ってる？」

「……？」

夕飯の席。

窓からは夜闇と、浮き上がる街頭がちらりと見えた。

リビングダイニングに灯された明かりのお陰で、室内は鮮明だ。

丸テーブルに腰掛けるのは、二つの影。

珍しくぴったり同じ時間に卓に着いた血の繋がらない姉妹は、互いに向き合う。

ポニーテイルの少女―ユカリの問いに答えたのは、長い黒髪に美しい顔立ちをした少女―レインだった。

「……ミドルネームとかハウスネームは知らないけど……ツヴァイなら知ってるよ」

「それ、ほんと？」

ユカリの言葉に、レインは頷く。

湯気を立てるスープをスプーンで掬い取りながらに

「一度だけあったことある。たしか、派手な髪色で……16、7歳くらいの男だっけ？」

レインは視線を斜め上にやる。思い返しているようだった。

成る程と、ユカリは確信を得た。

ツヴァイの言葉は法螺ではなかったのだ。義姉とあの少年は以前にも会っているらしい。

ならば、自分が次に問うべきは……

「おねいちゃん……そのツヴァイって人のこと、どう思う？」

レインは首を傾げて、手を置いた。

「……ユカリ、ツヴァイと会ったんだな」

「…うん」

素直に首肯する。

義姉に隠し事が通用しないことなど、当の最初から分かり切っているのだ。

レインは嘘を感じ取って、見破ってしまうから。

「おねいちゃん、正直に答えてね。そのツヴァイって人のこと…信用できる？」

反復する問い掛けに、レインは唸った。

珍しく、曖昧な言葉を発する。

「どうかな…あいつと会ったのは一度きりだし…でも」

「でも？」

「面白い奴だとは思ったよ。戦い方とかな。侮れないって」

「………」

ユカリは妙に肩透かしを喰らった気分になった。

——戦い方なんて……

何の役に立つのだろうか。

いや、少なくとも目の前の美貌の少女にとっては、仕事をする上で重要な要素であるのだろうか。

一般人にとっては、実にどうでもいいことである。

ユカリは肩を竦めて、食卓に頬杖を着いた。

「そうじゃなくって、おねえちゃん、信用できるかできないかで答えてよ…」

「ああ、悪い。…そうだな、できると思う。ああいうのは、隠し事ができないタイプだろうし」

「ふーん……」

ユカリは正直言うと、彼からは粗暴な印象しか受けなかった。しかしレインはまんざらでもなく語る。

「また、珍しい名前を出すな、ユカリ。…あいつとは何処で？」

「…学校で。高等部の二階生の先輩だったの。…それで、ツヴァイさん、おねいちゃんと会いたいんだってさ」

心持ち頬を膨らませて言うユカリに、レインは首を傾げた。

「それはまた、どうして？」

「…知りませーん。ユカリちゃんは今にも知りませーん」

「ユカリ？」

「…おねいちゃん、あの人と会う気、ある？」

あの人、とは無論ツヴァイのことを指すのだろう。

レインは顎に手を添えて思案した。

「…会っても良いけど…どうして会う必要があるのか、分からないことにはな……」

「だよね！　どこの馬の骨かもしれない野郎なんかとおねいちゃんが直接会う必要なんてぜーんぜんないよね！　うん！」

ほとんど息継ぎなしで捲し立てるポニーテイルの少女。

「…ユカリ？」

おかしい様子の少女の名を呼ぶ、美貌の少女。

ユカリは、じと目でレインを見た。

「何でもないよ。おねいちゃんは明日の仕事の心配でもすべし」

びしっと、フォークの持ち手を回転させて向かいの義姉に向ける。

そんなユカリに、レインはさらりと言った。

「明日は実質の休みだよ」

ユカリはまたもや首を傾げ、フォークを机上に並べ置いた。

「あり？　そうなのー？　久しぶりだね、お休み」

「ああ。だから、ゆっくりと家で休みたいんだけど……」

語尾を濁らすレインに、ユカリは視線で問い返した。

レインは溜め息交じりに洩らす。

「どうやら、別の予定が入りそうだ。明日一日、家を空けるよ」

ユカリは密かに感じた。

義姉のそれは、諦めと寂しさが半々に入り混ざったような言い方だと。

82 過

軍部と外部を隔てる、鉄の柵。

高い垣根に背を預け、黒い影は静かに佇んでいた。

あまりにも精確過ぎて、整い過ぎた造形。歴代の彫刻像のように、全てが複合して調和された上での完璧な完成品を髣髴とさせる美貌。更にそれを縁取る深淵の瞳と、濡れ羽色の腰まで届く長い髪。

レインは自らの容姿を隠そうともせず、軍の門の前に居た。

人通りは皆無に等しい。

そもそも、人目のあるところでは、レインは自らの顔や姿を明かさない。

用心しているとも、臆病だともとれる行動。

軍警察の敷地はザイフォンの半分近くを占め、割り振られた区画は彼らの独占状態にある。そして、それぞれの区でも常設支部があるのだから、都市全体に根が張り巡らされているといっても過言ではない。

警察……いわゆる警部との統合後、一般人との慣れ合いも多くなった軍警察だが、敷地内は市民にとって未知なる領域であることには変わりない。

レインは、もうすぐ初夏の香りを匂わせるであろう空に視線を移した。

——『彼女に遭ったこと、彼女の最後が知りたい』

そう、軍警察の内部者に切り出したのが先日。

きっかけは、彼女のことを覚えていてくれた一人の青年だった。

彼と出会い、せめて覚えておくのなら納得のいく形でいようと思った。

だから、きちんと自分に説明がつくように、ここに立つ、ここに居

る。

「――レイン」

黒い少女のすぐ後ろから、声が聴こえた。長髪を纏って振り返ると、柵を挟んで向かいには見慣れた青年が立っていた。

鮮やかな赤髪に、薄汚れた常装軍服を来た長身の青年――クロード・レヴァ・キアヴェンス。

彼は目の前の柵に指を掛け、レインを覗き込んだ。

「おはよう。早いねえ」

「…時間通りだ」

「確かに。ちょっと待ってて」

青年は言い残して、門へと歩んでいく。その数秒後には、門が喧しく開いた。

クロードが門を乱暴に蹴り上げ、勢い任せに片方の扉が開いたのだ。

「ここ裏門だから、気にしないで、入ってよ」

レインは首肯して、開けられた門を潜り抜けた。

足元には鎖の千切れた南京錠。

レインは呆れ顔でクロードに向き直った。

「相変わらず、大雑把だな」

「気にしないでよ。どうせ、ここの防犯なんてザラなんだからさ」

「……………」

何か言いたげな少女は、けれど口を閉じてクロードに着いて歩んで行く。

「でさ、レインさん。フレイアについてのことが知りたいんだって？」

「……………」

――いきなり直球を突いてくる。

「別に構わないけどさ……半月も経った今頃、急に知りたいなんて言い出してもね…」

揶揄を含んだ口調に、レインは呟いた。

「悪いな。自分は気まぐれなんだよ」

「なら、しょうがないか」

何が楽しいのか、青年は赤髪を揺らして笑った。

レインは顔を背けて歩む。

滑走路じみた通路は無駄に広く長い。寮だろうか、似たような建物が延々と立ち並んでいた。

人の気配は感じれるが、どうしてもだろうか人の姿は見えない。

二人は沈黙の道を歩む。

けれど、変化は唐突に。建物の影から人が現れた。

「よう、クロード。人の約束すっぽかしといて、こんな所で何の用だ？」

「…リベスト…」

思わぬ乱入者に、クロードは珍しくたじろいだ。困ったような笑みを浮かべ、肩を竦める。

現れた人物は、長身に無駄のない大柄な体格の男だった。浅黒い肌に明るい色合いの短髪はよく映え、眼光は鋭く据わっている。

男は赤髪の青年を一瞥した後に、黒髪の少女へと視線を移した。

口元を窄めて、煽るような口笛を吹く。

「これは驚いた。お前、こういうのには疎いと思ってたんだがなあ」

「…リベスト、要件は？」

「後回しだよ。そんなのは。……へえ、確かに、これは上玉だな…いや、そんなもんじゃねえや」

レインの顔を覗き込み、リベストと呼ばれた男は犬歯を見せて笑った。

その笑い方に、心底ぞっとする。レインは反射的に隣の青年を窺った。

「…クロード、彼は？」

「同僚だよ。腐れ縁のね」

苦笑して答えると、男は揶揄する目つきを彼に向けた。

「規律には従順なお前が、どうして女なんか連れ込んだ？ ……これ

からここでしけこむワケでもねえだろーが」

「それも、リベストには関係ないと思うんだけど？」

「ほう、何だ、一筋縄ではいかなそうだな」

リベストは言うとおもむろにレインの顔へと五指を伸ばした。

反射的に彼女は顔を伏せて、その手を寸分の狂いなく払い除ける。

小気味の良い音が鳴った。

「……………」

レインは明らかに敵意を含んだ視線を目の前の男に向ける。

視線を受け、リベストは笑みを濃くした。

「…へえ。いい女だな、あんた。言い値で買ってやってもいいぜ？」

少女は黒い炯眼を真っ直ぐに向ける。

「抜かせよ。身を売るほど落ちぶれちゃいない」

「そうか、商売じゃなきゃあいなのか。…何なら今すぐにも規制事実作ってやろうか？」

一瞬にして、剣呑な空気が纏わりついた。しかし、一声にて悪循環は遮られる。

「そこの辺にしといてよ、リベスト」

クロードの制止の声を受けて、リベストはじろりと彼を睨んだ。

「無粋だなクロード。こんな上等な女、滅多にいないってのに……」

リベストの言い分を無視して、クロードは向き直る。

「レインさんも、あんまりこいつの言うこと本気にしないでね。ほら、こいつ…アレだから」

「アレってなんだよ、手前から潰すぞ」

「……行こう、クロード」

レインはそつなく呟いて、リベストの脇を通り抜けようとした。

——途端、腕を後ろ手に掴まれる。

「——っ！」

レインは開いた片手を腰元に、スタンドナイフを引き出し一迅にて展開して、男の首元に突きつけた。

僅か一秒にも満たない間の出来事。

首元にナイフを当てられながらも少女の腕を離さないリベストは、もう一度口笛を吹く。

「…益々そるな。一体何者だ、あんた？」

「お前に答える義理はない…手を放せ」

「嫌だね」

「……」

レインは無言でナイフを浅く当てた。

あと皮一枚の隙で、男の皮膚は血を噴くだろう。

けれど男は物怖じせずに一步、踏み込んできた。

自ら進んで凶刃に当たり、首筋から一滴が垂れる。

リベストはレインの耳元で囁いた。

「殺したくなったら来いよ。あんたならいつでも歓迎する…俺を腹上死させるくらいの気丈見せてくれよ、処女^{ヴァージン}」

「……っ」

腕が解かれると同時に、耳朶に掛かる息から解放された。

リベストはすぐに踵を返す。

「じゃあなクロード。ミレイナが癩癪起こさない内に帰って来いよ」

「はいはい…ったく、どうしようもないな……だから会わせたくなかったのに…」

クロードは溜め息と合わせ、小言をぶつぶつと言いながらに向き直る。

男の影は建物の背後に回り、すぐに見えなくなった。

すっかり後姿が見えなくなるまで、レインはじつと男が消える方向を見ていた。

赤髪の青年は首を傾げ、問う。

「レインさん？」

黒髪の少女は視線をそのままに、尋ねた。

「…クロード、軍にはあんな輩ばかりなのか？」

「いや、あいつは例外だね。むしろあそこまで浮いてるのも少ない」

「……………」

レインは無言でナイフを仕舞い込んだ。

クロードに向き直り、余裕を持った笑みで告げる。

「お前も充分浮いてると思うけどな」

「恐れ入るなあ…行こうか」

「ああ」

レインは頷いて、クロードの後に着いて行った。

83 遺

「…遺品の類はほとんど処分しちゃったんだよね……」

薄暗い書庫の、天井まで届く本棚からファイルを抜き出し、クロードは言う。

本棚に凭れ掛かってファイルを捲る青年の横には、レインの姿があった。

「レインさん、これ、現場の写真。…いいの？ あんまり気分良いもんじゃないけど？」

「構わないから。全部見せて」

青年からファイルを受け取った少女は、開くページに顔を顰める。

紙面一面が、真っ赤だ。

無論それは比喻に過ぎず、そう感じたのは単純に、真っ赤な背景の写真ばかりが貼られている所為だった。

クロードは辛酸を舐めているような顔をしながらも、ページを捲る少女を見た。

——見なきゃいいのに。

そう思う。

見たくないもの、見てはいけないものなど、有り過ぎて腐ってる。

猥雑で腐乱したものをわざわざ網膜に焼き付ける行為に、何の意味も感じなかった。

そもそもクロードにとっては、戦場で何度も目にしている。

例えば、一斉掃射で血を吹いて穴だらけになり散開する仲間。

あるいは、拷問に掛けられて手指を削られ廃人になって戻ってきた上官。

もしくは、戦場で見た自らの腸の色。

…これ以上焼き付けたところで、どうにもならないからだったのだ。

——義理がたいのかな……

漆黒の少女はじつと写真を見つめ、ありのままを確認していく。

クロードは、レインとフレイアの関係については全く知らない。知っているのは、二人が少しだけ似た形質を持っており、似た経験をしてきたということ。そもそも、目の前の少女についても、何も知らないのだ。

まだ17、8歳にしか見えない少女。人間離れした美貌を持て余し、傭兵と言う奇異な職に就いていた彼女と出会い、まだ半年ほどしか経っていない。

その間にも様々なことがあったが、偶然か必然か、ほとんどの事象に彼女は関わっていた。しかし、だからどうということもない。

もう一つ。彼女を語る上で外せない人物が二人居る。

ハートレス：リート・セディシアと、フレイア：もとい、美都・キサラギ・シュタットフェルトだ。

リート・セディシアは旧軍が生んだ過去の化け物であり、フレイアは力に蹂躪された被害者だ。

あまりにも特異な存在であり、彼らを語る上では言葉足らずだ。

しかし、レインは彼の二人と接触があつた。

あの日、レインとリートが共に居るところを、クロード自身も目にしている。

しかし、その二名は消えた。

軍警察にとつての重要参考人であつた二人が消え、次に尋問を受けるのはレインのはずだった。

しかし、クロードは敢えて彼女の名を伏せた。

どうしてだとか、なんでという問いかけは無意味だろう。ただ、そうしたら気分が悪いだろうから、少しでも気兼ねのない方にしただけだ。

——要するに：全部自分の為なんだけど。

自分の為に動いている内は、指針は外れない。

自分が自分足らしめている何かの軌道からタガがずれない内は、ま

だ安定している証拠だ。

他人と世の価値観なんて、不安定ですぐに移ろうのだから。

不変は尊い。

変化は矮小だ。

ふっと、クロードの目の前の黒影が揺らいだ。

「……もういい」

レインは一息吐き、そっとファイルを閉じる。

「ごめんね。遺品らしい遺品はなくなって……」

「いいや、いいよ。……詮無いことだ。……それより」

レインはクロードの翠の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「フレイア：美都の墓参りがしたいんだ」

――へえ。

得心がいったような、意外なような、失望したような、妙に煽られるような矛盾した感想が浮かぶ。

心中を隙間も見せない笑顔で、彼は告げた。

「いいと思うよ。場所を教えようか」

「ああ。頼む」

白い顔でレインは頷いて、クロードは住所を近くのメモに書き連ねて渡す。

「ありがとう……」

「どういたしまして」

また微笑んで、紙片を離れた。

レインはメモを上着のポケットに突っ込むと、首元のシャツを手繰った。

織手に引っ掛けられるようにして現れたのは、紐で通された鍵だった。おそらく、首から吊り下げていたのだろう。

クロードは勿論、その鍵に見覚えがある。

張りつめた柳眉に炯眼を添わせ、レインはクロードを窺った。

「……知ってるだろ。フレイアがあの日、自分に渡したものだ」

「うん。知ってるよ」

素直に首肯する。

鍵を出したということは、示唆する内容は鍵が収まり開く場所……すなわち――

「……あの場所は、『何だ?』」

「何って?」

軽薄に笑って、クロードはレインへと一歩、歩み寄った。

「どういう目的で作られたのか、何に使われていたのか……なんで地下の中枢機関部にあったのか……誰のものなのか」

――やっと、訊いたか。

唇を三日月に歪め、彼はありのままに答える。

「あの部屋は……随分と昔からあったらしいね。……なんせ、旧軍が造り出したみたいだから」

「何だって?」

レインは明らかに動揺していた。

「旧国軍。過去の軍と、軍警察の前身となる組織だよ」

「そんなことは知ってる……そうじゃなくて……」

「虐殺と抑圧の限りを尽くした旧軍。忌々しい過去の産物が、どうして『彼女』と繋がるのかって?」

揶揄する口調を発し、青年は少女へと手を伸ばした。

彼女が掌に持つ鍵を指し示すように。

「……それ、フレイアがレインに託したのには、意味があると思うよ」

「………」

レインは五指で、しっかりと鍵を握り込んだ。何か、大切なものを確かめるように。

桜に似た口唇が開かれる。

「何も、誰も……肝心なことは教えてくれないんだな……」

「それは君自身が見つけるものだろう。レイン」

「………」

沈黙は何も語らない。

告げた赤髪の青年に背を向け、少女は歩み出した。

84 装

鐘の音が聞こえる。

クロードから手渡されたメモの住所を頼りに、レインはそこに辿り着いた。

丘陵に建つ墓地の群れへと。

一本の道を挟み、墓石が並ぶ。

真新しい花が飾られたもの、朽ちた花や造花が飾られている墓もあった。

新旧入り乱れる、亡者の標。

レインは透き通る青空よりも、白い墓石の群れに気を取られながら進む。

彼女の墓がどれなのか：メモにはざっと数字が書かれている。

それはおそらく、墓を識別する上での住所のようなものだろう。

方向と、列番号が振られた地面のプレートを頼りに、その墓の前まで辿り着く。

レインの黒瞳にまず飛び込んできたのは、墓石よりも白い、純白の百合の花束だった。

誰が供えたのだろう。

彼女の身内だろうか：しかしフレイアは自ら、身内は失踪したと言っていないかったか。

レインはそっと墓元に膝を着いた。

出来たばかりだからだろうか。：綺麗なものだ。

彼女の死に様とは正反対の、染み一つないくらいの純粹さ。つい数時間前に見た写真の内容がフラッシュバックする。

鮮烈な赤。

五感で感じ取れそうなくらいの生々しさ、ある種の臨場感。視覚を突き破り、脳髓にまで焼きつきそうなもの。

磔にされた女。

血濡れの女。

液体——臭気——淫靡——拒絶——燃える——朱色

姉さん。

顔

の

ない

『彼女』

途端、胃の中がひっぺ返されるような不快感に襲われた。

「……は、……」

理性で嘔吐衝動を捻じ伏せて、改めて顔を上げる。

明るい日差しに映える白い墓石。

表面に刻まれた文字。

——『Mito Kisaragi Shutatohell
1972～1994』

数字に換算することの呆気なさ。

彼女の生きてきた年数の意味を問い掛けたくなる。

自分も、例えば今日死ねば、こうして銘記されるのだろうか。

「……22年、……17年、か……」

いろんなことがあったのに。

それを忘れて封じ込めてなかったことにする。

生者は死者のことなど、早く忘れなくてはいけない。

死者は足枷だ。

ずるずると重たく足を引っ張って、引っ搔けて、転ばせて、地の底に引きずっていく。

だから見ないふりを、聴こえないふりをする。完全に無視すればいい。

もっといいのは、『なかったこと』にしてやることなのだが。

「……………」

死者や亡霊が怖いのではない。

生きてる人間が怖いのではない。生きていることが辛くて、怖いことなのだ。

過去への罪悪、現在への不甲斐なさ、未来への不可視の不安。

全てが複合された無限地獄。

生きていることは、恐ろしい。死ぬことよりずっと怖い。

死んだら生きていたことのおぞましさを知るはめになる。だから今が最良だと叫んで感覚を麻痺させて走り狂いながら生きる。

それが生きることだ。

だから、気が付いてしまったら帰れない。

知らなかった頃には、帰れない。

苦しみしか産まない、人生の自転車操業を知ってしまったあの時。自ら死のうとした、死ぬつもりだった、死にたかった、死ななければならなかった——あの時。

首を掻き切ろうとして上手くいかなくて、首を吊ろうとしても紐がなくて、舌を噛み切ろうとして失敗して、刃物を探してもどこにもなくて、銃があっても弾がない。頭を叩き割る程度の高度もなくって、火も爆薬も毒薬もない、水に顔を突っ込んでも苦しみは絶対に顔を上げさせるし、半ばまで頸椎を絞めた指は痺れる、釘や石ころはあっても打ち付ける道具がない。頭を壁に打ち付けても少量の血しか出ない。

そこで、やっと気が付いた。

——死ねないのではなく、死のうとしない私は弱虫だと。

いつも、ぎりぎりのところで生への執着が首を擡げる。

結局、自分は生きていたかった。

少なくとも、アレイン・ヴィアルドレッドは生きていたかった。

気が付くまで、馬鹿なことを繰り返した。

自分は死にたいのだと言い聞かせてきた。

自分を痛めつけただけだ。

『彼女』は相変わらず『私』と『自分』を許さないし、認めないし。『私』は相変わらず『彼女』に申し訳ない気持ちでいっぱい、見えない何かに怯えているし

『自分』は『彼女』と『私』に挟まれて切磋琢磨してるし。

でも、そんな三人の自らのことを分かってくれたのがフレイアで。少なくとも、『彼女』と『私』と『自分』は驚いて、同時に安心したんだ。

自分たちを分かってくれる人が、まだ居たことに。

それは、ある隻眼の青年にありのままで良いと言われた時の心地良さに似ていた。

胸がすくような安心感を与えてくれた彼女たちは、レインにとってのかけがえのない存在。

…なのに。

「…早過ぎだ……」

そうして、こんなにすぐ逝ってしまったのか。

リートについてもそうだ。必死な自分を嘲笑うように、やっと掴んだものは指の間をすり抜けていく。

「どうして……」

もっと、長く付き合いたかった。

知りたいことがあった。

単純に、もっといろんなことを話していたかった。

でも、もう叶いはしない。

「……、ずるいよ……」

虚空に投げかけた台詞は、透き通って消えていく。

気持ちの残滓。

レインは足元の白百合の花束に目をやった。

燦然と輝く真昼の花。時に、夜を照らす楚々とした華。

優しい輪郭はくっきりと浮かび上がって、存在を主張する。

誰が置いていったのだろう。

彼女を大切に思っていた人だろうか。そうだと、良いと思う。

——今度は、自分も花束を持って来よう。

色は白か、薄いものがいい。きっと自己主張の激しくない、優しい花が最も相応しいだろう。

瞳を閉じて、静かに瞑目する。

——どうか…

「— a d e e p, u n t r o u b l e d s l e e p」
「…！」

唐突に聞こえた声に、レインはすぐに目を開く。

振り返ると、そこには黒服の影があった。

黒服は壮年の男だ。襟首の詰まった黒いコート、に首には十字架の首飾り。クセのある短い金髪に、眼鏡を掛けた柔和な顔つき。両眼は慈悲のある色を讃えている。

見るからに、敬遠な神父といった風情。

近場には教会もある、その人間だろうか。何も不思議なことはない。

——この距離に近づくまで、レインが男の気配に気が付かなかったことを除けば。

男はレインの真正面から、微笑をして目礼した。

「…こんにちは。フロイライン」

「……あなたは…」

レインは身構えて、神父を見つめる。

「あの教会の者ですよ。…御嬢さんは、この下の彼女の知り合いの方ですか？」

「……ええ」

墓参りに来ただけで咎められる理由もないだろう。

少女は訝しみながらも、頷く。

男は鷹揚に墓の前に跪いた。

「…美都の知り合いですか。それは良かった」
レインは目を剥く。

「フ…、美都さんを、ご存じなんですか？」

フレイアと言い掛けて、慌てて訂正する。

神父は低身のままに百合の花束へと視線を向けた。

「ええ。…美都が孤児院に居た頃から知っています…彼女は私の教え子でしたから」

フレイア自身が言っていたこと。両親の疾走。その後の生活について。

合点がいったが、腑に落ちない部分もある。

レインは問い返した。

「…教え子…？」

「はい。彼女の孤児院は、昔、私が経営していましたからね…今はもう、無くなってしまいました」

男の見た目は高く見積もっても40代だ。更に若い時に孤児院の経営をしていたのか。

レインは違和感を覚えるも、男の言葉を半ば信じていた。

「…美都の、育ての親…？」

「そんなに大したものではないですよ。敢えて言うなら、私は彼女たちの教育係だっただけです。あの頃、普通学校に行かせる金銭の余裕は無かった」

孤児院の経営は、国からの援助金があろうとも困難を極める。

だからこそ、孤児院から独り立ちしようにも、先立つものが何もない者たちが量産されていき、行くあてをなくすということが過去には珍しくなかったらしい。

今は扶助制度が改善されて、前例のような孤児たちはだいぶ減ったようだが。

「…あの子は、18歳になる前に孤児院を出て行ってしまったんです。そして、四年ぶりに帰ってきたと思ったら、彼女はもう…火葬された状態でした」

「……………」

この国ではまだ土葬が続けている地域も多い。

ザイフォンでも、火葬は一般的ではない。しかし例外もある。

フレイアの死に様を知っているレインには、想像に難くなかった。言い知れない吐き溜まりの思いが心中を回る。

「…それでも、昔の教え子の墓地を訪ねてくれる人がいるだけでも、嬉しいものですね…」

空を見上げて眩き、神父は立ち上がった。

レインは何か言おうとして…しかし言葉が見つからずに口元を結ぶ。男は軽く微笑んだ。

「御嬢さん、あなたとよく似た人を知っていますよ。…どうか、悔いないようにしなさい」

長い黒衣を翻し、男は去っていく。

レインは通り過ぎる男の背に声を掛けれずに、しかしその姿に一つの幻影を感じた。

それは、黒く鎌を擡げる死神だった。

85 喫

男は風に向かい、白煙を吐き出した。

彼の片方の中身のない袖は、ふらふらと風にはためいていた。
平和な午後。

「あ—————」

間延びして豪快に吐き出された煙は、風が運んでいく。

もう一度、短くなった白い棒を咥えようとして…止める。

代わりに、指先から故意に落とされた一本の煙草は、屋上から下界へと落ちていった。

上着を漁り、箱を取り出して新しい葉巻に火を着ける。

乾いた口元に挟んで、咽かねない勢いで吸い込む。先端の火が橙に煌めく。

「…おいコラ、てめェいつまでそうしてるつもりだ？ あ？」

男はおもむろに煙草を手にとって離し、煙混じりに粗暴な言葉を発した。

同時に振り向く。

空と床以外に余計なものがない空間に、彼は立っていた。

赤髪の青年。彼はわざとらしく笑って言う。

「いやあ。見事な吸いっぷりだったから…それって美味しいんですか？」

「ガキにはまだ早エよ」

紫煙交じりに男は言った。

赤髪の青年——クロードは困った風な表情を浮かべる。

「…23歳がガキですか…はあ…」

男は屋上の柵に凭れ掛かり、鼻で笑った。

「ガキに決まってるんだろーが。人間の寿命は長くなる一方なんだよ、知ってんのか？」

「知ってますよ。少子高齢はヨーロッパじゃ昔っからじゃないですか」

「…チューブ繋いだ老いぼれが増えたただけだろーが」

「うわぁ、この人ずばっと言う……」

クロードは肩を竦めて、男の横に並んだ。

空軍基地を望む、管理棟の屋上。

青空は初夏の匂いを嗅ぐわせ、我が物顔で基地を街を見下ろす。

真平らな滑走路には、気怠げに歩く軍人と整備士の姿はあれど、肝心の飛行機や戦闘機がない。

この基地は、事実上廃止されていた。

「この場所、好きですね。ディセンダーさん」

「…好きなんじゃねエよ。軍警は喫煙にうるさいからな。監視されない場所がここだったのさ」

「隠れるには丁度いいすもんね、ここ」

相槌を打ったクロードに、煙草を啜える男——ディセンダーは苦い顔をした。

「そういうてめーは何で、オレの居場所を毎度々々、突き止めてきやがる？」

「うーん、勘ですかね？」

「人探しの申し子だなお前は」

白けた視線で語るディセンダーに、クロードは張り付いた笑みを返す。

男は道化じみた、偽物の笑顔を前に、呆れたように白筒から灰を落とした。

「そういえば、ディセンダーさん。会ってきましたよ」

「あ？」

「あなたの養女：アレイン・ヴィアルドレッドに」

「…へエ、そうかい」

たいした感慨もなく、ディセンダーは呟いた。

クロードも空を見つめ、告げる。

「あなたは会わないんですか？ 本人は会いたがってると思いますけど？」

「どーしてあいつが会いたがってるからって、オレが会わなきゃならない理由になるんだよ」

「素直じゃないんですね」

「うるせエな」

男の口調には怒気が含まれたが、顔つきは特に変わらず気怠げなままだった。

クロードは柵に組んだ手を置いて、その上に顎を載せた。さながら、退屈な猫のよう。

男は紫煙交じりに告げる。

「レインは強かなフリをしてる、ただの脆いガキだ。あいつを内包してやれる奴が現れねエと、いつか弾けちまう」

「…内包してあげれる人、ですか……」

クロードは瞳を伏せ、数秒、

「おれじゃ駄目ですかね」

「やめとけ、お前は確かに強いが、その強さは全く別物だろう？」
ディセNDERはここに来て、初めてクロードの眼を直視した。

「お前の強さは、なりふり構わず壊すためにあるじゃねエか」

「……ふふ、そうですね」

苦笑いを溢し、クロードは赤髪を風にさらした。

僅かに郷愁の滲む面。定まらない焦点の瞳で曖昧なものを慈しむ目。静かな水面の如き哀しみ。

「…ディセNDERさん」

「………」

返事は沈黙。

「何でフレイアに、大切なものを託したんですか？」

「…適任だったからだ」

「どうして、そう考えたんです？」

「………」

青年の問い掛けに対する答えはない。

ディセNDERは短くなった煙草をまた眼下に落とし、片腕で上着のポケットから箱を取り出した。

銘柄には『Bein Neun』とあった。

箱を振って、底辺から葉巻を取り出そうとした時、ふっと視界に障害が入る。

見ると、煙草の箱に大きな手が被さっていた。

ディセNDERはじろりと隣の青年を見る。

「禁煙しろってか？　もう遅ェよ」

「違いますよ。：おれにも一本くれませんか？」

クロードは煙草の箱を覆う、自らの手をどけようともせずに、音もなく笑う。

ディセNDERは舌打ちした。

「：ガキが、煙草税ばかり上がって、今じゃ高級嗜好品なんだぞ、コレ」

「何言ってるんですか。ソレ、死んだ傭兵^{なかま}の遺物、勝手に漁って出てきたんでしょう？」

「：ほんつとにムカつくな。お前は：」

言いながらに被さるクロードの手を除け、箱を振って無造作に煙草を取り出した。

指又に挟んだ紙棒を、青年に押しやる。

「：……いいんですか？」

「自分で言い出しといて、何だお前。いいから受け取れ、言つとくが、一回吸ったら最後まで切れよ」

「分かりましたよ」

青年は穏やかに頷いて、煙草とライターを受け取った。

口元に挟んだそれに着火。

——香りを取り込む。

途端、破顔した。

「：…っがあ……よく、こんなの美味しそうに吸えますね…」

「ガキには早いって言ったろーが。馬鹿」

咽返りそうになるのを抑えて、クロードは煙を吐き出した。肺の中に残留して居座る、有害物質の存在を如実に感じ

「これは体に悪いわ……」

何故か笑みを抑えきれずに告げる。

ディセンダーは青年を横目に見ていた。

「はン、人間の長過ぎる寿命、削るくらいの働きはするんだ。…丁度いいじゃねえか」

「好き好んでこんなの味わうなんて…正気の沙汰じゃないですって…うわ、まず……」

文句を垂れながらに、クロードは煙を吸い込んだ。

脳髓まで染み込みそうな紫煙の匂い。五感が麻痺していく感覚。

少しだけ、ドラッグじみた煙草を吸う人間の気持ちがあった気がする。

つまり、乖離する感覚。

不思議な浮遊感。

これが欲しくて、人は馬鹿みたいに金を注ぎ込むのだろう。

「……ほんっと、まっずいなあ…!」

空に向けて言い放ち、クロードはまた火元を灯した。

糾える今を

天井にはとぐろを巻いた蛇じみて、入り組んだ配管。横合いの壁には血痕と汚物のこびり付いた汚れ。

足元には塵と積もる虫の死骸と、たかる蠅は骸に卵を産み付けていく。

掃き溜めという言葉がぴつたりと似合う場所。

薄汚れた機関部を歩みながらに、男は眼下を見やった。

鉄製の柵の向こうは数十メートルの高低差。落ちたら底まで失墜する。

耳から伝わるボイラーの音。

鼻が嗅ぐ腐乱臭と硫黄の香り。

舌が味わう煙たい質感。

肌で感じる中枢部の熱気。

眼で見える混沌とした複合物の猥雑な群れ。

全てを同時に感じながらに、男は階段を下りて行った。

ジグザグに連なる階段は、金属質の音で踏み鳴らされ喧しい。

底へと着いた頃には、五感に感じるものはより強烈になっていた。

息を吸い込む度に、身体の芯から汚染されていくような――

男――黒髪に隻眼の男は底に降り立った。

底には崩落した空間がある。

元は広かったであろう空間は、昏く沈み、瓦礫の山に埋まっていた。数年前まで、彼が居た場所。

数年前まで、平然と人殺しが行われていた場所。

数年前まで、彼が平然と人殺しをしていた場所。

――自分の、たった一人の妹が死んだ場所。

彼はその瓦礫の前に立って、崩れたコンクリートと、絡まって落ち

た配管の群れを見た。

死に物狂いで抜け出した場所。

今、その目の前に立っている。

彼は上着からおもむろに手銃を取り出した。

円盤型の弾倉が組み込まれた、旧式のショットガン。

配管の群れに向け、爪を引っ掻けたりボルバーが回る。

引き金にゆっくりと指を置き

引く

——不発。

回し、引く

——不発。

回し、引く

——不発。

回し、引く

——不発。

空振りする指の感覚を噛みしめ、過去への哀愁と妄執を振り切る。

回し、引く

——不発。

回し、引く

——不発。

回し、引く

撃つ

放つ

穿つ

配管が弾ける

――爆音

遂に銃弾は発した。

――轟音

薄っぺらい鉄を突き破り

――爆破

中に溜まったオイルに火花が引火する

――熱風

暴発、拡散、奔流、怒濤。

全てを焼き尽くす。

吹き飛ばす。

灰塵に処す。

「……………」

リートは無表情にその様子を見ていた。

無機質であるコンクリートまで、真っ赤に燃えている。

噴きつける熱風が頬を焦がした。

緋に染まる横顔。

廃墟が燃えていく様を網膜に焼き付ける。

ここで死んだ同胞のことを思う。

ここで殺した仲間のことを思う。

自分を殺した大人のことを思う。

全ては灰になっていく。

在った証を消していく。

消えろ――消えろ――消えろ。

忌々しいもの全て、消えてしまえばいい。

そして、焼け野原となった場所には何も根付かない。
荒野の如き、自分の心。

そしてここも、もうじき消えてなくなる。

微塵も残さずに。

それはとても嬉しいこと……のはずなのに。

頬を涙が伝った。

声もなく、ただ流れる。

落ちた雫は、すぐに地面という名の熱した鉄板で蒸発する。

「—————」

慟哭と轟音は同時に。

柱が崩れていく。

彼のすぐ横に柱は落ちた。

落ちても、なおも燃え続ける。

彼は押し返されるように歩き出した。

叫びながら、鬼哭を謳いながら。

喉が熱い空気を吸い込み、焼かれる。

それでも、なおも叫んで、炎龍の如き奔流に押される。

泣き笑いに似た声。

彼は走り始めた。

今度こそ、振り返らずに。

生まれて初めての背を押す、風を感じながらに。

赤い景色。

白い過去。

彩られた鮮烈な意識の中で、彼は確かにその片鱗を見た。

漆黒の、少女。

昏く美しいその色を頼りにして、彼は暗闇へと走って行った。

86 始業

少女は明るい部屋に居た。

真っ白い、滅菌した後みたいに清潔で生気のない部屋。

白衣の女性は暫く寝台の上に横たえる『彼』の様子を窺っていたが、変化がないことを確認すると、部屋の隅で体を狭める少女に会釈して、部屋から出て行った。

残されるのは、小さな少女と、寝台の上の少年。

少女はそっと寝台に近づいた。

「もうすぐ…」

白いベッドに横になる彼に、そっと囁く。

あれからもう、一か月以上経った。

彼は眼を覚まさないままに、時間は緩慢に進む。

少女にとっては、永劫にも等しい間延びした時間。更に続くともなれば、もはや地獄だ。

「もうすぐ、だから……」

——もう少しだけ、待っていて欲しい。

少年の顔をした彼の面には、ただ白い光が降り注いでいた。

空は晴れ渡っていて、高い。

午後からは雨が降るという予報に反して、今の天気は初夏の晴天そのもの。青空が望むのは眼下の街。

街の一角に設えられた門の警兵は、その男に声を掛けた。

一見、何処にでも居そうな、街ですれ違ってもすぐに印象が消えてしまうような無個性な男だった。齢は中年ほどか。

警兵は男の前に立って、制する。

「――待て。ここから先は軍警察関係者以外立ち入り禁止だ」

「…そうなんですか？」

軍拠点都市の人間ならば誰もが知っているはずのことを、さも存じないかのようには男は言った。

警兵は訝しみながらも、確固とした意志を以て告げる。

「ただちに立ち去りなさい」

「…あ、でも……」

男は中空へと目をやってから、考え事でもするように顎に手を当てた。

薄い唇を不気味に吊り上げる。

「関係はありますね」

「…関係者にはパスコードか、身分証明書が発行されます。…お持ちなのですか？」

言いながらに警兵は、何故か男の笑みにほの暗い寒気を感じた。

男は手を懷に差し込む。

警兵は警戒しながらもその行動を見送った。

――そして

「…関係はありますよ。だって、ぼくらは軍警察を憎んでいますから」

男が取り出したのは、小型の時限爆弾だった。

「――！」

一瞬にして、それが本物だと気が付いた警兵は横合いに飛ぶしかし

――カチッ

時計の秒針に似た音が響き、視界が真っ白に染まった。

87 劫火

『駐在警兵に告ぐ、直ちにS-12ブロックを閉鎖せよ。職員、整備員、通信使はすぐに管理棟地下へ避難するように。繰り返す――』
足音は絶え間なく響き渡る。

軍靴と、軍の支給品であるコンバットブーツがコンクリートを叩いていた。

数多の、怒濤の如き人波。

けれど彼らは狭い通路でつかえることもなく、ただ毅然として進む。

やがて狭い長方形の通路は途切れ、代わりに視界が開けた。

硝煙の匂い。

消火する間もなく聞こえる爆音。

煙はそこかしこで上がっている。

出てきた隊列は、塹壕代わりのバリケードに真っ直ぐに並び、短機関銃を構えた。

「撃て――！！！」

代表格の男の号令と共に、銃弾の雨。

煙に浮き上がる人影は撃たれ、倒れていった。身体の各所から血飛沫を上げて微動する様子は、まるで水風船が破ける一瞬のよう。

そして、人が一人撃たれる度に爆音上がり、爆ぜる。

「…全員、自害用の爆弾を持たせてるのか…！？」

隊の長である男は呟き、やがて火だるまになってまでこちらに前進する敵を見た。

あまりにも酔狂な執拗さ。怪物じみている。

「狂ってやがる…！」

暴走したテロリズム。自己犠牲の精神。

火だるまになった男は、やがて隊員の男たちの銃弾を浴びて落ちた。

身体に巻きつけた火薬に引火し、体は、耳を劈く轟音と共に木端微塵となる。

爆散する人間の欠片は、すぐに蒸発して燃えていった。

隊員はすぐに銃弾を充填して、膝撃ちの体勢に構える。作業じみた虐殺行動。

爆炎の向こうからは、また新たな者たちが現れた。

「ひるむな…撃て！」

鉄の雨は止まない。

そして、一方的な玉碎は続く。

アウストラルが今起きていることを知ったのは、ものの数時間前だった。

「…門が、爆破されただど？」

通信管理者から連絡を受けた彼は、中間管理室から、すぐに軍警察の基地全体の中枢管理塔へ向かった。

軍の基地で何らかの事故や問題が起こった場合には、まず管理部が嗅ぎつける。対処の仕方も管理塔の人間が行うのだ。

幾つかのセキュリティロックを越え、彼は基地の奥部にある管理塔に辿り着く。

その場には、スーツ姿のミレイナの姿もあった。

彼女は普段から管理部の監理員という、ある種遠巻きにされる位置にあった。

彼女の情報操作能力がずば抜けていることは、アウストラル自身がよく知っている。

管理室に入るなり、彼は彼女に詰問した。

「何が起きている？」

「それを今、確認しているところですよ。…アウストラル中将」

彼女の吊り上った目が、厳しい色を帯びている。名の後に役職名を

付けたことも、その色を濃くしていた。

監視カメラの画像は現在撮ったものがそのままに送られてきている。大小が混雑した画面には、今の惨状が映し出されていた。

確かに、軍部に開いている門、四方の全てと裏門の幾つかまでもが焼き払われていた。

画面の前ではオペレーターがせわしなく駆け回る。いつもの機敏な動きではない、明らかに動揺した様子だ。

アウストラルが問う前に、ミレイナが答えた。

「…通信攪乱を受けているんです。お陰で、内線も一部しか開通しません」

「どこからだ？」

彼女は首を左右に振る。

「逆探知が行えません。相手は経由サーバのダミーを数百個用意しています。重複している道のある、可能性に高いものを搾り取りましたが…それがどれも自国、イザベルとの国交のない国です。内戦で纏まらない国がほとんど。相手国の助力が得られなければ根源を辿るのは難しいでしょう」

一寸も表情を変えずにすらすと告げ、ミレイナは主力コンピューターのパネルを見た。

幾重にも出たエラー表示。様々な国の言語で警告文が並べ立てられ、画面を覆い尽くしていた。

警告音がやかましく響く。

「交渉の余地は？」

「まず、ないかと。すでにこちらの動きに勘づいた国際連合が何事かと問い詰めてきています」

「…裏ルートを使ったのか？ あれ程、足を付けるなど…」

「私ではありません」

ミレイナはきっぱりと否定した。

「軍警察のマザーコンピューターは間違いなく国連情報監視官の眼を掻い潜りました。…操作されているんです。誰かが、わざと同じ

ネットボリス

経由で引っ掛かって、なすりつけた……」

「…それが、今回の主犯である可能性は？」

「否めません。まず、そう考えて良いでしょう」

「成る程」

アウストラルは画面を睨みつけた。

黒煙を映す画面、すでに沈黙して砂嵐を流す画面もあった。

「騒動に紛れて、侵入者が数多入り込んでいます。まず共犯者の集団でしょう」

「あちらの武装と人数は？」

男の冷静な問いに、スーツの女は一度唇を結んで、言い放った。

「…武装は、単一の火薬庫並みでしょう。人数は……おそらく千人近くに上るか」と

「千……？ 一介の反逆者がか？」

そうだとすれば、余りに多すぎる。

何かの間違いだと思いたくなるような、途方もない数字だ。

「…いえ、この予想はもしかしたら低いかもありません。…アウストラル中将、彼らは軍部の武装を使っています」

語られる事実は、彼を更に驚愕させた。

しかし、驚きの色よりも厳しさを面に出して彼は問う。

「どういうことだ？」

「…火薬庫が襲撃されたんです。郊外の空軍基地。今は廃棄されていたラインの。彼らはその…主に爆弾を持っている」

「さて、火薬庫一個分だと……」

流石のアウストラルでも、その事実には絶句した。

空軍の火薬庫には、今はほとんど使われていないとはいえ、爆撃機用に予備のパーム爆弾を始め、未加工でさらしのままの火薬が溢れている。

「この基地…いいや、この軍拠点都市全体が、何回壊滅できると思ってるんだ…？」

「おそらく、二桁近くは」

残酷なほどに冷静な声が、脳裏に響く。

ミレイナはパネルの警告を全て拒否通告して、スクリーンセーバーを起動させた。

画面の光が、彼女の横顔を蒼く染める。

彼女の確固とした顔つきを見ながら、問うた。

「：総帥に報告は？」

総帥は必ず、在職中は年中問わず軍警察の基地にいるのが慣例だ。しかし例外中の例外がある。

本来ならば真っ先に駆けつけ指示を発するべき人物は、年に唯一の行事で席を外していた。

国の象徴であった：前皇帝の法要だ。

ある意味、この日を狙っていたとも予想できる。

「報告なら真っ先に行いましたよ。そもそも、その連絡があったから、私が総帥の側近を離れてここにいるんですから」

ミレイナはどこまでも冷静沈着だ。事実をありのままに伝える代弁士。

アウストラルは重苦しく口を開いた。

「総帥は：何と？」

「殲滅せよ——とだけ」

「：そうか」

ある意味、想像通りの言葉。

この国の法律では、軍警察を始めとする公共機関に背いた者には、絶対の報復が許されている。

ましてや、今回のテロなどは……

しかし千人、この数字は……もはや人災・災害の域だ。

沈みかけた意識を、冴えた声音に引き上げられた。

「：犯人がどういった目的で、どういう組織なのかを突き止めるのはこの際後です。：中将、総帥が不在の今、ここを現場指揮するのはあなたです」

「……………」

沈黙するのは数秒だけ。

この数秒さえも惜しい。だから、雷光の如き正確な判断を。
息を吸い、言の葉を告げる。

「――ミレイナ・ミーツ・マシュッツ大佐」

「はい」

「司令塔の全指揮を貴官に委託する」

ミレイナ是一片の隙もなく敬礼し、条文を告げた。

「:Yes, sir」

彼女はすぐに踵を返し、センター内の通信士や技士に告げた。

「――主力コンピューターをOS端子に繋がります。デバイス：絶対に、これだけは他方操作させません」

「任せた」

口調に浮かぶのは確かな信頼と、託した思い。

ミレイナは管理室内を見渡してから、彼に向き直った。

「あなたはどうするんですか？」

「役に立たん将校どもを先導する…どうせ、内線もろくに使えない
んだろう？」

「あんなの、放っておけば……」

不満げに言い掛ける女を、彼は制した。

「そういうわけにもいかない。俺はその足で本隊に合流する」
信じられない、といった風に彼女の眼が開かれる。

初めて見せる、感情の発露だった。

「アウストラル：長であるあなたが戦線に出るというのですか？」

「：悪いがミレイナ、俺は高みの見物だけは御免だ」

何か言いたげな女性は、しかし顔を伏せた。

やがて上げた顔には、吹っ切れたような微かな笑みを滲ませて。

「言うと思っていました。：まあ、あなたなら心配は無用でしょう」

「：礼を言う。お前はここを守れ」

「はい」

確かに頷き、ミレイナは身体の向きを反転させた。

アウストラルも反対の出口へと軍服を翻し去っていく。

扉が閉まる音と同時に、残された彼女は局員に告げた。

「――管理部の指示権を委託されました。敵は多勢です…どうか、力を貸して下さい」

その顔に、もう迷いはなかった。

88 観賞

男は高台からその様子を見ていた。

「まったく：ひっでえ様」

ぼつりと洩らし、口腔から紫煙を吐き出す。

眼下には黒煙が上がり、また何処かで爆音が轟いた。

「埒が明かねーな：北ドルフ遠征の時と同じくらいは酷えわ」

バリケードから一斉掃射をするのは従軍警兵。彼らは前方に立ちふさがる全てを銃弾の雨で薙ぎ払っていた。

向かってくる反逆者を根こそぎ撃ち、爆散させる。

撃たれた者たちは、体に巻きつかれた爆弾によって飛散する。前時代の玉碎覚悟の特別攻撃でも、もう少し考えて行っていただろうに。

「昨今は環境問題にうっせえのに、こっちのほうが二酸化炭素出してんじゃねえのか？」

自らも煙草の煙を吐きながらに、他人事じみて男は言う。

テロリズムはいつから、他者道連れの精神にすり替わったのだろう。彼らは結局、薄っぺらい他人の理念に縋って、空虚な自分の存在意義を見出そうとしているだけだ。

自分を『特別』に昇華してくれるその行動を、輝かしく感じているだけ。そんなものは、妄執に過ぎないというのに。

——憐れだな。

下の者たちに内心で声を掛ける。無論、届くはずもない。

また爆炎が上がる。

今日の正午前から、白昼堂々と始まった軍警察本部基地への襲撃。今の時点では、犯行動機は軍警察への不満、犯行組織は軍警察に何らかの縁がある、他方の組織という見解が妥当だろう。

ただ、そうであれば良いのだが：

——そうじゃなかった時は、地獄が始まるぞ。

冷めた目つきで殺戮の現場を見る。

敵は無手の非武装だ。

そして、警兵は危険だからという理由だけで彼を撃ち殺していく。これを一方的な虐殺と言わずして、何とするのか。どんなに撃ちたくなかろうと、保身の為には撃たねばならない：もはや軍警察にとっても責め苦であろう。

突撃してくる彼らは爆弾を抱えている。

自分の死に場所を決めている人間は、戦場では一番厄介だ。生への未練は判断力を鈍らせ、ときに最も効率的な判断を後回しにしてしまう。

しかし生きる屍と化した兵士たちには、それが無い。

WW2でも多国で行われた特攻を、強大国でさえ一番に恐れていた理由がそれだ。

ただの徒花と侮れる程、彼らの行動は弱くはなかったのだ。

つまり彼らはもはや兵士ではない。生者ですらない。

死に場所を求める、爆雷的な亡霊だ。

だからこそ始末が悪い。

敵の群集はなおも散っていく。爆散する距離はしだいにバリケードを圧迫している。

端から見ている男には如実に感じられた。

――限界が見えている。

しかし、男は下界の生き地獄を平然と見ているだけで、何の行動も起こさない。

――仕事じゃねえや。

彼は傭兵だ。

金や利益が関らない、こんな下剋上紛いの代物に付き合わされる義理はない。

たとえば冷血と罵られようとも、我が身かわいさには敵いはしない：当然だ。

――だが、例外もある。

響く階段の足音。

その例外の元凶が、やっとここまで辿り着いたようだった。

「――ヴィアルドレッド！」

珍しく憔悴した声。

緩慢に、呼ばれた男――ディセンドーは振り返った。

「：待ちくたびれたな。やっとお出ましかい、大将」

抑揚する口調で告げ、口端から落とした煙草を靴底で踏んで証拠隠滅。

ディセンドーが見やる高台の入口には、金髪で長身の男。

新たに高台に現れた男――アウストラルの軍服の裾が風で煽られる。

「傭兵団を招集しろ：仕事だ」

ここまで走って来たのだろうか、僅かに息の速度を上げて彼は告げる。

対するディセンドーは飄々とした態度のままに

「だろうと思ったよ。けど、お前さん、この状況でどうするつもりだ？」

しかし楽観的な態度とは裏腹に、男の眼は笑っていなかった。

軍服の影は静かにありのままを告げる。

「：逆賊は廃せと、総帥の命令だ」

「んで、一方的に煽られただけの一般市民を虐げるのかい、そりゃ

あ大した気概だなあ：後の軍事裁判で私刑になるぜ、お前」

「：分かっている」

心苦しさを微塵ほど滲ませ、呟いた彼は顔を伏せた。

しかし、男の言及は止まない。

「いーや、分かってねえよ。アウストラル：お前は嵌められたのさ、総帥の不在での独断行動、それによって数多の尊い命が犠牲に……」

ディセンドーは、人差し指を真っ直ぐにアウストラルに向け

「全部、お前の所為にできる：素晴らしいじゃないか」

「戯言だ」

男は嘲笑する。

「おいおい：お前だって分かってるんだろう？ お前が軍の主権継承者であることは、いろいろと都合が悪い連中が居るのさ」

「：それがお前の考える、今回の件の全貌か」

「どーだろうなあ？」

歪めた笑みを浮かべ、鋭い炯眼で軍服の男を一瞥した。

アウストラルは、ただその視線を受け止める。

「それにさ、もう遅いかもしれないぜ？ お前の部下はとっくにおっぱじめてるしな」

手振りでディセンドーは眼下を指さした。

そこには、銃弾と血と爆炎の飛び交う戦場。

さっと、アウストラルの顔から血の気が引いた。

「さて、俺はまだ、銃殺許可を出していない……」

「残念だったな、お前の部下が先走ったみだいだぞ？ まあ無理もないか、爆弾抱えて突っ込まれて来られちゃあ堪んねえわ」

「情報攪乱か：！」

忌々しげに吐き捨て、アウストラルは拳を握った。

ディセンドーは無表情にその激動を見ている。両名の間には列記とした温度差があった。

「どうするんだ、大将。敵さんは軍事訓練も受けてねえド素人だぜ、しかも、テロリストと呼べるかどうかさえ微妙な一般人だ」

言葉が告げるとおり、向かってくる爆撃犯に共通点はほとんどなかった。

男女関係なく、年齢にも繋がりはない。どこにでも居そうな中年の男性、妙齢の女、まだ幼い十代の子供、年老いた者まで人種も関係なく、年齢や性別で区切られることなく、ただ爆弾を持って向かって来る。

――悪夢だ。

彼らはただ、軍警察への憎しみを込めて突進してくる。

その理由は分らない。

しかし一つ分かるのは、彼らを煽った扇動者が何処かに潜んでいる

はずなのだということ。

ただ、殺戮は続く。

これ以上、警兵の手を汚し、敵を殺すわけには行かない。

銃撃を停止させなければと思う。

しかし、銃撃を停止させれば爆弾を抱えた彼らは真っ直ぐに駐在基地を破壊する、警兵もろとも殺してしまおう。

警兵だって必死だろう。

彼らは殺さなくては殺される――まさしくその縮図の上に立っている。

ならば、どうすればいい――

一瞬の内に思考は堂々巡りを続け、アウストラルはただ出口の見えない迷路の中で打開策を模索する。

しかし、こうしている内にも人が殺されていく。

平和の為の抑止力の機能を持っている、軍内部の中枢で人々が虐殺されるのは、何という皮肉か。

やがてアウストラルは決断した。

「……デイセNDER・ヴィアルドレッド傭兵団長」

呼ばれた男は、腕の片方の袖を揺らして振り返った。

視線のみで問い掛ける。

軍服の男は一度、頭を下げて告げた。

「――力を貸して欲しい」

89 疾風（上）

レインがその音を聞いたのは、墓地からの帰り道だった。市街地を通りぬけ、人目を気にしながらに自分の帰るべき場所に帰ろうとしていた時。

事象は唐突だった。

地底から響くような重低音。

間違いなく、それは爆発音だった。

反射的に彼女は音の源へと顔を向ける。

そしてその方向は、軍警察の基地がある位置だった。

早朝まで自分が居た場所。

程なくして、爆発の産物である黒々とした煙が上がってきた。

辺りに居た市民たちは、何事かと視界にそれを捉えた後に騒然となる。

レインは騒ぎが大きくなる前に、咄嗟に路地裏に身を滑らせた。

窺い見る街頭では近隣の住民が事の成り行きを見守っている。

——どうということだ：？

あれは何かの演習などではない、少なくとも、あんなにも分かり易く爆炎と轟音があがる演習訓練などを軍拠点都市で行うはずがない。何かの事故かガス爆発でも起きたのか。

——それとも

辺りの喧騒が遠くなっていく。

レインは高鳴る動悸を抑えて、深呼吸した。この感覚はごく久しいもの。

何か、自分の与り知らぬところで、大きな事件が起こっているような、漠然とした不安。

まるで、地下に潜む化け物。全容を現さない未知なる災害。背筋から底冷えする。

嫌な予感の一言では済ませられない何かが、心臓の早鐘を打ち鳴らした。

——おかしい。

落ち着こうと勇める。

——自分は、何に怯えている…？

怯える必要なんてないし、怖がることもない。きっとこれは事件ではなくただの事故だ。これ以上は連鎖しないし、原因も聞けば納得する類の、何かのミスで起こった事故に違いない…

レインの願いに反して、爆音はまた鳴り響いた。

今度は先程よりも近い。

雷鳴に似た轟きの後、空には黒い靄が一つ増えていた。

本当に事故なのか。

事故ならば、この規模はかなり大きいだろう。

そして、もし事故でなければ…

けれど思考を寸断し、レインは頭を振った。

——関係ない。

無理矢理に予感を振り切る。

単に自分の考え過ぎだ。

それにもし軍警察が危機であろうとも、自分には関係のないことだ。駆けつけても意味はない。

そう思うと、少しだけ鼓動が収まった。反比例して、周辺の騒がしさは大きくなる。

周辺一帯の住民が何事かと窓から戸口から、様子を窺っていた。

しかし、だから何だ。

「自分には、関係ない……」

決意を込めて呟き、レインは反対方向へと歩み始めた。

しかし、道行く野次馬の声は耳に届く。

「おい、何だよあの煙……」 「事故かしら」 「怖いな…」 「ま

た、また爆発したわ」 「テロか何か？」 「滅多なことじゃないで！」

「だがあれは……」 「怖い」 「あれはテロだ！」 「報道が」 「テロ

予告？」 「新聞社に届いてたって、テレビで
「軍警は何
してやる」

「いいから中に入りなさい！」 「はい」

「また爆発…」 「軍がまた何か」

「だから嫌だったのよ！」

「神よ…」 「市街地は大丈夫

よね」

「助けて」

「やだ怖い」

「勘弁してくれよ…」

「聞いた」

「見えるの？」

「罰が下ったんだよ」

「何の」

「軍警察は旧軍と、まだ繋がってたらし

いぜ」

——喧しい。

自分たちの街で不穏な事象が起こったのだから、彼らの反応は当然
と言えば当然だろう。

横合いに聞き流し、人の群れとは逆へと進む。

しかしその心がけにも関わらず、レインは聞いてしまった。

「…おい、さっきの爆発の崩落で、地盤が沈んだらしいぜ！」

嬉々として語る通行人。訝しむ誰か。

「そんなの、行ってもねーのに何で分かるんだ？」

「情報がリークされてんだよ。信憑性高えかもしれないしな」

――地盤沈下。

頭が、その単語を網に引っ搔ける。

地盤沈下。文字通り、地が沈む。

影響はきつと、地表に現れるものだけではないだろう。

地面だけではなく、地下も沈む。

地下も……

――おい、ちょっと待て。

レインは歩みを止めた。そのまま思考に没頭する。

軍警察の主力基地。

あの方向。ザイフォンの西側。

――あの方角は……

気が付いた途端に、レインは走り出していた。

顔を覆い隠すフードを跳ね除け、見物人にぶつかりそうになりながらも全力で走る。

ただの危惧に終わればそれでいい。しかし、そうでなければ……

レインは関係ないと言い切った場所に向かい、走っていた。

――間に合え……！

心中で叫びながら、黒い風となって疾駆する。

何故ならば

あの場所には、『彼女』が居る。

89 疾風（下）

廃した通路には、足音が響き渡る。

何度も繰り返す床を叩く音。

暗がりから現れたレインは息を切らし、錆びた通路の延長線上にある扉の前に立った。

懐から取り出した鍵を、ドアノブに差し込もうとするが、腕が震えて上手く差し込めない。

「…っはあ、は…、ああ、くそ…」

喘息時みたいな息の根を整えながら、躍起になって鍵を入れ込み、回す。

――開いた。

扉を蹴破るようにして開け放ち、昏い室内に入る。

室内はぼやけた光源でうっすらと輪郭を放っていた。倉庫のような雑多な棚や箱の群れを掻き分けて進む。

途端、地面が揺れた。

雷の音に似た地響きが響く。

地上での爆発が、真下であるこの場所にも伝わってきているのだ。

地下陥没している場所はまた別の場所だったが、ここもいつ崩落してもおかしくない。

地上では一体、何が起きているのか。

考えるよりも先に、レインは部屋の奥へと進む。

灯りが洩れる、最奥。

水槽みたいな長方形の硝子箱。

中には、あの日と寸分変わらない肢体の姿があった。

――首のない、女性。

一糸纏わぬ姿も、胸から下腹部にかけての袈裟斬りの傷跡も記憶のまま。

苦い心中を抱えて、レインは『彼女』に近寄った。

――姉の死体。

首のない、肉親の身体。

喉の奥がつかえそうになるのを自制して、冷や汗が滲むのを耐える。

衝動的に来てしまったものの、次にどうするかは思考の範疇にない。単に、地下が崩落して、この場所まで瓦礫に埋まってしまうのが我慢できなかったのだ。

――でも、何故だろうか。

忌々しい記憶の象徴である『彼女』は、このまま地に沈んでしまった方が良いのではないか：そういう思いがなかったわけではない。むしろ今でさえ、そう囁く声が自分の何処からか聴こえてくるのだ。

しかし、それは絶対にいけない。

彼女はこんな場所で、ホルマリン漬けにされたままではいけないのだ。

土に還ることもできずに、死んだ姿のままに存在し続ける：それは死者への冒瀆だ。

――姉さんを、これ以上冒瀆させてはいけない：

どうして姉がここにいいのか、誰が運んで、何の目的で：そんなことは二の次だ。

『彼女』は『私』と『自分』の肉親だ。

葬るならば、納得がいく方法で看取らなければ。

それだけが、今の自分にできること。あの時、何もできなかった自分にもできること。

だから、これ以上の後悔はしない。

――絶対に。

吐き気を抑えて、肢体に近寄る。

白皙の肌は水面を映す鏡のよう。けれど生氣は一片も感じられない。剥製じみた硬さがあるだけだった。

レインは、そっと腰元から小銃を取り出す。

護身用の、数発しか入らない玩具じみたデリンジャー銃。それを真っ直ぐに構える。

片腕を自然に伸ばし、緩く曲げたもう一方の手を添える。

静かに、息を吐き出して直視に耐えない『彼女』を、それでも見る。ゆっくり、引き金に指を掛け――

その瞬間、ここではない何処かでまた轟音が響いた。

先程よりも揺れる地面に、危うくバランスを崩しそうになる。

「……！」

天井からは、配管から雫が落ちると同時に、コンクリートの欠片も落ちてきていた。

――時間がない。

レインは今度こそ銃を構える。

込められた銃弾を全て当てなければ、不可能だろう。

息を止め、遊底を引いて、引き金に指を忍ばせる。

「――っ」

銃器にしては小さめの反動を受け流して、的を見る。

水槽の下部には、小さなひび割れ。

床には弾かれ曲がった銃弾が落ちていた。

――防弾使用か……？

ならば厄介だ。

全く同じ位置に重複して撃たねば、穴さえ開かないだろう。

――でも、ダメージはある。

蜘蛛の巣状に広がったひび割れの中心に向け、レインはもう一度銃口を向けた。

外す余地はない。一発さえ狂いなく当てなければいけない。

天井の配管がひび割れ、雫を降らす。

お構いなしに、銃口を引いた。

場所は、先ほどよりも少々横合いにずれていた。

しかし水槽のひび割れは大きくなっている。

――もう少し……

三発目を立て続けに撃つ。

当たる。やや上寄り。

込められた銃弾はあと半分。力量としては少な過ぎる…大きなハンデだ。

四発目。…斜めに偏っている。

ひび割れは大きくなるが、貫通するには力不足だ。

デリンジャーでも穿つには、局地的に撃たなければならない。

——やってみせる。

五発目。ひび割れが僅かに広がる。

——まだだ。

最後の六発目。

これでダメージを与えられなければ、もう銃で水槽を破ることは不可能だ。

防弾加工の施された硝子を素手で破ることは、まず不可能。

だから、これが最後の機会。

銃の威力を最大限に引き出すのは撃ち手だ。

それができていた人物を、レインは知っている。

彼を思い出しながら、銃を構えた。

コンクリート片と砂塵が落ちてくる。僅かに視界がぼやける。

しかし張りつめた弦の如く、緊張感は静謐と鮮明さを与えた。

狙撃をする際の充足感の感覚に似ているかもしれない。それは確かに、かつて彼も感じていたであろう実感。

レインは息を吐き出した。

ゆっくりと焦点を定め、割れた蜘蛛の巣の中央を——

——『穿つ』

小気味の良い音と共に、硝子片がはじけ飛ぶ。

見ると、穿った場所からはコイン程の穴が開いていた。

「やった……！」

思わず、声に出す。

レインは弾丸を使いきった銃を持ったままに、水槽の下方の穴に近づいた。

穴からは水が漏れている。

あとは、この穴を広げなければ：

手に持っていた、弾倉が空になった金属製の銃を叩きつける。

殴りつけるように、何度も。

しかし僅かに穴の縁が広がっただけだった。

まだまだ、足りない。

今度はベルトに挟まれていたナイフを抜き、力任せに突き立てる。

「：っ！」

甲高い音と共に刃は折れ、破片がレインの頬を掠った。

――駄目か……

周辺を見渡す。

硬く打撃に適したものを探した。

しかし役に立ちそうなものはない。

また爆音が響く。おそらくは先程よりも近い位置だろう。

この場が陥没するのも時間の問題。

ここで、肉親の死体と一緒に潰れるのか。

――違う。

自分はこんな所で死なない。

彼に再び会うまで、絶対に死なない。

それに彼女もだ。

こんなところで醜態を晒す恥辱は、もう十分だ。

――絶対に助ける……

死してなお、彼女だけは救済したい。

レインは銃を投げ捨てて、拳で透明な壁を殴りつけた。

痛みは直に伝わり、骨の髄まで染み渡るようだった。

けれど

――それがどうした……！

彼女はもつと辛かっただろう、苦しかっただろう。助けを求めようとしただろう。

その報われなかった思いに比べれば、自分の痛みなど浅い。浅過ぎる。

レインはひび割れた箇所を殴打する。

やがて拳は硝子の刺で傷つけられ、血を滲ませた。痛みの感覚が麻痺していく。

「……壊れるよ……！」

懇願にも似た声。

「……こんなの………」

拳から滲んだ血は、透明な硝子板に赤く滲む。

縫るように、なおも打ち付ける拳。

痛みだけが増していく。

——屈しては駄目だ。

レインは当てる手を止める。

そつと水槽に頭を付けて、瞳を閉じた。

——諦めるな、絶望するな。

考えろ、素手で駄目でも、何か——……

轟音が轟き、鼓膜を震わす。

コンクリートの欠片と砂塵が、一斉に落ちてくる。

手で頭を覆って、レインは身を伏せた。

「……っ！」

背や腕に当たる小石の不躰な痛みを感じながらに、レインの耳は別の音を聞いた。

——鈴の、音。

ちゃん……という澄んだ音を皮切りに、砂塵の雨は止んだ。

レインは頭を保護していた手を除け、辺りを見渡す。

震える地面はそのままに、けれど目の前には、先程までは無かったものが鎮座していた。

まず目に入る、闇夜を切り取ったような黒い鞘。

美しい造形の、祖国の国花を表した鍔飾りと、朱色の飾り紐。柄の部分には溝が刻みこまれ、理想的な螺鈿彫りとなっていた。一つの芸術品と見紛う程の、美しい輪郭。

「…これは……」

——知ってる。

レインは目を見開いたままに目の前のそれを凝視した。

——忘れるはずもない。

「姉さんの……刀……」

そして、かつてはフレイア的手中にあったもの。

どうして、それがここにあるのか。

鞘に収まった黒刀は答えもせず、ただ艶やかに輝く。

頭上を見ると、配管の群れが落ち、隙間がぼっかりと空いていた。

何処かに仕込んであって、崩落の衝撃で落ちてきたのか……

偶然にしては、あまりに必然的過ぎる出逢い。

思い出すのは、姉と過ごした過去、そして、あの日の夜。

姉はこの刀で殺された。自らの愛刀で袈裟斬りに散った。

それを、『私』は目の前で見ていた。

——何もできずに。

自分の無力さと不甲斐なさを呪いながらに。

ただ、眼の前の男を恨みながら——

レインは、無意識のうちに黒鞘へと手を伸ばしていた。

五指が、冷たい柄と鞘に触れる。

鈴なりの音を響かせて、ゆっくりと床から持ち上げた。

伝わる、確かな鉄の重さ。

これを、ずっと探していた。

レインは刀を腕に包み込んで、胸に抱いた。

「姉さん……」

探していた、二つのもの。

やっと、見つけた。

こんな場所で。

こんなにも長い間、まるで待っていてくれた：そんな気がする。

幻想かもしれない、傲慢かもしれない、けれど、腕に吸い付くこの感触は、何かを物語っているように感じてならにのだ。

レインはそっと刀を抱擁から解放し、握り込めた。

立ち上がる。

眼前に刀を構えて、抜き払った。

薄暗がりでも分かる、研ぎ澄まされた刃。

二重螺旋を燦らせる、澄んだ白刃の刀身。

記憶のままだ。もう、間違いないと断言できる。

「……ありがとう」

レインは誰にでもなく呟いた。

逢いたかった。姉の愛していた、古の刀剣。

今、掌の中にあることが信じられない。

鈴音を響かせ、レインは刀を納めた。

轟音は響く。

いよいよ、この場所が崩落する期限が迫ってきた。

——やるしかない：

レインは息を溜める。

鞘に収まった黒刀に向け、そっと囁いた。

「——力を、貸して」

返事はないが、代わりに鞘の中の刃が鈴の音をたてた。

——一緒に、やろう。

理由もなく、できると確信した。

そして、現にできなくてはいけない。

レインは無言で刀を下げた。

腰の位置で止め、横に引く。

——拔刀の姿勢。

腰を溜めた居合の基本型。

何度も修練で身に着いた構え。

しかし、腰には本物の重みがある。

居合に使うにはやや長い、拔身の刀。

だが、そんなことは些末なことだった。

「――」

レインは瞳を伏せ、息を吐く。

配管が折れて、軋む音がする。

しかし、音も視界も、画面の向こうの出来事のように遠い。

現実が遠さがっていく感覚。

自分でも落ち着いていることが分かった。

満たされていく感覚。

研ぎ澄まされていく感覚。

自分が一つのご概念と化す感覚。

全てが平行線上に在る。

遠くなった意識は、刹那に引き戻された。

握りを込め――拔刀。

透き通る凶刃は弧を描き、真っ直ぐに水槽の硝子へ一文字の線を引き
いた。

浅く傷つけられた面から、火花が舞う。

――初太刀。

そして、斜め上の斬り上げを転換させた中間の横一閃。腸を掻きだ
す殺陣。

――二の閃。

続いて斬り上げ、胸中を抉る逆袈裟斬り。

――三の斬。

喉元を貫く刺突、突きの手。

――四の突。

硝子に浅く突き立てられた刃を引き抜き、レインは鞘に刀身を収め
る。

再び、拔刀。

――二の太刀。

脳天からの振りかぶり

――燕落とし。

脛への強襲

――足掬い。

身体を斜め刻む

――飛龍斬り。

余りある攻めの手を切り、再び刃は鞘へ。

レインは足腰に最大限の力を載せ、刃を抜き払った。

三の太刀――最終手、鞘納め。

相手の腰元から首を掻き切る、文字通りの致死の刀技。

レインは斬った体勢のままに、息を吐き出した。

偏っていた血が下がっていく感覚。

そして、水音。

居合の斬撃により、水槽に入ったひび。

レインは拍車を掛けるように、思い切り硝子を蹴りあげた。

途端、硝子は飛散する。

水が足元へと流れ込み、水槽を構成していた破片は碎けていく。

内容物だった水が抜け、そこにあるのは障害なしに見る肉親の身体。

レインはそつと膝を着いて、首のない遺体へと屈んだ。

首元に手を当て、一言だけ告げる。

「――遅くなってごめんなさい：姉さん」

そうして自らの上着を脱いで、彼女の体を包み込んだ。

そつと抱え上げた体は軽い。

収めた刀を腰のホルスターに挟み、レインは彼女を抱えて立ち上がる。

崩落の轟音が迫って来ている。

「…早く…出ないと…」

呟いて、踵を返して部屋を後にした。

後ろ手に扉を閉め、通路へと飛び出す。

配管が崩れている部分もあるが、まだ通路として機能しているだろう。

ひとまず安心して、レインは通路を駆けていく。

両手にはかつての姉の身体を、腰には彼女の形見を下げ、走る。

地盤が安定しない場所も飛び越え、ひたすらに出口へ向かった。

地下の地形は入り組んでいる。一歩間違えば延々とその迷路に絡め捕られ、出ることは叶わない。

だからこそ、慎重に来た道を引き返す。

レインは記憶に新しい来た道を引き返し、角を曲がり進む。

左折、左折、右折、左折、階段、左折……

覚えている限りを反芻して進み、行程は最終へと入った。

そして、それは現れた。

レインが道順通りに走った先、右折の折に立ちはだかった『それ』。

それは、瓦礫によって塞がれた通路だった。

90 血潮

教会の集会所にも、演劇の鑑賞場にも見える建造物。

薄暗く広い集会場には、数多の人々が集まっていた。

性別も年齢も人種も関係なく集まる彼らの眼には、同じ憎悪の光が灯されている。

そして集会所の中央には、火薬の山。

集まった者たちは思い思いに身体に爆弾を巻きつけ、数少ない武装をして去っていく。

ひっきりなしに人は集まり、淀んだ瞳のままに出て行った。

二階の傍聴席から、その様子を窺う影がある。

長椅子に座る影は、無感動に集まった復讐者たちを傍観していた。

何を言うでも、何をするわけでもなく、ただそこにいるといった風情。

退屈そうに、時折組む足を変えるだけだ。

その男の頭に、後ろから銃鉄の音が響いた。

銃の発射口を真っ直ぐに男の頭蓋に向け、彼は静かに佇んでいた。

銃口を向けられてもなお動じず、椅子に凭れる壮年の男の口が開かれる。

「遅かったね」

「……」

呼ばれた隻眼の青年は答えない。

代わりに、静かに告げた。

「地下に潜って、探っている内に分かったことがある」

「何だい？」

男は座ったままに問う。青年は応える。

「一つ、地下のハートレス関連施設は、軍でも軍警察でもない……旧軍の狂信が生み出した妄執的な施設だったということ」

男は沈黙し、青年はなおも語る。

「一つ：あんたが、フレイアを殺して、ここに集まった市民をも殺そうとしていること」

青年は安全装置の外された銃の引き金に、指を掛けた。

蒼黒の瞳は冷めた色を載せ、口元が上下する。

「即務第二機関：官長」

「驚いたよ、リート・セディシア。君は死んだと聞いていたのだね」

「……」

官長に銃を向ける青年——リートは応えない。

代わりに、平坦な声音で語った。

「旧国軍には、第一機関という部署があった。：諜報から、傭兵部隊の管理まで様々な仕事をこなしていたらしいが、要するに、汚い仕事の押し付け場所がそこだった」

「詳しいね」

「どういうつもりだ。第二機関というのは、つまり、そういうことだったのか？」

男は眼を閉じて、余韻を噛みしめた後に告げた。

「その通りだよ。リート・セディシア。君たちはね、知らないうちに旧軍の為に使われていたのさ」

——かちゃり、と音がする。

回転倉が充填された弾丸を送った。

あとはリートが引き金を引けば、男の頭は吹っ飛ぶだろう。

「答えろ、ハートレスの関係者の生き残りはいるのか、いないのか」

「君が知ってどうするんだい？　もしかして、生き残りを皆殺しにでもするのか」

鷹揚に語る男に、青年は吐き捨てる。

「：御託はいい」

「いいや、是非とも君の見解を聞いておきたいものだな。ハートレスの生き残り」

銃声が弾けた。

至近距離から放たれた銃弾は、確かに官長の頭を貫通する：はずだった。

しかし、居座る男は数瞬前と変わりなくそこにいる。あたかも、下部の復讐に憑りつかれた亡者の列もそのままに。

代わりに、リートの視界を覆うものがあつた。

鋼鉄のフレーム、艶消しの装甲を持つ長銃。

銃――モシン・ナガンM1891／30には、銃痕が穿たれ、硝煙を上げていた。

今、リートが放った弾丸。

凶弾を受けた長銃を持つ相手へと、視線を上げる。

「：久しぶりだな、ハートレス」

「お前……」

目の前の大柄な男は、確かに見覚えがあつた。

彼は、セレナータ・カングルツペが自演したあの依頼で、リートやレインと同じように傭兵として雇われていたからだ。

「ノイシュ・アルカード……」

「覚えててくれたんだな、これは兆重だ。会いたかったぜ、ハートレス」

僅かに目を丸め、人懐っこい笑みでアルカードは応じた。

状況が状況だけに、心底、ぞっとする笑みだ。

彼は事実上存在しない傭兵だった。その彼が何故、と考えたところで、すぐに合点がいた。

「そういうことか、官長。：こいつは伏兵だったと？」

リートが見やった先の男は緩慢に頷く。

「その通り。やはり君は勘が良いね。：良過ぎても困るが」

アルカードは長銃を肩に担ごうとしてやめ、横合いに投げ捨てた。拳銃の一撃を真に受け止めた身だ。もう使い物にならないと判断したのだろう。

「あれ、使えるようにするのに結構手間取ったんだがなあ！ まあ、

いいか」

代用とでも言いたげに、男は腰元から新たなメーターモーゼルを取り出した。

リートは身構え、片足を退く。

振り向きもせずに、官長は抑揚のない声を発した。

「：全く、君にも、フレイアにも、アレイン・ヴィアルドレッドにも驚かされる：従順な組織の駒にしておくには勿体ない逸材だな、君たちは」

「レインが、何だって：？」

「君は知らなかったのかな。彼女はとくに第二機関を辞めているんだ。今は賞金稼ぎと、都市軍警の請け負いをしているはずだがね」もし官長の言っていることが本当ならば、リートはそれで良いと思う。

地下に潜る腐った組織なんかとは、彼女は早く縁を切った方が良い。官長は笑みの気を声音に含み、言い放った。

「だが、やはり：悪い芽は摘み取らなければね……アルカード」
「了解」

途端、アルカードの片腕が消失する。

真っ直ぐに構え、モーゼルを青年に向けた。

リートは咄嗟に観覧席の合間へと体を滑り込ませる。

椅子を銃弾の雨が穿った。

メーターモーゼルは射撃競技銃のように正確な射撃が可能だ。避けただけでも幸いだろう。

そして、ブルームハンドルと称される特異な形状は持ち手を選ぶ。固定弾倉の安定性は、持ち手にとっては信用であり、的にとっては恐怖だ。

リートは観覧席の間を疾駆する。

止まったら、間違いなく蜂の巣にされる。

応戦を捨て置き、距離を取った。

アルカードは追って来ない。

リートは自身の銃――ベレッタM84を席の合間から構えた。席を防壁代わりに、立て続けに三発、男の影に撃ち放つ。

実感はない。おそらく当たってもいない。

――当てずっぽうは、駄目か。

当然ではあるが、相手の技量が高ければ高いほど、精密な射撃こそが必要だ。

席の間を縫い、檀上を駆け上がる。

下方に見える影はリートを的確に捉え、僅かでも動きに躊躇いが見られた瞬間に撃ってくる。

その洞察力には、感嘆と脅威を感じずにはいられない。

「……っ！」

肩口を掠る銃弾。

僅かに衣服を斬り裂いたのみだ。問題はない。

しかし、立場は列記としている。

――追う者と逃げる者。猟師と獲物。

この立場のままでは、部が悪い。

慌てた行動をすれば、そこから綻びが生じてしまう。

その隙を見い出されれば、お終いだ。

席のシートの後ろに凭れ掛かり、背後に銃弾の音が畳み掛かる。

銃撃の合間を狙い、応戦する。

相手が銃弾を装填する隙――そこを狙わなければ意味はない。

銃撃が、止んだ。

リートはアルカードに向かって、膝立ちの体勢で銃を撃つ。

アルカードは銃弾がきれたモーゼルを何の未練もなく捨て、新しい銃をホルスターから抜き撃った。

同じメーカーモーゼルの型だが、新たな得物は大型拳銃に程近いタイプだ。

一度に装填できる弾数はおそらく、8＋1発。

ならば、もう一度隙ができる。

お構いなしに掃射するアルカードに、リートは隙を見て座席で防御

の盾を張る。

銃声が、途切れる。

刹那の間に、リートは長椅子の背から飛び出した。

アルカードは弾がきれた銃を投げ捨て、新たな銃を腰元から抜こうとする。

――させるか！

リートは走りながらに銃を放った。

狂いなく、弾の矛先はアルカードの手を穿つ。

血が飛散する。

僅かに衝撃と痛覚で傾いたところに、真っ直ぐに体当たりを喰らわせて男の身体を倒した。

腕の力点を抑えたリートは、そのまま男に馬乗りになったままに腕を捻り上げた。

抑制の組手だ。

「…終わりだ」

首筋にベレッタの銃口を当て、リートは告げた。

組み敷かれたアルカードは抵抗をしない。

目だけをリートに向け、男は口端を歪めた。

「流石、ハートレス…腕は鈍ってないみたいだな」

「お前たちみたいな輩がいる所為でな」

「…は、違いねえや」

息苦しうにアルカードは笑った。

リートは周辺に注意を払ったままに、男を押さえつける手を締め上げる。

「答えろアルカード。旧軍について、何を知っている？」

「知っている、か…だって、そんなのは、一つだって知らねえさ。

俺は頼まれたことをしてるだけだ」

締め上げる手には更に力が込められる。

「どうして官長の側に着く……答えろ」

「仕事だからさ」

苦しい体勢にも関わらず、男の表情は笑みを刻む。

リートは底冷えるする無感情な声音で尋ねた。

「仕事ならば、何でもするということか」

「どうだろうなあ……」

「…何故、あの依頼に参加した」

「……」

答えはない。

手の力が緩んだ。

興味を無くしたように、リートの声の音程が下がる。

「…詰まらない返答だ」

男の首に手刀を叩き込み、ぐったりとなったアルカードの身体を腹から蹴り上げる。

彼が気を失っていることを確認すると、リートは背後へと向き直った。

「…逃がしたか…」

先程まで官長が居た席には、今はもう誰も居ない。

気が付けば、辺りは騒がしさを増していた。

観覧席から集会所の中央を見ると、爆弾を抱えて去っていく名もなき復讐者たちが逆流している。

新たに建物に入って来たのは、軍警察の警察犬と、警兵の群れ。

やっと騒ぎの元凶である、この場所を突き止めたのだろう。

確保されていく人々。彼らの腰元には爆弾が巻きついている。

——道連れにするつもりか。

リートは考えるよりも先に、咄嗟に天井のスプリンクラーを撃った。

上がるはずの血と煙の炎はない。

代わりに会場の煙探査の機器が誤作動を起こし、壊れたスプリンクラーから雨が降った。

結局のところ、彼らが巻きつけているのは旧時代の火薬に過ぎない。水を最初に浴びてしまえば、不発に終わる代物なのだ。

唯一の絶対武装を失ったテロリストは、警兵に取り押さえられてい

く。

足元に転がったアルカードを見やり、リートは踵を返した。

——もう、自分はここに必要ないだろうと判断して。

91 再会

レインは黒瞳を見開いたままに呟いた。

「ない……」

目の前には積み重なる瓦礫、隙間さえない。

——出口が、ない。

ここまでは、ほとんど一本道だった。別のルートがあろうとも、それが地上へと繋がっているとは限らない。

むしろ確信のない動きをすれば、それこそ地下迷宮に捕らわれる結果となる。

出口のない地中。

やっとここまで来たのに。

姉の身体にを抱える腕に、力が込める。

やっとの思いで、望んでいたものを探し当てて手に入れたのに。

ここで地に埋まっては無意味なのに。

——冗談じゃない。

こんな所で埋まるのは嫌だ。

しかし、無情にも爆音は大きくなって迫り来る。

背後に後退しても、崩落に巻き込まれるだけだ。

まるで、袋の鼠。退路さえない。

——諦めるな。

まだ、諦めるのは早い。

どこかに道があるはずだ。

レインは踵を返し、もと来た道を逆流する。

どこかに抜け穴がないかと視線を泳がすが、灰色の壁には煤けた跡があるだけで、変哲はない。

床を震わす地鳴り。

「……っ！」

何とか足を踏ん張って耐える。

姉の肢体を抱えたままでは、満足な動きもできない。

身体を包んだ上着を掛け直し、レインはしっかりと腕に囲う。

――絶対に離さない：

彼女は自分の手で葬らないといけない。

完結させなければいけない。

滑るように足を走らせ、走る。

息が切れるが、構わない。

心臓は鳴り響き、頭には悪い血が偏っている。

腰元には重い刀。

良くない実感ばかりが募っていく。

――それでも

「負けて、堪るか……！」

必死に意志だけを張りつめて、レインは前を見据える。

走るたびに、刀が鞘の中で鈴鳴りの音をたてる。

その音だけが、鼓膜で反響した。

嘲笑うかのように爆雷が響く。

地面が揺れ、バランスを崩す。

縛れた足は体重を支えきれずに、強かに床に体を打ち付けた。

「……い……つつう……」

苦渋の声を絞り出して、奔流の如き荒ぶり揺れる地面を舐めた。

肩口が擦り切れて痛い。

けれど、レインは彼女の身体だけは離さなかった。

離れたら、何処かへ消えてしまいそうで。

抱え込んで、包む込むように抱きしめる。

――悲しいくらい、冷たい。

刀は地面にぶつかり、鈴音を連続で響かせる。

天井からは、ぱらぱらと砂塵が降ってくる。

顔に掛かる欠片を払って何とか立ち上がろうとするが、余震は止まない。

「……ちく、しょう……」

唇を噛みしめる。

やっと、決断できたのに。

やっと、この手に掴もうと決意したのに。

取り戻せたのに。

「…嫌だ……」

こんな所で

「死にたく、ない…!」

思いは言葉となって、口端から零れる。

轟音と、刀が鳴らす鈴音。

しかしその中で、黎明にはっきりと聞こえてくるものがあった。

「――そこに、居るのか？」

一瞬にして、冷や水を浴びせられたようにレインの意識は覚醒した。

同時に、半身を起こす。

信じられない。

だって、聞こえてきたこの声は。

「…誰か、そこに居るのか？」

幻聴かと思った。

けれど、違う。

はっきりと聞こえる声。望んでいた声。

それは――――

「…リート……?」

囁き声みたいな微々たる声で、レインは発する。

反応はあった。

「……レイン……? レインなのか？」

「――――!」

もう駄目だった。

抑えようとも、顔が歪む。

苦しいような、痛いような、切ないような思いが胸を締め付けた。

飽和量に達した感情が、流れに載って涙腺を緩ませる。

声の許を見た。

天井に開いた金網の通気口。

その向こうに、ずっと望んでいた人物の姿があった。

「リート……」

「…レイン…どうして……」

上下に分かちながらも、両名の視線は交わる。

纏まらない感情と意志のみが残り、言葉にはできない。

——けれど。

二人が思っていたことはきっと、同じだったのだろう。

再びの轟音。

レインは壁に縫って、必死に耐えた。

リートは咄嗟に金網を留める金具を外そうとして、止めて銃を抜き払った。

正確無比な一瞬の射撃。四発。

全てが金具の接続部を弾き飛ばし、金網を眼下に落とす。

ぽっかりと空いた穴からリートは手を伸ばした。

「レイン！」

呼ばれたレインは壁伝いに立ち上がり、片手に彼女を抱えたままに、天井から伸ばされる彼の手に己の纖手を伸ばした。

それは一瞬にも永遠にも感じられる束の間。

——ずっと、引き上げてくれる誰かが欲しかった。

地獄の底のような日々から、苦しい闘ぎ合いから。

指先が触れ、しっかりと絡められた指先、掌、手首までを掌握される。

「……っ！」

痛いくらい強引に引き上げられる。

感じるのは足元の浮遊感。

視界が上がっていく。

片手と片手を繋ぎ、腰元を抱えられて上階に投げ込まれる。

リートとレインは滑り込むようにして倒れ込んだ。

意識せずに吐息が重なる。

力いっぱい引き上げられたレインの腕は、今も関節が痛んでいた。けれど、それはとても些末なことだ。

レインはまだ懷に確かに抱きしめている姉の身体を感じながらに、そっと微笑んだ。

「……………ありが、とう…」

一筋、涙が頬を伝う。

リートはそっとレインの黒髪を撫でた。

「無事で、良かった」

「……………っ！」

レインは安心できる低温のその声を聞いた途端、止め処なく涙が溢れてきた。

止めようとしても、滂沱と流れてくる。

叫びたいような、思いつき走り出したいような…抑制の効かない衝動が理性を占めていった。

青年の腕が、少女の頭を優しく包み込む。

レインはリートの胸に額を当てて、泣いた。

嫌なこと、今までの感情を洗い流すようにただ、泣き続けた。

轟音は遙か遠くに遠ざかっている。

彼の心音に耳を傾けていると、自然と落ち着いてきた。

味わったことのない安堵の気持ち。

確証も、絶対もなく、ただ安心できる…心を委ねられる場所。誰しもが欲している心の在処。

やっと、見つけることができた。

絶対に、この手を離さないでいようと思う。

やっと、見つけた私の————

「…レイン」

頭上から聞こえる声に、そっと頭を離した。

目の前にあるのは最後に別れたあの日から変わらない、端正な顔。

蒼黒の瞳。

「ごめん：俺、ずっと」

「いいんだ」

レインはリートの言葉を制して、儚げに微笑んだ。

「今、ここに：居るから」

一輪の花の如き、美しい笑み。

対する青年は愛しい少女に向け、大切な一言を告げる。

「：ああ。会いたかった、レイン」

「うん。私も、会いたかった……」

応える言葉に静かに青年は目を細め、起き上がった。

レインも彼女を抱えたままに、膝を立てる。腰元にはしっかりと長靴が収まっていた。

「：レイン、それは……」

リートは彼女の胸に抱かれた、上着に包まれている肢体に目をやった。

布の端からは手指や踝が見えている。

「：私の姉さん。やっと見つけたんだ：ずっと、地下にいた……」

「：そうか」

何か言おうとして、青年は口をつむぐ。

少女もそっと俯いた。

「見つけた。大切なもの：大切な人も見つけたよ。リート……もう、何処にもいかないで、お願いだから……」

自分でも身勝手な願いを言っていることは分かっていた。

けれど、それでも言葉にせずにはいられなかったのだ。

「ああ。もう、何処にも行かない」

青年は言って、少女の頬に手を添えた。

その手を掴み、レインは静かに言う。

「行こう、リート……帰ろう」

「ああ。帰ろうか」

二人は出口へと身を翻す。

見つめ合う視線は確かに、再会の喜びを表していた。

92 脱兎

無人の白い廊下を歩む、小柄な影。

ぱたぱたと、床を靴裏が叩く音が反響する。

フードで顔を覆った少女は車椅子を押しながらに、小走りでエレベーターへと乗り込んだ。

箱の空間内には誰も居ない。

エレベーター内に取り付けられた向かいの鏡には、息を切らした自分の姿が映っている。

少女が押す車椅子に乗った人物には、上半身全体を覆うように布が掛けられていた。

彼女は車椅子ごとエレベーターに入りきって、扉を閉めるボタンを押す。

締まっていく扉。

しかし突如――忍び込む侵入物。

両側から隙間を挟んでいく合間に、ぬっと手袋に包まれた手が入り込んだ。

片手、そしてもう片手を滑り込ませ、五指が引っ掛けられる。

「――っ!!」

少女は真っ青になった。

そして無理に開けられた隙間の向こう側に、鮮やかな赤髪と、碧眼が見える。

「何してるの? …クライン」

いつも通りの笑みで、エレベーターの扉を造作なくこじ開けた青年は問うた。

彼は脚を横に立てて十分な出入り口を開けると、造作なく箱の中に入ってくる。

「……いっ」

悲鳴を上げようとした口元を、即座に塞がれた。

そのまま、壁に押し付けられる。

目の前に、青年の碧眼がある。顔を突き合わせる程の至近距離だ。

「……ここは病院だよ？ あんまり騒ぎたてたら悪いよね……？」

青年は優しいげに耳元に囁くが、眼が少しも笑っていない。

クラインは震えながらに何度も首を振る。

「――、――っ！」

隙間なくがっちりと塞がれた口元が息苦しい。

「ああ、ごめんね。息、できないよね」

青年は思い出したように手を離す。

少女は息を思い切り吸って、必死の形相で侵入してきた彼を見た。

「……クロード、……さん……」

軍服を着た青年――クロードはエレベーターのスイッチを操作して扉を開ける。

戸口に凭れ掛かって、少女に笑顔で問うた。

「クライン、久しぶりだね……顔色が悪いよ？」

さながら、中の獲物を逃がさまいとしているような立ち位置。

「……いえ、そんな……」

少女は震えながらに箱の隅へと後ずさりし、視線を泳がせる。

追い詰められた小動物じみた行動は、彼女が恐れていることを如実に表していた。

青年は鷹揚に尋ねる。

「具合がよくないの？」

「……いいえ、大丈夫です……」

少女の横に鎮座する『本題』に、青年はなかなか触れようとしなない。拷問のような遠まわしな尋問。

「……そう？ まあいいか。実はこっちも、他人の具合に気を遣ってる程、余裕ないんだよね」

「………？」

クラインは訝しみの色を濃くした。

「今ね、ちょっとした爆撃犯の団体が、軍警察を襲撃しててねー」
まるで天気の話でもするようにクロードは語る。

少女は一際大きく肩を震わせた。

「困ったもんだよね…お陰で、こっちの警備は手空きだ」

「…！」

「そうだなー、患者の一人や二人、居なくなっても、この騒ぎの中じゃあ、バレないんじゃないかな…？」

クラインは確信した。

――全部、見通されてる。

背中を嫌な汗が伝った。

青年の眼は弓をしならすように細まり、再び笑みの形を作った。

しかし、今の少女には彼のそれが仮面の笑顔だということがありありと分かる。

軍服の悪魔はやっと、『彼』が座る車椅子へと目を向け、開口する。

「クライン、…ユウ・アインツィベオンを何処に運ぶつもり？」

「…っ」

――もう、お終いだ。

少女の心中は絶望の絵具で塗りつぶされていった。

――全てが、台無し。

少年を軍拠点都市の外に連れて行くことは、もう不可能だ。

きっと自分も目の前の青年に捕らえられて、それっきりだ。

――全部、終わってしまった。

ただ、その事実だけが反芻して、沈み込んでいく。

絶望の渦の底。誇張表現はなく、彼女もその一端を見た気がした。

啞然となってその場に崩れ落ちる少女を見下し、赤髪の青年は詰まらなそうに話し掛ける。

「クライン。…クライン？ 聞してる？ ……いいから聞けよ」

冷めた声が、少女を現実に取り戻した。

現状は何も変わらない。

動かない車椅子の少年、木偶の坊みたいな自分、組織の忠実なる公

僕である、少年のかつての戦友。

ただ漠然と、奇妙な面揃いだと思った。

「…絶望した、みたいな面してないでさ……君、ユウを連れて行くんだろ？　グズグズしないでくれる？」

さも当然とでも言いたげに発される青年の台詞。

少女は当初、頭の理解が追いつかなかった。

唇を半ば開いたままに、少女は無意識の呟きを洩らす。

「……え？」

「え？　…じゃあないよ。もうすぐここには、テロもどきの騒ぎで負傷した警兵が集まってくる。…あのさ、何で担架荷台用のエレベーターに乗るの？　クライン、わざわざ見つかりに行くつもり？」

「……！」

クラインはここにきて、やっと理解した。

彼は敵ではない、自分たちを囲う猟犬でもない。

「…見逃して、くれるんですか…？」

「見逃す？　なんで？　見逃すも何も、君たちまだ何も、悪いことしてないじゃないか」

目を見開く。

先程は死神の笑みに見えた青年の笑みが、今は違って見えた。

青年は溜め息を吐いた後、聞き分けが悪い子供に言い含めるようにゆったりと話し始める。

「…いいか、一回しか言わないからよく聞いて。来客用のエレベータがあるだろう。そこから地下一階まで降りて、Bブロックの救急搬送口に向かうんだ。そこは今、封鎖されてるはずだから、人目はない。鍵なら開けたから、すぐに行くんだよ……いいね？」

クラインは暫く放心していたが、やがて力強く頷いた。

「はいっ！」

やっと、クロードは少年のような混じり気のない笑みを零す。

「いい返事だ。くれぐれも気を付けて」

「…あ、ありがとうございますっ！」

少女は目端に涙を溜めて言い放つと、車椅子をエレベーターから引き出して、押して行った。

車椅子に乗せられるのは、とある犠牲者である少年。生きる屍となってしまうた、過去からの亡者。

小走りで駆けていく小さな後ろ姿を、クロードは見えなくなるまで見送った。

彼ら血の繋がらない兄妹は、上手くいけば今日のうちにザイフォンから発てるだろう。

そして、軍拠点都市から遠く離れ――：

「……さようなら、パーソンレス」

クロードは自分だけに聞こえる声で呟いて、踵を返した。

彼らの歩む方向とは、正反対へと。

93 反撃

高台に位置する人影二つは、下界を見据えていた。

視線の先には劫火。今もただ燃え続ける。

バリケードを挟んで退治するアマチュアとその道のプロ。

ついぞ下らないものだった。戦場では人間が虫けらみたいに見えることを、漠然と理解することなど。

——こんなものは、茶番だ。

「いいか、敵は爆弾抱えて突っ込んでくるただの阿呆だ。なら、冷や水引っ掛けてやれば、すぐに目を覚ます」

「……」

人影の内の一人——アウストラルは当初、男の言った意味が測り兼ねた。

口火を切った方の男——ディセNDERは煩わしそうに己の短髪を掻き回す。

「だからな、：要するに、火薬に鉄砲玉で応じてでも自爆するだけだ。あいつらの持つてるのは旧式のダイナマイトみたいなもんだから、雨でも降りゃあ、使えないのさ」

「雨……」

男の言葉に、軍服の人物は何かに気が付いたようだ。

「人為的に水を降らせと……？」

「簡単なことだろうが。何でこんなことも分かんねえかな。：戦場じゃ雨が降りゃあ銃の調子もおかしくなるし、戦車の配線も浸っちゃまう。：火薬に限ったって、似たようなもんだ」

気怠げな言葉に、応用に頷く。

「——助言に感謝する」

慇懃に礼を行い、アウストラルはすぐに踵を返した。

ディセNDERは去っていく背に、さり気なく声を掛ける。

「大将、気を緩めたら死ぬぜ？」

声音には軽さがあったが、男の顔は笑っていない。

それだけで何かを伝えるのには十分だったのだろう。

「……」

無言で応じ、アウストラルは戦場を望む高台を後にした。

中枢管理塔——並びに指令塔。

通信士は幾重にも鍵が掛けられた内線機能の阻害を切り落とそうと、電源の切り替えや予備通信の立ち上げに追われていた。

不測の事態だ。人手と、何より所員の冷静さが欠けているのは明白。

「…放水車…？　ちよつと待ってください」

その中で、異彩を放つ女性が居る。

周りは通信士用の、軍服に傾倒した制服を着ているものが多い中で、彼女は紺色のスーツを着ていた。

まだ歳は若い。

鋭い目付きで、柔らかさや女性らしさには乏しいきつちりとした容姿。

彼女は管理室の一角で端末のパネルを弾いていた。耳元には通信用のイヤホン。

「そもそも、消防署は管轄が違うんですがね……」

呟いて、彼女——ミレイナは通信回線をひったくる。

「…そうですね。そうしてください。私、公僕は嫌いなので」

矛盾することをさらりと告げ、回線を繋げていく、その手際に迷いはなかった。

「森林火災用の…？　あれは国の許可が…：あー、もう分かりましたよ。取次ぎます。ええ、でも…：無茶も程々に…：…はあ？」

ここには居ない誰かとの通信を交わしながら、彼女は警告表示が連

なる画面を見ながらに、ただパネルを操作する。弾く指は一瞬たりとも止まらない。

しかし、突如として彼女の眉根が詰められた。心底不愉快そうな顔。

「……………あなた、馬鹿ですか？」

最後に口端だけを釣り上げて虚無的な笑いを零すと、ミレイナは初めてパネルを弾いていた五指を止めた。

さも責め立てるように

「死ぬつもりですか、そうですか。……………じゃあ勝手に死ね」

言うが早いのか、彼女はイヤホンを乱暴に外し床に叩きつけた。

周囲に散り散りになっていた局員は、騒然となる。…が、ミレイナの一睨みですぐに己の作業へと戻っていった。

通信器の接続部は破損している。もう使えないだろう。

「…救いようのない馬鹿ですね。アウストラル」

もう切れている通信回路に向け、茫洋と言葉を放つ。

罵倒というよりは、もっと性質の違う諦念の滲んだ口調だった。

「ここで死んでどうするんですか。あなたを殺させない為に…インツイベオンは……………」

噛み締めるような声音には、後悔と怒りが滲んでいる。

普段のミレイナを知っている者であれば、冷静沈着を旨としている彼女がこうして感情を露見することに驚いていただろう。

ユウ・インツイベオン…口にした名の持ち主は、彼女が士官学校にいた頃からの知り合いだ。

いつまで経っても成長しない少年の身でありながら、軍人としての心構えだけはミレイナに引けを取らなかった。そんな彼を彼女も認めていた。

——そして、かけがえのない幼馴染だった。

アウストラルの無力の所為で、もはや息をしているだけの生きる屍となってしまったが。

士官学校の頃は確かにあった結束。大人になって故意に捨てたもの。

アウストラルは称号を与えられた時に、クロードは遠征に赴いた時に変わってしまった。

そして、ユウも。

「……」

どうしようもないことだった。

だが、許せない。

こうなることを予期しながらに彼を止めなかったクロードや、アウストラル。

そして、気づけなかった自分が。

苛立ちをキーを叩く指先に込めて、相変わらずの速度で情報処理していく。

その顔に感情はない。

ただし、見えない部分で燻っていることがある。

今はただ、痛みを抱えたままに眼前の事態に取り組むだけだった。

何も考えなくて済むのは良い。

気が楽だ。

問題を先送りしているだけなのに。

忙しさは逃げ道を正当化してくれる。本当に都合が良い。

――ふざけないで欲しいですね。

底冷えする意思を抱え、Enterキーを叩き打つ。

『set up complete. start program』

画面に浮かぶ異国語。

こんな時の為に作った、対ハッキングの迎撃ソフトだ。彼女だからこそ作り出せた高度情報の国際法ギリギリの水準マニュアル。試運転には丁度良い。

そして、鬱憤晴らしにもお誂え向きだ。

――試させてもらいます。

迷いなく最終門である許可選択を押し、画面が切り替わる。

そして、無空間で一对の軌轢が始まった。

94 認識

「バカバカしい…やってらんなくなるな。あー、クソ」

悪態をついてから退屈そうにゴム弾を装填して、男は銃を構えた。首を傾けたままに引き金を引く。

腕を震わし、肩口に逃げる反動。

バリケードに体を凭れ、欠伸を一つ。

――暇……

非致死性武器を当てられたどこかの誰かが、男の数十メートル先でばたきと倒れ、のたうちまわった。

辺りは平面な空間で、アスファルトが続いていた。

向かってくる人影に、撃つ。

放水銃が欲しいと胡乱げに思いながら、また欠伸を噛み殺した。

暴動とも言えない反乱活動を行なっているのは、ほとんどが一般市民なのだろう。

そもそも、白兵戦で大人数で特攻なんて、ふざけた計画を考案したのは裏で糸を引いている誰かなのだろうが。

絶え間なく軍舎の方へと突っ込んでくる自爆犯を、ゴム弾で死なない程度に捌きながらに彼――リベスは明るい色の髪を掻き上げた。
――つまんねー。

余裕の有りすぎる防衛。北入口には彼一人しかない。

どうやら敵の情報攪乱の所為で、防御には偏りが出るわ、軍人が次々に武装した市民を撃ち殺すわで敷地内は混沌としているらしい。

――殺しちゃあいけねーよな…

何より、後片付けと後処理が面倒だ。

政府の左翼、反軍組織のいい抗議の種になる。尾ひれを付けて新聞に載る可能性もあった。

ゴム弾を受けて倒れていた男が、目の前で爆破する。

危険物は時限制だったのか、何らかの拍子に起爆スイッチでも押したのか。

頬を爆風が掠め、粉塵が舞った。

けれどリベストは表情を一片も変えない。

焼け擦れた『誰か』の靴が足元に転がり込んで来る。邪魔だとばかりに蹴り飛ばす。

茶番劇の原因について、今頃は中枢部が数少ない足掛かりを頼りにして、必死に手繰っていることだろう。

しかし、事実は見え透いていてのではないか。

昔、自分たちが生まれる前のことだ。

この国――イザベルの戦争：軍事組織は旧軍と呼ばれていた。

しかし、数十年前には戦争が終わり、軍事裁判が行われ、旧軍の体制を見直すことを余儀なくされた。

それまでは平気で行なっていた、敵地での必要以上の殲滅活動。そして、自国での軍人の犯罪者率の高さ。市民の間にも不安が募っていたのだ。

そして旧軍は更生した。かつての呼び名を旧軍と置いて、今が在るべき軍部の形だと知らしめた。

しかし、それだけでは負の意識を取り除くことができなかった。

そして、今から十年前になる。

当時の法機関・自治組織は警部だった。俗に言う警察組織だ。

軍部は相変わらずに市民の不安と不満を払拭できずにいた。

そして、国の文官が打ち出した計画が、軍部と警部の統合。

――軍警察。

本来、この二つは決して交わらない水と油だ。

それを一つと纏めようというのだから、反対意見も数多あった。

しかし、半強行的に行われた合併は、最終的に軍への意識を向上させる結果となった。

――皮肉。

今でも軍警内部では軋轢が起こっているというのに、上部はいつま

で立つても日和見。時間が解決すると信じている。浅はかなものだ。しかし、問題は内部だけではない。

旧軍も、軍も、軍警察も、全てを引っ括めるとなると、軍部に憎悪を抱いてる人物がとても多いのだ。

軍警察に至っては皆無に等しい。精々が軽犯罪者や前課者が厄介に思う程度。おおよそ本来の法的組織に向けられる憎悪と同じものだ。軍部もさして多くはない。当時の軍人の犯罪は激減していたし、ほの暗い印象はあれど、加害事件は事実的には残っていないのだから。問題は、残る一つ。

数十年前に活動していた『旧軍』という組織だ。

彼らの国家社会主義^{ナチズム}じみた活動は、まさしく極右翼だった。

国内外から批判を浴びて、今なお暗い影を落とす存在。

彼らへの憎悪は、根深い。

国外で危害を受けた戦敗国だけではなく、自国民からも憎悪の対象となる組織。

たとえば名を改め体制を変えたからと言っても、被害に遭った者たちの傷と執念が消えるわけではない。

だから、つまりは。

今回の事件には、旧軍への反意識が関わっているのではないかとリベストは思う。

そもそも、最近の軍拠点都市では、旧軍がらみの事件が多すぎた。

繋がる点もある。不自然にも程があるのだ。ここを見落とすほどに、平和ボケしてはいない。

——気がついたか、アウストラル：

あの正統派で人格形成がしっかりとしている頭の固い男は、きっと事実を勘づいていながらも、そうでなければ良いと願って脱出口を探していることだろう。

だが、無意味だ。

内心で呆れながらに、銃を構えて撃つ。

近くで聞こえる爆音を流し聴き、リベストは空を見上げた。

嘲笑うような蒼天に、黒々とした煙が伸びる。

——南門の辺りか：

喉と目鼻を燻す煙に混ざり、生暖かい臭いが気持ち悪さを喚起させる。

足元に散らばった、爪の剥がれた指を踏みつけ、にじる。

一片の躊躇いも戸惑いもなく。

「：さっさと、終わってしまえ」

終わればいい。殲滅して、裏で下っ端を働かせているクズを炙り出して、見せしめに殺せば一件落着だ。

ただ、そう思い通りにいかないことが歯痒い。

相手はきつと、頭がよく回る卑劣な人間だ。

そしてたぶん、物凄く悪趣味で性格が悪い。じゃないと、こんな陳腐な計画を思いついて実行なんてしない。

道徳意識について弁舌を垂れるつもりは毛頭なかったが、しかし現在行われているやり口は虫酸が走る。

武器は然るべき者が持つて初めて意味を成す。

火薬を詰め込んだだけの爆弾にしたって、自害や自滅の為に使っては、武装として勿体ない。

特にリベストのような人間にとっては、度し難い程の悪業に感じるのだ。

もしくは、この場に居合わせたのがクロードであったならば、成る程と頷いて感心こそするかもしれないが。

——あいつの理念は、よく分らん。

そういえば、彼は警察学校の出身者だった。

彼こそ、軍部と警部の統合の一番の被害者のはずなのだが……。

考えるのを止めた。
考えたら、気分が躁鬱としそうだったのだ。自身に頭を使う思考作業が合っていないことは、自分が一番知っている。

自分には——そう。

「形振り構わずにやるのが、一番だよな」

歪めた笑みを載せ、彼はまた引き金を引く。

95 翌松

石造りの階段を登る。

足音を潜ませて、一步一步静かに。

駆け登っても良かった。寧ろ、できることなら今すぐにでも駆け上がり、地上に出て陽を拝みたかった。暗いところはもう充分だったからだ。

でもゆっくりと進んだ。

それはきつと、少しでも衝撃を与えたら、眼を離したら――目の前の彼も消えてしまいそうで。

夢から覚めるのを怖がる子供のように。

あるいは、幻であっても縋りたいとせがむ、心根の弱い部分が露呈したのかのように。

「……」

レインは目の前の背中を見つめていた。

擦れて汚れた上着に反し、身嗜みは綺麗に整えられている。きつと地下で過ごしていただろう間に、そうするだけの余裕があったのだろう。

地下の一角から上がる、地上への階段。

何処に繋がっているのかは、前を先導する青年しか知らない。

上着で隠され両腕に抱えた、顔の無い体軀をしっかりと持ち上げて進む。

彼は自分が『彼女』を持とうかと提案したが、レインが断った。

この重みは、自分が背負うべきものだったから。

「……リート……」

そつと、花卉に似た口唇が開かれる。

青年の名前を呼んで、レインは階段の踊り場で足を止めた。

彼は無言で振り返る。片目だけが彼女を捉えた。

「何を、してたの？」

言葉足らずな質問。

何処で、何時——ということとは、訊く必要も無かった。彼が失踪している間の話だ。

青年は凜とした面を伏せ、すぐにまたレインを見つめた。

「——清算」

一言のみを告げる。

少女は鸚鵡返しにして尋ねる。

「清算って……」

「旧軍施設の清算、俺のしたことの清算、俺が殺した者への清算」
淡々と述べ、彼は呟く。

「俺の、自己満足だ」

浮かぶ郷愁は、哀しみの片鱗を合間見えさせていた。

「……そんなこと、言わないでよ」

レインは階段を登って彼に追いつくと、こちらを向かない背に額を付けた。

「全部、自己満足にしちゃったら、そんなの全部、まるで意味なかったみたいになるから……逃げだから……幾らでも言えるんだから、やめてよ……」

「……」

「リートがしてきたこと、無駄じゃないって、信じてるからさ……」
我ながら身勝手な言葉。

そうであって欲しいという浅はかな願いを、包み隠さず言っただけのみのみ。

「……………」

リートは返す言葉を探し、結局まとめられずに宙を仰いだ。
灰色の天上があるだけだった。

「これが、終わったら——」

やがて囁き声程の小さな音で

「狙撃手を辞めて……銃整備工にでもなろうと思っていたんだ」

銃整備工——俗に言うガンスミス。特殊な知識を必要とする、銃社会ではなくてはならない職業。

「……今までの経験を、生かして？」

「そう。他に適職なんてないだろうしな。狙撃手は……どの道廃業だ」
類い稀なる狙撃技術を持つ彼。その所為で数多の苦行を強いられ、逆に生活の糧ともなっていた二律背反——銃の存在。

「……いいんじゃないかな……リートが、それでいいなら」

「ああ」

レインは額を背中から離し、自らも思案した。

「自分は……このまま、賞金稼ぎかな……準備兵に戻るつもりはなかったし……」

「レインがそれを望むなら、間違いはないさ」

「勿体ないくらいの言葉」

華が咲くように笑い、レインは頷く。

その顔に僅かに影が差した。口元を開き、閉じ、やがて決心して話し始める。

「あと……ちょっと里帰りをしようかなって」

「コッペリアに？」

コッペリア——イザベルの西の港街。軍拠点都市に並ぶ程の裏稼業の市場がある治外法権。

レイン、そしてユカリたち義兄妹が棲まっていた場所。

「ううん。本当の故郷。……東アジア。……統制地区」

リートは片目のみを僅かに見開いた。

彼女が自らの本当の故郷について語るのは、今が初めてだったのだ。
レインが或べき場所で血の繋がった肉親と暮らしていた場所。

統制地区とは、敗戦区の呼び名だ。かつてのWW2で多国に占領された地域を一括りにしてそう呼ぶ。主にアジア系の黄色人種が住まう場所。そこが彼女の出身地であるならば、何もおかしいことはない。

「御墓参り……あと、本当のことを知ろうと思う……答え合わせだよ」

塞がった両手の代わりに、首を振って上質な絹糸みたいな長髪を流す。

「今度は、俺が待たされる番か」

隻眼の青年は歩み出した。

「ごめん……」

レインも後に続く。

「幾らでも待つさ」

そつなく言い放つ。

「…待っていて、くれる…?」

浅はかな希望を抱く。

「死ぬまでくらいは」

「…充分過ぎるよ」

あまりにも甘ったるい台詞に、苦笑が漏れた。

リートは振り返って、レインの俯いた顔を窺う。

「何か可笑しいのか?」

「…いいや、嬉しいんだよ」

ある意味、彼はとても素直な性格なのだろう。思ったことをそのまま口にできる直向きさを持っている。

階段を登る反響音が響いて、音は底に落ちていった。

足は疲れて強ばってきたのに、何故か苦しみよりも先に嬉しさが来てしまう。

前に行く影が止まった。

階段の先がない。代わりに錆び付いた扉があった。

両番の引き戸。腰元辺りに指を引っ掛ける窪みがある。リートは錆び付いてぎしぎしいう扉を無理にこじ開けた。

一筋の光が舞い込む。

光は儚いの、眩しくて目が眩んでしまった。ずっと暗い場所に居た所為だろうか。

青年に先導され、扉の向こうへと足を踏み入れる。

「あ———」

思わず、声を発する。

目の前に広がる景色。

「……教会……？」

長椅子や祭壇までがたがたで、今にも壊れてしまうような姿。それでも光を取り込んで輝き光明するステンドグラス。

十字架が傾いで、蜘蛛の巣が掛かっていた。

人の信仰から忘れ去られた場所。陰日向の偶像崇拜。

「皮肉なことに」

唐突にリートは話し始めた。

長椅子の間をゆっくりと歩き渡りながらに

「俺が地下施設から脱出した時に、最初にたどり着いたのがここだった」

——それは、つまり。

悪魔を育てる施設と、天使を崇める聖域が繋がっていたということ。

「……」

レインは一部が陥落した天井を仰いだ。

ぽっかりと空いた骨組みだけの穴から、青空が見える。

ここが地上だということの証明。

リートが歪んだ十字架の淵をなぞりながら、一人心地に呟いた。

「ここは、第九区」

「それって…」

「軍の管轄区。基地内だ。随分と訓練地から外れた端の方だけれど、軍人の信仰が浅かったのか、元より必要性がなかったのか……この教会は四年前にはもうこの状態だった」

軍の敷地内に正教教会が在るという事実は意外だった。

レインは抱えていた肢体を、傾いだ長椅子にそつと横たえて耳元の髪をそつと後ろに掛ける。

広く、冷めて、荒廃した場所。

カーペットの一部には苔も生えているし、雨漏りなんて日常だろう。色硝子は割れていて、聖なる物語を象っていた面影はない。

けれど取り壊されなかった場所。

美しく廃していった場所：屍蠟となった姉と、印象が被った。

「ここ：もう誰も使っていないのかな？」

「誰からも、忘れられ去られている場所だからな」

抜けた床からは地面が見えた。草が微々たる光でも求めようとして、隙間から伸びている。

祭壇の階段を登って、レインは十字架の前に立った。

レインの身長ほどはありそうな大きな正教十字。おそらく銀で作られたのだろう。周りの雑物を弾くように汚れない。

黒髪の少女は、ふっと脚を折り、その場に膝まづいた。

まるで敬遠なシスター、或いは御神に仕える巫女のような身のこなし。

彼女の美しさも相成り、あまりにも非現実的な光景。絵画の一部と言われても、なんら不思議でないような。

少女は長い睫毛を伏せ、胸の前で手を組む。

それだけで、時間が止まってしまったようだった。

暫しの沈黙の後、彼女の漆黒の瞳が開かれる。

「……………」

彼女は何を祈ったのか。

傍らの青年は無言で彼女の行為を見ていた。

レインはやがて立ち上がり、踵を返す。その顔には、僅かな憐憫の目が浮かんでいた。

「…初めて祈ってみた、姉さんが…安らかに眠れるように」

「……そうか」

青年は鷹揚に頷くだけ。

「姉さんの眼と顔はここにあるけど、体はやっぱり朽ちていくものでないといけない」

姉に貰ったのは、第三層までの皮膚：顔面移植。そして漆黒の角膜。それはレインの外見として定着して、切り離されることはもうないだろう。

けれど、体まで自然に還ることが容易でないなんて、悲し過ぎる。

レインは姉の体を持ち上げた。

朽ちることない死蝟となった肉親を抱え、陥没した床の下へと降り立つ。広い空間に彼女の体を置き、離す。

長椅子のシートと、紅の絨毯を引き出し、彼女の体の上へと掛けた。腰元の刀に手を触れる。

「姉さん：眼を背けないで、確かめにいくよ」

遺体の傍にかしずいて、信賴を込めてそっと囁く。それは別れの挨拶だった。

「今まで、私を生かしてくれて：ありがとう」

土に沈み込んだ体は、何も語らない。

――それでいい。

レインは刀の柄に手を掛けて、抜き払った。

二重螺旋の波紋が浮かぶ刀身。

目映い陽に翳してから、迷いなく自らの首元に当て――――

「レイン！」

リートの切迫した声に、彼女は微笑みで応じた。

おそらく、この世で最も儚くて優しげな笑み。

――大丈夫、とでも言いたげに。

レインは首元から刃を返し――

迷いなく、自らの髪を断ち切った。

「どうか、安らかに――」

落ちる言葉は乖離した自分の一部と共に、土へと降りていった。

96 双翼

彼は見ていた。

全身を水浸しにした濡れ鼠のような集団が、とぼとぼと歩いている様を。

場所は以前、戦闘機訓練にも使われていた滑走路。見渡す限りのアスファルトに遮蔽物は無く、振り返れば監視塔が眼を光らせている。彼らは手錠を掛けられ、手錠は鎖で列になる者たちと繋ぎ合わされていた。

男も女も、子供も老人も居た。

誰もが、濁った目付きで合わない焦点を彷徨わせる。

軍用のトラックに荷物のように乗せられる者たちは、完全燃焼した後のようだ。もう全て終わったのだと薄暗い目が告げている。

「――旧軍では」

隣に並ぶ金髪の男が、ふと口を開く。

「厳しい思想弾圧を行なった。軍に反対する者は公衆の面前で撃ち殺された。そして犯罪に向かう軍人：刑罰は偽造されて軽くなる。武力抑圧に対する市民の怒りもあった。でも、それだけじゃない」亡者の群れを眺めながらに、赤髪の青年――クロードは頷く。

告げるのは肯定。

「一番被害を受けたのは、一般家庭から軍属へ務めた者だろ？ 旨そうな餌を掴まされたんだよ。昇進昇給・退職後も有用な資格取得・有り余る年金・行き届いた保険制度：そんなもの、親の親の代から軍属やってるエリートしか持つ権利ないのにさ」

饒舌にしゃべり、クロードはふと、列からこちらを見る幼い子供の冷たい視線にぶつかった。

まだ初等部にも入っていないような幼い少年だ。小さく細い彼の手

にも手錠が嵌っている。

並ぶ男は、繋がる視線に気付かずに続けた。

「そう。だから、嬉々として働きに出ていった子供が血肉の骨の随まで使い果たされて、二度と帰ってこない……そんなことも珍しくなかった」

淀んで沈殿した幼い瞳から目線を外し、クロードは言う。

「つまり、その親や家族も旧軍……延いては軍警察を憎んでいるってこと？」

一方の男——アウストラルは鷹揚に頷いた。

「系譜を辿ればきりが無い。怨恨の類は消えない。燻っていたそれを、誰かが煽ってやれば呆気ないものだ」

「今回の主犯……ね」

軍部を敵に回したテロ事件は、呆気なく収束した。

一時は情報攪乱により乱れていた均等も、ミレイナの奮闘により正しい状態へと戻され、そうなれば集団戦術のプロに爆弾を抱えた素人が敵うわけもない。

滑稽で浅慮な反撃譚は幕を下ろした。

アウストラルの支持により放水銃と放水車を手配した頃には、もうすでに鎮圧は規律とした作業に変わっていた程。

爆炎を上げる基地内を走り回り、有効打を提示していたアウストラルの顔には、色濃い疲労が窺える。そして、心労も。

彼の悩みの種は現在にあるのか、それとも未来のことにあるのか——
「犠牲者は分かっている分だけでも、軍警察内で十名。住民だけで八十九名かあ」

「重傷者と、これから挙がる人間も合わせれば、二桁は下らないだろうな」

既に事後処理は始まっている。

焼け焦げた遺体を拾い集め、武器を整備し、バリケードを回収して爆破された門を封鎖する。

異常なほどにてきばきと、戦闘の名残は消え失せていく。元あった

形に戻って、体裁を繕おうとしているのが見え見えだ。

けれどそれが良いことなのか否か、今の彼らには判断し難かった。クロードが首を回しながら問う。

「結局、どっちが本命だったんだろうね？」

「……」

事件は二つが同時に起こっていた。

周知の軍基地襲撃事変以外にも、同時進行していた事態があったのだ。

たった一時間前、軍拠点都市とは異なる場所で起こった、もう一つの事件を彼らは知ることになった。

——総帥が、殺された。

暗殺だった。

報告を受けたミレイナからの震える言葉を、アウストラルもクロードも、当初は何が起こったのか全く理解できなかった。

しかし、それが事実だと自覚していくにつれ、今回の一連の騒動の全貌が見えてくる気がした。

これは、一掃だ。

旧軍寄りの総帥を退席させ、同時に旧軍どころか軍警察にも飛び火した報復心を持つ者たちを排除する為の。過去の清算。

完全なる警備をどうやって潜り抜けて軍部の長を手に掛けたのか——きつと実際に暗殺に携わった者しか分からないのだろう。

ある意味、アウストラルは総帥からの責任糾弾を逃れ、あたかも命拾いしたとも言えなくはない。

総帥が生きていれば：間違いなく現場指示者だった自分に全ての罪を着せ、使い捨てにしていただろう。

一見温厚そうなあの男でも、腹の内では何を考えているのか知れないことを、アウストラルは熟知していたからだ。

そして、クロードも危うい位置から救い出された一人だ。

どうにも、舞台裏で糸を引き、思い通りに出来事を展開させる何者かの動きを感じた。

全容が分からない、不吉な黒い腕。

それが、すぐ後ろまで迫っているのを感じた。

まるで、次はお前の番だ、と指さされているような――

下らない妄想だと、自分でも笑うことができない。

しかし、怯えているだけではないいけないことも彼らは知っていた。

誘導されているのならば、自らの正しいと思う道に無理やりにも矯正しなくては。

でないと、軍部は誰かの傀儡になってしまう。それだけは避けると。

「お前の就任式も、その内行われるだろうーな」

クロードはさも興味なさそうに口にした。

彼の表情は罪人の列を睨んだまま、何の感情も露呈させていない。何を思い感じているのか、隣に立っていても分からないのだ。

しかし、彼の言葉は重たい意思を孕んでいた。

トワード総帥が凶弾に死した今、継承制の軍の最高権力者の椅子はアウストラルに明け渡された。

若干二十代の総帥就任――当然、風当たりは強いだろう。

けれど彼ならば、逆行さえも糧に変えて役目を果たすだろうと、クロードは変わらない面の裏側で心底思う。

甘い考えかもしれないが、信じさせるものがあるならば、信じていたい。嘘つきな彼の本心だった。

対する時期軍総帥は、顔を伏せて暗く笑った。

挑発的に口端を上げ、瞳には挑み掛かる前の闘志の色が一瞬見えた。

「片付けることは山積みだ。…息をつく暇さえ与えてやらないぞ、クロード」

「げッ：おれも付き合わされるの？」

「当然だろう。散々こき使ってやるから覚悟しておけ」

「うわー、冗談なんて：ことはないよな：お前のことだもんなあ：」

赤髪を掻き上げ、前に並ぶ者たちの顔を見る。

絶望した顔、わけが分からない顔、空っぽになった顔、未だに怒りの残滓が顔を引き攣らせている者。

彼らにとっての特攻は、仕組まれた無意味なもの。

長かった列の最後の一人が軍用車に入って、トラックの貨物庫の扉が嚴重に締められた。

これから彼らには長い事情聴取と、反逆罪としてそれぞれに懲役が処されることだろう。

それは軍部にとっての休暇に過ぎない。

数年、もしくは一年足らずで彼らはまた娑婆に舞い戻ってくる。

その時の決断が、全てを決めるのだろう。

そして、決断を下すのは隣の男だ。

——重たい役を引き受けたな……

クロードは咎人を乗せた軍用車が、護衛車に囲まれて去っていく様を見届けることなく、踵を返した。

「ミレイナ、どうしてる？」

唐突な問いかけに、追う金髪の男は首を振る。

「すっかり塞ぎ込んだ。あいつにとっての総帥は：俺たちとは違う存在だったからな」

「狂信者だったんだよ。あいつは縋ってたんだ。総帥や形だけ繕った向上心に甘えてな。そろそろ、自分の足で立たせなきゃね」
含んだ笑みを浮かべ、クロードは天上に向かって背伸びした。

「一番最初の仕事は、あの甘えっ子の再教育からになりそうだ」

「そうだな」

しよがないという風な、親しみと諦念のある声が返される。

金髪の男と赤髪の青年は歩調を合わせ、行くべき道を歩んでいった。

97 送別

汽笛を鳴らす列車が、早朝のホームに雪崩込んできた。

開いた扉からは荷物を抱えた人々が降りてきている。

女性の声で響くアナウンスが、次の発車時刻を告げていた。

ホームの端に立ち、少女は革靴を持つ手にしかと力を込めた。

負った細長い革袋を肩紐で肩に吊るし、髪をホームの突風に翻らせた。

彼女はそこに居た。

漆黒に染まった髪は短く、肩上でばっさりと切られている。

整った鼻梁、柳眉、花弁のような唇や細い輪郭線までが調和され、

芸術品のような存在感と、触れたら壊れてしまいそうな儚さという

二律背反を内包している。

美しい少女だった。

一度見たら忘れそうにない、頭を殴られるよりも直接的な印象で訴えてくる美貌に、道行く人は呆氣に取られ、振り返る者も多かった。そして、彼女の隣には一人の青年が居た。

少女に比べだいぶくすんだ黒髪に蒼い瞳、若いはずなのに実年齢よりも落ち着いた印象を与える男性だった。

ホームの内でも異彩を放つ彼らは、互いに短い言葉の遣り取りをしている。

「……いつになるか、分からないけど。探してみることにするよ」

容姿と似通った凜とした声音に返されるのは、静粛とした声。

「…ああ」

「結論を先延ばしにしてきたのは事実だから、決心が緩まない内に実行しようと思ってね」

少女は言うが、青年は知っていた。

彼女の決心はずっと昔から定められていたものだ。

少し畏まり、告げる。

「押し付けがましいことだけど：義妹を、ユカリを：よろしく願います」

「彼女は俺が居なくてもしっかりしているから、平気だろうけどな」
「：だといいいけど」

少女は美しい造顔に、親愛の情を浮かばせる。

そして少しだけ身なりを強ばらせると、呟いた。

「いろいろと周囲はたいへんなことになっちゃったけど：大丈夫だよね：」

「軍なら：立ち直ると思うがな」

ふと青年が見上げた電子掲示板に、緊急ニュースが流れた。

軍部の新総帥が決まったらしい。

暗殺された総帥の後釜が誰になるのか：軍拠点都市はこの一週間その話題で持ち切りだった。

そして現れたのは金髪の男。

まだ年は若い。おそらく二十代か。

そして、彼の後ろには離れた場所で影のように付き添う赤髪の青年の姿があった。

少女は驚きに眼を見開いた後、自然と笑い吹き出してしまった。

「成る程。これは安泰だ。：でも、少しだけ不安は残るけどね。これからの手腕に期待かな」

「これで旧軍の体制は完全に消えた。後はあいつらの時代だろうな」
鷹揚に頷いて、少女は細長い革袋を担い直した。

「：ザイフォンに来て分かったことがたくさんある。準傭兵をしていたことも、良かったことも、悪かったことも：それでいいんだと思うんだ」

「良いことも悪いことも切り離すことはできない。自分を構成している一部だから」

「うん」

少女はゆっくりと歩み始めた。

青年もその後が続く。

「でも、やっぱり良いか悪いかで言えば、ここに来た決断は正しかったんだよ。最初は義父^{とう}さんを探す目的で来たけど……」

少女は黒髪を靡かせ、照れ臭げに振り返った。

「ここでしたかなかった出会いがあるから……ね」

「同感だ」

青年は初めて笑った。

穏やかで、思わず見入ってしまいそうになる微笑みで。

少女は歩み足を、列車の扉の前で止めた。

「会えて良かった。……帰ってくるよ。必ずね」

「待ってるさ。何年経ってもな」

「……有難う」

途端、汽笛が鳴り響く。

発車の合図。

「行かなきゃ」

「……」

列車の入口に足を掛け、振り返る。

「さよなら……うん、またね、リート」

「……レイン」

名を呼ばれる。

「何——？」

問うた途端、青年に引き寄せられた。

優しく掴まれた腕と、すれ違う鼻先。

少女の耳元で囁く。

「……」

列車の扉が閉じる。

彼女は肩口をそっと押され、そこに尻餅を付きそうになる形で入った。

扉の向こうには青年の姿が見える。

「あ……」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。
しかし少女は間を置いて理解する。

「うん。私も――」

列車は旭に向けて走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1270q/>

Chrimson EAGE

2011年10月31日16時32分発行